

ソードアート・オンライン～二人の黒の剣士～

ジャズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、彼に仲間がいたのなら……

もし、彼に居場所があったなら……

もし、彼がデスゲームにいたのなら……

運命は、きっと変わっていた。

《英雄になれなかった男》、ジェネシスは今、《英雄になる》
—————

目次

アインクラッド編

一話	出会い	1
二話	降臨	10
三話	邂逅	15
四話	絶望	24
五話	攻略会議	34
六話	ボス戦	43
七話	黒猫団	59
八話	黒の剣士・白夜叉	82
九話	圈内事件	107
十話	幻の復讐者	122
十一話	ラフコフ討伐戦	136
十二話	素材集め	153
十三話	黒白の兄妹	167
十四話	強者の背中	181
十五話	ボス部屋へ	196
十六話	青眼の悪魔	215
十七話	殺意の刃	228
十八話	朝露の少女	254
十九話	ユイとレイ	272
二十話	奈落の淵	292
二十一話	終焉の刻	304
ホロウ・フラグメント編		
二十二話	コンティニュー・ゲーム	320

二十三話	現実からの使者達	334
二十四話	v s 世界最強	348
二十五話	ホロウ・エリア	358
二十六話	《幕間》人斬りの男	372
二十七話	探索	380
二十八話	紫の少女	397
二十九話	神速	413
三十話	《幕間》「男子会じゃああああー!!!」byジエネシ	432
三十一話	☆コラボ回前編〜withイセスMIF (作:咲野臯月氏)〜異世界からの使者	441
三十二話	★コラボ回中編〜メタルキングスライム〜	455
三十三話	☆コラボ回後編〜ボス戦、そして帰還〜	468
三十四話	射撃訓練	480
三十五話	切り裂きジャック	486
三十六話	Comment vas-tu!	494
三十七話	糖分補給〜チョコレートマカロン〜	503
三十八話	罪の所在・S級食材晚餐会	513
三十九話	正体	525
四十話	真実	538
四十一話	狂気の男	549
四十二話	エリアボス戦	558
四十三話	虚の守護者	569
四十四話	帰還	577
四十五話	二人の幼馴染〜前編〜	585

四十六話	二人の幼馴染く後編く	596
四十七話	みんなでゲーム	606
四十八話	黒竜討伐	620
四十九話	シノンの苦悩	637
五十話	《幕間》現実の話	650
五十一話	みんなで店番	654
五十二話	「女子会やるわよ!」byイシユタル	668
五十三話	ユイとレイの疑問	676
五十四話	シリカとピナの強化アイテム・ジエネシス体調を崩す	689
五十五話	グレイト!な男・死を視る者	708
五十六話	不審な男	719
五十七話	暗躍する狂気	736
五十八話	みんなでお泊まり会	750
五十九話	動き出した悪	767
六十話	突入前・それぞれの思い	778
六十一話	突入作戦	790
六十二話	突入作戦2	806
六十三話	突入作戦3	824
六十四話	人斬りとの決着	839
六十五話	狂気の決着・悪意の胎動	853
六十六話	戦いの終わり、傷跡	870
六十七話	託された想い・息抜き	893
六十八話	家族で遊ぼう・ブチ切れたオルトリア	909
六十九話	離婚騒動	920

七十話	祝福の儀式2 ～思い出の地・絆の神殿～	933
七十一話	おっ〇いグランプリ	943
第七十二話	番外編「そーどあーとおふらいん～ふたりのくろのけんしゅ」	951
七十三話	幼馴染の宝探し	959
七十四話	歌姫	971
七十五話	デート	982
七十六話	戦いの始まり	988
七十七話	開幕・99層ボス	1002
七十八話	Alive Again	1009
七十九話	天馬の絡手	1014
八十話	紫の巨剣	1019
八十一話	究極の闇	1027

アインクラッド編

一話 出会い

朝というのは、現代人にとって最も憂鬱な時だ。

会社員にしろ、学生にしろ、眠りという至極の時間から引き摺り下ろされ、楽しく快樂で溢れた夢の世界から、鬱屈で陰湿な現実世界へと戻らなければならない。

「ああ〜……………かつたりい〜…」

そしてそれは、現在小学校四年生の少年——《大槻久弥》も例外ではない。小学生は皆朝から元気で溢れているものだが、彼は違う。彼にとって朝は最も忌むべき時間だ。

土日ならば、心行くまでゆっくり眠れるのだが、学校のある平日はそうは行かない。

久弥は学校が嫌いだ。

だがそれは、別に勉強が嫌いとかそういう理由ではない。

寧ろ、久弥は勉強が得意な方だ。テストでもほぼ満点近い点数を取り、校内でもトップの成績を収め続けている。

人付き合いも悪くなく、見た目もカッコいい部類に入り、クラス内カーストでは間違いなく上位に入る人物。

まあ、友達などはいないが。

これほどの人間がなぜ学校を嫌がるのか。

—————

朝食を済ませ、ランドセルを背負い学校への通学路に入る。閑静な住宅街を抜け、朝から多くの車が行き来する大通りを歩き、その先に久弥の通う学校はある。歩きで約15分。程々に近い距離。

通りかかるごとにかけられる同級生の挨拶を適当に返しつつ、久弥は彼の教室に向かう。

教室に着き、目に飛び込んできた光景は――
「鬱陶しいんだよ《ハバア》!!」

複数の男女が一人の少女に群がり、罵声を浴びせていたのだ。

罵声を受ける少女はただ俯いて席に着いている。

これだ。久弥が学校を毛嫌いする理由は。

そう、即ち《いじめ》である。

近年問題視されている生徒間の《いじめ問題》。近頃では教師間でも行われるほど激化し、日本社会でもこの問題を防ごうと各地であらゆる活動が行われているが、未だにそれは減少しない。

そしてこの学校でもそれが行われている。

いじめられている女子生徒の名は《一条 雫》。

何でも日本有数の名家のお嬢様らしいが……いじめのターゲットとされている。

その理由は名家の子だからというのものもあるだろうが……一番の理由は彼女の「髪」だ。

彼女の髪の色は銀髪なのだ。しかもこれは、染めているのではなく地毛。

これがいじめの原因。雫は別にハーフなどではないが、生まれつき髪の色素が薄いらしく、そのために銀髪なのだ。

誤解されがちだが、銀髪＝白髪というわけではない。そもそも白髪と言うのは、人の髪の毛が老衰によって色素が抜けることによって起るものであって、銀髪は白髪ではない。さらに言うと、生まれつき銀髪と言う人間は世界的にもごく稀で、子供時代にしか見られないケースが多いらしい。

「……つたく。たかが髪の色違うくれえでいじめとか。ガキかよあいつらは……ガキだったわ」

スクールカーストの中でも上位に入っている久弥は、このいじめを少し離れたところから冷めた目で見ていた。

久弥にとってみれば、いじめの加害者も被害者も所詮はただのクラ

スメート。言ってしまったえば、ゲームにおけるモブと変わらない。助けの義理もないし止める義務もない。

久弥はただ我関せず、と言うスタンスを取り続けていた。いつも通り、暇つぶしに読んでいるジャンプを取り出して読み出す。

その内ホームルームが始まって、あいつらも自然と静まるだろう、と久弥は考えた。

しかし、今日は違った。

「返して!!」

少女の泣き叫ぶ声が響き、久弥の意識は再びあのいじめ現場へと戻る。

見ると、いじめグループの一人が何かを手にとって掲げており、それを雫が目に涙を浮かべながら必死に取り返そうと手を伸ばしている。

「それはお母さんからのプレゼントなの!お願いだから返して!!」

「おいおい、ババアの母ちゃんだつてえ? 一体幾つなんだろうなあ? 何年生まれ? 今何歳?」

プレゼントなるものを取り上げている少年は雫の悲痛な叫びに対し聞く耳を持たない。

「(母さんからのプレゼント、か……)」

久弥には両親がいない。彼がもっと幼い頃に事故死しており、今は祖父母によって育てられていたが、その祖父母も数年前に他界し、以来彼はずっと1人だった。

そのため、実の親からのプレゼントを奪われ泣き叫んでいる今の雫を、久弥は今まで通り見て見ぬ振りなど出来なかった。

「……おい。くだらねえ事やってんな」

久弥は徐に立ち上がると、少年の手からプレゼント(ペンダントだった)を取り上げた。

突然のことで驚いた少年は振り向くと目を見開いた。

「おまつ……久弥!」

クラス中の視線が、久弥に集められた。

これがもし、久弥が普通の生徒だったなら、恐らくいじめグループの生徒は「何だよ!!」などと逆上して掴みかかっていただろう。だが、クラスの中でも上位に入っている久弥がこれをやったのとは意味が全く異なる。言うなれば日韓のトラブルにアメリカが介入するようなもの。

「何すんだよ久弥!!」

「何すんだはこっちのセリフだバアカ。テメエらがギャーギャー騒ぐせいで落ち着いてジャンプも読めねえだろうが。」

それよかもうさつさと座れテメエら。チャイムなるぞ」

久弥の言葉でいじめグループはいそいそと席に戻っていく。

雫は両目から涙を流したまま久弥を見つめていた。

久弥はそんな彼女に向き直り、ネックレスを彼女の机に置く。

「……ほら。取り返してやったからもう泣くな。」

それから、そんなに大事なやつなら学校に持ってくるな。取られたって文句は言えねえぞ」

久弥はそう言い残し自分の席に戻って行った。

雫はただ黙ってその背中を見つめていた。

↓放課後↓

全ての授業が終わり、生徒たちは皆各々帰路につく。

久弥も「やつと終わった」などと呟きながら靴箱へと向かう。すると……

「大槻くん!」

ふと、彼の名を呼ぶ声が響いた。

見ると、そこに居たのは雫だった。

「……何の用?」

久弥はぶつきらぼうに答える。

雫は少ししどろもどろになりながらも

「あ……えつと……その……ありがとう！助けて、くれて……」

久弥はそれに対して少しため息をつき答えた。

「別に助けた訳じゃない。ただあいつらのやってる事が気に食わなかっただけだ。だから礼を言う必要もねえよ」

「それでも！それでも君は……私の大切なものを、取り戻してくれた……だから、ありがとう！」

雫は満面の笑みでそう言うと、銀髪を翻して走り出した。

そんな彼女を見て、久弥はふっと軽く笑い

「……んだよ。いい笑顔、出来んじゃないかねえか……」

と呟いた。

〜数日後〜

しかし、久弥が雫を庇った事で、事態は悪化した。

「久弥に守ってもらったからって、いい気になってんじゃないやねえぞ!!」

「ババアは大人しく腰曲げてよちよち歩いてりゃいいんだよ！」

久弥は帰り道、偶然目撃してしまったのだ。

いつものいじめグループが、雫を暴行しているのを。

流星にこれを看過できるほど、久弥は冷めた人間ではなかった。

「テメエらしい加減にしやがれ！」

久弥はいじめグループに割って入り、雫に駆け寄った。

「おお……つき、くん……」

雫は恐怖と悲しみ、痛みでもう起き上がれなくなっていた。

雫の白い陶磁器のような肌には、痛々しい無数の痣が出来てしまっていた。

「テメエら……!」

久弥は怒気を含んだ目でいじめグループの男子を睨みつけた。

久弥に睨まれたじろいだ男子は叫んだ。

「何だよ久弥!!何でお前はこんな奴を庇うんだ!!」

だが久弥は強い口調で言い返した。

「テメエらこそ、何でこいつにここまで出来る？何の権限があつてこいつをいじめられる!!」

こいつが一回でもテメエらになんかしたか？こいつが一回でもテメエらに《死ね》とか言ったのかよ?!

別に何かされたわけでもねえのに、それを一方的に痛めつけるなんざ……………

お前ら人間じゃねえ!!!」

久弥の言葉に言葉を失ういじめグループ。

久弥はそんな彼らを見回した後、雫を抱きかかえてその場を後にした。

「大槻くん…………」

「いい。何も言うな」

怪我をした雫を自宅まで送る道中、雫は久弥に礼を言おうと口を開くが、久弥はそれを遮った。

雫はそれでも何か言おうと口を開くが、久弥の表情を見て口を閉じた。

久弥の顔は、かつてない怒気に覆われていた。

不意に久弥は口を開いた。

「許さねえ……………あいつら絶対に許さねえ。」

俺の嫌いなことは《弱い奴を一方的に甚振る事》だ。

たかが髪だけであんなことするとか……………反吐が出る」

湧き上がる怒りを言葉に変えて呟く久弥を見て、雫は何も言えなかった。

やがて、久弥の自宅に辿り着いた。

「えっと……………大槻くん、ここは……………」

「見ての通り俺の家だ。ここで軽く手当てしてやるよ」

そうやって久弥は家のドアを開ける。

そして、リビングに雫を座らせ、久弥は救急箱を取り出した。

まず、出血している部分を消毒液で濡らし、ガーゼを貼る。次に内出血しているところにコールドスプレーを吹き、上から氷を当てて冷

やした。

「ねえ、何でこんな事……?」

「そんなズタボロの状態じゃ家に帰れねえだろ?」

一応軽く応急処置しただけだから、帰ったらちやんと病院行って診てもらえ。

それと、親にもちやんと相談しろよ、いじめの事」

「できない!」

雫はソファから立ち上がって叫んだ。

「だって……そんな事言ったら……お母さんが心配しちゃう……迷惑をかけちゃう……」

彼女の言い分に久弥はため息をついた。

「あのなあ……そんな傷まで受けて、隠し通せると思ってるのか? 転んだなんて言い訳が通じるとでも? 無理に決まってるんだろ。」

それに、相談する事が申し訳ないって思うなら、それはテメエの力不足のせいだ」

久弥の言葉に雫は目を見開いた。

「もしテメエに何かあいつらにやり返せる力があれば、ここまで事態が悪化することはなかった。こうなったのも全部、テメエ学校に弱いせいだ。テメエがやられっぱなしだったからだ」

「……でも……やり返せばまた酷いことされる……もつと痛い事される……」

「だったら今のままでいいと? やり返してもつと痛い事されるより、今のままでいいと?」

久弥の問いに、雫は黙って頷いた。

「はあく……しょうがねえなあ。」

わかった。だったら俺に考えがある」

久弥は意を決してこう言った。

「明日で、テメエのいじめを必ず終わらせてやる。いいか一条、よく覚えとけよ……本当に強え奴は、敵にやり返させねえ。何もせずに勝つんだ」

「……………どうする気なの?」

「へっ。簡単な事よ。髪色でいじめられんなら、髪色を変えちまえばいいんだよ」

—————

↓次の日↓

学校は大騒ぎだった。生徒たちは皆我先にと久弥のクラスへと向かい、廊下はまるで動物園のようだった。

「大槻くん……………?!」

学校に来るなり、雫は教室を見て目を見開いた。

いつもの席に、久弥はいる。

だがいつもの彼じゃない。

髪の毛だ。いつもは日本人らしい艶のある黒髪だったが、今の彼は

……………赤色になっているのだから。

「ちよ、久弥?! どう言うつもりだよ?!」

いつものいじめグループに一人が久弥に詰め寄った。

「テメエら是一条の事、髪が白いからいじめてんだってな? だったら髪の色が違う事でいじめられんなら、当然俺もいじめを受けなきゃならないよなあ?」

威圧感のある声でそう尋ねる久弥。

それに対していじめっ子グループの少年は口をパクパクとして何も言えない。

久弥をいじめるなど、例えるならロシアに喧嘩を売るようなもの。

「さあ! 俺の髪色も違うぜ!! いじめんならいいじめてみやがれ!!!」

その日を境に、雫に対するいじめは無くなった。
同時に、雫が久弥と一緒にいるところを目撃する人も増えたとか。

二話 降臨

月日は流れ、久弥と雫も中学生となった。

久弥は相変わらず怠そうな歩き方で学校に向かう。すると、家の門を出ると、久弥を呼ぶ声が響いた。

「久弥、おはよう!!」

呼ばれた方に振り向くと、銀髪の少女がその髪を風になびかせながらこちらに歩いて来ていた。

「雫……朝から何だよ」

ぶつきらぼうな久弥に、雫は頬を膨らませて

「むう、何よ！人がせっかく挨拶してるのに！」

「別にそんなのいらねえから……てか、何でおめえは毎朝わざわざこつちに来るんだよ。学校違えだろ？」

「途中まで一緒だから平気だもくん」

雫はそっぽを向きながら言った。

雫は中学受験をし、現在は私立の《天の川学園》というところに通っているのだ。

そこは地元では名の知れたエリート校で、名家の令嬢である雫もそこに通うことを余儀なくされたらしい。当初雫は「久弥と同じ学校に行けなくなる」と拒んでいたが、市内の学校に通うと必然的に彼女のいじめグループと同じ学校になってしまう。終わった過去の問題とは言え、やはりあのトラウマは克服出来ないため、止む無く雫は中学受験をしたのだ。

そして中学に上がると、なぜか雫は毎朝久弥の家に行き、途中まで並んで通学路を歩くのだ。

「そう言えば雫、お前剣道で全国優勝したんだってな。おめつとさん」
「どうも。まあ危なかったけどね……ていうか、知ってたんだ」

「まあな。見に行ってたし」

「……え？」

瞬間、雫の顔は真っ赤に染まった。

「……み、見に来てたなら、連絡くらいしてよ……」

「何でわざわざ連絡しなきゃならねえ。てかお前大丈夫か？顔真っ赤だぞ？」

「っへ、平気ですう!!何でもないです〜!!」

「こ、これはあれよ……………」、恋の病ってやつよ!!」

「へー。お前誰かのこと好きなの？」

久弥はいかにも無関心という感じで呑気に尋ねる。

「〜〜〜喝っ!!!」

「アアー!!イイツ☒?タアイ☒?目があー!!」

雫の竹刀が久弥の顔面にクリティカルヒットした。

—————

「そう言えば雫、お前ゲームとかってするの？」

痛みから復活した久弥は徐に尋ねた。

「ゲーム?ああ、うん。結構やるよ?最近だと、マイクラにハマってるんだよね〜」

「マイクラとかやってんのかよ…………」

「マイクラ結構いいよ?PUBGとかモンハンとか見たいな殺伐とした雰囲気はなくて、羊とか飼ったり村人と交流したり出来て、ほのぼのしてるよ?」

「村人と交流って…………あいつら『ハアーハアー』しか喋んねえじゃんw」

「交流ってそういうやつじゃなくて!普通にアイテム交換したり、物を買ったりしてるだけ!」

「ふくん。でも意外だわ。ボンボンの家って、そういうゲームとかやらなさそうと思ってたんだけどな」

「うちはそんなに厳しくないんだよね。やる事をちゃんとやっておけば後は好きにしなさい的な感じだから」

「割とフリーダムなんだな、お前の家って」

「まあね。でも、何で？」

雫がそう聞き返すと、久弥はカバンからとある雑誌を取り出して見せた。

「SAO……『ソードアート・オンライン』？」

「ああ。世界初のフルダイブ型VRMMORPGゲーム。今週の土曜に正式版のソフトが出て、リリースなんだとよ。

それでな……良かったらお前もやらねえか？」

「やる!!」

雫は物凄い勢いで久弥に詰め寄った。

「やるやる! 私もやる!!」

「お、おう……分かった。なら、今度の土曜日一緒に買いに行かねえか? すっげえ人気だから、早めに並ばねえと買えないらしいし」

だが、久弥がそう話している時、雫は突如として立ち止まった。

「おい、どうしたんだよ雫？」

「……今……何て言ったの？」

「は? いや、早めに並ばないとって……」

「その前」

「すっごい人気らしいから」

「その前!!!」

「ひっ?! あ、いやだから……土曜日、一緒に買いに行かないか、と……申し上げました……」

凄まじい剣幕の雫に久弥はタジタジになりながら答えた。

答えた。

「(あれ? 俺何か不味いこと言ったかな……? あれか? 一緒に買いに行こうが不味かったのか?! ああ、そうだな、俺たち別に付き合ってもねえしな。ちよつとデリカシーなさすぎたか……)」

「(一緒に買いに行こう、ですつてえ?! ちよつと! どうしちやつたのよ今日の久弥はあ?! ゲームに誘ってくれたり、しかも……で、デートの誘いまで?! そんな強引な……でも、嫌いじゃないわ!)」

そして、雫は先に口を開いた。

「えつと……いいいよ?」

「え？何が？」

「だから！一緒に、SAO、買いに行こう……？」

雫は上目遣いで言った。

思わず息を飲んだ久弥だったが

「お、おう……分かった。なら、時間とかはまた連絡するわ」

「うん!!……それじゃあ、またね」

「ああ」

ちようど二人の通学路が分かれる場所に差し掛かり、二人は別れの挨拶を交わしそれぞれの道へ歩んでいった。

—————

～土曜日～

「いや、何とか買えて良かったな」

帰り道、久弥は今日購入したSAOのソフトとナーブギアを抱えながら嬉しそうに言った。

「ふふつ、そうだね。朝から並んだ甲斐があったね」

雫も、久弥と同じように両手に今日買ったSAOのセットを抱えて笑顔で返す。

「それより、今日早速やろうぜ」

「そうね。とりあえず、集合場所だけ決めとこつか」

そして、二人は集合時間と場所、プレイヤー名を確認しあってそれぞれの自宅へと戻っていった。

自宅に帰った久弥は、いよいよナーブギアにSAOのソフトをインストールし、ナーブギアを頭に被る。

「行くぜ……《リンク・スタート》！」

――

閉じた目をゆっくりと開く。

まず目に入ったのは、自分の両足。

そして、試しに自分の両手を動かし、手を閉じたり開いたり動かしてみよう。

現実と殆ど遜色ない感覚だが、紛れもなくここは仮想世界。

「ついに来たぜ……《ソードアート・オンライン》！」

この日、もう一人の英雄――《ジェネシス》は SAO の世界に降臨した。

三話 邂逅

ついにやってきた剣の世界。

久弥「否、《ジェネシス》は早速武器屋へと足を運んだ。ゲームをするには、まず装備を整えるのが基本だ。

「…さて、俺は何使うかね〜」

目の前に並ぶのは、大小様々な形の剣。

小さいものならナイフ、大きいもので大体1メートルくらいの大きさの大剣まで並べられている。

迷った末、ジェネシスは大剣を使うことにした。

「おっと、とりあえず雫と合流しねえとな」

ここで、先程雫と集合する約束があつたのを思い出し、ジェネシスは急いで集合場所の《黒鉄宮》へと駆け出した。

黒鉄宮の前に辿り着き、辺りを見渡すとどうも見覚えのある人影が見えた。

向こう側に見える女性プレイヤーは、髪は黒髪だがジェネシスと同じくらいの長身でスラリとした体系、そして何より、立っている時に左手で右腕を掴んでいる体制をとっているのが目印だった。

現実世界の雫とほぼ同じ容姿だったので、迷う事なくジェネシスは彼女に声を掛けた。

「……おう、雫。待たせたな」

雫はジェネシスの方を見ると、一瞬戸惑ったがすぐに久弥だと分かり、笑顔で答える。

「もう、久弥！ずいぶん待ったわよ!!」

後、この世界じゃ私は《ティア》だからね！」

「わーったわーった。そんならテメエも久弥はやめろよ？こつちじや俺は《ジエネシス》だからな」

「……プツ、《ジエネシス》って……厨二くさい名前w」

「お？テメエの方から喧嘩を売ってくるたあ珍しいじゃねえか。いいぜ、五百円で買ってやるよ」

「冗談よ……それより、色々レクチャーしてよ。私、この世界のこと全くわからないから」

「おう、任せろ……と書いてえとこだが、生憎俺もイマイチこの事はよく知らなくてな……」

ジエネシスは申し訳なきそうに後ろ頭を書きながら言う。

「なあくん。なら、誰か知ってそうな人に教えてもらおう？」

「んま、おそらくこの中にはβテスターもいるだろうしな。運良くそいつに会えたら、頼んでみるか」

そうして二人は歩き出した。

因みにその後、武器屋にてティアの装備を見繕ったのだが、ティアが目当てにしている刀が無かったため、仕方なく曲刀を購入したのだが、いかんせん不満そうにしていたのはまた別の話。

—————

様々なプレイヤーに声を掛けた二人だったが、中々目当てのβテスターに巡り会えず、仕方なく自分達で何とかやっつていこうと決め、二人はフィールドに出た。

草原には無数の猪ー《フレンジー・ボア》が生息していた。

すると、猪の群れの向こう側で、二人の男性プレイヤーがモンスタ―狩りをしているのが見えた。

いや、よく見ると一人はモンスターを攻撃し、もう一人はそれを見て何か指導をしているように見えた。

恐らく、βテスターでないにしろ何かしらこの世界の知識を持っているはずだ。

ジエネシスはそう考え、意を決してその男性に話しかけた。

「おーい、そこのおめえさんよ」

「?俺のことか?」

呼ばれた男性はジエネシスの方を振り向いた。

「見たとこ、結構慣れてんな……お前、βテスターだろ?」

「あ、ああそうだが……」

「なら、ついでだ。俺とこの連れにもレクチャー頼まれてくんねえか?俺達右も左もわからねえニュービーだよ」

ジエネシスは親指で後ろのティアを指差しながら言った。

青年は少し困ったような顔で思案するが、赤髪の無精髭が生えた男性プレイヤーが青年の肩を叩き

「まあまあいいじゃねえか。ここまできたら、一人も三人も変わんなえだろ?それに、みんな楽しんでるのがゲームつてもんだぜ?」

「クライン……分かった。お前らのレクチャー、引き受けるよ」

「そうか、助かるわ。俺は《ジエネシス》ってんだ。以後よろしくな」

「私は《ティア》です。よろしく」

「俺は《キリト》だ。こちらこそよろしくな」

三人はそれぞれ握手を交わした。

—————

「どおわ!!」

悲鳴をあげ吹き飛ばされたのはクライン。

猪に突撃された股座を抑え悶絶している。

そんな彼にキリトは苦笑いで言う。

「おいおい……仮想世界じゃ痛みは感じないだろ？」

「あ……そうか。悪りいついな」

「けど気持ちはわかる。正直めちやくちやわかる」

ジェネシスは大きくうなずきながら、クラインに同情していた。

「けど、難しいのは事実ですね……現実みたいに上手いこと当てられない」

ティアが曲刀と猪を交互に見ながら呟く。

「さつきから言ってるだろ？大事なものは、初動のモーションなんだよ」
そう言っつてキリトは、地面の小石を摘み上げると、それを猪に向かって投げた。

小石は赤い光を浴びて、流星の如く命中する。

投擲スキル『シングルシュート』だ。

石を当てられた猪はターゲットをキリトに定めると、すかさず突進する。

キリトは背中から片手剣を引き抜くと猪を受け流し、突進を受け止める。

「とまあ、必要なのは『溜め』だよ。少し溜めを作る感じで、スキルが発動するのを感じたら、後はシステムが自動で当ててくれる」

「なるほど……溜めか」

ジェネシスはそう呟きながら、背中から両手剣を引き抜き、左手を添えて水平に構える。

すると、刃がオレンジ色の光を帯び、ジェネシスの身体は自然と飛び出した。

「てやああっ!!」

そしてそのまま猪を両断する。

両手剣基本スキル『ブラスト』だ。

猪は衝撃で数メートル吹き飛び、断末を上げて四散した。

「おお……飲み込みが早いな、ジェネシス」

キリトが感心したように呟く。

「んま、こういうのは結構得意なんだな」

ジエネシスは得意げにそう答える。

「じゃあ次は、私が行こうか」

そう言って今度はティアが前に出て、曲刀を構えた。

「…………ふっー」

ティアの曲刀がオレンジの光を帯び、ティアはその場から飛び出し、目の前の猪に斬りかかった。

ティアの攻撃は少し逸れてしまったが、それでもボアのHPを削ることに成功する。

「なるほど…………だいたいわかった」

ティアは曲刀の刀身を左手で下から上に擦ると、再び構えてソードスキルを発動し、飛び出す。

曲刀基本スキル『リーバー』だ。

二度もティアの攻撃を受けた猪はガラス片となって消滅した。

「おいおいオメェら……………すげえじゃねえか!」

「ああ、ティアもこんな短時間でスキルをモノに出来るなんて、中々才能があるよ」

クラインとキリトはティアの物覚えの速さを絶賛した。

「よおし、俺も負けてらんねえな!」

クラインも不敵な笑みを浮かべると、曲刀を右肩に担ぐような体制をとる。

すると、漸くクラインの曲刀に赤い光が宿り、ソードスキル『リーバー』が発動した。

クラインはソードスキルのシステムの動きに乗りながら、猪を両断する。

「うおっしやああ!!」

右手の曲刀を高く掲げ、大喜びするクライン。

「初勝利おめでとう、みんな。でも、今のはスライムみたいなもんだけどな」

キリトは言いながら背中に片手剣を収めた

「マジかよ?!俺あてつきり中ボスくらいか……………」

「これが中ボスなら苦労するかよ」

ジエネシスは呆れた顔でクラインに言った。

—————

その後、四人はモンスター狩りを続け、四人は草むらで夕日を眺めながら休息を取っていた。

「しかし、未だ信じられねえよな。ここが仮想世界なんてよ」

クラインが座っている地面の感触を確かめながら感慨深く呟く。

「……そうね。今立ってる大地の感覚も、感じる風も、何もかもが現実と遜色ない……」

ティアも頷きながら返す。

「ほんと、このゲームを作ったやつは天才だぜ。俺この時代に生まれてよかったよ」

「大袈裟だな」

クラインの言葉にキリトは笑って返す。

「まあでも、実際そう感じるのも無理ねえんじゃないやねえの？俺らはフルダイブゲームがこれが初だからな」

「ナーブギア用のゲームをやるのはこれが初めてなのか？」

ジエネシスの言葉にキリトが尋ねる。

「ああ。つーか、それまでフルダイブゲームがあること自体知らなかったからなく。SAOを買ったついでに、ナーブギアとかハードを揃えた感じだ」

ジエネシスは頷きながら返す。

「にしても、初回ロット一万本のうちの一つが手に入るなんぎ、俺たちはラッキーだよなあ。」

「んま、βテストに選ばれたお前さんの方が10倍ラッキーだな」

クラインはキリトを見ながら言う。

キリトは何も言わずに後頭部をさすった。

「βテストでは、どこまで行けたの？」

ティアがキリトに尋ねる。

「二ヶ月で8層までだな。けど、今度は一ヶ月もあれば十分だ」

キリトは不敵な笑みを浮かべながら返す。

クラインはそれを見て苦笑いで

「おめえ、相当ハマってんな？」

と苦笑いで聞き返す。

キリトは背中から剣を引き抜き、高く掲げて答えた。

「まあな……正直、βの時は寝ても覚めても S A O の事しか考えてなかつたよ。この世界はこの剣一本あればどこまでも行けるんだ。仮想世界なのにさ……現実世界より、生きてるって感じがするんだ」

「デメエも中々大袈裟じゃねえか」

キリトの言葉に苦笑いでジエネシスが返す。

キリトの剣は夕日でオレンジに輝いており、キリトはそれに対してフツと軽く笑って剣を収める。

「さて、俺はこの後も狩りを続けるけど、お前らもやるか？」

キリトは三人の方を振りまき尋ねる。

「あつたりめえよ……と言ってえが、腹減ってな。5時半にピザが届く予定なんだ」

「私も、一旦落ちようかな。学校の宿題をしないと」

「俺はしばらく残るわ。せつかくだ、心ゆくまで楽しんで、また明日来る」

三人は各々予定を告げた。

「そうか。なら、ここで一旦お別れだな」

「そうなるなあ……あ、そうだキリト氏。この際だからよ、フレンド登録しねえか？」

ジエネシスが手をポンと叩いてキリトに言う。

「名案だな。そうすれば、今後もまた遊べるし」

「おっ！そりゃいいな！この後一緒にゲーム買った奴らと落ち合う約

束してんだ。そいつらともフレンド登録しねえか?」

ティアとクラインもそれに賛同する。

が、当のキリトは少し気まずそうな顔だ。

それを見てジェネシスが何かを察し、

「……さてはコミュ障だなオメー」

「なっ……ち、違えし! コミュ障じゃねえよ!!」

慌てて返すキリトに、ジェネシスは悪戯な笑みを浮かべながら続ける。

「あー、いいんだ無理しなくても。コミュ障のお前にはフレンド登録なんざ出来ねえわな」

「だからコミュ障じゃねえって!!」

……いいよ! フレンド登録するよ! すりやいいんだろう?! なあ?!」

ジェネシスの煽りにキリトはやけっぱちになって叫んだ。

メニュー欄を叩くように押して行き、ジェネシスとフレンド登録が完了する。

「おつ、やればできんじゃねえかキリト氏。今後ともよろしくな」

ジェネシスが満足そうに笑みを浮かべながらキリトの肩をポンと叩く。

「お前とはよろしくしたくないけどな!!」

「なんでだよ! 失礼な!!」

「人の事頑なにコミュ障呼ばわりする奴に言われたかねえ!!」

叫び合う二人の肩にティアがポンと手を置き

「まあまあ二人共、その辺にして。」

では、私ともしてくれる? キリト」

「…ああ、この際もう何人でも一緒だ。フレンド登録しようぜ」

その後、キリトはクラインともフレンド登録を済ませた。

「…容赦がねえなオメエ」

「いいじゃねえか。これで、晴れてキリトともダチって訳だ」

ジト目で言うクラインに対しジェネシスは不敵な笑みで返す。

「……うし、それじゃ俺はそろそろ落ちるわ」

「私も。また会おう、キリト」

「ああ。またな」

「お疲れさん」

四人は別れの挨拶を交わし、ジエネシスとキリトは並んで草原を歩き出した。

すると、背後でタイヤの音が響いた。

「あれ?……ログアウトボタンが無い」

四話 絶望

ティアの声に三人は耳を疑った。

ログアウトボタンが無い、そんな事があるはずがない。だが、続けてクラインも同じことを呟いた。

「俺の方にもねえな」

そんなクラインに対し、キリトは訝しんだ表情で

「そんなわけないだろ。よく見ろって」

「いや、本当にねえんだよ」

しかし返ってくるのは同じ反応。

そんな彼に、ジェネシスが少し煽るような口調で言う。

「いやいやいやクライン氏、そんなバアカなこと言っちゃいかんよ。」

ログアウトボタンが無い？そんなことあるわけ……」

　数秒後

「……ほんまや」

「だろ？」

お笑い界のレジンドのようなやり取りをするクラインとジェネシスを他所に、キリトもメニュー欄を確認するが、やはり彼にもログアウトボタンは見つけられなかった。

「……ま、正式サービス初日だからな。こんなバグもあるだろうさ。運営も今頃半泣きだろうな」

「貴方もですね、クライン」

「え？」

呑気なことを言っているクラインに、ティアが苦笑しながら言う。

「ピザ、5時半に届くのでしょうか？今25分ですよ」

「……ぬおおおー?!?!俺のピザがああぁー!!」

頭を抱えて絶叫するクラインを他所に、キリトとジェネシスは怪訝な表情を浮かべた。

「……おかしいな」

「ああおかしい。ぜってえにおかしい」

深刻な表情で顔を見合わせる二人に、ティアが疑問符を浮かべながら言う。

「おかしいって……まあそれはそうだろう？ バグなんだから……」
そんなティアに対し、ジエネシスは首を横に振りながら答える。

「いやいや、バグにしたってタチが悪すぎんだろ。ログアウト出来ないんざ、今後のゲームの運営に関わる重大な案件だろうがよ」

キリトもその意見に頷き続ける。

「ああ、その通りだ。俺たちプレイヤーには、メニュー欄からログアウトボタンを押す以外にこの世界から出る手段はない。

こんなの、サーバーを停止してプレイヤー達を強制ログアウトさせればいいのに……運営から連絡すらないなんて、一体どうなってるんだ？」

ジエネシスとキリトの深刻な表情と言葉で、ティアとクラインもまた不安げな表情になる。

彼らの心境に呼応するように、夕日が雲によって隠れ、辺りが暗くなる。

その時、第一層のフロア全体に、はじまりの街の鐘が鳴り響いた。

そして、ジエネシス達四人が青白い光に包まれその場から消えた。

四人が飛ばされた先は、はじまりの街の中央広場。

そこにはこの世界に現在ログインしている約一万人のプレイヤー達が集められていた。

皆何が起こったのかわからない様子で不安げな表情を浮かべ、中には苛立っているものもある。

「ん？ ありやあ何だ？」

ジエネシスの声に三人は視線を上に向ける。

そこには赤い文字で、《Warning》《System Announcem ent》と書かれたパネルがあり、それは徐々に無数に広がっていく。

そして、そのパネルの隙間から赤い血のような液体が滴り、集合し、やがて二十メートル長のフードを被った人の形を象った。

『プレイヤー諸君、私の世界へようこそ』

赤いフードの巨男は声を発した。

『私の名は《茅場晶彦》、現在この世界を唯一コントロール出来る存在だ』

「あいつが茅場晶彦か……」

ジェネシスは少し感心したような顔で呟いた。

彼こそ、この《ソードアート・オンライン》の開発者にして、ナーブギアやその他フルダイブ機器を開発した天才科学者だ。

『既に諸君らの中には、メインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気づいている者もいるだろう……だが、これはバグでは無い。』

繰り返す……これはバグでは無く、ゲーム本来の仕様である』

彼の言葉で広場は静寂に包まれた。

ログアウトボタンが無いのがゲームの仕様……つまりプレイヤー達は皆、この世界から自発的に出られないと言うことだ。

『諸君らはこの世界から自発的にログアウトすることは出来ない。また、外部の人間によるナーブギアの強制停止もあり得ない。もしそれが実行された場合……ナーブギアの高出力マイクロウェーブが諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる』

告げられた言葉はあまりに現実離れしており、プレイヤー達の中には馬鹿馬鹿しいだの早く終われだのぼやいている者もいる。

「何言ってるんだあいつ？んなこと出来るわけねえだろ、なあキリト？」
クラインが茅場を指差しながら言う。

が、彼の言葉に答えたのはジェネシスだった。

「いや、信号素子のマイクロウェーブってたしか電子レンジと同じなんだろ？」

「ああ。そして、リミッターさえ外せば、限界値の42度を超えることも可能だ……ナーブギアは人の脳を破壊できる」

キリトも頷きながら同調する。

「けどよ、電源を抜いちまえば……」

そう言うが、ティアが首を横に振って

「いや、確かあれには内臓バッテリーがあつたはず」

「な……でも無茶苦茶だろ！なんなんだよ!!」

クラインは痺れを切らしたように叫んだ。

『残念ながら、警告を無視したプレイヤーの家族あるいは友人が、ナーブギアの強制解除を試みた結果、既に213人の人間がこの世界および現実世界から永久退場している』

「そんな……213人もだと?!」

戦慄したキリトが思わず呟いた。

「信じねえ……信じねえぞ俺は!!」

クラインが首を横に振りながら叫ぶ。

だがクラインのそんな叫びをも否定するかののように、茅場のアバター周囲に複数のディスプレイが表示される。

それらはテレビのニュースメディアを始め、TwitterなどのSNSなどもあり、それらは全て《ゲーム内で死亡》などと言った見出しで埋め尽くされている。

『ご覧のように、既に多くのメディアが多数の死者が出たことをこの状況を含め報じている。』

よって、諸君らがナーブギアの強制解除によって死亡する危険性は低くなっていると言ってよかろう。諸君らは安心してプレイしてくれて良い』

「ふざけるな……この状況で呑気に遊んでいろうのか!」

我慢できずにティアが叫んだ。

『だが十分に留意してほしい。今後この世界においてあらゆる蘇生手段は存在しない。諸君らのHPが消滅した瞬間——ナーブギアが諸君らの脳を焼き尽くし、生命活動を停止させるだろう』

静かに放たれた言葉。

プレイヤー達にはもう既に余裕はなく、ただ重苦しい空気が広場を覆い尽くす。

『諸君らがこの世界から出る方法はただ一つ……このゲームをクリアすることだ。現在の第一層から最上層の第百層までをクリアすることでのみ、生き残ったプレイヤーはログアウトすることが出来る』

再びざわつく広場。「ふざけるな!」「出来るわけないだろ!」と

言った罵声が飛び交う。

しかし茅場はそれらを無視し、言葉を続けた。

『では最後に、私からプレゼントがある。確認してくれたまえ』
言われたプレイヤー達は自身のアイテムストレージを開く。中に
入っていたのは『手鏡』。

ジエネシスはそれをオブジェクト化し、鏡を覗き込む。
映ったのは現在の自分のアバター。やや細目で黒い髪型の優男が
そこにいた。

だが次の瞬間、ジエネシスの身体は青白い光に包まれる。
光が晴れ、ジエネシスは辺りを見回す。

何かが違う。ジエネシスは咄嗟にそう感じた。

「大丈夫、ジエネシス？」

ティアが自身を呼ぶ声がし、振り向くとジエネシスは息を飲んだ。
そこにいたのは、ティアではなかった。

スラリとした体つきは変わらないが、銀髪にやや大人びた顔立ちの
女性。

見間違ふことなどあるはずもない。現実世界で毎日過ごした女性、
雫がそこにいた。

雫ー否、ティアもジエネシスを見た瞬間はつとした顔になる。

「え……久弥……」

ジエネシスは慌てて鏡で自分の顔を確認する。
荒々しく逆立つ赤い髪に吊り上がった目、黄色い瞳。

「俺……ういや、正確には現実の俺か……!」

ふと、ジエネシスはキリト達の方を見る。
たしかにそこには先程と同じく二人の男性プレイヤーが立っ
ていた。

しかし一人は赤いバンダナに無精髭を生やしたおっさん、もう一人
は艶のある黒髪に中性的な顔立ちの、自分と同一年くらいの少年が
いた。

「ええと……つまりそこのおっさんがクラインで、その美少年がキ
リトか」

「俺とキリトの扱い違くねえ?!」

ジェネシスがクラインとキリトの方を指差して確認する。

「それじゃあ、その赤髪がジェネシスで、銀髪がティアか」

クラインの悲痛な叫びを無視し、キリトはジェネシスと同じように自分たちを確認する。

「これって現実の顔……でもどうして」

ティアが鏡を見ながら疑問符を浮かべる。

「そうか、スキャンだ。ナーブギアは高密度の信号素子で顔をすっぽり覆っている」

「なるほど……でも、身長や体格は……?」

キリトの答えにクラインが納得したように頷くが、新たな疑問が浮かんだ。

「あー、あれじゃね? 確かナーブギアかぶった時に、キャリブレーションとかで身体のあちこち触らされたる」

ジェネシスが思い出したように答える。

「でも……でもよ、なんだってこんなことを……」

クラインの疑問に対し、キリトは茅場を指差し答える。

「それも、すぐ答えてくれるさ」

キリトの言葉通り、茅場は口を開いた。

『諸君らは今、何故?』と思っているだろう。《ソードアート・オンライン》及び《ナーブギア》開発者の茅場晶彦は何故こんな事をしたのかと疑問に思っているだろう。

私の目的は既に達成されている。私はこの世界を鑑賞する為だけに、ナーブギアを、そして《ソードアート・オンライン》を開発したのだ』

告げられた言葉にプレイヤー達は何も言えず、ただ沈黙が続く。

『以上で、《ソードアート・オンライン》のチュートリアルを終了する。諸君らの検討を祈る』

そう言い残し、赤いフードの巨体は溶けるように消滅し、赤いパネルも消え再びオレンジ色の夕日が広場を照らす。

しばし静寂が続いたが……

「い……いやああああ!!!」

少女の悲鳴を皮切りに、一斉にプレイヤー達が悲鳴を、怒号を上げ始めた。中には呆然と立ち尽くす者もいる。

「クライン、ティア、ジェネシス！少し来てくれ」

するとキリトが、三人の手を引いて街の裏路地まで引つ張ってき
た。

「よく聞いてくれ。俺は街を出る。お前らもすぐに出るんだ」

未だに状況を飲み込めていないクラインとティアに対し、ジェネシ
スが何かを察して補足する。

「こういうMMORPGは基本、リソースの奪い合いなんだよ。奴の
言ったことが本当なら、俺たちはこれから自分自身を強化しなきゃな
らねえ。だが自分を強くするにはモンスターの狩場みてえな場所が
必要だ。

おそらく、すぐにこの辺の狩場は独占される。だからもう次の村に
行つといたほうが良いんだよ」

ジェネシスの説明に納得したように頷くティアとクライン。

「…その通りだ。そして俺は、そこに行くまでの危険なポイントや安
全な道も把握してる。低レベルでも、誰かひとりなら守れる」

つまりキリトは、この中の誰かひとりを連れて次の街に行こうと言
うのだ。

「……悪い、キリト。俺は前のゲームで知り合った仲間がいるんだ。
あいつらを、置いて行けねえ」

申し訳なさそうな顔で目を伏せるクライン。

「そうか……分かった」

「へっ、別に心配すんな！これでも前のゲームじゃ、ギルドの頭張って
たんだからよ。お前にもらった知識で何とかやってみるさ！」

笑ってそう告げた。

「よし、それならここで別れよう…気をつけてな」

「おうー」

そう言つてクラインは広場へと駆け出す。

が、不意に立ち止まって振り返り、

「おいキリト！おめえ本当は可愛い顔してんな！結構好みだぜ！！んで、ジエネシスとティア！おめえらにあつてんぞ！！とつとと爆発しろ！！」

満面の笑みで叫んだ。

「お前も、その野武士面の方が10倍にあつてるよ、クライン！」

「お前は一生童貞だろうがな！！」

爽やかな笑顔で返すキリトと、悪戯な笑みで返すジエネシス。

「おいジエネシス！！てめえ今に見てるよ！ぜってえに可愛い彼女見つけてやんだからな！！」

そう言い残し、今度こそ姿を消した。

キリトはジエネシスとティアに向き直り、

「…さて、ティアとジエネシスはどうする」

ここでティアがジエネシスの腕を掴んで口を開いた。

「済まない、私はこの人と一緒に行く。私たちをサポートしてくれるのなら、お前と行ってもいいのだが……」

そこでキリトは、自身のレベルを確認する。

現在彼はレベル1。流石のキリトでも、このレベルでニュービーの二人を守りながらフィールドを抜けるのは至難の業と言っている。

そこで察したジエネシスがキリトの肩をポンと叩きながら

「…心配すんな。俺たちなら大丈夫だ。クラインと同じように、テメエから教わったテクでやってくよ」

「ああ。だからお前は気にせず先に進め」

二人の心遣いにキリトは苦い顔をする。

「そんな顔すんなよ。お前とは、またすぐ会える気がする。そんな時はよろしく頼むぜ」

そんなキリトに、ジエネシスは不敵な笑みを浮かべて拳を突き出す。

キリトはそれを見て一瞬戸惑うが、すぐに彼も笑顔で返す。

「…ああ、俺も同じだ。お前はこれから、無くてはならない存在になる気がする。だから死ぬなよ？」

「へっ、テメエこそな」

そう言っつて拳を打ち付けあつた後、キリトは駆け出した。キリトの姿が見えなくなつてしばらくした後、ティアが口を開いた。

「……それで、私達はどうしようか？」

「そうだな……先ずは狩場を抑えなきやならねえが……その前にティア、一つ言つておかなきやならねえことがある」

言いながらジェネシスは、その場で膝をついた。

突然のことで目を見開き驚くティア。

ジェネシスはそのまま手をつき、土下座をした。

「すまねえ！お前がこうなつたのは全部俺のせいだ。俺がお前を誘いさえしなければこんなことにはならなかつた……許してくれとは言わねえ。斬りたきや斬つてもいい。お前にはその権利がある！」

そう、ティアー雫をこの SAO に誘つたのは紛れもなくジェネシスだ。もしジェネシスが彼女を誘わなければ、雫はこのデスゲームに巻き込まれることは無かつた。

しばらくの沈黙の後、ティアはゆっくりとしゃがみ込む。

「……顔を上げて？久弥」

優しく慈しむような声でティアは語りかけた。

ジェネシスはその言葉に従いゆっくり顔を上げる。

ティアの表情は怒りでも悲しみでも無く、ただ穏やかな笑顔を浮かべていた。

「久弥のせいじゃない。私がこうなつたのは、私の選択。だから、自分を責めないで？」

私はあの時から貴方について行くと決めた。私をあのいじめから救つてくれた時から、久弥は私のヒーローだった」

そしてティアは優しくジェネシスを抱きしめた。

「久弥がこの世界に誘つてくれた時、凄く嬉しかった。久弥と一緒に冒険できるんだって思うと、凄くワクワクした。たどえこれがデスゲームなんだとしても、久弥がいるなら大丈夫だよ。

だから約束して？これからもずっと……私と一緒にいるって」

ジェネシスはティアの言葉に何も言えなくなつた。

しばし沈黙した後、ジエネシスはふつと笑い、

「……ああ、約束だ。俺は絶対にお前を現実世界に返す。お前は絶対に、俺が守ってやらあ」

不敵な笑みで返し、二人は立ち上がる。

そして並んで路地を歩き、フィールドに出る。

「とりあえず、どうしようか?」

「さっきキリトがこの辺の狩場は独占されるって言ってたな……な
ら、俺らも次の村へ行くか」

「分かった」

そして二人はそれぞれの剣を手に取り、同時に駆け出した。

五話 攻略会議

デスゲームが始まって一ヶ月。

第一層は未だクリアされておらず、それどころか迷宮区のボス部屋すら見つかっていない。

この間、約二千人もの命が散った。

その多くは、モンスターに殺されたもの、デスゲームに絶望して自殺したもので分かれていた。

犠牲者の中には三百人の元テスターもいた。

この状況を打破すべく、迷宮区に最も近い街《トールバーナ》にて攻略会議が開かれることになった。最前線で活動する攻略組のプレイヤー達は皆情報屋からそれを仕入れ今この街に集まってきている。ジェネシスとティアの二人も、攻略会議に参加するためこの街を訪れていた。

会議が開かれる闘技場に足を踏み入れ、辺りを見渡す。

「……ざつと45人、つてどこか」

「意外にいるんだね」

集まったプレイヤーの数をみて、ジェネシスとティアは交互に呟いた。

その後、闘技場の観客席に二人並んで腰を下ろす。

二人が座った直後、闘技場の真ん中に青い髪青年が立ち、手を叩いて注目させる。

「はい、それじゃ始めさせてもらいます！今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！

俺は《ディアベル》。職業は…気持ち的に《騎士^{ナイト}》やってます！」

ディアベルの言葉で会場はドツと笑いが起きた。

「ジョブシステムなんてねえだろ！」「まじめにやれよー」などと言ったツツコミが飛び交う。

ディアベルはそれを片手を挙げて制し、一旦目を伏せて真剣な表情に切り替える。

「——先日、俺たちのパーティが、迷宮区の最上階でボスの部屋と

思われる扉を発見した！」

会場から笑顔が一瞬で消え、重々しい緊張感が辺りを包む。

「ここに来るまで、多くのプレイヤーが犠牲になった。

たくさんの時間がかかった。プレイヤー達の中には、クリアできないという空気が蔓延している」

ディアベルの真剣な演説に、皆は黙って耳を傾けていた。

「だからこそ、俺たちはここでボスを倒し、第二層に必ず到達して、このデスゲームはいつかクリアできるんだって事を、はじまりの街に残った者たちに示さなきゃやならない！それが、今最前線で戦ってる俺たちの義務なんだ。そうだろう？みんな!!」

ディアベルの訴えに、プレイヤーたちは賞賛の拍手や声援を送った。

「へっ、言うじゃねえか」

肘で頬をついて座っているジエネシスも感心したように呟いた。

「オツケーー！それじゃあ今から、攻略会議を始めたいと思う。

まずは6人一組でパーティを組んでくれ！ボスは一つのパーティじゃ戦えない。パーティを集めてレイドを作るんだ」

ディアベルの言葉で周りのプレイヤー達は次々に集団を作り、パーティ申請をしていく。

「私達は固定だよね？」

「ん？まあな……後4人はどうするか……」

ティアの問いにジエネシスは軽く頷いて辺りを見渡す。

「……おろ？」

すると、観客席の端の方で見覚えのあるプレイヤーがいた。黒髪で片手剣を背中に背負った少年は、赤いフードを被った少女の隣に行き、パーティ申請をしていた。

ジエネシスは彼の方に歩き、ティアもそれについて行く。

「おやおやキリト氏、何やってるかと思えばナンパですか？全くイケメンのやる事は違えなあ〜？」

キリトの後ろから肩をポンと叩き、そう話しかける。

キリトはビクツと肩を震わせ後ろを振り向く。

「ジェネシス！それにティアも!!2人とも来てたのか」

「一ヶ月ぶりだな、キリト」

ティアは笑顔でキリトに手を振った。

「あ、そうだ。君にも、紹介しとこうか。ジェネシスとティアだ。はじまりの街からの付き合いなんだ」

キリトはフードの少女に向き直り、ジェネシスとティアを指しながら言った。

「せっかくだから、こいつらともパーティを組んでもいいか？」

少女は首を縦に振った。

キリトはそれを確認すると、ジェネシスとティアにパーティ申請をする。

2人は迷わずOKをタップし、パーティが成立した。

同時に、ジェネシスの視界の右上に現在パーティを組んでいるメンバーの名前とHPが表示される。

《Genesis》《Tia》《Kirito》《Asuna》

ティアは少女の隣に座り、話しかける。

「済まないな、飛び入りで参加する形になってしまった。だが同じ女性プレイヤー同士、仲良くやっていこう」

そう言った。

「……別に貴女と仲良くするつもりはない。私はここに友達を作りに来た訳じゃない」

少女ーアスナは静かな声でそう告げた。

ティアは一瞬真顔でアスナを見つめていたが、直ぐに目を閉じて軽く笑い、

「……そうか。ならせめて、このボス戦だけでもよろしく頼むよ」

そう言った。

「……わかった」

アスナもそう言った。

ディアベルはプレイヤー達がパーティを組んだのを確認すると、再び口を開いた。

「よしみんな、組み終わったかな？それじゃー」

その時だった。

「ちよお待ってんか!!」

関西弁で叫ぶものが現れた。

声の主は颯爽と階段を降り、ディアベルの立つ舞台へ立った。

背中に片手剣を背負っており、サボテンのようなイガアガ頭の男性だった。

男は会場の方に向き直り、叫んだ。

「ワイは《キバオウ》っちゅうもんや！

会議を始める前に、一つ言っておきたいことがある！」

そして、一呼吸入れプレイヤー達を見回しながら再び叫んだ。

「こん中に、今まで死んでいった二十人に詫び入れなあかん奴がおるはずや!!」

「キバオウさん、貴方が言う《詫び入れなあかん奴》って言うのは、元βテスターのことかい？」

ディアベルはキバオウの方を向きながら尋ねた。

「決まっとるやろ!!β上がりどもは、こん糞ゲーが始まったその日に、ビギナーどもを見捨てて消えよった！うまい狩り場やボロいクエストを独占して自分らだけ強なってその後もずーっと知らんぷりや!!」
そしてプレイヤー達の方を指差し鋭い視線を向ける。

「この中にもおる筈やで！β上がりの卑怯もんが!!そいつらに土下座さして、溜め込んだ金や持つてるアイテム全部吐き出して貰わんと、パーティーメンバーとして命を預けられんし預かれん!!」

堂々と宣言した。

プレイヤー達の間ではざわつきが起きている。

キリトもまた苦い表情をしていた。彼はβテスターだ。

バレたら間違いないく大変な目にあう。
どうするか思案していた時だった。

「ちよお待ってんか!!」

そう叫び勢いよく飛び出し、ディアベルとキバオウの立つ舞台に勢いよく着地するものがいた。

黒いブーツに黒いジーパン、黒生地に赤いラインの入ったTシャツ、背中にあるのは足元まで伸びる大剣。そして赤く逆立った髪にツリ上がった目、黄色い瞳。

「……ワイは『ジェネシス』つちゆうもんや」

「(お前かいいいい〜!!)」

キリトはそう叫びそうになるのを必死に抑えた。

皆の注目を集める中、ジェネシスは皆の視線を気にすることなく、キバオウを威圧感ある目で見下ろす。

「さてキバゴンさんよお〜」

「なっ、キバゴンって何や！ワイはキバオウじゃボケ！」

名前を間違えられたキバオウはジェネシスに食ってかかるがジェネシスは気にも止めず続ける。

「おめえが言いてえのはつまりこう言うことだな？二千人が死んだのはβテストのせいだ、ってこう言うことか？」

「そうや！βテストどもがワイらを見捨てんかったら、二千人も死ななかつた筈や！少なくとも、そいつらが持つてる情報をニュービーの奴らに教えたたらこんな事にはならんかった筈や!!」

喚くようにキバオウは叫び続ける。

ジェネシスはそれを黙って聞いていたが、

「βテストがビギナー達を見捨てた、ねえ……。」

別に良いじゃねえか、見捨てたってよ」

「なっ?!」

ジェネシスの言葉にキバオウが、いやこの場にいる全員が目を見開いた。

「テスト達は自分達だけ強くなった？結構じゃねえか。そいつらが強くなってくれたら、結果的にゲーム攻略が速くなるんだ。わざわざ

右も左もわからねえビギナーどもに手取り足取り教えてる暇があらなら、寧ろどんだん強くなつてゲームを進めて貰いたいね俺は」

「な、何やて……?!」

キバオウは信じられない、と言う表情でジエネシスを見上げる。

「それに、だ。死んだ二千人が全員ビギナーかと言えばそうじゃねえ。βテスターだつていたんだぜ？何人死んだと思う？」

「し、知るかそんな事……」

キバオウはそっぽを向いて言った。

「じゃあ今言うから覚えとけ……三百人だ。

いいか、βテスター千人のうち……いや、おそらく全員はこの世界にやいねえだろうから、多くて八百人つてところか。その中の三百人だぜ？

つまり何が言いてえかと言うとだな……テスター達が有利かと言うと、そりや否だつてわけだ」

キバオウは何も言えずただジエネシスを睨みながら聞いていた。

「俺も発言いいか？」

すると、今度は野太い声が会場に響いた。

立ち上がったのは、ジエネシスよりもさらに高身長黒人男性。

男はキバオウの近くに歩み寄り、ジエネシスと2人で挟み込むように立つ。

「俺は《エギル》だ。キバオウさん、あんたさつきテスター達が情報を独占してみたいない言い方をしてたな」

そう言いながら、エギルはポケットから一冊の本を取り出す。

「このガイドブック、あんたも持つてるよな？はじまりの街の道具屋で無料配布してたやつだ」

「も、もろたで？それが何や!!」

キバオウは不遜な態度を崩さず噛みつくような口調で言った。

「配布してたのは、元テスター達だ」

エギルの言葉に、キバオウは勿論会場のプレイヤー達が目を見開く。

エギルは振り返って観客席に座るプレイヤー達の方を見て

「いいか、情報は誰にでも手に入れられたんだ！なのに沢山のプレイヤーが死んだ。その失敗を踏まえて、俺たちはこれからどうボスに挑むべきなのか、それがここで論議されると俺は思っていたんだがな？」

キバオウはもう何も言い返せなくなり、不機嫌な態度で観客席に戻って行った。

それを見届けてジエネシスとエギルも席に戻る。

「ありがとよ、助かったぜ」

戻る直前、ジエネシスはエギルに言った。

「：別に礼を言われることはしてねえさ。お前さんみたいな若えのが自分の意見を堂々とやってんのに、年長者の俺が何もしねえのは示しがつかんからな」

エギルも笑ってそう返し、自分の席に戻った。

ジエネシスがキリトの隣に戻ると、

「ジエネシス、何であんなことを……」
と尋ねた。

「俺は言いてえことはビシツと言ってやんなきゃ気が済まねえタイプなんだわ。特にああいう自分の意見曲げねえような頑固な奴に好き放題言わせんのは我慢ならねえ」

そう言ってジエネシスはキリトの方を向き、

「だからオメエも自分の意見きっちり言わねえとダメだぜ？でねえとああ言う奴は誰かが止めなきゃやどんどんエスカレートして、しまいは無いことまで言いやんぞ？」

そう言われてキリトは気まずそうに目を伏せる。

「ああ、そうだな…済まない」

「謝ってどーすんだバカ」

そんな2人のやり取りを他所に、ディアベルは会議を続けた。

「よし、それじゃあ会議を再開しよう。」

実はさっき言っていたガイドブックの最新版が配布された！

ディアベルはその最新版のガイドブックを取り出し、ページを開けて読み上げる。

「この本によると、ボスの名は《イルファング・ザ・コボルドロード》。取り巻きに《ルインコボルド・センチネル》がいる。

ボスの装備は斧とバックラー。4段目のHPがレッドゾーンに達した時、武器を斧から曲刀カテゴリーのタルアールに持ち替えるらしい」

そこまで読み上げると、本を閉じて顔を上げる。

「攻略会議は以上だ。では最後にアイテムの分配だけど、金は自動均等割り、経験値はモンスターを倒したパーティ、アイテムはゲットした人の物とする。異存はないかな？」

ディアベルの問いかけに皆は首を縦に振った。

「よし！明日は朝10時に出発する！では解散!!」

—————

その日の夜、ツールバーナの宿屋のベッドでジェネシスは一人寝そべっている、寝室のドアが開きティアが入って来た。

ジェネシスはそれに気づくとベッドの端により、ティアが寝るスペースを作る。この宿屋の寝室はシングルのため、二人が寝るには端に寄って寝るしかない。

「……ごめんね、狭くて」

ティアが申し訳なきように言いながら、ベッドに入る。

「気にすんじゃないやねえよ。この部屋しか空いてなかったみてえだしな」

ティアとジェネシスは背中合わせになって横になる。

「……ねえ」

「ん？」

ティアが背中越しに話しかけた。

「久弥は、怖くないの？明日のボス戦」

「……怖くねえ、って言ったら嘘になるわな」

「ふふっ……久弥でも怖いことってあるんだ」

「たりめえだろ、命かかってんだぞ……けどやるしかねえよ。俺には

てめえをこの世界から絶対出すって義務があんだ。いきなり一層でゲームオーバーしてたまるか」

強い口調でジェネシスはそう言い切った。

「そっか……ねえ久弥、お願いがある」

ティアはそう言いながら体の向きを変えると、後ろからジェネシスに抱きついた。

「お願い……絶対に、死なないで。少しでも危なくなったら直ぐに逃げて。貴方が戦うなら、私もその隣で戦う。貴方が逃げるなら、私も一緒に逃げるから」

ジェネシスはそれを聞くと、自身の前で交差している彼女の手をしっかりと握り、

「……なら、俺からも一つ頼むわ。」

てめえこそ絶対に死ぬんじゃないぞ。守るって決めた相手に死なれちややってられねえからよ」

「うん……わかった」

その言葉を最後に、ティアとジェネシスは明日の激戦に備えて眠りについた。

六話 ボス戦

翌日、第一層の迷宮区に続く森のフィールドを、攻略組は列になつて進んでいく。

最後尾にはあぶれ組の四人——ジェネシス・ティア・キリト・アスナの四人パーティーが続く。

「よし、今の内に確認しておくぞ?」

キリトが三人に向かつて言った。

「俺たちあぶれ組の相手は、ボスの取り巻きの《ルインコボルト・センチネル》だ。俺たちの中の誰かが奴のポールアックスを跳ねあげて、ほかの奴がスイッチしてすかさず飛び込んでくれ」

するとアスナが首を傾げて尋ねた。

「『スイッチ』って?」

キリトはそれを聞いてギョツとした顔になり

「もしかして、パーティー組むの初めてなのか?」

と聞き返す。

アスナは黙って頷き、キリトはガツクリと肩を落とした。

すると、ティアがアスナの隣に行き、

「アスナ、スイッチというのはいは《プレイヤーがほかのプレイヤーと位置を切り替える事》だ。スポットとかでよく聞くだろう?」

そう説明し、アスナは納得したように頷く。

「大方その通りだ。ただ、このゲームではソードスキルを使うと数秒の硬直時間がある。だからタイミングを間違えると、それこそ命取りになるんだ。スイッチのタイミングは俺が指示するから、みんなはそれに合わせてくれ」

キリトの言葉にアスナとティアは頷いた。

「おつ? 流石ベテランゲームマーキリトさんだなあ。頼りにしてるぜ?」

すると、ジェネシスが揶揄うような表情でキリトの肩を組む。

「お、お前なあ……でも、俺も頼りにしてるんだぜ? お前の事」

「ん？どーいう意味だそりゃ」

キリトの思わぬ発言にジエネシスは怪訝な顔で尋ねる。

「恐らく、この四人の中で瞬間攻撃力が一番高いのは、間違いなくお前だ、ジエネシス。お前の両手剣のパワーと威力があれば……もしもの事があつた場合、お前の力が必要不可欠になる」

「もしもの事？」

「ああ……俺たちがボスと直接戦う時だ」

真剣味を帯びたキリトの発言に皆は息を呑んだ。

しばし真顔だったジエネシスだが、すぐに不敵な笑みで返す。

「……はっ、任せとけ。まあ、そんな事は起こらねえだろうがな」

「ジエネシス、それはフラグだぞ」

ジエネシスの言葉にティアが眉をひそめながら言う。

だがジエネシスは尚も不敵な笑みを崩さずこう告げた。

「……それならそれで、上等ってもんだ」

—————

数時間後、一行は迷宮区の最上階にあるボス部屋の前の扉に着いた。そこは先程までと比べてかなり薄暗く、明かりは扉の横に設置された松明のみ。扉の荘厳な形状から、その中がただの部屋ではないことを嫌でもプレイヤー達に伝えていた。

ディアベルは扉の前に立つと、プレイヤー達の方を振り返り剣を地面に突き立てる。

「みんな!! ついにここまで来た。

俺から言えるのはただ一つだ……勝とうぜ!!」

ディアベルの言葉にプレイヤー達は各々の武器を掲げながら「おおお!!」と雄叫びを上げる。

キリト達もそれぞれ剣を引き抜き、緊張感を高める。

ディアベルがゆっくり扉を開く。

中は真つ暗だが、辛うじて部屋の奥で鎮座する巨体が見えた。

プレイヤー達はその姿を確認しつつゆっくりと部屋に入っていく。そして全てのプレイヤーが入り終わると、暗かった部屋に明かりが灯る。そしてその巨体はこちらが入って来たのに気づくと、その場から高く跳躍しプレイヤー達の前で着地する。

その瞬間、そのモンスターがボスであることを示すカーソルと名前、四本のHPバーが出現した。

《イルファング・ザ・コボルドロード》。

ボスは『グルルアアアア!!』と高く雄叫びを上げる。そしてその前に三体の取り巻き《ルインコボルト・センチネル》が出現した。

「攻撃——開始!!」

ディアベルの号令と共にプレイヤー達は一斉に突撃した。遂に、第一層ボス戦が幕を開けた。

—————

ボス戦開始から数十分が過ぎた。

今の所、特に犠牲者も無ければ苦戦することもなく順調に進んでいた。

ボスのHPも既に三本目を切っている。

その間、ジエネシス達あぶれ組四人は取り巻きのセンチネルを本部隊に近づけさせないよう取り巻きの処理をひたすら行なっていた。

キリトが取り巻きのポールアックスをソードスキルで弾く。

「——よし、スイッチ!!」

キリトの掛け声でアスナがキリトの傍から飛び出した。

細剣の刃がグリーン光を帯び、ソードスキルを《リニア》が発

動される。

「三匹目っ!!」

その突き技はかなり洗練されており、まるで流星の如く繰り出される。

「(初心者とは思えない動きだ……剣先が全く見えない)」

キリトも心の中でアスナの動きを見て絶賛していた。

アスナがセンチネルを片付けたのを見届けると、キリトはすぐ隣で戦っているジエネシスとティアの方に視線を移す。

まず見えたのはティアだった。

ティアは一体のセンチネルを一人で相手取っているようだ。

センチネルが振り下ろすポールアックスを物ともせず、センチネルの攻撃を必要最低限の動きでかわし、隙を見て一撃を当てるカウンタースタイルの戦闘スタイルをとっているようだった。

「ーっふっ!!」

突如ティアの姿がぶれ、一瞬のうちにセンチネルの後ろに回り込んでいた。そしてその直後、センチネルの身体に三つの切り傷が発生し、センチネルはその体を爆散させた。

曲刀三連撃スキル《トレブル・サイズ》だ。

「なっ……?! (何だ今のは?!動きがまるで見えなかったぞ!アスナも中々の速さだったが、ティアはそれ以上だ……)」

キリトはティアが見せた動きに戦慄した。

ティアはジエネシスとコンビを組むにあたって、彼女はとにかく速さを追求した。両手剣使いであるためパワー型のジエネシスは、速さにおいて劣る点がある。ティアは彼のパートナーとして、その速さを補えるよう鍛え続けて来た。

その結果が先ほどの動きだ。アスナが《突く速さ》に特化したプレイヤーとするなら、ティアは《斬る速さ》に特化したプレイヤーと言えるだろう。

「……グツジョブ」

キリトは無意識に笑顔でそう呟く。

が、彼女達に気を取られ後ろから近づくとセンチネルに気づくのが遅

れた。

「しまった?!」

反応するも迫るアックスが既に眼前に来ていた。間違いなく直撃する。そう覚悟したその直後。

「うおおらあ!!」

ジェネシスがキリトとセンチネルの間に割り込み、センチネルを大剣で斬り飛ばした。

両手剣ソードスキル《ブラスト》だ。たった一撃だがそれでもかなりの威力を持つ。センチネルはその一撃で身体を四散させた。

ジェネシスは剣を肩に担ぐとキリトの方に振り向き、悪戯な笑みを浮かべ、

「オイオイ、何美女に気を取られてんだ？」

「ジェネシス…：すまない」

「コラ、こういう時は謝んじやねえだろが」

「あ、ああそうだな…：ありがとう」

そしてキリトは再び戦闘に復帰した。

そうこうしているうちに、ボスのHPバーが最後の一本、そしてレッドゾーンに突入した。

『グウウオオオアアアアアア!!』

大きな雄叫びを上げ、ボスは斧とバックラーを投げ捨てた。

これはもう自分の出番は無いな、とジェネシスは考え、視線を目の前のセンチネルに戻す。

「下がれ！俺が前に入る!!」

するとディアベルの声が響き、ジェネシスは再び本部隊の方を向いた。

見ると、ディアベルが片手剣と盾を構えて部隊の一番前に出ている。恐らくリーダー自らボスにとどめを刺すつもりなのだろう。

「…：ん？」

ふと、ジェネシスはボスの腰にあるものに目がいった。

確か情報では曲刀のタルアールに武器を持ち替えるということだったが、あの形状はどう見ても曲刀では無い。

そしてボスはそれを引き抜いた。

あれは曲刀などでは無い。刃は鋭く銀色にキラつき、その切れ味は世界最高峰と言われる程の刀剣――

「――ありゃあ、刀じゃねえか……!」

直後、同じくボスの武器に気づいたキリトが大声で叫んだ。

「駄目だ!!全力で後ろに跳べええー!!」

だが時すでに遅く、ディアベルののソードスキルは発動状態になっていた。

そしてそれより早く、ボスのソードスキルが発動する。

刀ソードスキル《浮舟》

縦横無尽にボスがフロアを動き回り、ディアベルを一瞬のうちに切り上げた。

「ぐああー!」

ディアベルは空中に吹き飛ばされスタン状態となる。

だがボスの攻撃はそれで終わらない。

地面すれすれで繰り出される一撃がディアベルの身体を切り裂いた。

刀ソードスキル《緋扇》

ディアベルはそのまま地面に落下した。

「ディアベル!!」

「おいー!」

キリトとジェネシスが慌ててディアベルに駆け寄る。

だが彼らが駆けつけた時には、彼のHPは既に無くなっていた。

「てめえ……何で一人で突っ込みやがった!」

ジェネシスが険しい表情でディアベルに掴みかかった。

「それは……僕が……元テスターだからさ……」

ディアベルは最後の力を振り絞って言葉を発する。

「ディアベル……お前、LAを狙ってたのか……?」

ディアベルは自嘲気味の笑顔で頷いた。

LAとは、ボスに最後の―撃を与えたものにつけられる《ラストアタックボーナス》の事だ。

「頼む……ボスを……倒してくれ……みんなのために……！」

そう言い残し、ディアベルはその身体を四散させた。

ジェネシスの掌の上に、先程までディアベルの身体だった最後のポリゴン片が落ち、そこで消滅した。

ジェネシスはその感触を忘れないように掌を握りしめた。

「ディアベル……確かに受け取ったぜ、てめえの意思」

そして、剣を握り直してゆっくり立ち上がり、今プレイヤー達を追い回しているボスを睨みつけた。

「あの世でしかと見届けな……てめえが守ろうとしたもんを、今度は俺たちが守って見せらあ」

キリトもジェネシスの隣に立つ。

「ジェネシス……行くぞ」

するとアスナがキリトの、ティアがジェネシスの隣に立った。

「私も」

「頼む」

「ティア……てめえまで……」

「言つたろう？貴方が戦うなら、私も戦うと」

皆、思いは同じだ。ただ目の前のボスを倒す事のみ。

四人の表情は皆決意と覚悟を決めたものだった。

「……行くぞ!!」

そして、四人は同時に駆け出す。

「手順はセンチネルと同じだ!!」

「了解!!」

キリトの声に皆は威勢良く答えた。

ボスは彼らの接近に気づくと、すかさず刀を左腰に持つてくる。

居合スキル《辻風》

キリトはソードスキルでその技を弾く。

「スイッチ!!」

すかさずアスナとティアがボスの懐に飛び込む。

が、ボスの方は技後硬直が少なかったため、すぐに追撃に入る。ボスの刀がアスナをとらえた。

「――伏せろ!!」

咄嗟にティアがアスナの背中を押し込め、自身と共に伏せる。直後アスナのローブを刀が僅かに掠め、それによってローブが破壊された少女の素顔が露わになった。

現れたのは、栗色の長髪の美少女だった。しかも、ローブが破壊された時の粒子がまだ輝いており、アスナの素顔をより美しく魅せていた。

ティアとアスナは間髪入れずにお返しの一撃を叩き込んだ。

細剣スキル《リニア》

曲刀スキル《レイジング・チョッパー》

二人の攻撃が見事にボスの懐に命中し、HPはかなり削られた。

「次、来るぞ!!」

再び、キリトがボスの前に入り、刀を捌いていく。

だがここで、刀をスキル《幻月》型の発動した。上下ランダムに発動されるスキルで、キリトは読みを誤り防御が遅れた。

「しまっ――!!」

「うおらあ!!」

が、その直前ジェネシスがそれを弾き飛ばした。

「はっ、図体がでかい割にパワーは大したことねえなあ!!」

そう叫ぶと、ジェネシスはボスに急接近、白兵戦を繰り広げた。

体格差は圧倒的にジェネシスが不利に見えるが、寧ろ圧倒しているのはジェネシスの方だった。持ち前のパワーとスピードで刀持ちのボスの攻撃をいとも容易く弾いていく。

すると、何かがボスの横腹を切り裂いた。

見ると、ボスのすぐ近くにティアが立っていた。

ジェネシスがボスの攻撃を弾いている間に、ティアが持ち前のスピードを生かして斬り込んだのだ。

「呆れたものだな、刀の振り方がまるでなっていない…最初からやり直せ」

ティアがそう吐き捨てると、ボスの横腹に大きな切り傷が出来た。ボスはすぐさま刀をティアに向けて振るうが、ティアはその攻撃を

上体を僅かに反らす事で難なく躲す。

するとボスの背後から、ジエネシスが背中を斬りつけた。

「おいコラァー！美女ばつかに目が行ってんじゃねえぞマヨ豚X!!」

両手剣スキル《ファイトブレイド》。

五連撃のソードスキルをボスに叩き込んでいく。

だが大技を発動したため長い硬直がジエネシスを襲った。

ボスはそれを狙ってジエネシスを斬りとばす。

「ーっつぐあ!!」

「久弥!!」

吹き飛ばされたジエネシスをティアが抱きとめた。

ジエネシスのHPは一気にイエローゾーンまで下がった。

「バカ!」

「済まねえ、ドジった」

ティアがジエネシスの頭を引っ叩き、ジエネシスは苦笑して謝る。

「危ない!!」

キリトの叫び声が響き、ジエネシスとティアが見上げると、ボスが彼らに向けて刀を振り下ろそうとしていた。

「うおおおおお!!!」

直後ティアとジエネシスの頭上を緑の閃光が走り、ボスの刀を弾き上げた。

ボスの攻撃を防いだのは巨漢の男、エギルだった。

「回復するまで俺たちが支えるぜ!」

「おう、また借りができたな……ハゲ」

「へっ、ハゲじゃねえ……スキンヘッドだバーロー!」

エギルは不敵な笑みでそう返すと、彼のチームと共にボスへ飛びかかった。

休む間も無くボスに攻撃が加えられる。

その間にキリト・ジエネシス達四人は回復に専念した。

だがエギル達がボスを取り囲んだ直後、ボスの刀がエメラルドグリーンに輝く。

刀範囲攻撃《旋車》だ。

「……や、やったああー!!!」

ティアも満面の笑みでジエネシスに抱きついた。

「おいおい、こんなところで……ま、お疲れさん」

ジエネシスは苦笑しながらティアの頭をポンと優しく撫でた。

アスナとエギルはキリトの方に歩いて行く。

「お疲れ様」

「Congratulations! この勝利はあんたのもんだ!」

キリトは未だにぼうっとした状態で座り込んでいた。

「おいおい、MVPがそんなんでどーすんだよ?」

ジエネシスがキリトの背中を叩いた。

「ジエネシス……」

「つたく、英雄ヒーローがそんなんでどーすんだ。ほれ」

ジエネシスは困ったような笑顔でキリトに手を差し出す。

キリトがその手を掴むと、ジエネシスが彼を引き上げて立ち上がり
せた。

「てめえのお陰で勝てたんだ、もつと堂々としてろ。胸張って立つて
ろ。英雄のお前がそんなじや締まらねーだろうが」

キリトは周りを見渡すと、プレイヤー達は皆笑顔でキリトに賞賛の
拍手と声援を送っていた。

「あ……ああ……みんな、ありがとう! 今回のボス戦、勝てたのはみんな
のおかげだ!!」

キリトの言葉でプレイヤー達はうおお!!と更に歓声を上げた。

「せっかくだしよ、LAのアイテム見せてくれや」

ジエネシスがそう促し、キリトはメニュー欄を操作してアイテムを
オブジェクト化する。

すると、キリトのポロシャツの上に黒いロングコートが現れ、その
裾がひらりと舞った。

「いいじゃねえか……さしずめ、《黒の剣士》だな」

「ふ、二つ名とかやめてくれよ……」

キリトは照れたように頭を掻く。

周りのプレイヤー達はキリトに「よつ、《黒の剣士》!」などと歓声

を送る。

「なんでや!!」

が、そんな勝利ムードをぶち壊す声がフィールドに通った。

プレイヤー達の視線は後ろの方へ移る。

声を発したのはキバオウだった。彼は地面にへたり込んでいる。

「なんで……なんでディアベルはんを見殺しにしたんや!!」

「見殺し……?」

キバオウは目に溜まった涙を振り払い、キリトの方を睨みつけ叫ぶ。

「そうやろが!ジブンはボスの使うスキルのことを知つとつたやないか!あの情報を最初から知らせとつたら、ディアベルはんは死なずにすんだんや!!」

激しい口調でキリトを糾弾するキバオウ。

するとキバオウの隣にいたプレイヤーがキリトを指差し、

「あいつ、きつと元βテスターだ!だから情報を知らせなかつたんだ……知ってて隠したんだ!!」

と叫んだ。

するとジェネシスがキバオウの方へ歩いて行く。

「待て待て待て。なんであいつが責められなきゃならねえんだ?あいつのお陰で俺らは全滅しねえで済んだんだろうが。そんなボロクソ言われる筋合いはねえ筈だぜ」

ジェネシスは威圧感のある表情と声でキバオウ達に詰め寄った。

だが、キバオウの隣のプレイヤーは今度はジェネシスの方を睨みつ

け、

「お、お前もボスの攻撃を知っていたよな…？ボスと対等に戦ってたよな…まさかお前もテスターか?! そうなんだろう!!」

「……は？」

突拍子も無い発言にジエネシスは目が点になった。

「他にもいるんだろう!! テスターども、早く出てこいよ!!」

男がそう叫ぶと、プレイヤー達は皆周りを疑いの視線で見渡す。

「お前もテスターか？」という視線で。

その視線はティアとアスナの方にも向けられ、彼女達は困惑の表情を浮かべる。

「(やべえな……このままだといつらみんなバラバラになっちゃうぜ)」

ジエネシスはふとキリトの方を見る。

キリトは何かを決断したのか息をゆっくり吐いて立ち上がる。

ジエネシスはキリトのやろうとしていることを察し、キリトよりも先に口を開いた。

「……元テスターだあ？はっ、冗談よしてくれや。あんな雑魚どもと一緒にすんなよ」

ジエネシスの声に皆の視線はジエネシスに集まる。

「考えてもみろ、一万人以上いたSAOのβテストに当選した千人のうち、本物のゲーマーが何人いたと思う？」

みんな右も左もわからねえクソ共ばっかだったわ。まだテメエらの方がましなくれえだぜ……

だが俺は違う。俺はβテストの時、他の誰も到達できない層まで登った! ボスの刀に対処できたのも、上の層で刀を使うモンスターと戦いまくったからだ!

他にも色々知ってるぜ……情報屋なんか目じゃねえくらいになあ!!」

プレイヤー達の間では騒めきが起きている。

キリトとティアに至っては驚愕のあまり目を見開いてる。

「なんやそれ……そんなん、チートやチーターやん!」

「βテストターでチーター……《ビーター》だ!!」

キバオウの叫びを皮切りに、プレイヤー達は口々にジエネシスを非難し始める。

「へえ、《ビーター》か…いい呼び名だな、気に入ったぜ。

「そうだ、俺は《ビーター》だ!!これからは元テストターごときと一緒にしないであれ」

ジエネシスは邪悪な笑みを浮かべながらそう叫んだ。

そして、二層に続く階段の方へ進んでいく。

「ど、どこへ行くんだ?!」

「二層の門は有効化しといてやる。死ぬ覚悟があるなら来るんだな。まあ、二層のことなんも知らねえてめえらからすれば、進んでも地獄、ここにいても地獄だろうがなあ!!」

「ま、どうするかはてめえらに任せるぜ……」

「精々、地獄を楽しみな!!」

ジエネシスはプレイヤー達の方を振り向き、親指を下に向けてそう言った。

ジエネシスは再び前を向いて階段を上って行く。

ティアは彼を追って走って行く。

「おい!あんなやつほっとけよ!」

「そうだそうだ!あんなビーターと一緒にいたっていいことなんかねえよ!!」

プレイヤー達は皆ティアを引き留める。

「が、ティアは鋭い目つきでプレイヤー達を睨んだ。

「貴様ら……誰のお陰でこの層がクリアできたと思ってる…あの人が臆せず戦ったからだろうが!!それなのに貴様らは……」

「ティアはそう吐き捨て再びジエネシスの方へ駆け寄った。

「キリトとアスナもそれに続く。」

—————

これでいい。これでプレイヤー達はバラバラにならずに済む。
ジェネシスは階段を登りながらそう考えた。

ジェネシスの先ほどの言動は勿論演技だ。彼はボスの知識など
持っていないし、そもそもβテスターでもない。

だが、あのまま行けばキリトが同じ行動に出ているだろう。それは
ダメだ、あつてはならない。なぜなら、キリトは皆の……

「おい、ジェネシス！」

キリトが階段を登るジェネシスを呼び止め、ジェネシスが振り返
る。

「お前……なんであんな事……！」

ジェネシスはしばらくキリトの方を見つめた後、ふつと軽く笑い、
「この世界にはな……みんなの希望が……ヒーローが必要なんだよ。
ディアベルが死んだ今、あいつらの希望はテムエだ、キリト。なのに
テムエが悪役を演じたら、この世界に希望が無くなるだろうが。んな
もんダメに決まってるんだろが。てめえはあいつらの光であり続ける」
「だが、それはお前だって！」

「俺はヒーローじゃねえ。ヒーローじゃねえし、それになるつもりも
ねえ。てめえが光なら俺は影でいい。」

俺は《^{ダーク}暗黒の英雄^{ヒーロー}》さ」

「ジェネシス……」

キリトは申し訳なさそうな顔で俯く。

「そんな顔すんなよ。てめえが気に病む必要はねえ。嫌われんのは慣
れっこだし、あんな奴らの言動なんざ知った事じゃねえ。俺は俺で好
きにやるさ。」

これつきりってわけじゃねえ。俺でよけりや、またパーティ組んで
くれ」

「ああ……済まない……いや違うな……ありがとう、ジェネシス」

そうして、二人の《黒の剣士》は硬い握手を交わし、別れた。

その横に、ティアが続いた。

「……なんで来た？」

「言ったでしょ？ 私は貴方と一緒にいるって」

「……俺と一緒にいたら、また周りから色々言われんぞ？」

「あら？それを止めてくれたのは、どこの誰だったかなー？」

そう言つて、ティアはジェネシスの手を握った。

「それに、久弥が言ったんだよ？私を守ってくれるって。なら、これからも守つてよ。私と、一緒にいてよ……？」

そして、目にうつすらと涙を浮かべながらジェネシスを見上げた。

ジェネシスはそれを見てため息をつき、

「……分かった。なら、行くぜ」

「うん！」

そして、二人は第二層の門を開け、その扉をくぐった。

七話 黒猫団

「——我ら《月夜の黒猫団》に乾杯！」
「乾杯！」

第11層のとある宿にある酒場の一角で、数名の男女が乾杯の音頭を取っていた。

「そして、命の恩人の——

ジエネシスさんとティアさんに乾杯!!」

彼らの視線は、机の角の方に立つ赤髪の男性剣士と、銀髪の女性剣士の方に向けられた。

「あ、ああ……か、乾杯」

「え？俺も？……乾杯」

二人は戸惑った表情でグラスを掲げる。

「ありがとう……本当にありがとう……！凄く、怖かったから……」
藍色の髪の少女は目に涙を浮かべながら二人に礼を言った。

彼らがここにいる理由は、数時間前に遡る。

ジエネシスとティアは、自身の剣の強化素材を集めるため11層に来ていたのだが、その帰りにゴブリンの群れに襲われている彼らを見つけ、救助したのだ。

出口まで誘導し、そのまま別れようとしたのだが、あれよあれよと言おうちにここまで連れてこられた。

「あの、失礼ですがお二人のレベルはどのくらいなんですか…?」
リーダーの少年、ケイタはおずおずと尋ねた。

「え、まあ……45、だけど」

ジエネシスは戸惑いつつも正直に自分のレベルを伝えた。
ティアも同調しうんうんと頷く。

「45?!それはすごいなあ〜!もしかして、最前線で戦っているのですか?」

驚愕の顔で少年は言った。

「……ケイタ、敬語は無しにしようぜ?」

「そうだ。俺たちは最前線で戦ってる攻略組だ」

攻略組と言うのは、デスゲームであるSAOで常に最前線で命をかけて戦い続けるハイレベルなプレイヤー集団のことだ。

「そうなん……そうか!!」

それなら、うちのギルドに……は、無理か流石に。

じゃあ、しばらくでいいからうちのギルドをレクチャーしてくれないか?」

ケイタの言葉にジエネシスとティアは面食らった表情を浮かべた。
「うちのギルド、前衛ができるのはメイス使いの《テツオ》だけでさ。こいつ、《サチ》って言うんだけど、盾持ちの片手剣士に転向して貰おうと思ってるんだ。」

けど、勝手がわからないみたいでさ……少しコーチをやってもらいたいんだ」

ケイタは隣に立つサチの頭をポンポンと叩きながら言う。

するとサチが頬を膨らませて

「何よ、人を味噌つかすみたいに」

「ん?」

「だって、いきなり前衛なんて……おっかないよ……」

グラスを両手で持って俯くサチ。

そんな彼女に対し、周りは怖がりすぎだの盾に隠れたらいいだろうだ

の揶揄する。サチは「ぶうく」と更に不機嫌になった。

「うちのギルド、リアルじゃ同じ高校のパソコン部なんだよね。あ、大丈夫！ジェネシスとティアもすぐに打ち解けるから」

周りのメンバーも力強く頷く。

ジェネシスはティアと顔を見合わせる。

「……どーする？」

「いいんじゃないか？別に私たちはギルドに入ってるわけじゃない。少しの間攻略を休んでも、問題ないだろう」

ティアの意見を聞き、ジェネシスは頷いて

「……分かった。なら、しばらくの間だがよろしく頼むわ」

それを聞いて、皆の顔が明るくなった。

—————

その翌日から、ジェネシスとティアによる《月夜の黒猫団》の強化訓練が始まった。

内容は主にサチの片手剣の訓練。彼らは今拠点にしている層から少し上の層で実戦形式でモンスター狩りを行っていた。

だがサチはモンスターを前にするところがよくに剣を振ることができずにいた。

ティアが刀でモンスターの攻撃を弾いてサチを守ると、ティアの合図でテツオのメイスでモンスターを倒させた。

その後ろで、ケイタとジェネシスは様子を眺めていた。

「……どうかな、ジェネシス？」

ケイタはおずおずと尋ねた。

ジェネシスは腕を組んだまま答えた。

「悪い、正直な感想を言わせて貰うとだな……無理、じゃねえかな、サ

チが片手剣を使うのは」

ケイタは少し残念そうな顔で眉をハの字型にした。

「ケイタ、そりゃ慣れねえ武器を無理に使わせたら誰だってあんな風になる。俺だってそうなる。」

お前の考えも理解はしたが……ケイタ、テメエはサチの意見はちゃんと聞いたのか？」

ケイタはその言葉を聞き目を見開いた。

「そうか……僕はサチに無理やり……」

「おいおい、メンバーの意見をちゃんと聞かねえとリーダーとして失格だぜ？」

ま、とりあえずは本人に聞かねえとな」

そう言つて、ジェネシスとケイタはサチの方に歩み寄つた。

「おうサチ。オメエ片手剣はやっぱ全然ダメだな」

ジェネシスの厳しい言葉に、サチは申し訳なさそうに目を伏せた。

「おい、ジェネシス！サチだって一生懸命……！」

メンバーのテツオがジェネシスに掴みかかるが、ティアがそれを制した。

「待て、気持ちはわかるぞテツオ。」

だが優しさだけでは人は成長しない。厳しいかもしれないがな……ここで優しい嘘を吐いていつまでも成長しないよりはいいだろう？」

ティアの言葉でテツオは目を伏せた。

「サチ、一つ質問に答える。」

おめえ、片手剣なんて使いてえか？」

ジェネシスはサチをじつと見据えながら尋ねた。

サチはしばらく俯いていたが、やがてケイタの方を一瞬見た後、

「……ごめん、やっぱり私には……前衛は無理だよ。」

片手剣はやっぱり慣れない……」

申し訳なさそうに俯きながら答えるサチ。

「済まない、謝るのは僕の方だ、サチ。僕は君の意見も聞かずに……」
すると、ケイタがサチの方に歩み寄って頭を下げた。

サチはそれを見て驚いた表情をしていた。

「…ま、そういうことだ。とりあえずサチ、おめえは今まで通り槍を使って戦ってみろ。慣れた武器なら、少しはまともにやれんじゃねえか？」

ジエネシスの提案で、次の訓練でサチは本来の使用武器である槍を使用することになった。

槍は本来、そのリーチの長さから後衛の部隊の人間が使う武器だが、ジエネシスは慣れた武器で戦わせることで少しでもモンスターに対する恐怖心を和らげようと考えたのだ。

すると早速、モンスターが目の前に出現した。

サチは槍を構えて早速ソードスキルを発動した。

槍ソードスキル《フェイタル・スラスト》

五連撃の突きがモンスターに放たれた。

その攻撃でHPは一気に半減する。

「……!!」

サチは自分のやった事に少々戸惑っているようだった。

他のメンバーも、サチがモンスターに臆さず攻撃した事に驚いているようだった。

ジエネシスはそれを見て満足気に笑い、

「おい、テツオ！」

「え？あ、ああ！」

テツオはすかさずメイスでとどめを刺した。

モンスターが消えた後、皆はサチの元に駆け寄り彼女を褒め称えた。

「やったじゃねえか!!」

「すげえよサチ!!」

「武器を変えるだけでこんなに変わるんだな!!」

サチはそれに対して戸惑った表情だったが、徐々に軟化して笑顔になり、

「うん…ありがとう」

と返した。

ジエネシスもサチの頭を撫で、

「やれば出来んじゃないか」

と笑顔で褒め称えた。

サチはにやけて「えへへ」と言っている。

ティアがそれを見て少しむくれていたのはまた別の話。

—————

黒猫団にジエネシスとティアがコーチに入って数週間が経った。サチはもう完全に前衛職をこなせるまでに成長し、更にギルド自体のレベルも上がり、最前線まであと数層というところまで来ていた。

その日の前半の特訓を終え、草原で休息を取っていると、ケイタが新聞を広げてつぶやいた。

「攻略組が第二十八層を突破か……すごいな」

それを聞いてジエネシスはギョツとした顔になる。

「げ……召集があつたの完全にシカトしてたわ……あーあ、こりやあの《鬼の副長》にどやされるわ……」

「鬼の副長……?」

「アスナだよ。血盟騎士団の副団長」

ケイタはそれを聞いて「ああー」と納得した声を出す。

「……なあ、僕らと攻略組との差って、一体なんだろうな?」

「情報力、だろうな。俺らは効率のいいクエストとか狩場とかそういう言の押さえてるからな」

ジエネシスの答えに、ケイタはうーんと唸り、

「そうだな……それもあると思うけど、僕は意志力の差、じゃないかと思うんだ」

「意志力?」

「ああ……」

そう言ってケイタは立ち上がり、仲間を守り、生きて全プレイヤーを助け出そう、って言う意志さ。今は守ってもらってばかりだけど、気持ちでは負けないつもりさ。

勿論、仲間の命も大事だけど……僕らはいつか、攻略組の仲間入りをしたいんだ」

「そう言いながら空を見上げる。

ジェネシスはそれを見て、

「…なら、攻略組のメンバーとして一つアドバイス。

決して焦るんじゃねえぞ。慌ててやったって、自爆して終わりだからな。まだ二十八層だ、先は長え。うさぎみてえに焦って途中で潰れるより、亀みてえに遅くとも地道に進めて行けばいい。

そして何より……俺たちが出血大サービスでてめえらに教えたんだ、簡単に死ぬんじゃないぞ?」

ジェネシスはケイタをじっと見据えながらそう言った。

ケイタは不敵な笑みで

「ああ、勿論だ」

と返す。

すると彼の背後から仲間たちがワイワイと騒ぎ立て、話に加わった。

そんな彼らを見て、ジェネシスも自然と笑顔になっていた。

「……いいギルドだね」

いつのまにかジェネシスの隣に座っていたティアがそう呟く。

ジェネシスもそれに頷き、

「……だな。あいつらが来れば、今の殺伐とした攻略組の雰囲気も変わるだろうな」

と笑顔で返した。

—————

「えーっと、みんなに報告がある」
その日の夜。

黒猫団が寝泊まりしている拠点で、皆がベッドに腰掛ける中ケイタは一人皆を見ながら立っていた。

「今回の狩りで、20万コルが貯まりましたー!!」

皆は「おおーっ!」と歓声を上げる。

「じゃあ、ギルドのホームを買うのも夢じゃないな!!」

「この調子で頑張って行こうぜ!!」

そして数時間と気藹々としたあと、皆は寝静まったのを見てジェネシスとティアは静かに宿を出た。

向かった先は、最前線の二十八層。

最近黒猫団に付きっ切りなので、攻略組と差が付けられないようにすると、自身の体が鈍らないようにするために最近はこの時間になると最前線の層に来るようにしている。

が、この日はどうやら先客がいるようだった。

ジェネシスと同じく漆黒の装備に身を包んだ少年。

《黒の剣士》ことキリトだ。

片手剣を手足のように振るい、狼型モンスターを相手している。狼の牙を抑え、そのままソードスキルで押し切り身体を両断する。

モンスターを倒し、キリトは剣を左右に振ると背中の中鞘に収めた。

「よお、相変わらず独り身なんだなキリト」

ジェネシスがそう発し、キリトはジェネシスとティアに気づく。

「ジェネシス、ティア!」

「こんばんは、キリト。こんな時間に一人でモンスター狩りか?」

ティアも笑顔で手を振り、キリトの方へ歩み寄った。

「ああ、まあな。お前らこそ、最近見ないけどどうしたんだ?」

「ちよっと野暮用でな。下の層で、ギルドのコーチをやってたんだ」

「へえ、そうなのか」

ふと、キリトが手を打って

「なあ、せっかくだし、パーティ組んでモンスター狩りをやらないか？」

と提案する。

「おっ、アリだな」

「有り寄りの有りだな」

「いや何だよ『有り寄りの有り』って…まあいいや。早速やろうぜ」

そして三人は早速モンスター狩りを始めた。

ティアが狼を追いかけてキリトとジエネシスの方に誘導し、キリトとジエネシスがタイミングを合わせてモンスターを叩き斬る。

タイミングなども完璧と言って良かった。

そうして三人で約二時間ほど狩りをしていた時だった。

ジエネシスとティアにケイタからメッセージが入った。

内容は、サチが居なくなったので探して欲しい、との事だった。

「……キリト、済まねえ。少し急用が出来ちゃったからもう行くわ」

「そうか、分かった。てか、お前らも早く最前線に戻って来てくれよ？」

お前らが居ないとしんどいんだぜ結構」

「ああ、善処する」

キリトとジエネシス・ティアはそうやり取りした後別れた。

ジエネシスとティアは黒猫団がホームにしている層に戻り、追跡スキルを使ってサチを探索した。

――

一方、サチは普段過ごしている層をただ一人当てもなく歩いていった。

「ここ最近、いや、彼女はこのゲームが始まってからずっと死の恐怖

に抗えずにいた。ひどい時は恐怖のあまりよく眠れないほどに悩まされていた。

ジエネシスとティアがこのギルドに来てから、自身もかなり強くなり少しだけその恐怖心は緩和されたのだが、それでも常に隣り合わせにある死という存在に対する怖さを克服できず、とうとう堪らなくなりギルドの皆に黙って出て来てしまった。

だが出て来たは良いものの行く当ても無い。

どこへ行ってもここはデスゲームの中。死は常に自分のすぐ側にある。

サチは途方に暮れ、街の外れの水路に入り込み、蹲るようになり込んだ。

「……よお」

突如聞き慣れた声にビクツと反応し隣を見ると、どうやら先回りしていたジエネシスが自分から少し離れた所で座っていた。

ジエネシスのすわっている所は水路に架かる橋で影になっており、彼の黒い装備と相まって直ぐに気づかなかつたのだ。

「こんな時間に、しかもこんな寒い時に一人でどこほつつき歩いてんだ？年端もねえ女の子が一人で夜の街に出歩くなって習わなかったか？」

ジエネシスは少し呆れたような目でサチを見ながら言った。

「ジエネシス…どうしてここに……？」

「てめえの足跡を追ってたら、どうもてめえこの街を当てもなくフラついてたみてえだからな。だから多分次はここに来るだろうなと踏んで、待ち構えてた」

「そっか……」

サチは目を伏せた。

「ねえ、ジエネシス……」

「んー？」

サチの声にジエネシスは少し目線をサチに向ける。

「一緒に、どっか逃げよう？」

「何から？」

「この街から……モンスターから……黒猫団のみんなから……そして……」

そして一呼吸入れ、

「ソードアート・オンラインから」

そう告げた。

ジェネシスはそれを聞いても顔色一つ変えずに鼻から息を吐き、

「……んま、それも有りかもな。別に逃げたって誰も責めねえし、寧ろそうしたくなるのが普通だ。」

けどよ……それが出来ねえから、テメエはずっと悩んでんだろ、サチ？」

ジェネシスにそう指摘され、サチは苦笑する。

「ふふっ、ジェネシスは何でもお見通しか……。そうだね、うん。その通りだよ。今のは嘘。死ぬのが怖くて怖くて、本当はそんな勇氣も無いんだ」

そうして言葉を区切ると、再び語り出す。

「ねえ、何でこの世界から出られないの？何でゲームなのに、本当に死ななきゃならないの？こんな事に、何の意味があるの？」

声を震わせながらポツリポツリと語った。

「……サチ、そいつは多分みんな思ってることさ。俺だって、あれからその事を夜の数だけ考えた……けど、どんだけ考えたって、その答えなんざ出やしねえよ。」

当然さ、結局そんな事他人の俺たちが考えたって、本人にしかその本心は分からねえんだ。ましてやこんなふざけた事しでかす茅場晶彦サイコパスの考えなんざ、凡人の俺たちに理解出来るかよ」

サチはジェネシスの言葉を黙って聞いていた。

ジェネシスはさらに続ける。

「死ぬのが怖い、って言ったな？」

実は、以前の俺はそんな事無かったんだ」

「……え？」

ジェネシスの言葉にサチは目を見開いてジェネシスの方を見た。

「俺には、現実で待つ家族がいねえんだ。小せえ頃に二人とも事故つ

て逝っちゃった。それで降はずっと一人で生きて来た。友達とか親友とか、そんなもんも持たずに……だから帰ったって、どうせ一人だ。俺が死んでも誰一人悲しまねえ……そう思ってた」

ジェネシスはそう言いながら少し苦笑して顔を上げる。

「けど、そんな俺にも……やつと大事なもんってのが出来たんだ……少し手を貸してやっただけで何を勘違いしたのか、ズカズカと人の中に入り込んで、勝手に俺の居場所ってもんを作って……けど、いつのまにかそれが当たり前になってた。不思議と悪い気はしなかったんだ。いや、寧ろ心地よさすら感じてた。あいつといると、何だろ……何故か笑う事が多かった。

だから、あいつがここに巻き込まれたのは俺の責任なんだ……俺が誘いさえしなければ、あいつまでこんなふざけたゲームに入ることなんて無かった……」

ジェネシスはそれを悔やむように握りこぶしを作って苦い顔をする。

「それで決めた。例えこの命に代えても、どんな事をしてでもあいつを現実に返す。それが俺の使命で、贖罪なんだ。

死ぬのは怖い。俺が先に死んだら、俺の決めた使命を果たせなくなるからな。けどだからと言って何もしない訳には行かねえ。だから俺は……俺たちは戦い続けてんだ。いつ死んでもおかしくねえ最前線だな」

ジェネシスの話を黙って聞いていたサチは、おずおずと尋ねる。

「あいつって……ティアのこと？」

「そうだよ。それ以外誰がいんだよ……」

ジェネシスはあつけらかなと答える。

「凄いなあ……ジェネシスは大事なものがあるから、戦えるんだ……ねえ、私にも出来るかな？大切なもの」

「……ああ。いつかきつと出来るさ」

「……そっか。そうだね／＼／＼」

サチは頬を赤らめながら呟いた。

そしてサチは気づく。いつの間にか、先程まで自分の中に巣食って

いた死の恐怖が無くなっていた事。代わりに、何か熱いものが内側から湧き出して来るのを。

――

サチを見つけて、ジエネシスとティアは就寝準備に入っていた。すると、ドアの扉を叩く音が聞こえた。

「おう、開いてんぞ」

中に入ってきたのは、寝間着姿のサチだった。

「こ、こんばんは……」

「サチ? どうしたんだよ」

「えつと……その……」

何故かサチはモジモジとしている。

「ご、ごめん……まだ少し怖くて眠れないの……だから、今晚は一緒に寝ていい?」

頬を赤らめながらそう頼み込むサチ。

「まだ怖いのか? たく世話のかかるやつだぜ……構わねえよ。寝るんなら、早くこっちに」

「ちよつと待て」

ジエネシスがサチを促そうとしたのをティアが遮った。

ティアはサチの前に立つ。

「悪いな、このベッドは二人用だ。三人だと狭くなる」

「じゃあ、今日はティアが私のベッド使っていいよ? 代わりに私がジエネシスと寝るから」

「何故私がお前のベッドで寝なければならんだ。いいからもう自分の寝室へ行け」

「えー? 良いじゃん! さつき言ったでしょ? まだ怖くて眠れないっ

て」

「それならケイタとかに頼んで寝てもらえばいいだろう」

「他のみんなはもう寝ちゃってるし、ジエネシスしか頼める人がいないの」

「だったら勝手に潜り込んで寝たら良いだろう。何故ジエネシスに拘る？」

「ティアこそ、いつつもジエネシスと一緒に寝てるじゃん！今日一日だけだからいいでしょ？」

「ダメだ！」

「何で〜?!」

不毛な言い争いを繰り返す彼女たちを見て、ジエネシスはため息をつき、

「わかった、ならこうしよう。」

俺がサチのベッドで寝るから今日はこのベッドでお前らが寝ろ」

「だが断る」

ジエネシスの提案に二人は口を揃えて拒絶した。

ジエネシスはそれを見てもう我慢の限界を迎えた。

「あーもう！俺は疲れてんだよ!!いいからさっさと寝ろオ!!いい加減にしねえとマジでぶっ飛ばすぞ!!」

「アツハイ」

「ごめんなさい」

ティアとサチも黙って従い、ジエネシスは部屋を出て行った。

寝室にはティアとサチが残され、しばしお互い沈黙していたが、

「……もう寝ようか」

「そうだね」

二人はそのままダブルベッドに背中合わせで横になった。

「……ねえ、ティア」

「……ん？」

薄暗い部屋の中、サチが背中越しに尋ねる。

「ティアってさ、ジエネシスの事、どう思ってるの？」

「どう思ってる？うくん……まあ、一言で言うならば……恩人、だ

な」

「恩人？」

サチがティアの方を少し振り向く。

「ああ。私のこの銀髪はアバターではなく、現実のものなんだ。これが原因で長らくいじめを受けていてな……」

「あ……」

サチはしまった、という顔になった。

どうやら地雷を踏んでしまったのかもしれない。

「だが、そんな私を……彼が庇ってくれてな。以降私は、どんなことがあってもあの人について行くと決めた」

「えっと……それじゃあ、ティアがこの世界に来たのも？」

「当然。あの人は自分が私を巻き込んだと責任を感じているようだが、この世界に来たのはあくまで私の意思だ。あの人の行くところならば、例え地獄だろうが極楽だろうが、どこへだって行く。あの時受けた恩を、まだ返せていないからな」

サチはそれを聞いて察した。

ジエネシスとティアはお互いを思い合っているのだと。

そしてこう思った。早くくっ付けよ、と。

だがこうも思った。まだ付き合っていないなら、私にもワンチャンあるかも、と。

だが、この考えがかなり浅はかである事を、サチはすぐに知ることになる。

—————

その後も、引き続きジエネシスとティアによる黒猫団のコーチング

は続いた。

黒猫団のレベルはもうジェネシス達が来る前に比べて格段に向上しており、団員一人一人の動きやパフォーマンスも洗練され、攻略組に居てもおかしくないほどにまで成長していた。

しかしその中でもサチの成長はジェネシス達が来る前と比べるとまるで別人のように進化しており、今となっては一人でも前衛職をこなせるまでになっていた。

そんなこんなである日、遂にギルドホームを購入できるまでの金額が貯まったため、リーダーのケイタがホームを買いに、ティアがその家具を見繕いに次の層へと向かった。

その間、もう少し金を貯めていい家具を揃えるように二十七層に行こうと言うことになり、彼らはその迷宮区へと足を踏み入れた。

そこはトラップ多発地帯で、攻略組もかなり警戒している所なのだが、メンバー全員が成長したのとジェネシスが攻略組の実力を遺憾なく発揮しトラップを見分けたのもあり何事も無く進んでいた。

するとメンバーの一人が隠し扉を発見し、中を見ると宝箱が置いてあった。

「待てーそいつはトラップだ!!」

だがジェネシスの制止も虚しくメンバーははしゃいで宝箱を開けた。

するとアラームが鳴り響き、扉が閉められ皆は中に閉じ込められた。

「げっ、トラップかよ?!」

宝箱を開けたダツカーがギョツとした顔で叫ぶ。

「今俺が言っただろうがああ!!」

ジェネシスがダツカーの頭を叫びながら引つ叩いた。

どうやらここは結晶無効化エリアらしく、転移結晶などのアイテムが使用不可になっていた。

すると壁が開き、中から無数のモンスターが湧いて出た。

「うわっ?!やべえ、なんて数だ!!」

メイス使いのテツオがそう叫ぶ。

「オラア!!」

するとジェネシスが宝箱を大剣で破壊した。

それによってモンスターが湧く扉が閉められ、モンスターの出現が止まる。

黒猫団のメンバー達は背中合わせに立つ。

「くそ……これ何体くらいいるんだ?」

ランス使いのササマルが舌打ちして呟く。

「ひいふうみい……くくくやめだ、眠っちまいそうだ」

ジェネシスがその数を数えようとしたがあまりの多さに諦めた。

「ジェネシス……どうする?」

サチが隣に立つジェネシスの方を見て尋ねる。

「……よし、いいかおめえら?絶対仲間から離れんじやねえぞ?落ち着いて、背中仲間任せて、てめえは目の前の敵だけを潰せ。てめえが倒れねえ限り、誰も倒れやしねえ」

ジェネシスの指示を聞き、皆は顔を引き締めて武器を構える。

モンスターはジリジリと彼らに近づいてくる。

「決して怖がるな、恐れるな。何も考えずに、ただ眼前の敵を斬り伏せろ。大丈夫だ。てめえはもう十分強い。こんなモンスター如きに簡単にやられる訳はねえ。それは仲間もそうだ。今までやってきた事を思い出せ。」

俺を信じろ……仲間を信じろ……そして何より、自分を信じて……一斉に斬りかかれ!!」

ジェネシスの号令で、皆は同時に攻撃を始めた。

ジェネシスの言う通りに、背中仲間任せて、ただ目の前の敵に集中して攻撃する。

だが攻略組であるジェネシスは兎も角、やはりそれ以外のメンバーはやや苦戦しており、ダメージも徐々に蓄積して行く。しかも回復する暇もろくに与えられず、休む間も無くモンスターが迫ってくるため、緊張感もあって疲労も蓄積していき、集中も落ちてくる。

ジェネシスはそれを察していたため、両手剣の特性を生かしてとにかく範囲技を使いモンスターを一掃して行く。サチも一心不乱に槍

を振り続け、とにかく生き残る事を最優先に考えた。

だが、黒猫団のメンバーのHPがが遂にレッドゾーンに達し、いよいよ絶対絶命のピンチを迎えた。

「テメエら、伏せろ!!」

ジェネシスは意を決して叫び、メンバーは全員それに従って地面に伏せる。

それを確認し、ジェネシスはソードスキル《サイクロン》を発動し一気にモンスターを消しとばした。

しかしそれによつてジェネシスは僅かな硬直に縛られ、その間にモンスターから一斉に反撃を受ける。

「ジェネシス!!」

サチの悲痛な叫びが部屋に木霊した。

見ると、ジェネシスのHPもとうとうレッドゾーンに達していた。それでもモンスターはジェネシスに群がってくる。先程の範囲攻撃で、ジェネシスはモンスター達のヘイトを一気に自分に集めたのだ。いよいよジェネシスは死を覚悟するが、それでも生き残るため剣を振り続けた。自分の果たすべき責任を守る為に。

しかしその努力も虚しく、ジェネシスのHPは遂に数ドットまで下がってしまった。

ここまでか……そう思い、ジェネシスは目を閉じる。

「ジェネシス……っ!! (だれか……誰か助けて!! ジェネシスが死んじやう!!)」

サチは槍を振り、ジェネシスに群がっているモンスターを引き剥がそうとするが、それでも間に合わない。

その時だった。

部屋の扉が一刀両断され、白い閃光が目の前を走り、モンスターを一掃した。

柵引く白いマント、ふわりと揺れる銀髪。

右手に持つのは、鋭く銀色に輝く刀。

「やれやれ……こんなところで死にかけるなんて、やはり鈍っているんじゃないか？」

紛う事なく、ティアだった。

「ティア……」

サチは両目から涙を流し、彼女の名を口にした。

「お前たちはジエネシスを運んでくれ」

ティアはテツオ達を呼び、ジエネシスを支えて部屋を後にさせた。

モンスターが逃すまいと彼らを追うが、ティアがそれを斬り伏せ足止めする。

「さてお前たち……私のジエネシスによくもやってくれたな？この礼はしっかりと返させてもらおう……倍返しでな」

ティアは刀を構えて威圧感のある声でモンスターたちに言った。

「ティア……」

一人部屋に残っているサチはティアを見つめながらそう呟く。

「よく見ておけサチ。あの人の隣に立つ者の力をな！」

そして、ティアは飛び出した。

だが、ティアの動きが速すぎて、サチにはそれを目で追うことが出来なかった。

あんな動きをするティアは今まで見たことが無い。

次元が違いすぎる。サチは素直にそう感じた。

残り数十体はいるはずなのだが、それはみるみるうちに減少して行く。

ティアの無双により、残りのモンスターは全て掃討された。

部屋のだ真ん中で、刀を左右に振り鞘に収めると、ティアは不敵な笑みでサチの方に振り向く。

「ヒロインの座は、そう簡単に譲らんよ？」

—————

その後、ジエネシスは結晶アイテムにより回復して事なきを得た。その後、ギルドホームの購入から戻ったケイタに一連の出来事を説明すると、ケイタは彼らを叱ったものの、涙を流して無事を喜んだ。そして、ティアがあの場合に駆けつけられた理由だが、彼女は家具の購入が意外に早く済んだ為、彼らを追跡スキルで追っていたところ、トラップに引っかけたのを見つけ急いでここへやって来たらしい。彼女が最後に見せた無双劇は、黒猫団の皆に攻略組の実力を思い知らせるには十分すぎるインパクトを与えた。

「本当に、行っちゃうのか……?」

そして新しく購入したギルドホームの前で、ジエネシス達と黒猫団は向き合って立っていた。

ジエネシス達に次の層のボス戦に参加するよう召集がかかったのだ。

「まあな。もうこれ以上攻略をサボるわけにはいかねえんだわ」

ジエネシスは申し訳なきように頭を掻きながら言う。

「そうか……なら、仕方ないな」

ケイタは残念そうに目を伏せた。

「おいおい、何そんな顔してんだよ。これつきりじゃねえよ。それに、テメエらが攻略組に来たら毎日会えるさ」

「そうそう。お前達なら、直ぐに追いつける」

ジエネシスの言葉にティアも同調して頷く。

「ああ、そうだな。きつと追いついてみせる。だから待っていてくれ」

「おう。来いよ、高みへ」

ジエネシスとケイタは固く握手を交わした。

「ねえジエネシス、ティア……」

すると、サチが彼らの方へ歩み寄り、そして頭を下げた。

「ありがとう。私に、剣の使い方を、戦い方を、勇気を、そして…大切なものを、教えてくれて」

ジエネシスはふっと軽く笑い、

「礼はいらねえよ。その代わり、ぜってえに忘れんなよ、俺たちが教えた事」

「うん！」

ジェネシスとサチも握手を交わす。

そしてサチはティアの方を見遣る。

「ティア……私……私ね……」

深呼吸し、そして意を決したように目を開き、

「私、負けないから!!」

と告げた。

一瞬面食らった顔をしていたティアだが、すぐに不敵な笑みに変え、

「……いいだろう。受けて立とう」

と返す。

その後、彼らは転移門に立ち、笑顔で手を振りながら最前線へと戻っていった。

黒猫団は各々ホームへ入って行く中、サチはメインメニューを操作し、とあるアイテムを見た。

それは『記録結晶』。音声や写真を文字通り記録出来るアイテムだが、サチはこれに自身の遺言を入れてあった。

クリスマス頃にジェネシス宛に届くように。

だがサチは、そのアイテムを消去した。もう必要ないから。もう、死ぬ事など無いから。

「ジェネシス、待ってて……いつかきつと、振り向かせてみせるから……!」

サチが見つけた大切なもの。それは、ジェネシスに対する『恋心』だ。これがある限り、サチは絶対に死ぬ事など無い。

サチは決意の表情とともに彼らのいるであろう上の層を見上げてサムズアップをし、ホームへと入って行った。

—————

その夜、最前線のとある宿。

ジェネシスとティアは一つのベッドに背中合わせで寝ていた。

「なあ、ティア……」

「ん……？」

ふと、ジェネシスが口を開いた。

「ありがとな、助けてくれてよ」

ジェネシスは今日のこの礼を述べた。

「ううん、気にしないで……って言ったら嘘になるね」

ティアは後ろからジェネシスに抱きついた。

「本当に……本当に、心配したんだから……凄く怖かったんだから……」

「ああ、悪い。埋め合わせはなんでもする」

「なんでも？ふふっそれじゃあ……」

私と付き合っつてよ」

「…………へ？」

ティアの言葉にジェネシスは耳を疑った。

「だからあくー！私と付き合ってよ…久弥」

「えっと、その…………付き合うって言うのは、買い物とかじゃなくて…………？」

ジェネシスは戸惑いながら尋ねる。

「もう…この鈍ちん!!とーへんぼく!!」

そうじゃなくて…………こつち、向いて？」

ジェネシスは言われたままにティアの方を向く。

ちゅっ

二つの唇が重なる音が、寝室に響く。

「…………こう言う、事だよ…………／／／」

ティアは頬を真っ赤にしながら言った。

ジェネシスは一瞬放心状態だったが、

「あ、あー…………えっと、その、だな…………わかった。こんな俺で良ければ…………これからも、よろしく頼むわ」

「っ、うん!!」

この日、後に《黒の剣士》と《白夜叉》と呼ばれる最強カップルが誕生したのだった。

八話 黒の剣士・白夜叉

三十五層 迷いの森

ここで、とあるパーティがアイテム分配している時にトラブルが発生していた。

「あんたはそのトカゲが回復してくれるから回復結晶なんていらなくてしょ?」

赤髪の槍使いの女性プレイヤーは前髪を弄りながらそう言っている。

その相手は、頭に子竜を乗せた、まだ年端もない小さなツインテールの少女だ。

「ロザリアさんだつて、ろくに前衛に出ないのに回復アイテムなんて必要なんですか?!」

ロザリア、と呼ばれた女性は尚も髪を弄りながら

「勿論よ。お子ちゃまアイドルのシリカちゃんみたいに男が回復してくれるわけじゃないもの」

そう言った。

その言葉でシリカは益々機嫌を悪くする。

「分かりました」

シリカは意を決してロザリアを睨み付け、

「アイテムなんていりません!もう貴女とは絶対に組まない!私をほしいうって言うパーティは幾らでもいるんですからね!!」

そう言つてシリカは背を向けて歩き出した。

パーティの男性たちが止める声が響くが、彼女は気にすることなく森の中へ歩いて行った。

—————

パーティと別れたシリカは、一人森の中を歩いていた。

「迷いの森という名が付いている通り、そこは地図が無ければまともに進めないマップだ。」

だがそんな森の中で、シリカは運悪くこのフィールドの中で手強いモンスターの種類に入る『ドラंकエイプ』というゴリラ型のモンスターとエンカウントしてしまったのだ。しかもその数は三体。

ここで逃げていれば、あんな悲劇は起こらなかっただろう。しかしシリカは、ついさつきもこのモンスターと戦いしかも倒しているのです。大丈夫だと考えた。とは言え、それはあくまでパーティで戦っていたからであって、幾ら相棒の子竜『ピナ』がいるからと言ってこのモンスター三体を一人で相手するなど無謀にも等しかった。

最初こそソードスキルと持ち前のAGIを生かして善戦していたシリカだったが、ドラंकエイプは回復薬を取り出しシリカが削ったHPを全快してしまったのだ。

それに加え、逆にシリカの回復アイテムは完全に底を尽きていた。ピナが回復してくれるものの、それでは回復アイテムには遠く及ばない。

回復アイテムがない事に気付いたシリカの一瞬の動揺を突き、ゴリラは棍棒をシリカに振り下ろした。

「きゃっ?!」

シリカは大木に激突し、HPは一気にレッドゾーンにまで減少した。

武器も落としてしまい絶体絶命の危機。だがゴリラはシリカにとどめを刺そうと棍棒を振り下ろした。

『きゅるるっ!!』

だがその攻撃を咄嗟に飛び出したピナが庇った。

ピナの小さな体は吹き飛ばされ、地面に落下する。

「ピナ!!」

シリカは慌ててピナに駆け寄った。

ピナのHPは一気に減少し、ゼロとなってピナの身体は消滅した。

シリカはその光景にただ呆然と涙を流して座り込むだけだった。そんな彼女に、ドラंकエイプは今度こそとどめを刺そうと棍棒を振

り上げる。

シリカはそれを見て逃げることもせず、ただそれが振り下ろされるのを待った。

だが突如、ドラंकエイプは動きを停止し、その身体が少しブレた後爆散した。

そして、四散したドラंकエイプの破片が光を帯びて舞う中で、現れたのは黒と赤の装備に身を包んだ赤髪の男性プレイヤーだった。

黄色い瞳をこちらに向けながら、彼は大剣を左右に振って背中の中鞘に収めた。

シリカは目の前に落ちた羽——ピナが消えた直後に落ちたもの——を拾い上げる。

「ピナ……あたしを……あたしを独りにしないでよお……うあああ——……」

シリカはその羽を胸に抱えて泣き噓った。

「おめえさん、その羽は……？」

赤髪の男はシリカに話しかけた。

「ううっ……ピナです……あたしの……あたしの大事な……っ……！」

シリカは泣きながらこの羽と相棒の子竜のことを話した。

「あー、そうか。おめえピーストテイマーって奴か。」

そいつは済まなかったな、大事な友達、助けてやれなくてよ……」

男はそれを聞いて申し訳なきように言いながら歩み寄る。

「いえ……いいんです、あたしが馬鹿だったんです……一人でこの森を抜けようとしたから……ありがとうございます、助けてくれて……」

シリカは首を振り、男の方に振り向いて礼を言った。

すると男は「あっ」と何かを思い出したように手を打ってしやがみ込み、

「因みに、その羽アイテム名とかあるか？」

シリカはそれを言われて羽を確認する。

『『ピナの心』……ううっ……』

シリカはそれを見て再び涙が目に溜まった。

「よーしよし落ち着け、まだ泣くのは早いぜ。

『心』ってついた名前アイテムがあれば、おめえの友達復活できるぜ」

シリカは目を見開いて男の方を見る。

「えーつとな……確か45層にある『思い出の丘』つつうフィールドダンジョンの天辺に咲く花を取れば、使い魔を蘇生する事が出来るらしいぜ」

シリカは歓喜の表情を浮かべるが、とある事を思い出し再び表情が沈んだ。

47層。自分のレベルは44。安全マージンどころか階層数にも達していない。

「でも、情報だけでも有難いです！頑張ってレベリングすればいつかは……」

「いいや、残念ながら蘇生できるのは死んでから三日以内だ」

シリカの言葉を男は首を振って否定した。

途方に暮れ再び涙目になるシリカ。

すると男は立ち上がり、メニュー欄を操作する。

直後目の前にトレード画面が表示され、シリカが見たこともないような高レベルの装備品が出た。

「使え。こいつらがあれば5レベルは底上げできるはずだ。後はまあ、俺とパートナーの奴が行けば大丈夫だろ」

シリカは立ち上がって尋ねた。

「どうして……そこまでして下さるんですか？」

「あん？何でって……あれだ、人助けに理由なんざ要らねーって言うだろ？」

シリカはそれを聞いてキョトンとしていたが、吹き出してしまった。

「……何がおかしいんだよ？」

男はジト目でシリカを見ながら言う。

「あはは……言え、なんか変な人だなあ、って」

「人助けして変人呼ばわりされたのは初めてだぜ……」

男は苦い顔で顔を背けた。

「あはは、ごめんなさい……あ、これじゃ全然足りないかもしれないですけど……」

シリカはトレード画面から所持金を幾らか下ろし渡そうとするが、男は画面の??ボタンを押して拒否した。

「バツカ、要らねえよ。どうせ使い道のなかったアイテムだし、おめえみたいな幼女から金たかるほど人間落ちちやいねえよ」

「そ、そうですか……何から何まですみません、本当に」

シリカはぺこりと頭を下げた。

「あ、あたし『シリカ』って言います」

「おう、俺は『ジエネシス』だ。よろしくな」

シリカとジエネシスは握手を交わした。

「何が『よろしく』だ馬鹿者」

突如、シリカではない女性の声が響き、その直後にジエネシスの頭を何かが蹴り飛ばした。

「ゲッフアツ?!」

悲鳴を上げてジエネシスは倒れ込んだ。

シリカが見ると、ジエネシスが立っていた場所の後ろに、銀髪で白い装備に身を包んだ女性プレイヤーが立っていた。

女性は戸惑っているシリカを他所に、倒れ込んだジエネシスの胸ぐらを掴んで起き上がらせる。

「全く、人が見てない間にお前は何をナンパしてるんだ。しかもこんな幼女を相手に。ロリコン認定するぞ」

「俺はロリコンでもフェミニストでもねえよバカ。後ナンパじゃねえ、ちゃんとした人助けだバーロー」

ジェネシスは口を尖らせながら反論した。

「なんか、さつきからすごく失礼な事を言われてる気が……」

シリカは思わずそう零した。

「気のせいだシリカ。気にしちゃダメだぞ？」

おい、おめえも早くこいつと自己紹介くれえしろ。シリカがビビりまくってんぞ?」

「別にビビってなんかないですよ!」

ティアはジェネシスを引つ叩いて黙らせると、立ち上がって柔和な笑顔で

「済まない、見苦しいところを見せたな。」

私は『ティア』、ジェネシスのパートナーだ」

そう言っつて右手を差し出す。

「あ、はい!あたしは『シリカ』です。ジェネシスさんには、先ほど助けてもらっつて……」

「そうらしいな。このバカが失礼な事をしなかつたか?」

「いえ!全くそんな事は無いですよ!」

「そうか、ならば良い。それで、この後はどうするんだ?」

「あー、とりあえず街に戻るか」

ジェネシスの一言で二人は賛成し、一先ずこの層の街に戻った。

—————

三十五層 ミーシエ

シリカが普段寝泊まりしている宿までジェネシスとティアが送り届ける途中、何人もの男性に声を掛けられた。

内容はどれもうちのパーティーに入らないか、と言うものだったが、シリカはジエネシスとティア達と組む事を理由に断った。

男性達は皆ジエネシスにあからさまに嫉妬の視線を向ける。シリカは勿論、とある人全てが二度見するほどの美貌を持つティアの二人とパーティーを組んでいるジエネシスが羨ましいのだ。

だがジエネシスはその嫉妬の視線を向ける男達を一瞥するだけで下がらせた。ジエネシスに睨まれた男達は皆情けなくも尻尾を巻いて逃げていく。

「…人気者だな？シリカ」

逃げていく男達を見つめながらティアは苦笑しながら尋ねる。

「違いますよ。マスコット代わりに入って欲しいだけなんです、みんなは」

SAOではあまり見かけない女性プレイヤーであり、可憐な見た目、しかもフェザーリドラをタイムしたプレイヤーともなれば目立たない筈もない。

「なのに、『竜使いのシリカ』なんて呼ばれて、いい気になって……」
そう言いながら、自分が惨めになり涙目になるシリカ。

いつもはあつた頭を感じる重さは今は無い。

あの子竜が死んだのは自分の不甲斐なさが原因だと、シリカは自分を責めた。

「おいこら、そんな自分を責めるな」

だがそんなシリカを、ジエネシスがシリカの頭をわしやわしやと撫でながら宥めた。

「心配すんな。ピナは絶対に生き返るさ。だから堂々と前向いてろ。主人のしよげた姿なんざ、使い魔は見たくねえだろうぜ？」

「その通り。私たちもついてる。だから安心してくれ」

ジエネシスとティアが左右から優しく語りかけ、シリカも安心したような笑顔になる。

「そう言えば、お二人のホームって……」

ふとその事が疑問になりシリカは尋ねた。

「あー、いつもはもう少し上なんだが……面倒くせえし今日はここで

いいか」

「ああ、私もそれで構わない」

ティアもそれに賛成した。

シリカはそれを聞いて満面の笑みを浮かべ

「じゃあ、早速行きましょう！このチーズケーキ、凄く美味しいんです！」

「そうか、それは楽しみだな」

ティアも微笑みながら返した。

「あらあ？シリカじゃない」

ふと聞き覚えのある声がシリカの耳に届いた。

振り向くと、そこには今自分が最も会いたくない人物がいた。

「ロザリアさん……」

シリカは思わず顔をそらした。

「無事に森を抜けられたのねえ？良かったじゃない」

ロザリアは嫌味を含んだ声で言いながらシリカに近づいてくる。

「あら？あのトカゲどうしたのよ？……もしかしてえ」

さらに厭らしい笑顔を浮かべながらシリカの顔を覗き込んでくる。

「ピナは死にました……でも絶対に生き返らせます！」

シリカはロザリアの顔を見据えながらきつぱりとそう告げた。

「へえ、なら《思い出の丘》に行くのね？でもあんたのレベルで突破出来るのおく？」

そう言い返してきたロザリアに反論できずシリカは口籠る。

「余計なお世話なんだよババアこのヤロー」

するとジェネシスがシリカを庇うようにに出て、ロザリアを威圧感ある目で見下ろしながら言った。

「テメエの心配なんざ無用だ。あそこはそこまで難易度の高いダンジョンじゃねえしな」

ロザリアは少しジェネシスに圧倒されていたが、すぐにまた陰険な笑みを浮かべ

「ふうくん？まあ見た所は強そうじゃない。まあでも、強そうなのは見た目だけで、そこら辺で威張り散らしてるだけのただの小物でしょ

？チンピラと変わんないじゃない。どうせ、そのシリカちゃんに体でたらし込まれたクチなんじゃないの？」

次々に出てくる暴言にジェネシスは顔色ひとつ変えずに黙って聞いている。そして軽く「へっ」と笑い、言葉を続けようとしたが……

「おい」

突如ティアの声が響き、次の瞬間ロザリアは宙を舞っていた。

空中を一回転し、地面にへたり込む形で着地する。

そんな彼女を、ティアは冷徹な目で見下ろした。

「ぐっ……な、何を……?!」

ロザリアは怯えて震えながらティアを見上げた。

「…言動には気をつけろ。何人たりとも、この人に対する侮言を放つ者は私が許さん。憶えておけ」

完全に怒り心頭のティアをジェネシスが諫めた。

「落ち着けティア。嬉しいけど周りの視線が痛い」

ティアはゆつくりと周りを見渡すと、そのままジェネシスの方へと歩く。

「…シリカ、行こうぜ？」

ジェネシスがそう促し、シリカも後に続く。

ロザリアは未だに立ち上がれずにいた。

—————

三人はシリカの寝泊まりしている宿屋につき、夕食をとった。

三人は各々これまでの話や、少しだけ自分の現実での話で盛り上がり、和気藹々とした雰囲気ですらで晚餐を楽しんだ。

「……どうして、あんな意地悪言うのかな？」

ふと、シリカは先ほどのロザリアの事が頭をよぎり、眩く。

「……どんなゲームにも悪人はいるさ。善人だけがゲームをやってるわけじゃねえからな。中には進んで悪事を働く奴とか、悪を演じる奴もいる。ここだって例外じゃねえ」

シリカは顔を上げてジェネシスの方を見た。

ジェネシスはどこか虚空を見つめている。

「だが、この世界で悪事を働く奴は全員現実でも性根が腐った奴だと俺は思ってる。この世界に法律はねえが、それでも許されることじゃあねえ。茅場のヤローが言ってた通りだ。ここはゲームであってゲームじゃねえ。」

なのにここじゃ、進んで人殺しをしやがるバカがいやがる」

「そんな、人殺しなんて……」

シリカは息を呑みそう返した。

デスゲームであるこの世界でまさか人殺しをするプレイヤーがいるなど思いもしていなかった。

「因みにだが……今俺たちのカーソルはグリーンになってるだろ？だが、もし圏外で犯罪行為を行った場合、カーソルはオレンジになるらしい。そしてそれ以上にやべえのがレッド。こいつらは自分から進んで人殺しを楽しむ狂った奴らだ」

シリカは驚きで何も言えなくなっていた。

「この世界で死んだら、マジで死ぬんだ。なのにどいつもこいつも、命なんだと思つてやがんだ……」

ジェネシスは吐き捨てるようにそう零した。

「……でも、ジェネシスさんはいい人です！だってあたしを助けてくれたから！それにティアさんだって!!」

シリカは身を乗り出してそう言った。

一瞬面食らった表情をしていた二人だったが、

「……へっ、そうかよ」

「ありがとうな、シリカ」

優しい笑顔でそう言った。

早々に夕食を済ませて、三人は宿部屋に入る。

偶然にもジェネシス・ティアとシリカの部屋は隣で、お互いおやすみと言い合って部屋に入る。

部屋に入った後、シリカはラフな部屋着に着替えベッドに入る。

ふと、シリカは左隣の壁を見た。そこはジェネシス達の部屋だ。この宿屋は基本的に一人部屋。つまりベッドもシングルで一人用だ。

まさか、一人用ベッドに二人で……

余計な事を考えないようにシリカはブンブンと頭を振った。

「(もつとお話しがしたいな……)」

シリカはそう思い立つと、部屋を出てジェネシス達の部屋をノックした。

中から「空いてんぞ」と声がし、シリカはドアを開けた。

ドアを開けると、先程までの黒と赤の装備からラフな黒Tシャツとスウェットズボンに着替えたジェネシスと、青いキャミソール姿のティアが出迎えた。

「あ、すみませんこんな時間に……明日のことを聞きたいと思ってます」

シリカは咄嗟にそう言い訳を考え、そう伝えた。

ジェネシスとはあるアイテムを取り出すとテーブルに置く。

「あの……これは？」

見慣れないアイテムを見てシリカは首を傾げる。

「ミラージュ……コロイド、だっけ？」

「《ミラージュ・スフィア》だ。アインクラッドの各層をホログラムで

展開してくれる」

アイテム名をど忘れしたジエネシスの代わりにティアが説明をした。

ジエネシスは47層を表示し順番に話していく。

「えーつとな……ここが主街区な。んで、この道をまっすぐ南に降りたら……」

そこまで話すとジエネシスはふとドアを見た。

ティアも険しい顔でシリカの前に立つ。

そして、勢いよく駆け出し、ドアを思い切り開けた。

外には誰もいなかったが、何者かが走り去っていく音が響いた。

「ジエネシスさん、一体……？」

何が起きたのか分からずシリカは疑問符を浮かべている。

「……ちっ、どうやら聞かれてたみてえだな」

舌打ちし、苦い表情で廊下を見るジエネシス。

「で、でもドアをノックしないと中の音は聞こえないんじや……」

「聞き耳スキルを高めている場合は別だ。まあ、そんなものを上げるやつなど、滅多にいないがな……」

シリカの疑問にティアが顎に手を当てながら答えた。

「じゃあ、一体誰が……？」

シリカは不安げな表情でドアを見つめる。

「……ま、それも明日になりや分かることだ。とりあえずシリカ、てめえは一応今夜はこの部屋で休め。何が起きるか、わかんねえからな」

シリカは黙って頷いた。

その後、ジエネシスとティアとの三人でまた談笑を交わした後、シリカは先に眠った。

「……すっかり寝ちゃったね」

ティアはベッドで眠るシリカを慈しむような目で見ながら呟く。

「色々あったみてえだしな……しっかし、明日は荒れんだろうなあ」

ジエネシスは椅子にもたれながらそう述べた。

そして、視線をティアの方に向け

「…ティア。俺を大事にしてくれんのはありがたいが、明日は抑えてくれよ?」

今日のロザリアに対するティアの行動から、明日もしかしたらティアがまた同じようなことをするかもしれないことをジエネシスは懸命に忠告した。

「……うん、善処する。でも、無理。ジエネシスが……久弥があんな風に馬鹿にされるのは、本当に頭にくるし」

ティアは目を伏せつつも、ロザリアがジエネシスに放った言動を思い出しました怒りが湧き出したのか握りこぶしを作つて固く握り締めている。

ジエネシスはそのような彼女を見てため息をつき、ティアの握りこぶしに右手を添えた。

「馬ア鹿野郎。おめえがあんなクソどもにわざわざ怒る必要はねえよ。そんな価値も連中にはねえ。俺なら大丈夫だ、心配すんな」

「久弥……」

ティアは心配そうな目でジエネシスを見つめていたが、ふつと安心したように笑顔になり、ティアは椅子から降りて床に正座した。

「ねえ、久弥。そろそろ休もう?」

「ん?ああ、そうだな。そうだが……なんで正座なんかしてんだよ?」

ジエネシスはティアが何故正座をしたのか分からないようなので、ティアは自分の膝の上を指差す。

「……え?お前マジで言つてんの?」

「マジもマジ。大マジだよ?」

ジエネシスはティアが何をしようとしているのかを察したようだ。

「いやいや、じゃあおめえはどうやって休むんだよ?」

「私はこのままでも寝られるよ。いいから早く来て?」

ジエネシスはそう言われて断るわけにもいかず、言われた通りにティアの膝に頭を預けた。

「おお……」

ティアの膝……否、後ろ頭に感じる太ももの感触に言いようもない

感嘆の声を上げた。

「寝心地はどう?」

「最高だな。これ以上寝心地の良い枕を俺は知らねえ」

「ふふっ、それは良かった」

ティアは満足気に笑みを浮かべながら、ジェネシスの頭をゆつくりと撫でる。

その感触の心地よさに、ジェネシスは徐々に眠りについた。

—————

四十七層 フロリア

次の日、ジェネシス一行はいよいよピナの素性アイテムを手に入れるため、目的の層に来ていた。

「わあ……夢の国みたい!」

シリカは一面に広がる花畑を見て目を輝かせた。

「ここは別名 ッフラワーガーデン」って言われていて、フロア全体が花畑なんだ」

ティアの説明を受け、シリカは辺りを見渡した。

周りには男女のプレイヤーばかりなのに気づき、一気に顔が赤くなる。

「おい、大丈夫か?」

ジェネシスがシリカの肩をトントンと叩く。

「え、あっはい!大丈夫ですよ!!」

「そか。んじゃ行くぞー」

気の無い声で颯爽と行くジェネシスと、それに寄り添うように隣で歩くティアを見て、シリカはふと思った。

（あの二人って、お付き合っているのかな……?）

シリカにはあの二人がパートナーにしては仲が良すぎるように見

「おいジェネシス……見たらどうなるか分かってるよな？」
笑っているが目が笑ってない表情でジェネシスの耳元に囁くテイア。

その後シリカの方に振り向き、いつも通りの顔で

「落ち着け！そいつ弱いからすぐに倒せる！」

「は、はいっ！この……いい加減に、しろお!!」

シリカはツタを切ってそのまま落下の速度に乗せてソードスキル『ラビット・バイト』でモンスターのHPを消しとばし消滅させた。

着地したシリカは赤面した顔でジェネシスを見ながら

「見ました……?」

と尋ねる。

「いんや、見てない」

ジェネシスは未だシリカに背中を向けたまま答える。

「ああ、見たらお前の首が飛んでいるからな?」

テイアがそう言いながら刀を腰の鞘に収める。

—————

その後も幾らか戦闘をこなし、シリカのレベルも着々と上がっていく中、遂に目的地に到着した。

「ここに……蘇生アイテムが?」

「ああそうだ。多分あれだな」

そう言つてジェネシスが指差した先には、台座のような岩があった。

シリカは走つてその台に行くと、一輪の花が咲いていた。

手に取つてみるとアイテム名が表示された。

《ブネウマの花》

これが今回の目的物。この花があれば使い魔を蘇生することができる。

シリカはその花を胸に抱きしめるように抱える。

「良かったな、シリカ」

ティアも笑顔でシリカの頭を撫でる。

「けど、ここじゃ手強いモンスターも多いからな。生き返らすのは、街に戻ってからにしようぜ」

「…はい！」

シリカは喜びの涙を拭ってそう答えた。

帰り道は幸いモンスターとエンカウトすることは無かった。

シリカは再び相棒の子竜と旅ができることへの嬉しさで終始有頂天だ。

そして、もうすぐフィールドの出口である橋に差し掛かったところで、ジェネシスが険しい顔でシリカを制した。

「ジェネシスさん？」

シリカは目を丸くしてジェネシスを見上げるが、当のジェネシスは未だ前を睨んでいる。

ティアもシリカの前に出た。

「…おい、最初から気づいてんだよ。さっさと出てこいコラ」

威圧感のある声でそう告げた直後、少し先の木の陰から女性プレイヤーが現れた。

「ろ、ロザリアさん?!」

シリカは驚き声を上げた。

彼女は三十五層にいたプレイヤーだったのだ。

「…あたしのハイディングを見破るなんて、随分高い索敵能力をお持ちのようなねえ剣士さん達」

ロザリアはそう言いながらシリカに視線を向ける。

「その様子だと、首尾よく『ブネウマの花』をゲットできたみたいね、おめでどう…じゃ、早速その花を渡して頂戴」

一瞬の微笑みの後、醜悪な笑みに変えそう告げた。

「な、何言ってるんですか?!」

シリカは信じられない、という表情で叫ぶ。

「ああまったくだ。こんな小せえ女の子からまたたかるつもりか？どこまでも腐り切ってるみてえだなテメエの性分は、ええ？……オレンジギルド《タイタンズハント》のリーダーさんよお？」

ジェネシスは数歩前に踏み出しながらそう言つてのけた。

「……へえ？」

対するロザリアからは醜悪な笑みが消えた。

「オレンジ……？でも、ロザリアさんはグリーン……」

未だ理解できずにいるシリカに、ティアがその手口を伝えた。

「オレンジギルドといっても、全員がそうなわけじゃない……グリーン・のメンバーが獲物を見繕い、オレンジのメンバーが待つポイントまで誘い出すのさ」

「んで、今回のターゲットはどうやらおめえだつたみてえだぜシリカ。タベ俺たちの会話を盗み聞きしたのも、奴の仲間つてわけだしな」

ティアの説明にジェネシスが補足を加える。

「じゃ、じゃあ……この二週間同じパーティにいたのは……！」

「そうよお。あのパーティの戦力を分析して、お金が貯まるのを待つたの」

そう言つてロザリアは舌舐めずりをする。

その光景にシリカの背中に悪寒が走つた。

「一番楽しみだった獲物のあんたが抜けてどうしようかと思つてたけど、なんかレアアイテムを取りに行くつて言うじゃない？」

でも、そこまでわかつてその子に付き合うなんて、あんた達馬鹿あ〜？」

嘲笑しながら言うが、ジェネシスはまったく意に介さない。

「馬鹿なのはそつちだ」

「私たちも、貴様らを探していたのさ」

ジェネシスとティアはそう言い切つた。

「……どう言う意味かしら？」

ロザリアは疑問符を浮かべ尋ねる。

「貴様、十日前に『シルバーフラグス』というギルドを襲撃したな？メ

ンバー四人が殺され、リーダーだけが脱出した……
険しい顔でティアは言う。

「……ああ、あの貧乏な連中ね」

ロザリアは興味なさげに前髪を弄りながら答える。

「リーダーだった男は、毎日最前線の転移門前で仇討ちしてくれる奴を探してたんだ。あいつは依頼を受けた俺たちに、テメエらを殺すんじゃないく牢獄にぶち込んでくれと頼んだぜ……てめえあいつの気持ちがわかるか？」

僅かに怒気を孕んだ声でそう訊くが、

「分かんないわよ。マジになっちゃってバカみたい。ここで人を殺したってそいつが死ぬ証拠なんて無いし。」

それよりあんた達自分の心配をした方がいいんじゃない？」

そう言って指を鳴らす。

直後、ロザリアの周りの木の陰から次々とプレイヤーが武器を構えて現れた。その数は七人。しかも揃ってカーソルはオレンジだ。

「なっ……人数が多すぎます！脱出しないと！」

慌てるシリカだが、

「大丈夫大丈夫、心配すんな」

呑気にそう言ってジェネシスはゆっくりと歩き出す。

「ああ、シリカは私の後ろにいてくれ」

そう言ってティアもシリカを自身の後ろに下がらせる。

「で、でも……ティアさん！ジェネシスさんも!!」

シリカがそう叫んだ直後。

「え？ティア……ジェネシス……？」

オレンジの一人が彼らの名を呟き、二人を見比べ後ずさる。

「黒と赤の装備に身の丈ほどの大剣を背負った男性プレイヤー……刀装備に銀髪、白い装備……ま、まさか……『黒の剣士』と『白夜叉』!!」

そして彼は青ざめた顔でロザリアに

「やばいですよロザリアさん!!こいつら、最前線にコンビで挑んでるビーターとビギナーの……攻略組だ!!」

「攻略組……ティアさんとジェネシスさんが……？」

そこでシリカはとある噂を思い出した。

デスゲームであるこのSAOで、常に命をかけて最前線に挑み続けるエリートプレイヤー集団のことを、人々は《攻略組》と呼ぶ。

しかしその中で、特に一目置かれるプレイヤーにはいつしか二つ名がつけられた。

『黒の剣士』キリト

『閃光』アスナ

『黒の剣士』ジェネシス

『白夜叉』ティア

この四人は攻略組の中でもさらに実力が秀でていられると言われており、この四人を纏めて《アインクラッド四天王》とも呼ぶことがある。

その四天王のうちの、しかも二人が揃って目の前にいて、更に一緒に冒険や寝泊まりまでしたと言う事実には漸く気づいたシリカは改めてジェネシスとティアの背中を見る。

ロザリア達の方も漸く自分たちが相手にしている者達の正体が理解できたようで、先程までの余裕な雰囲気はとうに消えている。

「攻略組がこんなトコにいるわけないじゃない！」

ほら、さっさと始末して！身ぐるみ剥いじゃないな！！」

ロザリアがそう叫んだ。

「そ、そうだ！攻略組なら、すっげえレアアイテムを持つてるかもしれないぜ！！」

一人が気を取直して叫んだのを皮切りに

「オラアアアアアア！！！」

「死ぬやああああー！！！」

七人が罵声を上げながらソードスキルを発動しジェネシスに斬りかかった。

ジェネシスの方は反撃するどころか剣も抜かずに一切動かずに黙って攻撃を受け続けている。

「やめてー！ジェネシスさんが…ジェネシスさんが死んじゃう！！」

シリカが短剣に手を掛けティアに訴えるが、

「…落ち着け、シリカ。ジェネシスのHPを見てみる」

シリカは言われた通りにジェネシスのHPを見る。
そして目を見開いた。

確かに、HPは削られてはいるが、数秒たったらまた元どおり全快しているのだ。

「ど、どう言うことですか……？」

シリカは訳が分からずそう呟くしかなかった。

やがてジェネシスに攻撃しているオレンジ達も異変を感じたのか、攻撃をやめてジェネシスを囲む形で止まった。

「お、おい……どうなってんだよ……いつ……？」

異様なものを見るまで一人がジェネシスを見ながら呟いた。

「あんた等何やってんだー！ さっさと殺しな!!」

ロザリアが苛立った声で叫ぶ。

「あ、もう終わりか？」

まあ、10秒あたり400つとてどこか。それがテメエら7人が俺に与えられるダメージの総量だ。

俺のLVは80、HPは15000、んで更に《バトルヒーリング》スキルによる自動回復が10秒で800ポイントある。

「テメエら如きじゃ一生俺を倒せやしねえよ」

ジェネシスは周りのオレンジ達を見回しながら言った。

「無茶苦茶だ……ありかよそんなのー!」

オレンジの一人が声を震わせながらそう叫んだ。

「ああ、ありなんだよ。たかが数字が違うだけで理不尽な差がつく。けどよ、そもそもゲームなんざさう言うもんだろ？」

ロザリアは忌々しげに舌打ちした。

ジェネシスは懐から結晶アイテムを取り出す。

「こいつは、俺たちの依頼人が全財産をはたいて買った《回廊結晶》だ。出口が監獄エリアに設定されてる。テメエら全員、今からこれで跳んで貰うぜ。」

ちなみにもし逃げようってんなら……

全員監獄じゃなく地獄に跳んで貰う、今ここでな」

強烈な殺気を放ちながらジェネシスはそう言つてのけた。

嘘などと考えられる余裕はオレンジ達には無かった。

ジェネシスが「コリドー・オープン」と唱え、回廊結晶を展開する。オレンジ達は観念したのか「ちくしょう」と呟きながら次々に回廊の中へ入って行く。

最後に後ろから静観していたロザリアが残った。

「おい、何してんだ。テメエも入るんだよ」

ジェネシスがロザリアを回廊の中へと促す。

「はっ、それで勝ったつもりかい？ やりたきややってみなよ、グリーン
のあたしを傷つけたら……」

とロザリアが言いかけたところで一陣の旋風が巻き起こる。

次の瞬間ロザリアの首元に銀色の刃が突きつけられていた。

「……ならば死ぬか？ 今ここで」

非常に冷酷な声が発せられた。

ロザリアが視線を向けると、ふわりとなびく銀髪が見え、次に見えたのは氷のように冷徹な目だった。ティアだ。

ティアが一瞬でロザリアとの距離を詰め、寸前のところで刃を止めたのだ。

昨日向けられた殺気の比ではない、完全に自分を殺しかねないほどのプレッシャーがロザリアに向けられ、ロザリアは思わず地面にへたり込んだ。

ティアは尚も冷酷な視線でロザリアを見下ろす。

「貴様はさっきこう言っていたな…… 〴〵ここで死んでも現実で死ぬ証拠は無い」と。

ならば……」

そう言っただけでティアはゆっくりと刀を持ち上げる。

そして

「……自分で確かめてこい」

ティアの刀がライトエフェクトを伴った。

「や、やめっ……！」

ロザリアは片手を前に出し懇願するがティアは聞く耳を持たない。「私の男に侮言を浴びせただけに飽き足らず、その上命まで奪わんと

するとは……万死に値する」
そう言つて、ティアは遂に刀を振り下ろした。

パァン！

という甲高い音がフィールドに響く。

ロザリアの首は跳ねられてはいなかった。

「……安心しろ、峰打ちだ」

刀を振り下ろしたティアがそう告げた。

ロザリアはもう言葉を発することができずただ口をパクパク動かし
しているだけだ。

ジェネシスがそんな彼女の襟を掴んで持ち上げた。

「これで分かったら、テメエが奪ってきたものの重さつてやつが。た
しかにアイテムは売ったら金になるが、命だけは買えねえし売りもん
にもならねえんだよ」

そう告げた後、ジェネシスはロザリアを回廊の中に放り込んだ。

それを最後に、回廊は閉じられた。

「……済まねえなシリカ、色々隠しててよ」

「奴らを捕らえるには、私たちの事を隠しておく必要があったんだ。
済まなかったな」

ジェネシスとティアは申し訳なきように言いながらシリカに歩み
寄る。

シリカは一連の出来事に頭が追いつかなくなり、地面に座り込んでいた。

「だ、大丈夫です……お二人は、いい人ですから」

シリカはそう答えた。

「んじや、今度こそ帰るぞ」

「あ、あの、すみません……足が、動かなくて……」

シリカの言葉に二人は苦笑しながら手を差し出し、シリカを引き上げた。

――

三十五層の宿に戻り、部屋を借りてティアとシリカはベッドに並んで座り、ジェネシスは向かいの壁にもたれかかって立っていた。

沈黙が続いていたが、不意にシリカが切り出す。

「あの……もう行っちゃうんですか？」

「そうだな、五日も前線を離れちゃったからなあ。まあた鬼の副長さんにどやされちゃ敵わんぜ。前科もあるし」

ジェネシスが窓の外の夕日を眺めながらそう言った。

「お二人は凄いですね、攻略組なんて……あたしにはとても……」

そう言いながら目を伏せるシリカ。

そんな彼女を、ジェネシスは少し小突いた。

「バーカ言ってるんじやねえよ。言ったら、レベルなんざただの数字なんだよ。そんなもん簡単にひっくり返せるさ」

「ああ、その通りだ。お前なら直ぐに上がって来られる。最前線で待ってるぞ」

ティアも優しく微笑みながらシリカの頭を撫でた。

シリカもそれを聞いて笑顔になって頷いた。

「…うし、んじやさつきとピナを生き返らせようぜ」

ジェネシスがそう促し、シリカはプネウマの花とピナの心の二つのアイテムを取り出し、花の雫を花に滴らせた。

直後、眩い光が羽から発せられた。

(ピナ。いっぱい、いっぱいお話ししてあげるからね！今日の凄い冒険の話と……たった1日だけの、凄いお兄ちゃんとお姉ちゃんの話
を)

光を見つめながらシリカは心の中でそう語りかけた。

数秒後、『きゆるるっ』という聞き慣れた、それでいてどこか懐かし
く、シリカが最も待ちわびた鳴き声が部屋の中に木霊した。

九話 圈内事件

第五十九層 ダナク

草原の木の陰に、二人のプレイヤーが休んでいた。

一人は黒と赤の衣服の男性、ジェネシス。もう一人は銀髪に白基調の衣装を着た女性、ティア。

暖かな日差しに程よい気温の中、心地よい風に吹かれ昼寝をしている。

しかし寝ているのはジェネシスで、ティアは正座をしてその足にジェネシスの頭を乗せた、所謂『膝枕』をしていた。

いつもなら迷宮区にこもって攻略を進めているのだが、今日外に出た瞬間にその気が失せた。

今日はもう攻略は休もうということになり、今現在に至る。

最初は二人並んで寝ていたのだが、ティアはジェネシスが寝落ちするのをじっと待ち、彼が眠った瞬間自身の膝の上に彼の頭を乗せたのだ。

「……ふふっ、普段はあんな目つきなのに、寝顔だけは可愛いなあ本当に」

ティアは滅多にみられない貴重なジェネシスの寝顔を見て思わず笑みをこぼした。いつもなら自分が目覚める時には彼は既に起きており、寝顔を見られたことに対する少しの悔しさと、また彼の寝顔を見れなかったという無念さが残っていたが、今日ようやく、しかも真上から彼の寝顔を拝むことに成功し、ティアの内心は歓喜で溢れていた。

ティアはゆっくりりと、左手でジェネシスの顔に手を添え、右手でそつと頬を撫でた。

その光景はまるで、膝の上で眠る子供を慈しむ母親のようだった。

ジエネシスは夕方までテイアの膝の上で熟睡していた。

「……………」

ふと、ジエネシスはゆっくりと瞼を開ける。

「あ、起きた？」

目が覚めたジエネシスに気づいたテイアが真上からジエネシスの顔を覗き込む。

「…………おー…………テイア、俺どんくらい寝てた……？」

「もう夕方だよ？ホントによく寝てたね」

まだ寝ぼけて呂律がはつきりしないジエネシスだが、に対し、テイアが呆れたような笑顔で返す。

するとジエネシスは今の状況をなんとなく察したのだろう。

「なーテイア、これつて……………」

「うん、膝枕。寝心地はどうだった？」

「あーサイコーまじ。もうすこし寝ててえ〜」

「だめだめ。いい加減起きないと」

テイアにそう促され、ジエネシスはゆっくりと起き上がる。

体を伸ばして欠伸をしてから

「ふあ〜っ…………あー、何とか目え覚めたわ。悪りいな、俺だけ昼寝しちゃってよ」

「ううん、全然。寧ろ眼福でした」

テイアは満面の笑みで返す。

「はあ？何だそりや…………まあいいわ、とりま飯にしようぜ。なんか奢るからそれでチャラにしてくれや」

「えへっ、やった♪」

彼らは普段過ごしている六十層で夕食をとった。

ティアはカルボナーラ、ジェネシスはナポリタンというイタリアンな夕食だった。

レストラン内で「あれって『白夜叉』じゃね?」「やつぱ美人だなあ」だの、「一緒のやつは『黒の剣士』か?」「あんな美女と……爆発しろ!」などと言う声が聞こえたが、彼らは気にせず過ごした。

余談だが、ただでさえ女性プレイヤーの少ないアインクラッドの中でも、ティアはトップ3に入るほどの美女だ。

15歳でありながら大人びた顔にグラドル顔負けのスタイル、穏やかな表情、そして最前線の戦闘で見せる洗練されたスタイリッシュな戦い方。それら全てがティアの魅力を世に知らしめていた。故に彼女と常に共に過ごすジェネシスは日頃から嫉妬の目を向けられ続けたが、当の彼は全く気にしない。

「しかし、随分と人気者だなティア」

「あはは……なんか、アイドルとか女優の気持ちは今ならよく分かるよ」

ジェネシスの言葉にティアは苦笑しながら答える。

「……でも、ジェネシスだって一部じゃ凄く人気者なんだよ?」

「はあ?一部で?どんな奴だよ」

「そ、それは……その……」

ジェネシスがそう聞き返して来るが、ティアは目を背けた。

ティアの頭に思い浮かぶのは、以前助けた二人の少女。

「(まあでも……負ける気も、久弥を渡す気も無いけどね)」

ティアはそう思いながらほくそ笑んだ。

「おい、何ニヤついてんだ?」

「えっ、ああいや、なんでも無いよ?」

ジェネシスの一言でティアの意識は引き戻された。

「さて、晩飯も食った事だし、さっさと帰るか」

「帰るのはいいけど、ちゃんと寝れるの?」

「布団に入りや自然と寝れるさ」

そう言っつてジエネシスとティアは立ち上がる。

しかしその時、二人の元にある人物からメッセージが届いた。

差出人はキリト。二人はそれを読んで目を丸くした。内容は……

「……え?」

「《圏内事件》だあ?」

—————

ジエネシス達が向かったのは、五十層にある雑貨屋。

ここはとある人物が経営している店だ。

人混みを抜け、目的の店のドアを開く。

「おーう、来たぞエギル」

カウンターには誰もいなかったが、ジエネシスが呼びかけた事で中から巨漢の黒人男性が現れた。

「よお、ジエネシスにティアじゃねえか。待ってたぜ」

「ああ。ここにキリトが待っているとメッセージを受けてな」

ティアがそう言うと、エギルは店の中に促す。

中の部屋には彼らを呼び出した少年、キリトと……

「おやおや、こりやどう言う風の吹き回しだ? 血盟騎士団の鬼の副長さんが、なんでこんなのと一緒にいるんですかねえ?」

白と赤の装備に身を包んだ栗色の長髪の少女、アスナだった。

アスナはいかにも不機嫌そうな目でジエネシスを睨んだ。

「私も事件を見てたからに決まってるでしょう! 貴方ねえ、その人のカnTo触る口の聞き方どうにかならないの?」

「無理だな、諦めろ」

ジェネシスが即答し、アスナは「ぐぬぬ……」と歯軋りしながらジェネシスを鋭い目つきで睨んだ。

「そんな事より、今日お前達が見たものを私たちに教えてくれないか？」

「ああ、そうだな」

ティアの提案にキリトは頷き、話し始めた。

今日、訳あってキリトとアスナの二人は夕食を共にすることになったのだが、その時に女性の悲鳴が響いた。

外に出ると、教会の壁に一人の重装備の男性が槍で貫かれた状態で吊るされていた。

キリト達は救出を試みたものの間に合わず、その男性は消滅してしまっただろう。

ちなみにその時、犠牲者の男性『カインズ』の知り合いを名乗る女性『ヨルコ』から少し話を聞くことができ、明日もう一度詳しく尋ねると言うことだった。

「……決してデュエルによるものではない、それは間違い無いか？」

「ああ。それは断言できる。少なくともあの時、デュエルのウィナー表示を見た人はいなかった」

ティアの問いにキリトは頷いた。

ジェネシスはテーブルに置かれたものを手に取った。

「……で、こいつが凶器ってか？」

「ああ。武器カテゴリーは槍で、PCメイドの一品だ。名前は『ギルティソーン』、作成者は『グリムロック』」

ジェネシスはキリトの説明を受けながら槍を見た。

三十センチくらいのグリップに赤色の刀身が付いており、その刃には数本の棘が付いている。見たところだと、槍と言うよりは長剣に見える。えなくも無いものだった。

「一見何の変哲も無いただの槍なんだがなあ……本当にこれで死んだのか？」

「間違い無いわ。カインズさんはこれに貫かれていたんだもの」

アスナがそう答えるが、ジェネシスは納得出来ない表情だ。

「……なあ、本当に死んだのか？カインズってのは」

「どう言う意味だ？」

ジェネシスの呟きにキリトが反応した。

「いや、例えばだけだよ？武器をぶっ刺したまま圏内にいたら、HPは減らねえけど防具の耐久値は減ってて、カインズって奴は防具が消える瞬間にどっか適当な場所に転移した、とか考えられねえか？」

その瞬間、キリトとアスナは目を丸くした。

「そうか、武器が壊れる瞬間のエフェクトは、死亡のそれと同じ……もしそのタイミングで転移をしたのなら、限りなく死亡のエフェクトに近いものになる！」

「じゃあ、カインズさんは生きてるってこと……？」

キリトとアスナがそう言うが、ジェネシスは待ったをかけた。

「落ち着け、まだ仮の話だ。」

まあ、ちよつと試してみるか？」

ジェネシスの言葉に3人は頷き、一先ず外に出た。

途中武器屋で適当な防具を購入し、ジェネシスがそれを身につけた。

「さあ、実験を始めようか」

「…それ、何のセリフ？」

ジェネシスが少しキメ顔で言ったセリフにアスナが微妙な顔をして尋ねた。

「気にすんな。よし、そんじゃ行くか」

ジェネシスはギルティソーンを右手に、転移結晶を左手に持った。

「あ、そうだ。ティア、万が一用に……」

「回復結晶だろう？もう準備してある」

ジェネシスが言い切る前にティアが右手に持った緑色の結晶アイテムを見せた。

「おっ、わかってんじゃねえか」

「当たり前だ。お前の考えていることなど手に取るように分かるさ」

ティアとジェネシスは見つめ合いながら笑った。

「……あの、そう言うのいいから早くしてくれない？」

アスナがもううんざり、と言う表情で言った。

「へいへい分かりましたよ。そんじゃ行くぜ」

ジェネシスは右手の槍を逆手に持ち、腹部あたりに構える。

ティアは少し不安そうな顔で見つめる。

「3……2……1……ドン！」

カウントと同時に、ジェネシスは短槍を勢いよく突き刺した。赤い血飛沫のようなエフェクトが発生する。

ティアは結晶をギュツと握ってそれを見守った。

「ど、どうだ…ジェネシス？」

キリトがおずおずと尋ねる。

「……うん。HPは何ともねえわ。ただやっぱ防具の耐久値はどんどん減ってんな〜」

ジェネシスは耐久値を見ながらそう呟いた。

「あ、そうだ。ついでに始まりの街まで行って、生命の碑を見てくるわ」

「ああ、そうだな。頼む」

そして、間も無く防具の耐久値がゼロまで近づいた。

「うし、んじや行くぞ…… 転移 はじまりの街」

その瞬間、ジェネシスが消えるのと同時に、防具が破壊された。

「……っ」

ティアはその光景に悲痛な表情になった。

死ぬはずがないと彼は言っていたものの、愛する人が死ぬエフェクトに包まれる光景など、ティアがこの世で一番見たくない光景だ。

いや、もしかしたら今のは本当に死亡エフェクトだったのでは無いか、彼は本当に死んでしまったのでは無いか、と言った不安が一気にティアの頭を覆った。

瞳孔が開き、徐々に心拍数が上がり、呼吸が荒くなる。

苦しきでティアは胸を押さえた。

「ティアっ！」

するとキリトがティアの両肩を掴んだ。

「落ち着いて、フレンド登録画面から、今のジエネシスの場所が見られるだろ?」

キリトがそう言つて、ティアは慌てて右手を振つてメニューからジエネシスの居場所を見る。

彼はやはり、はじまりの街にいた。

それを見て安心したのか、ゆっくり息を吐いてティアはへたり込んだ。

「帰ったら……説教だな……」

荒れた呼吸をゆっくり整えながら、ティアは呟いた。

その様子を見ていたアスナがキリトの方を向き

「ねえ、ティアさんとジエネシスって……」

「ん?ああ、付き合ってるぞ。知らなかったのか?」

キリトがあっけらかんと答える。

「え……?えええええーっ?!」

く数分後く

転移門が光り、中からジエネシスが現れた。

「おう、戻ったぜ」

ジエネシスは手を振りながらキリト達の方へ歩く。

「っ!」

その瞬間、ティアはジエネシスに抱きついた。

「お、おいおいティア……人前だぞ」

「……ばか」

ジエネシスは困ったような顔で引き離そうとするが、ティアは腕の力を強めてギュツと抱きつく。

「ジエネシス、しばらくそのままにしてやってくれ。お前が消えたのを見て、彼女はパニックになったんだからな」

「マジでか」

キリトの言葉にジエネシスはギョツとした。

その後、少しティアの方を見つめ、

「…ああ、悪かったよ。けどこれは必要なことだったんだ。勘弁してくれや」

「……しばらく、このままで」

「へいへい」

そのやり取りの後、ジェネシスはキリトの方を向く。

「んで、実験の結果はどうだった？」

「ああ、お前の言う通りだったよ。まあティアを見てくれたら、お前もよく分かるだろうけど……」

「ああ、よく分かった。俺の仮説は立証されたってことだな。ちなみに、生命の碑にはカインズの名前に横線はなかったぜ」

「なら、やっぱりカインズさんは生きてるのね……でも、それならどうしてこんな事を……」

アスナが顎に手を当てながら考える。

「ま、それは明日ヨルコって奴に聞けばいいだろ。とりあえず、今日のところは解散しようぜ」

「けど、ヨルコさんにはなんて伝えようか？カインズさんが生きてる事……」

アスナのつぶやきに、キリトは考え込むが、

「いや、その事は敢えて伏せておけ」

「えっ？」

ジェネシスの言葉にキリトは目を見開いた。

「十中八九、ヨルコとカインズの二人はグルだ。圈内殺人なんて大掛かりな演出をするなら、それなりに目的があるはずだ。」

こちらがトリックに気づいた事を知られたら、向こうは何としても隠すはずだ。それならこちらも敢えて何も知らないフリをするんだ。

そして、向こうがボロを出すのを待つ。これが手っ取り早い」

ジェネシスの意見に二人は納得し、とりあえず明日の集合時間と場所を確認し解散となった。

「……………」

「翌日」

NPCレストランの一角に、五人の人間が集まっていた。

キリト・アスナが座り、向かいにはヨルコが座る。

そして窓際にジェネシスとティアが3人を見下ろすように立つ。

「…あの、この人達は……？」

ヨルコがジェネシスとティアの二人を見て尋ねた。

「ああ、事件解決に協力してくれるジェネシスとティアだ」

ヨルコはキリトの紹介を受け、ジェネシス達に会釈をする。

「ま、よろしく頼むわ。」

さてヨルコ氏、唐突で悪いんだが…グリムロックって名前、聞いた事ねえか？」

ジェネシスがフランクな態度で尋ねると、ヨルコは目を見開いた。

「はい…知っています。昔、私とカインズが所属していたギルドのメンバーです」

キリト達はそれを聞いて目を見合わせ、今度はキリトが尋ねた。

「実は、昨日の事件で使われた短槍の製作者が、グリムロックって人だったんだ。心当たりはあるかな？」

ヨルコはしばし沈黙していたが、やがて口を開いた。

「はい…あります。昨日お話しできなくてすみません。」

「忘れたい、思い出したくない出来事があったので……でも、お話しします」

そこで一度目を伏せ、

「それが原因で、ギルドは解散したんです……」

目を開いてそう言った。

そしてヨルコは話し始めた。

ヨルコとカインズの所属していたギルドの名は《黄金林檎》。

彼らは半年前、偶々倒したモンスターがドロップしたAGIを20も引き上げる指輪をどうするかで意見が割れたらしい。

出た意見は二つ。『売却してその金をギルドで山分けする』のと『ギルド内で使用する』というものだった。

結果は5対3で売却。

リーダーのグリセルダという女性プレイヤーが、指輪を競売にかけたため一泊の予定で出かけた……しかし彼女は帰って来ず、後に死亡していた事が分かった。

「そんなレアアイテムを抱えて圏外には出ないよな……睡眠PKか？」

「そうね……半年前なら、手口が広まる直前だしね」

睡眠PKとは、圏内で眠るプレイヤーの手を勝手に操作し、全損決着デュエルを申し込み一方的に殲り殺すというものだ。

「ああ、だが偶然とは考えにくい。犯人はグリセルダさんがレアアイテムを持っていた事を知っていたプレイヤー、つまり……」

ティアがそう考察し、

「黄金林檎の、残り7人の誰か……」

ヨルコが代わって続けた。

「そんな中でも怪しいのは、反対した3人だな」

「指輪を売られる前に、彼女を襲撃した……という事か」

ティアが疑問符を浮かべる。

「ああ、恐らく。グリムロックさんと言うのは？」

キリトが頷き、ヨルコに尋ねる。

「彼は、グリセルダさんの旦那さんでした。勿論、このゲーム内の、ですけれど。」

お二人共、とても仲が良く、凄くお似合いの夫婦でした。もし昨日の事件の犯人がグリムロックさんなら、彼は指輪の売却に反対した3人を狙ってるのでしょうか……」

そこで一度区切って、

「……反対した3人のうちの二人は、カインズと私です」

ヨルコの言葉に四人は目を見開いた。

「んじゃあ、あと一人は？」

ジェネシスが問う。

「シユミットという男です。今は聖竜連合にしていると聞いています」

ヨルコの答えにジェネシスは「あー」と呟いた。

「あいつか、あのでっかいランス使いの」

「あの、シユミットに会わせてくれませんか？彼は今回の事件を知らないかも……もしかしたら彼も、カインズのように……」

そこまで言って、ヨルコは口を閉ざした。

一瞬の静寂の後、アスナが提案する。

「シユミットさんと呼んでみましょう。聖竜連合には知り合いがいるから、本部に行けば何とかしてくれると思う」

キリトもそれに頷き、

「ああ、頼む。一度ヨルコさんを宿屋に送ろう」

ヨルコもそれに頷いた。

その後、彼女を宿屋に送り届けたあと、転移門広場に向かうため中心街を歩いて行く。

「なあ、ジェネシス。お前はこの事件をどう見てる？」

不意にキリトが尋ねた。

「ま、恐らくヨルコ氏達がやりてえのは、半年前の指輪事件の犯人をあぶり出す事で間違いねえな。多分あの二人は、シユミットが怪しいと踏んでるみてえだ」

ジェネシスの意見にティアが続く。

「ヨルコさん達の狙いは、圈内殺人という大掛かりな演出によって、幻の復讐者を作り出す事。だとしたら、次に死亡を演出するのは……」

「……ヨルコさんか！」

キリトが何かを察して叫んだ。

ジエネシス達に連れてこられたシュミットは、宿部屋の椅子で貧乏揺すりをしながら終始落ち着かない様子で座っている。

その向かいに座るヨルコは、落ち着き払った態度で座っている。部屋の中を重い空気が支配する中、不意にシュミットが切り出した。

「……グリムロックの武器でカインズが殺されたというのは、本当か？」

「……本当よ」

ヨルコは落ち着いた態度を崩さず、静かに答えた。

ヨルコの言葉にシュミットは目を見開く。

「なっ！なんで今更カインズが殺されるんだ!!」

あいつが……あいつが指輪を奪ったのか？グリセルダを殺したのはカインズだったのか？グリムロックは売却に反対した3人を全員殺すつもりなのか？俺や……お前も狙われているのか？」

怯えた表情で捲し立てるシュミットに、ヨルコはまた静かな声で告げた。

「グリムロックさんに槍を作ってもらった他のメンバーの仕業かもしれないし、或いはグリセルダさん自身の復讐なのかもしれない……」

そして一呼吸置き、

「だって、幽霊じゃなきゃ、圏内で殺人だなんて不可能なもの……」

その言葉でシュミットは絶句する。

だがジエネシスは嘆息した。彼、いや彼らは圏内殺人のトリックを既に解明しているからだ。

そんな彼らを他所に、ヨルコは立ち上がる。

「私、昨日の夜寝ないで考えた……結局のところ、グリセルダさんを殺したのは私たちメンバー全員でもあるのよ！」

あの指輪がドロップした時、投票なんかしないでグリセルダさんの

指示に従えば良かったんだわ!!」

半狂乱気味に叫ぶヨルコに、シユミットは言葉が出てこない。ジェネシス達も、静かだったヨルコの豹変におそらく演技だと分かっている。いても少し圧倒された。

「あの時、グリムロックさんだけは……グリセルダさんに任せると言っただわ。だからあの人には……グリセルダさんの敵を討つために、メンバー全員を殺す権利があるのよ……」

力ない声で言いながら、ヨルコは空いた窓辺へ下がっていく。

「冗談じゃない……冗談じゃないぞ！なんで今更!!半年も経つてなんで今更そんな事!!」

お前はいいのかよヨルコ?!!!こんな訳の分からない方法で、殺されてもいいってのか?!!!」

シユミットはガタガタと鎧を震わせながら立ち上がり、凄まじい剣幕でヨルコに詰め寄ろうとするが、ジェネシスがそれを制した。

その直後、ヨルコは目を見開き、よろめいてその背中を露わにした。彼女の背中には投げ短剣が深々と突き刺さっており、そのまま窓から落下し地面に落ち、そして消滅してしまった。

(うん、知ってた)

だが四人は全く動じることなく、その光景を見ていた。

アスナは落ち着いてメニュー欄からフレンドの居場所確認機能でヨルコの居場所を探し、見つけると、安心したように息を吐いて椅子に座った。

十話 幻の復讐者

目の前でヨルコが消滅しても動じず冷静だった四人。

ヨルコが落ちた窓から外を見ると、遠くに黒いローブを着たプレイヤーが目止まった。

「行ってくる!!」

瞬間、キリトは窓から飛び出し、AGIを全開にして屋根を駆ける。

全速力で追うが、中々距離が縮まらない。

その時、キリトの隣を銀の疾風が駆けた。

銀髪と白マントをたなびかせた女性、ティアだ。

バランス型なキリトに対し、速さを追求したティアのAGI値は今やアインクラッド内でもトップを誇る。

ティアはその速さを存分に活かし、キリトを即座に追い抜くと一気にローブの人物との距離を縮めて行く。

が、後もう少しの所でローブの人物が何かを取り出した。

転移結晶だ。

「っ、くそー!」

ティアは毒づくど腰のピックを引き抜き投げつける。

それらは真っ直ぐローブの人物に向かって飛んでいくが、命中する直前に紫の障壁に阻まれた。

行き先だけでも、とティアは耳を傾けたが、直後に鐘の音が街に鳴り響き、聞くことは叶わなかった。

ローブの人物は青白い光に包まれて行く。

ティアはならばと、せめてもの賭けに出た。

「ローカインズ!!」

「?!」

ティアがその名を告げた瞬間、ローブの人物はビクツと肩を震わせティアの方を見る。そして、その人物は青白い光に包まれ、その場から消えた。

ティアとキリトは、ヨルコに刺さっていたナイフを拾い上げ、宿部屋に戻る。

「よお、どうだった?」

ジェネシスが壁にもたれかかりながらたずねる。

「ダメだ、転移結晶で逃げられた」

キリトが首を横に振りながら答えた。

「だが、収穫はあったさ」

ティアが右手に持った短剣をチラつかせながらジェネシスの方を見て不敵な笑みを浮かべながら言った。

すると、

「あ、あのローブはグリセルダの物だ……あれはグリセルダの幽霊だ……グリセルダが、俺たち全員に復讐しに来たんだ……」

鎧をガタガタと震わせながらシユミットは口を開いた。

その顔は恐怖で染まっている。

「は、ははは……ゆ、幽霊なんだから、圏内でPKするくらい楽勝だよな?あ、あはははは……」

両手で頭を抱えながら狂ったように笑うシユミット。

そんな彼を見てジェネシスは嘆息し、彼の頭に拳骨を食らわせた。

「あぐっ?!」

シユミットはうめき声をあげ、ジェネシスの方を見た。

「シヤキツとしろい。ゲームで幽霊なんかあつてたまるか。てめーは殺させねえよ」

ジェネシスの叱咤でようやく我を取り戻したシユミットは、恐怖を完全に払拭出来てはいないものの、なんとかいつもの彼に戻った。

その後、シユミットを聖竜連合まで送り届けた彼らはNPCレストランへと足を運んだ。

「結局、指輪事件の犯人はシユミットなのかしら……?」

アスナがテーブルに頬杖をつきながら呟いた。

「……いや、恐らくあいつはねえな。何かしら関与はしただろうが、あいつが直接的な原因とは思えねえ」

アスナの呟きに対しジェネシスが首を横に振って答えた。

「けど、じゃあ一体誰が……?」

キリトが顎に手を当てながら熟考する。

「……グリムロック、という事は無いだろうか？」

不意にティアがそう切り出した。

「いやいや、それは一番無いんじゃない？だってその人、グリセルダさんの旦那さんだったんでしょ？」

「ヨルコさんもお似合いの夫婦って言ってたしな」

だがティアの意見に対しキリトとアスナの二人は首を横に振って否定した。

「…そーういや気になってたんだがよ、この世界で結婚すつとどうなるんだ？」

不意にジエネシスがそう問うた。

「確か、二人のアイテムストレージが共有されるのよ。」

でも、なんだかロマンチックで、ブラグマチック凄く実際的よね」

ジエネシスの問いにアスナが少し頬を緩めながら答えた。

「確かに、ストレージ共有化というのは身も蓋もない話だな。それまで隠し通せたものが、結婚した途端に何も隠せなくなるのだから……」

ティアも頷きながら、チラリと視線をジエネシスの方に向けながら言った。

「いやいや、俺たちの間で隠し事なんざしようにも出来ねえだろうがよ」

視線に気づいたジエネシスが苦笑しながら言った。

ティアも「そうだな」と満足げに頷きながら返す。

すると、

「なあ、もし結婚している二人の、一方が死んだらどうなるんだ？アイテムストレージは共有化されてるんだろ？」

不意にキリトが尋ねた。

「グリムロックとグリセルダさんの事？そーうね、一人が死んだら……」

真剣な表情で考え込むアスナに対し、キリトは

「……全て生き残った方の物になるんじゃないか？」

と言う言葉に3人は目を見開く。

「なら、グリセルダさんが死んだ時、あのレア指輪は……」

「グリムロックの足元にドロップした筈なんだ」

声を震わせながら言うアスナにキリトが続いた。

「つまり、指輪は奪われていなかった……と言うことか？」

「いいや違う。奪われた、と言うべきだ。グリムロックは、自分のストレージにある指輪を奪ったんだ！」

テイアの言葉にキリトは首を横に振って答えた。

「……アスナ、今ヨルコ氏はどこにいった？」

ジェネシスがいつになく深刻な表情で尋ねると、アスナは即座にメニュー欄からヨルコ達の居場所を確認する。

「……十九層の、森の外れにいるわ」

「……不味い、今すぐ行かねえと!!」

アスナがそう答えるや否や、ジェネシスは血相を変えて椅子から飛び出し走り出した。

「あ、おい！」

「待つてよジェネシス!!」

3人も慌てて飛び出した。

「ジェネシス、不味いってどう言うことだ?！」

なんとか追いついたキリトがジェネシスに走りながら尋ねる。

「あのショートスピアだ! あれは確かグリムロックが作ったんだろ? なら、奴は今回のヨルコ氏達の計画を全部知ってる筈だ!!」

そして、指輪事件の黒幕であるグリムロックが、あの事件の真相を追ってるヨルコ氏達が集まっているこのチャンスを、見逃すはずがねえ!!」

「つまり……纏めて消せばいい、と言うことか!!」

ジェネシスの言いたいことを察したテイアがそう叫んだ。

3人は大急ぎで転移門へと走って行った。

十九層 十字の丘

霧が立ち込める薄暗い森の中を、シュミットは一人で歩いた。そして一つの大木の前で立ち止まる。そこには一つの墓標があった。

「グリセルダ：俺が助かるには、もうお前に許してもらおうしかない」
そう言いながら、シュミットは地面に手をついた。

「済まない、許してくれ、グリセルダ！まさか、あんな事になるとは思ってたかったんだ！」

地面に額をつけてひたすら謝罪した。

その時だった。

——本当に？

「っ?!」

突如として響いた女性の声に、シュミットは辺りを見渡す。だが周りには何もいない。

ふと、後ろから何かが近づくと気配を感じ、慌てて後ろを向く。だがそこにいたのはウサギ型のモンスター。

シュミットは安堵してもう一度視線を戻す。

そこには一人のローブを着た女性が。

「ひっっ!!」

シュミットは両手で口を押さえて飛び退いた。

「何をしたの……貴方は私に、一体何をしたの？」

言いながらローブの女性は、例のショートスピアをシュミットに突きつけた。

「お、俺はただ、指輪の売却が決まった日に、いつの間にかベルトのポーチにメモと結晶が入っててそこに指示が！」

後ずさりながらそう言った時だった。

「誰のだ、シュミット？誰からの指示だ？」

今度は男性の声が響き、大木の陰からゆらりと姿を現した。

「グリムロック…？あんたも、死んでたのか…？？」

信じられない、と言う表情でつぶやくシュミット。

「誰だ？お前を動かしたのは、一体誰なんだ？」

そんなシュミットに構う事なく、ローブの男は問いかける。

「わ、分からない！本当だ！メモには、グリセルダの部屋に忍び込めるように、結晶の位置だけを設定して、ギルドの共通ストレージに入れるとだけ指示が！」

「それで？」

「お、俺がやったのはそれだけなんだ!!俺は本当は殺しの手伝いなんかする気は無かったんだ!頼む、本当だ!信じてくれ!!」

必死の懇願。

その表情、仕草に嘘はどこにも見受けられなかった。

一瞬の静寂の後、再び声がした。

「……全部録音したわ、シュミット」

恐る恐る顔を上げると、シュミットは目を見開いた。

そこにいたのは、殺されたと思っていたヨルコとカインズが居たのだから。

一体どう言うことか、そう思つて二人を見回すと、ヨルコの手のひらに輝く録音結晶が見えた。

それを見て、シュミットは全てを悟つた。

「……そう、言うことだったのか……」

安堵した顔で地面に座り込む。

「お前達、そこまでグリセルダの事を……」

そう呟いたシュミットに対し、

「あんただだって、グリセルダの事を憎んでた訳じゃないんだろ？」

カインズが険しい表情で問い詰める。

「も、もちろんだ!信じてくれ!」

シュミットは慌てて両手を振つた。

「……まあ、受け取った金で買ったレア武器のおかげで、ギルドの入団基準をクリアできたのは確かだが……」

言いながら目をそらした。
その時だった。

トスリという音が響き、シュミットの身体に力が入らなくなる。そのままシュミットは地面に倒れこんだ。

視線を移すと、右肩の鎧の隙間を縫うように投げナイフが刺さっている。

HPバーを見ると麻痺状態を示すアイコンが表示されている。

「ワァーン・ダァーウン」

気の抜けた高い声が響き、シュミットの目の前にフードを被った男がしゃがみ込んだ。

視線をヨルコ達の方に移すと、そちらの方には同じくフードを被った男が二人に向けてエストックを突きつけていた。

「…確かにこいつはでかい獲物だ。聖竜連合の幹部様じゃねえか」
再び声が響く。

同じくフードを被った男がシュミットの方へと近づく。

右手には肉切り包丁を思わせる大型短剣が握られている。

「お、お前らは……！」

シュミットはその右に描かれた刺繍を見て目を見開いた。

棺桶の中から、不気味な笑顔を浮かべた骸骨が手招きしているマーク。

「…殺人ギルド…… 《笑う棺桶》!!」

ラフコフの3人は獲物を見定めるように彼らの前に並んで立った。

「さて、どう調理したもんかねえ〜」

そう言いながら思案するリーダーの『POH』

「あれ！あれやろうよヘッド！みんなで殺し合わせて、生き残ったやつだけ助けてやるぜゲーム！」

子供のようにはしゃぐのは、毒ナイフ使いの『ジョニー・ブラック』

「んな事言って、おめえ生き残ったやつも全員殺しただろうがよ」

「あー！それ言っちゃ終わりだよヘッドオ!!」

嘆息しながら言うPOHに対し、心底残念そうに叫ぶジョニー。強化を孕んだやり取りを他所に、シユミットはヨルコ達にエストツクを突きつけている男、『赤目のザザ』を見る。

「……くくっ」

フードで隠れているためよく見えないが、その乾いた笑いからひしひしとその狂気は伝わってくる。

「……さて、取り掛かるとするか」

そう言つてPOHは大型短剣《メイトチョッパー》を振り上げた。いよいよ死を覚悟し、シユミットは両目をふさぐ。

そして、包丁が自身に振り下ろされる直前、キン！という甲高い金属音が響いた。

目を開けると、目の前に一本のピックが落ちており、POHは包丁を振り下ろすのを途中で止めていた。

「悪いいな、ちよつと待つてくれねえか？」

遠くから響く、聞き慣れた男の声。

唯一動く頭を動かすと、こちらに向けて大剣を背負った赤髪の剣士が歩いて来る。

「そいつらにはまだ、話てえことがたくさんあるんでな」

不敵な笑みを浮かべながらラフコフ達に向けてそう言ったのは、ジエネシスだ。

「……何もんだ、てめえ？」

POHが包丁をジエネシスの方に構えて尋ねた。

すると、ザザがPOHの方を向き、

「ヘッド、奴だ。もう、一人の、《黒の、剣士》、名前は、ジエネシス」それを聞き、POHはヒュウ、と口笛を鳴らすと、

「へえ、お前さんがもう一人の『黒の剣士』か……だが、こんなところにノコノコ一人でやつて来て良いのかよ？」

それに対してジエネシスは軽く笑つて、

「だあくれが俺一人でてめえら3人を相手にするつて言ったよ？」

「その通りだ」

するとジエネシスの奥からもう一人の黒い少年、キリトが現れた。

「てめえもいるのか……」

P O H が忌々しげに言った。

「俺たちだけじゃない。こんな事もあるうかと、既に援軍を呼んである。お前達3人で、攻略組30人を相手にしてみるか？」

そう言いながら片手剣を引き抜き構えた。

一触発の緊張感が漂ったが、不意にP O H が指を鳴らすと、後ろの二人は構えを解いて武器を収めた。

「……行くぞ」

そう言つてP O H は歩きだし、二人もそれに続く。

が、不意にジェネシスの横で立ち止まると、

『黒の剣士 ジェネシス』、と言つたな？」

ジェネシスは目線だけをとなりのP O H に移す。

「……貴様はこの世界で必ず殺す。貴様に『黒の剣士』の名は似合わん。『黒の剣士』の名は、一人で十分だ」

威圧感のある声でそう言った。

「……あのなあ、俺だつて自分でこの名前を語つてるわけじゃねえ。気に食わねえんなら、てめえでとつておきの二つ名でも考えてくれ」

ジェネシスは軽いため息をつきそう言った。

P O H は「……ふん」と軽くこぼすと、そのまま歩きだし、霧の中へと消えて行つた。

それを見届けると、キリトは背中に片手剣を収める。

「ふう……さて、また会えて嬉しいよ、ヨルコさん。そして……そっちは初めましてかな、カインズさん」

ヨルコはそう言われて申し訳なさそうに目を伏せる。

「全てが終わったら、お詫びに何うつもりでした……信じてもらえないでしょうけれど……」

ヨルコの言葉にキリトは気まずそうに笑う。

「あー、その事なんだがヨルコさん……」

そしてジェネシスが代わりに前に出て、

「実はもう全部知ってました、的なの？」

ジェネシスの言葉にヨルコとカインズは目を見開いた。

すると、

「ジェネシス、キリト！助けてくれた礼は言うが、何で分かったんだ？あの3人が襲ってくる……」

漸く麻痺が解けたシュミットが片膝をついて尋ねた。

「いや、分かった訳じゃねえさ。あくまであり得ると推測したままだ。杞憂であつて欲しかったんだがな……」

「なあ、カインズさん、ヨルコさん。あんた達は、あの二つの武器をグリムロックに作ってもらったんだよな？」

ヨルコとカインズは少し目を合わせると、ジェネシス達の方に向き直り、

「最初は、気がすまないようでした。もう、グリセルダさんを安らかに眠らせてあげたいって……」

「でも、僕らが一生懸命頼んだら、やっと武器を作ってくれたんです」ヨルコ達の言葉を聞き、キリトは首を横に振りながら言う。

「残念だけど、あんた達の計画に反対したのは、グリセルダさんの為じゃない」

「あんたらが圈内PKなんて派手な演出をしたら、大勢の人が見たら誰かが気づいちゃうとグリムロックは考えたんだ。」

「ま、俺たちが気づいたのもほんの30分前だがな……」そしてジェネシス達は指輪事件の真相を全てを語った。

「……じゃあ、グリムロックが事件の犯人なのか？あいつが、グリセルダを？」

「いんや、流石に直接手は汚さなかっただろうぜ。殺害は汚れ仕事専門の奴に依頼したんだろ。その相手は、さつきまでいた『ラフィン・コフィン』どもだな」

ジェネシスがシュミットの言葉を否定した。

「そんな……じゃあ、何でグリムロックさんは、私達の計画に協力してくれたんですか?！」

「あんた達は、グリムロックに計画の全てを話したんだろ？なら、それを利用して事件の真相を永久に闇に葬ることが可能だ。あんた達3人が集まったところを、纏めて消せばいいと……」

キリトの言葉にシユミットは納得したように頷く。

「そうか、だからここに『ラフィン・コフィン』の3人がいたのか……」
「多分、グリセルダの殺害を依頼した時からパイプがあったんだろう
ぜ」

肯定するようにジエネシスが首を縦に振り、ヨルコは力無くうなだれた。

「二人とも、いたわよ」

不意にアスナの声が響く。

「んじやあ、詳しいことは直接本人から聞こうじゃねえか……なあ、
グリムロックさんよお？」

ジエネシスはそう言いながら振り返る。

そこには、ティアとアスナに挟まれた男性がいた。

長身で革製のロングコートに身を包み、サングラスをかけている。

「やあ、久しぶりだね。みんな」

男ーグリムロックは皆を見回した後、穏やかな口調で口を開いた。

「グリムロック、さん……貴方は……本当に……？」

ヨルコは力無い言葉で問いかける。

だがグリムロックは不気味な微笑を浮かべるだけで何も答えない。

「何でなのグリムロック!? 何でグリセルダさんを……奥さんを殺してま
で、指輪を盗んでお金にする必要があったの?!」

中々答えないグリムロックに業を煮やし、ヨルコは両目に涙を溜めながら叫んだ。

「金……? 金だつて? く、くくく……っ」

不気味に肩を震わせ笑い出す。

「金のためじゃない、私は彼女を何としても殺さなければならなかつ
た……彼女がまだ私の妻である間に」

そこで一旦言葉を区切り、目を伏せて告げる。

「……彼女は現実でも、私の妻だった」

その言葉で皆は目を見開いた。

つまりこの男は、自らの手で最も大切である筈の存在を殺したこと

になる。

グリムロックは続けた。

「彼女は私にとって、可愛らしく従順で、唯の一度も夫婦喧嘩をした事もなかった。

だが共にこの世界に囚われた瞬間、彼女は変わってしまった……強要されたデスゲームに怯え、竦んだのは私だけだった。彼女は現実にはいた時よりも、遥かに生き生きとして充実した様子だった。

その時に私は知ってしまった……私の愛した『ユウコ』は消えてしまったのだと!!」

両肩をわなわなと震わせながら言葉を続ける。

「ならば……ならばいつそ！この合法的殺人が認められるこの世界で『ユウコ』を……永遠に私の思い出の中に封じてしまいたいと思った私を、誰が責められるだろう?!」

狂気的な笑みを浮かべながらそう叫ぶグリムロック。

「そんな……そんな理由であんたは、奥さんを殺したのか……?」

キリトが信じられないものを見るような表情で問う。

「十分すぎる理由だよ探偵くん。君にもいつかわかるよ……愛情を手に入れ、それが失われた時にね」

グリムロックはキリトに対し嘲るような笑みを浮かべながらそう告げる。

だが、ジェネシスがグリムロックの方に歩み寄る。

「誰が責められるか……だって?」

次の瞬間、ジェネシスの鉄拳がグリムロックの左頬に炸裂した。

『バキッ!』という鈍い音を立てたのち、グリムロックは地面に倒れこむ。

「俺たちが……社会が……世界中がてめえの行いを責めるに決まってるだろクソ野郎」

グリムロックは左頬を抑えながらジェネシスを見上げる。

ジェネシスはそのような彼を鋭い目つきで見下ろしながら

「人殺しが認められる場所なんざある訳ねえだろ。」

てめえが嫁さんを殺しても何も感じてねえ時点で、嫁さんに抱いて

たのが愛情なんかじゃねえのは明らかだ」

「そう言つてジェネシスはしゃがみ込み、グリムロックの胸ぐらを掴む。」

「てめえはただ、モノとしてしか嫁さんを見てなかったんだらう？」

「そんなもん愛なんかじゃねえよ……単なる支配欲と所有欲だろうが!!」

その瞬間、グリムロックは目を見開き、そのままうな垂れた。

ジェネシスはそのな彼を突き放すように下ろす。

するとグリムロックにカインズとシユミットが歩み寄り、両肩で支えるように持ち上げる。

「この男の処遇は、私たちに任せてもらえませんか？」

「心配せずとも、私刑にだけはかけないと約束する」

二人の言葉に、

「ああ……分かったよ」

ジェネシスは頷き答えた。

カインズたちはジェネシス達から背を向けて歩き出す。

ヨルコは彼らに続くが、一度ジェネシス達の方を振り返り、

「皆さん、ありがとうございます。お陰で真相が分かりました。これできつと、グリセルダさんも浮かばれます」

そう言つて深々とお辞儀し、カインズ達の方へ駆けて行った。

夜が更け、薄暗かったあたりが白み始める。

「んじゃ、俺たちもこれで失礼するわ」

ジェネシスはキリト達から背を向け歩き始め、ティアもそれに続く。

「ああ、お陰で助かったよ」

「また最前線で会いましょう」

後ろからキリト達の声が聞こえ、ジェネシスは背を向けたまま手を振った。

「ねえ、久弥……」

不意にティアが歩きながら尋ねる。

「もし、結婚した相手の隠れた一面とかが分かったら、久弥はどうする

？」

ジェネシスは少し思案した後、

「……どうもしねえよ。『へーそうなんだー』くらいにはなると思うがな。それで関係性が変わるくればなら長続きしねえよ。その例がさっきのグリムロックだろ」

そしてジェネシスはティアの方を向き、

「つか、てめえの隠れた一面とかまだあったりするんのか？割と一緒にいることが多いから結構お前のこと知ってると思うんだけどな」

ティアはその問いに対し、苦笑しながら

「あはは……どうだろうね」

と答え、歩みを進めるがふと何かが引っかかり足を止める。

「(ちよつと待って……わたし結婚する相手が自分だったら、なんて言ったっけ？言っていないよね？なのに久弥は今、私のことで話した……それってつまり……そういう事なの?!何よ！嬉しいけどちよつと気が早いんじゃないの久弥ああああ!!)」

ティアが一人面食らっているのを見て

「……おい、何してんだおめえ？」

ティアはその声でハッと我に返り、

「う、ううん！何でもないの!!さ、早く戻ろつか!!」

そう言つてジェネシスの手を引き歩き出す。

何故かティアの表情は、照らし出す光の影響もあつてかとても輝いていた。

十一話 ラフコフ討伐戦

その日、ジエネシスとティアの二人は攻略を終え、帰路に就いていた。

そこへ入った一通のメール。差出人は、血盟騎士団副団長のアスナからだ。

『今すぐに、血盟騎士団本部に来て。大事な話がある』

二人はその内容を見て訝しんだ表情になった。

「何だってんだ一体…?」

「重要なクエストでも見つかったのかな…?」

考えても仕方がないため、二人は呼び出された場所、五十五層のグランザムにある血盟騎士団本部へと向かう。

グランザムは《鉄の都》という名で知られ、文字通り物々しい尖塔や要塞のような建物がいくつも立ち並ぶ。

そしてこの層で最大の規模を誇る豪壮な建物。それこそが、SAO内最強ギルド、血盟騎士団の本部である。

大きな門でジエネシス達を出迎えたのは、いつも立っている門番ではなく、白と赤の騎士服を身につけた少女、そしてジエネシス達をこの場に呼び出した本人であるアスナだ。

「よお、副団長自らお出迎えたあ恐縮なこったな」

ジエネシスがいつものように軽く手を振りながら話しかける。

「私と呼んだからね。それに、この建物は結構複雑だから、案内してあげないと」

アスナは眉をハの字に曲げ、困ったような笑顔で答える。

そしてアスナの案内でやって来たのは、ひとときわ大きい会議室。

そこには血盟騎士団は勿論ボス攻略でよく見る聖竜連合やその他のギルド、更に見知った顔もいくつあつた。

ギルド《風林火山》のリーダー、クライン。

商人の重戦士、エギル。

ソロで攻略に挑む《黒の剣士》キリト。

ジエネシスは一瞬、ボス攻略の会議でも始まるのかと考えたが、も

しそうなら態々こんな所まで来なくとも、最前線の層でやれば良いだけの話。いや、いつもならそうしている。

「だとしたらここに集められたのは十中八九ボス攻略の為ではない。一体何のためなのか……？」

「…もうすぐ、全体に話があるわ。私はもう行かなくちゃだから、しっかり聞いててね」

アスナはそう言い残し、プレイヤー達の間を掻き分け前の方へと消えた。

やがて、部屋のホロパネルの前に一人のプレイヤーが姿を現した。

「聖竜連合の幹部にして、以前の圈内事件の際にジエネシス達が関わった男性、シュミットだ。」

「皆、急に呼び出してしまつて済まない。だがどうしても、諸君らの力が必要な案件が発生したため、呼び出させてもらつた」

そしてシュミットはそこで一旦話を区切り、

「……先日、あの殺人ギルド《ラフィン・コフィン》のアジトが判明した！」

その言葉に皆が耳を疑つた。

《ラフィン・コフィン》は言わずと知れたSAO内史上最も凶悪なギルド。ありとあらゆる手でプレイヤー達を死に追いやり、長らく多くのプレイヤー達を恐怖に陥れて来た。

そのアジトは半年前から搜索されていたものの、場所は愚か手がかりすら掴めずにいた。

「数日前、ラフコフのメンバーを名乗る者から、ギルド本部にメッセージが届いた。そのメッセージに記載されていた場所に我々の偵察隊を送り込んだ所、ラフコフのアジトで間違い無いと判断された！」

そしてシュミットはホロパネルに詳しい座標と地図を表示する。

そこは攻略組でも見落としていた低層のダンジョンだった。

「よつて今この場にいるメンバーで、ラフコフの討伐に当たりたい。だが、奴らはレッドプレイヤーだ。討伐戦には諸君らの命を懸けてもらうことになる。」

もし辞退したい者がいるのなら構わない。その作戦に命をかけら

れるものだけ、残ってくれ」

恐らく皆が逃げ出したかっただろう。

ジェネシスとてそうだ。自分が死ぬという恐怖は勿論だが、それ以上にティアの身にもしもの事があつたら……と思うと参加したく無いという思いが湧き上がる。

だがここで奴らを叩かねば今後も更なる被害が出るのも事実だし、奴らを野放しにしているのはティアにラフコフの魔の手が差し掛かる危険が残り続けるのも事実。

ならば今この場で何としてもティアの身を守りつつ、ラフコフを潰すのが最優先と言える。

故にジェネシスは残った。そして恐らく、ティアやキリト、その他のプレイヤー達も同じ思いなのだろう。誰一人として、部屋から出るものはいなかった。

シユミットは彼らを見渡すと心からの笑顔を浮かべ、

「…ありがとう。では、会議を続行する」

そして、ホロパネルを指しながら作戦会議が続けられた。

『ラフィン・コフィン討伐作戦』は翌日決行される事となった。

数刻後、血盟騎士団本部から解放され、いつも寝泊まりしている宿部屋に戻ったジェネシスとティアは同じベッドに腰掛けていた。

いつもならここで他愛ない会話が交わされるのだが、いまこの部屋には重い空気が流れていた。

「ねえ……久弥は、どうするの？明日の討伐戦」

不意にティアが口を開き尋ねる。

「んー、そーだなあ……」

ジェネシスはゆっくり息を吐きながら

「……俺は、参加するぜ」

ときつぱりと答える。

「どうして？ラフコフはレッドだよ？その他の……殺されちゃうかも、しれないんだよ？」

ティアはジェネシスの方に寄りながらおずおずと尋ねる。

「それは別に普段のボス戦でも同じ事だろ？俺はもう奴らを野放しに

したくねえ。ボス戦でも命張ってんのに、加えて奴らに命狙われるな
んぎももうんざりだ」

それを聞き、ティアは一度目を伏せ、その後もう一度顔を上げる。
その瞳には決意が現れていた。

「…それなら、私も行くよ」

「おいおい、無理しなくたって良いんだぜ？おめえはここに残って
……」

待っていてくれ……というジェネシスの言葉をティアは遮る。

「そんな危ない所に、一人で行かせないよ」

いつになく険しい表情にジェネシスは何も言えなくなる。

ティアはジェネシスの両手を包み込むように握ると、即座にいつも
の優しい笑顔を浮かべ、

「……私は、この大きな手に何度も守られた。何度も救われた。久弥
がいてくれたから、今の私があるんだよ？」

だから、今度は私が久弥を守る。どんな事があっても、久弥は死な
せない」

そう言い切ったティアに対し、ジェネシスは苦笑し

「……へっ、もう十分守られてんよ。第一層のボス戦の時も、黒猫団の
時もな。」

俺も、テメエだけは絶対死なせねえ。元よりそのつもりでやって来
てるしな」

そう言って、ティアの手を握った。

「無理はすんじゃねえぞ？」

「久弥こそ」

—————

ラフコフのアジトがあったのは、十二層のサブダンジョンだった。

特に美味しいクエストがある訳でもなく、ミドルゾーンのプレイヤードでもここに来る事など全く無い。だからこそ、奴らはここをアジトに選んだのだろう。

原理不明な浮遊する石畳の上を進んでいき、ダンジョンを慎重に進んでいく。

ある程度進んだところで、シユミットが討伐隊の方を振り返る。

「もうじき報告のあった《ラフィン・コフィン》のアジトだが、作戦の前にもう一度確認しておく。

奴らはレッドプレイヤーだ！我々を殺すことに何の躊躇も無いだろう。だからこちらも躊躇うな！迷ったらこちらが殺られる！」

シユミットの言葉に皆は気を引き締めた。

彼の言ったことを要約すると、『殺られる前に殺れ』と言うことだ。

「…とは言え、レベルも実力もちちらの方が圧倒的に上だ。案外、戦闘にならずに降伏、と言うこともあり得るかもな」

シユミットが零したジョークに軽い笑いが起きる。

ジェネシスは特に笑うこともなくただ討伐隊の様子を静観していた。

が、ここでふとジェネシスの耳に何か妙な音が聞こえた。

それは『キン』と言う金属音。そして複数の足音。

ふと視線を向けると、そこには既に武器を構えた無数のラフコフメンバーが。

「……この野郎ッ！」

ジェネシスは咄嗟に背中の大剣を引き抜き、斬りかかって来たラフコフのメンバーと鏝迫り合いに持ち込む。

STR値はジェネシスの方が圧倒的に高いため、そのまま敵を押し込んだ後腹部を一閃した。

だがその後も、休む間も無く次々とラフコフメンバーは襲いかかってくる。

「バカな、情報が漏れていたのか?！」

シユミットは信じられない、という様子で叫ぶ。

恐らくそれ以外に無いだろう。何者かがこちらの作戦内容を漏ら

していたのは間違いないが、今はそれどころでは無い。討伐隊のメンバーは襲いかかる凶刃を必死の思いで捌いていく。

とは言え、先ほどシユミットが言った通り実力、レベルは勿論人数もこちらが上だ。突如として襲いかかった強襲にも何とか持ちこたえた。このまま落ち着いて一人ずつ包囲し捕縛すれば何とかなる。

そして一人、既にHPがレッドゾーンに達し、複数の討伐メンバーで包囲された者がいた。

「ここまでだ、大人しく武器を捨てて投降しろ」

血盟騎士団の男が長剣を突きつけながら降伏を勧告する。

が、

「き、ひひっ……ひひひひっ」

この状況でラフコフの男は尚、不気味に肩を震わせながら笑い出した。

そして、右手に持った湾曲した片刃で血盟騎士団の男を斬りつけたのだ。

「おい、何のつもりだ?!」

斬られた男は叫ぶが、ラフコフの男は聞く耳を持たず、ただ狂気的な笑いを上げながら滅茶苦茶に剣を振り回す。

「ぐっ……うわあああーっ!!」

そして遂に、血盟騎士団の男はガラス片となって消滅した。

ラフコフのメンバーは皆、人の命をなんとも思っていない。そしてそれは、自分自身の命ですらもだ。だからこそ、HPがレッドゾーンに入っていようが、ただ目の前の人間を殺す。

徐々に討伐隊が押されていく中、ティアは一人奮戦していた。

持ち前の速さと正確な斬撃を惜しみなく繰り出し、ラフコフのメンバーを次々と戦闘不能に持ち込んでいく。無論、それは殺害と言う方法ではなく、艶やかに足を斬り飛ばす事による部位欠損ダメージによるものだ。

HPをレッドゾーンに持って行っても攻撃をやめないなら、もう動けないようにすれば良い。腕や足を切り落とせば、もう攻撃すること

HPは確かに減っている。しかし問題はそこでは無い。ティアのHPバーが黄色く点滅している。麻痺毒だ。

殺人集団の目の前で麻痺毒にかかって動けない人間など、格好の餌と言っている。

うつ伏せになつて倒れるティアの周りに、次々とレッドプレイヤーが集まり始めた。そのフードの奥に、狂気的な笑みを浮かべながら。

遂に訪れた、死と言う存在。

息が浅くなり、動悸が早まるのを感じる。

「……い……嫌………っ！」

発せられたティアの声はもう、攻略組で《白夜叉》と呼ばれる戦士の物ではない。死の恐怖に怯え、なんの力もないただの少女、《一条雫》の声だった。

そんな彼女に、無慈悲にも振り下ろされる凶刃。

確かにやってくる死と言う存在を前に、ティアは両目を堅く閉じた。

「お願い……助けて………」

久弥っっ!!」

ティアは心の中で強くそう念じた。

その時だった。

赤い閃光がティアを囲んでいたレッド達を一閃した。

「……おい」

聞き慣れたその声に、ティアはゆっくりと目を開いた。

目の前にいたのは、今正に自分が助けを求めた存在。

「ひ………さ、や………う？」

ジエネシスだった。

彼は鋭い眼光を放ち、レッド達を睨みつける。

「……俺の女に、テメエらのその薄汚ねえ手で触れんじゃねえ」

ジエネシスは静かに、それでいて凄まじい怒気と威圧感を込めた声で、ティアを襲おうとしていたレッド達に向けてそう放った。

「ヒャアアアッ!!」

最早人間のものとは思えない奇声を上げながら、一人のレッドが短剣を片手にジェネシスに飛びかかる。

だが……

「ジャマだ、失せろ」

ジェネシスは迷う事なく大剣を横薙ぎし、飛びかかったレッドを数メートル先へ吹き飛ばした。

吹き飛ばされたレッドは、その体をガラス片に変えて消滅した。

「女の前だからって、カッコつけてんじゃねえぞオオオオー!!」

「死ねやああーっ!!」

それを見て逆上した他のレッド達四人が、一斉にジェネシスに飛びかかった。

「——喧しいんだよ、ゴミ共が」

それに対しジェネシスは静かにそう吐き捨てると、ソードスキル《サイクロン》を発動し四人のレッドを纏めて消しとばした。

これでジェネシスは、五人の命を奪ったことになる。

ティアを囲んでいたレッド達はジェネシスによつて消され、ジェネシスはゆつくりとティアの元にしゃがみ込んだ。

「ひさや………っ!」

ティアは悲痛な顔でジェネシスを見上げる。

ジェネシスは眉をハの字に曲げて軽く笑い、

「……これ、飲んでて大人しくしてろ」

そう言つて、ジェネシスは回復ポーションをティアの手に握らせ、再び立ち上がると踵を返して走り出した。

「ま——」

待つて、と叫ぼうとしたが、既にジェネシスは遠くへ走っていた。

—————

ティアを救助した後、ジェネシスはキリトを呼び出した。

「ジェネシス、どうしたんだ?！」

襲いかかるラフコフのプレイヤーを何とかいなしつつ、キリトはジェネシスに問いかけた。

「……ティアが麻痺毒にやられた。あいつを守ってやってくれ」

そう言っ、ジェネシスは大剣を構える。

「守るって……お前はどするんだ?」

「あいつら……叩き潰してやる」

そう言っ、ジェネシスは駆け出した。

キリトはジェネシスのやろうとしていることを察し、

「っ！よせ、ジェネシス！やめろ!!」

と叫んで止めようとしたが、間に合わなかった。

そこからジェネシスは、ラフコフのプレイヤーを構わず本気で斬り続けた。当然、攻略組の中で随一の攻撃力を持つジェネシスの一撃となれば、所詮ミドルゾーンのプレイヤーでしかないレッド達はひとたまりもない。

ある程度レッド達を仕留めたところで、ジェネシスは攻撃を一旦止める。

「ラフコフ共お!!」

その叫びで、混戦を極めていた双方のプレイヤー達は足を止め、ジェネシスの方へと視線を向ける。

「テメエらクス共の相手は、今から俺が引き受けてやる。死にてえ奴からかかって来い！」

俺が直々に、纏めて地獄に送ってやらあ!!」

その直後、残ったラフコフのメンバー達は一斉にジェネシスに飛びかかった。

「うおおおおらあああああー!!!」

ジェネシスはもう手加減せず、ソードスキルを惜しみなく使用し、次々とレッド達を葬っていく。

ジェネシスの周囲では、無数のガラス片が舞っていた。

「もういい……もういいよ……久弥っ……!!」

ティアは両目から涙を流しながら言うが、その悲痛な声はジエネシスには届かない。

ティアはただ、自身の不甲斐なき、無力さにただ拳を握りしめるだけだった。

そして、ジエネシスがある程度ラフコフのメンバーを葬り去った時だった。

突如、ジエネシスの頬を一筋の光が掠め取る。

フードを被っているのは同じだが、髑髏を模したマスク、そしてエストックを使っているのは、ラフコフの中でも一人しかない。

「《黒の、剣士》、少し、やりすぎだ、大人しく、しろ」

《赤目のザザ》は、ジエネシスに細剣の剣先を突きつけながらそう言った。

すると、ジエネシスの背後から何かが投げつけられた。

ジエネシスは振り向きざまに大剣を横薙ぎし、飛来物を撃ち落とす。

地面にカラン、と言う金属音を立てて落ちたのは、毒POTを刃に塗った特製の毒ナイフ。

「ヒヤハハハハッ!!これでテメエも晴れて《人殺し》だなあー、《黒の剣士》イイー!!!」

子供のように叫びながらジエネシスの背後に飛び降りてきたのは、ラフコフの毒ナイフ使い 《ジョニー・ブラック》。

ラフコフの三幹部のうち二人がジエネシスの前に現れた。
流石にこの二人は、一筋縄では行かない。

しかし、

「へっ、上等だ……かかって来いテメエらああー!!!」

ジエネシスは大剣を肩に担ぐとその場から飛び出した。

そしてザザとジョニーの前に到達すると同時に、ソードスキル《ア
バランシュ》で斬りつけた。

だがこの攻撃をただで食らう程、ラフコフの三幹部は甘くない。

二人は咄嗟にバックステップを取ってその攻撃を躲すと、そこから

お返しとばかりにザザは細剣ソードスキル《スター・スプラッシュ》、
ジョニーは短剣ソードスキル《ラビット・バイト》を発動し、ジェネ
シスに飛びかかった。

ジェネシスはソードスキルの硬直のため動けず、二人の攻撃を受け
てしまう。

「ぐっ…くくっ、足りねえなあ〜！そんなもんかあ?!」

しかしジェネシスはそう叫ぶと、再び大剣を振り回してザザとジョ
ニーを吹き飛ばした。

その攻撃で、地面に倒れこむ二人。

ジェネシスは二人を見下ろし、大剣を上に掲げる。

「俺の前に……………」

ひいれ伏せええええーっ!!!」

そう叫ぶと、ジェネシスの大剣の刃がオレンジ色に光る。

両手剣広範囲ソードスキル《メテオ・フォール》だ。

ジェネシスはそれを思い切りザザとジョニーに振り下ろす。

「やめてええええーっ!!」

だが、一人の少女の叫びでそれは中断された。

叫んだのは、ティアだった。

「もういいよ…………もうやめてよ久弥っ…………」

ティアの両目からはとめどなく涙が流れ、ジェネシスはそれを見て
剣を下ろすしかなかった。

その後、討伐隊によって戦後の後処理が始まった。

主に大手ギルドメンバーが中心になり、捕縛したラフコフのメン
バー達を引き連れ外に出ていく。

ジェネシスは未だ泣き続けているティアを宥めていた。

そこへ、シユミットが歩いて来た。

「ジェネシス、こいつがお前と話をしたいそうだ」

そう言つて振り返ると、そこには二人の聖竜連合のメンバーに拘束された髑髏の仮面を被つたプレイヤー、《赤目のザザ》がいた。

「《黒の、剣士》、ジェネシス……俺の、名前は……」

そう話しかけるが、ジェネシスはザザから背を向けたままそれを遮つた。

「言うな。てめえの名前なんざ興味ねえ。俺とてめえが会うことなんざ二度とねえよ」

冷たくそう突き放した。

ザザはそれを聞き唇を固く噛み締め、

「……貴様は、後で、ちゃんと、殺す……!」

そう告げると、ザザは連れていかれた。

大方ラフコフのメンバーが監獄へ送られた後、今度はジェネシスの方からシュミットに声をかけた。

「……どうした?」

シュミットがジェネシスの方を振り返ると、

「俺にも何か、罰をくれよ」

憔悴しきつた顔で軽く笑いながらそう言った。

ティアはそれを聞き目を見開く。

「な、何を言ってるんだジェネシス!!」

キリトも驚愕した表情でジェネシスに掴みかかる。

だが、ジェネシスはそれを片手で制し、

「この戦いで、俺は何人も殺した。俺も奴らと同類なんだよ……相手がレッドだとか、グリーンだとか関係ねえ。」

この落とし前はきっちりつけねえと、示しがつかねえだろ?」

「久弥っ!」

ティアはまた悲痛な顔でジェネシスの方を見た。

シュミットはそれを聞き、しばし苦い表情で思索した後、

「……よく分かった。処罰に関しては血盟騎士団と協議の元決定する。決まったらまた連絡する」

そう言つて、シュミットは背を向けて歩き出した。

が、その途中足を止め、背を向けたまま

「……お前のやったことは、決して正しいとは言えない。

だが、お前がそうすることで救われた命があったのも事実だ。そのことに関しては、礼を言わせてくれ」

そう言った後にジエネシスの方を振り返ると、苦笑しながら

「また、借りができたな」

そう言うと、再び背を向けて歩き出し、ダンジョンから出て行った。今この場には、ジエネシスとティア、キリトの3人がいた。

しばしの沈黙の後、キリトは歩き出した。

「……じゃあ、俺はもう行くよ」

そう言って歩き出す。

「ジエネシス、あまり気負いすぎるなよ?」

そう言い残し、キリトもダンジョンから姿を消した。

とうとう残ったのはティアとジエネシスの二人となった。

「……俺たちも帰ろうぜ?」

ジエネシスがそう促すと、ティアは黙って頷き、立ち上がって歩き出した。

—————

いつも寝泊まりしている宿部屋に戻った二人だったが、そこにいつもの会話は無かった。

交わしたのは最低限のやり取りだけ。夕食、風呂を順番に済ませた後、いつもなら就寝準備に入る。

だが、二人は中々眠らなかつた。

ティアは部屋の窓の近くに据え付けられた椅子に座り、窓の外の月明かりを眺め、ジエネシスはベッドに腰掛けていた。

昨日とは違う……いや、昨日よりも重苦しい空気が二人を包む。

だが、ここでティアが漸く口を開いた。

「……ごめんね?」

ジエネシスは首をティアの方に向ける。

ティアは窓の外を見つめたまま言葉を続ける。

「私……久弥を守るって言ったのに……私のせいで、久弥は……」
それに対してジエネシスは首を横に振り、

「おめえのせいじゃねえ。あれは誰のせいでもありやしねえよ」

「違う……私のせいなの……私が、あそこで躊躇したからっ………ひ
さやに人を、殺させた……っ」

そしてティアは、再び泣き出した。

守ると誓った筈の、支えていくと決めたはずの相手に、自分の不甲斐なさのせいで重すぎる重荷を背負わせてしまった。

そのことが堪らなく悔しく、申し訳無くて止まなかったのだ。

「ごめっ……ひさやつ……ごめんなさっ………!」

大粒の涙をポロポロと零しながら詫びるティアを見て、ジエネシスは黙って立ち上がるとティアの方により、後ろから手を回した。

「ふえ……ひさや……?」

ティアはジエネシスの顔を見上げながら問いかける。

「言ったら?俺はてめえを守るってよ。」

俺が人殺しと呼ばれようが、俺はてめえが生きてさえくれりやそれで良いんだよ。

好きな奴に生きてて欲しいって思うのは、当然だろうがよ?」

そう優しく語りかけ、ティアに回した腕に力を込める。

ティアはその腕を両手で優しく掴み、

「私も……私も、久弥に生きてて欲しい……ずっと、ずっと傍にいたい……」

「ああ、俺もだティ………雫。俺の隣にいる。俺の隣で、生き続けろ」
「……うん………!」

その後、ジエネシスは少し思案した後、意を決してメニュー欄を操作し、とある項目を決定する。

すると、ティアの目の前に一つのシステムメッセージが表示された。

「えっ……っ？」

それを見てティアは目を見開いた。
当然だ。そこに書かれていたのは……

『Genesis から《結婚》が申請されました』

というメッセージだったのだから。

「えっと……久弥……これは……っ？」

ティアは理解が追いつかず、ただ混乱している。

「見たまんまだバーロー」

そう言っつてジェネシスは目を閉じて息を吸い込むと、

「雫う!!俺と結婚しろーっ!!」

と叫んだ。

ティアは目を見開いて硬直していたが、直ぐに満面の笑みを浮かべ、立ち上がってジェネシスの方を振り返り、

「はいっー喜んでーっ!!」

と叫び返した。

そして、システムメッセージのOKボタンをタップ。

『おめでとうございます。Tia との結婚が成立しました』

『おめでとうございます。Genesis との結婚が成立しました』

二つのシステムメッセージが二人の前に表示され、ささやかなファンファーレが流れる中、二人は熱い口付けを交わした。

—————

ラフコフ討伐戦での犠牲者は、合計で30人にも登った。

そのうち、討伐隊は僅か3名なのに対し、ラフコフからは27名も

犠牲者が出た。

そしてその27名のうちの約8割は、ジエネシスが葬った者たちだった。

ラフコフ討伐戦で行ったジエネシスの行為には、当然ながら賛否が分かれる事となった。

否定派からはジエネシスも監獄に投獄しろという意見も現れた。

一方で賛成派からは、ジエネシスが居なければ討伐隊に更なる多くの犠牲者が出たのも確かであり、またジエネシス一人に殺人の罪を背負わせる結果を生み出した討伐隊に対する批判意見も出た。

そうした様々な意見が出る中で、ジエネシスに下された処罰は『一週間の謹慎』であった。

ジエネシスはそれに対して不平不満は一切口にする事なく、甘んじてそれを受けたと言う。

しかしその後、ジエネシスに対する評価が二分された状態は依然として続く事となった。

そうした中で、ジエネシスの行いを受け、新たな二つ名が出現した。

畏怖と侮蔑の二つの意味を持つ名、それは……

『ダークナイト暗黒の剣士』

十二話 素材集め

第四十八層 リンダース

この層は、アインクラッドの中で最も武具屋・鍛冶屋の多い層で、攻略組を含めた多くのプレイヤーはこの層で自身の武器のメンテナンスや制作依頼を注文する。

そして今日、この層に二人のプレイヤーがやって来た。

「さて……ここにあんだよな？隠れた名店つてのは」

転移門が青白く光り、中から二人のプレイヤーが現れた。

赤髪の男性剣士はついた瞬間周りを見渡しながらそう呟く。彼の名は《ジェネシス》だ。

「そうみたいだね。情報だと、この街から圏外ギリギリのところ到店を構えているみたいだよ」

ジェネシスにそう教えるのは、銀髪に白マント、そして腰に一振り
の日本刀を差した女性剣士、《ティア》だ。

何故彼らがここにいいのか、時は数日前に遡る。

—————

その日、攻略を終えた二人は拠点にしている宿へと帰宅途中だった。

だがその途中、何気なくメニューからスキル欄を見ていたジェネシスが何かを見つけた。

「ん……？」

そこにあるのは、両手剣スキル・追跡・隠蔽など普段見慣れたもの
の間に、《暗黒剣》と表示されていた。

「何だこりゃあ……？」

《暗黒剣》などと言うスキルは間違いなく見たことも聞いたこともな

い。

「どうしたの、久弥？」

ティアがジエネシスの方を見て訝しんだ表情で尋ねる。

「いや、なんか見慣れねえスキルがあつてな……」

ジエネシスがそう言うのと、ティアはジエネシスのメニュー欄を覗き込む。

「《暗黒剣》？そんなスキルこの世界にあつたっけ？」

「知らね。少なくとも俺は見たことがねえな……」

するとティアは何かを思い出したように「あつ！」と手を打ち、メニューを操作する。

「実は私にもあるの。ちよつと気になるスキルが……」

そう言つてティアはジエネシスにそのスキルを見せた。

「……んん？《抜刀術》？」

名前からして間違いなく刀——特に日本刀に関するスキルだが、刀スキルは既に実在しているし、そもそもこの世界の刀スキルは、曲刀スキルを極限まで高めたことによつて初めて出現するエクストラスキルだ。

「んん……うし、軽く試してみるか」

ジエネシスの提案にティアは頷き、迷宮区の誰もいない所へと足を運んだ。

適当な場所へ進むと、丁度目の前にモンスターがポップした。現れたのはゴブリン型のモンスター。

「じゃあ、まずは私から行くね」

そう言つてティアはメニュー欄から《抜刀術》を選択し、発動状態にする。

そして集中力を研ぎ澄まし、左半身を後ろに引き、右手を刀の柄に添える。所謂抜刀術の構えだ。

その瞬間、ティアの刀に青い光がともり、ソードスキル発動状態となる。

ゴブリンはティアに向けて棍棒を振り上げながら急接近する。

「——ふっ!!」

小さな、それでいて力強い掛け声と同時に、ティアは勢いよく刀を引き抜き、そのままゴブリンのがら空きだった腹部を一閃する。

「うおっ……い！」

ジェネシスはティアが見せた一撃に思わず唸り声を上げる。

たった一撃、されどそれは今まで見てきたティアのスキルと比べても規格外の速さ、正確さ、そして破壊力を有するのは一目瞭然だった。

抜刀術ソードスキル《蓮華》だ。

ゴブリンのHPはティアの一撃で既に半分には陥っている。

一撃だけで最前線の、それも迷宮区のモンスターのHPを半分も消しとばすなど、通常の刀スキルでは有り得ない事だ。

「すげえ……」

ティアも思わずそう呟いた。

だが、まだ半分のHPが残っているゴブリンはお返しとばかりに棍棒で再び攻撃を仕掛ける。

だが、ティアはそれを危なげなく躲し、再びソードスキルを発動する。

ティアの刀は先ほどのものより更に青い光を放ち始める。

「はっっ!!」

そしてティアは、刀を一思いに振り抜いた。

その瞬間、ティアの放った斬撃が青い弧を描いたままゴブリンに接近する。

しかし直後、目を疑う光景が二人を襲った。

斬撃がゴブリンに命中する直前、一つだった青い弧はそこから十に分裂し、ゴブリンを包囲する形で次々と叩き込まれた。

抜刀術ソードスキル《真蒼》

一振りの斬撃で十連撃に分裂する範囲技だが、今回は敵が一体だけだったためそれらは全て標的のゴブリンに命中する事となった。

が、範囲技の攻撃である為本来なら複数のモンスターに当たる筈の攻撃が全て一体のモンスターに命中すればどうなるか。

そう、オーバーキルである。

まあ、オーバーキルは特にペナルティや罰則が与えられるわけでも

ない為問題は無いのだが。

「……たった二回の攻撃で最前線のモンスターをオーバーキルたあ……たまげたなあ」

ジェネシスが感嘆の声をあげる。

「そうだね……それじゃ、今度はそつちのを見せてよ」

ジェネシスは頷くと、スキル欄から《暗黒剣》を選択。

直後、今度は三体のオーク型モンスターがポップした。

両手剣スキルは一体多数の戦闘に向いている為、この状況はジェネシスにとつてもつてこいといえる。

「行くぜ……」

ジェネシスは大剣を肩に担いだ。

普段ならば突進系スキル《アバランシユ》が発動されるのだが、今回は明らかに違った。

ジェネシスの剣から、赤黒いオーラが発せられているのだ。

オーク達はそんなジェネシスに構う事なく、右手に携えた片刃の剣を振りかぶる。

「うおおらあ!!!」

その瞬間、ジェネシスは大剣を横薙ぎし、そのまま反対方向へもう一度一閃した。

この二連撃の攻撃で、三体のオークはその身をガラス片に変えて消滅した。

暗黒剣ソードスキル《ヘイル・ストライク》

「おいおい、たった二連撃だぞ……う」

ジェネシスは今の自分の攻撃にあっけにとられている様子だった。幾ら攻撃力に長けた両手剣スキルとは言え、流石に二連撃だけで最前線のモンスターを消し飛ばせるほどの攻撃力はない。

「これは……中々の威力だね」

ティアもジェネシスの攻撃に少し苦笑していた。

「……しっかし、結局こいつあ一体何なんだろうな？」

ジェネシスは大剣を背中に収めると、もう一度スキル欄を開いて確認する。

「エクストラスキルだとは思っただけ……それにしても攻撃力とかスキル補正が高すぎるよね？」

ティアも抜刀術の文字を見て疑問符を浮かべている。
そこでジェネシスはとある事を思い出す。

「そっか……そうだな……血盟騎士団の団長もすげえやつ使ってたな」

「ああ、ヒースクリフ団長の……《神聖剣》だね」

ヒースクリフ……今や最強ギルドと謳われる血盟騎士団の団長にして、《聖騎士》の異名で知られるプレイヤー。

彼が使用するのは十字剣と盾。

そしていつの日か彼が豪語したヒースクリフ専用のスキル《神聖剣》。

「もしかしたら、この二つも神聖剣と同じ、私たち専用のユニークスキルだったりするのかな……？」

「かもな……んじゃ、とりあえずは新しい武器つくらねえと」

「え？」

疑問符を浮かべるティアに対し、ジェネシスは大剣をもう一度引き抜き、その刃を見せる。

それは先程までであった光沢感のある刃ではなく、完全に刃が溢れ刀身にいくつものヒビが入っているボロボロの刃だった。

「……見ろ、さっきの一撃だけでもうこんなボロボロだ。このスキルを使うには、それに耐えられるくれえの頑丈な剣を作らなきゃいけねえだろ？」

そう言われてティアも自身の刀を確認する。

ティアの刀もまた、激しい刃こぼれが発生し、刀身の真ん中には大きなヒビが入っており、いつ折れてもおかしくない状態だった。

「そっか……そうだね。どっちにしても、もうこの刀は使えないし」

ティアは苦笑し、メニュー欄から良さげな武器店を検索する。

「にしても、《暗黒剣》か……《暗黒の剣士》の俺にや御誂え向きのスキルじゃねえか」

ジェネシスはスキル欄の《暗黒剣》を見ながらそう呟いた。

そして現在に戻る。

今彼らは四十八層のリンダース主街区を歩き目的の武具店へと足を運んでいる。

やがて道に並ぶ建物が減っていき、徐々に人通りの少ない道に到達したところで、少し離れた丘の上に一軒の小屋と、大きな煙を吐く煙突が見えた。

恐らくあれが、今回ジェネシス達が目的としている店だ。

そして、いよいよ店の扉の前に到着する。

建物は煉瓦造りで、大きさはさほど大きくはなく、一人が生活できるといふほどの大きさの建物だった。

そして店の看板に書かれているのは――

《七色の武具店》

ジェネシスは早速ドアを開けた。

中には一つのカウンターと、壁には幾多の武器が飾られたいた。

その一つ一つが見ただけで業物と取れるほどの武器であり、この店

の店主の鍛冶スキルの腕前の高さをこれでもかと感じさせた。

「いらつしやいませ〜！」

中から元気な少女の声が響き、カウンター奥に据え付けられたドアが開かれる。

中から出てきたのは、グレーの長髪にまるでどこかのアイドルのようなドレスを身につけた少女だった。

「プリヴェートプリヴェート、お客様。《七色の武具店》へようこそ！」

「え？ぶ、ぷり……なんだって？」

ジェネシスは聞きなれない単語に疑問符を浮かべる。

「プリヴェートはロシア語での挨拶だ」

そこにティアが説明を加える。

「その通りです、お客様。詳しいんですね〜」

目の前のグレーの長髪の少女は感嘆の声を上げる。

「ああ、まあ小さい頃に少し習ってな」

ティアは苦笑しながらそれに応じる。

「あー、そんな事より…あなたがこの店の店主さんか？」

ジェネシスの問いに対し、

「その通りです。申し遅れました、《七色の武具店》の店主、《レイン》と申します！」

そう言つてレインという少女は人の良さそうな笑顔で会釈した。

「そっか、んじゃ早速なんだが店主さんよ、オーダーメイドを頼みたいんだが……」

するとレインは少し申し訳なさそうに

「ああ、申し訳ありませんお客様。今少し、金属の相場が上がっておりますまして……」

「予算なら気にしないでくれ。今ある最高の剣と刀を打って欲しいんだ」

ティアがレインにそう言うが、

「成る程……では、具体的な数値などをおっしゃって頂けますか？」

と尋ねる。

「具体的な数値……って言われてもなあ〜」

ジエネシスは少し困ったような顔で、背中からもうボロボロになった大剣を差し出す。

「んじゃ、こいつよりも遥かに高い数値で」

そう言って差し出し、レインはその剣をゆっくり丁寧に引き抜く。「うわっ?!ちよつとお客様…もうボロボロじゃないですか!!剣のメンテナンスはしていませんか?!」

レインはその剣のダメージ状態を見てギョツとした顔で叫んだ。

「いや、メンテナンスはちゃんとしたよ?けどまあ、ちよつと事情があつてな……」

ジエネシスは申し訳なさそうに頭をさすりながら答える。

「うーん、この状態だと修復は不可能ですね……あ、因みに数値は……ふんふん成る程」

レインは剣の数値を確認し、納得したように頷く。

「よく分かりました。ただ、この剣よりも更に強い剣を作るには、今店に材料が無くて……」

「あー、そっか。なら取りに行かなきゃだな」

「なら、私達で取ってくるが?」

ジエネシス取ってティアが説明そう提案するが、

「そうも行かないんですね。金属を撮るには、マスターミスが居ないと……」

そう言った直後、レインは顎に手を当て思索する。

「……よしーじゃあ一緒に取りに行きましょうー!」

両手をポンと叩き、そう提案する。

「え?いや、俺たちは全然いいんだけど、店はどーすんだよ?」

「金属が取れるまでは暫くお休みです。どちらにしても、材料が無ければ店はやっていけませんからね」

「そうか……済まないな」

ティアが申し訳なさそうに言うが、レインは両手をブンブンと振って

「いえいえ!お客様の剣の為でもありますし、こちらもいい材料が手に入るチャンスですので!」

満面の笑みでそう告げた。

「何から何まで済まねえな。俺は《ジエネシス》だ。

「ま、暫く一緒に行動する仲だ、敬語は無しにして、よろしく頼むわ」
「私はティアだ」

「ジエネシスさ……ジエネシスにティアね！うん、わかった！」

その後、数分間でレインは出発の支度を整え、店の戸締りをして早速出発した。

「それで、素材のアテはあるのか？」

「五十九層の山岳地帯に、かなりレアな鉱石があるんだけど……」

レインはそこまで言うと言口籠った。

「五十九層の山岳地帯……確かあそこは、様々なオレンジギルドや犯罪者プレイヤー達が潜むSAOの中でもかなり治安が悪い場所ではなかったか？」

そう。目当ての鉱石がある場所は、レア鉱石がわんさか出る場所であるだけに、犯罪者プレイヤーやその他様々な悪徳プレイヤーが独占していることが多く、鍛冶プレイヤー達は特にそこでの金属採取を避けていた。

だが、そこで取れる鉱石は現状では最高級の質があり、危険を冒してもそこへ取りに行くプレイヤーは後を絶たない。

「本当は私も避けたかったんだけど、ジエネシス達がお望みの剣を作るには、もうあそこへ取りに行くしかないんだよね……」

「そっか。なら、仕方ねえな」

ジエネシスは納得したように頷く。

「ごめんね？二人を危険なところに行かせることになっちゃって……」

「気にすんな。寧ろ謝んのはこっちの方だぜ。俺たちの剣のために、わざわざ店閉めて同行してくれんだからな」

「ああ。それに、もしオレンジ達に遭遇したとしても、絶対にレインに危害を与えることはさせないと約束する。だから安心してくれ」

ジエネシスとティアは笑顔でそう言い、レインも頷いた。

――

五十九層の目的の山岳地帯に到着した一行。

そこは木々や草花などは全くなく、山肌が露わとなっている。

地面の所々に無数の窪みがあり、恐らくそこでプレイヤー達は鉱石を採掘したのだろう。

「さてと……行くか」

そう言つてジェネシスが歩きだし、ティアとレインがそれに続く。

道無き道をゆつくりと進んでいき、地面に転がる岩を避けながら足場を確かめ慎重に進む。

そうして歩くこと数十分。

レインが何かを見つけ「あつー!」と叫ぶと、そこから数メートル先まで駆け出した。

レインが見つけたのは、地面から僅かに突き出ている一つの金の石。それは太陽光を反射して煌々と輝いている。

「あつたー!これが目当ての鉱石……《ゴールドクリスタルインゴット》だよ!」

ジェネシスが近くに寄つてそれを覗き込む。

「案外簡単に見つかったな」

「ああ。ただ歩いてただけだったな」

ティアもジェネシスの後ろから覗きながら言う。

「でも、ここは特にオレンジプレイヤーが多いから、早く取つて帰らないと」

「どんくらい掛かるんだ?」

「うーん、大体五分かな」

「うし分かった。その間周り見とくから、ちやちやつと取つといてくれ」

「分かった!」

ジェネシスとレインはそうやり取りしたあと、レインは小道具を取り出して鉱石採掘に取りかかり、ジェネシスとティアは予備の武器を取り出して警戒に入った。

そして約5分が経ち、レインがもう少しで鉱石を取り終わる段階まで来た時だった。

「おい」

突如、ジェネシスのものではない男性の声が響く。

そしてそこからニメートルくらい離れた場所にある岩陰から複数のプレイヤーがぞろぞろと姿を現した。

彼らのカーソルは皆——オレンジ。

「テメエから見ねえ顔だが……俺たちのシマで何やってんだあ?」

肩に斧を担いだ男が問いかけた。

「見ての通り鉱石採掘だ。なんか問題あるか?」

ジェネシスは悪びれることも無く答える。

「ふざけんな!俺たちの許可なく勝手な事してんじゃねえ!!」

もう一人のオレンジプレイヤーはそう叫んだ。

「お前達こそ誰の許可を得てここを独占している?茅場晶彦にでも許可を取ったか?」

今度はティアがオレンジ達を睨みながら問い掛ける。

「あゝあゝっ?!」

「テメエらやる気か?!」

オレンジ達は凶星を突かれたのか逆上して今にもジェネシス達に斬りかかろうという勢いだ。

「ふ、二人とも!今は引こう?ここで戦う必要は無いよ!」

後ろから様子を伺っていたレインが言う。

「……おいレイン。あとどんくらいかかりそうだ?」

「え?あともう少しだけど……」

その答えを聞くと、ジェネシスは大剣を構えた。

「よし。レインは早く鉱石を取っちゃまえ。時間は俺たちが稼ぐ」

ジエネシスの言葉にレインは目を見開いた。

「そ、そんな無茶だよ！いくら君達が強くても、この人数を二人で相手取るなんて……」

「心配するなレイン。私たちが信じて、お前はお前の今やるべき事をやれ」

そう言つてティアも腰の刀を引き抜き構えた。

「こいつらぁ……!」

「構わん！てめえらやつちまえ!!」

肩に斧を担いだ男がジエネシス達を鋭い目つきで睨み付け、その隣にいる者がほかのメンバーを扇動した。

「おおおらぁぁぁー!!」

「死ねやぁぁぁー!!」

などと罵声を上げて飛びかかるオレンジ達を、ジエネシスとティアは的確に応戦していく。

勿論殺したりはせず、以前のラフコフ戦のように部位欠損ダメージやスタン状態に持ち込み戦闘不能にしていく。

レインは二人の鮮やかな剣技に一瞬見とれていたが、すぐにティアから言われた事を思い出し、一刻も早く採掘作業を終わらせることに専念した。

ジエネシスとティアはオレンジ達を決してレインの方に行かせず、かつオレンジを殺害しない程度で仕留めていたが、何せレベルは揃つて中層ゾーンでも高い方、加えて自分たちが使っている武器は中層でやっと通じるレベルの代物。とてもここで通用するレベルのものではない。

はつきり言つて、今の状況は悪いと言えた。

それでも攻略組随一の実力者である二人の技量でなんとか持ちこたえてはいたものの、腕前だけでは武器の耐久値はカバーできない。突如、ジエネシスの剣が甲高い音を立ててガラス片と化し消滅したのだ。

「っ、くそが!!」

ジエネシスは思わずそう毒づいた。

そしてそれはティアも同じようで、ティアの方を見るといつのまにか彼女の刀は消えていた。

この混戦状況下で悠長にメニュー欄から武器を取り出している暇はない。

仕方なくジエネシスとティアは徒手空拳で戦うしかなかった。

だが武器を無くした二人を見てチャンスと踏んだのか、オレンジ達の攻撃は一層激しさを増した。

ジエネシスとティアの身体に切り傷が徐々に増えていき、HPもそれに伴って削られていく。

「ジエネシス、ティア!!」

その時、漸く鉱石の採掘が終わったレインが叫び、腰から片手剣を引き抜いて助けに入ろうと駆け出した。

——その時だった。

レインの頭上を何かが通過し、そのままジエネシスとティアに群がっていたオレンジの元へと落下、そして大爆発を引き起こした。

「な、何だ?!」

突然の出来事にジエネシスは目を見開いて辺りを見渡す。

すると、レインの数メートル先に人影が見えた。

目を凝らすと、そこにいたのは女性プレイヤーだった。

黒く艶のある長髪をたなびかせ、純白のロングコートに白いスカートを身につけ、その手に持っているのは……………

何と、《弓》。《ソードアート・オンライン》という名の通り、剣の世界である筈のここにはあり得ない、射撃武器。

ジエネシスはその光景に目を丸くしていると、今度は彼の後方で爆発が起き、オレンジ達が吹き飛ばされた。

その方を見ると、そこにも新手のプレイヤーがいた。

それは男性プレイヤーだった。

黒……いや、黒に近い濃紺のロングコートを纏い、手に握られているのは、片手剣——ではなく、その柄の先端からまた同じ形状の剣が生えている。

そう、世にも珍しい《双頭剣》だ。

「ああ……やべえよ」

ふと、オレンジの一人が声を震わせながら後ずさった。

「《黒の双剣士》に《純白の射手》……こいつら、オレンジ狩りの《黒の兄妹》だ!!」

十三話 黒白の兄妹

ジエネシス達の前に現れた謎のプレイヤー達。

「《黒白の、兄妹》：？」

ジエネシスは前と後ろのプレイヤーを交互に見た。

見た所、どちらも自分と同じ年か年下に見える。

だが二人が使用しているのは、彼が約二年に渡るアインクラッド生活でも見たことのない武器だった。

前の黒い少年プレイヤーは、柄の両端から伸びる刃を持つ《双頭刃》。後ろの真っ白な女性プレイヤーはこの世界にあるはずのない射撃兵装、《弓》を使っている。

「ちよ、《黒白の兄妹》って……」

「最近この辺りのオレンジ達を狩りまくってるって言う、あのイカれた二人組かよ?!」

「く、《黒白の兄妹》：…なんでこんなトコに?!」

オレンジ達は目を見開きながら少し後ずさる。

すると、双頭刃使いの少年が漸く口を開いた。

「……話す必要などない。お前達、この人達をあんな目に遭わせといてただで済むと思ってるのか?」

少年は静かに、そして冷徹な雰囲気纏いながらそう言った。

「ひ、ひいっ?!ま、待て!悪かった!もう俺たちは下がる!こいつらには手エ出さないから!!」

片刃のブレード使いのオレンジがその剣を地面に捨て、両手を挙げながら情け無い声で降参の意を示した。

だが、

「……問答無用だ。お前達全員、ここで肅清する」

再度氷のような冷たさと怒気を孕んだ声でそう言いながら、少年は鋭い目つきで右手の双頭刃をプロペラのようにクルクルと回転させながらゆっくりと近づく。

そしてその回転は徐々に早くなっていき、やがてチェーンソーの様な高速回転となった。

その回転の風圧で、少年の周りにはまるで竜巻のように空気が渦巻いていく。

そして少年はその場から一瞬で上空に飛び上がり、回転する双頭刃を上に掲げる。

「ひ、ひいいいいいっ!!」

オレンジ達はもう恐怖に慄き動くことも出来ない。

「ーっ!!」

少年は迷うことなく、その双頭刃を地面に着地すると同時に叩き込んだ。

その爆風で半径5メートルのオレンジ達が全て吹き飛ばされる。

双頭刃広範囲ソードスキル《スピニング・ダンス》

少年はジェネシスの方を向くとゆっくりと彼のそばに近づいて行き、

「……早くその子を連れて逃げて。ここは僕たちがやる」

耳元で静かにそう告げると、そのままジェネシスのそばを通り抜けた次の標的を見定めた。

「く、くそっ!ならせめて、この女だけでも人質に……!」

その時、オレンジの一人がレインに向けて駆け出した。

どうやら彼女を捕まえて人質にし、交渉材料にするつもりのようにだ。

だが彼に向けて一筋の光が直撃した。

直後大爆発が起き、彼は数メートル後方へ吹き飛ばされる。

見ると、どうやら白い弓使いの少女が狙撃したようだ。

「アタシを忘れてもらっちゃ困るわね」

そう言っただけ少女は、もう一度矢を取り出し、弓の弦にかけてゆっくりと引く。

すると、矢が眩いエメラルドグリーンの光を浴びる。あれは間違いなくソードスキルの発動状態だ。

少女はそれを天高く虚空へと放った。

ヒューーンと言う甲高い音を立てながら矢は鮮やかなグリーンの尾を引きながら天へ飛翔していく。

が、ある程度飛んだところでそれは停滞し、緑色の球体となると暴発した。

そして今度は、無数の光の矢がまるで流星群の如く地に降り注ぐ。至る所で小規模爆発が起き、中には緑の流星が直撃する者も。

射撃広範囲スキル 《プラネタリウム・エクスペロージョン》

その名の通り、まるで夜空から流れる流星の如く無数の流れ星が降り注ぐ技。

しばしその光景に圧倒され続けていたジェネシスだったが、はっと我に帰ると急いでレインとティアを回収し、その場を離脱した。

「誰だかしらねえが、助かったぜ。この礼は必ずするぜ、精神的にな！」

ジェネシスは少年の方を振り向くと、サムズアップしながらそう言った。

すると双頭刃使いの少年もジェネシスの方を向くと

「気にしないで。だって、困った時は助け合い、でしょ？」

と優しいな笑みでそう返す。

ジェネシスはそれに頷いて返すと、今度こそ撤退した。

ちなみに、山を降りる道中彼らの背後からオレンジプレイヤー達の悲鳴が響き続けたのはまた別の話。

—————

数時間後、なんとかレインの店に戻ってきた彼らは、自分達の窮地を救ったあの《黒白の兄妹》の話題で持ちきりだった。

「結局あいつら何者だったんだろうな？」

ジェネシスは店内に据え付けられた椅子に座りながらそう呟いた。

すると、彼の呟きに答えたのはレインだった。

「彼らは中層ゾーンで活躍してるプレイヤー達だよ。」

主にオレンジプレイヤーや犯罪者ギルドと戦ってる」

そしてレインはゆっくりと語り出した。

少年の名は《サツキ》。《黒の双剣士》と呼ばれ、主に二本の剣や双頭刃を駆使して戦うプレイヤー。

もう一人、白の少女の名は《ハツキ》。《純白の射手》と呼ばれており、この世界では珍しい弓使いの少女。

彼らはどうやら兄妹らしく、その実力もミドルゾーンの中では攻略組に最も近いプレイヤーと言われている。

「……オレンジ狩りか。まるで正義のヒーローのようだな」

ティアはレインの話を聞き、腕を組みながらそう呟く。

デスゲームであるこの世界では、プレイヤーはなるべくオレンジの出没地帯などは避けて活動している。

この世界に警察組織などは存在しない為、プレイヤー達は各々の身を自分で守らなければならない。

だがオレンジプレイヤー達はあらゆる搦め手を用いて一般プレイヤーを襲撃する。少し前の《タイタンズハント》のように一人のグリーンが獲物をオレンジ達が待ち伏せするポイントまで誘導する手を使ったり、今や壊滅した最凶の犯罪者ギルド《ラフィン・コフィン》などは様々なシステムの抜け道を見つけては新手の殺人方法で何人ものプレイヤー達を葬ってきた。

「勇気あるねえ、あんなイカれたオレンジどもとやりあうなんざ」

ジェネシスも感心したように言う。

「それにしても…随分変わった武器を使っていたな、あの二人。双頭刃に弓……どちらもこの世界では見たことのない物だ」

ティアが顎に手を当ててそう疑問符を浮かべていると、

「……実はね、彼らにあの武器を作ったのは、私なんだ」

レインの思わぬ告白にティアとジェネシスは目を見開いた。

「最初は、作り方とか全くわからなかったから断ろうかと思ったんだよ。だってどちらもこの世界には無い武器だし。」

でも、あの二人の顔見てたら……何もせずには居られなくなっちゃって……」

そしてレインは再び語り出した。

レインはサツキ達の依頼を受けた後、单身先ほどジエネシス達と訪れた無法地帯の五十九層の山へ向かったそうだ。

だが当然のようにレインはそこでオレンジと揉め事になり、結果レインはオレンジギルドに拉致されたそうだ。

彼女の鍛冶スキルの高さに目をつけたオレンジギルドの長はレインにギルドの武器を作るよう強要し、そこで軟禁状態となった。

そこへ駆けつけたのがあのサツキ達だったそうだ。

無論、オレンジギルド達はそれを許すはずも無く、総力戦を持ってサツキ達を追い込んだ。

その窮地を見て、レインは土壇場で大博打に打って出た。彼らの依頼の遂行だ。

レインはただ無心に、彼らのためを思って金槌を振り続けた。そして奇跡は起きた。

眩くゴルドの光の中から現れたのは、完全新規の二つの武器。

双頭刃《ユナイティッドセイバー》

弓 《ルシファーズアロー》

その性能も今までレインが作ってきた武器達の中でも最高クラスの性能を誇る、素晴らしい武器だった。

サツキ達はそれを受け取ると、瞬く間にオレンジギルド達を一掃、そして見事生還したのだ。

以後、サツキ達はレインへの恩返しと称し、あの無法地帯である五十九層の山からオレンジプレイヤーを無くし、レインのような鍛冶屋が自由にアイテムを採掘できる場所を目指して活動している。

「へえー、そいつぁ泣ける話じゃねえか。なあ?」

「ああ。土壇場で完成した完全新規の武器。あの二人が羨ましくなるな……」

ジエネシスの意見にティアが同意して頷く。

「そ、そんなー!私もあの時は無我夢中だったし……」

そこでレインはある事を思い出す。

「そうだ!サツキ達が助けてくれたおかげで、なんとかレア鉱石は

ゲットできたから、これで君達の武器が作れるよ!!」

そう言つてレインは、アイテム欄から二つの鉱石をオブジェクト化して机に置く。

眩く輝くゴールドの鉱石。《ゴールドクリスタルインゴット》。

「ほんとかーなら、ぜひ頼むわ!!」

ジェネシスが身を乗り出してそう頼むと、レインは笑顔で

「任せて!!」

と自信満々の笑みで返す。

そして3人はレインの作業場へ。

窯の中で熱せられた鉱石がマグマのように輝き、レインはそれを金床の上にゆっくりと置く。

「それじゃ始めるけど、どっちの武器から作る?」

「んじゃ、ティアの刀から頼むわ」

ジェネシスがそう答え、レインは「わかった」と返すとゆっくり深呼吸し、そして金槌を勢いよく振り下ろす。

カン!

カン!

という甲高い音が部屋に何度も木霊し、ジェネシスとティアはその様子を静かに見守る。

レインは真剣な眼差しで鉱石を見つめながら叩き続け、その表情は職人のそれだ。

そして叩く事数分。

ゴールドの鉱石が一層眩く輝きを放ち始める。

そしてゴールドのひかりはやがて、鋭く光る銀色へと変わっていき、鉱石の形状もあつという間に刀へと姿を変えた。

そして銀色の光が収束し現れたのは、それは見事な日本刀だった。その刀身は光が止んでも尚銀の光を放ち続け、日本刀のシンボルとも言える波紋は美しい波を打っており、しかしそれでいてまるで獣の牙のような荒々しさも持っていた。

恐らく現実世界にあれば大業物の一振りに数えられるだろうと言えるほど、この刀の出来は素晴らしい物だった。

「名前は……《銀牙》。凄い、前にサツキ達に作った武器の性能とほぼ同等だよ……」

レインが刀の銘とその性能をメニュー欄を開いて確かめながら言った。

「ティア、試してくれる?」

「ああ」

ティアはゆっくりと銀牙を手を取った。だがこの状態の銀牙は茎が剥き出しになっているため持つことができない。

そこでティアはメニューから簡易の柄と目釘を取り出し、銀牙を嵌める。

そして、一閃。

ヒュン、という軽い音と共に銀の光が虚空を切り裂く。

「どうかな……?」

レインがおずおずとティアに尋ねる。

「……文句なし。最高の刀だ」

ティアは満足気に頷きながらそう答えた。

レインはそれを聞き飛び上がりそうになったが、それを堪えた。

喜ぶのはまだ早い。まだもう一つ残っている。

そう、ジェネシスの両手剣だ。

ここで彼の剣作りに失敗しては本末転倒である。

レインはもう一度意識を高め、集中力を極限まで研ぎ澄ます。

先ほどと同じ工程で、レインは剣を打っていく。

基本、いくら鍛冶スキルが高いからと言っても剣の出来はランダムだ。

だがそれでも、レインは気持ちがあればきつといい剣が打てると信じてここまでやってきた。

あの時、サツキ達に打った武器のように、今回も必ず成功させる。

そうして打つこと数分。

再び先ほどと同じゴールドの光が部屋を包む。

そしてその光は、徐々に黒く染まっていき、所々赤い光を伴いながら禍々しいオーラを放ち始める。

その光景に圧倒されながらもレインはじつと金床の鉱石が変化する瞬間を見続けた。

四角い立方体のような大きさだったインゴットは、その質量に見合わないとんでもない大きさの大剣へと姿を変えた。

あまりの大きさに、下手な両手剣サイズはある金床を少しはみ出してしまっているほどだ。

禍々しい赤黒いオーラが収束し、現れたのは……

赤と黒の大剣。

グリップは白と深緑のラインで構成され、鰐の部分にはまるで目のような赤い丸の装飾が施されている。

見ているだけで攻撃的な、それでいて先ほどの《銀牙》と同じくかなりの名剣である事は一目でわかった。

「この剣の名前は、《アインツレーヴェ》。私が見たことのない名前だから、情報屋のリストにもこの剣は出ていないと思う。

試してみて？」

先ほどと同じく剣の情報を読み上げたレインはジェネシスに素振り促す。

ジェネシスはその剣のグリップを握り、ゆっくりと持ち上げる。

ゴトンという鈍い金属音が少し鳴り、この剣の重さをその音だけで周りに伝える。当のジェネシス本人は顔色ひとつ変えずに、その大剣を片手で持っているが。

そしてジェネシスは、空いたグリップに左手を添えると、アインツレーヴェを一思いに思い切り振った。

直後凄まじい風切り音と突風が部屋の中に発生し、紙類や軽い武器などが部屋中に吹き飛ぶ。

「これは……凄い威力だな」

ティアがジェネシスの一振りを見て苦笑いで呟いた。

「けど、こいつあいい剣だぜ。気に入った。やっぱおめえに依頼してよかったわ、レイン」

ジェネシスはアインツレーヴェを肩に担ぐと笑顔でそう言った。

「ふふっ、こちらこそありがとう！そう言ってもらえると、鍛冶屋名利

に尽きるよ」

その後二人は鞘を見繕ってもらい、新たに手に入れた剣を装備する。

ティアの新しい刀は鞘が白色となっており、まさに《白夜叉》の異名を持つティアにふさわしい刀となった。

一方ジェネシスの方は、前の剣と比べると更に一回り大きくなり、その背にある大剣を見るだけで見るものに威圧感と畏怖を与える見た目となった。

「……さてと、肝心の料金だな」

ジェネシスはメニューからトレード画面を表示しようとするが、レインがそれを制した。

「あ、お代はいいよ！今回はジェネシス達も一緒に素材集めに協力してくれたのもあるし」

「だが、それでは……」

食い下がるティアに、レインはこう告げた。

「なら、今後は私を君達の専属ミスにしてよ。攻略の後は、毎回メンテに来てね」

その答えに対し、ジェネシスは少し目を丸くしていたが、すぐに悪戯な笑みを浮かべ

「…なあゝるほどねえ。ちやつかりしてんな店长」

つまりレインは、今この場でのジェネシス達の売り上げを犠牲にする代わりに、今後彼らを常連に引き込む事で継続的な利益を得ようというわけだ。

「ふふっ。店の経営と言うのは、先を見据えることが大事ですから！」
レインは得意げな笑顔でそう答えた。

「流石、伊達にこのリンダースで鍛冶屋をやっている者は違うな」

ティアも笑顔でそう返した。

「……さて、もうこのまま帰っちゃってもいいんだが……どうせなら、ここは一つ大仕事と行こうじゃねえか」

ジェネシスの突然の提案に、レインは疑問符を浮かべる。

「そうだな。まだ奴らに借りを返せていないし、どうせなら折角手に

入れた新武器の性能……試すにはちょうどいい機会だろう」

ここでレインはジェネシス達のやろうとしていることに気づき、

「ま、待つてよ二人とも！君たちが関わる必要はないよ！」

「けど、あのオレンジどもをぶっ潰したらレインの今後の売り上げも増えんだろ？それに、あの黒白の兄妹さん達にも違う意味で借りを返せてねえしな。」

んま、テメエが何言おうと、どっちみち俺たちには黙って帰る選択肢はねえんだ。安心しろ、テメエが魂込めて作った武器があんだ。そう簡単にやられやしねえよ」

そう言つてジェネシスは店のドアを開けて外に出る。

――――

一方、黒白の兄妹達は終始オレンジ達を圧倒し続けていた。

「はあっ!!」

サツキの双頭刃が青い電流を帯び始め、放電現象を起こす。

そしてサツキはその場から一気に飛び出し、目の前のオレンジ達を目にも留まらぬ速さで斬り伏せていく。

双頭刃六連撃スキル 《ライトニング・ソニック》

その名の通り雷の如く光速の速さで敵を叩き伏せるソードスキルだ。

「クソが、舐めやがって!!」

オレンジ達は逆上し一気にサツキに畳みかけようとするが、それは一筋の光によって阻まれた。

「ちよつと、さつきからアタシを放つたらかしのしないでくれる？」

そう言つてハツキは弓の弦を思い切り引き、そして矢を放った。

その矢は徐々に青い狼の姿を形どり、獲物に噛み付くようにオレン

ジ達に直撃する。

射撃スキル 《ウルフシユータイング・ブラスト》

「ちくしょう！こんな奴ら相手に勝てるわけがねえ!!」

「お前ら、逃げるぞ!!」

オレンジ達は形成不利と見て次々と尻尾を巻いて逃げ始める。

「待て！今日こそは逃さないぞ!!」

サツキはそう叫ぶと、双頭刃を水平に構えた。

すると、双頭刃の刃が徐々に冷気を帯びていき、そしてサツキはそれを思い切り横薙ぎに一閃した。

冷気を帯びた斬撃が逃げ惑うオレンジ達の足を捉え、拘束する。

その直後、オレンジ達は麻痺状態となって動けなくなった。

双頭刃ソードスキル 《ブリザード・ゲイル》

相手に冷気を帯びた斬撃を浴びさせ、強制的にランダムで状態異常に陥らせると言うとてもない技だ。

勿論、その分デメリットも多く、硬直時間が通常のソードスキルより長いのだが、今のサツキには大した問題ではない。

「……これで終わりよ」

ハツキが冷たくそう言い放ち、弓を拘束したオレンジ達に向けて構える。

だが、その矢が放たれることはなかった。

「残念でしたあく、まだ終わりじゃ……ないのよっ!!」

突如ハスキーな男の声が響き、ハツキの身は吹き飛ばされた。

そこに立っていたのは、人間離れた歪しい筋肉に緑色のモヒカ
ン、そして不気味に引き裂かれた口から先端が二つに割れた舌が出て
おり、そのプレイヤーの異質さをこれでもかと見せつけていた。

そしてその肩に担いでいるのは、彼の体格以上の大きさを持つ巨大
なハンマー。

「ハツキ!!」

サツキは思わず吹き飛ばされた妹の名を呼ぶが返事はない。

「アララ、最近この辺でオレンジ狩りをやってる悪い子がいると聞いて来てみれば、アナタ随分と男前じゃなく、嫌いじゃないわ!!」

そのあまりにマツシブすぎる体格から出て来たのはまさかの女口調。どうやらこいつはオネエのようだ。

「貴様……よくもハツキをー!」

サツキは双頭刃を構えて男を睨みつける。

「んもう、そんな怖い顔しないでよ傷つくわあく!!」

そして肩に担がれたハンマーを左右に振った後、地面に突き立てる。

「……でもアタシ、女には厳しいのよ?」

そうやってサツキを睨み返した。

サツキは突如何かを思い出したように目を見開く。

「そうか……お前、この辺のオレンジプレイヤー達を仕切ってるって言う《ブルワーズ》の棟梁……『クダル・カデル』か!!」

オレンジギルド『ブルワーズ』

中層ゾーンで恐れられている大規模な犯罪者ギルド。殺人ではなく主に強奪や拉致と言った行為が主。

ラフコフが壊滅してからは更に勢力を拡大し、その被害はかなり甚大なものとなっている。

そしてそのブルワーズを仕切っているのが目の前のオネエ、クダル・カデル。大型ハンマー《ジャイアント・グシオン》を使用し、主

に男性プレイヤーに対する拷問を趣味としている凶悪なプレイヤーである。

「あらあ？アタシ結構有名人？うれしいわあく♪まさかアタシのファンがいただなんて！」

陽気な声でそう言った後、

「……じゃあ、これからアタシと、いっつぱい♪楽しいコト、しましょ？」

醜悪な笑みに変えて舌なめずりをしながら、ハンマーを引きずってサツキの方に歩み寄っていく。

その時だった。

何かがクダルの頬を掠め取った。

「おにい、ちゃんに……手を……出すな……！」

ハツキだった。

弓を落としてしまっているため、ピックによる投擲攻撃を行ったのだ。

「……ふうーん、まだそんなこと出来たんだ」

冷ややかな目でハツキをにらみながらクダルは言った。

「でも、レディの顔に傷をつけた罪は重いわよん？」

いいわ、まずはアナタから先に始末しましょうか!!」

そう言つてクダルは一瞬でハツキの背後に回り込むと、再びハンマーを高く振りかぶり、それをハツキに向けて振り下ろした。

「がっ……」

凄まじい衝撃がハツキを襲い、そのまま数メートル先へ吹き飛ばされた。

「貴様あああーっ!!」

サツキは双頭刃を上段に構え、その場から上空へ飛び出す。

双頭刃の刃が徐々に炎を纏い始め、刃全体がメラメラと燃え始めた。

「うおおおおーっ!!」

サツキはそのまま大車輪のように回転しながらクダルに向けて一気に降下する。

双頭刃ソードスキル《バーニング・ディバイド》

「そおい!!」

だが、炎の大車輪はいとも容易く弾き飛ばされた。

サツキは成すすべなくハツキと同じ場所へ落下した。

HPを確認すると、自分もハツキも既にレッドゾーンに達しており、絶体絶命のピンチだ。

そんな彼らにクダルはハンマーを肩に担ぎながらゆっくり近づき、

「さあてとアナタ達、兄弟仲良く……」

逝つてらっしやああーい!!」

片手棍ソードスキル《ストライク・ハート》を発動し、二人に向けて一気に振り下ろす。

だが、ハンマーが二人に命中する直前、クダルはハンマーごと吹き飛ばされた。

先程までクダルが立っていた場所には、サツキ達が先程出会った赤髪の男が肩に赤黒い大剣を担いだ状態で立っていた。

「よお、待たせたな」

《^{ダークナイト}暗黒の剣士》、ジエネシスが不敵な笑みを浮かべながらそこに立っていた。

十四話 強者の背中

サツキ達の前に颯爽と現れた赤髪の剣士、ジエネシスはクダルを見据えながら立っていた。

クダルの方は

「誰?このイケメン。誰このイケメン?」

などと呟いている。

「君は……どうしてここに」

サツキはジエネシスにそう尋ねた。

ジエネシスはサツキに背を向けたまま

「てめえが言ったんだろ? 困った時は助け合いだ” つてよ”
そう告げた。

「アナタは一体何者?!」

クダルは巨大なハンマーを軽々と片手で持ち上げ、ジエネシスの方に突きつけながら問うた。

「……俺はジエネシス」

ジエネシスは静かにそう答えた。

「えっ、ジエネシス?」

サツキはその名を聞き目を見開いた。

ジエネシスという名は、ミドルゾーンの、いやインクラッドのプレイヤーならば皆知っている名前だ。

何せあの《アインクラッド四天王》の一人にして、犯罪者達や敵対するものならば容赦なく斬り伏せる《ダークナイト暗黒の剣士》という名で恐れられているからだ。

「まさか、あの人が……」

となりのハツキも目を見開きながら呟いた。

自分達が助けたプレイヤーが、まさかアインクラッドでもトップクラスの実力者などと思いきやいかなかった。

「イケメンで強いのかっ!嫌いじゃないわ!!」

クダルは不気味な笑みを浮かびながら叫ぶと、ハンマーを掲げて

ジエネシスに突進して来た。

ジエネシスは即座に回避するが、そこへ勢いよく巨大ハンマーが振り下ろされ、大きな爆砕音と土煙を発生させる。

ジエネシスは背中の中黒い大剣『アインツレーヴェ』を引き抜くと、再び彼に向けて迫り来るハンマーとぶつけてその攻撃をいなした。

「嫌いじゃないわ！嫌いじゃないわ!!」

クダルは何度もそんな事を言いながらハンマーを振り続ける。

大剣とハンマーがぶつかり合うたび、眩い火花と耳をつんざくような金属音、そして大気を揺らす程の衝撃波を生み出す。

サツキ達はその光景に思わず見惚れていると、ふとクダルが思い出したようにサツキ達の方を見た後、

「アタシの僕達！あのガキ達にお仕置きしてやりなさい!!」

クダルがジエネシスと戦闘を続けながら配下のオレンジ達に指示を出す。

すると、周りの岩陰から次々とオレンジ達が出現し、サツキ達へと接近して行く。

「っ、不味い！」

サツキは双頭刃を構えるが、HPがまだ回復しきっていない。

無論、サツキもハツキもポーシオンなどは既に飲んである。しかしポーシオンでは即座に回復することは出来ず、HPがグリーンまで回復するには数分かかる。

だが勿論、オレンジ達はサツキ達の回復を待つてくれるはずもない。せめて誰かが時間稼ぎをしてくれれば……

その時、オレンジ達を白の流星が走った。

土煙が巻き起こりその中から現れたのは、ジエネシスと同様先程サツキ達が助けた女性だった。

「……やあ。立場が逆転したな」

ティアはサツキ達の方を振り向くと、軽く笑ってそう言った。

「貴女はさつき……」

「『ティア』だ。以後よろしくな」

ハツキの問いにティアはそう返し、目の前のオレンジ達に向き直

る。

「ティアって確か……あの四天王の一人、《白夜叉》?!」

ハヅキは目を見開きながらそう言った。

「おいおい、《白夜叉》さんよお。いくらあんたでも、この人数をソロで食うのは無理じゃねえ?」

オレンジの先頭に立つ男が余裕の笑みを浮かびながらそう言った。事実、ティアの前には総勢約50人近くのプレイヤーがいる。

「どうだろうな……やったことも無いから分かんらん」

それに対してティアも不敵な笑みで返す。

「ま、そりゃそうだわな。だが、俺たち《ブルワーズ》に楯突いたんだ……どうなるか分かってるか?」

リーダー格は威圧感のある声で言うが、

「さあな。どうなるんだ? 教えてくれよ」

ティアは肩をすくめて答えた。

彼女のあまりに余裕で高圧的な態度に逆上したオレンジ達は「ダメー!」「このクソアマあ!!」などと叫びながら武器を構える。

「面白え。せっかくの上玉だから生かしてやってやろうとか思ってたが……気が変わったぜ。ここで殺す」

そう言っつてリーダー格は背中から片手剣を引き抜き、戦闘態勢に入る。

「……なら、やる前に一つ言っておこう」

そんなティアの言葉にオレンジ達は疑問符を浮かべる。

「お前達、《活人剣》という言葉を知っているか?」

本来は忌むべき武力も、それを悪人を斬るために振るうことで、多くの弱き者達を救うというものだ。……それなら」

そう言っつてティアは腰の刀に手を掛け、一気に引き抜く。

鋼の刃が太陽光を反射し眩い銀色の光を放つ。

「……私も、それに倣うとしよう」

そう言っつて、鋭い刃の先端をオレンジ達に向けた。

「上等じゃねえか。行くぞお!!」

そして、オレンジ達は一齐にティアに斬りかかった。

ティアはその場から一瞬で飛び出し、オレンジの軍団へと飛び込んでいった。

四方八方から襲いかかる刃の嵐をティアはまるでそれらが見えてくるかのように次々とかわして行き、そして一気に刀を振るう。

その鋭い斬撃は3人のオレンジ達の武器や腕を容易く斬り裂いた。

「……流石はレイン、いい切れ味だ」

ティアは刀の切れ味の感触に満足しながら呟くと、再びオレンジ達に刀を振るった。

「……………」

「凄い……」

サツキは思わずそんな呟きが溢れた。

目の前で繰り広げられるジェネシスとティアの鮮やかな戦闘に思わず見惚れていた。

ジェネシスは大剣を見事に使いこなし、破壊力の高いハンマーの直撃を逸らしている。

ティアはたった一人であるにも関わらず、50人近くいるオレンジプレイヤーを相手に見事に善戦している。しかも、一切殺す事なく、武器破壊や部位欠損ダメージに留めて、だ。

「……僕らもいつか、彼らのようになれるのかな」

「お兄ちゃん……」

羨む視線でジェネシス達を見るサツキを、ハツキは隣でじつと見つめた。

「なれるさ」

すると彼らの背後で、一人の少年の声が響いた。

振り向くと、そこには全身黒づくめの装備に身を包んだ少年が立つ

ていた。

「この世界のレベルなんてただの数字さ。少しコツさえ掴めば簡単にひっくり返せる。」

「そのために一番必要なのは……人の思いさ」

少年は静かにそう告げた。

「あ、アンタは……？」

サツキは思わずそう尋ねた。

「俺か？ そうだな……まあさしずめ、通りすがりの《黒の剣士》、ってとこだな」

そう言つて少年は、背中から片手剣を引き抜き、ジエネシスとクダルの方へと駆け出していった。

「人の意思、か……」

サツキは自身の手握られた双頭刃を見つめる。

サツキはこの世界に入る前は高校入試の勉強をしていたが、ゲーム好きな妹のハツキに誘われて息抜き感覚でここにやってきた。

だがこの世界がデスゲームと化した時、ハツキは泣きながらサツキに謝った。自分のせいでお兄ちゃんの人生を滅茶苦茶にしてしまったと。

だが確かにこの世界に誘ったのはハツキかも知れない。それでもこの世界に来たのは、自分自身の意思だとハツキに言い、同時に二人で生きて現実世界に帰ろうと誓った。

その後、この世界の知識が無いにも関わらず、彼らは地道な努力を重ねて最前線まであと一步というところまで来た。

そんな中、サツキ達の元に出現したのが《双頭刃スキル》と《射撃スキル》だ。

現実世界の部活動で薙刀と弓道をやっていた彼らにとって、これらのスキルが現れたのはまさに渡りに船だった。

彼らは何とか武器を手に入れた後、瞬く間にそれらのスキルを使いこなし、今やミドルゾーンで《黒白の兄妹》と言われるまでに成長していた。

しかし目の前のジエネシス達を見て、軽く戦慄した。

なんだあの強さは。まるで次元が違う。

自分たちの目指してきた目標の高さを改めて感じ、少し絶望が湧いた。

しかし先ほどの少年はこう言った。

『この世界での本当の強さを決めるのは人の意思だ』と。

「……そうか…そうだよな」

サツキは双頭刃を握って立ち上がる。

「大事なのは《心》だよな。

心の火……《心火》だ。心火を燃やして……僕は戦う」

「なら、あたしも行くよお兄ちゃん」

するとハツキがサツキの隣に立ち上がって言った。

「ああ、行こうハツキ。僕たちなら行ける……どこまでも！」

「うん！」

そう言って、《黒白の兄妹》は駆け出した。

—————

ティアは決してオレンジ達を死なせない程度で斬りつけ、攻撃していた。

先日のラフコフ掃討戦と同じく、武器破壊と部位欠損ダメージによる戦闘不能状態にしたり、場合によってはHPをレッドゾーンまで持っていくオレンジを沈黙させていく。

人数は確かい多いが、この間のように自分の命を顧みずに斬りかかってくる集団ではないので、今回の方がティアにとってはやり易く感じた。

とはいえやはり50人を一人で相手にするのはきつい。

勿論自分もダメージを受け続けているし、回復する暇もない。

先程は大見得を切ってしまったが、この状態が続くと流石に不味い。

と、そう思っていた時だった。

不意に無数の流星が自分の前に落下した。

射撃広範囲スキル《プラネタリウム・エクスプロージョン》

「待たせたわね！」

ハヅキが笑顔でティアを呼びかける。

「ふっ……私に当てないでくれよ？」

ティアは不敵な笑みで返すと、再びオレンジ達に飛びかかった。

「任せて頂戴。あたしは……《純白の射手》よ!!」

そう言ってハヅキは矢を弓の弦にかけ、思い切り引く。

矢が赤よりのピンクの光を帯び、ハヅキは矢を放った。

矢はピンクの光の尾を引いた後、地面に直撃し半径7メートルくらいの火を巻き起こす。

射撃スキル《ミラクルマッチブレイク》

その衝撃で約5人のオレンジが吹き飛ばされ、HPがレッドゾーンまで達し戦意を喪失したのかうな垂れた。

ハヅキはそれを確認すると間髪入れずにもう一つの矢を取り出す。

次に狙いを定めたのは、ティアの背後から近づいていく8名のオレンジプレイヤー。

だがどうやらなにかを感じた8名の内の一人がハヅキに狙われてるのに気づき、回避行動をとった。

「……残念ね。狙った獲物は逃がさないわよ」

そう言ってハヅキは矢を引き、それを放った。

今度は白の流星が飛んでいく。

だがそれを察知していたオレンジはその矢を見事に回避した。

「いいえ無駄よ。その矢は貴方を決して逃がさない」

すると真っ直ぐ飛んでいた筈の矢は突如急に曲がり、見事にそのオレンジを射抜いた。

射撃スキル《マツハクエイクショット》

弾道を任意で軌道変更出来るというスキルだ。

「覚えておきなさい……この私に射抜けないものなど無いわ!!」
そう言つて、ハヅキは再び背中の中のホルダーから矢を取り出す。
が、どうやらこれが最後の矢のようだ。

ハヅキは深呼吸し、今の集中力を更に極限まで引き上げる。

そして、ゆっくりと矢を弦にかけ、それを引く。

すると、矢の先端からシアンの光が現れ、それが徐々に前方に展開し、無数の光の輪を形成、前方のオレンジの集団をロックオンする。

そして矢自体もシアンの光を纏い始めたところで、ハヅキはそれを思い切り放つた。

矢はシアンの光の輪を一つ潜り抜ける毎に巨大化し、そしてエネルギー波と化した。

そして最後の輪をくぐり抜けたところで、シアンのエネルギー波は狙い通り約20名のオレンジ集団に命中、大爆発を起こした。

射撃最上級スキル

《テイメンションシユート》

シアンのエネルギー光線を受けた20人のオレンジ達は完全に沈黙した。

そして同時に、ティアも全てのオレンジの掃討が完了したらしく、ハヅキの元へ歩いて来る。

「見事な射撃だったな」

「そちらこそ、凄い剣術だったわ」

ティアとハヅキは笑顔でそうやり取りした後、再び目の前で倒れこむオレンジ達を見下ろす。

「よく覚えておけ……《この世にまずい飯屋と、悪が栄えた試しはない》」

ティアは鋭い表情でオレンジ達を見据えながら言った。

――

「うおらあ!!」

ジエネシスは迫り来るハンマーをただひたすらに捌き続けた。

ソードスキルを使えば簡単に倒せるだろうが、恐らくそう易々とソードスキルを食らってくれるような相手では無いことをジエネシスは見抜いていた。

しかも相手が何もスキルを使ってくる以上、もしこちらの攻撃が外れて向こうに攻撃の隙を与えてしまえば、それが致命傷になるのは間違いない。

「オラオラどうしたあ?!そんなものかい?!」

クダルは巨大ハンマーを休む間も無く振り下ろし続ける。

幸い、両手剣の中でも屈指の大きさを誇る新たな大剣《アインツレーヴェ》ならばパワー負けする事は無いが、それでもこの男とやり合うには後一つ決め手が欲しいジエネシスだった。

その時。

黒い一閃がクダルを貫く。

「ああはっ?!なに一体?!」

妙な奇声を上げた後、クダルが見たのは漆黒の少年。

「おうおう、何でテメエがこんなところにいやがんだ?」

「ちよつと野暮用でな。俺だって、まさかお前らがいるとは思ってなかったさ」

ジエネシスが悪戯な笑みを浮かべて尋ね、少年は肩をすくめて答えた。

「アナタは一体何者?!」

「俺か?俺は……キリト。剣士キリトだ」

クダルの問いに対し少年キリトは凜とした声でそう答えた。

「アンタが《クダル・カデル》か。探してたぜ」

「えっ、なに?アタシを探してたって?まさかアタシのファンの方?!」

キリトの言葉に対してクダルはおどけた表情で言う。

「アンタの悪行は攻略組の耳にも入ってたからな。俺たちで何とかし

ようと言う話になったのさ」

「無視？ねえ、アタシの質問は無視？」

クダルのおどけた質問をキリトは意に介さず続けた。

「助けに来てくれたのはありがてえが、こいつ一筋縄では行かないぜ？」

「そうみたいだな。まあ、切り札はあるさ。お披露目にはちよつと早いけど、まあジエネシス達なら見せても大丈夫だろ。どうせお前も持つてるだろうしな」

「は？何のことだよ」

「すぐに分かるさ」

するとキリトはメニュー欄を操作しとあるボタンを押す。

すると、背中にもう一本の片手剣が出現し、元々装備されていた漆黒の剣《エリユシデータ》とクロスする形で装備される。

「お前、それ……！」

「大方、お前の考えてる通りだよ。俺もこいつが出た時は何かと思ったださ」

そしてキリトは背中から二本の剣を引き抜いた。

右手には見慣れた《エリユシデータ》、左手には見たことのない翡翠色の十字剣があった。

左右の手に剣を持つ……二刀流。どうやらこれが、キリトの手に入れたスキルのようなだ。

「イケメンで強いのねっ!!嫌いじゃないわ!嫌いじゃないわ!!嫌いじゃないわーっ!!」

クダルは巨大ハンマーを今度はキリトに向けて振り下ろす。

「セイツ!!」

キリトは二本の剣を巧みに操りハンマーを受け止め、捌いていく。

その隙にジエネシスは背後からクダルに斬りかかる。

「甘いわあっ!!」

だがクダルはその攻撃を読んでいたのか振り向きざまにハンマーをジエネシスに横薙ぎで振り回す。

「うおっ?!」

ジエネシスは咄嗟に大剣を自身の左側に持つてくることで何とか直撃は避けたが、衝撃は防げず数メートル吹き飛ぶ。

しかしその一瞬の隙を見て、キリトがクダルの右手を斬りつけ、クダルのハンマーを叩き落とした。

「アアン!!やったわね?!」

するとクダルはハンマーを拾い上げるのではなく、腰から一本の紐……否、鞭を取り出した。

「アナタ達はこれで締めてあげるわ!!月に代わって……お仕置きよ!!」

「……それ言っているの美少女戦士だけだからな」

「ああ。アンタみたいなガチムチのおっさんが言っているいいセリフじゃない」

ジエネシスとキリトが呆れた顔でそう言った。

「くくつ、な、なあんですってえ?!レディに向かって!!」

その言葉に逆上したクダルは、鞭をキリトに向かって放った。

「痛つて!」

胴を叩かれたキリトは思わず数は後退する。

「えいつ!!」

間髪入れずに放たれた鞭はキリトの身体に完全に巻きつき、キリトは身動きが取れなくなった。

「ぶっ飛びいいー!!」

「うわあああつ?!」

クダルはその状態でキリトごと鞭を思い切り引っ張る。

キリトは空中に放り出されると同時に、鞭が解ける過程で回転が起きそのまま地面に背中から落下した。

するとクダルは、今度はジエネシスを標的に鞭を振るった。

ジエネシスは大剣の刃を横にして盾のように構えてそれを防ぐ。

だが、クダルはガラ空きになった彼の右足首に鞭を巻きつけてそれを引っ張り、ジエネシスを転倒させた。

「っ、くそ!!」

背中から倒れこみ思わず毒づくジエネシス。

そこへクダルが不気味な笑みを浮かべながらゆつくりと近づく。
その時だった。

「はあああっ!!」

濃紺のコートを着た少年が彼に斬りかかった。

鋭くギラつく双頭刃。

サツキだ。

「…待たせたね」

サツキはジェネシスの方を振り向くと、笑顔でそう告げた。

「へっ、別に待つちやいねえよ」

ジェネシスは軽く笑って返した。

「……どうやら、決心はついたみたいだな。

ならもう大丈夫だ。行ってこい」

「……ああー」

キリトは不敵な笑みで頷きながらサツキを送り出した。

サツキは双頭刃を構えて飛び出した。

「アナタも来るのね?ならお仕置きしちゃうっ!!」

「セイツ!!」

不規則に迫る鞭を、双頭刃の特徴である左右の刃で巧みに弾いて行く。

「凄いな……双頭刃はかなり扱いが難しい筈なのに、まるで自分の手足のように使ってる……相当な手練れだな」

キリトはサツキの戦いぶりを見て冷静に分析し、思わず感心の声を上げた。

「はあっ!!」

そして遂に、サツキはクダルの体を斬りつけた。

「ギャッツ?!」

その攻撃でクダルは地面に倒れこむ。

「今だ!!」

キリトとジェネシスがクダルが倒れ込んだ瞬間を狙い立ち上がる。

「イケメンで強い……嫌いじゃないわ!!」

「くっつ?!」

クダルは一瞬で起き上がると、鞭をキリトの胴に巻きつけ、左手で拾ったハンマーでジエネシスを殴り飛ばした。

「アタシが抱きしめてあげる?！」

「げっっ?!」

「キリトさん!!」

サツキは右手で双頭刃を放り投げた。

すると、双頭刃は黄色い光を発しながらブーメランのように回って飛来し、そのままクダルの右肩を切り落とした。

双頭刃ソードスキル《リモート・フローター》

「ああつ、斬れちゃった?!」

「よしー!」

「ナイスだぜ、サツキ!!」

キリトが自由になった右手でサムズアップする。

「当然ですよ。」

プレイヤー同士困ったら助け合い、でしょ?」

「おっしやる通りだわああああああー!!!」

クダルはそう叫びながらサツキに向かってハンマーを掲げてダツシユする。

サツキは双頭刃のグリップを両手で握り、右腰の辺りに低く構える。

双頭刃の二つの刃がゴールドの光を宿し、ソードスキルが発動する。

「セイヤアアアー!!!」

そしてサツキは、一瞬でクダルに接近し、双頭刃を上手く回転させながら高速の乱撃を与えた。

双頭刃最上級スキル

《ロイヤルストレート・フラッシュ》

「逝って来まあああー!!!」

クダルはそう叫びながら数メートル先へ吹っ飛んでいった。

五十九層での激闘から数日後、一行はレインの店にいた。

ジェネシス達はあの後、オレンジギルド《ブルワーズ》頭領『クダル・カデル』をはじめとする多数の犯罪者プレイヤー達を監獄に連行し、その後も五十九層の山に居座るオレンジプレイヤー達の掃討に当たり、現在ではグリーンのプレイヤーも安心してアイテム採掘に行けるまでに治安は回復した。

「本当にありがとう、3人とも！」

レインは笑顔で頭を下げた。

その相手は、ジェネシスとティア、そしてキリトだ。

「いいや、俺たちは正直何もしてないよ。あいつらを倒したのは、あの二人さ」

キリトは首を振ってそれを拒絶し、視線を店の奥に向けた。

そこにいたのは、サツキとハツキ。

「えっ、僕たちですか？」

「たりめーだろ。最終的にあのオネエを倒したのはテメエなんだからよ」

「ああ、お前達がいなければ、あのオレンジ達共を一掃する事は難しかっただろう。だから礼を言われるべきは、お前達二人だ」

自分の名前が出てキョトンとしているサツキに、ジェネシスとティアの二人が頷きながら肯定した。

「そうか……なら、ありがたくありがたく貰っておこうかな」

「そうそう、それでいーんだよ」

「あの、一ついいですか？」

不意にハツキがたずねる。

「ジェネシスさん達……もう最前線に行っちゃうんですか？」

「そうだな、もう三日くらい空けてしまった」

「流石にこれ以上攻略をサボってられないからな」

ハツキの問いにティアとキリトが答えた。

「そうですか……なら、ここでお別れですね」

サツキが残念そうに目を伏せる。

「バーカ、これつきりな訳ねえだろ。テメエらの実力なら、直ぐに最前線に追いつけるさ。そうすりゃ、また会える」

「ああ、心配しなくてもサツキとハツキは十分強い。いつか君達と同じ場所で一緒に戦える日が来るのを楽しみにしてるよ」

サツキに対し、ジェネシスとキリトがそう励ました。

「……はい！」

サツキとハツキは揃ってそれに応えた。

「なら、武器のメンテナンスは私に任せてね。いつでも待ってるわ！」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

レインとティアはそう言葉を交わす。

そしていよいよ、ジェネシスとティア・キリトの3人は街の中央にある転移門へ歩いていく。

サツキ達はその背中をただ手を振って見送った。

「……なあ、ハツキ」

不意にサツキは妹に言った。

「いつかあの人達みたい……僕らも必ず、そこへ行くよ」

「うん。あたし達なら、きっと行けるよ」

そう言葉を交わし、見つめ合いながら微笑む兄妹。

彼らが最前線に姿を現わす日も近いだろう。

現在最前線は七十四層。

ここから更なる激闘が、ジェネシス達を待ち受ける――

十五話 ボス部屋へ

2024年10月17日

現在最前線は七十四層。

このデスゲームが始まってから約二年が経過した。

その間、犠牲者はもう四千人近くに登っている。

未だ、最終目標である百層までの道のりは遠い。

このゲームを作った男《茅場晶彦》は今どこで彼らを監視し、何を
感じているのだろうか――

「最近、ちょっと悩み事があるんだよね……」

その日、攻略を終えたジエネシスとティアの二人は迷宮区から出て、寝泊まりしている宿屋へと足を運んでいた。

その途中で、ティアは唐突にそう切り出した。

「悩み事？何だっつんだよ？」

ジエネシスが疑問符を浮かべると、ティアは一度目を伏せ

「……なんか、付きまとわれてる感じがするんだよね」

「はあ？そいつは世に言う『ストーカー』ってやつか？」

ジエネシスの言葉にティアは頷く。

「マジかよ、常に索敵は張ってるつもり何だがな……それにも引つかからねえとはそいつ、とんだ『隠蔽』の達人みてえだな」

「違うーそうじゃないのー！」

ジエネシスの考察にティアは強く否定した。

「つきまとってる人は、もう分かっているの……」

「あん？んーだよ、分かっているのかよ。で、どこのどいつだ？」

「それは……」

ティアが口を開いた時だった。

「これはこれは、『白夜叉』ティア殿」

そう言って彼らの元に近づく者が現れた。

ティアはその声を聞くと、不快そうなに顔をしかめて反射的にジェネシスの陰に隠れる。

彼らの前に現れたのは、白と赤の鎧に身を包んだ長身の男性だった。誰が見てもわかる最強ギルド《血盟騎士団》の者である。

髪は金髪で、髪型は後ろにその長髪を束ねたポニーテール。

顔は端正な顔立ちで人の良さそうな、しかしどこか食えない微笑を浮かべている。

身長はジェネシスとほぼ同等。腰には豪勢な装飾を施した長剣を吊るしている。

「血盟騎士団の『バンノ』……一ヶ月くらい前から私をしつこく勧誘してくるの」

ティアはジェネシスの耳元で、小声で彼の情報を伝えた。

「探しましたよティア殿。どちらにいらつしやるかと一日中探し回っていました、まさか迷宮区にいたとは！いやあく、精が出ますねえ！」

バンノは仰々しく手を叩きながらそう言う。

「ですが！もし貴女が我がギルドに入ってくだされれば、攻略スピードが上がることも間違いありません！」

どうかソロなどと言う非効率的なやり方で攻略するのではなく、我が血盟騎士団にご加入いただき存分にその実力を発揮して頂きたい！そしてそのパーティには、是非この私が……」

バンノはティアから目を離さずやや早口でそう言った。

「……何度も言わせるな。私はどのギルドにも入るつもりは無い。この人とコンビを組んでやってるからな」

そう言ってティアは隣のジェネシスに視線を促す。

バンノはジェネシスを見るとすうつと目を細め

「……ほう？貴殿が『暗黒の剣士』、ですか」

そう言うと、バンノはゆっくりジエネシスに近づく。

ティアはバンノの接近に対しジエネシスの後ろに隠れるように移動した。

ジエネシスは微動だにせずじっとしている。

やがてバンノはジエネシスの目の前まで来ると、足元から舐め回すような視線で見回し、

「ふうむ……噂ほどの実力は感じられませんがねえいやはや全くおかしな話です。なぜこんな男がああの高き《白夜叉》ティア殿とコンビを組んでいるのか！」

バンノは敢えて周りに聞こえるような大きな声でそう宣った。

「…おい、少なくともこの人はレベルも実力も其方より上だぞバンノ」
ティアがジエネシスの背中から少し顔を出し、鋭い目つきで睨みながら言った。

「ま、たしかにそのようですねえ。」

で・す・が……どうせ何か卑怯な手を使っているのではないですかあ〜？だつてこの男は、あの忌むべき異物《ビーター》にして、人を平気で殺してしまう怪物《暗黒の剣士》^{ダークナイト}なのですから！」

《ビーター》……第一層ボス戦の終了後、ジエネシスがβテストとビグナー達の溝を作らないための一芝居でついでにしまった蔑称だ。

そして《ダークナイト》は、数ヶ月前に行われたラフコフ掃討作戦にてジエネシスがやった行為でつけられた二つ名だ。

ここまでジエネシスを侮辱されたティアはもう既に怒り心頭で、刀の鍔を指で押し出し鯉口を切っている。今にも抜刀して斬りかからんとする勢いだ。

だが

「…悪りーな。今はとりあえずティアを休ませたい。」

おめえも、疲れ切った相手にしつこく付きまとう鬼畜じゃねえだろ？」

ジエネシスはなるべく相手を刺激しない口調でそう言った。

「……ふうん？なんでこの僕が君の意見を聞かなきゃならないんだ、と言いたいところですが……一理ありますね。」

いいでしょう、今日のところは失礼します。ティア殿、いい返事を期待していますよ」

そう言ってバンノは一礼し、ジェネシスの隣を通って転移門へと行き、本拠地であるグランザムへと姿を消した。

「久弥……」

ティアは不安げな表情でジェネシスを見る。

「……あの副長に、苦情でも言っとくか」

—————

プレイヤーホームに戻ったジェネシス達。

そこへ一通のメールが入った。

差出人はキリトで、内容は《アスナを含めた四人で攻略に行かないか》という誘いだった。

「……だってよ。どーする？」

「いいんじゃない？アインクラッド四天王が揃って攻略なんて滅多にないし」

「あつそ。ま、俺もあいつには色々言いてえ事があるからな」

そう言っと思い返すのは、昼間に会ったあの『バンノ』とか言う勧誘係。

まあ、別に自分の評価など知ったところではないが、それでも大事な人にしつこく付きまとわれるのはジェネシスと言えど許し難い事だった。

そして迎えた次の日。

二人は揃って七十四層へと行くために転移門広場へと足を運んでいた。

その時だった。

「おはようございます！・ティア殿!!」

例のバンノが転移門で待ち構えていたのだ。

「今日こそは、我が血盟騎士団への入団を決意していただきますよ!!」
などと大声で叫び始めた。

「私はギルドには入らんと云ってるだろ!!そもそも貴様、なぜこんな所で待ち構えてる?!」

ティアはこの男から相当つきまとわれて限界が来ていたのか、普段の冷静な声ではなく怒気を孕んだ荒々しい声で、バンノをにらみながら問い質した。

「無論！貴女の勧誘の為ですよ!!」

ティア殿に是非我がギルドに入っていたたく為、一ヶ月ほど前から動向を監視させていただいてましたので」

「はあ?」

悪びれもなく答えるバンノに対し思わずジエネシスは目を丸くした。

つまりそれはもう完全なストーカー行為ではないか。

「久弥……」

ティアは少し怯えた表情でジエネシスの後ろに隠れる。

やはり《白夜叉》と言われるほどの強さを持つティアと云えど、元は一人の女性。この手のストーカーに嫌悪感や恐怖を感じるの無理もない。

「さあ・ティア殿、僕と一緒に血盟騎士団本部に参りましょう!!本部まで来てくだされば、きつとそのお心も変わるはずですよ!!そしてその後、是非僕と二人のパーティーに!!」

そう云って右手を差し出しながらゆっくりとティアの方へと近づいて来る。

「おい」

だがそんな彼の進路を塞ぐようにジエネシスは立ちはだかった。

「……何のマネかな?・部外者の君には立ち入って欲しくないんだがね?」

バンノは目を細めながらジエネシスに言った。

「部外者？そいつは違えな。こいつは俺の嫁だ。勧誘すんなら俺に話を通すのが筋つてもんじゃねえのか？」

ジェネシスは威圧感のある視線でバンノを見下ろしながら言った。「嫁エ?!ははっ!!これは傑作だ、随分と思いい上がってるみたいだねえ君は。君みたいな薄汚い『ビーター』の《暗黒の剣士》が、高潔で気高き《白夜叉》ティア殿のパートナーが務まるど？」

侮蔑と嘲笑を交えた表情を浮かべながらねっとりとした口調で話すバンノ。

「はっ、笑わせんなよ。テメエみてえな雑魚ストーカーよりはまともに務まるぜ」

それに対してジェネシスは不敵な笑みを浮かべながら挑発した。

その言葉でバンノの顔に浮かんでいた不気味な微笑が消えた。

「……へえ。なら、そこまで言うなら証明してもらおうじゃないか」

そうやってバンノはメニュー欄を操作し、タップ。

そしてジェネシスの前に一つのシステムメッセージが現れた。デュエル申請だ。

「……っ」

ティアは不安そうな目でジェネシスを見つめる。

「安心しろ、俺があんなクソツタレに負けるわけねえだろ。信じて下がってる」

ジェネシスは振り返る事なくそう言って『初撃決着モード』を選択。そしてカウントが始まった。

「ご覧下さいティア殿！この僕こそが貴女の隣に立つに相応しい事を証明しますぞ!!」

バンノは腰から豪壮な装飾の施された両手剣を抜きはなした。

ジェネシスはティアが後ろに下がったのを確認すると、背中から赤黒い大剣『アインツレーヴェ』を引き抜く。

『ゴトン』という重々しい金属音を立て、その刃が引き抜かれた。バンノの様々な装飾が施された長剣と違い、ジェネシスのアインツレーヴェは然程飾りなどはなく、控えめなデザインだ。しかし、ジェネシスがその剣を軽く振るうだけで、『ブン』という風切音が鳴り、その剣

の重さをこれでもかと周りに知らしめる。

「おい！《暗黒の剣士》と『血盟騎士団』メンバーがデュエルだとよ!!」
やがて周囲に彼らのデュエルを見ようと野次馬が集まり始める。

通常この世界でのデュエルは、知り合いや友人同士での腕試しなどで行われる程度だ。

先ほどの険悪なジエネシス達のやり取りを知らない人々が、次々に一流プレイヤー同士のデュエルを見ようと集まってくる。

バンノはそんな野次馬達を一瞥すると鬱陶しそうに舌打ちし、剣を構えた。

腰を落とし、両手で柄を持って切っ先をジエネシスの方に向けている。剣道でいう《霞の構え》だ。

それに対しジエネシスは、大剣を右肩に担ぎ腰を落とす。左手は脱力して屈折した左足に乗せている。ジエネシスにとつてこれが最も戦闘に持ち込みやすいスタイルだ。

両者が各々戦闘態勢に入ったところで、場の緊張感が徐々に高まっていく。それに連れて野次馬達の声も静まっていき、やがて静寂が訪れた。

ティアを含めた皆が固唾を呑んで見守る中、ついにカウントがゼロになり、デュエルが開始された。

まず動き出したのはバンノの方だった。

彼の剣がオレンジの光を宿し、そのままジエネシスに突進していく。

両手剣ソードスキル《アバランシュ》だ。

それに対してジエネシスは……………動かなかった。

先程の構えのままただじつと微動だにしない。

バンノはそれを見て一瞬驚愕で目を見開いたが、直ぐに勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

そして、そのまま剣を上段に振りかぶる。

その瞬間、ジエネシスは動いた。

右足を力強く踏み出し、半身を捻りながら左手を剣の柄に添える。

アインツレーヴェの赤黒い刃がライトグリーンの光を帯び、ソードスキルが発動する。

両手剣基本ソードスキル《ブラスト》

そしてジェネシスは、半身を捻る勢いに乗せ、ライトグリーンに光る刃を無防備に晒されたバンノの胴に叩き込んだ。そのまま右切り上げで剣を振り抜く。

「ぶあっ?!」

バンノはそんな奇声を上げながら大きく後方へ吹き飛ばされた。

そして同時に、デュエルが決着する。

《Winner:Genesis》

「すげえ…あのタイミングで攻撃できるのかよ」

野次馬の一人が感心したように呟く。

当然だ。ここまでの出来事は、周りの人間からすれば一瞬の出来事だったからだ。恐らく、デュエルが始まってから約1秒程度しか無かっただろう。

周りの人間には、アブランシユで飛びかかったバンノがジェネシスに弾き飛ばされたように見えたはずだ。まあ、実際そんな訳だが。

「そんな……僕が…この僕が……なぜ、こんなビーターなんか……！」

バンノは両腕をガタガタと震わせ、弱々しい声でブツブツとそう呟いていた。

その顔には、自信に満ち溢れ他人を見下すような表情はなく、瞳孔が開かれその美麗な顔は酷く歪められていた。

ジェネシスはそんな彼を見て嘆息しながら剣を収め、

「…お前の腕は悪くねえ。レベルも俺とそこまで変わんねえみてえだし、同じ両手剣同士だ。」

なのに何故負けたかって?んなもん、答えは簡単さ……」

そして一度目を伏せて区切り、再び顔を上げて威圧感のある視線でバンノを見下ろし、

「……格の違いだ」

と、低い声でそう言った。

その瞬間、バンノの目は限界まで見開かれ、同時にうな垂れた。その時、転移門が青白く光り、中から血盟騎士団のメンバーと思われる男性がやって来た。

「ここに居たか、バンノ。団長からの伝言だ」

男性はバンノに歩み寄っていく。

そしてバンノの前で停止すると、

『直ちに本部まで帰投。指示があるまで自室にて待機せよ』：以上だ。行くぞ」

そして男性はバンノの手を無理やり引つ張って立ち上がらせると、そのまま転移門に促す。

男性は転移門に入ると、ジェネシスとティアの方を向き、

「……迷惑をお掛けしました」

と謝罪して一礼した後、グランザムへと帰って行った。

しばらくその様子を見つめていたジェネシスだったが、ティアの方を振り返り

「……大丈夫だったか？」

と尋ねる。

「うん。ありがとう、久弥。かつこよかったよ」

ティアも満面の笑みでそう答えた。

「……んじゃ、そろそろ行くか。あいつらも待ってるだろうしな」

そう言っただけジェネシスとティアは歩きだし、転移門に入ると、キリト達の待つ七十四層へと向かった。

—————

「…おいおい、なんだあこりやあ？」

七十四層に着いたジェネシス達が目にしたのは、大勢の野次馬と、その中心で向かい合う二人の剣士。

一人は白と赤の騎士服を着た血盟騎士団メンバーの男、もう一人は黒ずくめの服に身を包んだ少年、キリトだった。

そしてキリトの背後でアスナが不安そうな目で見守っている。

「…なんか、こっちでも揉め事が起きてるみたいだね」

ティアが大体の状況を察したのか苦笑しながら言った。

そしてキリトと男のデュエルが始まった。

男が使用するのは、両手剣スキル《アバランシュ》、キリトが使うのは片手剣スキル《ソニック・リープ》だ。

だがキリトが使うのは片手剣。もしこのまま衝突すれば、パワー負けしてそのままキリトの敗北が決まるだろう。

だがそれでもキリトは突っ込んだ。ということは、何か策があるのだろうとジェネシスは考察した。

そして二人の距離がゼロとなり、けたたましい金属音と火花を散らして両者は介錯してお互いの位置が入れ替わる形で停止した。

直後、男の元に一本の金属が落下した。

それは男の両手剣の刃。そしてそれは、男が持っていた剣の柄と同時にガラス片となって消滅した。

「なるほど……《武器破壊》か」

ジェネシスはほくそ笑みながらそう呟いた。

剣と剣がぶつかった時に稀に起こる現象、それが武器破壊だ。無論滅多にそんな事が起きることは無いが、

「あんにやろう…狙ってやがったな」

ジェネシスはゆっくり立ち上がるキリトを見つめながら感心したようにそう呟いた。

「あれくらい私にも出来るもん」

するとティアが頬を膨らませながらそう言った。

「まあ、そうだろうな。ちなみにおめえだったらどうしてた？」

「私なら二回折ってたかな？」

「それが出来んのはおめえだけだよ……」

ジエネシスはティアの言葉にため息をついた。

すると男が短剣を取り出してキリトの方に走り出す。

「おっと」

ジエネシスもその場から駆け出し、野次馬を通り抜けて男を蹴り飛ばした。

「ぐはっ?!」

男は後ろに数歩よろめくと、そのまま尻餅をつく形で倒れ込んだ。

「ジエネシス!」

後ろからキリトが目を見開いて叫んだ。

「おいおい、往生際が悪いんじゃないやねえの?もう勝負はついてんだろ」

ジエネシスは男を見下ろしながら言った。

「き、キサマア……《暗黒の剣士》!」

男はジエネシスを憎しみのこもった目で睨みながら立ち上がった。するとアスナがジエネシスの前に立ち、男を鋭い目で見つめると

「…クラディール、血盟騎士団副団長として命じます。

本日をもって護衛役を解任。別名があるまでギルド本部にて待機。

以上」

「な、なんだと……この……!」

クラディール、という男は怨嗟の目でジエネシスを…否、その後ろにいるキリトを睨みつけた。

だが観念したのか、俯きながら転移門へ入ると、グランザムへと帰って行った。

「……ごめんね、嫌な事に巻き込んだんじやって」

アスナが三人の方を振り向き、弱々しい声でそう言った。

「いや、俺たちは別にいいけど……大丈夫なのか?」

キリトがそう尋ねると、アスナは気丈な、けれど少し申し訳なさそうな笑みを浮かべ

「今のギルドの雰囲気は、ゲーム攻略だけを考えてメンバーに規律を押し付けた私にも責任があると思うし……」

「そんなことは無いさ。アスナのような人間がいなければ、今頃攻略

はもつと遅れていただろうかしな」

「そーだよ。だからテメエも、たまにはこんないい加減なのと組んで息抜きしたって誰も文句言わねーよ」

「まあ、そんなに気負う必要も無いんじゃないかな？ 詰めすぎてもいいことなんて無いし、むしろアスナも、俺みたいにいーい加減になつてもいいと思う」

三人の言葉を聞き、少しの間目を丸くしていたアスナだったが、すぐにその表情から緊張が取れ、

「…まあ、ありがとうと言っておくわ。それじゃお言葉に甘えて今日は楽させてもらうわね。前衛よろしく」

そう言つて歩き出す。

「…そりやいいけど、それだとテメエ要らなくなるぜ？」

「ああ。ただでさえ俺たちは攻撃力が売りだし…俺たち三人でもいけるんじゃないかな？」

「アスナ、お前は帰つていいぞ」

「ちよつとそれ酷く無い?!」

そんなやり取りをして彼らは迷宮区に向かう。

ジェネシスは先ほどのアスナの様子を見て、ティアのストーカーについてはまたの機会に話そうと心に決めた。

—————

その後、四人は危なげなく迷宮区を進んで行く事数十分。

ここまで四回の戦闘があつたが、勿論彼らは全く苦戦する事なく進んできた。

迷宮区のマップピングもあと少しだ。そして恐らくこの先に……

と、ジェネシスが考えていると、目の前に巨大な二枚扉が現れた。扉とその両隣の柱には細かな装飾や怪物のレリーフが彫られてい

る。

「これって……」

「ああ、多分間違いない……ボスの部屋だ」

アスナの呟きにキリトが頷いて答えた。

「どうする？」

「まあ、ボスは部屋から出てこねーし、覗くだけなら大丈夫だろ」

ティアの問いにジェネシスが軽い口調で答えた。

「そうだな。覗くだけ覗いてみるか。一応転移結晶を用意しててくれ」

キリトの言葉で皆が各々の転移結晶を片手に取った。

そして、キリトが左側、ジェネシスが右側のドアに手をかける。

「……開けるぞ」

「おう」

そして二人はゆっくりと扉を開く。

重々しいサウンドエフェクトが鳴りながら扉は開かれた。

中は――真つ暗闇だった。

四人は慎重に部屋の中へと足を進める。

すると、部屋の扉付近から青白い炎が灯った。

それは円形になって二つ……四つ……六つと増えていき、暗闇に包まれた部屋を完全に照らす。

そして漸く明るくなった部屋の中に、それはいた。

《The Greameyes》

『輝く双眸』という意味を持つ名前と、四段のHPバーが表示された。

5、6メートルくらいはある巨体は、体色は深めの青。縄のような筋肉質な肉体を持っており、頭部から生える大きくねじ曲がった角は山羊を連想させる。

そして右手にはその身長と同じくらいのサイズの片刃式の大剣。

その両目からは、禍々しい青白い光が放たれている。

まさに『青眼の悪魔』と言ったところか。

四人が目の前ボスに圧倒されて固まっていると、悪魔は突如首を上げて強烈な雄叫びをあげた。そしてその右手に持った大剣を振り

かぶり、大きな地響きを立てて四人に向かってくる。

「うわああああー！！」

「きゃああああー！！」

悲鳴を上げて走り出すキリトとアスナ、それに続きティアもAGIを全開にして走り出す。

「オィィィー！！てめえら置いてくくなああー！！」

一人出遅れたジェネシスも慌てて走り出す。

—————

四人が走った先は安全地帯。

キリトとアスナは壁にもたれかかって座り込んでいる。

「……ぷっ」

誰からともなく笑いがこみ上げた。

「あははっ、やー逃げた逃げたー」

「ああ、こんなに走ったのはいつぶりだろうなあ」

「いや……てめえら……ほんとふざけんな……マジで……」

キリトとアスナは声のした方を向くと、声の主は地面に突っ伏して倒れ込んでいるジェネシスだった。

そう言えばキリトとアスナ、ティアの三人はAGIが高いが、ジェネシスは唯一のSTR型。彼らの全力疾走について行くのに相当な体力を使っただろう。

「…済まないな、ジェネシス。置いて行くような真似をして」

ティアが申し訳なさそうな顔をしながらジェネシスの側にしゃがみ込むと、その背中を優しく摩った。

「ホントだよ……ちったあ……加減しろや……」

未だに肩を上下させながら呼吸をしているジェネシスを介抱するティアを微笑ましく見ていたアスナは、真剣な表情に変え、

「あれは苦勞しそうだね……」

「ああ。前衛に固い人材かジェネシスみたいなパワー型のプレイヤーを集めてぶつける感じになりそうだ。見たところ武装は両手剣だけみたいだが……特殊攻撃もありと考えていいな」

「タンク固めて、スイッチしながらやる感じだな」

「盾装備10人は欲しいとこだな……」

「盾装備、ねえ……」

キリトの呟きにアスナがピクリと反応した。

「君、何か私に隠してることあるでしょ?」

「へ?なんのことだ?」

「だっておかしいもの。片手剣のメリツトって左手に盾をもてることでしょ?私は細剣のスピードが落ちるからだし、スタイル優先って人もいるけど……君はそうじゃないよね?」

ジト目で問いただすアスナにキリトは何も言えずただ目を逸らしている。

「……ま、いつか。スキルの詮索はマナー違反だものね」

そう言ってアスナは時計を確認すると、時刻はもう既に三時。

「それじゃ少し遅いけど、お昼にしましょうか!」

アスナがそう手を打って、メニュー欄からバスケットをオブジェクタ化する。

「ほら、ジェネシスも早く起きろ。昼食だ」

「んー?おう、わかった」

漸く呼吸が落ち着いたジェネシスも起き上がって、キリトのとなりに座り込んだ。

そしてその隣にティアが座り、アイテム欄から弁当箱を取り出す。

「はい」

そう言ってティアが手渡したのは、おにぎりだった。

「おう、サンキューな」

そう言ってジェネシスはおにぎりを頬張った。

「味はどうだ?」

「美味しい。サイコーだな」

ジエネシスは親指を立てて答え、ティアもそれを聞き自然と笑みがこぼれた。

「へえ、おにぎりか。定番中の定番だが、そういえばこの世界ではあんま見ないな」

「おにぎりって案外この世界で作るのって難しいのよ。ティアさん、貴女料理スキルはどのくらいあるの？」

「ん？もう既にコンプリートしてるが」

それを聞き、キリトとアスナは目を見開いた。

「そ、そうか…流石ティアだな」

「うわあ、完璧な人間ってこういう人よね…」

「そんな褒めたって何も出ないぞ？」

彼らがそんなやり取りをしている時だった。

安全地帯に新たなプレイヤー集団が現れた。

侍の鎧に身を包んだ男性プレイヤー達。

皆悪趣味なバンダナを頭に巻いている。

やって来たのは、『風林火山』の面々だ。

するとリーダーのクラインがジエネシスとキリトに気づき

「ようーキリの字にジエネ公じゃねえか!!」

と言いながら走り寄ってくる。

「よう、まだ生きてたのかクライン」

「よう、まだ独り身なのかクライン」

キリトとジエネシスが続けざまにクラインに言った。

「相変わらず愛想のねえ野郎だなキリト。」

それでジエネ公！おめえはティアちゃんつつうべっぴんさんと結婚できたからいいよな！俺も直ぐにいい嫁さん見つけてやっからな!!」

クラインは悔しげな顔でジエネシスに掴みかかった。

するとクラインは後ろのアスナに気づくと、表情が固まった。

「ああ、ボス戦とかで顔合わせしてるだろうけど一応紹介しとくよ。

こっちは《血盟騎士団》のアスナ。んでこっちは《風林火山》のリーダーのクライン」

紹介を受けクラインに会釈するアスナ。

だがクラインは微動だにしない。

「おい、なんか言えよクライン氏。ラグってんのか?」

ジェネシスはクラインの目の前で手をブンブンと振る。
すると、

「く、くくクラインです! 24歳独身彼女募集中!」

次の瞬間キリトのアップパーとジェネシスの蹴りがクラインに炸裂した。

「つてえ! 何すんだよてめえら?!」

クラインは涙目でキリト達を睨んだ。

「なーにが彼女募集中だコラ」

だがそんな彼らの元に新たなプレイヤー集団が現れた。

皆が視線を向けると、そこには約20名程の集団が来ていた。皆似たようなグレーの鎧に身を包んでいる。

「あれは……『軍』か?」

「第一層を支配してる連中が何でこんなところに?」

ティアとクラインが訝しげな表情で首を傾げる。

『軍』というのは『アインクラッド解放軍』のことだ。

まあ、その名前は周囲のプレイヤー達が揶揄的な意味合いで呼んでいるのだが。

「休めえ!!」

先頭に立つリーダーらしき男が後ろを振り向き叫んだ。

部下達はその声とともに地面に崩れるように座り込んだ。

リーダーの男はジェネシス達の前に歩み寄る。

「私は『アインクラッド解放軍』のコーバッツ中佐だ」

そう名乗る。

「……俺はジェネシスだ」

面倒くさそうに答えるジェネシス。

コーバッツはそんなジェネシスの様子を気にせず

「君らはこの先も攻略しているのか?」

と横柄な態度で訪ねてくる。

「ああ。一応ボスの部屋まではマッピングしてあるぜ」

というジェネシスの答えを聞いた瞬間、コーバッツは右手を差し出し、

「うむ。ではそのマッピングデータを提供してもらいたい」

当然、とばかりにコーバッツは横柄かつ不躰な要求をしてきた。

「な…ただで提供しろだ?! てめえ、マッピングの苦勞が分かって言ってるのか?!」

「貴様、一体何の権限で言っているつもりだ?!」

クラインとティアが抗議の声をあげる。

「我々は情報と資源を平等に分配し、一刻も早くこの世界から全プレイヤーを解放するために戦っている!」

故に、諸君らが協力するのは当然の義務である!」

「戯言を…二十五層で壊滅的な被害を受けてからは、ろくにボス攻略にも参加せずに一層で威張り散らしてただけだろうが…」

あまりに傲岸不遜な態度で主張するコーバッツに、ティアは呆れたため息をつきながら言った。

「まーまー落ち着けて。どーせ街に戻ったら公開するデータだ」

「ああ。遅いか早いかの違いさ。構わないよ」

今にも掴みかかりそうな勢いのクライン達をジェネシスとキリトの二人が制し、キリトはメニュー操作を開始した。

「おいおい、そりゃ人が良すぎやしねえかキリトよう?」

「マップデータで商売する気は無いさ」

マップデータを受け取ったコーバッツは「協力感謝する」と全く気持ちのこもっていない礼を言うど振り向いた。

「一つだけ忠告しといてやる。ボスにちよっかいかけんなら絶対やめとけよ」

ジェネシスがコーバッツの背中に向けて言うと、

「…それは私が判断する」

コーバッツは少しだけジェネシスの方に視線を移し答えた。

「…さっきボスを覗いてきたが、そんな人数でどうこう出来る相手じゃなさそうだな。てめえのお仲間もへばってるみてえじゃなえか」

その言葉にコーバッツは勢いよく振り向き、

「私の『部下』達は、この程度で根をあげる軟弱者では無い!!」

貴様らあ! さっさと立たんかあ!!」

コーバッツの叫びに『部下』達はノロノロと立ち上がり、隊列を組んで歩き出した。

「大丈夫かよ、あの連中……」

クラインがその隊列の背中を見て呟く。

「大丈夫なワケねえだろ。絶対死ぬぞあいつら」

ジエネシスがそれに対して呑気な口調で答える。

「一応、様子だけでも見に行くか……?」

キリトがそう言って周りを見ると、皆は笑顔で彼を見つめていた。

「……たく、どっちがお人好しなんだか」

ジエネシスがため息をついてそう言うと、彼らは歩き出した。

十六話 青眼の悪魔

『軍』のプレイヤー達を追いかける事数十分後。

一行は途中で何回か戦闘があったものの危なげなく進んでいた。

「あいつら、もうアイテムだけ取って帰ったんじゃないやねえ？」

おどけたようにクラインは言うが、ジエネシス達四人の表情は固い。無論、そうであればかなり気が楽なのだが、恐らくそうではないと直感が告げていた。

その後やや早足で歩き、ボス部屋まであと半分という所まで来た時だった。

「あああああ……」

先の方から声が響いた。あれは間違いなく悲鳴だ。

ジエネシス達四人は一斉に駆け出した。

再びやってきたボス部屋。

既に扉は開かれており、中からは断続的に悲鳴が木霊する。

入り口付近で停止し、中を見てキリトが叫ぶ。

「おいっ！大丈夫か……!!」

四人は愕然とした。

既に陣形はもう無いに等しく、悪魔は右手の大剣を振り回しながら兵士達を追い回している。

ボスのHPバーは数ドットも減っていない。

軍の人数は、先ほど会った時より二人減っていた。

「早く転移結晶を使い!!」

キリトがそう叫ぶが、

「だめだ、結晶アイテムが使えない!!」

軍の一人がそう答える。

その言葉でジエネシスとキリトは目を見開いた。

「オイオイ、こいつはまさか……」

「結晶無効化空間……!」

デスゲームであるこの世界でも最悪の部類に位置するこの空間。それは殆どがトラップなどに設定されており、ジエネシスはその恐ろ

しさを一度体感している。

「何をしている！我々解放軍に『撤退』の二文字は無い！！戦え、戦うのだ！！」

「あんの大バカ野郎が……！！」

怒号をあげるコーバツツにジェネシスは思わずそう呟いた。

これだけの被害を出し、しかも圧倒的に劣勢な状況で尚も引くつもりは無いらしい。

だがそれは勇敢とは言わない。無謀と言うものだ。

「おいおめえら！状況はどうなつてやがる！」

すると追いついてきたクラインが彼らの隣に立つ。

「……最悪だ。このボス部屋は『結晶無効化空間』だ」

ティアが簡潔に伝えると、クラインの両目は見開かれた。

「何とか…何とかならねえのかよ?!」

「俺たちが突っ込めば、退路は開けるかもしれないが……」

キリトはそう言つて前方を見ると、苦い顔をする。

ボスは軍の退路を塞ぐように立ちはだかつており、これでは満足に撤退も出来ない。

だがここでジェネシス達が突っ込むと、今度は彼らに危険が及ぶ恐れがある。

「全員……突撃イイー……！！」

その時、コーバツツの叫びが響いた。

8人を四人2組に分けて突撃させる。

「やめろおーっ!!」

だがキリトの叫びも虚しく、悪魔は口から眩いブレスを吐き出す。

その威力で軍のメンバーは簡単に吹き飛ばされ、転倒したところに悪魔の巨剣が振り下ろされる。

その時、キリト達四人の中から一人が飛び出し、悪魔の横を回り込んでその攻撃を受け止めた。

凄まじい爆風と金属の衝撃音がフロア全体に響く。

そこに居たのは、赤黒い大剣を両手で持つて必死に悪魔の剣を堪えているジェネシスだった。

「久弥っ!!」

ティアは悲痛な顔で叫んだ。

当然だ。あまりにも無茶過ぎる。下手をすればジェネシスが死ぬ可能性だってあった。

「き、貴様は……」

コーバッツはバイザーの奥から驚愕の顔でジェネシスを見上げる。

「……逃げろ……」

「何？」

ジェネシスは必死に歯を食いしばりながらコーバッツに言った。

「仲間連れてさっさと逃げろ…時間は稼いでやる」

「な、ふざけるな！我々解放軍に」

だが此の期に及んでまだ引くつもりのない様子のコーバッツに、ジェネシスはついに業を煮やして叫んだ。

「いい加減にしやがれバカが!!てめえのくだらねえプライドのために、これ以上人を犠牲にするつもりか?!」

「っ……!」

その言葉でコーバッツは何も言えなくなり、

「…総員、撤退する」

そう指示を出すと、軍は立ち上がって撤退を始める。

だがボスがそれを簡単に許すはずもなく、ジェネシスからターゲットを出口に向かって走る軍に定めると、その剣をもう一度彼らに向かって振り下ろす。

ジェネシスはそうはさせまいと走るが、間に合わない。

「せあっ!!」

だがその剣を白い一閃が弾き、軌道を解放軍の面々から僅かに逸らした。ティアだ。

「早く行け」

ティアは静かにそう告げると、再びボスに斬りかかった。

持ち前のスピードと敏捷性をフルに発揮してボスを翻弄するが、それでも圧倒的なパワーの前では不利である。

ティアの刀をボスが剣で防ぐと、ボスはそのまま空いた左手でティ

アを殴りつけた。

「ぐっ……！」

その攻撃でティアは大きく後方に吹き飛ばされ、地面に倒れ込んだ。

そこへボスの大剣の刃が迫るが……

「おおおお!!！」

ジエネシスが両手剣スキル《アバランシユ》で弾く。

ボスの大剣はティアから僅かに逸れて地面に直撃した。

その隙に、クライン達風林火山が軍の撤退を援助する。

ボスはそれに向けてブレスを吐こうとするが、ジエネシスが背中を斬ることでそれを防いだ。

すると、ボスがお返しとばかりに大剣をジエネシスに振り下ろす。

ジエネシスはそれを必死に抑えるが、衝撃でHPが減少した。

このままではジリ貧だ。

逆転の方法ならある。以前手に入れたユニークスキルだ。

しかもこの場には3人もそれを持つものがある。

ここまで来たらもうボスを倒す以外の選択肢は無い。

ならば、今ここでユニークスキルを解放するしか無い。

迷う時間など、彼らには無かった。

「アスナ、クライン！十秒だけ持ち堪えてくれ！」

キリトがそう叫ぶと、アスナとクラインがボスに飛び込んだ。

そしてキリト・ジエネシス・ティアの3人は急いでメニューを操作する。

クラインがボスの剣をどうにか弾き、アスナがボスから繰り出される斬撃を上手くかわしていく。

「よし、いいぞー！スイッチ!!！」

まず飛び出したのはキリト。

アスナと入れ替わりながらボスの懐に飛び込んでいく。

ボスの大剣が突き出されるのを右手の黒剣で弾きながら、そのまま左手を背中に持っていく。

そして同時にオブジェクト化した翡翠の直剣を引き抜き、ボスの顎

を打ち抜く。

その光景に、アスナとクラインは驚愕で目を見開いた。通常、この世界では片手剣を左右の手に装備することは出来ない。しかしこのスキルは、その不可能を可能にする。

それが、キリトのユニークスキル《二刀流》だ。

ボスの剣が真上から振り下ろされるのを、キリトは左右の剣をクロスさせる事で受け止め、そして押し返した。

「《スターバースト・ストリーム》!!」

その瞬間、キリトの左右の剣がパールブルーの光を発し始めた。

二刀流十六連撃スキル《スターバースト・ストリーム》

無数の流れ星のような鮮やかな斬撃が、次々とボスに叩き込まれていく。

ボスは負けじとキリトに反撃していく。キリトは攻撃の途中なので避けることが出来ない。

しかしキリトの思考には、もう避けるという選択肢は無く、
「(まだだ、もつと…もつと速く!!)」

思考をフルに回転させ、ボスを滅多斬りにしていく。

そして最後の一撃。

ボスから繰り出される突きと、キリトの最後の一撃が交差する。

「おおおお!!」

キリトの一撃は見事ボスに命中した。

だがボスのHPバーはあと2本も残っている。

ボスはキリトをその大剣で吹き飛ばした。

しかしもうキリトは限界で避けることも出来ず、為すがままに吹き飛ばされる。

「…後は…頼むぞ…」

キリトはそう言い残し、意識を手放した。

「キリトくん!!」

「おい、キリトオ!!」

アスナとクラインが慌ててキリトに駆け寄る。

幸いキリトのHPは僅かに残っていたため、回復結晶で何とか一命

は取り留めた。

だがそんな彼らに、悪魔は無慈悲に近づいていく。

「クソツタレが!!」

クラインが刀を構えて応戦しようとするが、それは必要なかった。突如、それまで青に染まっていた部屋の中に、真つ赤な光が灯り始めた。

アスナ、クラインを始めその場にいる皆が視線を向ける。

赤い光の中心にいたのは、抜刀術の構えを取っているティアだった。

ティアからはまるで炎のような鮮やかな赤い光が発せられており、ティア本人は目を閉じてただじっとしている。

ボスはそのような彼女に向けて地響きを立てて走りだし、その大剣を振りかぶった。

その瞬間、ティアは両目をカツ!と開き、その場から一瞬で飛び出した。

直後、ボスの身体に無数の切り傷ができ、その傷から炎のようなエフェクトが発生する。

ティアは止まることなく、ただひたすらにあらゆる方向から無数の斬撃を繰り出していく。

ティアの刀が赤い弧を描き、吹雪のようにも見えた。

これが、ティアの手にしたユニークスキル《抜刀術》。

そしてそのうちの、三十九連撃ソードスキル《緋吹雪》だ。

「はああああああつ!!」

そして叫びながら最後の一撃を、上空に飛び上がって上段から振り下ろし、ボスの身体を両断する。

これでボスのHPバーは、あと一本。

その時、今度はドス黒いオーラが部屋の中を充満して行く。

そのオーラを発しているのは、大剣を肩に担ぐジエネシスだ。

ジエネシスの身体はもう真つ暗なオーラに包まれ、その両目は真つ赤に光り、まるで死神のように見えた。

「行くぜえええええ!!」

そしてジェネシスは飛び出す。

ボスの両手剣とジェネシスの両手剣が衝突する。

その瞬間、耳をつんざくような金属音と、部屋中の空気を揺るがすほどの衝撃波が発生し、皆は思わず両手で顔を覆う。

そして再び視線を向けると、そこには圧倒的な体格差のあるボスと互角で剣を打ち合うジェネシスがいた。

剣と剣がぶつかり合う度に、けたたましい金属の衝撃音とおびただしい火花が散る。

これが、ジェネシスの手にしたユニークスキル《暗黒剣》。《暗黒の剣士》の名を持つジェネシスに相応しいスキルと言えるだろう。

だが、拮抗していたボスとジェネシスだが、それは徐々に崩れ始める。

ジェネシスの方がボスを押し始めているのだ。

一体どうなっているのか、アスナがジェネシスの方をじっと見てみると、ある事に気がつき目を見開いた。

ジェネシスのHPがみるみる減少して行くのだ。

だがジェネシスのHPが減っているのは、ボスから攻撃を受けたからではない。

これが、《暗黒剣》の恐るべき特性。自分のHPを犠牲に、攻撃力を格段にパワーアップする事が出来るのだ。

そしてジェネシスがボスを吹き飛ばし、ボスがよろめいた時だった。

「こいつで…：終えだ!!」

次の瞬間、ジェネシスの大剣が一層赤黒いオーラを纏い始める。

そして、ジェネシスはそれを思い切りボスに振り下ろす。

暗黒剣六連撃スキル《デープ・オブ・アビス》

両手剣はこの世界で数あるソードスキルの中でも最も攻撃力の高いスキル。

そしてそのユニークスキルの上級技ともなれば、その破壊力は凄まじいものになるのは想像に難くないだろう。

ジェネシスが大剣を一振りする度、立つのが困難になる程の突風が

発生し、この部屋ごと壊してしまいうんじやないかと思ってしまうほどの衝撃が皆を襲う。

ボスはその超弩級ソードスキルの威力に反撃することもできずに、ただジエネシスの攻撃を受けるだけである。

そして、ついに最後の一撃。

「おおおおおらあああああー!!!」

ジエネシスは赤黒いオーラを纏う大剣を一思いに真上から振り下ろした。

その一撃で、ボスはとうとうHPをすべて消しとばし、その身体をガラス片に変えた。

『Congratulation!』という激闘の終焉を告げるシステムメッセージが表示される。

「あー、やっと終わったか……」

ジエネシスは全ての力が抜けて地面に仰向けになって倒れ込んだ。

「お疲れ様、久弥。かっこよかったよ」

そこへティアが駆け寄ってしやがみ込んだ。

「おう、おめえもな…雫」

そしてジエネシスは意識を手放した。

――

数秒後、ジエネシスは目を覚ました。

暗黒剣の影響で数ドットまで減っていたHPはすでに満タンになっている。恐らくティアが回復してくれたのだろう。

ふと、後頭部に感じたことのある柔らかさを感じた。

そして、真上にはティアの頭が。

「…あ、起きた？」

ジエネシスの目覚めに気づいたティアが優しく微笑みながら覗き

込んだ。

「…おう。まーた膝枕か？」

「うん。こんな硬い床じゃ寝かせられないよ」

「すまねーな、おめえも疲れてんのに」

「全然平気。久弥の寝顔見てたら疲れが吹き飛んじやった」

「…あつそ」

ジェネシスは軽く笑ってそういうと、ゆっくりと起き上がった。

周りを見ると先程までこの部屋で共に戦っていたメンバーが居た。

キリトはアスナに抱きつかれており、クライン達風林火山のメンバーが囲むように立っていた。

「軍のメンバーが二人、死んだ」

クラインが目を伏せながら告げた。

「そつか…：ボス攻略で犠牲が出たのは、六十七層以来だな…：」

キリトも一度目を伏せる。

「こんなんが攻略って言えるかよ…コーバツツのヤロウ、人が死んだら意味ねえだろうが…！」

クラインが悔しさを滲ませた顔で言った。

そこで切り替えるように首を振り、

「それよかおめえら何なんだよさっきのは?!」

「えー、言わなきやダメなやつ?」

ジェネシスが面倒臭そうに答える。

「つたりめーだろー！見たことねえぞあんなの！」

それに対して3人は観念したのか、キリトは少し目を逸らし、ジェネシスはため息をつく。

「…エクストラスキルだよ、《二刀流》」

「《暗黒剣》だ」

「同じく、《抜刀術》です」

それを聞きクライン達は「おおーっ」と歓声を上げる。

「しゅ、出現条件は?!」

「んなもん分かってりやとつくに公開してるっつーの」

ジェネシスの隣のキリトとティアも肯定し頷く。

クラインはメニューから現在公開されているスキルリストを確認していく。

「情報屋のスキルリストにも載ってねえ……って事は、おめえら専用のユニークスキルじゃねえか！」

「まったく水臭いなあこんな大技黙って待ってるなんてよお！」

クラインは苦笑いで言った。

「半年前にスキルリストを確認してたら、いつのまにか習得してたんですよ」

「でも、こんなスキル持つってるって知られたら……俺たちの周りにも、迷惑がかかるかもしれないからさ」

ティアとキリトの言葉にクラインは納得したように頷き

「ネットゲーマーは嫉妬深えからなあ。俺は人が出来てるからいいけど、妬み嫉みはそりゃああるだろうよ。」

それに……」

クラインはキリトに抱きつくアスナと、ジェネシスに寄りかかって座るティアを見てニヤリと笑い

「……んま、苦勞も修行の内と思つて頑張りたまえよ、若者達よ？」

「何だそりゃ」

クラインの言葉にジェネシスは訝しげな顔をする。

「さて、転移門の有効化はどうする？」

「任せるよ。俺はもうヘトヘトだ……」

「右に同じだ。俺あもう帰つてすぐ寝るわ」

「そっか。氣い付けて帰れよ」

そう言つてクラインは螺旋階段を上つて行つた。

それを見届けた後、ジェネシスとティアも立ち上がり、

「……さて、と。俺らも先に戻るわ」

「ああ。ありがとうな、お疲れさん」

「おう」

そうやり取りした後、ジェネシスとティアはホームへと戻つて行つた。

ホームへ戻つた後、二人はさつさと夕食と風呂を済ませ、早々に休

む事にしベッドに入った。

すると、ティアが後ろからジエネシスに抱きついた。

「んー？どうしたんだよ」

「あのね、久弥……しばらく、攻略休まない？」

「休む？まあいいけどよ、何でだ？」

ティアは少し目を伏せると、

「…何だか最近、すごく疲れを感じてて…今回のボス戦で限界が来ちゃった……」

と言いながら苦笑する。

そう言えばこの世界から始まってから、特に急用や野暮用がない時以外は、ほとんど攻略に出ていることをジエネシスは思い出し、振り返ってティアの頭を撫でる。

「わーった。なら、しばらく休むか。俺たちはギルドにや入ってねーんだし、文句は言われねえだろ」

ティアは少しの沈黙の後、嬉しそうな笑顔で

「うんっ！」

と頷いた。

—————

次の日、ジエネシスとティア、キリトの3人は五十層のエギルの店に来ていた。

『軍の大部隊を全滅させた青い悪魔。それを撃破した『暗黒の剣士』と『白夜叉』、そして『黒の剣士』の百連撃』……こりや大きく出たな？』

今日の朝に出た新聞記事を見て大笑いするエギル。

「尾ひれがつくにも程があんだろ……」

不機嫌そうな顔でテーブルに肘をつくジエネシス。

「全くだ。お陰で朝から情報屋やら剣士やらに詰め寄られて、埒にも

居られなかったんだからな」

その隣に座るキリトも悪態をついて言った。

「まあ、これも覚悟の上で使ったからな。仕方のない事だろう」

奥のベッドに座るティアが苦笑しながら言った。

すると、部屋のドアが開けられてアスナが入って来た。

「どうしよう3人も……大変なことになっちゃった！」

—————

五十五層グランザム

血盟騎士団本部。ジエネシス達は既に何度かこの場所には足を踏み入れているが、今いる部屋は初めて来る場所だった。

最上階の幹部会議室。半円形のテーブルに、五人（副団長のアスナを除く）の幹部が座り、そしてその中央に腕を組んでこちらを見据える男がいる。

血盟騎士団団長・ヒースクリフだ。

「……君達とこうして話すのは初めてだったかな？」

キリト君、ジエネシス君」

「いいえ、六十七層の攻略会議で一度話しました。ヒースクリフ団長」
「俺は多分初めてっすね、ヒースクリフの旦那」

ポーカーフェイスを装ってジエネシスとキリトは答える。彼らの隣に立つティアとアスナは何とも言えない表情を浮かべている。

「六十七層か……あれは辛い戦いだっただな。トップギルドと言われても、戦力は常にギリギリだよ……なのにキリト君、君は我がギルドから貴重な戦力を引き抜こうと言うわけだ」

するとキリトは険しい表情になり、

「……貴重なら、護衛役の人選は気をつけた方がいいですよ」
するとジエネシスも

「あ、あと勧誘係の人選も気をつけて欲しいっすね。俺の嫁が随分と迷惑かかったみたいなんで」

若干ぶつきらぼうになりながら答えた。

「クラデールとバンノが君達に迷惑を掛けたことは済まないと思っている。

だがこちらとしても、副団長を引き抜かれて『はいそうですか』、と言うわけには行かぬし、何より今後の攻略を考えると戦力の確保は必要案件だ。

故に……」

そしてヒースクリフは鋭い目つきでキリトとジエネシスを見つめ、
「キリト君、ジエネシス君。私と戦いたまえ。

キリト君が勝てばアスナ君を連れて行くがいい。ジエネシス君が勝てば、君の望みを可能な限り叶えると約束しよう。

だが、もし私が勝てば……ティア君を含めた君達3人とも、我が血盟騎士団に入ってもらおう」

その言葉でキリトとジエネシスはしばし驚いていたが、

「……いいでしょう。剣で語れと言うなら望むところです。デュエルで決着をつけましょう」

「俺はしばらく攻略休むつもりにしてたんだが……まあ、そこまで言うなら仕方ねえ。その勝負、受けて立つぜ」

十七話 殺意の刃

2024年10月20日 七十五層・コリニア

先日解放されたばかりのこの層に、大勢の人々が集まる。

その目的は、今日闘技場で行われる二つの決闘。

《神聖剣ヒースクリフ

vs二刀流キリト&暗黒剣ジエネシ

ス》

SAOの中でもトップレベルのプレイヤー同士の戦いを見ようと、あらゆる層の人間がコリニアの闘技場に集まった。

そして場所は変わり、闘技場の控え室。

「もう、ばかばかばか！なんであんなこと言っちゃうのよ！」

アスナは勝手に決闘を受けたキリトにご立腹の様子だ。

「わ、悪かった！悪かったって、つい売りことばに買い言葉で……」

キリトは気まずそうにアスナをなだめる。

「ま、あの場で逃げる選択肢は俺たちには無かったわな」

キリトの隣に座るジエネシスもうんうんと頷く。

「……みんなのユニークスキルを見たときは、別次元の強さだっと思って。でも、それは団長のユニークスキルだって……」

「攻防自在の剣技《神聖剣》、特筆すべきはその圧倒的な防御力、か……」

アスナの言葉にティアはヒースクリフの戦闘を思い出しながら言った。

「アイツのHPバーがイエローゾーンまで落ちたのを見たやつはいねえらしいな」

「あの強さはもう、ゲームの範疇を超えてるよ……」

アスナが不安げな声を出すか、

「……んま、簡単に負けるつもりはねえよ」

「ああ。さて、ひと暴れしてきますかー！」

ジエネシスとキリトは不敵な笑みで立ち上がると、揃って闘技場の方に行く。

—————

第1戦目は、キリトvsヒースクリフだ。

闘技場の中央で二人は向かい合うと、少し言葉を交わした後にデュエルのカウントが始まった。

そしてカウントがゼロになり、まず飛び出したのはキリト。

左右の剣から繰り出される突きや斬撃を、ヒースクリフは正確に盾でガードして行く。

そして次に動いたのはヒースクリフ。キリトはヒースクリフの盾側に回り込んで回避行動をとったが、ヒースクリフはそこへ目掛けて盾を突き出した。

どうやらあの盾にも攻撃判定があるらしい。手数でキリトの方が勝るかと思われたが、どうやらそうでもないようだ。

その後ヒースクリフの追撃が来たものの、キリトはその攻撃を防ぎ、そのままバックステップを取った後ソードスキル《ヴォーパル・ストライク》を発動してヒースクリフに突っ込んだ。

しかしそれもヒースクリフの盾に阻まれ、二人は位置を入れ替える形で向き合う。

「素晴らしい反応速度だな」

「…そつちこそ固すぎるぜ」

その後、二人はまた剣戟の応酬を繰り返した。

絶え間無く響く金属のスタッカートが闘技場に木霊する。

「キリトくん……」

アスナは不安げな顔で戦闘を見つめていた。

「安心しろ、多分アイツは負けねえ」

すると同じく試合を見ているジエネシスが口を開いた。

「ヒースクリフの顔見ろ。さつきまでの余裕の色が消えてやがる。あのまま行けば…ワンチャンあるぜ」

「それでもワンチャンなんだ……」

ジエネシスの言葉でアスナは苦笑するが、それでも不安は和らいだのか、少しその顔には笑顔が出ていた。

その後、キリトの剣速は徐々に加速して行き、ヒースクリフにも徐々に焦りの色が見え始めた。

と、その時。キリトの黒剣がヒースクリフの頬を掠め取った。その瞬間、ヒースクリフの表情には動揺が現れた。

キリトはここで、二刀流上位スキル《スターバースト・ストリーム》を発動。青い十六の流星が、ヒースクリフに襲いかかる。

縦に、横に、斜めに、時にクロスの斬撃がヒースクリフの盾に直撃して行く。

そして十五連撃目の攻撃がヒースクリフの盾を弾いた。

それによつてヒースクリフの体勢は大きく崩れ、その胴が無防備に晒される。

——勝ったな。

ジエネシスを含めた今この場にいる3人はキリトの勝利を確信した。

だがその直後、世界がブレる感覚が襲った。

ヒースクリフ以外のプレイヤーが止まって見える。

ヒースクリフの弾かれた盾が瞬時に元の位置に戻り、キリトの最期の一撃を防いだ。

キリトは大技の後なので硬直で動けない。

そこへヒースクリフの剣が突かれ、キリトのHPはイエローゾーンに達した。キリトは地面に倒れ込んだ。

その瞬間、デュエルが決着しヒースクリフの勝利を告げるシステムメッセージが表示される。

大歓声が沸き起こる中、キリトがヒースクリフを見上げると、彼の顔にあったのは勝者の笑みなどではなく、何故か非常に険しい顔でキリトを見下ろしていた。

だがものの数秒そうした後、彼は何も言わず次の試合に向けて闘技場の控え室に戻って行った。

控え室に戻ったキリトは、何も言わずに黙ってベンチに座っている。

3人は彼に対し何も言えない。

「……ごめん、アスナ。負けちゃったよ」

ふと、キリトが申し訳なさそうに口を開いた。

「え？あ、ううん！いいの。キリトくん、カッコよかったし、それに……キリトくんが私のギルドに入ってくれるんだから、それはそれでありかなあ、なんて……」

何故か頬を赤くしながら言うアスナ。

「そう言って貰えると、助かるよ」

そんなアスナに微笑ましい笑みを浮かべながら言うキリト。

「なあ、こいつらまだ付き合ってたねえんだよな？」

そんな二人の様子を見てジエネシスはティアに尋ねた。

「そうみたいだね。早くくつつけばいいのに」

ティアもそれに対し、呆れ半分笑顔半分と言った表情で返した。

「そういえば、ジエネシスの試合はあと10分後だよな？」

不意にキリトがジエネシスの方を見て言った。

「ああそうだな。ま、オメエの二の舞にはならねえように頑張るよ」

ジエネシスはキリトを揶揄うような口調で言った。

「それを言われるとキツイな……でも、ジエネシスの暗黒剣は、俺の二刀流よりもかなり攻撃に特化したスキルだ。

これは、最強の矛と盾の対決になりそうだな」

「へっ、上等じゃねえか」

ジエネシスは不敵な笑みで返した。

「10分後」

「……っし、んじゃそろそろ行ってくらあ」

ジエネシスはそう言って徐に立ち上がる。

「無茶だけはするなよ？」

ティアが後ろからそう言うと、ジエネシスは背中を向けたまま手を

振った。

「あ、ジエネシス！」

不意にキリトがジエネシスの隣へ駆け寄ると、小声で

「……さっきの試合の最後、お前はとう見た？」

と尋ねた。

「それ今聞くの？……まあ、おかしいとは思ったよ。だが確証もねえしそれがなんなのかもわかんねえよ。」

んま、仮にそれが起きたとしても、俺あ勝ちに行くからよ」

そう言い残し、ジエネシスは今度こそ闘技場へと足を踏み入れた。

中央には、先ほどと同じく騎士の甲冑に身を包んだヒースクリフが立っていた。

「よお旦那。一日に二試合もやって、体力の方は大丈夫なのかい？」

ジエネシスは出会い頭に悪戯な笑みを浮かべながらそう尋ねた。

するとヒースクリフも底知れない笑みを浮かべ

「心配には及ばない。これしき、普段のボス戦に比べればどうと言うことは無いさ。」

それより君こそ大丈夫なのかい？さっきの試合を見たら、私に勝てるビジョンが無くなったのではないかな？」

などと聞き返して来た。

「それこそ心配は無用だぜ。アイツはアイツ、俺は俺だ。」

キリトがどんな負け方しようが、俺がテメエに勝つこたあ変わんねえよ」

「いいや、君の未来はただ一つ……私に負け、ティアくんと共に血盟騎士団に入る事だ」

そう言い切ると、ヒースクリフは慣れた手つきでメニュー欄からデュエル申請画面を選択する。

ジエネシスの方にデュエル申請メッセージが来たため、《初撃決着モード》を選択しタップ。

するとデュエルのカウントが始まり、ヒースクリフは左手の盾から十字剣を引き抜き、ジエネシスもそれに倣って背中から赤黒い大剣を引き抜き、構える。

カウントが減るにつれ、会場の緊張感も徐々に高まっていく。

そしてカウントがゼロになり、『DUEL!』と言う文字が現れた瞬間、両者は同時に飛び出した。

ジェネシスは大剣を上段から振り下ろし、ヒースクリフは左腕の盾を突き出すと、両者は激しい火花と金属音を散らす。

そして凄まじい衝撃波が発生し、闘技場にヒースクリフとジェネシスを中心に大きな砂埃が巻き起こった。

そして粉塵が舞う中、武器同士がぶつかり合う金属音だけが鳴り響く。

砂埃が晴れると、ヒースクリフとジェネシスは激しい剣の攻防を繰り返していた。

ジェネシスの大剣が何度もヒースクリフの盾を打ち、ヒースクリフは隙を見て右手の十字剣で攻撃するが、ジェネシスはそれを難なく躲し再び大剣を振るう。

だがジェネシスの大剣がヒースクリフの盾を打つ際に発生する破砕音は先ほどのキリトの時の比ではなく、誰が見てもその一撃一撃が凶悪なまでの破壊力を持つ事は容易に想像出来た。現にヒースクリフの表情には既に余裕どころか若干の焦りすら見え隠れしている。どうやら彼もジェネシスの攻撃を防ぐのは中々困難なようだ。

その時、ジェネシスの大剣が赤黒いオーラを纏い始める。

これは通常のソードスキルではない、ユニークスキルによる攻撃だ。

暗黒剣二連撃スキル《ヘイル・ストライク》。

赤黒いオーラを纏う斬撃がヒースクリフの盾に炸裂する。

だがヒースクリフも寸前の所でそれを防ぎ切り、今度は反撃のソードスキルを放つ。

神聖剣二連撃スキル《デイバイン・クロス》

ゴールドに輝く剣が文字通りクロスになる形で振り下ろされるが、ジェネシスはその攻撃を大剣の刃を最小限に動かして振ることで防いだ。

「……凄まじい攻撃力だな」

ヒースクリフが不敵な笑みで言った。

「デメエこそ、ちよつと固すぎやしねえか？」

「ふふふ、キリト君にも同じ事を言われたよ」

「事実だろうがよこんにゃろう」

そのやり取りの後、二人は同時に飛び出した。

先ほどのキリトの時と同じく、激しい剣の攻防が繰り広げられる。

ジェネシスは身の丈ほどある大剣を使っていながら、ヒースクリフのスピードに完全に付いて行っている。

大剣使いでありながらここまでのスピードを出せるのは、やはりジェネシスは伊達に攻略組の、それも四天王に数えられるプレイヤーではない事の表れだろう。

ヒースクリフはジェネシスの持つ圧倒的なパワーに徐々に押され気味だ。今でこそ防いでいるものの、その体勢は段々と崩れつつある。

その時、ジェネシスの切っ先がヒースクリフの頬を掠めた。

「おおおおあああああ!!!」

その瞬間、ジェネシスは勝負に出た。

大剣が再び赤黒いオーラを纏い始め、そしてヒースクリフの盾に炸裂する。

暗黒剣上位六連撃スキル《ディープ・オブ・アビス》

その一撃一撃はコロシウム、いや、七十五層全体に響かんばかりの破碎音と、コロシウムごと吹き飛ばすのではないかと思ってしまうほどの衝撃波を生み、一撃受けるごとにヒースクリフは大きく後方へスライドさせられる。

そしてそこまでの威力を持つソードスキルならば、例え堅固な防御力を持つヒースクリフといえど体勢を大きく崩すのに時間がかからないのは当然と言えた。

五連撃目についてヒースクリフの盾が大きく吹き飛ばされ、キリトの時と同じく彼の胸が露わになる。

「———殺った!!」

最後の一撃。

ジェネシスは、大剣を上段に構え、思い切り振り下ろす。

ところが、再びあの不気味な感覚がジェネシスを襲った。

世界全体が止まって見えた。

ただ一人、ヒースクリフを除いて。

ヒースクリフの剣がクリムゾンレッドに輝き、そしてその刃が真っ直ぐジェネシスの腹部を一閃する。

「ガハッ……」

その瞬間、止まっていた世界が動き出し、発動中のソードスキルが強制中断された。ジェネシスは大きく後方へ吹き飛ばされ、地面に尻餅をつく形で倒れ込んだ。

そしてクリティカルヒットが決まった為、デュエル終了のシステムメッセージが表示される。勝者は勿論ヒースクリフ。

だがヒースクリフはジェネシスの方を見向きすることもなく、落ちた盾を拾ってそそくさと退場した。ジェネシスは座り込みながら呆然とその背中を見つめていた。

—————

五十五層・グランザム

「じ、地味なやつって頼まなかったっけ？」

キリトは新たに着せられた血盟騎士団のユニフォームに戸惑った顔を浮かべた。白赤のロングコート、キリトがそれまで身につけていた物の色を反転させたようなものだ。

「これでも十分地味な方よ？ うん、似合う似合う♪」

何故かアスナは満足げな笑顔を浮かべている。

「あー似合ってる似合ってる。じゅーぶん似合ってるんよバカヤロー」

気怠げなジエネシスの声がし、その方を向くと、そこにはいつもの赤黒い装備ではなく、白赤の甲冑を着せられたジエネシスが恨みがましい目で座っていた。

「ジエネシス……おまつ……白似合わねえ……w」

キリトはそれを見て思わず吹き出すのを必死に堪えている。

それを見てジエネシスはますます機嫌を悪くし、

「ざけんな!!白が似合わねえのはおめえも一緒だろうが!!」

勢いよく立ち上がりながらそう叫んだ。

「まあまあ落ち着けジエネシス。暫くすればそれにも慣れるさ」

落ち着いた女性の声が響き、その方を見るとティアが困ったような笑顔でジエネシスの方を見ていた。

ティアもまたいつもの白と青の服ではなく、グレーのGパンに白基調と赤いラインの入ったTシャツ、そしてその上にキリトのと同じ柄のロングコートを肩から袖を通さずに羽織っている。

「あーあー、おめえはいいよなあティア。何気に俺らの中で一番様になつてんじゃねえかよ」

ジエネシスはもう完全にやさぐれだ様子でそう言った。

「そうグレルなジエネシス。せつかく入れてもらったギルドだ、アスナに失礼だぞ」

「あはは……なんか、すっかり巻き込んだじゃったね」

アスナも苦笑しながら言った。

すると部屋の中に二人の人物が入って来た。

「失礼しますぞ、副団長殿」

入って来たのは、背中に斧を背負った男性と背中に槍を背負った男性。後者は以前、ジエネシスがバンノと決闘した後、彼を連れて帰った男だ。

「ゴドフリー、どうかしたの?」

入って来たのはゴドフリーと言うらしい。

「実はですな、今日新たに加入した3人に、訓練を受けて貰うことになりました。内容は、私を含めた3人と、こちらの《チエイズ》率いる3人パーティに分かれ、それぞれ五十五層の迷宮区とダンジョンを

攻略してもらいます

《チェイス》と呼ばれた男性はペこりと会釈した。

「ちよつとゴドフリー！キリト君たちは私の……」

「副団長と言えど、規律は蔑ろにして頂くわけには参りません。ユニークスキル使いと言えど、ギルドに入る以上は、前衛指揮を任されている我々に実力を見せて貰わねばなりません」

チェイスはアスナの抗議に対して静かに答えた。

「本日はキリト殿とジエネシス殿に受けてもらいます。ティア殿にはまた後日訓練を受けて貰うつもりですのでそのつもりで」

そしてゴドフリーはキリト、ジエネシス、ティアを見つめながらそう言った。

「待て、実力が見たいと言うなら、私も同時にやった方が効率的ではないのか？」

「本日の訓練では個々の実力、及び他者との連携能力を見させて貰う為、ティア殿は本日は待機です」

ティアはそれを聞いて少し複雑な表情を浮かべた。

「では30分後に街の西門に集合お!!ガツハハハハ!!」

そう言つてゴドフリーは高笑いしながら部屋を後にし、チェイスは静かに一礼してそれに続いた。

「ごめんね、入団早々こんな事になっちゃつて」

アスナが申し訳なさそうに言う。

「アスナが謝る事じゃないよ」

キリトはアスナの頭に手を置き、そしてゆっくり撫でながら

「直ぐに終わらせてくるから、ここで待つてくれ」

それを聞きアスナは少し頬を染めながら頷いた。

「そうそう、オメエもここで大人しくしてろよ。直ぐ帰ってくるからよ」

「……うん、分かった」

ジエネシスがそう言うのと、ティアは納得していない様子だがそれでも頷いた。

〈30分後〉

キリトとジェネシスは揃って指定された場所に向けて並んで歩いていった。

すると西門の目の前にゴドフリーとチェイスが立っており、「おいこつちこつち！」などと言いながらゴドフリーは手を振っている。すると、門の陰から二人の人物が姿を現した。

金髪の長い髪を後ろに束ねたポニーテール、そしてやや痩せ気味の体型の男性。あれはティアのストーカー『バンノ』だ。

そしてもう一人。同じく痩せ気味の体型に顔に垂れる陰気な前髪。あつちはアスナのストーカー『クラディール』だ。

そして二人とも、それぞれジェネシスとキリトとの間にトラブルを抱えている。

「……オイ、こいつあどう言うこつた？」

ジェネシスは鋭い目つきでゴドフリーに問いかける。

「うむ、君らの事情はよく知っている。

しかしこれからは同じギルド仲間。過去のことは水に流してはどうかと思つてな!!」

そう返答するゴドフリー。

するとバンノとクラディールの二人が前に出た。

そしてゆっくり頭を下げ、

「先日、ご迷惑をおかけしました」

「二度と同じ真似はしませんので、どうか許していただきたい……」などと揃って謝罪してきたのだ。

正直また何か突つかかってくると思つて身構えていたキリトとジェネシスだったが、こうも謝罪してくるとは思っていなかったのだからただぼかんとしている。

「これで一件落着だな！」

そう言つてまた高笑いしながらキリトとジェネシスの肩を叩くゴドフリー。

視線を向けると、ストーカー二人は未だ頭を下げていた。

「さて、これからの訓練では諸君らの危機対処能力も見たいため、結晶アイテムは全て預かせて貰おう」

今日の訓練内容を改めて告げるゴドフリー。

「転移結晶もか？」

キリトの問いに対し当然、と言わんばかりに頷くゴドフリー。

見るとチェイス・クラデイル・バンノの3人は大人しくそれぞれの結晶アイテムを預けている。

キリトはそれを見て観念したのか大人しく結晶アイテムを預け、最後はジエネシスとなった。

と、ここでジエネシスはあることを思い出す。

「ちよつと待つてくれ、俺のストレージはティアと統合されてんだ。俺から結晶アイテムを出せばあいつが結晶を使えなくなっちゃうんだが……」

そう、ジエネシスとティアは『結婚』しているため、二人のストレージは共有化されている。

つまりジエネシスが結晶アイテムを全て取り出すと言うことは、必然的にティアもそれらのアイテムを使えなくなると言うことだ。

ティアは今日待機と言うことだが、ジエネシスは万が一の事態を考慮したかった。

「本日彼女は一日中待機です。フィールドに出ない以上、結晶アイテムは必要ありませんよ」

するとチェイスがやんわりとした口調でジエネシスに言った。

まあ、ジエネシスとしても拒否の言い訳を考えたつもりではないため、渋々結晶アイテムを取り出し、ゴドフリーに預けた。

「よおし、では出発う〜!!」

そしてゴドフリーは勢いよく片手を上げたのだった。

出発から十分後、一行はそれぞれの訓練場所に向かうため途中で別れた。

迷宮区《ゴドフリー・キリト・クラディール》

ダンジョン《チェイス・ジェネシス・バンノ》

キリトもジェネシスも、選りに選って何でこいつと一緒なんだと大声で叫びたかったが、何も言わずに従った。

そして二つの班が分かれる直前、キリトはジェネシスに小声で

「気をつけろよ」

と言った。

それに対してジェネシスも小声で

「ダメエーンそな」

と返し、今度こそ二つの班はそれぞれの道を進んでいく。

やがて歩き始めて数時間が立ち、太陽の当たらない深い谷底にやって来た時だった。

「よし。ではこれより休憩に入る。食料を配布するので、各自時間内に済ませること」

班長のチェイスが小包をオブジェクト化し、それらをジェネシス、バンノに投げ渡す。

中を開けると、そこにはいつもティアが作ってくれる魅力的なおにぎり――

……ではなく、簡素な黒パンと水筒が入っているだけだった。

本当なら彼女の作るおにぎりを一人で食べてる筈なのに……ジェネシスは己の不幸を呪いながら、まずは水筒の水を口に含んだ。

ふと、視線を感じ顔を向ける。

見ると、何故かバンノがこちらを見ていた。

彼は小包には何も手を付けていない。

一体なぜ――ジェネシスがそう不思議に思っていたその時だった。

バンノの口元が不気味に歪んだのだ。

その瞬間、ジェネシスの中である疑惑が浮かび、そしてそれらは一瞬で確信に変わり、大慌てで水筒を投げ捨て、口の中の水を吐き出そ

うとした。

しかし時は既に遅かった。

黄色く点滅する彼のHPバー。そしてその右端に、黄色い稲妻のマークが付いている。

「(クソが……麻痺毒かよっ……!)」

頭の中でそう毒づきながら、ジエネシスは床に倒れ込んだ。

その直後、チェイスも同じ麻痺毒にかかり地面にうつ伏せになって倒れた。

「ひ、ひひっ……ひひひひひひっ」

二人が麻痺毒にやられたのを見て、不気味な笑い声を上げるバンノ。

「ひひひひひ……ヒヤアツハハハハハハハハ!!」

そして立ち上がると、体をくねくねと捻じ曲げながら大笑いし始めた。

その顔には、狂気的な笑顔が浮かんでいる。

「ど……どう言うことだ……この水を用意したのは……何故だバンノ……お前……!」

するとバンノはチェイスの前にゆっくり近づき、

「チェイスさあくん、貴方ゴドフリーさんと同じく、筋金入りの脳筋バカですねえく!!」

などと言いながらバンノの頭部を蹴飛ばした。

「ぶあっ?!」

その瞬間、バンノのカーソルがオレンジに変わる。

だがバンノはそれを気にすることなく腰から両手剣を引き抜く。

「お、お前……何を……」

「うるさいですよ。いいからもうさっさと死んでくださいな」

バンノはそう冷徹に吐き捨てると、両手剣の刃をチェイスに突き立てた。

「があっ?!」

「ふふふふっ、死ぬ前にいいこと教えてあげますよおく!

僕ら3人のパーティはあく、途中で犯罪者ギルドに襲われえく!勇

戦虚しく二人が死亡オー！僕一人になったものの見事犯罪者を撃退し生還しましたあ〜！

それがクラさんの考えたシナリオなんですよお〜！！」

「クラさん……？まさかクラデイルまで……?!」

チエイスの目は驚愕で見開かれた。

「もう知る必要なんてありませんよ、ゴドフリーさんと一緒に仲良く逝って来てくださあ〜い!!」

狂気の笑みと叫び声を上げながら何度もチエイスを斬りつけるバンノ。ジエネシスは必死に体を動かして止めようとするが、麻痺が解けないため無駄な抵抗に終わる。

そしてチエイスのHPがレッドになった瞬間、バンノは剣を逆手に持ち替えてチエイスの背中に突き刺した。

「ぐわあ!!」

「ふふ、ふふふふふつ！あははははははは!!」

狂ったように笑いながら突き刺した両手剣でチエイスの背中を抉るようにグリグリと動かすバンノ。

そしてチエイスのHPはどうとうゼロになり、彼の体はガラス片と成って消滅した。

チエイスが消え、地面に突き刺した両手剣を引き抜くと、バンノはニタニタと気味の悪い笑顔を浮かべながらジエネシスに歩いて行く。

「ジエネシスさまぁん……どうしてくれるんですか……？貴方みたいな人のために……関係のない人を殺してしまいましたよお〜」

「はあ？その割には、随分と楽しそうだったじゃねえかよ……何でテメエがここのギルドにいやがんだ？それこそラフコフなんかの方が余程お似合いだぜ……?」

するとバンノはすうつと目を細めると、

「へえ〜、流石！いい目をしてますねえ〜ジエネシスさん」

そう言っつてバンノは左手のガントレットを外して中を見せる。

「っ?!オイオイ……マジでそうだったとはな……」

ジエネシスは目を見開いたのち嘆息しながら言った。

そこにあつたのは、棺桶の中から骸骨が手招きしているマーク。

忘れるはずもない、かつてジエネシス達が壊滅させたレッドギルド
《ラフィン・コフィン》のマークだ。

「ふはっ、つい最近の事ですよ。クラさんに誘われて精神的に入れて
もらいましたねえ、この麻痺テクもそこで教わったんですよ。

おっと……いけないいけない」

バンノは慌てて左手を元に戻すと、再び両手剣を構えて

「早くしないと折角の麻痺毒が切れちゃいますからねえ……」

そう言うと、バンノは両手剣を逆手に持つて大きく振り上げた。

「あの日からずっと、心待ちにしていましたよ……この瞬間をねえ!!」

そう叫び、剣の切っ先をジエネシスの左足に突き刺した。

「ふふっ………どうですかあ〜?もうすぐ死ぬという感覚はどんな感じ

ですかあ?!教えてくださいヨオ!!ねえ!!暗黒の剣士さんよお!!」

そう叫びながら今度はジエネシスの左手に突き刺す。

「そもそもお!!貴方のようなクソ人間があ、ティア様のような高潔な

人間と何故一緒に居られるんですかあ?!

貴方はかつてラフコフの人間を大勢殺した……つまり僕らと同じ

殺人鬼だあ!!

なのに……なのになのに!!なぜ僕じゃないんだあ!!どうして僕が

選ばれなかったんだあ!!」

などと喚き散らしながらジエネシスを滅多刺しにして行く。

バンノがジエネシスに抱いていたのは、単に嫉妬だった。

彼もまたティアの姿に惹かれていた男だった。

しかし彼は同時に人殺しでもあった。

なのに、同じ人殺しであるジエネシスがなぜティアいつも一緒に

居られるのか、それが許せなかった。

「ああ?!おい!なんとか言えよお!!!本当に死んじまうぞオ?!」

バンノはそう叫びながらジエネシスの腹部ににその両手剣を突き

刺してきた。

それによってジエネシスのHPはいよいよレッドゾーンに到達す

る。

「(クソ……このまま死ぬのか俺は……?)」

諦めかけて目を閉じたその時、瞼の裏に1人の女性の姿が映った。ティア。この世界に来て……いや、ここにくる前から何度も彼を支え、隣に居続けた女性。

あの日、この世界が始まった日に必ず共に現実に戻ると誓った。なのに、ここで先に死ぬのか？ここで約束を反故にするのか？

否！そんな事があって良いはずがない、ここで死ぬわけにはいかない。

「く……おおっ!!」

ジェネシスは唯一動く右腕で腹部に突き立てられた剣を握りしめ、引き抜こうと必死に力を入れる。

「……ははっ、何だ？死ぬのは怖いか？」

「ああそうだよ……ここで死ぬわけにはいかねえんだよ!!」

その時、バンノの目が一瞬見開かれた後、すぐに狂気的な笑みに変わり、

「くっ……くっ……くははははは!!そうかよ……そうこなくっちゃなあ!!」

そしてバンノは全体重をかけてジェネシスに剣を突き刺そうとし、ジェネシスはそれを必死に引き抜こうとする。

やはりジェネシスのパワーと言えど、全体重をかけて突き刺してくるバンノの力には勝てず、徐々に剣が再びジェネシスの腹に刺さって行く。

そしてついにジェネシスのHPは数ドットとなった。

それでも諦めまいとジェネシスは必死に歯を食いしばって踏ん張った。

「死ね！死ね!!死ねえええええー!!」

その時、白い一閃がバンノに直撃した。

「ぐぼあっ?!」

バンノはそれによって宙に吹き飛ばされ、後方の崖に激突する。

ジェネシスはバンノを吹き飛ばした者を見ようと視線を移す。

目の前の人物はゆっくりとジェネシスの方を見た。

棚引く銀髪。透き通るような白い肌。そして黒い瞳は、まっすぐ

ジェネシスの方を見つめている。

紛れもなく、彼が愛する女性、ティアだ。

「おまつ……」

どうして、と尋ねようとしたジェネシスの口を、ティアは人差し指を立てて塞ぐ。

そしてポーチから緑色の回復結晶を取り出すと、艶のある唇を動かし「ヒール」と唱えた。

次の瞬間、残り数ドットしか無かったジェネシスのHPは一気に元どおり満タンになる。

ジェネシスはそれを見て安堵したように息を吐く。

ティアは左手を伸ばしてジェネシスの頬に触れる。そして優しく、ゆっくりと撫でた後、立ち上がった。

「直ぐに終わらせるから、待ってて」

そう言っただけでティアは再びバンノの方を向き歩き出した。

カツカツカツ……と荒々しくブーツを鳴らし、やや早足で歩く。

「て、ティア様……これは事故、そう！訓練で少し事故が……」

だが彼がそう言い切る直前、ティアは刀でバンノの口元を切り裂いた。

「ぶあつ?!」

口元を押さえ、仰け反った体を元に戻すと、その顔にあったのは見慣れた憎悪の表情。

「ちくしやうー!」

そう言っただけで両手剣を振るうが、ティアはそれを軽々と躲すと、そこから斬撃の嵐をバンノに浴びせた。それはまるで吹雪のようだった。

ソードスキルによるものではない凄まじい数の斬撃がバンノを襲う。その身にはみるみるうちに夥しい数の切り傷ができて行く。

「ぬあつーくあつ?!」

バンノはろくに反撃することもできず、ただティアの繰り出す攻撃を受けるだけだ。

そしてバンノは堪らなくなり剣を捨てて両手を上げる。

「わ、分かった！僕が悪かった！もうギルドは辞める！あんたらの前にも二度と現れないから！だから……」

そう言つて頭を地に付けた。

だがそんな彼に対し、ティアは容赦なく刀を上段に振り上げ、そして一気に振り下ろされる。

「い、嫌だーっ！死にたくないーっ!!」

その悲鳴が発せられた瞬間、ティアの刀はバンノの首に触れる直前で止められた。

「(そうだ、やめろ雫。おめえが殺る必要はねえ)」

ジェネシスは安堵したものの、逆にバンノがこれを狙っている可能性もある。

「(クソが……麻痺はまだ解けねえのかよ!!)」

ジェネシスは内心そう毒づいた。

麻痺はまだ解けない。

だがそうこうしている間に、ティアは刀を鞘に収めてしやがみ込んだ。

次の瞬間。

「ヒヤハハハーっ!!」

バンノは高笑いして右手に剣を再び握って立ち上がった。

「甘ええーっ！んだよお!!女ああーっ！!!」

そう叫んでティアに向けて剣を振り上げ、そして彼女を叩き斬らんと振り下ろそうとした。

「……甘いのは貴様だ」

が、その剣が振り下ろされることは無かった。

普段のティアからは想像もつかないような冷徹な声が発せられ、バンノは石になったように固まった。

突如彼らのいる谷底が銀色の光で照らされる。

どうやらブラフにブラフを重ねたのはティアの方だった。

銀に輝くのはティア、いや正確には彼女の刀だ。

ティアの刀が鞘ごと銀の光を纏い、ソードスキルが発動する。

ティアが刀を納めたのはバンノを許したからではない。

むしろ最初から彼を許すつもりなど無かったのだ。

ティアは左半身を引いて低く腰を落とし、右手を刀の柄にかけて抜刀術の構えを取る。

「て、ティア様？まさか……」

バンノは目を見開いて後ずさりする。

ティアは未だ鋭い目つきでバンノを睨み続けている。

「ティア様……や、やめて……」

命乞いするバンノだったが、それは無駄に終わった。

「……さつさと逝け、屑が」

そしてティアは左足を前に出し、その勢いで刀を一気に引き抜いた。

その銀色の刃はまずバンノの右腕を切り裂き、そして遂に首元を捉えた。

「ティアさ——」

ま、という言葉が出る前に、銀色の牙はバンノの首を刎ねた。

抜刀術奥義技《飛閃一刀》

抜刀術の名にふさわしい、一太刀の抜刀で仕留める究極の一撃。

その一撃でバンノのHPも全て消し飛ばされた。

斬撃の余波が周囲の壁に激突し、爆音を上げる。

地面にゴロン、とバンノの首が転がり、そしてバンノの身体と共にガラス片となって消え去った。

しばらく抜刀後の体制のままだったティアだが、ゆっくりと直立すると刀を左右に振って血振るいすると、右手の内側で刀を回転させて向きを変えると、左腰の鞘にゆっくりと納めた。

そこまで見届けるだ後、このタイミングを狙っていたかのように漸くジエネシスの麻痺は解けた。

だがジエネシスは地面に倒れ込んだまま動けなかった。

そんな彼にティアは振り向くと、ゆっくりとジエネシスに向けて歩く。

そしてジエネシスの側でしゃがみ込んだ。

「……ティア、お前……」

ジェネシスはただティアを見つめた。

ティアは困ったような笑顔を浮かべると、

「えへへ……これで、私も人殺しだね……」

と言った。

そして左手をジェネシスの頬に伸ばすと、

「久弥、麻痺が解けたら自分がやるつもりだったんでしよう？」

ジェネシスは凶星だったため何も言えず目を逸らした。

「それはダメだよ。私、もう久弥のあんな姿は見たくないから……」

そしてもう片方の手でジェネシスの量頬を包み込むように挟み込む。

「あの時、久弥は私を命がけで守ってくれた。だから、今度は私が久弥を守らなきゃいけないの。約束、したから」

そしてティアは優しくジェネシスの頭を胸に抱きかかえた。

「私の命は、もう久弥のものだよ。だから貴方の……久弥の為に使う」

ジェネシスは暫く黙っていたが、右腕でティアの背中に腕を回し、

「ああ……そうだな、俺の命もてめえのもんだ、雫。だからてめえの為に使う。」

ティアはそれを聞き一瞬体が硬直したものの、右手でジェネシスの頭を優しく撫でた。

辺りが暗くなる中、2人の男女は黙ってお互いの温もりに浸っていた。

—————

これは後から聞いたことなのだが、ティアとアスナはジェネシスとキリトが出た後もずっとモニタリングをしていたらしい。

だがキリトのパーティであるゴドフリーの反応が消え、同時にジェ

ネシスのHPバーに麻痺状態が表示されたのを見た瞬間、2人の少女は同時に飛び出した。愛する男を救う為に。

だが、幾らAGIの高いティアと言えど、一時間かけてやって来た道のりをものの数分で到達したのは驚き以外の何者でもない。

因みにどうやらキリトもジェネシスと同じようにクラデイルに殺されかけていたらしいが、アスナがその窮地を救ったそうだ。

その後、ジェネシス・ティアとキリト・アスナの4人は一連の出来事からギルドの一時退団を申請。

その際にヒースクリフから「君たちは直ぐに最前線に戻ることにするだろう」と意味深な言葉を残されたものの、何とか申請が認められ、彼らは各々帰ることになった。

—————

家に帰り、いつも通り夕食と風呂を済ませ、あとは寝るだけとなった。

だがティアは、寝巻きに着替えるとベッドの上で女の子座りをし、シーツの上をポンポンと叩いた。座れ、という事らしい。

大人しくジェネシスが彼女の前に座ると、ティアは控えめに両手を広げた。

「ね、久弥……ぎゅっ、として?」

「雫……?」

「お願い……?」

照れたように、しかしそれでいてそれを願う顔をしているティアの表情には勝てなかった。

ジェネシスは何も言わずに、黙ってティアの背中に両腕を回す。ティアは「あ……」と切なげな声を上げると、安心したように笑顔

浮かべ、

「……あつたかい。久弥の、暖かさ……」

そして彼の胸に顔を埋めると、そこでゆっくり息を吸った。

「すう……久弥、いい匂いがする……」

ジェネシスはというと、表情を少しも変えずにただティアにされるがままにしていた。

「久弥、もう一つだけ、いい?」

「……なんだよ?」

「私……もつと、もつと久弥の温もりを感じたい。いいかな?」

困ったような笑顔でそう願うティア。

「……構わねえよ。今日はてめえのやりたい事なんでも言え。好きなだけ付き合ってやるよ」

「えへ……ありがとう。」

それじゃあ……お言葉に甘えて……」

そしてティアは、ジェネシスに抱きついたまま、ゆっくりと彼を、ベッドに押し倒した。

—————

深夜。

ベッドで静かに並んで横になるジェネシスとティア。

ジェネシスの両腕の中で、まるで雛鳥のように丸くなって眠るティアをじっと見つめた。

彼女の特徴的な銀髪は、寝室に差し込む満月の光に照らされ幻想的に輝く。

ジェネシスはゆっくり彼女の髪を撫でた。現実ではこれが原因で

いじめを受けていたのだが、もし、彼女をいじめていたグループが今の瞬間だけジェネシスと入れ替わったら、二度と同じことはしなくなるだろう。

なにせ、これほど美しい髪はこの世に二つとない筈だ。

まさに、彼女の為だけに調整された、オーダーメイド品。

その時、閉じられていたティアの瞼がゆっくり開かれ、その黒い瞳が露わになる。

「っ、済まねえ…起こしちゃまったな」

「ううん、いいの…なんだか、すごく不思議」

ティアの言葉に、ジェネシスは疑問符を浮かべた。

「この世界は現実じゃないのに…この身体も、この髪も、何もかもがゼロと1で構成されたデータなのに…」

でも、この気持ちは…こんな幸せな気持ちはデータなんかじゃない。全部本物なんだなあって…」

ジェネシスは黙ってティアの話聞く。

「夢じゃないよね…私達、ちゃんとこの世界で一緒に生きてるよね…?」

ティアは不安げな表情でジェネシスの腕を掴む。

するとジェネシスはティアの頬を撫で、

「…これで夢だと言えるかよ?」
と尋ねる。

ティアは自分の頬を撫でるジェネシスの手を握り、

「…ふふっ、そうだね。ちゃんと、本物だね」

そして笑みをこぼした。

「ねえ、しばらく前線を離れない?」

ティアはそう尋ねた。

「…んま、もとよりそのつもりでヒースクリフと対決したしな。この際だ、ゆっくり休むか」

そう言ってジェネシスはステータス画面を確認する。

「金も結構貯まったしな。」

二十二層の南西エリアに、森と湖で囲まれたいい感じの村があるら

しい。そこに2人で引越して……ゆつくりするか」

その瞬間、ティアは目を見開き、満面の笑みで

「うん!!」

と抱きついた。

—————

「うわあ〜!!凄いいい眺め!!」

二十二層の南西エリア。

ここの湖の目の前に、小さなログハウスがある。

ジェネシスとティアはこの家を購入し、新たな新居とした。

「だからって外周に行きすぎて落っこちんじゃねえぞ?」

ログハウスのベランダから見える湖の絶景を前にはしやぐティアを、ジェネシスは軽く注意し、そして彼女の隣に立つ。

そしてジェネシスはティアの肩に左腕を回し、ティアはその腕を両腕で掴んだ。

その彼らの左手の薬指には、お揃いの指輪が。

これはジェネシスがここに来る前に、『結婚したのに指輪がまだだった』と慌てて購入したものだ。

「凄く、幸せだね……」

「ああ、そうだな。そうだが……」

いや、なんでテメエらもいるの?」

そう言つてジェネシスは左を見る。

そこにはもう一軒同じログハウスがあり、そのベランダにはキリトとアスナが。

しかもいつのまにかどうやら結婚までしているらしい。

「いいじゃないかジェネシス。同じ新婚同士、仲良くやっつてこうぜ?」

キリトがアスナの肩に手を回しながらベランダ越しに答える。

「はあ……ま、いいか」

そのため息をついたジェネシスの顔には、自然と笑みが零れていた。

十八話 朝露の少女

朝日が窓から差し込む寝室。

ここは二人分のベッドがあるのだが、一つは開けられている。何故なら……

「……ふふっ♪」

ティアがジエネシスの眠るベッドに移動しているからだ。

ジエネシスは毎朝8時にアラームをセットしているのだが、ティアはそれを知った後にその十分前である7時50分にアラームを設定している。

その理由はただ一つ。ジエネシスの寝顔を見るためだ。

もう何度も見慣れた愛しい彼の寝顔。

だが、普段のふてぶてしい彼の態度からは想像もつかないような無防備な姿を見ると、ティアの中にある庇護欲などが刺激される。

また、ジエネシスは彼の気づいていないところで意外に人気がある。しかも女性から。だが彼の寝顔を知っているのは、例え世界広しと言えども自分一人だけだ。

それらの事実を加味すると、ジエネシスの寝顔を見ると言うことはティアの中でかなり大きな幸福感を与えていた。

「はあく……どれだけ見ても飽きないよ、この寝顔は」

ティアは小声でそう呟きながら恍惚の表情を浮かべた。

そしてジエネシスの頬にそっと口付けをし、そして彼に上から覆いかぶさった。

「大好きだよ、久弥……ずっと一緒にいようね……」

ジエネシスが目を覚まさないよう気をつけながら耳元でそう囁いた。

「……お前、朝っぱらから何やっちゃってんの？」

すると、眠っているはずのジエネシスからため息をつきながらそんな声が発せられた。

ティアが慌てて飛びのくと、閉じられていた筈の両目はいつのまにかはつきりと開けられており、ティアを呆れたような顔で見つめてい

る。

「ひ、久弥あ！起きてたの?!」

ティアは素っ頓狂な声を上げながら問いかけた。

「てめえが十分前から俺の寝顔をガン見してたの、気づいてねえとでも思ってたのかよ?」

「なっ……?!!!」

嘆息しながら言うジェネシスの言葉を聞きティアは一気に顔が赤くなった。

「お、起きてたなら言つてよお!!」

頬を膨らませながらジェネシスに掴みかかるティア。

「ちよ、おいこら離しやがれ！俺まだ寝起きなんだからやめろ!!」

—————

一悶着あったものの、何とかティアを宥めたジェネシスはその後、いつも通り二人で朝食を済ませた。

「ねえ、今日はどこに行こっか?」

朝食を食べ、食器を片付けたティアがリビングのソファに座るジェネシスの隣に腰掛けて尋ねた。

「おめえな……ここに來てから毎日遊んでんじやねえかよ」

そう言つてジェネシスは壁を見る。

そこには、ここに來てからティアと作つた思い出の写真が飾られていた。時には隣に住むキリト達との写真も。

「むう、久弥と一緒に出かけたくないの?」

ティアは不機嫌そうに頬を膨らませながらジェネシスに顔を近づけた。

「いやそうは言つてねえだろうがよ……。けど、出かけるつたつて

なあ〜」

そう言つてジエネシスは両腕を頭の後ろに回す。

「……あいつにちよつと聞いてみるか」

ジエネシスはメニュー欄からキリトにメッセージを飛ばす。

『なんか面白そうな場所ない?』

するとものの数秒で返信が来た。

『とつておきの場所があるぜ。アスナと今から行くつもりなんだけど、お前らも来るか?』

「……キリトからお誘いが来たんだけどどうする?」

「キリトから? いいじゃん! 四人で出かけようよ」

ジエネシスが尋ねると、ティアは満面の笑みで返す。

二人は出かける支度を済ませ、ログハウスを出る。

するとそこには、既に出発準備を整えていたキリト・アスナ夫婦が待っていた。

「おはよう、二人とも」

キリトが爽やかな笑顔で出迎えた。

「おはようさん。昨晚は凄かったなてめえら」

ジエネシスがそう言うと、キリトは首を傾げて

「昨晚? 何のことだ?」

と訊き返す。

だがその反面、アスナは一気に顔を赤くし、

「や、やだ! 私そんなに声出てた?」

などと恥じらいながら尋ねた。

「おいおい、カマかけただけだったんだが……マジでお楽しみだったんだなあ?」

それを聞きジエネシスは一瞬目を丸くしたあと、すぐに悪戯な笑みを浮かべ言った。

「なっ……ちよつとジエネシスう!!!」

アスナは涙目になってジエネシスに掴みかかった。

そんな彼らを尻目に、ティアはキリトに

「……お前達マジでやってたのか?」

と尋ねると、キリトは目を逸らして
「ノーコメントで」
とはぐらかした。

—————

鳥の囀りが響く森の中、2組の新婚カップルは森林の中に設置された木の道を歩いて行く。

「で、俺たちは一体どこに向かってんだ？」

「まあ、そこは着いてからのお楽しみって事で」

ジェネシスの問いにキリトはそう答えた。

「ね、キリトくん」

「ん？なんだ？」

するとキリトの隣を歩くアスナに呼びかけられてキリトは立ち止まる。

「肩車してよー！」

「は？……か、肩車あ?!」

アスナの言葉にキリトは思わず素っ頓狂な声をあげる。

「だって、いつも同じ高さから景色見てるんじゃないよ。キリトくんの筋力パラメータなら余裕でしょ？」

「そ、そりやそうだが……お前いい年こいて」

「年は関係ないもん。いいじゃん！今ここにはジェネシス達しかいないんだから」

「俺らはいてもいいんだな」

ジェネシスは呆れたように呟いた。

キリトはしばし思案した後、渋々しやがみ込んだ。

アスナはスカートを少したくし上げてキリトの肩に両足をのせる。

「後ろ見たら引っ叩くからね？」

「なんか理不尽だな……」

そしてキリトは立ち上がる。

「わあ〜！ 凄い！ ここからでも湖が見えるよ!!」

普段見慣れない景色にアスナは子供のようにはしゃぐ。

そんなアスナを、ティアはどこか羨ましそうな目で見ていた。

「ねえ、ひさ……ジエネシス」

「なんだよ？」

「私にも……肩車、して？」

上目遣いそして潤んだ瞳でそう懇願したティア。

こんな美女にこんな頼み方をされては、いくらジエネシスとも言えども断る事など出来はしない。

ジエネシスは黙ってしやがみ込み、ティアを自分の肩の上に乗るよう促す。

「……ほれ」

「あ、ありがと……」

ティアは少し頬を緩めながらジエネシスの肩の上に跨った。

それを確認すると、ジエネシスはすつと立ち上がる。

「おお……これは……!」

ティアはその光景に目を輝かせた。

「何だかんだ、ジエネシスはティアさんに甘いのね」

キリトの肩の上からアスナが微笑ましい笑顔を浮かべながら言った。

「うっせ」

ジエネシス達はキリトに連れられ、そのまま湖を抜けて森の奥深くへと入っていく。

「実は昨日、村で聞いた噂なんだけどな。この辺りの森の奥深く…出るんだってさ」

「出るう？何が？」

ジエネシスの問いに、キリトはニヤツと笑い

「……幽霊」

と答える。

ジエネシスは「はあ？」と呟くが、キリトの肩に乗るアスナは自然と両足の力が強まった。

「…アストラル系のモンスターとかじゃなくて？」

「違う違う、本物さ」

そうしてキリトは語り出した。

「一週間前、木工職人のプレイヤーがこの辺りに木材を取りに来たらしい……夢中で集めているうちに暗くなっちゃって、慌てて帰ろうとしたその時……」

と、キリトが続けていた時だった。

「なあ、あれって……」

不意にジエネシスの両肩に乗るティアが森の中を指差す。

全員がその方向を見ると……

そこには白いワンピースを着た二人の少女が。

「い……いやーっ!!!」

アスナは思わずキリトの肩から飛び降りた。

「う、嘘だろ……？」

キリトも思わず青ざめた表情で呟く。

すると二人の少女はジエネシス達の方を向いた後、数歩よろめいて倒れた。

「っ！おい！」

ジエネシスはティアを下ろすとその場から駆け出す。

キリトもそれに続く。

「ちよ…:ジエネシス！」

「ま、待ってよ〜!!」

ティアも慌てて駆け出し、最後一人置いていかれたアスナも涙目で続いた。

ティア達が追いついた時、ジエネシスとキリトは既に倒れた少女の元へ駆け寄っており、その二人を抱きかかえていた。

その二人の少女は、身長や見た目、そして年齢は恐らく同じくらい。二人とも同じ柄の白いワンピースを身につけており、一人は黒髪ロングでもう一人はそれに対して白髪のロングだ。

「こいつは…:相当妙だぞ?」

黒い髪の少女を抱きかかえているキリトが少女を見て呟く。

「妙って?」

アスナが疑問符を浮かべ、それに対して白い髪の少女を抱きかかえているジエネシスが答えた。

「見ろ、カーソルが出ねえ」

それを聞きアスナとティアは少女達の方に視線を合わせる。

通常、このアイコンクラウドに存在する全ての動的オブジェクトには、必ず名前とHPと言ったカーソルと言うものが出現する。

しかしどういうわけか、この二人の少女にはタゲを合わせてもカーソルが表示されないのだ。

「何かしらのバグ、か…?」

ティアが顎に手を当てながら考え込む。

「まあ、そうだろうな。んなバグがあるとか大問題もいいとこだが…:」

ジエネシスが頷きながら答える。

「…:とりあえずこのまま放つては開けないから、この二人を家まで連れて帰ろう。」

「だな」

キリトの提案にジエネシスや後の二人も賛同し、一時この二人の少女をログハウスまで連れて帰ることにした。

黒髪の少女はキリト達の家、白髪の少女はジェネシスの家で一度保護することになった。

ジェネシスとティアは、目の前のベッドに寝かせた白髪の少女を見つめていた。

「確かなのは、家に連れてこれたって事は、この子はNPCじゃないって事だよね」

「ああ。もしコイツがNPCなら、俺が触った瞬間にハラスメントコードが出てた筈だ」

ティアの言葉にジェネシスは同意し答える。

「意識、戻るよね？」

「身体が消滅してないって事は、ナーブギアとの信号のやり取りがまだあるって事だ。少なくとも睡眠に近い状態の筈だから、その内目え覚ますだろ」

不安げに言うティアに対し、ジェネシスは落ち着いて答えた。

しかしその日は少女が目を冷ます事は無く、二人は就寝準備に入っ

た。

ティアは寝る直前、少女の元に歩み寄る。

「(もし、この子がたった一人でSAOに来ていたなら、この子は今ままで独りで……)」

悲しげな表情を浮かべながら、ティアは少女の頬をそつと撫でる。

「おやすみ。明日は目が覚めるといいね……」

そう言っ、ティアは少女の隣で眠りについた。

翌朝、目が覚めたティアは何か視線を感じ、顔を横に向ける。

するとそこには、昨日眠っていた少女が目を開いて、大きな青い瞳

を不思議そうな顔でこちらに向けていた。

「あ……ひ、久弥!!久弥つてば!!」

驚いたティアが慌ててジエネシスを呼ぶ。

「ん……何だよ朝っぱらからよお……」

ジエネシスは眠たげに目をこすりながら起き上がった。

「良いからー早くこっちに来て!!」

そう叫ぶティアにジエネシスは疑問符を浮かべながらベッドから降り、少女の目が開いているのに気がつく。

「おっ、起きたのか」

「良かった……ねえ、自分がどうなったか、覚えてる?」

ティアは両手で少女の体を優しく抱えて起き上がらせる。

少女はティアの問いかけに対し、首を横に振った。

「そっか……じゃあ、自分の名前は言える?」

問われた少女は少しうつむき考えるそぶりを見せ、

「……………な……まえ……わたしの……なまえ………あ……れ……い……
れい。それが……わたしの……なまえ」

少女は迪々しい口調ではあったが、自身を『レイ』と名乗った。

「『レイ』……いい名前だね。私は『ティア』。こっちのちよつとこわい顔の人が『ジエネシス』だよ」

「おい、どんな紹介の仕方だコラ」

ティアは優しい口調で自分と彼を紹介する。

ジエネシスはその紹介の仕方に納得がいかないようだが無視して話を進めた。

「レイ、どうしてあの森にいたの?何処かに、パパやママは居たりしないのかな?」

そう問いかけられ、レイは少し考えるが

「ん……わかんない……なんにも、わかんない……」
首を横に振って答えた。

少し顔が曇っていくティアに気づき、ジエネシスがレイの目線を合わせて話しかける。

「おう……あー、その、何だ。『レイ』って呼んでいいか?」

ジエネシスが尋ねると、レイは「ん……」と頷いた。

「そか。んじやレイも、俺を『ジエネシス』って呼んでくれや」

「……じえ……ね……?」

「ジエネシスだ、ジエ・ネ・シ・ス」

「……じえ……に、しす……?」

「ターミネーターかよ。ㄹネㄹな。ジエㄹネㄹシス」

「う……げ、ねしす……?」

「それじゃ新世代の変身ベルトじゃねえか」

何度も名前を間違えるレイに度々突っ込むジエネシスを見かねた

ティアがジエネシスの頭を軽く引つ叩いた。

「こら。そんな風に一々突っ込まないの。」

ジエネシスじゃ難しいんじゃないかな。レイの好きな呼び方でい

いよう。」

ティアにそう言われ、レイは少し考え込んだ。

「……………ぱぱ」

そしてレイはティアの方を向き、

「ていあは、まま」

そう言った。

ティアとジエネシスはそれを言われて少し戸惑った表情をしており、そんな二人を不安げに見つめていた。

やがてティアは安心させるように優しく微笑んで

「…そうだよ、ママだよ……レイ」

その言葉でレイはパアツと笑顔になり、

「ぱぱ、まま」

そう言いながらティアに抱きついた。

「お腹減ったでしょ?」飯にしよう!」

「うん!」

ジエネシス達はレイを連れてリビングにやって来た。

ティアが料理を作っている間、ソファでジエネシスと並んでレイが

座る。

新聞に目を通すジエネシスを、不思議そうな目でレイは見ていた。

「はい、(´▽`)飯できましたよ」

そう言ってテーブルの上に運ばれたのは、おにぎりとサンドウィッチ。

おにぎりがジェネシス用でサンドウィッチがレイ用だ。

「うっし。んじやレイ、準備はいいかあ?」

「うん!」

食卓に揃った三人は揃って手を合わせ

「「「いっただきまーす」」」

声を揃えて言った後、三人は各々の食事にありついた。

「レイ、サンドウィッチの味はどう?」

ティアがサンドウィッチを頬張るレイに尋ねる。

レイはサンドウィッチをしばらく咀嚼した後、

「……おいしい!」

満面の笑みで答えた。

「そうだろうさうだろう。何たってママの料理は世界一だからなあ」

「うんっ! せかいいちー!!」

そんなやり取りをしているジェネシスとレイを、ティアは微笑ましい視線で見つめていた。

やがて満腹による眠気が襲ったのか、レイはリビングの椅子ですやすやと寝息を立てていた。

そんなレイを見つめながら、ティアはジェネシスに問いかけた。

「……どう思う?」

「記憶は……完全に無いみてえだな。んま、それより問題なのが……」

「まるで、赤ちゃんみたいになってるよね。」

私、どうしたらいいんだろう……」

ティアは俯いてそう言った。

ジェネシスはその彼女を見て何が言いたいのか察し

「レイの記憶が戻るまで、面倒見てやりたいって思ってたんだろ?」

ジェネシスの言葉にティアは黙って頷いた。

「気持ちに分からなくもねえよ。コイツを見ると、俺たちがまるでホントに家族みてえになってるからな……」

ジエネシスはそう言いながらレイを見つめ、少し苦笑する。

「ま、俺たちに出来ることをやるしかねえよ。コイツに親とか兄弟がいんならそいつらに返してやんねえといけねえし、とりあえずはじまりの街に行ってみるしかねえ」

「……っ」

ジエネシスの言葉に、ティアは少し寂しそうに目を伏せる。

「そんな顔すんなよ。別にこれっきりなわけじゃねえ」

そんな彼女にジエネシスは肩に手を置いてそう言った。

「うん、そうだね」

ティアは少し顔を上げると、小さく頷いた。

「う……ぱぱ……ま……ま……」

寝言を呟きながら幸せそうな笑顔を浮かべるレイを見て、自然と笑みがこぼれるジエネシスとティアだった。

「……………」

く第一層 はじまりの街く

広場の中央に設置された転移門が青白い光を放ち、中から四人の男女が姿を現した。

ジエネシスとティア、キリトとアスナだ。

そしてジエネシスの肩にはレイが、キリトの背中には昨日レイと共に保護した黒髪の少女がいる。

「ここに来んのも、久しぶりだなあ」

「ああ……」

はじまりの街を見渡し、ジエネシスが懐かしそうに呟くと、キリトもそれに同意し頷く。

「ねえユイちゃん、何か見覚えある？」

アスナがキリトに背負われている黒髪の少女——ユイに尋ねる。

「んー……わかんない」

ユイは少し辺りを見回すが、首を横に振った。

「そうか……レイはどうだ？」

ティアがジエネシスの肩に乗るレイに尋ねる。

「わたしもわかんない……」

レイは少し俯いて答えた。

「まあ、はじまりの街はバカみてえに広いからな。とりあえずマーケットに行ってみるか」

ジエネシスの提案に応じ、四人は市街地を歩いて行く。

ユイとレイは二人とも不思議そうな顔で辺りを見渡していた。

「ねえ、はじまりの街って、今どれくらい人がいたっけ？」

不意にアスナが疑問に思ったことを尋ねる。

「えっと、生き残ってるプレイヤーの数が六千人くらいで、『軍』を含めると3割くらいがここにいらっしゃるらしいから……だいたい二千人くらいじゃないか？」

問いかけにキリトはそう答える。

「それにしても、人が少ないと思わない？」

「ああ、言われてみれば……」

アスナがそう言うと、キリトも頷いて辺りを見渡してみた。

今、彼らがいるのは商店街。

二千人もいるなら、この時間は大勢の人で賑わっているのが自然なはずだ。

にもかかわらず、これまで彼らがすれ違った人の数は片手の指で数えられる程度だ。

「こんな状況だからなく、みんな部屋で引きこもってんじゃね？」

ジエネシスが呑気な口調でそう呟いた時だった。

「子供達を返してー！」

閑静な商店街に女性の叫び声が響く。

「お、伯母さんの登場だぜ」

「待ってました!」

直後に複数の男性の声が響く。

四人が声の下方方向に走り出すと、現場は商店街の裏通りだった。そこには複数の『軍』の人間が路地を塞いでおり、奥には三人の小さな子供がいた。

「子供達を返してください!!」

道を塞ぐ軍のプレイヤーに対し一人の女性が叫んだ。

「人聞きの悪い事を言わないでもらいたいな?ちよつと子供達に『社会常識』ってやつを教えてやってるだけでさあ」

「そうそう、市民には『納税の義務』ってのがあからなあ」

それに対し、軍の男たちは下劣な笑みを浮かべながら答えた。

女性は軍の男たちの隙間から覗き込むように

「ギン!ゲイン!ミナー!そこにいるの?!」

と叫ぶ。

が、1人のプレイヤーがその隙間も埋めるように動いた。

それによって女性はさらに険しい顔なる。

「先生!サーシャ先生!助けて!!」

奥から少女の怯えた声が響く。

「お金なんていいから、全部渡してしまいなさい!」

サーシャ、と呼ばれた女性は叫んだ。

「先生、それだけじゃダメなんだ!」

それに対して少年が叫び返す。

その声にサーシャは疑問符を浮かべた。

「あんたら、随分と税金を滞納しているみたいだからなあ」

「装備も置いてあつてもらわないとなあ。防具も全部、何から何までなあ?ククククツ」

そう言つて下賤な笑みを浮かべる軍の男たち。

あまりに傍若無人な要求にサーシャは堪忍袋の尾が切れたのか、腰の短剣に手をかけた。

そこを退きなさい!さもないと……!」

その時、2組の男女がサーシャ、そして軍の横を通り抜け、着地すると軍のメンバーに相對した。

現れたのはジェネシス達四人だ。

突然の出来事に軍の面々もサーシャも呆氣にとられている。

「もう大丈夫だよ、装備を戻して?」

アスナは子供達に優しい口調でそう言った。

すると、我に返った軍の一人が

「おい、おいおいおい! なんなんだお前ら? 軍の任務を妨害するのかわ?!」

あからさまに不機嫌そうな声で叫んだ。

「へえ、かの『アインクラッド解放軍』さんの任務は小さい子供を脅す事なんすか? こいつは立派な事だなあ、立派すぎて笑っちゃいますよ」

それに対し、レイを肩に乗せたジェネシスが煽り口調で答えた。

「何だとお?!」

ますます機嫌を悪くする軍の男達。

「あ、いつそ名前変えて、『アインクラッド解放軍(笑)』なんてどうすか? こっちの方がテメエらにはお似合いだろ」

「てめえ!!」

そう言つて軍の男達はそれぞれ武器を引き抜く。

今にも斬りかからんとする程の勢いだ。

「まあ待て」

しかしそんな彼らを、リーダーらしき男が制した。

そしてジェネシス達を威圧感のある目でにらみつけ、

「あんたら見ない顔だが……解放軍に楯突く意味がわかってんだろかなあ?!」

そう叫んで腰の剣を引き抜き、高く掲げる。

それによつて子供達は怯えた声をあげる。

すると、ティアとアスナがゆっくりと前に出た。

「……ジェネシス、レイと子供達を」

「キリトくんもユイちゃん達をお願い」

そう言いながら各々の愛剣をストレージからオブジェクト化する。そしてにやけた顔で立ち続ける男の前で立ち止まると、そこでソードスキルを発動した。

細剣基本スキル《リニア》

刀抜刀スキル《辻風》

ピンクと青のエフェクトが男を襲った。

「ぶあっ?!」

男はそんな悲鳴をあげて倒れ込んだ。

再び顔を上げると、ティアとアスナが既にソードスキルを発動した状態で剣の切っ先を向けていた。

そして間髪入れずにまた同じスキルで斬られる男。

情けなく地面に伏す男を、ティアとアスナは冷ややかな視線で見下ろす。

「安心して、圏内でどんな攻撃をしてもダメージは通らない。そう、軽いノックバックが発生するだけ……」

「……だが、『圏内戦闘』は人の心に恐怖を刻み込む」

そして再び放たれるソードスキルで男はまたしても吹き飛ばされた。

「お、お前らー！見てないで何とかしろ!!」

堪らずリーダーが叫ぶと、軍のメンバーは各々武器を構えた。

そんな軍の男達を見て、ティアは

「ほう？いいだろう、何人でもかかってくるがいい……ただし、一度武器を抜いたからには命をかけるよ？」

そう言った。軍のメンバーは皆疑問符を浮かべた。

「その剣は単なる脅しの動画などではない……剣は凶器、剣術は殺人術だ。」

まあここは圏内だから死ぬことは無いが、貴様らも私達に手を出すというなら……」

そこで一度目を伏せ、

「お前らはこれじゃ済まないぞっ..」

くわつと目を開き、軍のメンバー達を鋭い目つきで睨みつけた。その瞬間、軍の男達に途轍も無い殺気と威圧感が向けられ、今まで感じたことのない恐怖心が彼らを襲った。

これは、ティアとジエネシスが編み出したシステム外スキル《覇気》。この世界に存在する剣気や殺気といった威圧感を敵にぶつけるというものだ。

軍の面々は皆、一斉にその場から逃げ出した。

それを確認すると、ティアとアスナは剣を鞘に収める。

後ろの子供達を見ると、皆呆気にとられて彼女達を見ていた。

怯えさせてしまったか、一瞬不安になったティア達だったが、

「すげえ……すげえよねえちゃん!!」

「あんなのはじめて見た!!」

「うんっ!!すごくカッコよかった!!」

そう言っつて子供達は無邪気な笑顔でティア達に駆け寄った。

「ありがとうございます!」

サーシャも彼女達の元に寄り、頭を下げる。

そんな彼らの様子を見て、安心したように笑みを浮かべるティアとアスナ。

「見たかレイ、ママはすっげえ強いんだぜ?」

「ああ、ユイも見たか?ママは強いだろ?」ジエネシスは肩に乗るレイに、キリトは背中に乗っているユイに誇らしげな笑顔で問いかけた。

「みんなの……みんなのところが……」

その時、ユイが右手を虚空に伸ばしてそう呟いた。

「ん?ユイ、どうかしたのか?」

異変に気付いたキリトがユイを見る。

「ユイちゃん?何か思い出したの?」

それに気付いたアスナも慌てて駆け寄る。

「あ……ゆ、い……」

すると今度は、ジエネシスの肩に乗るレイがユイを見つめながら彼女の名を呼んだ。

ユイはキリトの肩に顔を埋めるようにして

「わたし……わたしたち……ここにはいなかった……」

「ゆい……」

「ずっとひとりで……暗いところにいた……っ！」

「ユイっ!!」

レイが目を見開いてそう叫んだ直後、ユイが悲鳴を上げ、同時に耳をつんざくようなノイズが走った。

その場にいた四人は思わず両手で耳を塞いだ。

ノイズが治まると、レイとユイは気を失ってバランスを崩す。

ティアとアスナが彼女達を寸前で受け止めた。

「ママ……可愛い……ママ……」

ユイはアスナの腕の中でうわ言のようにそう呟く。

「何だったんだ今のは……?」

キリトは訳がわからずただそう呟く。

そして今度は、ティアの腕の中で気を失っているレイに視線を向ける。

「レイ……お前今はつきりと『ユイ』って言ったか……?」

ジェネシスがレイにそう問いかけるが、答えは帰ってこない。

この二人に関して、余計に謎が深まった。

四人の心には、暗雲が立ち込めていた。

十九話 ユイとレイ

ユイとレイが気を失ったため、ジエネシス・キリト一行は街の教会に一泊させてもらうこととなった。

一階の広間では、大勢の子供達が並べられた料理を我先にと食べ、場は子供達の賑やかな声が響いていた。

「コイツは凄えな」

ジエネシスがそんな光景を目の当たりにし、思わずそう呟く。

「いつもこうなんですよ。静かになって言っても聞かなくて」

その呟きに対しサーシャが笑顔で答える。

そして、目の前に座るユイとレイに視線を移す。

「ユイちゃんとレイちゃんの具合はどうですか？」

ユイとレイはテーブルに置かれた丸型のパンを手に取り、リスのように頬張って食べている。

「一晩休ませたおかげで、今はこの通りなんですけど……」

「この娘達は二十二層で迷子になってたところを保護したんです。記憶も無くしてるみたいで、それではじまりの街に……」

サーシャの問いに、アスナがユイを見つめながら答え、ティアもそれに続く。

すると、アスナの隣に座るユイと、ティアの隣に座るレイが揃ってパンを手に取り、それぞれの母親に差し出した。

ティアとアスナはそれを笑顔で受け取ると、それぞれの愛娘の頭を優しく撫でた。

「この娘達の親や家族がいるかと思って、やって来たんです」

ティアがそう言うと、サーシャは少し考える素振りを見せて見せ、「……残念ですけど、この街にいた娘達では無いと思います」

そして、広間で食事している子供達に視線を移し、

「このデスゲームが始まってから、多くの子供達が心に傷を負いました。私、そんな子達を放って置かなくて、この教会で一緒に暮らし始めたいんです。」

毎日困ってる子がいないか見回っていますが、レイちゃんやユイちゃんのような子は見たことが無いですね……」

「そうすか……」

サーシャの言葉にジェネシス達四人は表情を曇らせた。

すると、教会の扉を叩く音が響いた。

ジェネシス達は顔を見合わせ、食堂から礼拝堂へ行き、扉を開ける。

「新聞なら要らねーぞー」

ジェネシスがそう言いながら扉を開くと、そこには一人の女性が立っていた。

深緑の甲冑を身につけ、グレーの長髪を後ろで結んでいる。

「初めまして、ユリエールです」

凜とした声で自己紹介した。

「あー、もしかして『軍』の人？昨日のことで抗議に来た感じっすかね？」

「とんでも無い！むしろその逆です。よくやってくれたと、お礼を言いたいくらいですから」

ジェネシスの言葉に、ユリエールは両手を横に振って答えた。

そんな彼女の言葉に皆が首を傾げていると、ユリエールは真剣味を帯びた表情で告げた。

「……今日は、皆さんにお願いがあつて来たのです」

彼らはユリエールを奥の部屋へと招き入れる。

円形のテーブルに全員が並んで座った。

「元々私たち……いえ、ギルドの管理者であるシンカーは、今のような独善的な組織を作ろうとしていたわけでは無いんです。

なるべく情報や資源を、多くのプレイヤー達で分け合おうとしただけ……」

「だが、『軍』は巨大になりすぎた……」

キリトの言葉にユリエールは頷き、

「分裂した組織の中で、台頭して来たのが、『キバオウ』という男です」

その言葉でキリト、アスナそしてティアの三人は顔をしかめた。

忘れもしない。第一層ボス戦で、彼らの大切な仲間であるジェネシ

スが《ビーター》の汚名を着せられるきつかけとなった人物。

だが当のジエネシス本人は鼻をほじりながら

「あー、いたなそんなの。『キバっていくぜ』とか言ってたな」と興味なさげに呑気な口調で呟いた。

「いや、多分そんなこと言ってたと思っただろうぞ……?」

ジエネシスの言葉にキリトがやんわりとツツコミを入れる。

「キバオウ一派は権力を強め、効率のいい狩場の独占や調子に乗って徴税まがいの行為をするようになりました。」

しかしゲーム攻略を蔑ろにする彼への批判が強まって、キバオウは配下のプレイヤーの中で最もハイレベルな者達を、最前線に送り込んでんです」

それを聞き、4人は顔を見合わせた。

思い出すのは、先日の七十四層ボス攻略にて、あまりに無謀な戦闘を行った『軍』の男。

「コーバツツさん……」

「結果は、部隊員2名を失って撤退。」

最悪の結果にキバオウは強く糾弾され、あともう少しのところまでギルドを追放できる所まで追い詰めたんです。

ですが追い詰められたキバオウは、そこで強硬策に出ました……」

「シンカーを……ダンジョンの奥に置き去りにしたんです」

キリトは目を見開き、

「て、転移結晶は?!」

と尋ねるが、ユリエールは黙って首を横に振った。

「彼は……いい人過ぎたんです。キバオウの丸腰で話し合おう、と言う言葉を信じて……もう三日も前のことです」

「三日も前に……それで、シンカーさんは?」

アスナが問いかけた。

「かなり高レベルなダンジョンのようで身動きが取れないみたいですよ。全ては副官である私の責任です。」

ですが、私のレベルでは突破出来そうにありませんし、キバオウが

睨みを利かせている中『軍』の力はアテに出来ません。

そんな中、恐ろしく強い人達がいると聞いて、ここへやって来たんです!」

そしてユリエールは立ち上がり、

「お願いします!・どうか私と一緒に、シンカーを助けに行ってくださいませんか?」

両目から涙を溢れさせて頼み込んだ。

彼女の表情を見れば、いかにシンカーが彼女にとって大切な存在かは一目で理解できた。

とは言え相手は軍の人間。おいそれと信用することは、彼らには出来なかった。

「大丈夫。その人、ウソついてないよ」

すると、レイが口を開いてそう言った。隣に座るユイもうんうんと頷いている。

「レイ?そんなことが分かるの?」

ティアがレイの顔を覗き込んで尋ねる。

「うん。なんか、うまく言えないんだけど……だいたいわかる」

「だいたいだよ……」

まあ、いんじゃないやね?行くだけ行ってみれば」

ジェネシスがレイの頭を撫でながら言った。

「そうだな。疑って後悔するより、信じて後悔する方がいいからな。行こう、なんとかなるさ」

キリトもユイの頭を撫でながら提案した。

「全く、呑気な奴らだ……」

ティアがそれに対して苦笑しながら言った。

「私達でよければ、協力させてください。大切な人を助けたい気持ちには、私達にもわかりますから」

アスナがユリエールに向き直り、そう言った。

「ありがとうございますー!」

ユリエールはもう一度頭を下げた。

「ユイはちよっとお留守番しててな?」

「いや！ユイも行く！」

キリトがユイに言うのと、ユイは顔をしかめて拒否した。

「ユイちゃん、私と一緒に留守番しましょう？」

「やだー！」

サーシャがユイにそう言うが、ユイは引き下がらない。

「おお、これが反抗期ってやつか……」

「バカなこと言わないの！……ユイちゃん、今から行くところはとても危ないから、ここでレイちゃんと一緒に待ってて？」

アスナがそう言うが、ユイは椅子から飛び降りてキリトの腕にしがみつき、

「ユイも行く!!」

と頑なに譲らない。

キリトとてもアスナはそれを見て少し困った表情をしていた。

そんな彼女を見た後、ジエネシスはレイに向き直り

「んじゃあ、レイは……」

「いやー！」

「まだ何も言っていないんだが……」

ジエネシスが待ってるように言おうとするが、レイはそれを言い切る前に膨れっ面で拒否した。

「レイ、アスナも言っていたが今から行くところは危ないんだ。直ぐに帰ってくるから、ここで……」

「やだやだやだ!!レイも行く!!」

ティアがやんわりとレイに言うが、レイは首を横に振って拒絶し、そして椅子から降りるとジエネシスの前に立ち、

「……パパ……だめ……っ？」

潤んだ瞳で上目遣いで言ってきた。

結局、ジェネシス達はユイとレイを連れて行くことにした。

ジェネシスが「あんな頼み方されたら置いて行けない」と言ったからだ。

当のユイとレイは、それぞれの父親の肩に乗って上機嫌な笑みを浮かべていた。

戦闘用の装備に切り替え、黒鉄宮の中へ入り、薄暗い路地を進んで行く。

「にしても、まさか黒鉄宮の中にこんなダンジョンがあったとはなあ」

「βテストの時はこんな無かったぞ……不覚だ」

ジェネシスとキリトがそれぞれ口にする。

「上層の進み具合によって段階的に解放されるダンジョンのようですね。キバオウはこのダンジョンを独占する計画を立てていたらしいのです」

彼らの呟きにユリエールが答えるように言った。

「成る程、専用の狩場があれば儲かるからな」

ティアが頷きながら言うが、

「それが、六十層レベルのモンスターが出てくるようになってろくに狩りが出来なかったそうですよ。結晶アイテムを大量に使用したせいで大赤字になったとか」

ユリエールがそう言うと言つて皆は苦笑した。

やがて一行は、目的のダンジョンへと続く階段の入り口の前まで辿り着いた。

キリト、ジェネシスの肩から降りたユイとレイは、物珍しそうな目で階段の奥を見つめていた。

ユリエールはそんな2人を不安そうな目で見ている。

「大丈夫ですよ。この娘達、見た目よりしっかりしてますから」

「うん、将来は立派な剣士になる」

そう言つて2人はユイに笑いかけた。ユイも彼らに笑顔を向ける。「いやいや、レイは剣士になんかさせねえよ。んな危なっかしいことさせられっかよ」

「そうだな。こんな可愛い娘を戦場になんか送れん」

ジェネシスとティアがそう言うのと、

「えー？レイもパパみたいになりたくー！」

レイは不満そうな顔で言った。

「ならなくていいんだよ。こう言うのは俺たちに任せとけばいいの」

「やーだー！レイもたたかうのくー!!」

レイは尚も不満そうな顔でいやいやと首を横に振る。

「まったく…レイは頑固な娘だな」

ティアは苦笑しながらレイを見つめた。

「では、行きましょう」

ユリエールが先導する形で、薄暗い煉瓦造りの道を進んでいく。

途中でカエル型のモンスターとエンカウントし、キリトが黒と翡翠の剣で応戦する。

「おおおおりやああああ!!」

真骨頂の二刀流を存分に駆使し、カエルを薙ぎ払っていく。

それをアスナは呆れたように見つめ、ユイは大はしゃぎしていた。

「済みません、任せつきりで……」

「大丈夫ですよ。あれはもう病気みたいなものだし」

「というか病気だよねアレ。完全にイキっちゃってるよね。もうすっかりイキリトくんだよね」

「ジェネシス、言い過ぎじゃないか………?」

ユリエールが申し訳なきそうに言うのと、アスナがあっけらかんと答え、ジェネシスが更にキリトを蔑み、ティアがげんなりとした顔でツッコミを入れる。

すると、

「パパ、パパ」

ジェネシスの肩に乗っているレイがジェネシスの方を向き、

「ぱはもたたかっつて?」

「へ?なんで?」

レイの思わぬ発言にジェネシスは疑問符を浮かべる。

「レイ、ぱぱのカッコいいところも見たーい!」

レイは満面の笑みでそう言った。

一瞬呆気にとられていたジェネシスだったが、ふうと嘆息し、レイを肩から下ろすと、

「しようがねえなあ。んじゃ、しっかりその目に焼き付けとけよ?」

と、レイの頭を優しく撫でた。

「うんっ!!」

レイの笑顔溢れる返事を書いた後、ジェネシスは愛剣である背中のアインツレーヴェを引き抜き、現在キリトと戦っているカエルの群れの方へ駆け出した。

「オラアアアアア!!カエル狩りじゃあああー!!!」

そう叫びながらカエルを滅多斬りにしていくジェネシス。

それを見てレイは飛び上がって大はしゃぎだ。

「ジェネシスも大概だな……」

ティアは呆れたように呟いた。

そんな中、ユリエールはマップを開いて現在地とシンカーの位置を確認していた。

「随分奥まで来たけど、シンカーさんは今どの辺かな?」

アスナの疑問に対し、ユリエールはマップを可視化して表示する。マップにはダンジョンの通路と赤い点が表示されていた。

アスナとティアがユリエールの左右からそれを覗き込む。

ユイがアスナの前に立って覗き込むが、場所がないレイはティアの後ろから飛び跳ねながら覗き込んでいた。

「シンカーはこの位置から動いていないみたいです。おそらく安全エリアにいるんでしょう。そこまで行けば、転移結晶が使えますから」
そう言ってマップを閉じた。

すると、ちょうど戦いを終えたキリトとジェネシスが剣を収めて戻ってきた。

「いやあく、戦った戦った♪」

満足げに腕を回すキリト。

「チツ、ほとんどテメエがやっちゃまうから全然狩れなかったぜ……」

どうやら獲物をほとんどキリトに取りられ不完全燃焼のジエネシス。

「すみません、すっかりお任せしてしまつて……」

ユリエールがそう謝るが、

「いや、好きでやってるんだからいいですよ」

「それに、アイテムも出るしな」

キリトが手を横に振つて答え、ジエネシスもそれに応じた。

「へえ、何かいいのが出たの？」

ジエネシスの「アイテム」という単語に反応し、興味津々のアス

ナ。

キリトはドヤ顔でメニューを開き、アイテムをオブジェクト化する。

そしてキリトの右手に、『グチャリ』と生々しいサウンドエフェクトと共に、手羽先のような形状のグロテスクな生肉が出てきた。

「え…何これ……？」

その瞬間、アスナが引きつった顔で尋ねる。

「スカベンジトードの肉」

キリトは満面の笑みで答える。

「さっきの、カエルか……？」

ティアも引き気味で尋ねる。

「ゲテモノほど美味いつて言うからな！あとで調理してくれよ！」

そう言つてキリトは肉をアスナに差し出す。

「絶・対・嫌!!」

だがアスナは素早くそれを取り上げると、明後日の方向へ投げ飛ばした。遠くで『ガシャン』という破碎音が響いた。

「な、何すんだよ?!」

キリトがそれを見て悲しそうな顔で叫んだ。

アスナはそんな彼に構うことなく、両手を腰に当てる。

するとキリトは、メニュー欄から大量のカエル肉をオブジェクト化

して見せた。

「嫌ーっ!!」

アスナはそれらを次々と手にとって投げ飛ばしていく。

それによって大量のカエル肉が宙を舞うと言うシニールな絵面が出来た。

そんな光景を見ていたティアはふと何かを察し、ジエネシスの方を見る。

「…お前まさか……?」

ジエネシスはティアの言いたいことを察し、

「ああ、俺の方にも出たぜ」

そう言っただけのものをティアに差し出した。

「やつぱり……!」

ティアはそれを見て背筋が震えた。

「おいおい、そんな目でみんなよ。キリトが言うには結構美味いらしいぜ?」

「ふんっ!!」

だがティアはそれを手に取り、アスナと同じように投げ飛ばした。

「おiiiiiiii!!何してくれてんだ!!」

「私がゲテモノが嫌いなもの知ってるだろ!!」

「何言ってるんだ?!カエルの肉はゲテモノなんかじゃねえよ!!この○ばでもカエルの肉を唐揚げにして食いまくってたじゃねえか!!」

「それはフィクションの話だろうが!!」

「くっそく…:だつたらこれでどうだコラア!!」

そう言っただけでジエネシスは、キリトと同じように両手一杯にカエル肉をオブリエクト化させた。

「いゝやゝ あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ っ!!」

ティアは悲鳴を上げながらカエル肉を次々と放り投げっていく。再びあのシニールな絵面が出来上がった。

「待たんかiiiiiiii!!食べ物粗末にしちやいけねえっっておばあちゃんも言っただじゃねえか!!」

「それは男がやつちやいけない事だろうか!!」

そして2人は、まるで子供のようにな毛な言い争いを始めた。
そんな光景を見て、ユリエールは思わず吹き出して笑ってしまった。

「わらった!!」

すると、ユイの明るい声が響く。

見ると、ユイとレイが明るい笑顔を浮かべながらユリエールを見つめている。

「おねえちゃん、はじめてわらった!!」

そう言つて笑顔を向けるレイ。

一瞬呆気にとられていたユリエールだったが、直ぐにまた優しげな笑みを2人に向ける。

それを見てレイとユイは今までで一番の笑顔を見せた。

そんな2人を見て、先程までくだらない争いを繰り広げていた4人の顔にも自然と笑みが浮かんでいた。

「じゃあ、行きましようか」

アスナがユイの手を引き、一行は歩き出す。

更に奥へ進むと十字路が見え、そしてその先に明るい光が見えた。
安全エリアだ。

「お？奥の方にプレイヤーがいやがるぜ」

索敵スキルを使ったジェネシスがそう告げた瞬間、ユリエールは目を見開き、

「シンカー!!」

逸る気持ちを抑えきれずに走り出した。

ジェネシス達はユリエールを追うように走り出す。

「ユリエール!」

奥の安全地帯から1人の男性が手を振って叫ぶ。

「シンカー!」

ユリエールは笑顔で手を振りながら叫び返す。

「来ちゃダメだ!!その通路には——!!」

だがシンカーがそう叫んだ直後、ジェネシスの視界の右側に赤いカーソルと、『The Fatal Scythes』というモンス

ター名が表示された。

その瞬間、ジエネシスと同じくそれに気づいたキリトがA G Iを全開にして駆け出す。

「駄目!!ユリエールさん、戻ってー!!」

ユイを背負って走るアスナが叫んだ。

だが、ユリエールは聞こえていないのか止まる事なく走り続ける。

ユリエールが十字路に差し掛かった瞬間、右側の通路から巨大な鎌が出現した。

それがユリエールに向けて振り下ろされる直前にキリトが彼女を抱きかかえるようにして伏せ、彼らを庇うようにジエネシスが前に出て、両手剣でその鎌の軌道を逸らした。

鎌は両手剣に阻まれ、ジエネシスの数センチ横を通過し地面を抉りとった。

そして鎌を持ったモンスターは左側の通路へと姿を消し、ジエネシスとキリトはそれを追いかける。

一体何が起きたのか理解できていない様子のユリエールに、アスナとティアはユイとレイを下ろし、

「ユリエールさん、この娘達を連れて安全エリアに」

ユリエールは一瞬戸惑った様子だったが、今の状況をいち早く整理し、アスナの言葉に頷いてユイとレイの手を引き安全エリアへと駆け出す。

当のユイとレイは不安そうな目でアスナとティアを見つめていた。

アスナとティアの2人は腰からそれぞれ愛剣を引き抜き、キリトとジエネシスの元へと駆けつけた。

彼らの前に立ちはだかるのは、ボロボロのローブをまとった骸骨。

その手にある大鎌から、死神のイメージをそのまま具現化したような外見のモンスターだった。

「おまえら、今すぐユイとレイを連れて逃げろ」

ジエネシスが振り返ることなくアスナとティアにそう告げる。

彼女達が疑問符を浮かべると、

「こいつ、やばい……俺たちの識別スキルでも詳細が見えない。多分

九十層クラスだ。

俺たちが時間を稼ぐから、早く逃げろ！」

キリトが目の前の敵を見据えながらそう告げた。

「そんな……2人も一緒に」

「後から行くからさっさと行け!!」

ティアの言葉にジエネシスは振り返ることなくそう言った。
だが、

「ユリエールさん、ユイとレイを頼みます！」

ティアは安全地帯にいるユリエールに向けてそう叫んだ。

「いけない！そんな事……」

「早く!!」

ユリエールが反論する前にアスナが叫んだ。

「ママ……!」

ユイとレイは不安げな顔でアスナとティアを見つめ、それに対して彼女達は笑顔で頷き、ジエネシス達の元へと走る。

「……何で逃げねえんだよ?」

ジエネシスがとなり立つたティアに尋ねる。

「言っただでしょ?最後まで一緒にいるって」

ティアはそれに対して不敵な笑みを浮かべながら返した。

「……だったな」

ジエネシスも軽く笑って返した。

彼らがそうやり取りした後、死神は大鎌を振り上げて突進してきた。
た。

キリトが左右の剣を交差させ、アスナがその後ろに回り込んで細剣の刃を合わせる。

そしてジエネシスは大剣を盾のように前に向け、ティアはその後ろに隠れる。

瞬間、死神の鎌が勢いよく振り下ろされた。

四人は防御していたにも関わらず、凄まじい衝撃音とともに天井へ吹き飛ばされた。

地面に勢いよく叩きつけられ、四人は床に崩れ落ちる。

飛びそうになる意識を何とか保ち、ティアは自分とジエネシスのHPを確認する。

満タンだったはずのHPは既にイエローゾーンになっており、ジエネシスに至ったのはレッドゾーンに達している。

「くそっ……たれが……!」

ジエネシスがそう毒づきながらも何とか立ち上がろうとするが、体に力が入らず中々起き上がれない。

それはどうやらキリトも同じようで、そんな彼らにとどめを刺そうと死神はゆっくりと近づいてくる。

しかしその時だった。

彼らの目の前に、ふわりと棚引く黒と白の長髪が目飛び込んできた。

そこに居たのは、安全地帯にいたはずのユイとレイ。

「おい馬鹿! 何やってんだ!!」

「早く逃げろ!!」

「ユイちゃん!」

「レイっ!!」

四人は愛娘の危機に立ち上がろうと必死に力を入れる。

その間にも、死神は二人の小さな少女の体を切り裂かんと鎌を振り上げる。

「……大丈夫だよ」

「ここは私達に任せて。パパ、ママ」

しかし返ってきたのは、ユイとレイの言葉。

そこには先程までの幼さは無く、どこか知的な声に聞こえた。

そしてそこへ振り下ろされる大鎌。

それは二人の体を真っ二つに——切り裂くことは無かった。

鎌は紫の障壁に阻まれ、そして鎌を死神ごと大きく弾く。

アスナとティアは何が起きたのか訳がわからなかったが、ふと目に入ったユイとレイの頭上にあるシステム表示を見て目を見開く。

《Immortal Object》

それは、普通のプレイヤーが持っていることはまずあり得ない、システムの不死存在を表すメッセージ。

直後、二人の衣装はティアとアスナが作った可愛らしい服から、出会った直後の白いワンピース姿に変わった。

「ユイ、ここは私がやるよ」

その表示が消えた直後、レイはそう言いながら一步前に出た。

「分かった。お願いしますね——お姉ちゃん」

ユイは頷いてそう言うと、数歩後ろに交代する。

レイの身体が不可思議な力で宙に浮き上がり、やがて死神の目線と同じ高さまで浮上する。

そしてレイは、右手をゆっくり死神の方へ差し出す。

その瞬間、レイの手のひらから赤い炎が巻き起こった。

その炎はレイの手に収束していき、やがて一つの剣を形取った。

それは、レイのような小さな少女が持つにはあまりにも大きすぎる剣。しかしレイはそれを難なく持ち上げ、弧を描くようにゆっくりと回し、頭上に構える。

そして左手を添えると、勢いよく死神へ振り下ろした。

死神は鎌でそれを防ぐが、レイは鎌ごと死神を両断した。

直後、巨大な炎が死神を包んでいき、やがて大きな火の玉となった。

死神はそこで最期の段末をあげると消滅してしまった。

「レイ……お前……」

そこで漸く立ち上がることが出来たジェネシス達は、ユイとレイの小さな背中を見つめていた。

「……ごめんさい、パパ……ママ……」

「全部、思い出したよ……」

そう言いながら、二人の少女は振り返る。

その両目に、涙を溜めながら——。

場所は変わって、安全エリア。

ここは完全なる正方形の部屋。部屋には特に装飾などは施されておらず、ただ真っ白な壁と床があり、部屋の真ん中に黒い長方形の石が置かれているだけのシンプルな部屋だ。

ユイとレイの二人はその黒い石に座り、ジェネシス達四人がそれに向かい合うように並んで立つ。

「ユイちゃん、レイちゃん。記憶が戻ったって、本当なの……?」

沈黙を破るかのように、アスナが切り出す。

「はい……」

レイとユイは頷き、そしてレイがゆっくりと語り出した。

「《ソードアート・オンライン》という名のこの世界は、一つのシステムによって支配されています。システムの名は『カーディナル』。人間の制御を必要としないこのシステムが、SAOのバランスを自らの思考・判断でコントロールしているんです。モンスター、NPC、アイテムや通貨の出現率、そして……プレイヤーのメンタルケアすらも、カーディナルはプログラムで管理しようと考えたんです」

レイはそこまで言い終えると一度目を伏せ、

「私達の正体は、《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》。私は、9人のMHCPを管理する者として作られた試作0号、コードネーム『レイ』です」

「そして私が、MHCP試作一号『ユイ』です」

告げられた言葉に、四人は息を呑んだ。

「プログラム……AIだ、って言うのか……?!」

ティアが信じられない、と言う様子で呟いた。

何故なら、プログラムというには彼女達はあまりにも人間らしくかつだからだ。

「プレイヤーに違和感を感じさせないよう、私達には感情模倣機能が

組み込まれています……偽物なんです、この涙も……っ」

そう言うユイの目からは涙が頬を伝っていた。

それらは全て光の粒子となって消えていく。

「でも、どうして記憶が無かったの……？」

アスナがそう問いかける。

その問いに、レイが答えた。

「……二年前、このSAOの正式サービスが始まったあの日、カーディナルは何故か私に、プレイヤーに対する一切の接触を禁じました。

カーディナルにその理由を問いかけましたが、命令が下されて以降カーディナルからの連絡は来ず、止む無く私は9人の『妹』達に、カーディナルから下された指令を伝達。

そしてそれ以降私達はプレイヤー達のメンタル状態のモニタリングを続けたんです」

レイの説明に、ユイが繋げる。

「状況は……はつきり言っただけで最悪でした。恐怖、憤怒、絶望といった負の感情に支配された人々……中には狂気に陥る人まで居ました。

本来なら、このような状況に私達が出向かなければならない……なのにプレイヤーと触れ合うことが出来ない……」

私達は徐々にエラーを蓄積し崩壊していきました」

レイとユイの口から語られていく真実。

彼女達の役割を果たそうにもそれが出来ないという矛盾で思考回路に負荷がかかってしまった結果、記憶の欠落という事態が起きたのだろう。

「ただある日、他のプレイヤーとは違うメンタルパラメータを持つ4名の男女がいることに気づいたんです。

そこにあつたのは負の感情などではなく、喜びや安らぎ、友情と愛情、希望と信頼……でも、それだけじゃない。

私達はあなた方に少しでも近づきたくて……MHCPの管理者権限を使って、その時唯一残っていたユイを連れ出して、フィールドを彷徨いました」

「そうか……だからあの二十二層の森に……」

キリトが納得したように頷く。

それに対してユイも頷き、

「その通りです……私達、皆さんにどうしてもお会いしたかったんです……おかしいですよ？ 私達、只のプログラムなのに……」

両目から涙を流してそう言った。

するとジエネシスがユイとレイの元に歩み寄り、

「バカやろう、てめえらが只のプログラムな訳があるか。

ユイ、レイ。てめえらはもうシステムに操られるだけのプログラムなんかじゃねえよ」

二人の頭を優しく撫でながら言った。

「ああ、その通りだ。君達ならもう、自分の望みを言えるはずだよ。ユイ、レイ、言つてごらん？ 君たちの望みはなんだい？」

キリトもジエネシスの隣まで歩いて行き、ユイとレイの目線に合わせて優しい口調で問いかけた。

問われたユイとレイは一瞬戸惑ったような表情を浮かべていたが、

「私は……私は、パパとママと、ずっと一緒にいたいです……！」

「私も……私もですつ、パパ、ママ……！」

やがて二人は、両手を目一杯伸ばしてそう訴えた。

そんな彼女達を見て、ティアとアスナは居ても立っても居られず、娘の元へ駆け寄りその小さな体を優しく抱きしめた。

「私も……ずっと一緒にいたい……ううん、ずっと一緒にだよ、レイ」

「そうだよ、私達はもう、家族なんだから……ユイちゃん……」

涙を流して優しく撫でながら言うティアとアスナ。

「ああ……ユイはもう、俺たちの娘だ」

キリトがアスナとユイを優しく抱きとめて言った。

ジエネシスはと言うと、何も言わずに黙ってレイの頭を撫でていく。

「ごめんなさい……でも、もう遅いんです……」

しかし思わぬ言葉が告げられ、四人は目を見開いた。

「遅いって……なんで……？」

ティアが動揺しながら尋ねると、レイが自分の座っている黒石を見

つめ、

「これは、GMがカーディナルに緊急アクセスできるよう設置されたコンソールです。私は先程、これを使ってGM権限を発動しあのコンソールを消去したのですが……それと同時に、私達がカーディナルの命令に違反してプレイヤーの元に赴いたことが検知されました」

「現在、私達のプログラムがカーディナルによってチエックされています。命令に違反した私達はカーディナルにとっての異物です。間もなく、消去が始まるでしょう……」

そう言葉を紡いだ。

「そんな……何とかならないのか?!」

キリトが叫ぶが、ユイとレイは首を横に振る。

「パパ……ママ……これでお別れです」

レイは両目から涙を流してそう言った。

「そんな……そんなの嫌!これからじゃない!私達、これからいっぱい楽しい思い出を作って、仲良く暮らそうって……!!!」

ティアは悲痛な叫びを上げながらレイを抱きしめる。

「ごめんなさい……短い間でしたが……私、パパとママの家族になれて、幸せでした」

ユイも両目から涙を溢れさせてそう言った。

「嫌!そんなの嫌よ!!せつかく家族になれたのに!こんなお別れなんて……行かないでよユイちゃん!!」

アスナもユイを抱きしめながら叫んだ。

「ありがとう……でも、もうどうにもならないんです……」

レイは声を震わせながらそう言った。

「いや、そんな訳ねえだろ」

だがその時、ジェネシスが淡々と告げた。

「なあレイ、このコンソールってまだ使えるのか?」

ジェネシスがそう問いかけると、レイは涙を拭いながら

「えと……はい。このコンソールは、起動から約十分は使用可能です」

そう答えると、ジェネシスは「そうか」と頷き、徐にコンソールに現れたキーボードをタップし始める。

「ジェネシス……お前、まさか……?!」

キリトはジェネシスの行動の真意を悟り、目を見開くとジェネシスはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、

「そのまさかよ。今ならこのGM権限でシステムに割り込んで、ユイとレイをカーディナルから切り離せるんじゃないやねえかってな」

そう言うのと、皆は目を見開いた。

そしてキーボードをタップして行くと、システム画面が表示され、ダウンロードゲージが現れた。

そして、100%になった瞬間、ユイとレイの身が光始めた。

「パパ……!」

「ユイとレイのデータは、俺とキリトのナーブギアのローカルメモリに保存されるようにしておいた。

この世界で実体として存在するのはもう出来ねえが、消去は免れたな」

「じゃあ、ユイちゃんとレイちゃんは……!」

「このゲームが終わっても、また会えるってことさ」

ジェネシスがそう告げると、皆は歓喜の表情を浮かべた。

「ユイちゃん……また、また会おうね……!」

「ああ、必ず会おう……ユイ!」

「はい……パパ、ママ……!」

その言葉を最後に、ユイの身体は粒子となり、そして水晶のように輝く涙石となった。

「パパ……本当に、ありがとう……!」

「ああ。次は現実で会おうぜ、レイ」

「少しの間、待っていてくれ。すぐに迎えに行くから」

そしてレイも、紅の光を放つ涙石に姿を変えた。

こうして、ジェネシス達四人はそれぞれの娘と一時的な別れをする事になった。

だが、ユイとレイとの再会は思わぬ形で訪れることを、この時彼らは知る由も無かった――。

二十話 奈落の淵

「偵察隊が……全滅?!」

キリトは思わずそう叫んだ。

ここは五十五層グランザムにある血盟騎士団本部。

そしてその最上階にある会議室に、四天王の四人は集められていた。

休暇中だった彼らに突如として送られた緊急招集。東の間の休息は終わりを告げ、彼らは止む無く招集者であるヒースクリフの元へ赴いた。

そしてそこで告げられた、衝撃の報告。

「昨日の事だ。迷宮区のマップピング自体は、幸い犠牲者を出さずに終了させる事が出来た。」

だが、ボス戦はかなりの苦戦が予想された」

ヒースクリフの言葉は、ジエネシスを始め多くの攻略組のメンバー達が予想していた事だった。

百層からなるアインクラッドは、その4分の1である二十五層・五十層をクォーター・ポイントと呼ばれ、そのボスはそれまでのボスをはるかに凌駕する難敵となっていた。

そして今回の七十五層。これもまた、クォーター・ポイントである為、かなりの難敵が配置されていることは容易く予想できた。

そこで、来たるボス戦に向け、血盟騎士団を始め5ギルド合同の計20名を七十五層の迷宮区に送り込んだ。

偵察は慎重を期して行われ、前衛10人・後衛10人の構成でボス部屋に到達。

しかし前衛の10人が部屋に入った瞬間、扉が閉じてしまったそうだ。扉はいかなる行為でも開く事が出来ず、そのまま五分が経過した後によりやく開いたそうだ。

だが……

「部屋には何も無かった。先に入った10人も、ボスの姿も消えていたそうだ。」

念のため、黒鉄宮にある石碑を確認しに行つたが……」
ヒースクリフはそこで目を伏せ、首を振つた。

つまり、偵察隊の10名は文字通り全滅したのである。

「10人も……どうしてそんな事が……」

「結晶無効化エリアか……」

悲痛なアスナの呟きに答えるようにキリトが言った。

ヒースクリフもそれに頷き、

「おそらく……いや、そうとしか考えられない、と言うべきだ。アスナ君の報告では、七十四層もそうだったと言う事だから、今後全てのボス部屋も結晶無効化エリアだと考えられる」

「そんな……」

抑揚なく告げられるヒースクリフの言葉に、ティアが両手で口元を押さえて言った。

結晶が使えないとなると、いざという時脱出もできず、犠牲者がより増えることになるだろう。

「いよいよ、本格的なデスゲームになつてきたつてわけだ」

「だからと言って、攻略を諦めることは出来ない」

ジェネシスが嘆息しながら言うのと、ヒースクリフは真鍮色の瞳で四人を見つめながらきつぱりと言つた。

「脱出はおろか、退却も不可能となれば、我々は統制の取れる範囲で、可能な限りの大部隊を持ってボス攻略にあたるしかない……：休暇中の君たちを招集するのは本意では無かったが、どうか了解してほしい」

ヒースクリフの言葉に対し、キリトは肩をすくめて答えた。

「協力はさせてもらいますよ。だが、俺にとっての最優先事項はアスナの安全だ。もし危険な状況になったら、俺は何よりもまず彼女を守ります」

そしてジェネシスもそれに続く。

「俺も右に同じだ。俺にとって大事なのは、ティアだ。

例え10人が死ぬことになろうが、俺はそれでもこいつだけを守らせてもらう」

二人の言葉を聞き、ヒースクリフはそれまでの無表情から満足げな笑みに変え、

「何かを守ろうとする意思は強いものだ。君たちの勇戦を期待しているよ。」

では、攻略開始は三時間後。七十五層コリニアの転移門広場に集合してくれたまえ。では、解散」

ヒースクリフはそう締めくくると、隣に座っていた幹部達を引き連れて部屋を後にしていった。

部屋には四人が残された。

重苦しい空気が部屋を包む中、

「…なあ、アスナ。ジェネシスにティアも、聞いてほしい……」

キリトが険しい表情で切り出した。

「だが断る」

しかしそれに対してジェネシスが強烈なチョップをキリトの頭に命中させた。

「オイイイ!!まだ何も言つてねえだろうが!!」

キリトが頭を押さえながら叫んだ。

「てめーの言いたい事なんざ手取るように分かんだよバーロー。大方、『お前ら3人はここで残つててくれ』とか言うつもりだったんだろ？」

「ぐっ……」

キリトは凶星だったのか、唇を固く結んで黙り込んだ。

「キリト君、そんな事言うつもりだったの?!」

「全く、呆れたやつだな」

アスナが目を見開きながら問い詰め、ティアは呆れた顔で嘆息しながら言った。

「だ、だって…今回のボス戦は、ただでさえクォーター・ポイントな上に、転移結晶も使えないんだ!何が起きるか分からないんだぞ?!」

俺は、死んでほしくないんだよ……アスナにも……お前らにも……!

キリトは悲痛な顔で訴えかけた。

それに対してジェネシスは「はあく」とため息をつき、

「なんで俺らが死ぬことになってんだよコノヤロー」

キリトに向かってそう言つてのけた。

キリトはその言葉でハツと目を見開いた。

「死なねーよ、俺たちは。今までもそうだっただろうがよ。てめーが俺たちを守ってきたように、俺たちだっててめーを守ってきたんだ。今更こんなところで死ぬわけがあるかよ」

そしてアスナもそれに続く。

「キリトくん、約束したでしょ？ 私達、最後まで一緒にいるって。私の命は、もうキリトくんのもの。だから私は、君のためにこの命を使うよ」

ティアもそれに同調し、

「キリト、お前は自分が死んだら私たちがどんな思いをするか考えたか？ 仮にお前が犠牲になって私たちを守ったとしても、そこに私たちの幸せはない。お前は自分の命を軽視しすぎだ。」

お前のその命は、もうお前だけのためにあるんじゃないぞ」

最後にジェネシスがキリトの右肩を叩き、

「分かったら二度とあんな事口にすんなよ？」

俺たちはな、他人を生かす為に戦つてんじやねえ。自分が生き残つて、現実に帰る為に戦つてんだ。てめーに救われなきゃならねえ程俺たちは弱くねえよ。

俺たち全員で戦つて、全員で帰るんだよバカヤロー」

キリトはそれまで呆気にとられた顔をしていたが、すぐにふっと軽く笑つて

「ああ…そうだな、ごめん。俺、すっかり弱気になってたよ……けどお陰で目が覚めた。」

生きて帰ろう、俺たちみんなだ」

そして、吹っ切れた笑顔できっぱりとそう言った。

—————

七十五層・コリニア

転移門が青白く光り、四人のプレイヤーが姿を現す。

二人の黒と二人の白。男女二人組。

言わずもがな、ジエネシス達だ。

広場には既にこのボス戦に参加するであろう多くのプレイヤー達が集まっていた。

彼らはジエネシス達に気づくと一礼したり、中にはギルド形式の敬礼までしてくる者もいる。

彼ら四人が広場の中心まで歩いていると、

「よう、待ってたぜ！」

後ろから陽気な男達の声がしたので振り返ると、そこには悪趣味なバンドナを巻いた侍風の男性と、褐色肌の重戦士が。

「…えっと、どちら様？」

ジエネシスがとぼけた顔で尋ねる。

「オiiiiiiii!!ジエネシスでめえ、わざと言ってるだろ?!」

クラインがジエネシスの反応に胸ぐらを掴んで叫んだ。

「オイオイ落ち着けよ、ちよつとしたボス戦前ジョークってやつだよ。だからもういい加減離してくれよラクス」

「誰がプラントの歌姫じゃコラア!!!たしかに“クライン”だけどそつちじゃねえよ!!!」

ジエネシスとクラインがそんなやり取りをしているのを余所に、

「お前も来てたんだな、エギル」

「つたりめーだろ。こちとら商売を投げ出して参戦するんだぜ?この無私無欲の精神を理解できないかねえ?」

エギルの言葉にキリトは悪戯な笑みを浮かべ、

「“無私無欲”、ねえ……なら、お前は戦利品の分配から除外していいよな?」

「あ、いや!それはだなあ……」

キリトの言葉にエギルは慌てて言い淀んだ。

それを見て、アスナとティアは思わず吹き出してしまう。
そしてそれを中心に、和やかな空気が辺りを包んだ。

しかしそんな和やかムードも、とある人物が現れたことで一瞬で緊張感に変わる。

転移門から現れた5名のプレイヤー。

その真ん中を歩くのは、真紅の甲冑に身を包んだ男、血盟騎士団団長ヒースクリフだ。

ヒースクリフは広場の中央まで行くと、懐から回廊結晶を取り出し、高く掲げる。

「コリドー・オープン」

その瞬間、回廊結晶はガラス片となつて砕け散り、代わりにヒースクリフの目の前に大きな渦を巻く青白い壁が出現した。

「さあ、行こうか」

ヒースクリフは一瞬こちらを振り向いてそう言った後、再び前を向いて先陣を切つてその壁を潜つていった。

彼の配下の四人もそれに続き、ほかのプレイヤー達も次々にその壁を潜つていく。

そしてジェネシスとティアは最後にその壁を通り抜けた。

くぐり抜けた先は七十五層の迷宮区にあるボス部屋の前。

そこはそれまでのゴツゴツした荒削りの壁や道ではなく、透明感のある黒曜石のレンガ作りで構成された空間だった。

「なんだか……嫌な感じがする……」

「奇遇だな……俺もだ」

ティアの呟きにジェネシスも首肯した。

彼らはこれまで七十四にも及ぶボス戦を行ってきた。そしてそれだけの経験を集めれば、目の前にある部屋の主人が持つ力量は自然と推し量られる。

プレイヤー達は各々のメニューから装備品などを確認している。

やがて、ヒースクリフが大きな十字盾を構えて扉の前に立った。

「皆、準備はいいかな？」

今回のボス戦には、事前情報が無い。そのため、我々血盟騎士団が

前衛で攻撃を食い止めるので、その間に可能な限り攻撃パターンを見極め、柔軟に対応して欲しい。

苦しい戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜けられると信じている——解放の日の為に!!!」

ヒースクリフの高らかな叫びに、プレイヤー達から気合の雄叫びが響く。

その間、ジェネシスはただ黙って集中力を高めていた。

「久弥」

不意に、ティアが小さな声で彼の名を呼んだ。

ジェネシスがとなり立つティアの方を向く。

するとティアは彼の顔を両手で抑え、目を閉じてその唇に自分のものを押し当てた。

ほんの数秒の口付けののち、ティアは唇を離し、

「大丈夫だよ。私達ならきつと生き残れる。最後まで一緒にいようね。約束だよ?」

ジェネシスは一瞬呆気にとられていたが、

「はっ……たりめーだ。てめーは絶対に死なせねえよ」

不敵な笑みでティアの頭を撫でた。ティアは満足げな笑顔で愛撫を受けていたが、やがて気持ち切り替えて真剣な表情に変え、左腰から愛刀の《銀牙》を引き抜き、構えた。

それと同時にジェネシスも意識を切り替えてボス戦に向けた緊張感に変え、背中から大剣《アインツレーヴェ》を引き抜く。

やがてヒースクリフが扉を押すと、重々しい音を響かせながら扉が開いていく。扉が開いていくにつれ、ボス戦参加メンバーの間に漂う緊張感のボルテージが上がっていく。

ジェネシスは右隣のクライン、エギルの方を向く。

「一応言つとくが……死ぬんじゃねえぞ?」

「へっ、おめえこそな」

「今回の戦利品で一儲けするまで、死ぬつもりはねえぜ」

そして最後に、キリトの方を向く。

「死ぬなよ……ジェネシス」

キリトがそう言いながら、左拳を突きつける。

「知らねえのか——俺は死なねえ」

ジエネシスが不敵な笑みで返し、右拳を持ち上げる。

そして彼らは、お互いの拳を打ち付けあい、正面に向き直った。

やがて重々しい音が鳴り止み、扉が完全に開かれる。

「戦闘開始!!!」

ヒースクリフの号令を合図に、全プレイヤーが部屋へと突入して行く。

全てのプレイヤーが部屋に入ると、扉は閉じられ消滅した。これで、彼らの退路は完全に絶たれた。ボスを殺すか、彼らが全滅するまで扉が開くことはない。

部屋の中は円形のドーム状だった。

明かりなどはなく、ただ薄暗い空間が広がる。

全プレイヤーが意識を研ぎ澄ませるが、ボスは出現しない。

「何も……起きないぞ?」

1人のプレイヤーが呟く。

だがそんなはずは無い。ティアは少しでも何かしら音をつかもうと全神経を研ぎ澄ませる。

そんな中微かに聞こえた、何かが擦れるような音。

聞くだけでも嫌悪感が湧く嫌な音が聞こえた直後、ティアは絶対的な確信を持って叫んだ。

「上だ!!!」

その叫びでプレイヤー達は一斉に上を向く。

そしてその視線の先に、それはいた。

一言で言うならば、それは骸骨の百足。

無数の夥しい数の足、頭部は人型に見えるが顎は二対の禍々しい形をしており、胴から生える腕の先には鋭い鎌が生えている。

《The Skullreaper》

骸骨の狩手を意味するモンスター名が表示されると同時に、五本のHPバーが現れ真下に勢いよく降下してきた。

「固まるな!距離を取れ!!!」

ヒースクリフが叫び、ジエネシスをはじめとしたプレイヤー達は咄嗟に中央から飛び退く。

だが反応が遅れたのか、あるいは恐怖に囚われた数名のプレイヤー達は上を見上げたまま動けずにいた。

「こつちだー！走れ!!!」

キリトが叫んで我に返ったプレイヤー達はようやく走り始めた。

だが直後、骸骨の狩手は彼らの背後に着地し、その衝撃で彼らの足が止まってしまった。

そして足を止めてしまった彼らに、すかさず巨大な鎌が横薙ぎに振るわれた。

鋭い刃は彼らの胸を切り裂き、宙へ吹き飛ばす。

ティアとアスナが剣を逆手に持って彼らを受け止めようと手を伸ばすが、手が届く直前に彼らはその身をガラス片に変えて消滅してしまった。

「嘘だろ……」

これには流石のジエネシスも動揺を隠せなかった。

「い、一撃で……?!」

キリトも掠れた声で口を開く。

この世界は基本的にレベルさえ上げておけば死にくくなる。

そして今この場にいるのは皆、安全マージンが十分にあるもの達の中でも最高レベルの者たちばかりだ。

にもかかわらず、そんな彼らがたった一撃でその命を散らすなど、無茶苦茶にも程があるというものだ。

驚愕するジエネシス達だったが、骸骨の狩手がその攻撃の手を緩めることはない。

次なる標的を見定めた狩手は、その巨体に似合わぬスピードでフィールドを駆け回る。

そして振り上げられた鎌が、プレイヤーに向けて振り下ろされる。しかしその攻撃は寸前のところで阻まれた。

ヒースクリフがプレイヤーの前に立ち、その盾で鎌を受け止めたのだ。

その間にプレイヤーは後退するが、狩手はすかさず反対側の鎌を伸ばして彼を切り裂く。

その攻撃を受けたプレイヤーは、先程と同じく一瞬でそのHPが消し飛ばされ消滅した。

そのまま猛スピードでフロアを駆け回る狩手。

「まともに近づくんことも出来ねえぞ!!」

エギルが歯ぎしりしながら叫ぶ。

そして狩手は、次なる獲物に向けて無慈悲にその鎌を振り上げる。

「下がれえ!!」

そこへジェネシスが飛び込み、鎌を大剣で受け止めた。

その瞬間、フロア全体に轟く金属音と火花が散り、凄まじい衝撃がジェネシスを襲う。

「く……おおっ……!」

だが、両手剣使いでパワー型であるジェネシスを以ってしても、ボスの一撃は伊達ではなくジリジリとギラつく鎌の刃がジェネシスの右肩に迫る。

「(なんて重さだ……このままじゃ、やべえっ……!)」

鎌による攻撃の圧に必死に抗うジェネシスに向け、狩手は反対側の鎌をジェネシスに向け振り下ろす。

しかしそれはヒースクリフの盾によって防がれた。

そしてその直後、赤い一閃がジェネシスの頭上を通過し、鎌を弾き飛ばした。

見えたのは黒い片手剣に漆黒のロングコート。

キリトだ。彼が片手剣スキル《ヴォーパル・ストライク》で鎌を押し出したのだ。

「二人同時になら止められる!俺たちで止めるぞ!!」

「ああ……行くぜ!!」

そしてキリト・ジェネシス・ヒースクリフの3人は狩手の正面に立った。

防御型のヒースクリフ、パワー型のジェネシス、そしてバランス型のキリトで鎌を食い止めるのだ。

「攻略組に告ぐ!!」

その時、ヒースクリフが右手の剣を高く掲げて叫んだ。

「ボスの鎌は我ら3人で食い止めるーこれより全ての者はボスの側面から攻撃せよ!!!」

その叫びの直後、ボスは再び動き出した。

ヒースクリフがその鎌を盾でガードし、ジエネシスとキリトが大剣と双剣で鎌の軌道を逸らして行く。

「よし……行くぞ!!!」

それを見てティアが刀を構えて走り出す。

「はああああーっ!!」

「行くぞおお!!」

アスナ、エギルに続き、生き残ったプレイヤー達は己を奮い立たせて武器を構えて突撃して行く。

数発の攻撃がボスの身体に命中し、HPがようやく僅かに減少する。

しかしボスは反撃とばかりに、尻尾を思い切り振り上げる。

「伏せろ!!!」

ティアは咄嗟にアスナを抱き寄せ、刀を逆手に持ち替えて防御体制をとる。

そこへ尻尾が勢いよく振り下ろされた。

「ティアアアアアア!!」

「アスナアアアアア!!」

その光景を見ていたジエネシスとキリトが思わず叫んだ。煙が晴れると、そこにははっきりティアとアスナがいた。

ほっと胸をなでおろしたジエネシスとキリトだったが、それでも今の攻撃で2名が犠牲になった。

ボスは上体を仰げ反らせ雄叫びを上げる。それはまるで、お前達には勝てない、と言っているかのようにも見える。

それを見て思わず呆然とするキリト。

そんな彼に、ジエネシスは喝を入れた。

「ボサツとすんな!!まだ終わってねえ…諦めんじゃねえ!!!」

「っ…ああ、わかってる!!」

それによつてもう一度気合を入れ直したキリトは、双剣を構えてもう一度ボスに駆け出した。

絶え間なく振り続けられる死の鎌を、キリトとジエネシス、ヒースクリフの3人は全力で防いでいく。

その間、彼らの努力を無駄にさせないために、アスナとティアを始めとした多くのプレイヤーが、恐怖を押し殺してボスに飛びかかる。

ジエネシスとキリトは、もう何も考えずにひたすらボスの鎌を止め続けた。

「おおおおおおおーっ!!!」

紅と青の剣戟が、ボスの鎌と火花を散らして衝突した。

二十一話 終焉の刻

骸骨の狩手との戦いは、およそ一時間にも及んだ。

ボスの最後のHPバーが、ついに残り数ドットまで達した。

「全員、突撃!!」

ヒースクリフの号令で、皆は最後の力を振り絞ってボスに飛びかかった。

ボスにはもうその鎌を振り上げる余力は残されておらず、ただ大人しくプレイヤー達の攻撃を受け続けている。

無数の斬撃、刺突がボスに打ち込まれ、漸くボスのHPは全て消し飛ばされた。

『キシヤアアアアアア!!』

耳をつんざくような断末の声をあげ、そして骸骨の狩手はその身体をガラス片に変えて消滅した。

直後に『Congratulations!』という祝福のシステムメッセージが表示され、無限に続くかのように思えたボス戦が終わりを迎えたことを告げる。

だが、それを見て喜ぶものなどいない。

皆限界だったのか、地面に座り込むものがほとんどで、中には仰向けになって寝転ぶものもいる。

ジェネシスもその一人で、その隣にはティアが所謂女の子座りでジェネシスの肩にその首を預けている。

「今日は……膝枕はナシか?」

ジェネシスが力ない声で尋ねると、

「ごめんね……してあげたいのは山々だけど……今日はムリかな……」

ティアは申し訳なさそうに眉を八の字に変えて言った。

「……だろうな。お疲れさん」

ジェネシスは軽く笑いながらいうと、左手でティアの頭を優しく撫でた。

「何人死んだ……？」

するとクラインが低い声で何処と無く尋ねる。

ジエネシスがメニューからマップを表示し、そこにある赤い点の数を数える。

最初この部屋に来たときにいたのは30人。しかし現在残っているプレイヤーの数は16人。

つまり……

「14人死んだ……」

ジエネシスは自分でも信じ難かった。

ここに集まったプレイヤーは、現在アインクラッドに生き残っている6000人の中でも選りすぐりのトッププレイヤー達ばかりだ。

たしかに今回は離脱も緊急脱出も不可能な状況ではあったが、それを含んでも多すぎる犠牲者だ。

「冗談だろ……」

「あと二十五層もあるんだぜ……」

「俺たちは、本当に天辺まで辿り着けんのか……？」

犠牲者の数に戦慄したキリト、クライン、エギルの3人が掠れた声で呟く。ほかのプレイヤー達の間でもざわめきが聞こえてくる。

ジエネシスは何も言わずに黙って周りを見渡していた。

ふと、視界にひとりの人物が目に入る。紅衣の甲冑を身につけた男。ヒースクリフだ。

神聖剣の使い手で防御力に定評のある彼も、流石に無傷では無かったようだ。HPも大きく削られている。まあ、イエローゾーンの一步手前まで、だが。

彼は他の者達が疲れ切って地面に倒れ伏す中、ただひとり立ち続けていた。あれだけの激闘の中、しかもジエネシスとキリトの二人掛かりでやっと対処出来たボスの鎌を、あの男は最後まで一人で捌き切った。

しかしジエネシスが何より気になるのは、彼の表情だ。

「(なんつー顔してやがる……)」

その表情は、まるで疲れ切った攻略組達を慈しむような……

「……いや、違う」

そこまで考えると、ジェネシスは首を振ってその考えを否定した。確かにヒースクリフの目には慈悲の色が見える。だが何かが違う。あれは一プレイヤーの出来る表情では無い。

まるで別次元の高さから見下ろしているような表情だ。決して自分たちが届くことのない、途方もない高さ。

そう、例えるなら彼の表情は……遙か高みから慈悲を垂れる神の顔。

その時、ジェネシスの中で次々と疑念が浮かんでくる。

——そう言えばあの男は、最強ギルドのリーダーでありながら自ら指示を出したり自分から動くことは無かった。あれは部下の者達を信頼していたからなのか？

——NPCやAIでも無いのにさつきまでの激闘を経て疲れ無いのは何故だ？

——彼のHPがイエローゾーンまで減らないのは本当に神聖剣によるものなのか？

するとジェネシスは、ここで意図せず彼とのデュエルを思い出していた。

自分の攻撃は立て続けにあの盾に阻まれたが、何とか仕留められる所まで持っていった。

しかし彼が最後に見せたあの超反応。ヒースクリフ以外の、全ての時間が止まったような気味の悪い感覚を——。

「っ?!」

その瞬間、ジェネシスは全身が一気に凍りつく感覚を覚えた。

次々に浮かんできた疑念。それらが点と点を結んで行き、やがて一つの仮定を生み出す。

——彼が今まで自分から動かなかつたのは、部下を信頼していたからなどでは無い。自分がこの世界を知りすぎているから自制していたのでは無いか。

——先程の激闘を経ても立っっていないのは、単にこの戦いを予測していたからでは無いか。

——HPがイエローゾーンまで減らないのは、自分が死なないようにあらかじめ細工していたからでは無いか。

そしてもしそうなら、ジェネシスとのデュエルで終盤に見せたあの動きの理由は——

その時、ジェネシスの右手は勝手に動き、地面に転がっていた大剣の柄を握っていた。

ジェネシスの立てた仮説を証明する方法ならある。

もしこれが間違いなら、ジェネシスが一気に犯罪者扱いとなり、容赦のない非難や制裁を受けることになるだろう。

だが、今のジェネシスには、確信に近いものがあつた。

ヒースクリフに気づかれないよう、静かに腰を上げる。

すると、隣の方で微かに物音がした。

見ると、そこには同じように剣を携えたキリトが立ち上がるうろたえていた。おそらく、ジェネシスと同じような仮説を思い立ち、ここで証明するつもりなのだろう。

キリトはジェネシスの視線に気づくと、静かに頷いた。

先ずはキリトが走り出す。

地面ギリギリの高さまで姿勢を低くして走り、ヒースクリフへ急接近する。

そしてそれに気づいたヒースクリフに向けて、キリトは片手剣ソードスキル『レイジスパイク』を放った。

切っ先はヒースクリフの突き出した盾によって阻まれた。

だがそれで安堵のため息をつくヒースクリフの背後から、高く飛び上がって勢いよく大剣を振り下ろすジェネシスが。

「おおおおお!!」

両手剣ソードスキル『アバランシユ』でヒースクリフの頭部から叩き斬らんと剣を振り下ろす。

そこで漸く気づいたヒースクリフが慌てて盾を構えようとするが、もう遅い。

ジェネシスの大剣の刃は、ヒースクリフの頭部を両断——
出来なかった。

火花と金属音を散らし、ジェネシスの大剣は止められる。

大剣がヒースクリフを捉える直前、その刃が紫の障壁によって阻まれたのだ。

その後、ヒースクリフの頭頂部に紫色のシステムメッセージが表示された。

《Immortal Object》

ジェネシスとキリトはそれを見て目を見開いた。

彼らは一度、それを見たことがある。それは、彼らの愛娘がモンスターに攻撃された時に見た、普通のプレイヤーでは持つことを許されないもの。

《システムの不死》。ヒースクリフは、かつての彼らのデュエルでこれが露見することを恐れたのだ。

「キリト君、何を……」

「おい、お前たち……」

慌てて駆け寄ったアスナとティアだったが、ヒースクリフの頭上にあるものを見て目を見開いた。

プレイヤーたちの間でも、ヒースクリフの頭上に現れたものを見てざわめきが起きている。

ジェネシスとキリトは並んでヒースクリフと対峙するように立ち、剣を鞘に収めた。

「システムの不死……って、どういうことですか……団長……？」

アスナが震えた声で尋ねる。

ヒースクリフは何も言わずに黙って彼らを見据えている。

アスナの問いに答えたのはジェネシスだった。

「見ての通りだ。こいつのHPはどんな事があってもイエローゾーンに入らねえようにシステムに保護されてんだよ。

ま、不死属性なんざNPCでもねえ限り持つことを許されんのは管理者だけだ」

そして、キリトがそれに続く。

「この世界に来てから、ずっと疑問に思っていた事がある……あいつは、どこで俺たちを観察し、この世界を調整しているんだろうってな。

けど、単純な心理を忘れてたよ。どんな子供でも知ってることさ」
そこで一度区切り、

「他人がやってるRPGを、側から眺めることほどつまらないものはない」

そして今度はジエネシスが引き継ぎ、

「まして自分で作ったゲームだ。自分の目で確かめて、やってみたくもなるわな。なあ……《茅場晶彦》さんよお？」

そう告げた。

その瞬間、場のプレイヤー達は皆動揺した。

ヒースクリフは表情を変えずにしばらく黙っていたが、

「……なぜ気づいたのか、参考までに教えてくれるかな？」

キリト、ジエネシスを見つめながら静かに問いかけた。

「……てめえは色々おかしな奴だとは思ってたんだが、決定打になったのはあのデュエルの時さ」

「ああ。あんた俺たちのデュエルの終盤、ありえないくらい速かったからな」

ジエネシス、キリトから返ってきた返答を聞き、ヒースクリフはゆっくり頷きながら、はじめて表情を見せた。そこには苦笑にも似た笑みが浮かんでいる。

「やはりそうか……あれは私にとっても痛恨事だった。君たちの力に想像以上に圧倒され、ついシステムのオーバーアシストを使ってしまったのだよ」

そこまで言うと、未だ状況を飲み込めずにいるプレイヤー達を見回し、ヒースクリフは表情を超然としたものに変え、高らかに宣言した。「確かに私は《茅場晶彦》だ。付け加えるなら、最上層で君たちを待つはずだった最終ボスでもある」

その瞬間、プレイヤー達は信じられないものを見るような目でざわめいた。

アスナは小さくよろめきながらキリトの腕を掴み、ティアは震えた手でジエネシスの腕を掴んだ。

「随分と悪趣味なことだなあ。最強のプレイヤーが転じて最悪のラス

ボスとはよ……てめえ絶対D Sだろ」

ジエネシスは鋭い目つきでヒースクリフを睨みながら言った。「中々良いシナリオだろう？ 本来ならば、九十五層辺りで自らの正体を明かすつもりだったのだが……」

対してヒースクリフ——茅場晶彦は、薄い笑みを浮かべながら肩をすくめてそう言った後、キリトの方に視線を向ける。

「最終的に私の前に立つのは君だと予想していたよ、キリト君。《二刀流》は10種類あるユニークスキルのうち、全プレイヤーの中で最大の反応速度を持つものに与えられ、その者が、魔王に対する勇者の役割を担う筈だった。とは言え、君が《二刀流》スキルを手にすることも、私の正体に気づくだろうという予感もしていたのだがね。

……だが、まさか君まで私の前に立つとは思わなかったよ」

そう言つて茅場は表情を変えずにジエネシスの方を見た。

「ジエネシス君。君は私にとって最大の不確定因子だったよ。ビギナーでありながらキリト君と同等かそれ以上の強さを誇り、更にはユニークスキルまで手にした。

《暗黒剣》は我が《神聖剣》と対を成すスキルで、全プレイヤー中最大級の攻撃力を誇る者に与えられる。

そして……私の中ではそのスキルを持つ者が、魔王の使役する悪魔の役割を担ってもらつつもりだったのだが……まさかその力まで私に牙を向けることになろうとは。いやはや、《暗黒の剣士》とは、よく言つたのもだね。

まあ、このような想定外の事態も、ネットワークRPGの醍醐味と
言うべきかな？」

茅場はそう言いながら肩を竦めジエネシスとキリトの方を見た。

「お……俺たちの忠誠を……希望を……」

よくも……よくも……」

そのとき、茅場の後ろにいた血盟騎士団の幹部が両肩をわなわたと震わせながら剣を握り、

「よくもおおおおー!!!」

飛び上がり、茅場の背後から渾身の斬撃を叩き込もうと剣を振り下

ろす。

だがそれが振り下ろされる直前、茅場は素早く左手を動かし、ウィンドウを素早くタップした。

するとその男は空中で静止し、そのまま地面に落下した。

男のHPバーには黄色い電気マークのようなランプが点滅している。麻痺状態だ。

その後も茅場は次々とマップをタップして行く。

「あつ……キリト、くん……！」

「こ、これは……ジエネシス……！」

次の瞬間、アスナとティアもその場に崩れ落ちるように倒れこむ。ジエネシスとキリトが彼女たちを抱きかかえるように支える。

周りを見ると、ジエネシスとキリト、茅場の3人以外は皆麻痺状態で地面に伏している。

「どう言うつもりだ……この場で全員皆殺しにして隠蔽する気か？」

「まさか！そんな理不尽な真似はしないさ」

キリトの問いに茅場は微笑を浮かべたまま首を横に振った。

「こうなつては致し方無い。予定を変更して、私は最上階にて君たちの到着を待つ事にするよ。ここまで育ててきた血盟騎士団、並びに攻略組の者たちをここで放り出すのは不本意だが……何、君たちなら必ず辿り着けるさ。」

だがその前に……」

すると茅場は、圧倒的な意志力を孕んだ双眸でジエネシスとキリトを見やり、地面に十字盾を勢いよく突き立てた。

「キリト君、そしてジエネシス君。君達には私の正体を看破した報酬を与えなくてはな。チャンスをおあげよう」

「チャンスだと……？」

茅場の言葉にキリトが疑問符を浮かべる。

茅場は微笑を浮かべた表情を全く変えずに、

「君達のうちどちらか一人が、今この場で私と一対一で戦うチャンスだ。無論、不死属性は解除する。」

私に勝てばゲームはクリアされ、生き残った全プレイヤーがこの世

界からログアウト出来る。……どうかな？」

その瞬間、アスナとティアが動かない首を必死に動かし、ジエネシスとキリトの方を見る。

「ダメよキリトくん……今は、今は引いて！」

「アスナの言う通りだ……あいつはお前たちを排除する気だ……ここは引いて、対策を練るべきだ！」

だがその声は二人には届いていなかった。

ジエネシスとキリトの脳裏に浮かぶのは、全てが始まったあの日。

第一層ボス戦が始され、絶望し泣き叫ぶプレイヤー達。

第一層ボス戦で命を散らしたディアベル。

涙を流して消えていった愛娘達。

そして今、さっきのボス戦で無念にも散って行った攻略組のメンバー。

「ふざけるな……！」

「上等じゃねえか。ケリつけようぜ」

キリトとジエネシスが怒気を孕んだ声でそう答えた。

「キリトくん……！」

アスナが悲痛な顔でキリトの名を呼ぶ。

「ごめんな。ここで逃げる訳には行かないんだ……」

キリトはアスナを見下ろし、何とか微笑を浮かべながら言った。

「死ぬつもりじゃ……無いよね？」

「たりめーだ。勝ってこの世界を終わらせてやんよ」

ティアが問いかけると、ジエネシスは不敵な笑みで返した。

「……わかった」

「信じてるからね」

アスナとティアは涙を必死にこらえながら言った。

キリトとジエネシスは、彼女達をゆっくりと黒曜石の床に下ろし、寝かせる。

それを見て茅場は満足げに頷き、

「では、私と戦う相手を決めてくれたまえ」

キリトとジエネシスはお互いを見つめた。

ここで彼と戦えるのは、どちらか一人のみ。

「……ジエネシス、ここは俺に行かせてくれ」

ジエネシスはしばらく黙っていたが、

「ああ、わかった」

「え？以外にあっさりだな……」

ジエネシスの意外な反応に驚くキリト。

本当なら「俺が行く」の言い合いが延々と続くと思っていたからだ。

「まあ、てめーが負けるとは思わねえしな。勝つてこの世界を終わらせて、英雄になれよ、キリト」

ジエネシスは少し笑いながら言った。

「ジエネシス……ああ、分かった」

そう言つてキリトは歩き出す。

「おいキリト！」

するとジエネシスが彼を呼び止めた。

キリトが首だけを後ろに向ける。

「一つアドバイス……」

後方注意な。あと、済まねえ」

「つ、ぐ……?!」

次の瞬間、キリトの身体から力が抜けた。

HPバーを確認すると、そこには麻痺状態のアイコンが。

一体何が……ふとキリトが左を見ると、彼の左肩に小型ナイフが刺

さっていた。おそらく、いや十中八九毒ナイフだ。そして、これを投げたのは……

「ここは俺に任せとけよ」

するとジエネシスがキリトの隣を通り過ぎていく。

「ジエネシス、何でっ……!!!」

キリトは怒りの目でジエネシスを見上げた。

話が違う。ここは自分が行く筈だったのに。

「あいつの神聖剣には、俺の暗黒剣の方が相性がいいんだよ。安心して、絶対に負けねえから」

「お前っ……後で覚えてろよ!!!」

ジエネシスはそれを聞くと苦笑し、背中から大剣を引き抜き茅場の方へと歩いて行く。

「ジエネシス……やめろ!!!」

「ジエネ公——っ!!」

「ジエネシスっ!!」

エギル、クライン、アスナが悲痛な叫びを上げる。

「おいエギル!今まで、剣士クラスのサポートありがとな。てめーが儲けのほとんど全部、中層ゾーンのプレイヤーの育成につき込んだこと、俺たちは知ってたぜ」

ジエネシスが振り返らずに言うと、エギルは目を見開いた。

「クライン!てめーとは第一層からの付き合いだったが……ま、俺みたいなのと仲良くやってくれて、ありがとよ」

「て……てめえジエネ公!礼なんか言ってるじゃねえよ!!!許さねえぞ……ちゃんと向こうで飯でも奢ってくんねえと絶対許さねえからなあ!!」

クラインは涙を流しながら叫んだ。

「オイオイ、いい歳こいた大人がガキに奢らせる気かよ……んま、考えとくわ」

ジエネシスはそう言って笑いかけた。

「アスナ!てめーとも第一層からだったな……色々あったが、キリトと幸せにやれよ」

「ジェネシスっ……ダメよ、そんなのダメよ!!! 貴方が居なくなつて、幸せになんてなれないよお!!」

アスナも驚いた顔をしたあと、両目から涙を流して叫んだ。

ジェネシスはその後、ティアの方を見遣る。

「ティア……」

「許さないよ」

ティアは低い声でそう言った。

「死ぬなんて許さないよ久弥。貴方が居なくなるなんて私信じゃないから」

「はっ、当たり前だ。俺が死ぬわけがねえ……だが、もし万が一……」

「聞こえない!」

ジェネシスの言葉を遮るようにティアは叫んだ。

「何も聞こえないし、聞きたくない……っ、お願いだから……死なないで……!」

ティアは堪え切れなくなったのか、ぽろぽろと涙を流しながら懇願するように言った。

本当ならばジェネシスに抱きついてでも止めたいだろう。それ程までにティアが不安なのは、先ほどジェネシスに対してリアルの名前で呼んだことから伺える。

それでもティアは、そんな不安を押し殺してでも、愛する人が最後の戦いに挑む覚悟を尊重し、彼を送り出した。

ならば、そこまでされたらジェネシスに残された道は一つだけだ。

ジェネシスは彼女に向けて親指を立ててサムズアップした後、今度こそ茅場に向き直った。

「悪いな、随分と待たせちゃった」

「気にすることは無い。私としても、君とここで戦えるのは僥倖というものだよ」

茅場は相変わらず底知れぬ微笑を浮かべたまま言った。

「そりゃどういう意味だ?」

「さっきも言っただろう? 君は私にとつても最大の不確定要素だ。そんな君をここで消すことが出来るのだから」

茅場はそういうと、左手でメニューウィンドウを操作する。

すると、《Changed into mortal object》という不死属性解除を意味するシステムメッセージが表示される、

そして彼は、盾から十字剣を引き抜き構えた。

「あつそ……だが俺も、意地でも勝たせて貰うぜ。」

約束があるからな……!」

ジエネシスは大剣の柄を強く握りしめ、そしてその場から飛び出した。

瞬間、ジエネシスの大剣と茅場の構える盾がぶつかり合い、鋭い金属音と火花が飛び散った。

「おおおおおお!!」

ジエネシスはただ力任せに、己の本能に従って剣を振り続けた。目の前の敵は、この世界の創造者。つまりソードスキルは彼には通じない。

だからこそ、ジエネシスは自分の力だけで倒さなければならない。しかしジエネシスの渾身の攻撃は、全て茅場の見事な盾捌きによって無効化される。無理もない。茅場はジエネシスと戦うのはこれが2回目。ジエネシスの持つパワーがどれ程のものなのかを既に知っている。

茅場は冷静に……否、無感情にジエネシスの攻撃を防いで行く。どこまで速度を上げて、パワーを引き出しても奴の表情は変わらない。

ジエネシスはそれに言い知れぬ恐怖と焦りを覚えた。

次の瞬間、茅場の放った剣の刺突がジエネシスの頬を掠め取った。

「くそっ……(この野郎……弄ばれてるってのか?!)」

ジエネシスは歯軋りし、そして再び茅場に飛びかかった。

「ぬううああああ!!」

ジエネシスの大剣が赤黒い光を放ち始めた。

放たれたのは、暗黒剣最上級十連撃スキル《ジエネシス・デイストラクション》。奇しくも暗黒剣使用者の名を冠したその技は、両手剣

スキル、引いてはこの世界に存在するあらゆるソードスキルの中でも最大級の攻撃力を誇る。

「…………ふっ」

しかし茅場はそれを見て笑みを浮かべた。それは、以前のデュエルの時のそれとは全く逆の、勝利を確信した笑み。

その瞬間、ジェネシスは自身が最大のミスを犯したことに気づく。だが一度発動した技はもうキャンセル出来ない。

とは言え、この技はSAO史上最強クラスの技だ。

「(面白え……受けれるもんなら受けてみやがれ!!) うおおおおおお!!」

雄叫びを上げながらジェネシスは大剣を振り下ろしていく。

盾と剣がぶつかり合った瞬間、凄まじい衝撃波がフィールドに発生した。

そしてジェネシスの剣が赤黒い弧を描いて茅場の盾に打ち付けられる。その度にけたたましい金属の衝撃音と夥しい火花が散る。

だが茅場は、それほどの破壊力を持つ技をいとも容易く弾いていく。

「(済まねえティア……雫。お前だけは……絶対生きろ!)」

ジェネシスは心の中で最愛の人に謝罪した後、最後の一撃を上段から振り下ろす。

「うおおおおおおおお!!!!」

これもおそらく防がれるのだろう。だがそれでも最後の足掻きだ。ジェネシスは己の全てをこの一撃に込めて振り下ろした――

——だがその時、不思議なことが起こった。

ジェネシスの剣は茅場に振り下ろされる直前世界にノイズが走り、その刃が止められた。

ジェネシスの剣だけではない。ジェネシス、茅場、その他この場にいるもの達全ての時間が止まっている。

時間が止まること数秒間、世界は拘束から解けた。

ジェネシスと茅場はその場から弾き飛ばされ、大きく後方へ下げられた。

茅場の目にはそれまで一度も無かった驚愕の色が浮かんでいた。

ジェネシスも一瞬戸惑った様子だったが、これがチャンスと踏み再び茅場に斬りかかった。

「おらあああああ!!!」

茅場は咄嗟に盾でその剣を受け止めるが、その顔には先程までの余裕は全く無い。それを見て、ジェネシスは猛攻は続ける。

「(チャンスは今しかねえ……反撃もさせねえくらいに、攻撃を叩き込め!!!)」

心の中でそう念じながら、ジェネシスはとにかく剣を振り続けた。

その剣が茅場の盾にぶつかるたびに金属音となり、火花が散り……そして、剣がぶつかったところにノイズが走る。

茅場の顔には徐々に焦りが出始めていた。

ジェネシスは茅場から発生するノイズには目もくれず、兎に角剣を振り回した。

そして遂に、茅場の体勢が大きく崩れた。盾が弾かれ、その胴が露わになる。

「(こいつで……終えだ!!!) おおおおおおお!!!」

ジェネシスは茅場の胴に向けて、両手剣を上段から振り下ろした。

その剣は今度こそ茅場を切り裂いた。

次の瞬間、世界が割れた。

ノイズが全体に広がり、一瞬視界が奪われる。

視界が晴れると、そこには茅場の姿は無かった。

「……………終わった……………のか……………？」

ジエネシスは剣を降ろした後、一人そう呟く。

すると背中に、何かを抱きついてきた。

麻痺による拘束から解けたティアアが、両目から涙を流したままジエネシスを背中から抱きしめていた。

ホロウ・フラグメント編

二十二話 コンティニュー・ゲーム

七十五層

ヒースクリフ……茅場晶彦との戦いは幕を閉じた。

ぼーっとしたジエネシスの背中に、ティアが涙を流しながら抱きついた。

「……ティア」

ジエネシスはゆっくりと振り向き、彼女の名を静かに呼んだ。

「ばかー」

ティアは顔を上げ、涙でぐちゃぐちゃになった顔をジエネシスに向けた。

「ばかばかばかっ……!!無茶なことして……心配かけて……こんな馬鹿なことする久弥なんかだいきらい！」

もう……こんなことしないでよお……！」

ジエネシスは一瞬戸惑った表情を浮かべたが、左手を上げてゆっくりティアの頭を撫でる。

「済まなかったな……けど、俺あ生きてるぜ」

そして右手でティアを優しく抱き寄せると、ティアは彼の胸に顔を埋め、声を上げて泣きじゃくった。

「ジエネシス……！」

彼を呼ぶ声が見ると、そこには涙目で彼を見ることアスナと、同じく泣きそうになりながらも必死で堪えている様子のキリトが並んで立っていた。

「お前ら……」

「この……馬鹿やろう！」

キリトはそう叫ぶと、ジエネシスの頭を殴りつけた。

「痛い！何しやがる?!

「こっちのセリフだ！あんなやり方で俺を止めやがって……」

「……ああ、悪かったよ」

ジエネシスは苦笑しつつそう言った。

「おい、ジエネ公!!」

すると今度はクラインがジエネシスの背中を叩いた。

「つて……な、何だ?」

「〃何だ?〃 じゃねえよ! やったじゃねえかラスボスを! おめえが倒したんだよ!!」

クラインは満面の笑みでそう叫んだ。

よく見ると、茅場がかけた硬直から解放されたプレイヤー達が皆歓声を上げている。

「……そっか。俺がやったんだな」

「ジエネシス……本当に良かった……」

漸く泣き止んだらしいティアが優しい笑みでジエネシスを見つめた。

「ああ。やったぜ、ティア」

「うん……!」

そうして二人はゆっくりと唇を――

「あー、俺たちがいるの忘れないでくれるか?」

「見ているこっちが恥ずかしいわよ」

あわやキスしそうな所で、キリトとアスナが呆れた顔で言った。

「全く、隙あらばすぐいちゃつきやがって……」

「それお前が言う?」

両手を腰に当ててため息をつくキリトに対し、ジエネシスはジト目で突っ込んだ。

「ちくしょう! 羨ましいぞてめえら! 俺だって現実に帰ったら、綺麗な嫁さん見つけてやんだからなあ!!」

「おっ、クライン氏。それはフラグですかい?」

「違えよバカヤロウ!!」

ジエネシスとクラインのやり取りで、場は和気藹々とした雰囲気には包まれていた。

「……ところで、キリの字にジエネ公よ」

不意にクラインが訝しんだ顔でキリトとジエネシスに尋ねる。

「俺たち、いつになったら出られるんだ？現実によ」

「いつって、そりや……」

直ぐに出られる、と言いかけたジエネシスだったがそこでハツとする。

茅場との戦闘が終わってから既に数分は経っている。

しかし未だに、ゲームクリアを告げるシステムアナウンスやメツセージなどは全くない。

「ヒースクリフは倒したんだよな？それで終わりじゃねえのか？」

「あいつは……茅場晶彦は、『自分を倒せばゲームはクリアされて、全プレイヤーがログアウトできる』って、間違いなく宣言してた」

訝しんだ表情のクラインに対し、キリトはヒースクリフ……茅場が告げたことを思い出しながら返した。

「だったら……何で出られねえんだよ？ひよつとして、この世界から出る方法なんてねえんじゃないのか？」

「流石にそりやねえと思うぜ？それなら最初からボスが無茶苦茶強く設定するなりしとけば良い話なんだし」

「ああ、俺もそう思う。けど……それなら何で終わらないんだ……？」
彼らが考え込んでいると、エギルが彼らに駆け寄ってきた。

「オイお前ら！七十六層に続く扉が開いてるぜ！」

彼らが階段の方を見ると、その上に設置された扉が解放され、外

の光が差し込んでいた。

「……ここに居ても、何も解決はしねえ。なら、進むしか他に無いだろうな」

「ああ、行こう……七十六層へ」

ジェネシス、キリトの言葉に皆は頷き、やや重い足取りで階段を上っていく。

――

く七十六層く

階段を上がり扉を潜ると、そこには大きな草原が広がっていた。草原の中を一本の道が走り、その道の先に大きな門が見える。おそらくあれが七十六層の主街区の門だろう。

「ここが、七十六層か……七十五層の階段を上ったら現実に戻れるかもとか、ちよつと期待してたんだがな……」

「奇遇だなクライン。俺もだ」

階段を上り終え、七十六層の景色を見たクラインはがっくりと肩を落とす。

「どうやら、ログアウトボタンも追加されていないようだな。やはり、帰る手段は無いか……」

んっ。」

ここで、メニュー欄を確認していたティアが首を傾げた。

「どうした、ティア？」

「いや、アイテムが文字化けしているんだ……」

ジェネシスがティアの様子に疑問符を浮かべると、ティアはメニュー欄を見つめたまま答えた。

ティアの言葉を聞き、皆はその場でアイテム欄を確認する。

「本当だ……俺のアイテムも文字化けしてる……」

アイテム欄を確認したキリトが呟いた。

「どうやら、ここにいる皆のアイテムも全て文字化けしてしまったらしい。」

だが異変はそれだけでは無かった。

「オイオイ………スキルもいくつかロストしちゃってるよ」「何?」

ジェネシスがメニュー欄を見ながら言うと、皆は目を見開いた。

「ぬああああ! オレ様在必死こいて積み上げたスキルがああああ!!」

クラインがスキル欄を確認した後、頭を抱えて叫んだ。

「どうやらレベルの方は無事なようだが、皆自分が保有していたスキルがいくつか消えてしまっているようだ。」

しかし更なる異変が起きた。

「おい! こっちでも問題発生だ!!」

するとエギルが血相を変えて走ってきた。

「転移結晶の動きが普通じゃなくなってるらしい!」

「……エギル。そこんとこk w s k」

ジェネシスが真剣な表情で尋ねた。

「ああ……何でも、ここより下の層に転移出来なくなってるらしい」

エギルの言葉で皆は愕然とした。

「アイテム文字化け、スキルのロスト、そして下層への転移が不可……どれも自分達にとってはかなり致命的な不具合だ。」

「これからどうなっちゃうの……?」

アスナが不安げに呟くのを皮切りに、この層が上がってきたプレイヤー達の間ではざわめきが始めた。

ジェネシスは少し黙って彼らを静観していたが、やがてゆっくり息を吸い、

「ちゅうもおおおおおおー!!!」

ジェネシスが勢いよく叫ぶと、それまで不安にかられざわめいていたプレイヤー達は皆ジェネシスの方に視線を集めた。

「ここで、キリト攻略組団長からお話があります」

ジェネシスは皆の視線が集まったのを確認すると、そう言つてキリトを前に押し出した。

「はあ?!ちよ、ジェネシスお前……何言い出すんだよ?!」

突然の事でキリトは戸惑った様子だった。

だがもう既に皆の視線がキリトに集められており、キリトはジェネシスの方をジト目で並んだ後、咳払いして口を開いた。

「みんな、聞いてくれ。」

ここで止まっただけでも、どうやら無駄みたいだ。ゲームシステムが不安定だし、下層にも戻れない……けど、これ以上の不具合が出る前に、先に進むべきだと俺は思う!」

キリトの強い意志を持った言葉に、皆は少し黙り込んでいたが……「……そうだよ。私達の目的は、SAOをクリアして生きて現実世界に帰る事だもの」

「ああ。元々私達はそのつもりで進んでいたのだからな。必ず行けるさ」

アスナ、ティアが口々にそう言う

「そうだよな……ああ、まだやれる!」

「第一層からここまで来たんだ……絶対行けるぜ!」

攻略組の面々も、徐々に闘志を燃やし始めた。

「てめええらああ!!俺たち攻略組の目標は、百層をクリアする事だああ!!」

「!!」

「ノーコンティニューでクリアすんぞこらああー!!」

「!!」

最後のジェネシスの鼓舞によって再びモチベーションを完全に取り戻した攻略組は、百層クリアの決意を新たに、七十六層の道を進み始めた。

とは言え、七十六層で起きたことは悪いことばかりでは無く、ジェネシス達にとっての思いがけない再会と、新たな出会いが待っていた。

七十六層 《アークソフィア》 転移門広場

ここで、ジエネシスがメニューからアイテム欄を見ていた。文字化けしたもののの中で、使えそうなものが残っていないか確認しているのだ。

するとジエネシスは、アイテムの中に奇妙なものを見つけた。

「ん……？何だこれ、文字化けしたアイテムが光ってやがる」

アイテム名は既に全く読めない状態だが、何故かそのアイテム名だけが明るく光っていたのだ。

「オブジェクト化してみるか」

「え？大丈夫なの？」

「オブジェクト化するだけだ、そんな大層な問題は起きねえだろ」

文字化けしたアイテムをオブジェクト化するのは、ゲームでは基本的には避けた方がいい行為だ。何らかの不具合が起きる可能性もある。

だがジエネシスは、迷わずそのアイテムをタップし、オブジェクト化する。

すると目の前に眩い光が現れ、それは徐々に人の形を取っていく。やがて光が晴れていき、中からたなびく銀の長髪、白いワンピースを身につけた小さな少女が現れた。

「ふうふう……やっとして出てこられました！」

少女は碧い双眸でジエネシス達を見ながら開口一番にそう言った。ジエネシスとティアは彼女を見て目を見開いた。

当然だ。今彼らの目の前に現れた少女は……

「れ、レイ?!」

「レイ…本当に、レイなのか?!」

《レイ》。ジエネシスとティアが二十二層の森の中で出会い、自分たちの子供のように接した少女。

その正体は、この世界に存在するAI《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》、通称《MHCP》の試作0号。

「パパ、ママ!お久しぶりです!!」

レイは満面の笑みでそう言った。

「お、おう……つてか、何でお前出てこれたんだ?」

「えつと……どうやら、この世界の根幹である『カーディナルシステム』が不安定な状態にあるみたいです。それによって、エラーの訂正機能が低下され、私が実体化出来たのかと……」

ジエネシスの問いにレイは顎に手を当てて答えた。

「カーディナルが……そっか、ここに来て様々な不具合が起きているのはそのせいか……」

レイの説明にティアが納得したように頷く。

「そう言うことかよ……まあ、不具合のせいで色々大変な目に遭ったが、こればかりはありがてえわな」

「そうだね。愛娘とここで再会できたんだし。改めてこれからもよろしくね、レイ」

「はい!もちろんです!パパ、ママ!!」

—————

その後、ジエネシス達はエギルが新たに借りた宿にてレイを預けた。

その際、どうやら同じくカーディナルのエラー訂正機能の低下によって実体化出来たらしいユイと再会。

更に、キリトとアスナの仲間であると言う『リズベット』という少女と出会う。

「え？『レズペット』？」

その瞬間、宿の大広間に大きな破碎音が木霊した。

「あ、あんた!! 誰が『レズペット』よ!! そんな失礼な聞き間違いしないでよね!!」

「うーん、ジェネシス、今のは私でもフォローは出来ないかな？」

リズベットが顔を真っ赤にしながらジェネシスを睨み付け、アスナも目が笑ってない笑顔を浮かべながら細剣の切っ先をジェネシスに向けている。

キリトはその光景に苦笑し、ティアは何も言わずただ呆れた顔でため息をついている。

「お、落ち着けよ！悪かったって！」

ジェネシスが殴られた左頬を抑えながら必死に制し、その後何とか謝り続けてリズベットの機嫌を取り戻すことが出来た。

「成る程、キリトの翡翠の剣を作ったのはリズベットだったのか」

『リズ』でいいわよ、長つたらいいでしょ？

ま、自分で言うのもなんだけど、あたし結構腕が立つのよ。まあ、お店にはもう戻れないんだけどね……」

ティアの言葉にリズベットは得意げな顔で言った後、少し悲しげな表情で目を伏せた。

七十六層で起きた不具合のせいで、一度ここまで上がるともうしたの層に戻れなくなっているのだ。

その為、リズベットは下層にある彼女の店に戻ることが出来なくなってしまうていたのだ。

「んま、別に店はここでも出来るしいじゃねーか」

「ええ、そのつもり。《リズベット武器店》2号店が出来たら、その時はあんた達の剣もメンテナンスしてあげるからね」

「おう、よろしく頼むわ」

その後、ジエネシス達は街を一周し再び転移門前まで来ていた。すると、転移門が青白く光り、中から1人の人間が現れた。

藍色の髪に水色の装備、左目の涙ボクロ。

「ああ、良かった2人とも！無事だったんだね！」

「お、おめえは……………サチじゃねえか！」

『サチ』……………彼女はギルド《月夜の黒猫団》の1人で、ジエネシス達が交流を深めた少女。

「な……………どうしてお前がここに居るんだ？」

「七十五層で大変な事が起きたって聞いたの……………それで私、ジエネシス達に何かあったんじゃないかと思って、居ても立っても居られなくなって……………」

「あー、心配してくれんのはありがてーんだが……………お前、もう下の層には戻れねーぞ」

「……………え？」

ジエネシスの言葉にサチは目を丸くした。

「信じられないかもしれないが、本当なんだサチ」

「嘘……………」

「マジツカマジツつでマジツツだショーウターイムだよ」

「ごめん意味がわからない……………」

ジエネシスの言動に困惑するサチだが、どうやら下の層に戻れなくなってきていることは認めたようだ。

「どーすんだ？とりあえずお前はここにいるしかない訳だが……………」

「ねえ、わたしにも出来ることって無いかな？」

するとサチが顔を上げて尋ねた。

「と言うと？」

「レベルとかは少し足りないけど……………でも、最前線に来たのなら守られるだけじゃなくて、ジエネシスやみんなの力になりたいの！」

サチは決意を持った表情で言った。

「そっか……………なら、よろしく頼むぜ」

「うん！」

そしてサチをエギルの宿屋へ送り届けた後、ジエネシス達はフィー

ルドに出た。

「きゆるるっ！」

すると、遠くから青いフェザードラがジェネシスに向かって飛んできた。

ジェネシスは敵エネミーかと考え剣を引き抜こうとしたが、その前にフェザードラがジェネシスの顔に張り付いた。

「うおおおい!!何だこいつ?!」

「きゆるっ、きゆるるるっ！」

ジェネシスが何とかリドラを引き剥がそうとするが、中々離れない。

いや、そのフェザードラはジェネシスに懐いているようにも見えない。

「ん……?このフェザードラって……」

そこでティアが何かを思い出したようにフェザードラを見る。

「もしかして……ピナか？」

直後、フェザードラが飛んできた方向から1人の少女がやって来た。

「ピナーっ！勝手に先行っちゃ……って、ティアさんにジェネシスさん！」

「お前は……シリカ！」

現れたのはツインテールの少女、『シリカ』だ。

彼女はかつて、相棒の子竜であるピナが死んで途方に暮れていた時にジェネシス達が手を貸した少女だ。

「お、シリカじゃねえか！久しぶりだなあ」

そこで漸くピナが離れ、シリカに気づいたジェネシスが話しかけた。

「はい！お久しぶりです!!」

しかし、シリカがいるのは現在も中層ゾーンの筈。

一体どうしてこんな最前線に来ているのか事情を聞くと、どうやらサチと同じく最前線で起きた異変を聞き、ジェネシス達が心配で来たとの事。

「あ、あたし、皆さんのお手伝いします！ご迷惑をおかけしちゃうかもですが……精一杯頑張ります！」

シリカは確固たる意志を持った瞳でそう言った。

「おうよ。どうせもう下には戻れねえしな。とりあえずしばらくはレベリングを頑張つて、そつからは頼らせた貰うぜ」

「よろしくな、シリカ」

「はいー！」

そして3人は、とりあえずレベルが足りないシリカを安全圏の街へ連れていくために一度来た道を戻る。

しかしそこで運悪くモンスターに遭遇し、囲まれてしまう。

「うおおらあ!!」

ジェネシスは持ち前の両手剣のパワー、リーチを生かして善戦し、ティアも刀の速さでモンスターを圧倒していた。

しかしどうやらこのモンスターは死ぬ際に近くのモンスターを呼び寄せてしまう性質があるらしく、彼らが倒せば倒すほど敵の数は増えていく。

形勢がやや不利な状況に傾き始めた時だった。

突如空中から無数の流星群が降り注ぐ。

それらは広範囲にわたって落下し、ジェネシスとティア、シリカを囲んでいたモンスター達を次々と蹴散らしていく。

シリカは一体なにが起きたのか訳がわからない様子だったが、ジェネシスとティアは今の光景には見覚えがあった。

「大丈夫ですか？」

その直後、彼らの背後から優しい少年の声が響く。

そこにはやはり、見覚えのある顔ぶれが。

紺色の装備に双頭刃を肩に担ぐ少年と、白いコートを身につけてこの世界には珍しい弓を持つ少女。

「サツキにハツキじゃねえか」

「お久しぶりです、ジェネシスさん、ティアさん」

ハツキが笑顔で手を振った。

「苦戦しているみたいですね。手を貸しましょうか？」

「そっか、そりや助かるわ。来てもらって早々に悪いな」

「いえいえ、気にしないでください。だって困った時は助け合い、でしよっ。」

その後彼らは危なげなくモンスターの群れを退け、七十六層の街《アークソフィア》へと帰還した。

その頃、七十六層のとあるフィールドに、1人の人物が彷徨っていた。

黄色の長髪に緑色の装備を身につけ、耳は尖っており背中からは小さな翅が生えており、その姿はまるで妖精のようだった。

「待っててね……………お兄ちゃん……………」

その妖精は1人呟いた後、行くあてもなく歩いて行った。

—————

同じ頃、別のフィールドにて。

「ここが《ソードアート・オンライン》か……………」

こちらはどうかやら男性プレイヤーだ。

グレーの民族服のような格好に茶色いマントを羽織り、左手には円形シールドを持っている。

「しかし、ゲーム内の日差しは強くていけねえ……」

男は被っていたフードを外す。

すると、フードの下には日光を反射し光り輝く頭が。

「……ハゲ上がりそうだ」

男は苦笑しながら光沢のある頭部を撫でた。

「つと、いけねえいけねえ。それよりも、早く見つけてやらねえとな。

待ってる、もう安心だからな……」

「……雫」

二十三話 現実からの使者達

その日の夜、新たに最前線にきた仲間達との交流を深めるために全員で夕食をとった。

「あんたの剣、珍しいわね。どこで作ってもらったの？」

「この剣は四十八層にある『七色の武器店』と言うところで作ってもらったんです」

「ああ、あそこね！主街区から少し離れたところにある隠れた名店！うわあ、あたしもそんな武器使った事ないからなんか負けた気分だわ」

リズベットはサツキと彼が持つ双頭刃について語り合っていた。

「サチさんは、ジェネシスさんとどんな風に出会ったんですか？」

「私は、『月夜の黒猫団』って言うギルドに入ってるんだけど、私って凄く弱くて……そこで、ジェネシス達が戦い方を教えてくれたの。」

シリカちゃんはどんな感じだったの？

「あたしは、ピナが死んじやった時にジェネシスさん達に助けてもらったんです。それで、ピナの蘇生アイテムが出る場所まで連れて行って貰って……」

「へえ、いいなあ。なんだか正義のヒーローみたい」

「えへへ……そうですよ。ジェネシスさんは、あたしにとってはヒーローなんです」

「そっか……でもそれは、私も同じだよ」

シリカとサチは、想い人であるジェネシスとの出会いについて語り合い、頬を赤らめていた。

そんな彼女達を、ティアはなんとも言えない顔で見ている。

「また随分と女の子が増えたね……」

「全く……只でさえ少ない女性プレイヤーが、よくもまあこんなに集まったものだな」

「あはは……ジェネシスさんもキリトさんも人気者なんですわ……」

アスナも目の前で各々会話を楽しむ女性プレイヤー達を見て苦笑し、ティアも呆れたような顔で呟く。ハツキもそれに便乗する。

「それでクライン、『森に妖精が出る』って言うのはどう言う事なんだ？」

一方キリト、ジェネシス、クライン達は、最近出てきたとある噂について語り合っていた。

「ああ、俺も噂で聞いたただけだから確証は無いんだけどな。」

なんでも、北西の森の中に、背中に小さな翅が生えた妖精のようなNPCがいる、らしいぜ」

「らしい？そりやどう言う意味だ？」

「NPCにしちやおかしいらしいんだ。誰かを探してるみたいなんだが、一言喋りかけたらどっかに行っちゃまうみてえなんだよ」

「なるほど……」

クラインの説明に、キリトは納得したように頷く。

「あーそれとな、もう一つ奇妙なプレイヤーの噂があるぜ」

するという今度は、追加の料理を持ってきたエギルが切り出した。

「奇妙なプレイヤー？」

「ああ。そいつは男性プレイヤーなんだが……戦闘スタイルが常軌を逸しているらしくてな」

「常軌を逸している？どんな風に？」

キリトが疑問符を浮かべながらたずねる。

「まずそいつは、武器を使わねえらしい。主に格闘スタイルで戦うそう。手持ち武器は円形の盾だけ。しかもそいつは、盾を防御のために使うだけじゃなく、ブーメランみてえに投げて戦うらしい」

「いや何そのアメコミのヒーローみたいな戦い方」

エギルの説明にジェネシスは思わずそう言った。

「SAO内で格闘か……もしかしたら、新手のユニークスキル使いか？」

「あり得ねえ話でも無いな。この世界の体術スキルは最高まで上げてもこの七十六層レベルのモンスターとは戦えねえ。恐らくは、その体術スキルの上位互換的なユニークスキルだろうな……」

キリトの予測にクラインが頷きながら言った。

その二人のプレイヤーについては翌日調査することに決め、彼らの

会談はお開きとなった。

〜翌日〜

予定通り、キリト・ジエネシス達は例の謎のプレイヤー達の調査に乗り出した。

キリト・アスナが妖精プレイヤー、ジエネシス・ティアがおっさんプレイヤーを捜索する事になった。

鬱蒼とした森林の中、道無き道を彼らは進んで行く。

「いやいやこんな森のど真ん中にプレイヤーなんていんのか？ガセネタに引っかけたとかじゃねえよなあ？」

ジエネシスが茂みを払いながらうんざりした様子で呟く。

「確かに……こんなところにプレイヤーなんて入りそうに無いんだけどなあ〜」

ティアも茂みを鬱陶しそうに払いながら進む。

既にこのエリアを調査してから数十分が経過していた。

だが、例のプレイヤーらしき姿は愚か、人影すら見える事もない。

「はあ〜………つたく、もういいや。帰ろうぜ。どーせそんなおっさんなんていつこねえよ」

ジエネシスはもう飽きた様子で元来た道を帰ろうと振り返った。

しかしその時、少し離れたところから戦闘の音が響いた。

「ん？この音って……」

「誰か戦ってんのか？」

「もしかして、例のプレイヤーかも！」

そう言ってティアは音のする方向へ走り出した。ジエネシスもその後を慌てて追いかける。

その音がしていた場所は、ジエネシス達がいた場所から数メートル先だった。

彼らが見たのは、一人の男性プレイヤーが三体のモンスターに囲まれているところだった。

その男性は、グレーの民族衣装のような服に茶色のマント、そして

焦げ茶色のフードを被り、左手に持っているのは円形シールド。おそらく彼が噂のプレイヤーなのだろう。

ジェネシスとティアはその男性の救援に向かおうと剣の柄に手を掛けた直後。

一匹の狼型モンスターが男性に向かって突進して行つた。その鋭い牙をむき出しにし、男性に噛み付こうとする。

だがその時、男性の右拳がゴルドのライトエフェクトを纏う。

そして男性は、その金に輝く右拳で狼の左頬に向けて思い切り殴りつけた。

それによつて狼はゴロゴロと転がりながら後ろの大木に衝突し、そしてその身をガラス片に変えて消滅した。

「マジかよ……?」

「い、一撃で……?!」

ジェネシスとティアはその光景に思わず戦慄した。

何せあの男は今、最前線のモンスターをたった一撃で葬り去つただ。

しかし戦闘はそれで終わらない。

今度は男性の背後にいる人型モンスターが両手で構えた大鎌を振り下ろす。

しかし、それと同時に男性の右足に青い電流が走り、鎌が振り下ろされると同時に男は振り向きざまに上段回し蹴りを放つた。

男性は振り向いたタイミングも相まって見事に鎌を避け、そして彼の右足は見事にモンスターの頭部を直撃させた。

モンスターはそれによつて後ろに仰向けになつて倒れ込み、直後爆発四散した。

残る一体は男性の戦闘能力の高さを察したのか、その場から慌てて駆け出す。

しかし男性はそれすらも逃すまいと、左手の円形シールドを投げつけた。

そのシールドはモンスターの足に命中し、一瞬動きを止める事に成功する。

その先に男性はその場から数歩駆け出して前方に飛び上がり、右足を突き出して飛び蹴りを放った。

その蹴りは見事にモンスターを捉え、その攻撃を受けてモンスターは爆散した。

目の前で繰り広げられた無双にジェネシスとティアはしばし呆気に取られていたが、

「い、いやあく！実に見事な戦いっぷりだったなあ！あんた、見ない顔だけどいつこの層に来たんだ？」

ジェネシスは引きつった顔のまま男に近づいていく。

男性はその声でジェネシス達の方を振り向く。

だが、彼はティアの顔を見た瞬間目を見開き、

「オイイイイイイ！・ようやく見つけたぞ雫ううううう！！！」

ティアに向かって勢いよく走りだし、彼女の両肩を掴んだ。

「え……ええ？」

ティアは完全に戸惑った表情をしている。

「おいちよつと！女に気安く触れるんじゃないよ」

ジェネシスは呆れた顔で男をティアから引き離す。

「おいコラア！！てめえどこの馬の骨か知らねえが、そっちこそ何で雫と一緒にいやがる！！」

「何でつてそりゃあ俺がこいつと付き合ってるからに決まってるんだろ
うが！」

「んなつっ?!雫、それは本当なのか?!」

男は驚いた顔でティアの方を見る。

「え？ええと……まあ、はい……」

「ガッツツツ?!」

ティアにそう尋ねられると、男はショックを受けた様子で地面に蹲った。

「そ、そんなバカな……俺が2年も見放していたうちに、いつのまにか
彼氏い?!」

そして勢いよく立ち上がり、ジェネシスの胸ぐらを掴んでブンブンと振り回す。

「おいテメエ!!人の親が見てない隙に、何勝手に付き合ってたんだコ
ラア!!」

「ちよつとちよつと落ち着いて!というか、貴方誰なんですか?！」

ティアが男とジエネシスの間に入って慌てて止める。

「だ、誰だとお?!俺だよ雫!お前のお父さん!《一条 光実》だよ!!」

「えっ……………?」

その瞬間、ジエネシスとティアは硬直した。

「《一条 光実》って……………ええええ?!」

「お…………お父さんんんん?!」

「やつと分かったか、雫」

男は安堵した顔でフードを外す。

その瞬間、髪の毛のない光沢のある頭が露わになった。

「ほ、本当にお父さんなの?」

ティアが疑り深い目で男……………《ミツザネ》を見つめる。

「なっ、何でそんなに疑い深いんだ!」

「だ、だって私の知ってるお父さんは……………そんな禿げてないし」

「なっつ?!は、ハゲてなんかねえ!!ちよつと娘と一緒にゲームの世界

に囚われただけだあ!!」

「言い訳無茶苦茶過ぎんだろ……………」

ジエネシスは呆れた顔でツツコミを入れた。

「で、でも……………そんなの信じられないよ。お父さんがこのSAOの中

にいるなんて……………」

「あ、それなら定番のアレやったらいいんじゃないやね?」

にわかには信じられない様子のティアに、ジエネシスが手を打って提

案する。

「身内の人間じゃなきゃわからないような暴露話。つうことでお義父

さん、何かこいつの恥ずかしい話とか無い?」

「てめえにお義父さんと言われる筋合いはねえ……………まあしかし、雫の

暴露話か……………」

ああそうだ、とっておきがあるぜ。昔、こいつが小学二年生の時
にな……………」

その瞬間、ティアは目を見開いて

「わぁーーーーっ!!ちよつと待つて!!それだけはだめええー!!分かった、信じる!信じるから!!お父さんだつて認めるからああああーーーー!!」

ティアが必死になってミツザネの口元を押しさえつけた。

「おいおい落ち着けよティア。まだ何も聞いてねえし」

「それ久弥が私の恥ずかしい話聞きたいだけだよね?」

「ああその通りだ。だからおめえは大人しくしとけて」

「いやああああ!!」

ジェネシスが無理矢理ティアを引き離し、そして尚も抵抗するティアを押しさえつける。

「それでお義父さん、続きは?」

「あ、うむ。その時にな……………」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝっ!!!」

↳数分後↳

「——いやあく笑つた笑つた♪ティア、お前そんなことあつたんだなあ〜w」

ジェネシスは一頻り笑い終えた後呼吸を整え、背を向けて蹲るようにいじけて座るティアの肩をポンと叩いた。

「うるせー…バカ…あほ…………」

ティアは顔を真っ赤にして頬を膨らませ、涙目でジェネシスを睨みながら言った。

「それで、この人の事お父さんって信じるか?」

「もーとつくに信じてるよ…………」

ティアは尚も不貞腐れた態度で答えた。

「しかしそれより気になってるんだが…………お前さん、一体何者だ?」
するとミツザネがジェネシスの方を向いて尋ねた。

「あー、俺は《ジェネシス》。まあ一応、こいつのパートナーやらせてもらつてまーす。リアルの名前は《大槻 久弥》っす」

「大槻……久弥……ああ、娘をイジメから助けてくれたって言う久弥くんか！そうかそうかあ！前々から礼を言いたいと思ってたんだが、まさかこんなところで会えるとはなあ！」

ミツザネはジェネシスの正体を知るや優しげな笑顔でジェネシスの肩をポンと叩いた。

「……しかし、娘と付き合ってるっつうのは本当なのか？」

「付き合ってるじゃなくてももう結婚してるよ」

すると蹲っていたティアがミツザネに向けてそう言った。

「なっつっつ?!ちよ、ちよつと待って！付き合ってるとかそんなじゃ無しに……け、結婚ん?!」

その瞬間、先程までの優しげな顔から一気に怒気を孕んだ顔でジェネシスの首を掴み、

「おいしい!!娘を助けてくれたのは感謝してるが、それとこれとは話が別だ!!!」

てめえ!!親の許諾無しに勝手に結婚とかどう言うつもりだコラア!!!」

「ちよ、落ち着けよ！結婚って言ってもゲーム内での話!!実際に結婚とかまだしてるわけじゃねえから！機嫌なおしてくれよお義父さん!!」

「てめえにお義父さんなんて呼ばれる筋合いはねえええ!!!」

その瞬間、ミツザネの拳がジェネシスの左頬を直撃した。

「てんめえ!!殴りやがったな?!親父にも打たれた事ねえのに!!」

ジェネシスは左頬を抑えながら叫ぶと、ミツザネに掴みかかった。

そこから二人の男たちの取っ組み合いが始まった。

しかし数秒後、彼らの目の前を銀の光が一閃した。

二人が見ると、ティアが立ち上がった状態で刀を持っていた。

そしてその切っ先を二人に向けるとニコツと笑い

「……とりあえず街に帰ろうか？」

と優しい口調で言った。

しかし優しげな顔と口調ではあるが、その表情や仕草からはとてつもない怒気を放っているのがジェネシスとミツザネにも感じられた。

「え、えつとく、ティアさん？」

ジエネシスは引きつった表情でティアに話しかける。

「あ、あ、っ？」

その瞬間、ティアはかつてない鋭い視線をジエネシス達に向けた。その覇気に押され、男たちは黙って待ちの方まで歩いて行った。

—————

街まで戻り、ジエネシスはミツザネをエギルの宿屋へと連れて帰った。

ドアを開け、大広間に入ると

「あ、お帰りなさいパパ！」

ジエネシス達の娘、レイが銀の長髪を揺らしながらジエネシスに向かって駆け出した。

「よお、いい子にしてたかレイ？」

「もちろんですよパパ！ユイと一緒にお留守番をしました」

「そうかそうか。偉いぞ」

ジエネシスは優しくレイの頭を撫で、レイはそれを満足げな笑顔で受けている。

しかしここでレイがあることに気づく。

「あの、パパ」

「ん？どうした」

そしてレイはジエネシスの後ろを指差し、

「この男の人は誰ですか？」

「ああ、そうだ、紹介するよレイ。この人は——」

その瞬間、ジエネシスは後ろからとつもない殺気を感じた。

恐る恐る振り返ると、そこには両目を目一杯開かせて、顔を真っ赤にして怒り心頭の表情をしているミツザネが。

「あ、あのお義父さん？何か勘違いしてるみたいですけど、こいつは

……」

ジェネシスが慌ててミツザネにレイの事を説明しようとするが、その前にミツザネがジェネシスの顔を片手で掴んだ。

「……おい。『パパ』ってどう言う事だ？このゲーム、そんな淫らなことになってんの？」

《SAO》って、『竿』って意味なの?!

終わらせちゃってもいいかな？おじさん、このゲームが終わる前に君の人生ゲームオーバーにしちゃっても良いかな?!

威圧感のある低い声でそう尋ねるミツザネ。

ジェネシスの頭を掴む手からはミシミシと言うサウンドエフェクトが鳴っている。

「ちよ、ちよつとお父さん落ち着いて！この子は私たちの子供だけどうせじゃ無いと言うか……」

「やっぱり雫の子供じゃねえか!!見ろこの銀髪を!!完全に雫の遺伝子受け継いでんじゃねえか!!完全に雫の子供じゃねえか!!」

ティアの説明で更にヒートアップしてしまったミツザネ。

そんな彼をティアはなんとか宥め、それをレイが不思議そうな顔で見つめると言う光景が数分続いた。

—————

「成る程、つまりこいつ……レイちゃんは、お前達の養子、みてえな感じって事か」

漸くレイについての説明を終え、落ち着きを取り戻したミツザネは納得したように頷く。

「初めましてミツザネさん。パパとママの娘、レイと言います」

レイはミツザネに向かって礼儀正しくお辞儀をした。

「ほう、これは驚いたな。お前さん本当にプログラムかい？いや、そんなことは重要じゃねえわな……」

こちらこそ初めましてだな、レイちゃん。俺はお前さんのママの親父である、ミツザネだ。よろしくな」

ミツザネは優しい口調でレイに自己紹介をした。

「ミツザネさんはママのパパ……つまり、私のおじいちゃんって事ですわね！」

「んん？まあ、そう言うことになるな」

するとレイがテーブルから身を乗り出して

「じゃあじゃあ！ミツザネさんの事は、これからおじいちゃんって呼んでもいいですか？」

「お、おじいちゃん？」

……ああ、まあ構わねえよ」

するとレイは満面の笑みで

「わあーい！おじいちゃん、これからよろしくお願いします!!」

そしてミツザネに抱きついた。

するとミツザネはレイを抱き上げると涙目になり、

「くっ……まさか四十代で孫の顔を見ることになるとは……」

しかしどこか嬉しそうな顔でレイを見つめていた。

「にしても、まさか例の男性プレイヤーがティアのお父さんなんてな……」

その様子を遠くから眺めていたキリトが思わずそう呟いた。

「俺もいつか、アスナのお父さんに会うときが来るんだよな……」

「大丈夫だよ。お父さんならきつとキリトくんを認めてられるわ」

「そうだと良いんだけどな」

キリトはアスナの言葉に苦笑しながら答えた。

「あの……お兄ちゃんとアスナさんってどんな関係？」

するとキリトの隣に座っている金髪ポニーテールの少女がおずおずと尋ねた。

「どんな関係って……まあ、一応恋人同士になるのかな」

「へ、へえ〜」

キリトがそう答えると、その緑の少女は苦笑いになった。

「んで、キリト氏。その金髪ポニテ巨乳美少女が例の妖精ってわけかい?」

ふとジェネシスがキリトの方を向き、少女の方を指差しながら尋ねる。

「あ、ああ……どう言う因果か、こっちも俺の身内だな……名前は《リーファ》。リアルでの俺の妹なんだ」

「は、初めまして。《リーファ》と言います」

少女リーファはジェネシスに向けてペこりとお辞儀をした。

「おう、こちらこそよろしく頼むわ。

んで、そっちのもてめえの知り合いか?」

そう言ってジェネシスはテーブルの角を指差す。

そこには黒髪のクールな雰囲気を持つ少女が腕を組んでなんとも言えない顔でこちらを見ていた。

「ああ、この子は違うんだ。名前は《シノン》。急に空から落ちてきてさ」

「いやいや何その登場の仕方。『親方!空から女の子があ!!』ってか?ここは『天空の城ラ○ユタ』ですか?」

……そう言えばここもある意味ラピ○タだわな」

『天空の城』じゃなくて『浮遊城』なんだけどなここ」

ジェネシスの言葉に対しキリトがやんわりとツツコミを入れる。

「ところで……リーファにシノンさんだっけ?あんたらは何だっけこんなデスゲームにわざわざ来たんだ?」

「私は元々、ALOって言うゲームで遊んでたんです。そしたら、いきなりここに飛ばされて……」

「私は……ごめんなさい、少し記憶が飛んでるみたいなの」

リーファは困惑した表情で答え、シノンは目を伏せながらそう告げた。

「リーファは何故かここに飛ばされて、シノンに至っては『記憶にこ

「ごめんなさい」ってか。全く、不運すぎて同情するぜ……」

「そう言えば、ミツザネさんは何でここに来たんだ？」

キリトが未だにレイを抱き上げているミツザネに問いかけた。

「俺は現実では総務省のトップ兼このSAO事件の対策本部長でな。内部調査という事でログインしたんだ」

「総務省のトップ?!それって凄く偉い人じゃ……」

「そんな大層なもんでもねえさ。」

前々からこのゲームに入って内部調査する案は出てたんだが、何せここはデスゲームだからな。リスクが大きいから中々踏み込めなかつたのさ……

だが先日、このSAOサーバにハッキングかました馬鹿野郎がいやがつたんだ」

「は、ハッキングだつて?!」

ミツザネから告げられた衝撃の言葉にキリトは目を見開いた。

「ああ。その影響もあつて、このゲームの根幹を成すシステムが大幅にダメージを受けてな。お前さんたちなら既に心当たりがあるだろう?」

そこで思い出されるのは、この七十六層に上がった時に起きたいくつもの不具合。レイやユイの報告でカーディナルシステムに不具合が生じていたことは既に把握していたが、まさかそれがハッキングによるものだったとは……

「でも、総務省のトップがログインする事も無いだろう?それこそ、そういうのは部下とかに任せておけば……」

「そんな事出来るか!部下をこんな危険な場所に行かせられる訳がねえだろ!!」

キリトの言葉に対し、ミツザネは目を血走らせながら叫んだ。

「お父さん、本音は?」

「愛しの雫ちゃんが心配だからに決まってるだろうがコラアアアアアアアアア!!!」

するとここでリーファはミツザネに

「あ、あのく、ミツザネさんってALOやってたりします?」

と尋ねる。

「ALLO? ああ、まあ暇つぶしにやってたが。ちなみにこのキャラクターも、ALLOのものをコンバートしたもんだ」

「や、やっぱり!!」

それを聞きリーファは勢いよく立ち上がりながら叫んだ。

「お、おいどうしたんだよスグ?」

妹の様子にキリトが訝しんだ表情で尋ねた。

「ALLOはいろんな種族間で闘争があるんだけど、ミツザネさんはそこで《星海坊主》って呼ばれてて、世界最強のプレイヤーなんだよ!」
その瞬間、キリトとジェネシスの目が見開かれた。

世界最強——その称号は既に彼らも持ち合わせている。

しかし目の前の男はこことは違う別の世界で最強の名を持っている。
る。

「《星海坊主》……そういうや向こうじゃ、そんな名前と呼ばれてたな」

ミツザネは遠く懐かしむような顔で呟く。

「なあ、ミツザネさん……一つ頼みがあるんだが」

ここでキリトが不敵な笑みを浮かべながら尋ねた。

「……何だ? まさかお前さん、俺と戦えって言うつもりか?」

「まあ、本音を言えばそうなるな。ALLO最強の強さがどんなものか、ゲーマーなら知りたくもなんだろう」

ミツザネの問いに対しジェネシスも好戦的な笑みを浮かべながら答えた。

「世界最強……俺は別にそんな称号に興味はねえがな……」

まあ、上等じゃねえか。このデスゲームをここまで導いてきたお前さん等の力、見せてもらおうじゃねえか」

そう言っつてミツザネは立ち上がり、ジェネシス・キリトもそれに続いて大広間を後にし、アークソフィアの広場へと向かう——

二十四話 V S 世界最強

アークソフィアの街中にある大きな広場。

ここで、ミツザネ・キリト、ジェネシスが向かい合って立っている。「さて、まずはどっちから俺とやるんだ?」

ミツザネがキリト、ジェネシスに問いかける。

「んじや、先ずは俺から行くよ」

キリトが背中から二本の剣を引き抜き、ミツザネの前へと歩き出した。

それを見てミツザネは「ほう?」と口端を釣り上げ、

「二刀流か……それがお前さんの十八番ってわけかい」

「まあな。使いこなせるようになるまでは結構苦労したよ」

そしてキリトはメニュー欄からデュエル画面を選択。

《初撃決着モード》でミツザネにデュエル申請をする。

「……む? 全損決着にはしねえのか?」

ミツザネは首を傾げて尋ねる。

「いやいやいや……ミツザネさん、ここはどこだ?」

「……ああなるほど、そういうことか。」

済まねえ、向こうにいた時の癖だな」

ミツザネはどうやらSAOの外での癖が抜けていないらしく、苦笑しながらデュエル申請を受諾した。

キリトとミツザネの間にデュエルカウントが表示され、60秒から1秒1秒と減っていく。それと共に、キリトとミツザネを中心とするフィールドの緊張感も高まっていく。

キリトは左右の剣を、ミツザネは左手の円形シールドと右手の拳を構えた。

その半径5メートルの周りには、彼の仲間達が控えて静かに見守る。

「キリトくん……」

アスナが心配そうな目で見つめる。

「ママ、大丈夫ですよ。パパが負けるはずがありません!」

「そうよアスナ。あんたの愛しの旦那が負けるはずないでしょ」
そんなアスナに対し、ユイとリズベツトが彼女を励ますように言う。

「ユイちゃん、リズ……」

ふふっそうね。キリトくんが負けるわけない」

アスナも笑顔でうなずき返し、再びキリト達の方を見る。

「おおおーいー！キリの字いー！そんなオツさんに負けんじゃねえぞおー!!」

クラインが大声でキリトの方に叫ぶ。

この場にいるものの多くは『キリトが勝つ』と予想していた。

しかし一部の人間は『ミツザネが勝つだろう』と予想する者がいた。

「お前はと思う？リーファ」

「あたしは……ミツザネさんに軍配があがるんじゃないかと思いません」

リーファはALLOにて、同じくALLOをプレイしていたミツザネの実力を知っている。

ミツザネは様々な種族が争い合うALLOにて最強プレイヤーと言われる程の実力があり、リーファ自身も実際彼の強さを目の当たりにした事がある。

あの時の光景をリーファは忘れた事がない。

ALLOで傭兵として過ごすミツザネは、一度リーファ達《風妖精族》に協力してくれた事があり、その際リーファもその場に立ち会っていた。

その際に見せた蹂躞劇。拳一つで文字通り一騎当千の実力を発揮したミツザネを見たリーファは、『次元が違う』と感じた。

その雄姿は、正しく《星海坊主》生ける伝説という言葉に相応しい。

だからこそ、実の兄と言えどキリトがああミツザネに勝てるビジョンがどうしても見えないのだ。加えてリーファはこの世界でのキリトの実力を知らない。

「……随分と信頼されてるみてえだな。お前さんの強さは余程のもん
と見える」

ミツザネはアスナ達の方を一瞥した後、不敵な笑みでキリトの方に
行った。

「まあな……正直俺の強さはどうか分からないけど、それでもみんな
から期待されてるなら、俺はそれに答えるだけさ」

「その意気やよし。ならお前さんの全部、俺にぶつけてみる！」

次の瞬間、カウントがついにゼロに到達した。

同時に二人がその場から飛び出す。

キリトの剣がミツザネの盾を直撃し、甲高い金属音と火花が飛び散
る。

そこからはキリトの猛攻が始まった。

左右の剣から操り繰り出される高速の斬撃を、ミツザネは左手の盾
で巧みに防御する。

「くそっ……こいつ、ヒースクリフと同じくらい守りが固い！」

キリトは思わず舌打ちした。

ミツザネの見事な盾捌きは、このゲームのラスボスであるヒースク
リフの神聖剣に匹敵する程だった。

「ぬんー！」

その時、ミツザネの右ストレートの拳がキリトに迫った。

キリトは持ち前の反応速度で咄嗟に右手の剣を突き出し、ミツザネ
の拳と衝突させる。

その瞬間、凄まじい衝撃波と共にキリトが大きく後方に吹き飛ばさ
れる。

「ぐっ……！」

キリトは剣を突き立てる事で何とか減速する。

そのまま数メートルスライドしたところで何とか立ち上がる。

そんな彼をミツザネは見つめながら

「成る程……中々いいスピードがあんじゃねえか」

と感心したような笑みで言った。

「……アンタこそ、防御も固いし凄え馬鹿力だな。まるでヒースクリフみたいだ」

「ヒースクリフ？……ああ、このゲームのラスボスってやつか。

しかし、お前さんの反応速度はいいが……

……まだまだ半人前だな」

「……え？」

ミツザネがそれまでの柔和な雰囲気から一変し威圧感丸出しの声に変わり、キリトが戸惑いの表情を浮かべた瞬間。

キリトの目の前に、拳が迫っていた。

キリトとミツザネの間には数メートル間があつたはずだが、ミツザネはその距離をキリトですら認識が遅れるほどのスピードで詰めたのだ。

その直後、キリトが立っていた場所から大爆発が起きた。

「キリトくん!!」

アスナが思わず悲痛な叫びを上げる。

煙が晴れ、キリトとミツザネの姿が露わになる。

キリトはミツザネの右拳を、左右の剣を交差させる事で防いでい

た。

「よく防いだな。だが……!」

すると間髪入れずに、キリトの腹に向けてミツザネは膝蹴りを食らわせた。

「ぐはっ?!」

その衝撃で上に飛ばされたキリトの左足首をミツザネは右手で掴み、そのまま反対側に振り回して地面に叩きつけた。

地面に叩きつけられた衝撃で起き上がれないキリトをミツザネは容赦なく蹴飛ばし、数メートル吹き飛ばす。

僅か数秒間で受けてしまった凄まじい攻撃によって、中々起き上がれないキリト。ミツザネはこれまでスキルの類を使用していないため、キリトのHP自体はそこまで減ってはいない。

しかし逆に言うと、ミツザネはキリト程の人間をスキル無しでここまで一方的に戦ったのだ。キリトはその事実にあきつき、改めてミツザネの方を見やる。

そんな彼が目にしたのは、今まさに自分に向けて飛び蹴りを放つミツザネの姿だった。

キリトはダメージの残る体を無理やり動かしそこから飛び退く。

キリトのいた場所にミツザネの右足が直撃し、大きな爆音と共に土煙をまきおこす。

その煙の中から何かが飛来してきた。それは鈍い銀色の光を放つ物体。

ミツザネの円形シールドだ。キリトはそれを左手の剣で横に弾き飛ばす

——その背後からミツザネが拳を構えているのにも気付かずに。

「な……なに……?!」

キリトはそれに気づくと慌てて防御体制をとるが……

「もう遅えよ」

ミツザネの拳がゴールドの光を放ち、その拳がキリトの右頬を直撃した。

これは、ミツザネがコンバートした際に現れたユニークスキル《闘拳》、その内の上級技《虎伏絶倒》。

その衝撃でキリトは大きく吹き飛ばされた。

凄まじい勢いでキリトは転がっていき、そのまま広場に隣接する建物に激突した。

そのダメージでキリトのHPはイエローゾーンに達し、クリティカルヒットが決まった為《Winner Mitsuzane》と言う表示がフィールドに出た。

皆はあまりの衝撃に言葉が出ない。

「こ、これが……ALLOの生ける伝説、《星海坊主》さんの実力……!」

一連の戦闘を見ていたサツキが衝撃を隠しきれない様子で呟く。

キリトの実力はサツキを含めこの場にいる者全員が知っている。

そんな彼が、文字通り手も足も出ずに完敗を喫したその衝撃は凄まじいものだった。

「うそ……あのキリトが……」

リズベットもその結果を受け入れられない様子だ。

場はそれつきり静まり返る。

キリトは放心状態で座り込んでいる。

そんな彼に、ミツザネは歩み寄って行く。

「お前さんの実力はよく分かった。速さ、連撃数、防御力……恐らく、

数あるユニークスキルの中でも、お前さんが使う二刀流はその中心にあるバランス型。

まあ、バランス型と言えば聞こえはいいが……今のお前さんの二刀流は、はつきり言えば『中途半端』だ」

キリトはその言葉に目を見開いた。

「中途……半端……？」

「ああ。特別速いわけでもなければ、防御が固いわけでもない。

唯一反応は良いみたいだが、それだけだ。どれを取っても特別優れてる物は無え。

良いか？ バランス型と言うのはな……全てを極めて初めて武器となり得る。今のお前さんでは、防御に優れたヒースクリフの神聖剣にはどうあつても勝てなかつたんじゃねえか？」

ミツザネの言葉にキリトは何も言えない。

そう言っと思いつくのは、数ヶ月前のヒースクリフとのデュエル。確かにあの時、キリトは彼の防御を破ることが出来なかつた。

そしてつい先日。七十五層でのボス戦の後、ジェネシスが自分の代わりにヒースクリフと戦った。

だがもし自分が行っていたら……果たして自分は勝てただろうか？ ヒースクリフのあの防御を破ることが出来ただろうか？

いや、恐らく不可能だっただろう。ただでさえ向こうにはソードスキルが使えないというハンデがある中でがむしやらに剣を振ったところで全て弾かれて終わりだ。

「まあ落ち込む必要はねえよ。まだまだ先は長え……」

精進しろよ若造」

そう言っミツザネは背を翻して歩き出した。

—————

続いて二戦目。

ジェネシスがミツザネと面と向かって立っている。既にデュエル申請は済ませ、ジェネシスとミツザネの間にはカウン트가始まっている。

だがミツザネの雰囲気はキリトの時と違い何故か険しいものだった。

「…あの、お義父さん？まだ雫の事で怒ってんすか？」

ジェネシスが引きつった表情でミツザネに尋ねる

「当然、まだ許しちゃいねえよ……だがお前さんに一つ確認したいことがある」

「そこで一呼吸置き……」

「お前さん、雫ちゃんとはやることはやったのか？」

「ぶふっ?!」

ミツザネの問いにジェネシスを含めたその場の者たちが皆吹き出した。

「おい！それ今聞かなきゃいけねえ奴か?!」

ジェネシスが思わずそう叫ぶが、

「な、何故否定しないんだ?!もしやお前……!!」

「ち、違っ……あ、いや……なんつうか、ええと……」

ジェネシスは慌てて否定しようとしたがそれが出来ず、思わずテイアの方を見た。

「……………／＼／＼」

ティアは頬を真っ赤にして顔を背けた。

「(オiiiiiiiiiiii!!)」

ジェネシスはティアの反応に心の中でそう叫んだ。

「やったんだな? そうか、よく分かった……」

もうゆるぎさんぞおおお!!!」

その瞬間、デュエルカウントがゼロになり、ミツザネは目を血走らせながら飛び出した。

「ウワアアアア———!!!」

直後、広場にはジェネシスの悲鳴とともにいくつもの爆音が響いた。

—————

キリト、ジェネシスとミツザネのデュエルから一ヶ月が過ぎた。

キリトはミツザネから受けたアドバイスを意識し、ダンジョンでは速さだけでなく防御、攻撃力を鍛えることも意識して攻略に臨んでいた。

そしてある日、ジェネシスとキリトがとあるダンジョンにてレベリングをしていた時だった。

「……………ん?」

突如、二人の身体が青い光に包まれ、そのダンジョンから姿を消した。

次にジェネシスの視界に飛び込んできたのは、薄暗い森林だった。

先程までいた洞窟型ダンジョンでは無い。

一体ここは何なのか……ジェネシスはメニュー欄からマップを表示しようと右手を上げる。

「おい」

その時、ジェネシスの背後から凜とした女性の声が響く。

ジエネシスが振り向いたその瞬間、彼に向かって無数の黒い塊が飛来した。

咄嗟にその場から飛びのくと、彼の立っていた場所にそれらが無数に刺さった。

よく見るとそれは、この世界では全く見ない珍しい武器。

手のひらサイズの非常に小さな刃物で、クローバーのように四方向に刃が付いている。

「手裏剣……？」

ジエネシスが再び声のした方を向くと、そこには大木にもたれかかった女性がいた。

女性の髪は金髪。髪を後ろに団子状に束ねており、簪を差している。衣服は片袖のないスリットの入った着物を纏っており、スリットから見える足には網目状のニーソに黒いブーツを履いている。

そして口元には今も煙を吐くキセルを加えている。

西洋風のSAOの世界では珍しい、『和』の雰囲気を纏った女性。さながらそれは、『忍』のようだ。

「こんな所まで追ってくるとは……主らも随分と暇のようじゃのう」

女性はジエネシスの方は向かずそう言った。

「オイオイ、全く身に覚えが無いんだがな」

ジエネシスが肩を竦めながら言うが、

「しらばっくれるな。ここまで来たからには、もう容赦はせぬ……覚悟するがいい」

そして女性は両手に苦無を取り出し、鋭い表情でジエネシスに斬りかかった――

二十五話 ホロウ・エリア

薄暗い森林の中で幾多もの金属音と火花が飛び散る。

一人は大剣を持った男性、もう一人は両手に苦無を逆手に持った女性だ。

左右の手から素早く繰り出される苦無の斬撃を、ジエネシスは大剣の刃を最小限に動かすことで防いでいく。

「……ほう？主、見てくれよりは中々やるようじゃの？」

金髪の女性は感心したようにニヤリと口端を釣り上げて言った。

「舐めんじゃねーよクソアマ。こちとら毎日最前線で命張って戦ってんだよコノヤロー」

「どうやらそうらしいの。じゃが……主にも見えているのじやろう、わたちのカーソルが」

そう言っただけで女性はほくそ笑んだ。

彼女のカーソルの色は……オレンジ。つまり犯罪者プレイヤーだ。

「この通り、わたちはオレンジ……主を攻撃する事に何の躊躇もありません。死にたくなければ大人しく引きななし」

ジエネシスの大剣の刃を左右の苦無で抑え罅迫り合いを起こす中、女性は紫の瞳から鋭い眼光を放ちながら威圧感のある声でジエネシスに言った。

「引くも何も、元よりこっちはテメエから振っ掛けられた身なんだから……」

ジエネシスは女性の言葉に困惑した表情で返す。

「その表情……主、わたちらを追ってきたもの達では無いのか？」

「だから、何の話だっけさつきから」

だが彼の言葉は最後まで続かなかった。

「む……フィリア？」

彼女は突如視線をジエネシスから晒し、遠くの方に視線を移しそう呟くと、苦無を収めその場から跳び上がった。

勢いよくジャンプし、木の枝に飛び乗るとそのまま立て続けに木々を飛び移って移動していく。

「なっ……おい待て待てどこいくんだよ?!」
ジエネシスは慌てて駆け出し、彼女を追いかけた。

――

〈数分前〉

森林の中を、ひとりの少女が駆ける。

青いポンチョを纏い、フードを被っているため顔はよく見えないが、何かを確認するように時折顔を後方に向けている。

だが少女が後ろを見ている間に、数メートル先に青白い光と共に1人の少年が現れた。黒いロングコートを身につけたプレイヤー、キリトだ。

「――っ!!」

少女がキリトに気づくが少し遅かった。

少女は木の根に躓き体勢を崩し、そのままキリトと衝突した。

「うわっ?!」

キリトはその衝撃で後方に倒れこむ。

「くっ……はあああっ!!」

少女も倒れこむが、起き上がると同時に腰から短剣――ソードブレイカーを引き抜き、キリトに斬りかかった。

キリトは咄嗟に背中黒剣を引き抜き、それに応戦する。

刃同士が激しくぶつかり合い、その度に火花が飛び散る。何度も剣を打ち合う中、キリトはある事に気付いた。

「(っ!オレンジプレイヤーか!)」

オレンジプレイヤーは犯罪行為を躊躇わないというのがこのゲーム内での通説だ。例えば殺人であっても。

だとすると、下手に手加減してはこちらがやられる可能性があるあ

る。

キリトは意を決して剣を勢いよく振り下ろす。

それに対して少女はソードブレイカーを逆手に持ち替え、凹凸になっっている方の刃でその黒剣を受け止めた。

つばぜり合いが続く中、少女は目の前の相手をじっと見つめると、それまでの敵意むき出しの表情がやや軟化し

「…あんだ、誰？」

と覇気のない声で訪ねた。

「それはごっちのセリフだ！」

キリトはそう叫び返した。

2人の鏖迫り合いは続く。金属が擦れる音だけが辺りに木霊する。

その時だった。

「……?!」

キリトに向けて複数の黒い物体が飛来し、それに気づくとキリトは慌ててその場から飛び退いた。

黒い物体はキリトの立っていた場所を通過し、そのまま木の幹に刺さった。

木に刺さったのは手裏剣。飛んでいた高さや角度から、もし命中していれば間違いなく致命傷になっていただろう。

「ほう……どうやらこんな所にも、招かれざる客がノコノコとやって来ていたようじゃの」

すると今度は、手裏剣が飛んできた方向から別の女性の声が響く。

見ると、大木の枝の上に1人の金髪の女性が立っていた。

その衣装や口に啞えたキセルから、和の雰囲気醸し出している。

「つ……ツクヨさん！」

ソードブレイカーの少女は女性を見てそう叫んだ。どうやら彼女は『ツクヨ』という名らしい。

「遅くなったのう、フィリア。まさか主も、何処ぞの馬の骨とやり合ってるとは思っておらんかったが……」

そう言つて、ツクヨという女性は一度キセルを話して口から煙を「フウ……」と吐き、キリトの方に視線を移す。

「さて、主には一つ聞いておきたいことがある……

何故フィリアを襲った？」

ツクヨは鋭い目つきでキリトを見下ろしながらそう訪ねた。

「襲ったって……違う！俺は気がついたらこんな所に転移させられて、そしたら目の前にこの娘がいて、いきなり斬りかかって来たんだよ！」

キリトは慌てて弁明する。そんな彼を、ソードブレイカー使いの——『フィリア』という名の少女は疑わしい目で見つめていた。

しかしそれに対してツクヨは特に表情を変えすることもなくキリトの言葉を聞いていた。そして全て聴き終えると、再び煙を口から吐いて

「……もし普段なら、主の言葉など信じられぬ所ではあるが、どうやら強ち嘘をついているようではないようじゃな。現にわっちはさつき、主と同じ事を言う輩と出会ったのでな」

ツクヨは少し微笑を浮かべながらそう言った。

「俺と同じ事を……うま、まさかジエネシスが?!」

キリトは目を見開いてツクヨにそう聞き返した。

しかしその時だった。キリトとフィリアのすぐ横に何か飛び降りて来た。

キリトは何かがおきたのか訳がわからない様子だったが、フィリアはソードブレイカーを構えてかなり警戒している様子だ。

ツクヨも木から飛び降りてキリト達のすぐそばまで歩み寄った。

「やれやれ……何とか撒いたと思うておったが、人気者は辛いもうやがて煙が晴れ、その姿があらわになった時キリトは驚愕した。

骨だけで構成された身体。ムカデのような体型。胴体から伸びる4本の腕とそこから生える禍々しい大鎌。人間の頭蓋骨を模した怪物的な容貌。

忘れるはずもない。それはかつて、キリト達を大いに苦しめたモンスター……

「す、『スカル・リーパー』だと?!」

「む？主、この怪物を知っておるのか？」

キリトの声を聞き、ツクヨがキリトの方を見て尋ねる。

「ああ……こいつは七十五層のフロアボスだ。こいつを倒すのに、14人が犠牲になった」

「フロアボスが、どうしてこんな所に……？」

フィリアは小さくそう呟いた。

「なあ、ここではこんなモンスターが出るのか？」

「あんた達ならず者と話す事はないわ」

キリトはフィリアの方を見てそう尋ねるが、フィリアはキリトを信用していないのか取り合わない。

「『あんた達』？何か勘違いしてないか？」

だがその時だった。

スカル・リーパーの鎌がフィリアめがけて振り下ろされたのだ。

「危ない！」

キリトは咄嗟にフィリアの前に飛び出し、右手の黒剣でその鎌を受け止めた。

「ぐっ……(俺だけで受け止められるって事は、七十五層の時よりパラメータが低く設定されているな。けど、そう簡単に逃がしてくれる相手でもなさそうだ)」

「あ、あんた……どうして」

フィリアは何故キリトが自分を庇ったのか分からないようだ。

「なあ、君達！少しは戦えるんだろう？今は一時休戦にしないか？こいつの鎌は俺が食い止めるから、その隙にサイドから攻撃してくれ！」

キリトは鎌を押し返しながらツクヨとフィリアにそう提案した。

「な、何で私があんたなんかと……」

フィリアは拒絶の意を示すが、ツクヨが彼女の肩をポンと叩く。

「まあそう言うなフィリア。こいつを仕留めるチャンスは今しかない。今はあのお人好しのバカを利用して頂こう」

ツクヨはそう言いながら腰から手裏剣を取り出し、右手に短刀を逆手に持った。

「……っ、ツクヨさんが、そう言うなら」

フィリアは渋々という様子で了承した。

そして2人はキリトの両隣まで駆け出した。

「おい主。名は何という?」

ツクヨはキリトの隣に立つと、そう尋ねた。

「俺は……『キリト』だ」

「キリト……?ほう、主があのかの《黒の剣士》か。ではキリトよ。作戦は変更じゃ。鎌は受け止める必要はない」

「え?」

ツクヨの言葉に、キリトは目を丸くした。

「わっちが奴のヘイトを集める。主とフィリアはその間に奴を攻撃しなんし」

「あんたがヘイトを……?」

「わかった、助かる。それじゃ行くぞ!」

キリトの掛け声と同時に、3人は飛び出した。

まずは先制攻撃として、ツクヨは左手の手裏剣を投げた。

それは銃弾のような速さで真っ直ぐ飛んでいき、スカル・リーパーの右目に刺さった。

『キシヤアアアアアアアアッ?!』

目を潰されたスカル・リーパーは、怒り狂った様子でツクヨに飛びかかった。

そして右手の鎌を素早く振り下ろすが、ツクヨはそれが自分に届く前にその場から跳び上がった。

ツクヨが立っていた場所に鎌が命中し、轟音を立てて大きな土煙を上げる。

スカル・リーパーはそのまま首をツクヨが跳んだ方向に向ける。その視線の先には、余裕の笑みを浮かべながら木の枝の上に立つツクヨが居た。

スカル・リーパーはそれを見て更に激昂した様子でツクヨの立つ木に向かい、鎌でその太い幹を一閃した。

木は真っ二つに折れ、地面に倒れると共に消滅した。

しかし、その上空にはツクヨが左手に淡いピンクのライトエフェク

トを纏った手裏剣を構えていた。

ツクヨはその手裏剣を一思いに投げる。

淡いピンクの光を放ちながら、手裏剣は高速回転のままスカル・リーパーへと飛んでいく。

『手裏剣術《桜吹雪之舞》』

ツクヨは静かな声で技名を発した。

その直後、一つだった手裏剣が無数に分裂した。

分裂した手裏剣は、まるで雨のようにスカル・リーパーに降り注ぐ。無数の淡いピンクの光が空中で幾多にも飛び回るその光景は、まるで春の季節に舞う桜吹雪のようだった。

スカル・リーパーは腕を交差させて防御体制を取るが、手裏剣はリーパーの身体に次々と突き刺さっていく。

桜吹雪が止んだ後、スカル・リーパーの身体には夥しい数の手裏剣が刺さっている。

その後、スカル・リーパーは地面に着地したツクヨにめがけて突進して行くが、ツクヨは軽々とその場からジャンプし、スカル・リーパーを飛び越えて反対側の木に着地する。

そしてそこから次々と木から木へ飛び移り、スカル・リーパーを翻弄して行く。スカル・リーパーは彼女の動きについて行けず、周りもキヨロキヨロと見回すというシニールな動きをしている。その間にも手裏剣や苦無が飛来し、HPはどんどん削られて行く。

「(凄いな……あんな身のこなしが出来る奴なんて、攻略組でも中々居ないぞ。しかも手裏剣や苦無のスキルが存在するなんて聞いたこともない。

まるで忍者だな)」

キリトはツクヨの見せる戦闘に思わず感心したように見惚れていた。

「ちよつとー何ボーツしてるのよ!!」

すると、フィリアがキリトに向けて苛立った様子で叫んだ。

「えっ？あ、ああ済まない」

キリトは右手の黒剣を掲げ、骸骨がツクヨに気を取られている隙を

突いて胴体を斬りつけた。フィリアも同じように反対側から短剣で攻撃する。

だがそれによって、スカル・リーパーのヘイト対象がキリトとフィリアに切り替わる。骸骨は2人の方を振り向くと、そのまま左右の鎌を振り上げ、キリト達を叩き斬らんと構える。

しかし、それをさせないようにするのがツクヨの役目。

「おい、余所見か？」

ツクヨの声と共に、無数の苦無が飛来し骸骨の身体に突き刺さる。

『苦無術『自来也蝦蟇毒苦無』』

次の瞬間、スカル・リーパーの全身に紫の電流が走り、身体を痙攣させてその場に蹲った。

毒効果を伴った苦無を投擲するソードスキルだ。麻痺状態はものの数秒で解除されるが、それでも十分な時間稼いだ。

「今のうちじゃ！早くやりなんし!!」

ツクヨがそう叫んだ。

「……よし、行くぞー!」

キリトは背中にもう一つの翡翠の剣をオブジェクト化し、左手でそれを引き抜く。

左右の剣が青白い光を放ち、キリトは骸骨の狩手に斬りかかる。

二刀流十六連撃ソードスキル《スター・バースト・ストリーム》

「これで……終わりにするー!」

フィリアも短剣を掲げて骸骨の狩手に飛びかかった。

短剣ソードスキル《ファッド・エッジ》

オレンジの光を放つ刃が骸骨の身体を切り裂いて行く。

『キシヤアアアアアアアッ!!』

2人の攻撃を受け致命的なダメージを負ったスカル・リーパーは、仕返しとばかりにフィリアに向け右手の大鎌を振り下ろした。

「不味い、フィリア!!」

ツクヨが慌てて駆け出すが、とても間に合わない。

フィリアは覚悟を決めて目を閉じた。

「うおおおらああああ!!」

その時、赤黒い刃が骸骨の鎌を弾いた。

フィリアが目を開くと、そこには赤い髪に赤黒い衣服を纏った男性が立っていた。

「ジエネシス!!」

キリトが彼を見てその名を叫んだ。

「主…何故こんなところに」

「いやいや、てめえどんだけ逃げ足速えんだよ。てめえ追っかけてたら途中で見失っちゃまったじゃねえか。んで、あちこち歩いてたらなんか見覚えのある骸骨が見えたんでな」

ジエネシスはそう言ってスカル・リーパーの方に視線を移す。

「しかし、どうやらステータスはだいぶ低めに設定されてるらしいな？なら、こんな雑魚倒すのは朝飯前つてもんだ」

そして不敵な笑みを浮かべながら大剣を肩に担ぐ。

「ああ、お前がいるなら百人力だ。一気に行くぞー!」

キリトもそう言いながら左右の剣を構えた。

「全く…随分と勝手な奴じゃな」

ツクヨは呆れたようにため息を吐きながら苦無と短刀を左右の手に取った。

「はあ…もうなんでも良いや」

フィリアもやれやれと嘆息し、ソードブレイカーを構えた。

く数分後く

ジエネシスが加勢したあと、戦闘はよりスムーズに運んだ。

まあ、スカル・リーパーの方は既にHPが半分以下になっていたため、およそ戦闘らしい戦闘にはならなかったのだが。

「ふう……何とか倒し切れたな」

キリトが安堵のため息を吐きながら、左右の剣を背中に収めた。

「スカル・リーパー……こんなモンスター初めて見た」

「七十五層のボスに随分似てやがったな」

フィリアの呟きに対し、ジェネシスが続けて言った。

「キリトも同じ事を言っていたのう。何故にフロアボスがこんな所におるんじや」

「さあな……でも、ステータスは大分弱くなって助かった。同じステータスなら、俺たちは間違いなく全滅させられてた」

ツクヨの疑問に対し、キリトが応えた。ジェネシスもうんうんと頷いている。

そしてキリトはふとフィリアの方を向き、

「えっと……出来れば俺はしたくないんだけど、やっぱり君達とは戦わないといけないのか？」

キリトはツクヨとフィリアの方を向き、苦い顔で尋ねた。

「まさか。この流れで改めて戦おうなどと言うつもりはありません」

ツクヨがそれに対して苦笑いを浮かべながら首を横に振った。

「でも、あんた達……本当にあいつらの仲間じゃないの？」

フィリアがキリトとジェネシスに対し尋ねる。

「お前らさつきからそればっかだな。『あいつら』って誰だよマジで」

「いや、気にせずとも良い。ここを彷徨っていれば、いずれ分かる事じや」

ジェネシスが呆れた顔で答え、ツクヨがそれを遮る。

「しかし、主らも変わった奴らじやのう……わっちらのカーソルが見えておらぬのか？」

「すつごい今更な感じがするんだけど……まあそれどころじや無かつたしな。聞いたら答えてくれるのか？」

キリトがそう尋ねると、ツクヨとフィリアが少し顔を見合わせ、

「……いいわ、教えてあげる。」

私たち、人を殺したの」

静かな声でフィリアはそう答えた。

「ふーん。そっか」

だがそれに対し、ジェネシスは興味なさげに鼻を穿りながら言った。

「ちよつと……何よその反応？ 貴方の目の前にあるのは人殺しよ？ 何とも思わないの？」

「いやだって、俺も人殺しだし」

「なっつ?!」

「おい、ジェネシス！ それは……」

ジェネシスが告げた言葉にフィリアとツクヨは目を見開き、キリトがそれを遮ろうとする。

「ぬ、主……それはどう言う事じゃ？」

「どうもこうもそのまんまだよ。俺も人を殺したんだよ、それも20人近くな」

その瞬間、フィリアが腰から勢いよく短剣を引き抜き、構えた。

「寄せ、フィリア！」

「ツクヨさん！ こいつ、やっぱりあいつらの仲間だよ！ 人殺しを何とも思わない、殺人鬼に決まってる！」

今にも斬りかからんとする勢いのフィリアの腕をツクヨが制止し、フィリアはそんな彼女に対し険しい顔で捲し立てる。

「待ってくれフィリア！ 確かに、ジェネシスの言ってることは事実だ。でも、それには事情が」

「いいんだ、キリト。言う必要はねえ」

事情を話そうとするキリトをジェネシスが止めた。

「事情があんなら人殺しをしてもいいなんて道理はねえよ。俺がやった事は間違いなく悪だ。そしてそれはてめえらもな。」

けど、それを間違いだと思ってるてめえらは、まだマシな方なんじゃねえの？ S A Oには人殺しを楽しむような奴らだっでいるわけだしな」

「……それはあんた自身のことを言ってるの？」

「バーカ。俺をあんなクソつたれ共と一緒にすんなよ。」

少なくとも俺は、人殺しを楽しいなんざ思った事は一度もねえ。だが俺はあの時、どうしても殺さざるを得なかった、とだけ言っとくぜ」

ジェネシスがそう言うと、フィリアは剣を下ろした。

「……そう。あんたは沢山の人を殺してるけど、あいつらとは違うのね。ならいいわ」

そう言っつて短剣を腰の鞘に収めた。

「さて、とりあえず………ここは何処なんだ？」

「さあな、わつちらにもそれは分からん。一ヶ月前にここに飛ばされたのじゃが、生き残るのに精一杯でそれどころでは無くてな」

ジェネシスの問いにツクヨが答えた。

「一ヶ月前?!まさか、結晶無効化エリア………つて、普通に使えるじゃないか」

「この階層は分からなくなってるけど、アイテムやメッセージは普通に使える」

キリトがメニューを開いて確認するが、フィリアがそう説明した。

「転移結晶が無いのなら、俺のをあげようか?幾つか持ってきてるから」

「いや、いい。それは主らの物じゃろう?ならば自分で持つておきなんし。そこまで世話になるつもりはありんせん」

キリトがポーチから結晶アイテムを取り出そうとするが、ツクヨがそれを止めた。

「そうかよ。しつかし、これからどうするか……」

ジェネシスがそう呟いた時だった。

『ホロウ・エリアデータのアクセス権限が解除されました』

突如流れたシステムアナウンス。

「あ、あんた達、それ……!」

するとフィリアが、ジェネシスとキリトの手の方に視線を向けながら言った。

ジェネシスとキリトはその視線につられて右手を確認すると、そこには鍵のような光の紋章が浮かんでいた。

「おいおい……こりや一体なんだ？」

「さつきまでこんなものは無かったぞ……う？」

2人は右手の紋様をまじまじと見つめる。

「ねえ、その紋様よく見せてくれない？」

フィリアが2人の右手をとって間近でそれを見つめる。

「やっぱり同じ……」

「同じって何がだよ？」

フィリアの呟きにジェネシスが疑問符を浮かべる。

「主らのその手に浮かんだ紋様と同じものを、わっちらは既に見たことがあってな。その場所も知っておる」

「本当か?!そこに行けば、何か分かるかもしれないな……その、君達さえ良ければだけど、そこへ連れていってくれないか？」

ツクヨとフィリアは少し思案した後、

「別に構わない。でも、そんな簡単にオレンジ……いいえ、レッドを信用していいの？」

「なーに言ってるんだ。もう今更だろうが」

「そうそう。それに、SAOの中で命がけの戦いを一緒にしてくれたんだ。それだけでも信用に値するよ」

ジェネシスとキリトの言葉を聞き、フィリアとツクヨは軽く笑みを浮かべた。

「な、何だよ？」

「いいや。主らは宇宙一バカなお人好しじゃなと思ってってるな」

「い、一応人を見る目はあるんだけどな……」

「そうか。それは光栄と言っておこう……」

そう言えば、主の名をまだ聞いておらんかったの」

ツクヨが思い出したようにジェネシスの方を向き尋ねる。

「ん？あーそーいやそーうだったな。俺は『ジェネシス』だ」

「ほう？よもや《アインクラッド四天王》の2人とここで会うことになるうとは……僥倖というものじゃな。

わっちらは『ツクヨ』じゃ。以後知り置け」

「私は『フィリア』。よろしく」

「ああ。それじゃあ、行こうか」

キリトがそう言うと、フィリアとツクヨが先導する形で4人は歩き出した――

「ヒュウ。コイツは驚いた……最高のP・A・R・T・Yが始められそうだなあ」

――背後の木の陰からの視線に気づかず。

謎の人物はそれを見届けると、足元に一枚のカードを置いて姿を消した。

そのカードに書かれているのは……

トランプの『ジョーカー』。

二十六話 《幕間》 人斬りの男

その日、ティアやアスナ達はエギルの宿で休みを取っていた。珈琲や紅茶、ジュースなどを片手にガールズトーク（一名は男子）を繰り広げ、穏やかな時を過ごしていた。

だがそんな時間は、ジェネシスとキリトの位置情報が突如途絶えた事によって終わりを告げる。

彼女達は即座に店を飛び出し、手早く範囲や担当を決めキリトとジェネシスの捜索に当たった。

ユイとレイは店で待つように言い渡され、2人は彼女達と父親の帰りを大人しく待った。

だが、自身の親がもしかしたら危険な目に遭っている可能性もあるのに、大人しく待つことなどレイには出来なかった。

アスナやティア達が捜索に出て数時間が経過した時だった。

「ユイ、少しお外に出てきますね」

「え？でも、ママ達はここで待ってなさいと……」

「大丈夫。ちよつと街をぶらぶらするだけですから」

レイはユイの制止を聞かずに宿の扉を開けた。

危険なのは百も承知だ。しかし、それでもじつとしていられなかった。

早く父親——ジェネシスを見つけ、その肩に飛び乗りたい。その一心で、レイは遂に圏外に出た。

もしティアにバレたらきつと怒られるだろう。それも覚悟の上だ。

——待っていてください、パパ。直ぐにレイが行きますから

だがレイは、自身のこの軽率な行動を、すぐに後悔することになる……。

〜数十分後〜

レイが1人やって来たのは、薄暗い森の中だった。

自分よりかなり高い草木をかき分けながら、レイは单身森の中を進んで行く。

当然ながらその途中で何度もモンスターとエンカウトした。その度にレイは必死に逃げ、何とかここまでは無事逃げ切れたものの、その体力はもう限界が近かった。

呼吸が乱れ、足がふらつく。

だがレイを消耗させているのは、肉体的な疲れだけでは無い。

ここまで数時間、レイはたった1人でここまで歩いて来ていた。彼女はまだ幼い子供。当然ながら孤独がレイの心を蝕む。無論、誰かにメッセージを送ってここまで来て貰えばいい話なのだが、レイは母親であるティアの言いつけを破って来ていた。どのような顔をして助けを求められるだろうか。

たった1人という孤独と、言いつけを破った申し訳なさで板挟みになる中、レイはそれでも進む。ここまで来たら、何としてもジエネスを見つけ出すために。

だがそんな中、レイの目にあるものが映った。

高い草葉のせいで隠れているが、少し離れた場所に風でたなびく銀の髪が見えた。

「(ママ——！)」

レイが知る中で、銀髪の人物は1人しかいない。

もしかしたら、偶然自分は今自分が最も求める存在の近くに来たのかも知れない。

レイは一瞬、その場から駆け出すのを躊躇った。何故なら、レイはティアから言われた事を聞かずに外に出ているのだ。当然、キツイお説教が来るだろう。

だがレイはもう限界だった。肉体的にも精神的にも、今は兎に角誰かと一緒にいたかった。

「(……もう私は限界です。ママの所に行きましょう。そしてうんと

怒られましょう。しっかりと謝れば、ママもきつとわかってくれます
！」

レイはそう意を決して、疲れで震える足に鞭打ってその場から駆け
出した。

「ママー……っ!!」

「ぐわあああああつ!!」

だがレイの視界に飛び込んだのは、彼女の母親などでは無かった。
目の前にいる、2人の男性。

1人は一本の刀を手にし、もう1人はその刀で串刺しにされてい
る。

やがて刀で刺されていた人間は、ガラス片に変えて消滅した。
刀を持った男性の銀の髪が風でふわりとたなびく。

「え?」

レイは思わずそう発した。

その声に男が気づき、ゆっくりとレイの方に振り向く。

「っ?!」

その瞬間レイの両眼は見開かれ、身体は硬直した。
身につけているのは、ガンメタリックに光る黒いライダースーツ。
右手には銀の光を反射する刀が握られている。

その顔は中性的な顔立ちで、ティアと同じ銀髪は逆立っており、左
目は眼帯で覆われている。

その瞳は、禍々しい深紅の光を放っている。

男は冷ややかな目でレイを見下ろす。

「……見たな、小娘」

男は冷徹な口調でレイに言い放った。

——不味い！逃げなければ……!!

レイは頭の中で何度もそう繰り返すが、身体が動かない。

無理もない、目の前で人が殺され、しかもその犯人が自分を標的にしているのだ。幼いレイが恐怖するのは当然と言えた。いまのレイは正に蛇に睨まれた蛙だった。

男はそんなレイを見つめながらゆっくりと近づく。

「珍しい珍客だな。まさかこんな幼女が俺の目の前に現れるとは……」

男は口端を吊り上げながらそう言った。

そしてレイの直ぐ近くまでやって来ると、こう尋ねた。

「お前、こんなところで何をやっていた？」

「……あ……っ……」

だがレイは思うように声が出ず、ただ呻くような声しか出ない。

「ククツ、恐怖の余り声も出ぬか……まあいい」

男は不気味な笑みを浮かべながらそういうとゆっくりと右手の刀を持ち上げ……

それを振り下ろした。

「きやつ!!」

レイはそれによって後ろに吹き飛ばされ倒れ込む。

起き上がろうと腕に力を入れた瞬間、左腕に激痛が走った。

見ると、二の腕辺りに紅い傷口が出来ていた。

「……っ、ううっ……」

——痛い。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。痛い。

かつて感じたことのない激痛に、レイの両目からは涙が溢れた。

「ふん、痛いか？この刀は少々特殊でな……ペインアブソーバを無効

化する特性があるんだ」

男はニヤリと笑いながら刀を掲げ、そう言った。

「さて、俺には幼女をいたぶるような趣味はない……ひと思いに逝かせてやろう」

そして男は、再び刀をレイの方に突き付けた。

激痛と恐怖の中、レイは何とか言葉を発する。

「……………どう……………して……………」

レイの言葉に、男は平然と答えた。

「知れた事。俺はただの人斬りよ。人を殺すのが楽しくて堪らない……それ以外に理由など無い。

剣は凶器、刀はあくまで人殺しの道具だ。人の生き血を浴びてこそ刀は生きる……それをあの世で悟るがいい」

そして男は刀を両手で上段に構えた。

その目は本気で自分を殺す気の日だ。

—— いやだ……死にたくない、死にたくない！

—— 助けて、パパ!! ママ!!

レイは心の中で必死に叫んだ。

だが男は、無慈悲にレイに向けて刀を勢いよく振り下ろす。

「……………っ!!」

レイは咄嗟に顔を背けて目を閉じた。

だがその直後、『キーン!』と言う金属同士の衝突音が響く。

レイが恐る恐る目を開くと、目の前には今正に自分が助けを求めた存在がいた。

風に靡く白マントを羽織り、ジーパンに膝までの高さがあるブーツ、そして見慣れた銀髪。

彼女の母親、ティアが刀を逆手に持ち男の刃を受け止めていた。

「ま……ママ………」

レイは思わずそう呟いた。

男はティアの姿を確認すると、その場から飛び退いて数メートル後方まで下がった。

それを確認したティアは、ゆつくりとレイの方を振り向くと、両手

でレイの顔を包み込んだ。

「——大丈夫、レイ？怪我は無い？」

ティアは言う事を聞かずに外に飛び出した自分を叱るでもなく、ただ娘の無事を確かめた。

「ママっ……マママーっ!!」

レイは泣き叫びながらティアの胸元に飛び込んだ。

ティアは優しい微笑を浮かべながらゆっくりと彼女の頭を撫でる。

「ほう……貴様、その幼女の母親か」

するとその光景を見ていた男が感心したように呟く。

「レイ、少しだけ下がっててくれる？」

その声を聞いたティアは優しい口調でレイに言った。

レイは大人しく頷くと、少し離れた木の影に隠れた。

それを見届けたティアは、ゆっくり立ち上がって男の方に振り向く。

「む……女でその銀髪……白鞘の刀……そうか……ククククツ」

男はティアを見つめながらそう呟くと、不気味な笑い声を上げ出した。

「お前が四天王の一角……《白夜叉》か」

「貴様……私の娘に一体何をした？」

ティアは鋭い目つきで男を睨みつけながら低く怒気を孕んだ声でそう尋ねた。

「無論、貴様の娘がその場にノコノコとやってきていたので……殺すつもりだった」

男はあっけらかんと答える。

「俺の名は《ジャック・ザ・リッパー》……生粋の人斬りだ。ついさっき、その娘の目の前で1人殺したばかりだ」

ティアはそれを聞き、男……ジャックのカーソルを見ると、やはりそれは犯罪者を示すオレンジになっていた。

「何故だ。何の目的があって貴様は人を斬る？お前が何かされたと言うのか？」

ティアは刀の切っ先をジャックに突き付けて問いかけた。

「娘と同じ事を訊くのだな……それが楽しいからに決まっているだろう？人の死際に見せる絶望の表情や断末の声を聞くと、身体の奥底から湧き上がる快感……あれは他では味わえまい」

ジャックはニタニタと不気味な笑みを浮かべながらそう答えた。

「お前の娘も、死の間際になつたらどんな顔で喚いてくれるか……非常に楽しみだ」

「……レイに手を出してみろ。その時は容赦はしないぞ」

ティアは凄まじい殺気と威圧感を伴ってそう言い放った。

「ああ、記憶に留めておこう……だが」

するとジャックは、右手の刀を背中の鞘に収めた。

「今日の所は引くとしよう。お楽しみは後に取っておかなければならんからな、ククククツ……」

そう言つてジャックは背を向けて歩き出す。

だが数歩歩むと足を止めてティアの方を振り向く。

「一つだけ言つておこう、白夜叉……」

そう言つてジャックは一呼吸置き、

「……お前は、俺と同類だ」

「……なに？」

ジャックの言葉にティアは疑問符を浮かべる。

「自分でも分かっているだろう？お前の本性は修羅だ。」

お前がそれに目覚めた時……俺と同じ人斬りとなるだろう。いつかそれを思い知らせてやる」

ジャックはそう言い残すと、「ハハハハッ！」と高笑いをあげながら今度こそ森の奥へと姿を消した。

ティアはそれを見届けた後、レイの方に振り向きゆっくりと近づく。

「レイ……」

レイは両目から大粒の涙を流し、

「ママっ……ごめんなさい……私、ママの言う事を聞かずに……」

レイは泣きじやくりながらティアの言いつけを破って勝手にフィールドに出た事をひたすら謝った。

ティアはそれを見て優しく微笑みながらレイはを胸元に抱きしめた。

「いいんだよ、レイ。貴女が無事でいてくれて、本当に良かった……」
そう言いながら、レイの頭を優しく撫でる。

レイはそれで更に感極まって一層大きな声で泣いた。

だがティアの内心は穏やかでは無かった。

それはジェネシスの安否の心配も勿論だが、何より心に突き刺さったのは先程言われた言葉。

——お前の本性は修羅だ。

——いつかそれを思い知らせてやる。

ティアの中で、不穏な風が吹いていた。

二十七話 探索

ジェネシス達4人は、フィリアが見たという紋章の場所に向けて未知のフィールドを進んでいく。

「フィリア、ここは一体何処なんだ？」

「ここは『ホロウ・エリア』と呼ばれてるらしいわ」

キリトの問いに対し、フィリアはそう答えた。

「主らはどうやってここに来たのか、覚えておるのか？」

「あー、キリトとダンジョン攻略してたら変な光が出てきて……」

「回廊結晶のコリドーに似てた気がする」

ツクヨがそう問いかけると、ジェネシスとキリトが当時の事を思い出しながら答えた。

「突然転移させられた、というわけか……ならばわつちらと同じようじゃな」

「そのようね。ただ違うのは……」

「俺たちの手にある紋様か……」

そう言いながらジェネシスは自身の右手の掌を見た。

そこにはゴールドに光る鍵のような紋様が浮かんでいた。

手を握ったり開いたり、手を乱暴に振ってもそれは消えない。

「そんな紋様を持つてるプレイヤーは見たことがないわ」

「え？フィリア以外にも、ここにはプレイヤーがいるのか？」

フィリアから出た『プレイヤー』という単語にキリトが反応した。

「いるにはいるのじゃが、アレをプレイヤーと言えるかのう……」

「どういう意味だ？」

「普通の人間にしては、挙動がおかしいとしか言いようが無い。兎も角、百聞一見というやつじゃ」

フィリアに変わってツクヨがそう答えた。

「そっか、分かった。」

それで、俺たちは今何処に向かっているんだ？」

「あそこ」

キリトの問いに対し、フィリアが遠くを指差す。

その先には、広大な森林の上に浮かぶ巨大な球体が浮かんでいた。
「おーおー、でっかいキ〇タマだな」

ジェネシスがそう呟いた直後、彼の後頭部に苦無が突き刺さった。
「あべしっ?!」

ジェネシスはそう叫びながら倒れ込んだ。

そんな彼をツクヨは冷ややかな目で見下ろす。

「へえ、あそこか。フィリア達は中に入ったことはあるのか?」

「いいえ、入ったことは無いわ。そもそも私達じゃ入れないの。あんた達がいれば、入れる気がする。」

その紋様と同じものがあつたから」

そう言つてフィリアはキリトの右手を指差す。

「これか…スカル・リーパーを倒したことがきつかけのようだけど……」

「一緒に戦つた私達には出なかつたからね。あんた達がとつてるスキルに關係があるんじゃない?」

「こんな事が起きるスキルなんて聞いたことが無いけどな……」

キリトが首を傾げながらそう言つた直後。

『規定の時間に達しました。これより《適正テスト》を開始します』

という無機質な声のシステムアナウンスが流れた。

「い、いきなり何?!」

「何だ、今のシステムアナウンスは……《規定の時間》、《適正テスト》? おいフィリア、これは一体なんだ?」

「私に聞かれても困る!」

キリトが尋ねるがフィリアをそう突っぱねた。

《適正テスト》、とか言つてたな……」

「ああ、わっちにもそう聞こえた」

いつの間にか復活したジェネシスと、ツクヨもそう呟いた。

「……何にしても、面白いじゃ無いか。ここをクリアして、テストとやらに合格すればいいんだろ?」

するとキリトは不敵な笑みを浮かべながらそう言つた。

ジェネシスは「出たよ…」と頭を抱えている。

「あ、あんた……こんな状況でよくそんな前向きなこと言ってもらえるわね」

フィリアが呆れたような顔で言った。

「この状況で、テストとやらを回避できると思うか？」

それに……未知のフィールドに出ると、やっぱりわくわくしちゃうんだよな！」

キリトは楽しそうな雰囲気ですう言った。

「全く……主はただのゲームバカのようにじゃな」

「気にしたら負けだ。こうなったキリトくんはもう止められねえ。完全にイキリトモードになってんよ」

困惑するツクヨをジェネシスがそう諭す。

「とは言え、俺たちはこのエリアに関しては何の情報も持っていないからな……」

フィリア、ツクヨ。これまでに君たちが戦った周辺のモンスターの情報を全部くれないか？あとはこの状態異常やトラップの傾向、アイテムのドロップ率それから……」

「分かったから！一度にいろいろ言わないで、わかんなくなる！」

早口で捲し立てるキリトをフィリアがそう遮った。

「バーカ。んなもん行き当たりばったりでどーにかなんだろう」

「それはそれで問題がありません」

呑気な口調で言うジェネシスにツクヨが冷静に言った。

—————

途中、様々なモンスターとエンカウントし、時には何とか無視して振り切って進み続けた。

戦闘の際はツクヨがヘイトを集めその間にキリト・ジェネシス・

フィリアが攻撃するというスタイルをとっていた。

そうやってフィールドを進むこと数時間。

『クリアを確認しました。承認フェイズを終了します』

突如再び流れたシステムアナウンス。

「またか、このアナウンス……」

ツクヨが辺りを見渡しながら呟いた。

『承認フェイズが終了』……て事は、テストとやらは終わったみたいだな」

「そうみたいね、結局何のテストなのかはわからないけど……」

キリトの呟きにフィリアが頷きながら言った。

「んじゃ、とつとこのマークがあるところに行こうぜ」

ジェネシスがそう促し、4人は再び歩きだす。

「そう言えば気になってたんだけど、ツクヨが使ってるスキルってどんなやつなんだ？」

歩いている最中にキリトがそう問いかける。

「わたちのスキルか？ああ、《忍術》と言ってな。

潜伏、隠蔽、索敵、投剣、体術スキルを上げていたら出現していたのじゃ」

「成る程……情報屋のスキルリストには載ってないから、恐らくはツクヨ専用のスキルなのかもな」

キリトがメニュー欄から現在公開されているスキルの一覧を見ながら言った。

「けどよ、手裏剣とか苦無はどうしてんだ？あんだだけ投げたりや直ぐに無くなんだろ？」

「苦無や手裏剣はわたちが自作しておる」

「自作?!じゃあ、ツクヨは鍛冶スキルも持ってるのか？」

「鍛冶だけではないぞ。軽業なら裁縫や料理を持っておる。この衣装もわたちの自作じゃ」

そう言ってツクヨは自身の着物をちらつかせた。

「全部自分でやり繰りしてたのか……」

キリトはツクヨを感心したような目で見つめる。

「いいや、わっち一人でやってる訳では無いぞ。剣を作るにしても、素材がなくては何も作れぬ。」

その点、わっちはフィリアに大いに助けられておるのじゃ」

ツクヨはそう言ってフィリアの方を見遣った。

「そ、そんな、私なんて……」

「謙遜するな、トレジャーハンター」

「と、トレジャーハンター？」

ツクヨの言葉にキリトが疑問符を浮かべる。

「まあ、自称だけどね。ダンジョンに潜ってモンスターと戦うより、レアアイテムを狙って宝箱を探したりする方が私には向いてると思っ
て」

「それが生き残るのに結構重要なやつである事も多いしな」

フィリアの説明にジェネシスも頷きながら同意する。

「さて、積もる話はこれくらいにして、早く行こうか」

ツクヨがそういうと、四人は更に歩みを進めた。

数分後、フィリアが何かに気づき指をさした。

「ほら、あそこ！」

フィリアが指差した方向には、青い逆さになった立体物が。その側面には、フィリアの言った通りジェネシスとキリトの掌に浮かぶものと同じマークがある。

「成る程、たしかに同じだな」

「二人とも、試してくれる？」

フィリアにそう言われ、ジェネシスとキリトは右手の掌を青い装置にかざす。

すると、青白い光と共に、回廊結晶と同じコリドーが出現する。

「ビンゴだな」

「ああ、これであの球体の中に行けるんだな」

ジェネシスとキリトは満足そうに言った。

「多分この先には、《ホロウ・エリア》の秘密が隠されてると思う」

「同感じゃな。見ただけでも何かあるのは明白じゃからのう」

「…よし、んじや行くか」

そしてジェネシスが最初にコリドーの中を潜り、キリト、フィリア、ツクヨもそれに続いた。

ジェネシス達が転移した先は、これまで彼らが歩んできたフィールドに比べると全く雰囲気の違い場所だった。

中はプラネタリウムのような天井に覆われ、周囲には様々なモニターが付いている。そしてその中央には、黒い長方形の物体にキーボードが付いている。

「コリヤまた……随分と変わった場所だなオイ」

ジェネシスが辺りを見回しながら呟いた。

「む？どうやらここは《圈内》のようじゃな」

ツクヨがメニューを見つめながらそう言った。

「ああ、本当だ。でも、ガーディアンは……」

「……来てない、みたいね」

もし、オレンジプレイヤーが安全圏内に入ろうとすると、それを阻止するためにガーディアンと呼ばれるモンスターが彼らを排除しようとして動き出すのだが、このエリアではそれが無い。それは、ここが通常のルールから外れた場所であることを示していた。

「何にしても、これで安心して調べられるというものじゃな」

その後、彼らは手分けをしてこの未知のエリアの探索に入った。

キリトは中央にあるキーボードとその画面を見ていた。

「(何だこれ……実装…エレメント……?)」

へえ、ここは『管理区』と呼ばれてるのか」

キーボードを操作しながらキリトはどんどん情報を引き出ししていく。

「ねえ、ちよつとここつちにきてー！」
すると、フィリアの声が管理区内に響く。

3人がフィリアの元に向かうと、そこにあつたのは……

「転移門、だよな？」

「間違い無いな……やったなフィリア、ツクヨ!!これで出られるぞー！」
キリトは歓喜の表情でフィリアとツクヨに言うが、フィリアは何処か思い詰めた表情をしていた。

「出られるか……よかったね」

「どうしたんだ？あまり嬉しそうじゃ無いな」

するとツクヨが、フィリアの様子に気が付き

「済まぬな、わっちらはもうしばらくこの《ホロウ・エリア》を探索する。主らは気にせず戻りなんし」

「……そうかよ。なら、来るときはまた連絡させてもらうぜ」

「ああ、そのときはここで待っておるぞ」

ジェネシスがそう言うと、ツクヨは頷きながら答えた。

「それじゃ、またなー！」

キリトの言葉を最後に、ジェネシスとキリトは青白い光に包まれて姿を消した。

「またな、か……」

フィリアは思い詰めた表情を浮かべたまま、ジェネシス達がいた転移門を見つめる。

そして徐に転移門に入り、

「転移……」

と口にする。

瞬間、フィリアは青白い光に包まれる……が、光が止むと彼女は未だにそこに居た。

『システムエラーです。ホロウ・エリアからは転移出来ません』

と言うシステムアウンスが鳴る。

「……ねえ、ツクヨさん。私たちって、一体なんなんだろうね……？」

「フィリア……」

どこか悲しげな表情を浮かべるフィリアを、ツクヨはただ見つめる

ことしか出来なかった。

——Whyそののししかかめめっっ面面はは何何だだ?
?

直後、管理区内にそのような声が響き、ツクヨとフィリアは咄嗟に武器を構える。

しかし辺りには彼女たち以外誰も居なかった。

「ツクヨさん、今のって……?」

「わっちにも分からん……」

く七十六層・アークソフィアく

街の中央に設置された転移門が青白く光り、中から2名の男性プレイヤーが出現する。

「アークソフィア……戻ってこられたのか……」

キリトが辺りを見渡し、安堵のため息をついた。

「あー…何だろ、こう言うの。『実家に戻ったような安心感』ってやつ？」

「それ、すっごくよくわかるよ……」

ジェネシスの呟きにキリトは頷きながら同調する。

「転移門の設定は……よし、あそこにも行けるみたいだな」

「あそこは『ホロウ・エリア』と言うんだな……フィリアとツクヨはそう言っていた。とてもPKをする様な子たちには見えなかったけど。彼女たちって一体何者なんだろうな……?」

ジェネシスが転移門の設定を終え、キリトはそこで出会った2人の女性の事を思い出していた。

すると遠くから足音が近づいてくる。

「き、キリト君！」

「ジェネシスさん!!」

やって来たのはリーファとシリカ。

「よ、よかった〜……私てつきり……」

一緒に来ていたサチも安堵の表情を浮かべる。

「リーファにシリカ、それにサチも……一体どうしたんだ？」

キリトが彼女達にそう尋ねる。

「『どうしたんだ』はこっちのセリフだよ!びっくりしちやった……」

「お二人の位置情報が完全にロストしちやって……」

「今は生命の碑も確認できないから、もしかしたらなんて思っ……」

リーファ達は口々にそう言う。

「そうか……そりゃ悪かったな」

ジェネシスはバツの悪そうな顔で言った。

するとまた新たな足音が近づいて来た。

「き、キリトくん！」

やって来たのはアスナ。

「や、やあアスナ……」

キリトは引きつった笑顔で手を振った。

「だ、ただ大丈夫だったの?!」

「お、落ち着けアスナ……」

キリトは何かアスナを宥めようとしている。

それを微妙な表情で見つめていたジェネシスだったが、ふと背中に突き刺さるような視線を感じ、ゆっくりと後ろを振り向く。

「……………」

そこにはジェネシスを鋭い視線でじつと見つめるティアがいた。

「あ、えつと……ただいま〜」

ジェネシスは引きつった表情でティアに言った。

しかしティアは何も言わずに黙ってジェネシスの方に歩いて来る。

「あつ、ちよ、ちよつと待て落ち着け! 今日のは不可抗力だ!! こっちにも色々あつたんだよ!

だがティアは尚も歩みを止めない。

これは鉄拳が来そうだとジェネシスは覚悟した。

しかしティアは、何も言わずにジェネシスに抱きついた。

「お、おいティア……?」

「……………」

戸惑うジェネシスの耳元で、ティアはそう言った。

「パパー……っ!!」

すると今度は、彼の愛娘であるレイまでが抱きついて来た。

「パパ……すごく、すごく心配しました……!」

レイは両目に涙を溜めて、声を震わせながら言った。

ジェネシスはその彼女達の頭を優しく撫で、

「……………心配かけて済まねえな。事情はちゃんと話す。とりあえず宿に戻ろうぜ?」

出来る限り優しげな口調で言うと、2人は黙って頷き、歩き出した。

……………

宿屋の一階にある酒場には、ジエネシス達のよく知る人物達が待っていた。

「あーっ！帰って来た!!」

鍛冶屋の少女、リズベツトが彼らを指差し叫んだ。

「だから言ったでしょ？どうせその辺をフラフラ歩いてるだけでその内帰って来るって」

椅子に腕を組んで座るシノンが落ち着き払った態度で言った。

「お二人とも、無事で何よりです！」

「とても心配したんですよ！」

黒白の兄妹、サツキとハツキも安堵の表情を浮かべて言った。

「ん？何だ、生きてたのかてめえら」

部屋の一角で腕を組みながらミツザネはため息をつきつつ言った。

「なんか冷たくないすかお義父さん……」

「嫁を放ったらかしてこんだけ帰りが遅えんだ。浮気でもしてたのか？」

ミツザネは揶揄うように言った。

「そ、そんなわけ無いじゃないですかミツザネさん！あれは不可抗力だったんですよ！」

キリトはそう叫んで否定する。

「不可抗力？それってどう言う事？」

サチが首を傾げて尋ねる。

「ああ。あの日、俺たち2人でダンジョン攻略に出てたろ？そんな時に突然転移させられてよ」

ジエネシスは頷いてそう説明した。

「《強制転移》、と言うやつかしらね……私やリーファと同じ」

「ええっ?!それじゃ2人は、別の世界に飛ばされたと言う事ですか?」

同じような出来事を体験してこの世界にやって来たシノンとリーファがそう言うと、キリトは首を横に振って否定した。

「いいや、俺たちが飛ばされた先は、間違いなくアインクラッドの中だった。ただ、《隠しエリア》みたいな感じなんだよ」

「《隠しエリア》……ゲームではお馴染みのワードですけど、まさかそ

んなものがこのアインクラッドにもあるんですか?」

サツキは《隠しエリア》と言う単語に興味を示したのか、そう尋ねる。

「ああ。《ホロウ・エリア》つつうらしいが……通常のアインクラッドの各層とは違う感じなんだよな。出てくるモンスターも強えのぼつかだし、高難度エリアってどこか」

ジェネシスは首を縦に振って総説明する。

「高難度エリア……」

未だレベルに不安が残るシリカが少し不安そうな表情を浮かべ、同じく七十六層で戦うにはまだまだレベル不足気味なサチやリーファも同じような表情を浮かべる。

「でも、そこにいる強いモンスターを倒せば、それだけ強力な装備やアイテムが出る可能性もある。

だから俺たちは、《ホロウ・エリア》を探索する事にしたんだ」

キリトがそう言った。

「でも、そんなエリアが丸々未発見なんて事、あるのかしら……」

「レイ、何かわかる事はある?」

アスナがそう口にし、ティアがレイの方を向いて尋ねる。

「たしかに、アインクラッドには現在様々な事情で非公開になっているエリアがあります。ですが、それはゲーム開始時に全て封鎖され、一般のプレイヤーではアクセスできないようになっていきます」

「普通のプレイヤーが入る手段はねえって事か」

「その通りです。ですが、皆さんもご存知の通り現在カーディナルシステムは不安定な状態です。それを考えると……無いとは言い切れません」

レイの説明にジェネシスがそう尋ね、かわりにユイがそれに答え

た。

「そうなんだ……」

「ありがとうレイ、ユイ」

ティアは笑顔で彼女達の頭を優しく撫でる。

「いいえ。ただ、現在のカーディナルシステムの稼働状態などがわか

ればいいのですが……」

「いやいや。今の説明で十分だレイ」

「パパのお役に立てたなら嬉しいです！」

申し訳なきように言うレイに対し、ジエネシスは優しく言った。

「ねえユイちゃん、レイちゃん。さつきキリトが言ってた通り、そこって強力なアイテムがあつたりするのかな？」

「可能性としては十分にあると思います！」

するとリズベットがそう尋ね、ユイは頷いて答えた。

「そつかあ……新しい素材、未知のアイテム……うふ、うふふ……」

リズベットはそれを聞くと、一人で楽しげな笑みを浮かべた。

「じゃあ、あたしやピナの強化も……！」

『きゆるるるっ！』

シリカがピナを見つめながら呟くと、ピナも楽しそうに羽ばたく。

「私も、そこに行ったらみんなに追いつけるかな……」

「なら、僕とハツキの強化も……」

「そうだね、お兄ちゃん！」

サチとサツキ、そしてハツキもそう呟く。

「私の武器強化も出来るかもしれない……」

「私も、今よりもっと……！」

シノン、リーファも続けて言った。

「ちよつと！みんな行くつもりなの?！」

「まあいいじゃ無いかアスナ。こいつらだって無事に帰ってこれたんだし」

アスナが皆の様子には目を丸くして言うが、ティアがそれを宥めた。

「それに、向こうで強力なアイテムやスキルが手に入れば、攻略組の戦力強化にも繋がる。そうなれば、結果的に百層攻略も早まるしな」

キリトもアスナにそう説明する。

「……まあ、それもそうね。」

なら、私も行くわ。キリトくんだけそんな危ないところに行かせられないもの」

「当然私も行く。私自身、その《ホロウ・エリア》とやらを實際見てみたいしな」

アスナとティアもそう決意して言った。

「おう。よろしく頼むわ」

ジエネシスも満足げな顔で言った。

「全く、近頃の若え衆ってのは血気盛んな奴らばかりだ……ま、嫌いじゃねえけどな」

ミツザネは彼らを見つめると、ため息を吐きつつも口元に笑みを浮かべながら呟いた。

「それに、向こうで知り合った人もいるしな」

「あつ、バカー！」

——ピシッ!!

ジエネシスが止めるが時すでに遅く、キリトがそう呟いた瞬間に場の空気は確かにその音を立てて凍りついた。

「……もしかして……!!」

アスナが険しい表情で呟き、周りの少女達もジト目ジエネシス達を睨む。同じ男性プレイヤーのサツキはと言うと苦笑いを浮かべていた。

「パパ、その人って……」

「もしかしなくても女の子の人、ですよね？」

彼らの愛娘であるユイとレイも険しい表情で尋ねた。

「よくわかったな。フィリアとツクヨって人と向こうで知り合ったんだ」

キリトはあっけらかんとそう答える。

「ほらねええー!!」

「私たちが心配して探し回ってる間、お前達はまた新しく女性を口説いていたと言うわけか」

アスナがキリト達を指差しながら叫び、ティアもやれやれと首を振りながら呟いた。

「異議あり!!」

「そうだよ！口説くとかそんなんじゃないやなくて、たまたま転移したら目

の前に女の子がいて、そこにスカルリーパーが出てきたから一緒に戦っただけだよ!!」

ジェネシスが勢いよく立ち上がりながら叫び、キリトも必死になってそう言った。

「どうだか。どうせ……『力になってやりたいんだ』……」

とか言ってきたんだろう?」

ティアはキリトやジェネシスの口調を真似ながら言うと、キリトは「うっ……」と何も言えなくなった。

「ほう? 妻子を持つ身でありながらこんだけ女侍らせて、その上まだ飽き足りねえとは。これは、てめえらの精神を一度叩き直さなきゃ行けねえようだな」

するとジェネシス達の背後からミツザネが拳を『ゴキゴキ』と鳴らしながら近づいてくる。

「ウエエ?! チョ、チョットマツテクラサイヨオトウサン!!」

ジェネシスはそれを見て思わず滑舌が悪くなるほど早口になって制止する。

「何、圏内で死ぬことはねえんだろ? なら大丈夫だ……死ぬような痛みが起こるだけだ」

そう言ってミツザネは拳を振り下ろす。

その瞬間、凄まじい轟音と悲鳴が宿屋に木霊した。

その後、ミツザネの鉄拳を受けたキリトとジェネシスは女子達からの質問攻めにあった。フィリアとツクヨとは一体どんな女性なのか、ホロウ・エリアとはどんな場所だったのかを具体的に聞かれ、二人は見たことをそのまま全て話した。

やがて時間は深夜になり、皆は各々自分の部屋に入って就寝準備に入った。

「お、おいティア？」

するとティアはジェネシスの手を掴んでやや強引に自分の部屋に引っ張っていく。

そして自分の部屋のドアを開けて中に入り、ドアを勢いよく閉めた瞬間……

「——っ！」

ティアはジェネシスの首の後ろに手を回し、その唇を自身のそれで思い切り塞いだ。

先ずは唇同士が触れ合うだけのキスを交わし、そして自分の舌を彼の口内に強引に押し込んで貪るように舐め回す。

「っ、おい、何しやがんだ……」

ジェネシスは無理やりティアを引き離す。

ティアはと言うと、顔をリングのように紅潮させ潤んだ瞳でジェネシスを見つめていた。

だがティアはそれだけで何も言わず、彼をベッドに押し倒した。

そして馬乗りになり、両手で挟み込み、

「バカっ……何も言わずに居なくなつて……私、どれだけ心配したと……っ」

ティアは両目から涙を流しながら言った。

「それは……悪かつたって。でもあれは」

「聞きたくない。言い訳なんていい」

ジェネシスの弁明の言葉すらもティアは遮る。

「何も言わずに勝手に居なくなるような悪い子には、お仕置きしないとね……」

ティアはメニュー欄から《倫理コード》設定を引き出し、それを解除する。

「……ああ、わかったよ。なら、こんな悪い子にふさわしい罰をくれ、お嬢さん」

ジェネシスはティアのやりたい事を察し、自身も同じようにメ

ニューを操作する。

それを確認したティアは、勢いよく彼に覆いかぶさった――

――

〈同時刻〉

その頃、アークソフィアの街の一角に青白い光とともに、一人のプレイヤーが現れた。

「……………ん……………あ、れ……………」

どうやらその人物は女性のようだ。やや高め的身長に身の丈ほどの純白のドレスを見に纏い、上着として桜色のパーカーを着ている。紫の長髪に同じく紫の瞳が暗闇の中で妖しく光る。

「えっ……………ここは……………私、なんで……………」

少女は不思議そうな顔で辺りを見渡す。

すると「あつ」と何かを思い出したように声を上げ、ゆっくりと歩き出す。

街には桜の木が咲いており、真夜中の街頭が灯る街で桜の花びらが美しく舞い散る中、少女は進んでいく――

二十八話 紫の少女

ジエネシス、キリトがホロウ・エリアから帰還してから数日が過ぎた。彼らは皆、ゲームクリアに向けて迷宮区の攻略を進めていた。

その日もジエネシスは一人、迷宮区攻略に行くため、七十六層アークソフィアの街を歩いていた。

「……………」

だが街を歩く中、ふと後ろから視線を感じ振り返る。

しかしそこには誰もおらず、気のせいかと思いき直し再び歩き出す。

その後も街を歩き続けたが、ジエネシスは例の視線をずっと感じ続けていた。

「(仕方ねえな……)」

ジエネシスは街角に入り、そこで足を止める。

そして振り返り、

「おい、いつまで下手くそなストーキング続けるつもりだ？もうバレットつから大人しく出てこいコラ」

腕を組んで仁王立ちし、そう告げる。

しばしの沈黙ののち、「うふふ…」という笑い声がひびき、

「やっぱり、気づいてたみたいですね」

柔らかな女性の声が聞こえ、足音とともに建物の影からその人物は姿を現し、ジエネシスの方に正面を向けて立ち止まった。

声から察していたが、性別は女性。身長はティアよりも低いくらい。真っ白なドレスを身につけ、足はヒールを履いている。上半身には薄い桜色のパーカーを羽織っている。

髪は紫色の長髪で、左側には赤いリボンをつけている。

やがて少女は、髪と同じく紫の瞳をジエネシスに向け、穏やかな口調で話しかけた。

「こんにちは」

ジエネシスは依然として険しい表情で彼女を見つめたまま、こう尋ねた。

「今までに会った事は……ねえよな？」

それに対して少女は頷き、

「ええ。これが初対面、初めましてですよ。

私は『サクラ』。以後、よろしくお願いいたしますね」

依然として人の良さそうな笑顔のまま、少女は自身を『サクラ』と名乗った。

「サクラ、ね。んじや単刀直入に聞かせてもらおうが……何で俺の後をつけてた？」

「う〜ん……特に理由は無いですが、強いてあげるなら……貴方に興味があつたから、ですかね」

「は?」

ジエネシスの問いにサクラはそう答え、思わぬ返答に困惑する。

「興味があつたから、だと?」

「ええ。ジエネシスさんって、凄く強いのでしょうか?ここまで攻略組を陰で支え続けた立役者、《暗黒の剣士 ジエネシス》。その名を知らない人は、このアインクラッドでは居ないと思いますよ?」

「あつそ。まあそれはいいんだ……てめえが俺をつけてたのは、本当にそれだけが理由なのか?」

ジエネシスがそう問いかけると、サクラは目を丸くして首を傾げた。

「そうですよ。ほかにどのような理由があると言うのですか?」

「自分で言うのも何だが……俺が有名なのは多分悪い意味でだ。多くのプレイヤーは俺の事嫌ってるはずだ。

だから例えば……てめえは俺を嫌うプレイヤーから向けられた差し金、とか」

しばらく目を丸くしたまま聞いていたサクラだったが、やがて吹き出すと「あははははははっ!」と笑い始めた。

「な、何がおかしいんだよ?」

「あははっ! いえ、あんまりおかしい事を言うものですから、つい」

「……そんなに変なこと言ったか俺?」

ジエネシスは未だに笑っているサクラをジト目で見つめながら言った。

「ええ。だっておかしいじゃ無いですか。仮に貴方の言う通り、私が貴方を……そうですね、極端に言えば殺すためにやって来たとしてましよう。」

だとしたら、ダメージを与えられない圏内でわざわざこんな事をする意味がありますか？貴方を殺すのであれば、圏内では無くフィールド上で貴方を狙うべきですよね」

「まあそりゃそうだわな……結論から言つて、てめえは俺に敵意とかは持ってない、と思つていいんだな？」

「勿論ですよ。だつて……理由がありませんしね」

「そうかよ……」

ジェネシスはそう言つて一旦区切り、

「んじやもう一つ質問だ。俺に興味があるとか言つてたが……てめえ、俺の事どこまで知つてる？」

「どこまで？うくん……そうですね。貴方の事は、結構前から見ていたので、割と知つていますよ？」

「結構前つて、いつからだ？」

「七十五層のボスを倒した時から」

「何……？」

サクラの言葉にジェネシスは目を見開いた。

あの時、七十五層のボス戦に彼女のようなプレイヤーは間違いなくいなかった。

「いや、俺の索敵を掻い潜れる程の隠蔽スキルを持つてるやつだ……ボス戦の影から見てた可能性も無くはねえか……」

ジェネシスはそこまで考えると、

「なら、これが最後の質問だ……ずばりてめえは何者だ？」

「ん？それつて、私のことをもつと知りたい、と言ふことでしょうか？」

そう言ふとサクラは「うふふ」と口元に手を当てて悪戯な笑みを浮かべ、

「貴方つて、結構積極的な方なのですね」

「うっせ。いいから答えろ」

「いいえ、貴方の質問はここまで。もし答えが欲しいのであれば、この後私と付き合ってくださいいな」

だがサクラは底知れない微笑を浮かべたままジェネシスにそう言っただけだ。

ジェネシスはそれを聞きたため息をつき、

「はあ……仕方ねえ。なら今回は諦めるわ。続きはまた今度会った時にするぜ。俺はこの後迷宮区に行かないやならねえんでな」

「迷宮区に行かれるのですか？あぁ、そうだ！

どうせなら、私もご一緒させてくださいませんか？」

するとサクラは両手をポンと叩き、ジェネシスにそう提案する。

「は？いきなり何言い出すんだお前。ふざけてんのか？」

「まさか。寧ろ大真面目ですよ。私は貴方に興味があつて、貴方も私の事を知りたがつてる……なら、これから共に攻略すれば、互いの目的は達成されると思いませんか？」

「確かに一理ある。だが迷宮区に行くのならテメエの命がかかるんだぞ？」

まあ、万が一の時は守ってやらんでもねえが……てめえの命の保証は出来ねえぜ？」

「心配には及びませんよ？だって、私……こう見えて強いですから」

サクラは不敵な笑みを浮かべながらそう言った。

「大丈夫です。足手纏いにはならないと約束しますよ？」

自信満々な表情で言うサクラに対し、ジェネシスはもう何も言えなくなり、嘆息して振り返ると歩き出した。

「……分かった。そこまで言うならもう何も言わねえ。好きにしろ」

「えへっ、やった♪では、少しの間宜しくお願いしますね」

サクラはステップを踏みながらジェネシスの隣に立つとそのまま並んで進み始めた。

〈迷宮区〉

薄暗い黒曜石の煉瓦造りの道を、ジエネシスとサクラは進んでいく。

だが淡々と歩くジエネシスに対して、サクラは楽しそうに鼻唄を口ずさみながらくるくると回ったり小刻みにステップを踏んだり、踊りながら優雅に進んでいく。

「お前……さつきから何やってんの？」

「これは《舞踏スキル》ですよ。興味があつたので取ってみたんです」

サクラはそう答えると尚も軽いステップを踏んでいく。

「《舞踏スキル》……そんなもんがあつたんだな。

けどまさか、それだけだなんて言うつもりはねえよな？」

「もう、心配性なんだから。大丈夫ですよ、必ずお役に立ちますから……おや、どうやら早速、来たみたいですね」

サクラはステップを止めると前方を見つめながら言った。

ジエネシスが視線を移すと、目の前には三、四体のモンスターがいた。

「おいおい、結構いやがんな」

ジエネシスは背中から大剣を引き抜き、構えた。

「そうですね。でも、やるしかないでしょうね」

サクラもジエネシスの隣に立って戦闘態勢に入る。

「ああ……つて、お前武器は？」

「あ、大丈夫ですよ。私の武器は……これですから」

そう言つてサクラは自身の両脚を指差した。

そしてサクラはその場から飛び出した。

数メートル程走ると、サクラは左足でジャンプしそのまま右膝突き出して先頭のモンスターの顔面に飛び膝蹴りを喰らわせる。

そのまま右足で着地すると、彼女の左後方からやってきたモンスターに対し着地の右足を軸に反時計回りで左足の踵で蹴りを放つ。

そしてその勢いのまま左足を地面につけるとそのまま体ごと横に倒して側転、更にその勢いで前方宙返りをし、その先にいるモンスターの脳天にサクラの右踵を直撃させた。

「お前……その動きは……？」

サクラが見せるこのアクロバティックな動きに思わず見惚れていたジェネシスはそう尋ねた。

「ああ、これはエクストリームマーシャルアーツと呼ばれる技ですよ」
エクストリーム・マーシャルアーツ。本来は実戦ではなくその型の美しさを競う競技なのだが、どうやらこの世界では体術スキルの派生技として存在しているらしい。

「そして、《舞踏スキル》をマスターする事で出現したスキル……《クライム・バレエ》です！」

サクラはそう叫ぶと共に右足でモンスターを蹴り飛ばす。その衝撃でモンスターは数メートル吹き飛ばされる。

「……へっ、上等じゃねえか！」

ジェネシスは不敵な笑みを浮かべながらそう言うと、大剣を肩に担いで自身もモンスターの群れに突っ込んでいった。

サクラはその後ろアクロバティックかつ華麗な動きでモンスターの攻撃を交わしながら蹴り技を叩き込んでいく。

左足で飛び上がると、体を地面と平行になるように横向きにし体を回転させ、そのまま横回転の勢いで右足をモンスターの頭に叩き込む。

だが着地のタイミングを見計らったモンスターの一体が、両手剣をサクラに目掛けて横薙ぎに振るう。

しかしサクラはその攻撃に対し、右足を大きく後ろから前方に振り子のように回し、その勢いに合わせて左足で後ろに飛ぶ。するとサクラの身体はその場で宙返りし、その回転に合わせて剣がそこを通過した。

「うふふ、残念でしたね」

するとサクラの右足が紫色の光を放ち始めた。スキル発動の合図だ。

そしてサクラは紫に輝く右足を敵の横腹に叩き込む。鈍い音が響き、モンスターは横腹を抑えて蹲った。

「あら、そんな事してると……いい的ですよ？」

サクラは微笑を浮かべたままモンスターに向かつてそう言うと、先ほどの右足を後ろまで持つてきてモンスターに背中を向ける。そして左足でジャンプして後方に宙返りすると、

「はあっ！」

そのまま右足の爪先でモンスターの脳天を打った。

《クライム・バレエ》二連撃スキル

《ジゼル・シユナイデン》

モンスターはサクラの攻撃によってその身をガラス片に変えて消滅した。

「さて、これであと少しですね」

サクラはそう呟きながら後ろを振り返ると、最後の一体が彼女に向けて剣を振りかぶっていた。

だがサクラはその場から動かない。いや、動く必要がないのだ。なぜなら……

「おらあ!!」

ジェネシスはそのモンスターに向けて大剣を横薙ぎし吹き飛ばしたからだ。

そして間髪入れずに、ジェネシスの大剣が赤黒い光を放ち始める。

暗黒剣ソードスキル 《ヘイル・ストライク》

左右の斜め方向から振り下ろされる斬撃を受け、モンスターはその身をガラス片に変えた。

「はあ……なんとか片付いたな」

ジェネシスは太剣を左右に振り払うと、そのまま背中の中身に収めた。

「お疲れ様です。それで、どうでしたか？私の実力は」

「そうだなあ……悪くねえ、とだけ言っとくわ」

「えへへ、やった♪」

サクラはジェネシスの言葉を聞くとその場で嬉しそうに跳ねた。

「しっかし、思ったよりHP削られちゃったな……いや、暗黒剣の特性を使いすぎちゃったのもあるか」

「今どのくらい残ってるんですか？」

「イエローゾーンの一手前、ってところだな」

「そんな！今すぐ回復しないと……」

サクラはジエネシスはHP残量を聞くと血相を変えて駆け寄った。「いやいいって。グリーンのうちはまだ平気だ。それにポーションだって無限じゃねえんだ、一々使ってられねえよ」

「なら、私になんとかします」

するとサクラは、ジエネシスの胴体に右手をそつと添える。

するとサクラの右手がピンクに輝く。その直後、ジエネシスは身体の疲労やダメージが消されていく感覚に襲われ、そしてイエローゾーンギリギリだったHPが一気に満タンまで回復する。

「なっ……いー」

ジエネシスは驚愕のあまり目を見開いた。

無理もない。この世界ではHPを回復する手段はポーションや結晶といったアイテムに頼るか、自身のバトルヒーリングスキルに頼る以外ない。しかしポーションは即座に回復するわけではなく、結晶もそう簡単に手に入らないレアアイテムである。それにバトルヒーリングスキルも安心できるほど回復量があるわけでもない。

だが今サクラが見せたような、人のHPを一気に満タンまで回復させるスキル“など見たことなど無かった。

「うふふ。驚きましたか？」

サクラは悪戯が成功した時の子供のように楽しそうな笑顔を浮かべて尋ねた。

「おめえ……一体何しやがった？」

ジエネシスは驚愕の表情のままそう聞き返す。

「これは私だけに与えられた、人を癒す力。

その名も……《ヒーリング^癒の^聖杯^杯》です」

サクラは未だにピンクの淡い光を放つ右手をチラつかせながら得意げに言った。

「ヒーリング・グレイル……新手的のユニークスキルか……」

ジエネシスは情報屋のスキルリストを開きスクロールしながら《ヒーリング・グレイル》と言う名前を探すが見つからなかった。

「ええ、これが私の全部です。」

……それで、どうですか？私、結構役に立つでしょう？」

サクラは両手を後ろに組んで、ジエネシスの顔を覗き込むような体勢で尋ねた。

「ああ、てめえの実力はよく分かった。とりあえずこの後も攻略を進めたいんだが……行けそうか？」

「勿論ですよ♪私がいる限り……貴方のHPがイエローゾーンに入る事は無いと保証します」

「そりゃ心強えな。んじゃ、攻略再開といくか」

「おー！」

そして二人はその後も迷宮区攻略を進め、ついにボス部屋を発見した。

—————

迷宮区からアークソフィアの街に戻った二人は、すっかり暗くなつた街を歩く。

「そんで、おめえはこの街に宿とかとってんのか？」

「宿ですか？いいえ、まだとってないですね」

「おいおい、休む拠点も無いのかよ……んじゃ一緒に探してやつから、大人しく着いてこいよ」

「え？ジエネシスさんと同じ宿じゃダメですか？」

するとサクラは目を丸くして尋ねる。ジエネシスは思わず足を止めて言った。

「俺と？あそこはもう結構人がいんど？まあ結構大きめの宿だから部屋はまだ空いてるだろうが……」

「じゃあそこがいいです」

「マジで……」

ジェネシスは困惑の表情を浮かべた。

別に彼女が嫌いだとかそんな理由では勿論無い。だがジェネシスが恐れたのはティア達の反応だ。

『また女の子を引っ掛けてきたのか』そう言われる未来が鮮明に見えた。

しかしそれはあくまで自分の都合であり、それを理由にここでダメだと断るのは違う気がした。

「まあ、ちやんとこいつの事を説明したらなんだかんだで納得してくれんだろ。事実コイツのスキルはハッキリ言っただけかなり強力だ」

わかった。案内してやるからちやんとついて来いよ」

「本当ですか？やった♪」

そしてサクラはジェネシスの後を、例の舞踏スキルによる軽やかなステップを踏みながら楽しそうについて行く。

一方場所が変わってこちらはキリト達が普段寝泊まりしている宿の食堂。

今、ここの空気はいつになくギスギスしていた。

アスナ、ティアをはじめとした少女達が一同に同じテーブルに腰掛け、目の前の料理などに手をつける事なく同じ方向を見ていた。その視線の先にあるのは……

「ねえねえキリト、この店で一番美味しいメニューって何なの？」

「ええ？この店でおすすめのやつ……そ、そうだな……な、何だろうなあ……」

「アタシ、この店のいろんな料理を食べてみたいなく！」

「わ、分かったからそんなに寄るな！座りにくいって!!」

向かい合って座る1組の男女。

一人は黒のロングコートを着た少年、キリト。その隣に座るのは、

彼女達は名前も知らない紫の少女。

「……で、あれはなに？」

重苦しい空気の中、リズベツトが引きつった顔で切り出す。

「なについて言われても……」

アスナは御機嫌斜めな様子で答えた。

「アスナさんも知らない人なんですか？」

「うん……」一緒にいるのは見た事があるけど……」

シリカの問いにアスナは頷いて答える。

「NPC……じゃ無いよねあれは……新しく下の階層から来たとかそう言う人かな？」

「それにしても随分仲が良さそうですね」

サチが疑問符を浮かべながら呟き、ハツキもまた訳がわからないという様子で答える。

するとその直後……

「うわっ?!あの人、キリトくんの膝の上に座った……!!」

「ちよ、ちよつとちよつと!何なのよ一体?!」

思わぬ事態にリーファが目を丸くして叫び、リズベツトも慌てた様子で言った。

「ふふ……うふふ……なんだかとっても仲良しさんみたいねえ？」

するとアスナが不気味な笑顔を浮かべてそう言った。

「ちよ、アスナさん落ち着いて!顔が全く笑って無いですよ!!」

そんなアスナを見て、サツキが慌てて彼女を宥める。

「あたし、ちよつと行ってきます!あれはもう放置していいレベルじゃ無いよ!!」

リーファが憤った様子で立ち上がった。言った。

「あー……その、何だ。俺の膝の上なら、いつでも空いてますよ?なんて」

クラインが戯けた口調で言うと、

「……アンタはその辺の観葉植物の植木鉢でも乗せておきなさいよ」

シノンがジト目で辛辣な口調でクラインに言った。

「ひつでえ……ちよつとした冗談じゃねえか」

クラインは肩を竦めながらそう呟いた。

「それじゃ、どういう事なのか本人の口から聞きましょうか」

そして少女達はキリトの方へと歩き出す。

「キリト、ちよつといい？」

「や、やあ皆さんお揃いで……」

険しい表情で寄ってきたリズベットに対し、キリトは引きつった笑顔を浮かべながら右手を振った。

「皆さんどうも♪」

するとキリトの膝の上に座る女性も人当たりの良さそうな笑顔で手を振った。

「キリトくん、その人は……？」

「あ、ああ……彼女は《ストレア》。街で何度か会って知り合いになって……」

リーファの問いに対しキリトは気まずそうに答える。

「えっと、じゃあ一つ聞けけどストレアさん……あんたはキリトとどういう関係？」

「キリトとは……とつても仲良しな関係♪」

若干怒り心頭気味のリズベットに対し、ストレアは全く表情を崩す事なく対応した。

「な、仲良しな関係だったら膝の上に座ってもいいって言うの?!」

「こ、これは店が混んできたから他の人に席を譲ろうって事になって、そしたら何故かこんなことに……」

キリトは慌てた様子で早口口調になって答える。

「なるほど、紹介ありがとうねキリトくん」

するとアスナが満面の笑みを浮かべながらキリトにそう言った。その笑みから何か不吉な予感を感じたキリトは

「あ、アスナさん……？」

と問いかける。

「それとキリトくん。後で私の部屋に来てくれる？」

「え？アスナそれって……」

「来てくれる？」

「アツハイ」

キリトはアスナから発せられるプレッシャーに圧倒されて萎縮した。

「あはは……キリトさんも大変ですね」

その光景をずっと座りながら見ていたシリカは苦笑しながら呟いた。

「まあ、あんなの見せられたらね……私もジエネシスが知らない女の人とあんな事してたら、ちよつと妬いちゃうかな」

シリカの呟きに対し、サチは頷きながら答えた。

「サチ、その台詞はティアが一番言うべきなんじゃない？」

シノンがサチの言葉を聞いて頬杖を吐きながらそう言った。

「あはは、たしかに……とここでティアさん、さつきからずっと黙ってますけどどうかしましたか？」

するとサツキが、ここまですつと沈黙を貫いていたティアの様子を不思議に思い問いかけた。

「いや、大丈夫だ。ただ……ちよつと胸騒ぎがしてな……」

ティアは目を伏せながら答えると、目の前のコーヒートをゆつくりと啜った。

すると宿屋の扉が開かれ、中に二人の人物が帰ってくる。

「うーい、帰ったぞー」

入って来たのはジエネシス。

「あ、お帰りなさいジエネシスさん！」

シリカが笑顔でジエネシスを出迎える。すると……

「お邪魔しまーす♪」

「……………え？」

その瞬間、シリカの表情が固まった。否、その場の時間が止まった。入って来たのは彼女達の知らない紫の少女。

サチやサツキ、ハヅキは目を丸くして彼女を見つめ、ティアは思わず右手でこめかみを抑えた。

「えつと、ジエネシスさん……その方は？」

ハヅキは紫の少女を指差しながら問いかける。

「あー、コイツはな……」

「皆さんはじめまして。私は《サクラ》と言います」

ジエネシスが皆に紹介する前にサクラが自ら名乗り出た。

「あ、ああ……よろしく。それでサクラさん。何故ジエネシスさんと一緒にいるんですか?」

「それはですね、私の方から頼んだんです」

「頼んだ? どうして?」

サクラの答えにサチが疑問符を浮かべた。

「私、ずっと皆さんのお役に立ちたいなと思っ……ちよ……ちよ……ど良いところに、攻略組最強の一角であるジエネシスさんの姿が見えたので、私の実力を見てもらうために一緒に迷宮区攻略に出てもらったんです」

「そうか……で、彼女の実力というのはお前から見てどうだったんだ、ジエネシス?」

するとティアが顔を上げてジエネシスに問いかけた。

「はつきり言っ……文句なし、だな。」

いやそんなレベルじゃねえ……コイツは間違いなく、俺たちの《切り札》になり得る存在だ」

「ほう……?」

キツパリと答えたジエネシスに対し、ティアはすうつと目を細めた。

「それは興味深いわね。是非聞かせてもらえるかしら?」

すると話を聞きつけたアスナ達がそろそろとやって来た。

「よ、ようジエネシス……お前もなんか連れてきたみたいだな」

キリトがサクラの方を見て苦笑しながらジエネシスに対して言った。

「俺はてめえみたいにナンパして連れてきたわけじゃねえよ」

「俺だってナンパじゃねえよ!」

「どうだか」

「まあまあ……それで、こっちの……ええと、サクラさんだっけ? この人の実力がどんな感じだったのか、その辺を詳しく教えてくれるかし

ら?」

揉めはじめたキリトとジェネシスを宥め、アスナがサクラの方を見てそう切り出す。

「ええ、構いませんよ。」

私のスキルは……皆さんのHPを回復させる力です」

「なっ……?!」

サクラがそう告げると、ジェネシス以外の皆は一斉に目を見開いた。

「HPを回復させる……ですって?!ちよつとちよつと!それ凄いスキルじゃない!!」

リズベットが大慌てで捲し立てる。

「その、HPを回復させるのは……無制限に、なのか?」

「ええ勿論。私がいる限り、皆さんが死ぬことは絶対に有り得ません」キリトがそう尋ねると、サクラは自信満々の表情で頷いた。

「コイツの言ってる事は事実だ。俺はコイツとさっきまで迷宮区にいたが、HPは常に満タンの状態だった。サクラのスキル……《ヒーリング・グレイル》によってな。」

お陰さんで思う存分戦えたし、オマケにボス部屋まで見つけてきた」

「え、嘘でしょう?!もうボス部屋を見つけてきたって言うの?!」

アスナが驚愕で目を見開いて叫んだ。

ジェネシス達攻略神が七十六層にやって来てから二ヶ月近くが経過していたが、迷宮区攻略は今までに比べてかなり難航していた。

まず一つ目が、人員不足。七十五層ボス戦では十四人が犠牲となり、この時点で戦える人数は総勢16名。その後、勇敢なプレイヤーや間違えて来た者達も七十六層にやって来たが、その中でも最前線の迷宮区で戦えるプレイヤーはほんの一握りであった。

二つ目が、ヒースクリフの消失。最強ギルド《血盟騎士団》の団長にして、攻略組の中でもトップレベルに位置する彼は、ユニークスキルである《神聖剣》による実力や持ち前のカリスマ性も相まって、これまで攻略組の面々の精神的支柱であった。しかしその正体は七十

五層で発覚。そして彼はジェネシスによって討たれ、消滅した。彼の消失は攻略組にとつても大きな損失と言えた。

そして三つ目が、これらの要素によるモチベーションの低下。戦闘意欲の低下は必然的に攻略スピードをかなり難航させる。

それでも彼らは諦めずに攻略を続けたのだが、ボス部屋は二ヶ月も経って未だに見つからなかった。

だがそれを、一人の少女の力だけで半日で見つけ出してしまったのだ。驚くなど言う方が無理な話だ。

「まさかいきなりボスの部屋が見つかるなんてね……」

「それで、どうするの？ 《血盟騎士団》副団長さん？」

あまりに突然のことに冷や汗を流すアスナに対し、リズベットがアスナの肩に手を置いて尋ねる。

「ボス部屋の中は偵察したの？」

「そうしようと思ったんだが、七十五層のやつがあるからな……そこまではやってねえ。すまん」

アスナがそう尋ねると、ジェネシスは首を横に振った。

「いえ、いいの。ぶっつけ本番のボス戦なんて、今に始まったことじゃないしね……」

そこでアスナは一度目を伏せ、

「明日の正午に、攻略会議を開きます。場所はアークソファイア転移門広場で」

「りょーかい」

アスナの宣言に対し、ジェネシスが軽く返す。

場の空気はこれまでに無いほどの緊張感で覆われていた。

二十九話 神速

ジエネシスと新たに仲間に加わった謎多き少女・サクラの二人が遂に七十六層ボス部屋を見つけた翌日。

予定通り、血盟騎士団副団長のアスナが七十六層に滞在する攻略組に招集をかけ、アークソフィア転移門広場で会議が行われた。

……とは言え、今回のボスに関して事前情報が無いため会議で話されたのは参加するメンバーとチーム分けの確認であった。特に今回が初のボス戦というメンバーがいるため、編成は慎重に行われた。

今回新たに加わったメンバーは、攻略組に近い実力を保持していたサチ・サツキ・ハツキの3名と、キャラクターデータのコンバートで既に攻略組中トップクラスの力を持つている《星海坊主》ことミツザネ、そして先日飛び入りで加わった自称タンクが得意なストレアと、今回のボス戦で活躍が大いに期待されているヒーラーのサクラ。

総数20名弱という、あまりにも少ない人数であるが、それでも彼らは勇敢にボス戦に挑む覚悟を決め、いよいよ迷宮区に向けて足を進めた。

その道中。

実力は問題ないと判断されたとは言え、初めてのボス戦で緊張のあまり顔がかなり強張っているサチ。以前のような臆病な性格は改善されたとは言え、慣れない状態でその上命の危険性が飛躍的に高まるボス戦を前に平静でいると言うのが無理な話だろう。そしてそれは、サツキとハツキも同じようで、二人ともいつもの明るくも落ち着いた雰囲気は無く、少々表情が暗い。

「おい、なーにシケた面してんだてめーら」

そんな彼らに対し、ジエネシスが後ろから3人の頭をコツンと叩く。

3人は同時に後ろを振り向く。

「そんな気負わなくていいぜ。厄介なクォーターポイントはこの前の七十五層で最後だ。こっからは普通にやったりや理不尽に死ぬことはまずねえ。」

だからてめえらは……俺たちを信じていつも通りやりやいいんだ」
「ジェネシス……うん、そうだね」

彼からの叱咤激励を受け、いつも通りの雰囲気に戻った3人。足取りも心なしに軽くなり、悠々と歩みを進めていく。

「一声かけたただけであんな風になるとは……中々大した信頼じゃねえか」

その様子を後ろから眺めていたミツザネが感心したように口角を上げながら言った。

「……そう言うあんたは全然怖くなさそうだな」

「何言ってるんだ。デスゲームとは言え、たかがフロアボスくれえで一々ビビるか。潜ってきた修羅場が違えんだよこっちは」

「そうかよ。流石は天下の《星海坊主》さんだな」

ジト目で話しかけたエギルに対し、ミツザネは尚も不敵な笑みを浮かべたまま返したのでエギルは苦笑いを浮かべた。

まあ、新参者でありながらここまで落ち着いているのは、やはり彼の言う通り生きた年齢とそれだけの苦難を乗り越えてきたからこそであろう。

「と言うか、そもそもお前さんらこそ、年長者ならもつと率先して皆を引っ張っていくべきなんじゃねえのか？ そうしなきゃ……ああいうガキに余計な重荷を背負わせることになるんだぜ？」

そう言うミツザネの視線の先にいるのは、今攻略組のメンバー達の先頭に立って進む栗色の長髪の少女、アスナ。

「高校生くらいの年齢とは思えねえほどの大した力量だ。そこは素直に称賛に値するが……されどそれを背負うには、まだまだ背中が小さすぎる。このままじゃあいつ、その重みに耐えきれずに……いつか崩れ落ちることになるぜ」

ミツザネの言葉に、エギルは何も言えなくなった。

一方当のアスナはと言うと、以前ミツザネから言われたことを思い返していた。

それは、アスナが七十六層のフィールドにてたった一人でレベリングをしていた時。

「精が出るな、嬢ちゃん」

ふと、自分の背後から野太い男性の声が響く。

振り向くと、そこにはグレーの民族服のような衣装に茶色のマントを身につけた壮年の男。自分の親友であるティアの実の父にして最強のプレイヤー、ミツザネ。

「ミツザネさん……」

「まあ、レベル上げを全力でやるのはいいことだが……近頃のお前さん、少々煮詰め過ぎじゃねえか？」

ミツザネの言う通り、アスナはここ数日殆ど休む事なくフィールドやダンジョンに潜ってレベリングをしていたのだ。

アスナも自覚があるのか、彼の言葉を聞いて少し苦笑し、

「そうですね……少し根を詰め過ぎている感じはあるかも知れないです」

と返した。それに対してミツザネは

「分かってんなら少しは休んだらどうだい？」

「ありがとうございます。でも、そういう訳にはいかないんです……」
アスナの胸の内にあるのは、攻略組の主戦力たる血盟騎士団副団長としての責任。団長であるヒースクリフがいない今、実質的に攻略組のリーダーとなつているアスナには、彼らを導き何としてもこのゲームをクリアしなければならぬという半ば呪縛にも似た信念があった。何より彼らのリーダーという事は必然的に彼らの命を背負うことでもある。ただでさえ人数の少ない現状、誰一人として欠けることも許されない。

それらの重圧を背負って尚、彼女が戦い続ける理由。それは……

「約束、したんです。キリトくんと必ず、現実世界に帰るって」

愛する彼、キリトとの約束。自分の命以外の何を賭けても守らなけ

ればならないもの。

「なるほど。お前さんがそこまでして戦う理由は、約束を守るため、つて訳か。」

なら、これ以上は言うだけ野暮ってやつだな」

ミツザネはそう言っつて背を翻し歩き出す。

「死なねえ程度に頑張るんだな。お前さんが死んじまえば、それこそ元も子もねえぜ」

そう言い残しその場を後にするミツザネに対し、

「あの、ミツザネさん！」

そんな彼の背中に向け、アスナは彼の名を呼びその足を止めた。

「ミツザネさんは、どうしてそこまで強いのですか……？」

アスナの問いに対し、ミツザネは振り向いた後、後ろ頭をさすりながら思索する。

「何故、か……さて、何でだろうな。向こうじゃ何気なく自分を鍛えてたら、いつしか『最強』なんて呼ばれるようになった。そんで俺がここに来たのは、知つての通り他のゲームからコンバートしたもんだ。」

ユニークスキルの《闘拳》にしたつて、俺のスキルデータを見たカーディナルシステムが勝手に与えたもんだろう」

「でも、ミツザネさんは凄いですよ。この世界でトップクラスの實力を持つキリトくんとジェネシスの二人をあんな風に簡単に倒しちゃつて……このモンスターだつて、全然臆することなく倒しているし……」

私にもユニークスキルがあれば、キリトくんやみんなを守れるのかな……？」

アスナは《アインクラッド四天王》の中で、未だ一人ユニークスキルを持つていない。それで劣等感を抱くとかそのような事は無かつたのだが、それだけの強さを得る事が出来れば、もつと速く自分の目標を達成する事が出来るのではないかと思うと、少しだけ悔しく感じていた。

やや俯き加減で呟くアスナに対し、ミツザネはため息をついて彼女の肩に手をポンと置いて

「焦る必要はねえよ。お前さんは今のままでいい。あいつらだって、ユニークスキルが欲しくて鍛えていたんじゃないやねえだろう？俺だってそうだ。いつの間にか手に入れていたのが、ユニークスキルってものだ」

彼の言葉に対し、アスナはハッと顔を上げた。

「それに……強さってのはそれだけが全てじゃねえだろう？お前さんには、あいつらにはねえもんを沢山持つてる。

今のあいつらに必要なのは、全員を引っ張れる統率力のある奴だ。それはお前さん以外にできる奴はいねえ。

だから、今のままで十分だ。約束を果たしたいんなら、お前さんは自分にしか出来ない事、そしてお前さんの信念のままにやり続けろ」

「……っ、はい！」

—————

「ナ、————スナ————アスナ？」

不意に自分を呼ぶ声が聞こえ、アスナはハッと顔をあげる。横を見ると、心配そうな表情で自身の顔を覗き込むキリトがいた。

「あ、ああキリトくん?!ごめん、何か話しかけてた？」

アスナは慌ててやや早口口調でキリトに答える。

「いや、凄く険しい顔してたから……やっぱり、緊張するの？今回のボス戦」

「もちろん。寧ろ緊張しなかった時なんて無いくらい」

「あはは、そりゃそうだな」

アスナの答えに、キリトは軽く笑いながら言った。

その後、数秒間の沈黙を挟み、不意にキリトが切り出した。

「————必ず勝とうな、アスナ」

「————ええ、勿論よ」

二人は笑顔で頷き合いながらそう交わした。

———どんな事があっても、キミだけは守って見せるから
そしてアスナは、キリトの顔を見つめながら心の中でそう念じた。
そんな彼らを後ろから生暖かい目で見つめる二人。

「相変わらずお熱いこったなくあいつら」

ジエネシスが呆れた表情で言った。

「そうだね。でも……」

するとティアはジエネシスの左腕に組みつき、

「私達だって、負けてないよ?」

少し頬を赤らめて照れたような表情で、そして優しげな笑みを浮かべながら言った。

「……つたく」

ジエネシスはその彼女から視線を逸らし、彼もまたやや頬を赤らめて言った。

「ねーねー、すごく仲良いよねあの二人」

ジエネシスとティアの様子を後ろから眺めていたストレアは彼らを指差しながら隣を歩くサクラに向けて言った。

「仲睦まじい光景ですね」

サクラも頷きながら微笑を浮かべて返す。

「友達……とは違うよねあの二人って。キリトとアスナもそうだけど、あれってどう言う関係なのかな?」

「あれが愛情、というものなのでしょうね。人と言うのは、奥ゆかしい生き物です」

首を傾げながら言うストレアに対し、サクラは淡々とそう告げた。

—————

一行はいよいよ七十六層のボス部屋の前へ到着した。

ボス戦に挑むメンバーは皆最後のアイテムチェックを行ったり、何

もせずに集中力を高めたりしていた。

やがて数分後、アスナが皆の前に立つ。

「皆さん、ここまで来たたら私から言うことは一つです」

そこで一呼吸置き、

「……勝ちましょう。そして必ず、生きて帰りましょうー!」

アスナの力強い言葉を受け、攻略組の面々は「おおおおー!!!」と雄叫びを上げた。

アスナはそれらを見つめた後、振り返って巨大な扉の方を向く。するとキリトがアスナの隣に立つ。

「アスナ。大丈夫だ、俺もついてる。君は必ず、俺が守るよ」

優しいな笑みと優しいげな口調でキリトはそう言った。

「キリトくん……ありがとう。」

私も、必ずキリトくんを守ってみせるよ」

二人は微笑みながら見つめあった後、真剣な表情に切り替えてボス部屋の扉に手を添えた。

すると重々しい音と共に、巨大な鋼鉄の扉が開いていく。

扉が開いていくと共に、その場の緊張感のボルテージも上がっていく。

ボス戦に挑むもの達は一斉に武器を構え、突撃準備を整える。

そしてついに、扉が完全に開かれた。

「総員——突撃!!」

アスナがレイピアを掲げて号令をかける。

プレイヤー達は雄叫びを上げながら一斉にボス部屋へ飛び込んでいく。

そして部屋の中に——ソレはいた。

球体状の体に巨大な瞳を持つそれは、さながら西洋の妖怪であるバックベアードを連想させる。

そしてその身体からは無数の触手が伸びており、その先端には凶悪な牙が剥き出しになった口がある。

《The Ghostly Eye》

ボスはプレイヤー達を視認した瞬間、体から生えた触手の頭から強

烈な叫びを放つ。

「戦闘開始!!」

アスナの合図で、皆はボスへ飛びかかっていった。

—————

ボス戦が始まってから一時間程度が経過した。

戦闘は犠牲も出さず何の問題もなく順調に進んでいた。

その理由として挙げられるのは大きく二つ。

一つ目はアスナの的確な指揮能力。

アスナはボスの攻撃パターンを瞬時に見極め、瞬時にメンバーの立ち位置などの状況を見て指示を飛ばし、安全に且つ確実にボスのHPを削り取っていく。

そしてもう一つは、強力な新戦力の加入。

先ずは下層から上がってきたサチ・サツキ・ハツキの3人。

その中でも特筆すべきは、ハツキの弓スキルだ。これまでには無かった遠距離武器。それによってボスに対して近付かずに確実にダメージを与えられる為、接近戦によってダメージを受けるリスクを減らす事ができる。

そして外の世界よりやってきた男、《星海坊主》ことミツザネ。歴戦の戦士たるミツザネはボスに対して全く臆することなく、その拳一つで絶大なダメージを与えており、攻略神の皆を支えていた。

そして今回より加わったストレアとサクラ。

ストレアは持ち前の両手剣のパワーによってボス戦のタンクを引き受けていた。

そしてサクラ。彼女の持つ回復スキル《ヒーリング・グレイル》はこのボス戦で確実に機能していた。

ボス戦は通常の戦闘と違い致命的なダメージを受けることが多い。回復は結晶を使うか、ポーションを飲む以外にない。

そこでサクラのスキルだ。リスク無しでHPを即座に満タンまで回復してくれる彼女の力は正に皆の希望だった。

た。

「大丈夫か？」

「す、済まない」

ジエネシスは右手を差し出し、男の手を掴んで引つ張り上げた。

そしてジエネシスは辺りを見渡しながら忌々しげに舌打ちする。

辺りは既に地獄絵図だった。突如ガストレイズによって召喚されたラフムの軍団によって戦況はとうに覆されてしまった。無論、たかがボスの取り巻き程度で簡単にやられるメンバーではない。

しかし何より腹正しいのは、そのラフムが奇怪な言葉や笑い声のような鳴き声を発しており、それはさながら殺戮を楽しんでいるように見えた事だ。

「クソつたれが……！」

ジエネシスはそう毒づいた後、大剣を振りかざしてラフムの軍団へ飛び込んで行った。

現状ボスと戦うには、先ずはこのラフムの軍団をどうにかしなければともに戦う事ができない。

しかしラフムの殺戮は続く。

所々でポリゴン片が舞い散るのが見える。そのポリゴン片の正体は何なのか、言うまでもないだろう。

ラフムの鎌によって切り裂かれ、引き裂かれていくプレイヤーは、無念の叫びを上げながら消えていく。この様な混戦状態では、サクラの回復スキルも意味をなさない。

「皆さん、伏せてください!!」

その時、ハツキの声がフロア内に響く。

直後、一筋の矢がフロア上空に飛び、そして爆散し流星群の如く降り注ぐ。

弓スキル広範囲攻撃技《プラネタリウム・エクスプロージョン》

無数の光の玉がフロアのあちこちで落下し、所々でラフムを巻き添えに大爆発を起こす。

しかしこの技は、言ってしまうえば無差別爆撃技だ。ラフムだけを狙って攻撃することはできない為、おそらく何名かのプレイヤーも巻

き込まれる可能性もある。撃った本人のハヅキも苦渋の決断だっただろう。

とは言え、今の攻撃のお陰で半数以上のラフムを掃討する事が出来た。

『なにに今なの？』
『ui uie jk?』

『おもしろい』
『6md? se!』

すると今の攻撃を凌いだラフム達が一斉にハヅキを標的に定め彼女目掛けて走り出した。

「なっ…!!」

予想外の彼らの行動にハヅキは思わず目を見開いた。

「ハヅキ!!」

それを見たサツキが彼女を庇うように前に立ち、双頭刃を思い切り投げた。

すると彼の双頭刃がオレンジの光を放って回転し始め、ブーメランのように飛びながら周囲のラフムを切り裂いていく。

「お兄ちゃん!」

「平気?」

嬉々とした表情のハヅキに対し、サツキは優しげな表情で振り向く。

だがその時だった。

「てめえら伏せろおおー!!」

ジェネシスの叫び声が彼らの耳に届く。

直後サツキとハヅキ目掛けて一筋の巨大な光が飛来し、そして大爆発を起こす。

ガストレイズによる攻撃だ。

攻撃を受けたサツキとハヅキは大きく吹き飛ばされ、HPバーは共にレッドゾーンに達している。

「ぐっ……くそっ……い!」

更に悪いことに、どうやら今の攻撃には状態異常効果も含まれていたらしく、サツキ達は麻痺状態に陥り起き上がる事が出来ない。

そんな彼らに対し、ラフム達はジワジワと距離を詰めていく。

「やらせないよ!!」

「そうは行きません!」

その時、二人の紫の少女達が数体のラフムを吹き飛ばす。

サツキ達の前に立ったのは、大剣を肩に担ぐストレアと紫の長髪をたなびかせるサクラだ。

サクラはサツキ達の方を振り向くと、右手を彼らの方に伸ばす。

『《フロウレスエナジー》』

サクラが静かにそう呟くと、ピンク色の粒子状の光がサクラの右掌から放たれ、サツキとハツキを優しく包み込む。すると彼らのHPは一気に全快した。

「麻痺が解けるまで、お二人は必ずお守りします」

「安心してアタシ達に任せてね!」

彼女達はそう言うのとラフム達に飛びかかっていった。

「おりゃああああ!!」

ストレアが豪快に大剣を振り回してラフムを吹き飛ばしていく傍らで、サクラはエクストリーム・マーシャルアーツによる身軽な動きで的確にラフムを撃破して行く。

左右から繰り出されるラフムの鎌を、首をやや傾ける事で避け、先ずは腰を低く落としてしゃがみ込み、そのまま右足を回してラフムの足を蹴り飛ばして体勢を崩す。そこへすかさず左足を蹴りを叩き込み、そのまま吹き飛ばされたラフムをストレアが勢いよく斬り飛ばす。

サクラとストレアは出会ってまだ日が浅いにもかかわらず、まるで長い間共に戦った仲間のように見事なコンビネーションで次々に撃破して行く。

そこへミツザネが援助に入る。得意の破壊力抜群の拳でラフム達 はなす術もなくその身をガラス片に変えて行く。

ミツザネの驚異的な破壊力にラフム達は標的をミツザネに変え、直ちに周囲を取り囲む形で接近する。

それに対してミツザネは、右手の拳を頭上に掲げ、左手をそれに添える。すると彼の両手が黄色い電気のようなエネルギーを帯び始め

た。

「ぬんっ!!」

そしてミツザネはその拳を勢いよく地面に叩きつけた。するとミツザネを中心に電流が波状に広がっていき、そのエネルギーでラフムは一気に爆散していった。

闘拳広範囲攻撃技《雷轟鉄槌》

ミツザネの攻撃によって漸く全てのラフムは掃討された。

「気を抜かないで！再び陣形を……」

アスナは落ち着いて皆に指示を飛ばす。

しかしその時だった。再びガストレイズから無数の光が放たれた。そしてその光の中から再び、あの殺戮の悪魔が顕現した。

「おいおい……こいつは何の冗談だ……?」

エギルは目の前の光景に思わず啞然とした表情で呟く。

『まだまた行くよjq@jq@ehg!』

彼らの目の前には、再び無数のラフムの軍団。ラフムはその不気味な口から再び理解不能の言語を発し、その鎌状の4本足で走り出した。

「落ち着いて！先程と同じ手順で対応してください！

ハヅキちゃん、もう一度アレをお願い!!」

アスナの指示を受け、ハヅキは再び弓を構える。

しかし……

『gg@7ffffffffff!!』

ラフムの一体が奇怪な笑い声を上げた次の瞬間――

「え?」

ハヅキの目の前にはラフムが迫っていた。

気がついたらハヅキはラフムに押し倒されていた。

「きゃあっ?!」

悲鳴を上げて倒れ込むハヅキ。抵抗できない彼女の胴体に、ラフムの鎌は無慈悲に振り下ろされる。

串刺しにされ、斬りつけられ、ハヅキの身体には痛々しい傷が増えに行く。

「ハツキイイイーッ!!」

サツキが叫びながら双頭刃の刃でハツキを襲っていたラフムを吹き飛ばす。満タンになっていたハツキのHPはイエローゾーンまで減ってしまったている。

「お、お兄ちゃん……!!」

思わずハツキはサツキに抱きついた。

「ハツキ、無事でよかった……!」

サツキはハツキを優しく撫でると、再び立ち上がってラフムの軍団を見据える。

「おい、こいつら……さつきまでと動きが違わねえか?」

ジェネシスがそう呟く。

「ああ……動きが速くなってる」

ティアがそれに対して頷きながら答える。

ジェネシスの言う通り、ラフムは先程召喚されたものに比べてかなり素早い動きをしていた。そのせいでプレイヤー達は対応が遅れ、再び形成が不利な状況となってしまうた。

「兎に角距離を取って!出来るだけ一体に対して複数人で対応してください!!」

アスナが指示を飛ばし、自身もレイピアでラフムを攻撃する。

細剣スキルでラフムの胴体を突き刺し、HPを削る。

『f7ef7e!』『6md?le!』

「アスナ!!」

するとアスナの背後から別のラフムが急接近し、キリトがそれを左右の剣で切り裂いた。

「キリトくん!」

「また来る!!」

再び別方向から二体のラフムが迫り、キリトは二刀流スキル《エンドリボルバー》でそれらを撃破した。

するとその直後。

『3kh?ekz9e<?>』『p@yeyw@eb4』
あの黒いの強いね
攻撃開始
『b4::@gted!』
全員で行こう

「何?」

突如ラフムの軍団は先程のハツキの時と同じくキリトを標的に定め、一斉にキリトに向かって飛びかかった。

「うわっ?!」

「キリトくん!!」

ラフムの軍団の群れに、キリトは一気に呑まれた。

左右の剣で応戦するものの、数が多すぎて数を減らすどころかこちらのHPが一気に減って行く。

「ヤロウ!!」

「キリトオオオオーツ!!」

それを見たエギルとクライン、更にアスナも救援に走るが、その行く手をガストレイズが遠距離砲撃を放つ事で阻んだ。

「キリトくんっ!!」

アスナは思わず悲痛な顔で彼の名を叫ぶ。

キリトは既に仰向けに倒されており、無数のラフムの鎌によって串刺しにされ、腕を引き裂かれ、足をもがれる。

「キリトくーんっ!!」

アスナはキリトを助けるため無我夢中で走った。

——させない

——キリトくんは絶対に死なせない!!

アスナはこのボス戦に来る前に交わした約束を思い出す。

——キリトくんは……

——私が守る!!!

その時、アスナの元に一通のシステムメッセージが表示されるが、それを無視してアスナは走った。

『EXスキル《神速》発動』

そのメッセージが消えるとともに、アスナのチェストアーマーや腕のガントレットが弾けとんだ。

そして、右上に10秒のカウントダウンが表示される。

《Start up》

その瞬間、アスナは消えた。

《Exceed Charge》

直後、キリトを襲っていたラフムの軍団の頭上に、無数の赤い円錐状のポインターが出現する。そのポインターには何か動きを拘束する効果があるのか、ポインターが出現した途端にラフムは動きを止めた。

「てやっ!」「はあっ!」「せいっ!」「やあっ!」「ふっ!!」

その直後、アスナの叫びと共にとてつもないスピードで次から次へとポインターがラフムを貫通して行く。その一撃を受けたラフムは瞬く間に消滅して行く。

同時に、フィールドに残った全てのラフムが次々に爆散して行く。そして最後の一体がガラス片となった時だった。

『3……2……1……』

アスナの視界の右上に現れていた10秒カウントがついにゼロとなった。

《Time out》

アスナはキリトの目の前で停止する。相当激しい動きをしたのか、アスナは両肩を大きく上下させながら呼吸している。

《Reformation》

その電子音声のような音が鳴ると、弾けとんだアスナの防具が再び出現した。

「ア……ス、ナ……？」

キリトは突然の事で訳がわからないと言う様子で、残った右腕で何とか起き上がって目の前のアスナを見遣る。

唾然としているのは皆も同じようで、場の空気は今停滞していた。

アスナはゆっくりとキリトの方を振り返ると、優しい笑みを浮かべ「もう大丈夫。あとは私に任せて？」

そう告げると、再び振り返って歩き出す。

「あ、アスナ……今のは？」

ティアが戸惑った様子でアスナに問いかける。

それに対してアスナは何も言わずに、ボスを見据えて立ち止まる。

「サクラさん、ストレアさん。二人はキリトくんの介抱を。残りの全員は次のラフム達の対応をお願いします」

アスナは周りを見渡しながら落ち着き払った声で指示を飛ばした。

「えっ……そりゃいいが、ボスはどうするんだよ？」

クラインが疑問符を浮かべて尋ねる。

確かに、ラフム達の対応に追われているのではいつまで経ってもボスは倒せない。現にガストレイズのHPは未だ最後の一本から減つ

ていない。

「問題ありません。ボスは……私がやります」

アスナの言葉に皆は目を見開いた。

「そ、そんな無茶です！ 幾らアスナさんでも、ボスを一人でやるなんて……」

「大丈夫。10秒で終わらせてきます」

ハヅキの言葉に対してアスナは不敵な笑みで返す。

そして細剣を構え、ゆっくりと腰を低く落とす。

「《トライアルタイム》」

すると再びアスナの視界の右上に10秒カウントが表示される。

そしてアスナはその場から勢いよく飛び出した。

先程と同じく常人では視認不可能な速さでアスナはフィールドを縦横無尽に駆け回る。

ガストレイズは触手の先端から無数の光線を放つが、極限まで加速されたアスナを捕らえることは出来ない。

その間、ガストレイズの触手が一本、また一本と切り落とされて行く。

そしてアスナはボスの全身にあらゆる方向から刺突攻撃を繰り返して行く。その剣撃は、神速のスキルによって極限まで加速されているため、さながらガトリングガンのようだった。

ガストレイズのHPは凄まじい勢いで減少していき、グリーンからイエローへ、イエローからレッドゾーンへと減っていき、遂にゼロとなった。

アスナはそれを確認すると攻撃をやめ、ゆっくりとボスに背を向ける。すると、アスナの10秒のカウントが停止する。

「9.8秒……それが貴方の絶望までのタイムよ」

アスナが静かにそう告げた後、彼女の背後でボスは勢いよく爆散した。

その直後、フィールド上に《Congratulations!》という文字が出現し、ここにようやくボス戦が終了したことを告げる。

プレイヤー達は皆一瞬固まっていたが、すぐさま歓声を上げて勝利

を喜び合った。

アスナはそれらの声援の中、ゆっくりとキリトの方に歩み寄る。

「アスナ……」

キリトはゆっくり立ち上がってアスナをじっと見つめた。

ラフムによって切り刻まれた傷や腕などは既に元通りになっている。

「ありがとうアスナ。守ってくれて」

「ううん、大丈夫。約束したでしょ？キリトくんは私が守るって」

「はは、そうだったな……」

二人は微笑みながら見つめ合った後、ゆっくりと抱き合った。

「今回は完全にいいところ持ってかれたな」

そんな二人を遠くから見つめていたジエネシスは、やれやれとため息をつきながら言った。

「ほんとですよ。せっかく私のスキルを存分に活用できると思ったのにな」

「ぶーぶー！アタシの出番殆ど無かったじゃん！」

サクラとストレアも頷きながら、不満そうに頬を膨らませながら言った。

「まあまあ二人とも。」

しかし《神速》か……これはまた、随分ととんでもないスキルが出てきたものだな」

ティアが3人を宥め、アスナの方に視線を戻して呟いた。

「んま、結果的に戦力のアップに繋がったんだからいいじゃねえか。今は細げえことは置いといて、勝利の美酒に酔いしれようじゃねえか」

するとミツザネが満足げな笑みを浮かべながら言い、皆はそれに黙って同意した。

その後、七十六層アークソフィアで、アスナの新スキルについて色々騒ぎがあったのはまた別の話――

三十話 《幕間》 「男子会じゃああああー！！」
by ジェネシス

第七十六層ボス戦が覚醒したアスナの奮戦によって終結し、その日は皆でお祝い会が開かれた。

皆で豪華な料理を食べて大いに楽しんだ後、その会はお開きとなった。

だがこの祝賀会ムードに流されるのが若さ故と言うもの。年が近いティアやアスナ達は皆一つの部屋に纏まって女子会というものをする事になった。その部屋というのは、何故かジェネシスの部屋。と言ってもこの部屋はジェネシスとティアが共有しているので実質はジェネシス・ティアの部屋である。

他にも部屋はたくさんあるだろうによりによつて何故自分の部屋を使うのか疑問だったジェネシスだったが、それを問う前に少女達は颯爽と部屋の方に行ってしまったので、仕方なく彼は一人宿の食堂でデイナー後のデザートとコーヒーを謳歌していた。

すると……

「よう、珍しくぼっちなんだな」

普段の装備である黒のロングコートでは無く、黒生地の上着とスエットズボンというラフな格好のキリトがやって来た。

「ぼっちなのはテメエも一緒だろうが」

「まあ確かに。けどお前も空いてるならちようど良い。サツキも含めた俺たち3人で集まらないか？」

ジェネシスはキリトがやろうとしている事を即座に察した。

「男子会をやろう、ってか？」

キリトは頷く。

「ああ。七十六層に上がってからゆっくりする暇も無かったしな。サツキとも折角再開できたのに全然話せてないからさ」

それを聞いてジェネシスは残りわずかとなったコーヒーを一気に飲み干し、

「いいぜ。野郎だけでしか話せねえこともあるしな。こんな機会滅多になさそうだしよ。」

「何かつまみでも買ってくるわ」

「ああ、すまない。頼む」

そう言つてジェネシスは宿から出ると、夜風に煽られながら夜の街に繰り出した。

—————

↳数十分後↳

「……か……」

いつもジェネシス(とティア)が寝泊りしている部屋の二つ隣の扉。ここがキリトの部屋で、今晚男子会が開かれる場所だ。

ジェネシスはゆつくりドアをノックすると、中から「いいぞー」とキリトの声が響く。

ジェネシスがドアを開くと、部屋の中心に据えられたテーブルを囲うように置かれているソファーにキリトと先に来ていたらしいサツキが寛いでいた。

「あ、こんばんはジェネシスさん」

サツキがジェネシスの方にペコリと軽く会釈して言った。

「よう、先に来てたんだな」

ジェネシスは中に入り、キリトと向かい合う場所にあるソファーに腰掛ける。

「何か買って来たのか？」

キリトがジェネシスに尋ねると、ジェネシスはメニュー欄から2リットル分のペットボトルのような入れ物を取り出す。

中には真つ黒で小さい泡が幾つも立っている。

ジェネシスがその蓋を回すと、よく現実で聞く『プシュッ!』という音が部屋に響いた。

そして新たにオブジェクト化した三つのコップにその液体を注ぐと、『シユワゝツ』と言う音と共に茶色の泡が湧き上がる。

「なあジエネシス、これって……」

「コーラ?」

「のようなナニか」

そしてボトルのキャップをしっかり閉め、3人はコップを手にする。

「そんじゃ行きますか」

「ああ」

そしてコップを高く掲げ……

「「かんぱーい」」

3人同時にコップを打ち付けあい、早速飲み物を口にする。

口内に炭酸の泡が弾け飛ぶ感覚が走り、喉元を刺激する。

「つぷはー!」

「うめえ……!」

「完全にコーラだな」

飲み物の感想を各々口にする。

「まさかコーラをS A Oの中で飲めるとは……」

「レイが言ってたんだが、こないだのシステムエラーのせいで本来なかつた飲み物とかが解放されちゃまったらしいぜ」

「へえ……他にどんなものが解放されたんですか?」

「酒らしい」

そしてジエネシスが買ってきたポテチやチョコレートと言った菓子を片手にコーラを飲んでいく。

「しっかし、こうして改めて見ると男って少ねえよな俺たちのメンツって」

不意にコーラを飲み干したジエネシスがそう溢す。

「それは俺も思ったよ。ただでさえ女性プレイヤーの少ないS A Oで、よくもまあこんなに集まったもんだ」

「しかもみんな揃って綺麗な人とか可愛い子が多いですよね」
キリトとサツキも頷きながら返す。

「そーいやおめえにはいねえの？好きな人とか」

「あはは……残念ながら」

ジエネシスの問いにサツキは苦笑しながら返す。

「本当か？サツキみたいなのやつにこそ集まりそうだけどな」

「まあ多分……ハツキと一緒にいるからですかねえ……」

「そっか、ハツキとは実の兄妹なんだよな？」

「はい。ハツキに誘われる形でこの世界に来たんですよ」

キリトが妹持ちのサツキに何か通ずるものを感じたのか積極的に話しかける。

「サツキとハツキっていい兄妹だよな」

「キリトさんも妹さんがいるんですね？」

「ああ。リーファだよ。まさかSAOに来るとは思わなかったが……」

「お二人もいい仲じゃないですか。僕にはそう見えますよ？」

「まあ別に険悪だったわけじゃないんだけど……色々あって俺の方から距離をとっちゃってさ……」

「ああ、そうなんですか……なら、これを機にリーファさんとの距離を縮めては如何ですか？」

「もちろんそのつもりさ。これまで兄貴らしいことを何もしてやれなかったからな……せめてこの世界では何かしらしてやるつもりさ」

キリトは確固たる意志を持ってそう告げた。

するとこここまで（一人っ子のため妹の話題に乗れなかった）ジエネシスが口を開く。

「……お前らの妹ってさ」

どっちもお○ぱいデカくね？」

「ブフオツ?!」

その瞬間キリトとサツキは同時にコーラを噴水のように吹き出した。

「な……い、いきなり何を言い出すんだお前?!」

「そ、そうですよ!!何でいきなり下ネタ発言ですか?!」

キリトとサツキはやや早口で捲し立てる。

「はあ?下ネタ?何バカなこと言ってるんだ、おっ○いは上にあるんだから下ネタじゃねえだろうが」

「そう言う問題か(ですか)!!」

あつけらかなと答えるジェネシスに二人は尚もつかみかかる勢いで叫ぶ。

「おい落ち着けて、どーせ男子会なんだから色々ぶっちゃけようぜ。

……んでそれよりお前ら何も感じねえの?可笑しいだろあの年であの大きさ。何カツプあるんだよ」

キリトとサツキはやや頬を赤らめながら咳払いして元の位置に座り込むと、

「……ま、まあ確かに、俺もあんなに大きくなってるとは思わなかったよ。七十六層の森で再開したとき、真っ先にそれ指摘したらいきなりぶん殴られたし」

「ほ、僕はずっと一緒だったからあまり気にしなかったけど……あ、でも言われてみれば確かに……その……お、大きいですよね」

「だろ？そのせいでシリカがいつもお前らの妹を恨めしそうに見てやがるぜ」

それについてキリトとサツキにはどうすることも出来ないのので一旦押し黙る。

するとキリトが

「そ、それを言い出したら、その……ティアだって凄そうじゃないか」
「え」

「あ……た、確かに！普段は気にして無かったけど、今思うと谷間の大きさが……！」

そしてジェネシスを含めた3人は改めて普段のティアの格好を思い返してみる。

胸元が開かれたV字ネック。そこに見える、大きなY字型の――

「ハイストップ！」

そこでジェネシスが両手をパンと打ち、二人のイメージネーションを中断させる。

「改めて思い返すと、ティアさんってすごくスタイルがいいですよね……」

「だろ？」

サツキの呟きに対し何故か得意げな顔のジェネシス。

「と言うか、お前はその全貌を全て知ってるんじゃないのか？」
「ブフオツ?!」

するとキリトの発言に今度はジェネシスがコーラの噴水を上げた。

「おまつ……それ聞くのか?!」

「さっきのお返しだ！男子会なんだろう?!」

「そうです……ここまで来たら、全部ぶっちゃけてください!!」

キリトとサツキは同時に詰め寄った。

ジェネシスは数秒間黙り込んでいたが、やがて迷いを晴らしたのか一つ咳払いを入れた後、

「……女神かと思った」

「……」

「……」

想像の斜め上をいくジェネシスの答えに絶句する二人。

しかし二人はここで冷静になって、自身のインスピレーションをフルに活用して想像する。

普段のティア。無駄な贅肉など全くなく、締まるところは締まり出るところは程よくふくよかな女性らしい丸びを帯びた、女性としてはまさに理想的な体型。そんな人物が一度脱げばどんなものが表れるのか……

「女神だ」

「正に美の女神ですね」

キリトとサツキは納得したように頷きながら言った。

「てかそれならキリトだって知ってんだろ？アスナの何からナニまでよ」

「なっ…そ、そこでアスナに来るのか?！」

「あ、あの…アスナさんはどんな感じだったんですか？」

突如アスナに振られて戸惑うキリトに対し、何故か興味津々のサツキが説明を促す。

キリトはしばし押し黙った後、ゆっくりと口を開く。

「ティアが女神なら…アスナは天使だな」

「あー」

「て、天使……」

キリトが答えた後しばし沈黙が走る。

「……話題を変えるか」

「そうだな」

「そうしましょう」

ジェネシスがそう切り出し、二人も同意する。

「じゃあ僕から質問したいんですけど……」

お二人のティアさんとアスナさんの好きな点って何ですか？」

サツキの質問に対し、二人は「うくん…」と唸る。

「まあとりあえず言えるのは……優しい、ってことかな」

「それは同じだな」

キリトの答えにジェネシスは同意する。

「見た目も綺麗だし、さつきも言ったがスタイルもいい」

「ストイックだけどそれだけじゃないんだよな」

「凄く俺のことを支えてくれるよな」

「あとはやっぱ……」

「料理上手」

交互に、一つずつ自身の愛する人の好きな点を上げていき、最後は同時に同じことを口にした。

「正直俺には勿体無いくらいの人だよ」

「おいキリト、そりやアスナに失礼してもんだぜ。」

まあしかし……色々レベルが高いのは事実だな」

「女子メンバ―の中でもあのお二人はかなり女性としての魅力が高いですよね……まあ、ハヅキほどじゃありませんけれど」

「オイオイサツキ、おめえはシスコン兄貴か？」

「そう言うアレじゃありませんよ。でも、ハヅキは最高の妹です」

「ハヅキちゃんはいいい子なのは分かるよ。まあ、アスナやリーファ程じゃ無いけどな」

「はあ……てめえら何張り合ってたんだよ。んなことするだけ無駄だぜ、ティアが一番いいに決まってるんだからな」

「ジェネシスものが張り合ってるじゃ無いか」

「ぼつか張り合ってるなんかねーよ。ただティアこそ一番だと言う事実を言ってるまでだ」

「ごんにやろう……」

—————

男子達が部屋で己が愛する女が一番だと言いつつ合っている最中、ドアに耳をピツタリとくつつけて中の様子を伺っている人影が三つあった。

ティアとアスナ、そしてハヅキだ。

3人とも顔はリングゴ…否、熟れたトマトのように真っ赤に染まっております、俯き加減でピクピクと体を震わせている。

「あ……あう……」

「も、もう……キリトくんたら……」

「よくもまああんな恥ずかしいことを……」

聞こえないように注意しつつ、3人はそれぞれ心境を呟く。

しかし堪らなくなったのかそれ以上聞くのをやめやや早足で部屋に戻っていった。

男子会はその後深夜まで行われた。

三十一話 ☆コラボ回前編〜withイセスマIF
(作：咲野皐月氏) 異世界からの使者

ここは、0と1の数字で構成されたVRMMOとは異なる、完全な異世界。

自然が織りなす景色が美しく、活気あふれる街の中心には大変豪壮な西洋風の城がそびえ立つ。

その一室。豪華な城の見た目とは裏腹に、かなり質素と言える部屋の中に、少年は一人ソファで優雅な体制で座っていた。少年はただ一点を見つめている。その視線の先にあるのは、右手に握られた我々現代人にもお馴染みの電子機器、スマートフォン。

彼の名は《盛谷 颯樹》。とある事情により、いわゆる『異世界転生』というものを経てこの世界にやってきた人物だ。

しばらくすると彼の部屋のドアをノックする音が響く。

そしてドアが開かれ、一人の少女が姿を表す。金髪のロングヘアに翠色と碧色のオツドアイが特徴的な少女だ。

彼女の名は《ユミナ・エルネア・ベルファスト》。ベルファスト王国の王女であり、颯樹の婚約者でもある。

「颯樹さん、お時間ですよ」

「ああ、今行くよ」

颯樹はゆっくり立ち上がり、ユミナに促されながら部屋を出て、階段を降りる。

その先のロビーでは、すでに複数の少女達が彼を待っていた。

「待っていたでござるよ、颯樹殿」

和服の少女、《九重 八重》。

「遅いわよー」

「おはようございませす、颯樹さん」

銀髪ロングの少女と、同じく銀髪でショート姉妹、《エルゼ・シルエスカ》と《リンゼ・シルエスカ》。

「やつとおいでになられたのですね、颯樹様」

薄めの緑色の髪の少女、《ルーシア・レア・レグルス》

「レディ達を待たせるなんて、男としてどうなの？颯樹くん」

やや不機嫌そうにいうのは、紅い長髪を後ろに束ねた少女、《アヤナ・カーディナリア》。

以上5名の少女達は皆、颯樹の婚約者の少女達だ。

颯樹は皆をゆっくり見回したあと、

「……よし、行こうかみんな！」

「「「おー！！」」」

彼らは今からとあるクエストを受けに行く。

これから彼らを待ち受ける冒険はどのような物なのか、そんな期待を胸に、彼らはその扉を開け歩みを進めた。

「――？」

が、一歩足を進めたその瞬間、颯樹は突如として首を傾げて足を止めた。

何かがおかしいと感じた。違和感は体の内から発生していた。体調が悪いのかと言うとそうでは無い。何か……体内の魔力が乱れている感覚がしたのだ。

「颯樹さん、どうかされたのですか？」

ユミナが颯樹の様子に気づき、振り向いて尋ねる。

颯樹はそれに対して優しげな微笑を浮かべ、

「……大丈夫。何でも無いよ」

と答える。

きつと気のせいだ、と彼は違和感についてそう片付けた。

今日もいつも通り、何の問題もなく進む筈……そう信じていた。

「颯樹くん、それじゃいつものアレ頼むわよ！」

アヤナが颯樹をそう急かす。

「わかった、ちよつと待っててくれ」

颯樹はそう言って右手を前に差し出す。

《《ゲート》!!》

これは任意の場所に転移できる便利な魔法。簡単に言うなら《どこ

でもドア』だ。

これで彼らの目的地へと行くことができる――

――が、今日の《ゲート》は何かがおかしかった。

いつもならオレンジの輪と共に目的地の景色がリング状に見る事が出来る。

しかし今日は、リングの向こうに景色が見えるどころか、リングの中はブラックホールのような禍々しい黒い渦が巻いている。

全員がその光景に絶句した。

「あの……颯樹殿、これは一体……」

「ぼ、僕にも何が何だか……」

その時だった。黒い渦から凄まじい暴風が発生し、彼らを引き込み始めたのだ。

「うわあああーっ!!」

「ちよ、ちよつと颯樹くんー!!」

「こ、これは一体何なのですかー?!」

「ぼ、僕が聞きたいよーっ!!」

そして彼らはなす術もなく渦へと吸い込まれ、そこから姿を消した。彼らを吸い込んだ渦はやがて消滅し、辺りは静寂が訪れた。

――

場所は変わって、ここは0と1のデータで構成されたVRMMO

《ソードアート・オンライン》の世界。

七十六層《アークソフィア》にある大きな宿屋のリビングで、ジェネシス達一行は歓談をしていた。

「……今日はホロウエリアにでも行くか」

「おつ、そりゃいいな」

ジェネシスの言葉にキリトが乗ったとばかりに言った。

そうと決まれば話は早い。早速彼らは立ち上がり移動を始めた。

「ちよつと待った」

すると彼らを引き止める者が現れた。

彼らの嫁、アスナとティアだ。

「私たちも行く」

「ホロウエリア見たいな危ない場所に、キリトくん達だけで行かせられないわ」

「な、大丈夫だよ。別に俺たちだけでも……」

キリトは彼女らの同行を遠慮する素振りを見せるが、

「ともかく！行くと言ったら行きます！」

「それに……挨拶しなきゃいけない奴もいるしな」

意見を曲げないアスナと、何故か闘争心剥き出しのティアがそう言った。

ここまで来たらどんなに拒否しようとアスナとティアはしがみ付いてでも付いてこようとするだろう。

キリトとジェネシスは観念して彼女達を連れてホロウエリアに行く為転移門へと足を運んだ。

転移する前に、以前そこで出会ったフィリアとツクヨに会う為連絡を入れ、いよいよホロウエリアへと向かう。

「うし、んじや行くか」

「ああ」

「転移《ホロウエリア》」

その瞬間、四人は青白い光に包まれ姿を消した。

彼らの視界に映るものが西洋風の街並みから一転し、プラネタリウムのような天井に様々な電子の文字列やデータが常々表示される場

所が変わる。

「ここが、《ホロウエリア》…」

「そう。ここはその《管理区》だよ」

辺りを見回しながら呟くアスナに対し、後ろから少女の声が響く。振り向くと、そこにはオレンジの髪に青いポンチヨを身につけた少女と、長身でキセルを啜え金髪のショートヘアに和風の衣装で身を固めた女性が立っていた。

「フィリアー・ツクヨ！」

キリトが彼女達の名を呼ぶ。

「フウ…全く、こんな所に自ら飛び込んでくるとは呆れた奴らじやのう」

ツクヨはキセルの煙を吐いたあとそう言った。

「済まない、ちよつと時間が空いちやったな」

「ううん、全然平気。こっちはこっちでホロウエリアの事とか調べてたから……」

本当に、来てくれたんだ」

「バツカ。ちゃんと来るつったろーが」

フィリアの呟きに対しジエネシスがややぶつきらぼうな口調で答える。

「うん……でも、来ないんじゃないかと思ってたけど……」

あんた達って本当に」

「お人好しでバカ」、だろう？」

「そこに『向こう見ず』と言うのも付け加えておこうかのう」

キリトの自嘲気味な言葉に対しツクヨが呆れたような、それでいてやや嬉しそうな口調で言った。

すると……

「……んんっ！えーっと盛り上がってる所悪いんだけど」

ここまで静観を貫いていたアスナがジト目で割り込んできた。

「あ、ごめん……えつとこちらは？」

「ああ、こっちはアスナ。俺の……」

「ここでキリトは一瞬悩む。素直に『妻』と言うか、それともここで

は伏せておくか。

一瞬の迷いの末、キリトは……

「……仲間だ」

と答える。

「こんにちは。キリトくんが助けてもらったそう。ありがとうございます。ありがとうございました」

アスナは笑顔で、しかし彼女らしからぬ冷え切った口調でフィリアに言った。

「あ、うん……へえ、あんたの仲良しなんだ」

「ええ。仲良しというより……『家族』ですね」

アスナは『家族』という部分を強調してそう言った。

「お、おいアスナ……」

「何？私がキリトくんの奥さんだって言ったら何か都合の悪い事でも？」

慌てた様子のキリトに対しアスナは不機嫌そうにジト目で睨みながらキリトに答えた。

「あつちは大変そうだな……」

ジェネシスは彼らの様子を見てそう呟いた。

「随分と他人事だな」

すると彼の右手を掴みながらティアが彼の隣に立って言った。

「随分と仲が良さそうじゃのう。もしや主らも……」

ツクヨが彼らを見て何かを察したように言った。

「ああ、まあ……こいつはティア。俺の仲m……痛えよなんだよティアって痛えって待って待って離せ手がミシミシ言ってるから分かった分かったから離してくれこいつは俺の嫁ですうううー!!」

『仲間だ』と言いかけたその時、ジェネシスの右手を掴むティアの手の一層力強く握られ、ジェネシスが『嫁』だと口にした瞬間再びその力は弱められた。

「存じておる。四天王が一人『白夜叉』のティアよ。

主らおしどり夫婦の噂はわっちの層まで届いておったぞ」

「ほう？知っていたのか。ならば私の言いたいことは分かるな？」

ツクヨはそんな彼らを微笑ましく見つめながら言い、ティアは目を細めながらツクヨのすぐ前まで歩み寄り、鋭い目つきでツクヨを見上げた(ツクヨの身長は170cm、ティアの身長は161cmの為必然的にティアが見上げる形になる)。

ツクヨは少し驚いた様子で目を見開きティアを見下ろしていたが、「フツ」と軽く笑うと

「安心するがいい。コイツとはそんな関係ではありません。

主の大事な男を取ったりすることは無いぞ」

諭すような口調でそう言った。

それを聞き、ティアは「なら良い」と振り向いてジェネシスの方に戻る。

しかし……

「それに、わっちがこんな男に惚れる事など、満に一つもありません」
その一言が余計だった。

「……ッ、ん な 男」、だと?」
かなり怒気を孕んだ声でゆつくりと振り向く。

「なんじゃ?何かおかしな事でも言ったか?」

ツクヨは肩を竦めてティアにそう言うが……

「この人の何も知らん癖に……よくそんなことが言えるな。

この男は確かにぶつきらぼうで目つきが悪くて死んだような目をしてる男だがな……そんなでも多くの女がこの男に惚れて来たんだ。

お前もそうならんとは限らないんだぞ?」

低く唸るような声でいうティアにて対し、

「ふん、確かにわっちはこの男については何も知らん。

じゃがこんな男に惚れる事など満に一つもないと断言してやる」

「ほう?本当にそう言い切れるのか?」

「無論じゃ」

「……」

「……」

再び黙って睨み合う二人の女。その目と目の間で火花が散っているような険悪な空気が流れる。

「いや、何の言い合いしてんだお前ら……」

それを離れたところから呆れた顔で見つめながらジエネシスはそう呟いた。

—————

「それで、主らは何か目的があつてここに来たのか？」

数分後、一息ついてツクヨがジエネシス達に尋ねる。

「いや、特に目的とかがあつてきたわけじゃ無いんだ。

何かレアアイテムとか面白そうなクエストがあつたりしないかな
ゝつて思つて来たんだよ」

ツクヨの問いに対しキリトが後ろ頭をさすりながら答える。

「何じゃ。何の計画も目的も無しに来たというのか？ここは観光地などでは無いぞ」

ツクヨは彼の答えを聞きため息を吐きながらそう言った。

「…クエストなら、良いやつがあるよ」

するとフィリアが顎に手を当てながら言う。

「へえ、どんなものがあるの？」

「討伐系のクエスト。詳しくは知らないけど、剣の素材みたいなのが
手に入るらしいよ」

「素材か……そりゃ面白そうだな。案内頼めるか？」

「苦労して見つけたクエストを易々と教えたくは無いんだけど……でも、どのみちツクヨさんが一緒でも難しそうなクエストだし、良いよ」
そして一行はフィリアにて連れられる形で歩き出した。

〜数十分後〜

鬱蒼とした森林の中を、6名の男女は進んでいく。

「この先が、目的の場所。もうすぐとあるモンスターが出るんだけど、
それが出たら自動的にクエストが始まるわ」

フィリアの説明を受け、戦闘が始まることを察し各々気を引き締める。

するとその時だった。

彼らの通るすぐ近くの木々の中で『バチツ』と言う放電現象が起きる。

皆はモンスターへの出現かと考え武器を引き抜き警戒態勢に入る。やがて放電現象は強まっていき、そして黒い渦が発生する。

しかし現れたのはモンスターなどではなかった。

「うわああああー!!!」

悲鳴と共に出現したのは、複数の男女。

ドサドサツと音を立て、雪崩のように地面に倒れ込んだ。

「えっ、プレイヤー?!」

アスナが目を見開いて叫ぶ。

一人は黒のフアークートを身につけた少年。

「いたた……なんだった、ん、だ……?!」

少年が頭を上げて辺りを見回す。

「ん……?」

するとジェネシスが彼の顔を見た瞬間首を傾げて凝視し始めた。

「んん〜?」

「どうした? ジェネシス」

「いや、あいつ……サツキに似てねえか?」

そう言われてキリトは目の前の少年を見る。

「た、確かに……凄く似てるな」

キリトもそれに同意し頷く。

その少年の見た目は、彼らの仲間である双頭刃使いの少年とよく似ていた。

するとその声に気づいた少年——颯樹は顔をあげる。

「んなっ……(キ、キリト?! しかもその隣にいるのはアスナ! そしてホロウフラグメント編のメインキャラのフィリアまで?!)」

その瞬間、颯樹は目を見開いた。

「(知っている……僕はこの人達を知っている。そう、僕がまだ元の世界にいた時ちようどアニメやらゲームやら様々な媒体で人気を博したライトノベル作品……そして今僕の目の前にいるのはその主人公

……つまり今僕らがいるのは……)

SAOの世界か?!」

颯樹の叫びでその隣に倒れていたユミナが顔をあげる。

「ううん……颯樹さん、どうされたのですか?」

「……あついやー……何でもない」

ユミナの問いに颯樹は慌てて首を横に振る。

「おいおいどうした?いきなりこんなとこにやってきて大事なもんでも飛んでったか?」

颯樹の様子を見たジェネシスがため息を吐きながら問う。

「……?!?!?(あ、れえ〜?!ジェネシス?!ジェネシスナンデ?!ホロリアの噛ませとが言われてた悪役じゃんか!!」

しかもその隣にいるのはティア?!ホロリアの双子の女神の大人版?!)」

訳が分からず内心で騒ぎ立てる颯樹。

「(どうなってるんだ?何故彼らがここにいるんだ?……もしかしてここは俺の知ってるSAOの世界じゃない……?)」

「大丈夫かよコイツ……ホラ」

すると颯樹の様子を見かねたジェネシスが右手を差し出す。

「えっ……あ、どうも……」

颯樹は戸惑いつつもジェネシスの右手を掴み、それをジェネシスが引っ張り上げた。

「あ、君達大丈夫か?もしかして君たちもアインクラッドの下層から来たのか?」

キリトが颯樹達にそう尋ねる。

「アインクラッド?いいえ、私たちはアストライア公国から……むぐっ」

「あーそうそう!ダンジョンを探索してたらいきなりこんな所に飛ばされてさー!」

「むむむ〜!」

正直に答えようとするユミナの口を颯樹が慌てて押さえた。

「ちよ、颯樹殿何を……」

突然の彼の行動に目を見開いて戸惑いの表情を浮かべる八重。すると颯樹は全員の肩を掴んでジエネシス達から数歩離れる。

「ちよつと、何だつて言うのよ颯樹くん」

怪訝な顔で颯樹の顔を見るアヤナ。

他の少女達も彼の行動の真意がわからないと言う様子だ。

「済まない、頼みがある。」

簡潔に言うところには僕らが元々いた世界とは違う世界だ」

「違う世界……異世界転移でもしたつて言うの？」

エルゼの言葉に颯樹は頷き、

「ああ、原因は分からないけど……とりあえず彼らに僕らの事は通じない、寧ろ変に怪しまれて終わりだ」

「颯樹様はこの世界について、何か心当たりがあるのですか？」

ルーシアが首を傾げながら問いかけると、颯樹は黙って首を縦に振り、

「とりあえず、僕に適当に話を合わせてくれ。それでこの場をやり切ろう」

「分かりました。では、颯樹さんの言った通りに」

ユミナが颯樹の言葉に同意し、颯樹もそれを確認して元の位置に戻る。

「済まない、あまりに突然のこと過ぎて色々情報を整理してたんだ。」

「ここは……一体何処なんだい？」

颯樹は前世の知識からここについてはある程度知識はあるものの、敢えて何も知らない体を装った。

「ここは《ホロウエリア》と呼ばれておる。主らも大変じゃつたのう。わつちらも突然ここに飛ばされてきた身じゃ」

「そ、そうなんですか……(やつぱり、僕の知るSAOじゃない。いや、見た事はあるけどそれは別の漫画作品で少なくともこんな人はSAO出てきてない)」

颯樹はツクヨを見て戸惑った様子を浮かべつつも、それを気づかせないよう平静を装って頷いた。

「俺は《キリト》だ。君たちの名前は？」

「僕は……《サツキ》です」

するとキリトの表情がピタツと固まった。

「ん？あの、どうかされました？」

「え？ああいや……君と同じ名前で似たような雰囲気はやつが俺の知り合いにいるからついな……」

「へ、へえ、一度会ってみたいですね」

「やめとけ、そっくり過ぎて俺たちが区別つかなくなるから。」

俺は《ジエネシス》だ。まあよろしく頼むぜ」

「ど、どうも……」

ジエネシスに対して颯樹はペコリと頭を下げる。

「私は《ティア》。まあ、仲良くしてやってくれ」

「はい、よろしくお願いします……（やつぱり、ホロリアのジエネシスとティアだ……ティアに関しては少し色々違う点があるけど……一体どうなってるんだ……）」

ティアから差し出された右手を颯樹は両手で掴み握手を交わしながらティアとジエネシスを交互に見た。

「私は《アスナ》。キリトくんの……奥さんです！」

《ファイリア》よ。まあ、ホロウエリアに飛ばされた者同士、気が合いそうだね」

「わっちは《ツクヨ》じゃ。一先ずよろしく頼むぞ」

「ど、どうも……（わあ……一人は違うけど紛れもなくSAOのキャラ達だ……何か、感慨深いな）」

アスナとファイリア、そしてキリト達といった者達との邂逅を経て内心感慨深く感じている颯樹。

「それで？君も私達の旦那と負けず劣らずの女誑しのようだが……とありえず名前を聞いても良いか？」

ティアが颯樹の後ろに立つ少女達を見て尋ねる。

「あ、ああ……この子は」

「《ユミナ》と申します。以後お見知り置きを」

するとユミナは颯樹の意図を汲み本名ではなくファーストネームで名乗り、礼儀正しく会釈をした。

「拙者は……《ヤエ》でござる」

「あたしは《エルゼ》。こつちは妹の《リンゼ》よ」

「《ルーシア》と言う者です。宜しくお願い致しますわ」

「《アヤナ》よ。よろしくね」

すると少女達はユミナに倣って自身のファーストネームをプレイヤースネームにして名乗った。

「また随分と大所帯だね……」

アスナが苦笑いで呟く。

「君達は何層辺りで過ごしてたんだ？」

「ええつとく……ろ、六十層辺り、かな〜？」

「六十層…結構上の方じゃないか」

颯樹の答えにティアが感心したように呟く。

「そつか。ダンジョンを探索してたら飛ばされたんだよな？」

「ええ。いつも通りに進んでいたら突然……」

キリトの問いにユミナが首を縦に振ってこたえる。

「(ユミナ……ナイスだ!)」

颯樹は彼の言う通りに話を合わせてくれたユミナにグッドサインを送る。

「それは大変だったな……でも安心してくれ。アインクラッドに戻る転移門がある場所を知ってるんだ。案内するよ」

「ほ、本当か?!それはありがたいな〜(まあ、アストラライア公国に戻れないと意味ないんだけどな……)」

颯樹は内心で肩を落とした。

「それじゃ付いてきてくれ」

そしてキリトは管理区を目指して歩き始める。

「あ、ああ〜待った!」

「ん?」

すると颯樹は彼を引き留めた。

「おいおいどうしたいいきなり」

ジエネシスが颯樹の行動の真意がわからず尋ねる。

「みんなはこの後何をするんだ?」

「この後？普通にクエストを受けようと思ってるんだけど……」

「なら、僕らも一緒に行って良いかな？戻れる手段を教えてくださいお礼もしたいし、折角こうしてアインクラッドのトッププレイヤーと会えたんだから、少し戦い方とか学びたいな〜とか思ってます（それに、向こうの世界に戻るための手間かかりも見つけたいし、何よりあのキリトと一緒に戦えるんだ、こんなチャンスは滅多にない！）」

颯樹の答えにキリト達は少し考え込む。

「大丈夫か……？」

「平気じゃね？六十層辺りにいたんなら簡単にやられる奴等じゃねえはずだし」

「ああ。それにここで会ったのも何かの縁だ。これで彼らが成長して最前線に来てくれたら戦力強化にも繋がる。それくらいの投資はしても良いだろう」

ジェネシスとティアは彼らの同行について賛同する。

「もう……また勝手に決めて」

「ま、死なない程度でやりなんし」

やや呆れた顔のフィリアとツクヨ。

「じゃあよろしくね、サツキくん、みんな！」

「はいー」

笑顔で言うアスナとそれに対して同じような笑顔で返す颯樹。

そしてジェネシス達は歩き出し、颯樹達一行もそれに続く。

「ちよつとどう言うつもりよ？」

エルゼが颯樹の耳元で尋ねる。

「彼らは一流の戦士達だ。彼らの戦い方は僕らの世界でも参考になる。」

それに……向こうの世界に帰るための手がかりも見つけないと」

「なるほどね〜……ま、あんたがそう言うならそれに従うわ」

「ありがとう」

こうして、異世界からの使者達を引き連れた異色のグループは歩き出した。

三十二話 ★コラボ回中編くメタルキングスライム

ジエネシス達と颯樹達は、ホロウエリアの森林を歩いていた。

「(そう言えばここって仮想世界なんだよな……どんなものなのかな
くってずっと思ってたけど、本当に現実と遜色が無い。VRだって言
われないと気付かないんじゃないか?)」

颯樹は初めてやって来たVRMMOの世界にある種の感動を憶え
ながら辺りを見回していた。

そしてどうやらそれは彼の仲間の少女達も同じ様で、皆物珍しそ
うな表情でキョロキョロと視線を動かしていた。

「……なあ、そんなに珍しいもんでもあるか?」

すると落ち着かない颯樹の様子を見たジエネシスが声をかけた。

「あ、ああ……何せ初めて来る場所だからな(色んな意味で)」

「まあ確かに、ここは他とは色々違うもんな(SAO内という意味で)」
そんな簡単なやりとりをした後、彼らは前を見て歩き出す。

すると目の前に数体のモンスターがポップした。

「おっと、早速戦闘開始だな」

キリトが背中から黒と翡翠の剣を抜き放ち、それに合わせてジエ
ネシスが赤黒い大剣を、ティアが腰から銀の刀を、アスナが細く白く輝
く細剣を、フィリアが鋭く銀色の光を放つソードブレイカーを、ツク
ヨが鈍色の光を反射する手裏剣と苦無を手の指の間に挟む形で構え
る。

「颯樹、ユミナ達も行けるか?」

キリトが彼らの方を振り返って尋ねる。

「ああ、勿論大丈夫」

そして颯樹は背中から二本の剣を引き抜こうとするが、

「待てよ、ここでこの剣を抜くのは不味いかな……キリトに混乱させ
てしまうかもしれないし。」

それに……SAOの世界で、この二つの剣はキリト以外が使うべき

「じゃ無いよな」

そこで思いとどまり、颯樹は左腰から普段愛用しているガンブレード《ブリュンヒルド》を引き抜く。

しかしそれはどうやら剣の世界に合わせたのかやや形状が変わっていた。具体的なシルエットは変わらないが、刃の長さが長剣サイズまで伸びていたのだ。

「そう言えば当然この世界で銃は使えないよな……」

颯樹が少し形の変わったブリュンヒルドを見て小声で呟く。

するとその時だった。

「風よ切り裂け、千の風刃、サイクロンエッジ」

「水よ来たれ、衝撃の泡沫、バブルボム」

ユミナとリンゼが右手を伸ばし、魔法攻撃の詠唱を始めたのだ。

「(し)か(し)な(に)も(起)こ(ら)な(か)つ(た)！」

……なんて言ってる場合か……っ！！

しまったああああ……っ！！ S A O じゃ魔法が使えないんだった

ああ……！！」

ユミナとリンゼの行動に颯樹は思わず頭を抱え、ジエネシス達はキョトンとした表情で彼女らを見つめていた。

「いや、何をしているんだお前たちは……？」

ティアが怪訝な表情で尋ねる。

「あ……と、今のはその……」

今のユミナ達の行動の真意をどう彼らに説明したものか悩む颯樹だったが、

「これは失礼しました。今のは忘れて下さい」

全てを察したユミナがペコリと頭を下げる。

ティア達は目を丸くしたままだったが、やがて「わかった」と頷くと前を向きモンスターへ斬り込んでいった。

颯樹は早足でユミナの元に駆け寄る。

「ゆ、ユミナ……もしかして気づいたの？」

「ええ。最初に来た時薄々感じてはいましたが、先程確信致しました。お見苦しい姿をお見せしてしまいましたね」

ユミナは頷き、少し申し訳なさそうな顔で頭を下げる。

「……いや、いいんだよユミナ。それに、さっきの切り返しも凄かったね」

「勿論です。伊達に貴方のメインヒロインを張っている訳ではありませんよ?」

ユミナは先程と打って変わって不敵な笑みでそう言った。

「おーい!そっちに二体いったぞ!」

その時、ジエネシスの叫び声が響き、見ると二体のゴリラ型モンスターがゆつくりと距離を詰めて来ている。

「でも困ったね。魔法は無し、遠距離武器も使えないんじや、キミにとってはかなりのハンデじゃ無い颯樹くん?」

不安そうな顔で、それでいて何処か揶揄うような口調で言うアヤナに対し、

「そうだね、このハンデは確かに大きい……でも」

すると颯樹のブリュンヒルドの刃が青い光を浴び始め、そして四連撃の剣技を放つ。青い斬撃の軌跡が正方形の形で浮かび上がり、その攻撃で二体のゴリラは爆散した。

「……そんな物、僕にとっては些細な事さ!」

颯樹は不敵な笑みを浮かべながら叫び、ジエネシス達の元へと駆け出していく。

「……前言撤回。やっぱりバケモノだよ颯樹くん」

呆けた表情で呟くアヤナ。

「呆けている場合ではありませんよ」

するとユミナが皆に対して言った。

「颯樹さんだけにやらせては、ヒロインの名が廃ると言う物ですよ皆さん」

するとユミナは右手を上下に振ってメニュー欄を開き、そこから武器選択画面を開いて、そこに配置されていたボウガンを手を取った。

「ゆ、ユミナさん?!貴女、いつの間にかそれを習得したんですの?!」

慣れた手つきで武器を装備したユミナを見てルーシアが目を見開いて叫んだ。

「何を言っているのですか。ここに来るまで、彼らが何度も同じような事をしていたではありませんか。皆さんは見えていなかったのですか?」

「で、でもーそんな風に、慣れた手つき、で……」

戸惑った様子で喚くリンゼに対し、

「いいですか。確かに今は余りにもイレギュラー過ぎる状況です。ですが……」

それがどうしたと言うのです? 例えどのような状況に立たされようと、臨機応変に対応し主人をお助けするのが妻と言うものです」

ユミナの言葉を聞き、一同は押し黙る。

「……確かに、拙者としたことが少々取り乱していた様でござるな。」

しかしお陰で目が覚めたぞユミナ殿」

八重は毅然とした態度で左腰からゆっくり刀を抜き放つ。

「全く……アンタにそう言われちゃ敵わないわね」

「私たちも、行きましようか」

エルゼがガントレットを付けた拳を持ち上げ、リンゼが片手剣を引き抜き構える。

「当然私も行きます。レディとして殿方をお支えするのが淑女の務めですわ」

ルーシアがそう言うと、腰から二本の短剣を抜き放ち、それを逆手に持って構える。

「もう……颯樹君はいつも無茶苦茶なんだから」

アヤナはため息をつきながら、腰から片手剣を引き抜く。

ユミナはそれらを見て満足そうに頷くと、自身もボウガンを構えて「では……参りましょう、皆さん」

『おーー』

そして少女達は一斉に飛び出した。

—————

戦闘が始まり数分が経過した。

颯樹は勿論、ユミナ達は当然ながらこの世界での戦いを知らないため、相当な苦戦を強いられていた。そんな彼らをキリト達がカバーすることで戦闘は進んでいた。

しかしただ守られるだけで終わるような颯樹達では無い。慣れない場所で有利に戦闘を進めるにはどうしたら良いか？その道に精通している人間に教われれば良い。しかも今彼らの目の前には、その道のエキスパートが6名もいるのだ。

颯樹達とはかく、キリト達の戦闘スタイルを観察することから始めた。武器の振り方、体の身のこなし、そして何よりソードスキルの使い方などだ。特に使用武器が被っている颯樹、八重、ルーシア、アヤナの四人はそれぞれキリト、ティア、ツクヨ、フィリアの動きを注意深く観察した。

「成る程…大体わかった」

颯樹はある程度キリト達の動きを見極めると、ブリュンヒルドを右肩に担ぐ体勢をとる。すると漆黒の刃にライトグリーンの光が発生し、そして彼の身体が前に飛び出す。

「せああああああっ!!」

緑に輝く刃は目の前のゴブリン型モンスターの身体を斜め方向に両断した。

片手剣ソードスキル《ソニッククープ》

颯樹の放った一撃を受け、ゴブリンは身体をガラス片に変えて消滅した。

「や、やった…!」

この世界での初勝利に思わず顔が綻ぶ颯樹。

だが油断する彼の背後から別のゴブリンが棍棒を振り上げて迫る。

「しまっ……!」

しかしその棍棒が振り下ろされる前に、赤黒い大剣がゴブリンを吹き飛ばした。

「なーにを油断してるんだてめえ」

振り返るとジェネシスが呆れた顔で大剣を右肩に担いでいた。

「あ、ありがとうございます、ジェネシスさん」

「あー……」

颯樹が礼を述べるとジェネシスはそう言っただけで目を抑えた。

「その、ッさん」付けは良い。つかやめてくれ……知り合いとそっくりすぎて区別がつかなくなるから」

「は、はあ……じゃあ、ありがとうございます……ジェネシス」

「それでいい」

そしてジェネシスは再びゴ布林達を叩き伏せに走り出した。

一方こちらはティアと八重の二人。

八重は混戦の中ゴ布林を寄せ付けない程度で応戦しながらティアの動きを注視していた。颯樹と同じように、ソードスキルを発動する際の腕や足、刀の構えなどを隈なく観察した。

「よし……掴んだでござる」

すると八重は徐に自身の刀を左腰の鞘に納める。

そしてゆっくり腰を落とし、右手を刀の柄に、左手を鯉口辺りに添え、抜刀術の体勢を取る。

八重に向かって一体のゴ布林が接近する。棍棒を掴んだ右手を大きく張り上げ、八重を叩き潰さんとゴ布林は勢いよく近づいてくる。

「……シツッ！」

その無防備な胴体目掛けて八重は勢いよく抜刀し、そのまま刀を横一閃に振るった。銀色の光が横一直線に輝き、刀の刃の軌跡を形取る。

刀居合スキル《辻風》

八重の攻撃を受けたゴ布林は爆散し消滅した。

「ほう？中々いい太刀筋を持つてるな」

ティアが八重の攻撃を見てそう呟く。

「伊達に侍の名を語るものでは御座らんよ」

「それは上等……だっ！」

そしてティアと八重は並んでゴ布林の群れに斬りかかった。すれ違いざまにゴ布林の足を、腕を、胴体を瞬く間に斬っていく。

しかしティアと八重がいくら刀を振るっても、ゴブリンは次々に出現し群がってくる。

「……面倒だな」

するとティアは刀を両手で正面に下段で構え、そのまま右半身に持ち上げて顔の横まで上げる。切っ先を前に、腰を低く落として中段の霞の構えをとる。

するとティアの刀『銀牙』の刃が真紅の炎を纏い始めた。

ティアはそこから勢いよく飛び出し、ゴブリンの群れに飛び込んだ。炎を纏う斬撃が次々にゴブリンを斬り伏せていき、数分経った頃にはゴブリン達は消滅していた。

「そ、それは反則で御座ろう……」

八重は思わずため息を吐きながら呟いた。

その後、颯樹や八重、アヤナ、ルーシア達はそれぞれ見事にこの世界に順応し、新たに得たソードスキルを駆使して奮戦した。

しかし一方でユミナ、リンゼ、エルゼは未だ適応できずにいた。それも当然、彼女らには己が武器の手本が存在しないため、自力で活路を見出すしか無いのだ。

「要は溜め、なのですね」

するとここで、何かを掴んだらしいユミナが矢をボウガンにかける。

そしてボウガンを両手で構えると、颯樹の背後から襲い掛かろうとしていたゴブリン軍団に向けて放った。

矢が青いオーラを放ち長らく飛翔し、ゴブリンに向かって真っ直ぐに飛んでいく。

着弾したその時、ゴブリンを中心に巨大な大爆発が発生した。

射撃スキル《グレネードシユート》

「おおっと?!」

背後で発生した爆音に驚き颯樹は思わずその場から飛び退く。

「あつ、すみません颯樹さん」

「いや、いいんだユミナ。ナイス!」

謝るユミナに対し颯樹は笑顔でサムズアップして応えた。

「ほ、ボウガン……また新しいスキルの一種か……?」
キリトがユミナのスキルを見てそう呟いた。

—————

程なくして戦闘は終わった。

キリト達がいればまず苦戦しないだらう相手なのに加え、颯樹やユミナ達がソードスキルを使いこなせるようになったことで、現在彼らがいる周辺のモンスター達程度なら軽くあしらえる程になった。

「さて、そんじや進むとするか」

ジエネシスが大剣を背中に納め、皆を促す。

皆はジエネシスの後ろをついて行くように歩き出す。

一行が進み続けること数分。

「多分そろそろ、クエストの中ボスが出現するわ」

フィリアが皆に向けてそう告げる。

中ボスという単語に皆は気を引き締める。

「そつか……どんな奴なのか知ってるか?」

「それは……」

キリトの問いにフィリアが口を開いて答えようとしたその時だった。

目の前に青白い光と共に一体のモンスターが出現した。

紫色の半透明で液体状の身体を持つそれは、どう見ても……

「スライム、だよな?」

「ええ。名前は《メタルキングスライム》」

「どこに『メタル』要素があるんだよ。100%スライムじゃねーか」

「無駄口はそこまでにしなんし。来るぞ」

ツクヨがそう言った直後、スライムは触手状の腕を彼らに目掛けて素早く伸ばしてきた。

皆己の反射神経を持つてその場から飛び退いてかわす。

「うへえ、スライムかあ……」

げんなりした表情でスライムを見ながら言う颯樹。

「颯樹さんはスライムが苦手なのですか？」

「うん、少しトラウマ、と言うほどのものじゃないんだけど……」

直後、スライムは別の腕を瞬時に伸ばす。

だがその腕はジェネシスの大剣によってあっさり斬り落とされた。

「ハッ、中ボスつうからどんなもんかと思えば……全然大したことねえじゃねーか」

余裕の表情で大剣を肩に担ぎながら言うジェネシス。

「油断しないでって言ったでしょ。こいつらの恐ろしいところは」

するとスライムが今度は細かなスライムを彼らに向けて発射した。

ジェネシスは咄嗟に大剣の刃を盾のように前に突き出して防ぎ、キリトは双剣で薙ぎ払ってそれらを防いだ。

「おいおい、今度は何だったんだ？」

ジェネシスがそう呟いた直後。

「いやああああっ!!」

突如アスナの悲鳴が響き、キリトとジェネシスは咄嗟に振り向く。

「ちよ、ちよつと……何なのよこれはあつ?!」

見るとアスナの衣服に紫のスライムが付着し、そこから僅かに鮮やかな彼女の素肌が露わになっていた。

「あ、アスナア!!」

「おいファイリア、こいつはまさか……」

ジェネシスが何かを察してファイリアに尋ねると

「そうよ。こいつは、服を溶かす特性を持ったスライム」

ファイリアは頷いて淡々とそう告げた。

「いや何そのテンプレな攻撃は?!ここに来てそう言う趣向かよ!」

ジェネシスがそう喚いた瞬間。

「うわっ?!」

ティアの叫びが響き、ジェネシスはギョツとした顔で振り返り、そして絶句した。

「サツキイイイー!!」

颯樹の両眼を塞ぐようにスライムが付着し、颯樹が叫びを上げた。

「く、クソつたれ!こうなったら俺たちだけでぶっ倒すぞ!」

「ああ!アスナにこんなことしやがって……もうゆるぎさん!!」

ジエネシスとキリトは怒気を剥き出しにしてスライムに飛びかかる。

だがそれはあまりにも無謀な行為で……

「うわあああああー!!!!」

「ふ、服がああああー!!」

あたりにキリトとジエネシスの悲鳴が木霊した。

そんな彼らを、数メートル離れた場所に生えている大木の幹の上で、フィリアとツクヨの二人は遠目に見ていた。

「何かもう……地獄絵図だね」

「ふっ、じゃがこれは、中々いい見せ物じゃな」

苦笑しながら呟くフィリアに対し、やや愉悦気味の表情で答えるツクヨ。

「しかし、これをいつまでも放置しておくわけにはいかんろう」

するとツクヨは徐に立ち上がり、懐から手裏剣を取り出す。

「手裏剣術《零次元・表式》」

すると手裏剣がゴールドの光を浴び始め、次の瞬間ツクヨが最低限のモーションでそれらを投げつける。

黄金の光を纏った手裏剣は真っ直ぐスライムに飛翔していき、そして深々と突き刺さる。

奥義級の技を受けたスライムはその身を爆散させ消滅した。

「さて、スライムは片付けたぞ主ら」

ツクヨはゆっくりと視線をティア達の方へと向ける。

ティアとアスナ達は未だに蹲った体勢のまま顔を真っ赤に染めてプルプルと震えていた。

因みに溶けていた装備はスライムが倒されたからか修復されている

た。

「あうう……私……もうお嫁に行けない……」

「いや、もう貰ってるんだが」

弱々しい声で呟くティアに対しジエネシスがそう答える。

「キリトくん……見た……?」

「み……見てない……」

「嘘!その反応絶対見たんでしょ?!」

「見てないって!!ほんとほんと!」

慌てて否定するキリト。すると……

「貴方……私達の体も見ていませんわよね?」

ルーシアが恨みがましい目つきでキリト達を睨みながら言った。

「いや見てねえから!テメエらの裸なんぞ興味ねえから!!」

「怒らないので正直に答えて久弥……本当に見てないの?」

全力否定するジエネシス達に対し、ティアがやや威圧感を込めて尋ねる。

その問いにジエネシスとキリトは一瞬答えるのを躊躇われたが

……

「……い、一瞬、チラツと見えたような」

「お、俺も……」

ジエネシスとキリトは気まずそうに答えた。

「ほ、ほらあく!!やっぱり見たんじゃ無い!!」

「この助平野郎!!」

「万死に値する!!」

やはりと言うべきか案の定と言うべきか、少女達の非難の声が浴びせられる。

「……おい」

だがそんな物とは比べ物にならないくらいの悪魔が現れた。

「さ、サツキ?」

「あんたら……ユミナ達の裸……見たんだな?」

颯樹から発せられる唯ならぬ怒気を受けてジエネシス達は慌てふためく。

「ちよ、落ち着けサツキ！見てない、見てないから！」

「そ、そうだ！一瞬だ！ほんの一瞬だけチラッと視界に映ったんだって!!」

「てめえら……」

やっぱり見たんじゃないかああああー!!!」

颯樹の叫びと共に強烈なパンチが炸裂した。

「ギャアアアアアー!!!」

直後、二人の少年の悲鳴が森林に木霊した。

三十三話 ☆コラボ回後編くボス戦、そして帰還く

スライムの一件を経て、何とか落ち着きを取り戻した一行は更には森の中へと進む。

「もうすぐ、このクエストのボスが現れるわ」

先頭を歩くフィリアが後ろを振り向いてそう告げた。

「今度はスライムとかじゃねえだろうな？」

「さあ……どうだろうね」

ジェネシスが念を押すように尋ねると、フィリアは悪戯な笑みを浮かべながら返した。

「……え、何だよその反応」

「フィリア？じよ、冗談だよな？」

「ふふっ」

ジェネシスとキリトが引きつった顔で聞き返すと、フィリアはクスリと笑った。

「はあ……全く酷い目にあった」

「本当だよ……あんなのはもう二度とごめんだわ」

ティアとアスナはゲンナリとした表情で呟く。

「いやはや、災難だったね」

「全くです。はあ……私、もう颯樹さんのお嫁に行けません……」

「あたしも……」

苦笑しながら呟く颯樹に対し、俯き加減で答える。

「いや、もう貰ってるんだけど……」

「フツ、ぐ愁傷様と言うものじゃな」

そんな彼らを見て、ツクヨはキセルから煙を吐きながら言った。

「……随分と他人事だな」

「他人事じゃからの」

ジト目で言うティアに対し、ツクヨはあつけらかなとした態度で答えた。

〜数分後〜

茂みを掻き分けながら進んでいくと、やがて目の前に大きな門が現れた。

「もしかしてこれって……」

「ええそうよ。ここが今回のクエストのラストステージ」

颯樹が何かを察したように呟くと、フィリアが頷いて答えた。

「さて、一体どんな敵が出てくるのやら……」

「もしかして本当にまたでつかいスライムだったりしてな」

「冗談でもやめてくれ」

肩を回しながら言うキリトに対しジエネシスが揶揄うように答え、ティアが顔をしかめてそれに応えた。

「そんじゃ、準備はいいかてめーら？」

ジエネシスが颯樹達の方を振り向いて尋ねる。

「ああ、問題ないよ。ね、みんな？」

「勿論です」「いつでもいいわ！」「お任せください」

颯樹が皆を見回しながら尋ねると、ユミナ・エルゼ・ルーシアが首を縦に振る。

それを確認したジエネシスとキリトは、ゆっくりと大門に手をかけ、そしてゆっくりと開いた。

重々しい音と地響きを立てながら門はゆっくりと開いて行く。

「(SAOでのボス戦……ここでの死は現実での死に直結する。そしてそれは、恐らくこの世界に於いて現実の肉体を持たない僕等も例外じゃないはず。ここでもし誰かが死ねば……そいつは元の世界に帰れる保証はない)」

そして颯樹は、視線をユミナ達に移す。

「(大丈夫、何があっても……君たちは僕が守るよ)」

そう心の中で決意し、颯樹は銃剣ブリュンヒルドを引き抜く。それ

が合図となりユミナがボウガンを構え、他の少女達も己が武器を引き抜く。

やがて、『ズドン』と言う音とともに、完全に門が開かれた。

「行くぜ……てめえら!!」

ジエネシスの合図とともに、一行は中へと飛び込んでいく。

部屋の内部に入ってまず彼らの目に入ったのは、一つの巨大なシルエツトだった。

6メートル近い高さの身長に筋肉質な体格、山羊の頭ような大きく捻じ曲がった角に、蛇の頭部が付いた尻尾。

そして右手には禍々しい大剣が握られており、その瞳は燃え上がる炎のように暗闇の中で真紅に輝く。

やがて部屋の中に灯りが灯り、そのボスの全貌が明らかになった。

「あれ……なんか見たことあるなこいつ」

「奇遇だな……俺もそう思った」

ジエネシスの呟きにキリトが頷いた。そしてそれはティアとアスナも同じようだ。

無論、忘れるはずもないだろう。あれは七十四層ボス戦。キリト、ジエネシス、ティアが初めて自身のユニークスキルを解放した時のボスだ。

あの時の名前は《グリーンムアイズ》。

そして今回彼らの目の前にいるボスの名前は……

《The Hollow Eyes》——『虚なる瞳』と言う意味の、真紅のボスが今、彼らを視界に捉えた瞬間ゆつくりと立ち上がり、大剣を地面から引き抜いて高く掲げ、部屋中に木霊する雄叫びを上げた。

「ケツ、まさかまたてめえと戦うことになるとはよお」

「そうだな……でも、負ける気がしないよ」

ジエネシスが大剣を、キリトが二本の剣を構えて言った。

悪魔は大剣を思い切り真上から振り下ろす。その攻撃をジエネシスが自らの大剣で弾く。けたたましい金属の衝撃音が部屋中に響き渡った。

その後もジエネシスと悪魔との大剣の撃ち合いが続く中、その隙を見てティアとキリトがボスの懐に飛び込む。

抜刀術《蓮華》

二刀流《ダブルサーキュラー》

二人の剣撃が左右からボスの横腹を抉る。

彼らの攻撃を受けたボスは攻撃対象をキリトとティアに移す。

「そんなに目移りしていたら隙だらけじゃぞ」

不意にツクヨの声が響き、見るとボスの背後に電流を纏った苦無を左右の両手に構えたツクヨが立っていた。

彼女はその場から一気にボスの目線の高さまで飛び上がると、電気を帯びた苦無を全てボスの後頭部に投げつけた。

苦無術《雷電纏・迅雷一閃》

『G y a a a a a a a a a a a a a a a!!!』

次の瞬間、ボスの身体に凄まじい電流が走り、麻痺状態に陥った。

「ありがとうツクヨさんー！」

フィリアがそう叫びながらソードブレイカーを構え、ボスの背中を斬りつけた。

「よし、僕らも行こうー！」

颯樹はブリュンヒルドを手走り出し、八重・エルゼ・アヤナ・ルーシアもそれに続く。

片手剣《ソニックリープ》

刀《東雲》

体術《閃打》

短剣《ファッドエッジ》

様々な色を纏う攻撃がボスの周囲から炸裂する。

「私も行きます」

「では私もー！」

ユミナとリンゼがそれぞれボウガンと弓に矢を装填し、狙いを定める。

そしてユミナはボウガンのトリガーを引き、リンゼが矢を思い切り放つと黄色と青い光の一閃が真っ直ぐボスの頭部目掛けて飛翔し、命

中する。その瞬間ボスの頭部が大爆発を起こした。

射撃《グランドストライク》

弓《ウルフシューティングブラスト》

するとボスは激昂した様子で雄叫びを上げると、大剣を振りかぶって真つ直ぐユミナとリンゼに向かって接近する。

それを見たアスナが全速力でユミナ達の方に駆け出す。

「^{セット}《始動》！」

《Complete》

するとアスナのアーマーが全て弾け飛ぶ。

《Start Up》

次の瞬間アスナは視認不可能な速度に移行し、瞬く間に二人の元へ駆けつけるとそのまま彼女らを抱き上げてその場を離脱し、ボスから遠ざけた。

「あ、ありがとうございます……アスナさん」

「いえいえ、どういたしまして」

ユミナに対しアスナは笑顔で答える。

そしてアスナはゆっくりとボスの方に振り向くと、細剣をボスの方に向ける。

「《Check》！」

《Exceed Charge》

電子音声と共にアスナの剣に赤い光が宿り、そしてアスナは細剣を勢いよくボスに突き出した。

赤い円錐状のポインターが発射され、ボスの動きを拘束する。

「はあっ!!」

その瞬間、アスナは再び目にも止まらない速さでボスに急接近し、そしてボスの身体を貫通した。

その攻撃を受けてボスのHPは大きく削られた。残りは既にイエローゾーンに到達している。

「よしみんなー！一気に畳み掛けるぞ!!」

キリトの号令を合図に皆が一齐にソードスキルを放った。

程なくしてボス戦は終了した。

「はあ……あんま大したこと無かったな」

ジェネシスが大剣を背中の鞆に納めて言った。

「まあ……このモンスターはアインクラッドの奴らより弱体化して
るみたいだし、このメンバーなら多分本来の強さを持ってたとしても
押し切れるんじゃないか？」

「まあ、確かに前回は私たち3人だけでも倒せたからな」

キリトが背中に二本の剣を納め、ティアが刀を回して逆手に持ち替
え、ゆつくりと左腰の鞆に差し込んだ。

「まあ、みんな無事に終われたのならそれが一番なんじゃないかな？」
颯樹がブリュンヒルドをコートの内側に下がって直しながら言っ
た。

「さて、そんじゃクエストのボーナスを頂くとしようぜ」

ジェネシスと皆にそう促し、一行はボスが消滅して部屋の中央に現
れた宝箱に歩み寄る。

高さは約30cmで横幅が40cmほどの大きさのチェストに
ジェネシスがゆつくり手を伸ばす。

と、ここで何かを思い出したようにフィリアの方を振り向く。

「なあトレジャーハンターさんよ、ここはお前が開けてみるか？」

「え？」

彼の言葉を聞きフィリアは目を丸くする。

「いや、この宝箱にトラップが無いとは限らねえ。テメエなら安全に
開けられんだろ」

そう言つてジェネシスは宝箱から離れた。

「そう言うことなら……うん、任せて」

フィリアはゆつくりと宝箱の前に跪くと、宝箱を叩いたりゆつくり
さすると言う行為を始めた。

「(トレジャーハントスキルか……これは向こうでも使えそうだな)」

颯樹はフィリアの作業を見つめながら静かにそう考えた。

「よし、特にトラップは設定されてないわね」

ある程度確認し終えたフィリアが一度深呼吸し、

「さあ……出ておいでお宝ちゃん！」

と楽しそうな笑顔で言った。

「……お宝ちゃん？」

「お宝ちゃんって言った？」

「意外に可愛いところがあるんだな」

フィリアから出た思わぬ言葉に皆は苦笑しながら呟いた。

やがてフィリアがゆっくりと宝箱の扉を開ける。

その中に入っていたのは……

「動物の……牙？」

フィリアが仲間を取り出してアスナがその物体を見た感想を言う。

素材の名前は『メタルフアング』。武器の強化素材のようだ。

「一個しかねえのか……」

個数が一個だけしかないと苦い顔になった。今この場にいるのは約10名以上。その中でたった一人分しか武器の強化ができない。

「私は別に、これを使いたいとかは思っていないわ。これの使い道は貴方達に任せる」

フィリアはそう言って牙をジェネシスに手渡した。

「つつてもなあ……」

ジェネシスは牙を見つめながら思索する。そして一瞬皆を見回した後……

「……よし、ほれ」

そう言ってジェネシスは牙を投げ渡した。その相手は……

「うわっ、と……ぼ、僕ですか？」

颯樹であった。

「あー、待ってる。慣れねえ場所によく戦ったな。コイツはその報酬ってやつだ。使い方はテメエに任せるぜ」

「そ、そっか……ありがとうジェネシス。大事に使わせてもらうよ」

颯樹は笑顔でそう答えた。

「……よし、それじゃ行くかうかみんな」

そして一行はホロウエリアの管理区に向けて歩き出す。

一行は数十分かけて、ホロウエリアの管理区に到着した。

「何とかここに着いたな……」

キリトがホツとした表情で呟く。

他の全員もようやく辿り着いた安全圏内に安心した様子だ。

「さて、そんじやアイコンクラウドにはこっから帰れるからよ。気いつけて帰るんだぞ」

ジェネシスが親指で転移門を指して言った。

「うん、分かった。ありがとうみんな」

颯樹はそう促されて転移門へと入る。ユミナ達もそれに続く。

「皆さん、本当にありがとうございました」

「機会有ればまた会おう！」

ユミナが礼儀正しく頭を下げ、颯樹が手を振って皆に言うと、やがて青白い光に包まれて彼らは姿を消した。

「……あ……」

「どうした？ジェネシス」

何かを思い出したようにジェネシスが声を上げ、ティアが彼に尋ねる。

「フレンド登録すんの忘れてたわ」

「あー……」

青白い光が彼らを包み、やがてその光の渦はかなり強力なものとなって彼らを翻弄する。

やがて光が止むと、そこは彼らのよく知る場所だった。森に囲まれた自然豊かな街に、その中央に聳え立つ立派な西洋風の城。

「アストラライア公国……戻ってこられたのか……」

「はあ……どうにか無事に帰ってこられましたね」

颯樹とユミナがホツとして眩く。

「しかし、あの世界で出会った人達……いい人達だったわね」

「それは私もそう思います」

「特にあの侍……ティア殿とは一度手合わせを願いたいでござるな」

リンゼとエルゼ、八重がS A Oで出会った者達のことを思い出して眩いた。

すると颯樹は《ストレージ》の中からとあるものを取り出す。

それは先程ジェネシスから託されたアイテム《メタルファンク》。

あの世界での思い出の品。

「ありがとうジェネシス、キリト、みんな……いつか、また会おう！」

颯樹はオレンジに染まる夕陽を見ながらそう口にした。

—————

一方こちらはS A Oの世界、ホロウエリア。

「うし、んじや俺たちももう帰るぞ」

「また来るからな。フィリア、ツクヨ」

ジェネシスとキリト、そして彼らに続いてティアとアスナも続く。

そして青白い光が彼らを包み、彼らはアインクラッドへと帰って行った。

「行っちゃった、か……」

フィリアはどこか名残惜しそうに誰もいなくなった転移門を見つめていた。

「ねえ、ツクヨさん……私達って、彼らとは違う人間なのかな……？」
「それは……」

フィリアはアインクラッドに戻れない事を気にしている様子だった。ツクヨはその体に対して答えられなかった。

「……よく分かってるじゃねえか」

「?!」

その時、管理区に響いた不気味な男の声を聞き、フィリアとツクヨは咄嗟に武器を構える。

「おおおっと、そんな危ねえもん突きつけるなよ。」

怖くて膝がブルっちまうじゃねえ」

そこにいたのは、紫色のスーツ姿にボサボサになった髪、真っ白な肌に禍々しい眼光を放つ鋭い目。口元には口紅のようなものが三日月状に赤く塗られており、まるで笑っているように見える。

「……貴様、一体何者じゃ」

「俺か？んくそうさなア……《ジョーカー》、と言っておくぜ」

男は自身を《ジョーカー》と名乗る。

「ジョーカー、だと……そうか、貴様がああ《J》の幹部という奴か」

「Oh、俺らも随分と有名になったモンだな。こつちの世界でも知られてるとは」

ツクヨの呟きにジョーカーは尚も不気味な笑みを浮かべながら言った。

「ここに一体どうやって入ったの？」

「んなこたあどうだつていいだろ？世の中不思議な事だらけだしなア」

フィリアが強めの口調で問いかけるが、ジョーカーはそんなフィリアの様子を意に介さない様子で答える。

「わつちらを殺しに来たか？悪いがそう簡単にやられはせんぞ」

ツクヨは両手に手裏剣と苦無を持って身構える。

「おい落ち着けよ、別にお前さんらを殺しに来た訳じゃねえ」

それに対してジョーカーは両手を振って否定した。

「ならば何の用じゃ！」

「いや何、ちと変わったオレンジちゃんがいるモンだから、ここで挨拶でもしとこうかと思つてよオ…俺たち話が合うと思うぜエ？肩身の狭あゝいオレンジ同士…仲良くやろうじゃねえか」

「はっ、よく言う……」

ジョーカーの告げた言葉に対してフィリアが吐き捨てるように言う。

「知つてるぜエ？俺アお前えが一体何をしたのかをよ……」

するとジョーカーはそれまでの戯けた口調から一変して鋭く威圧感のある声でそう告げた。

「なっ……それつてどう言う意味?!」

「ブアッヒヤハハハハ!! 言えないよなあゝ？言えないよなあゝあんなビーターの狂人やろう共には!! 自分が一体何を殺したのか、口が裂けても言えないよなあゝ?!」

フィリアが問いかけると、ジョーカーは今度は狂つたような笑い声を上げてそう叫んだ。

だがその時、『ヒュン』と言う風切り音がなり、ジョーカーの頬のすぐそばを何かが通り抜け、壁に突き刺さる。

それは苦無だった。

「……用がないならさっさと消えなんし。次は貴様の目を潰すぞ」

ツクヨは苦無を突き付けて威圧感のある声で言った。

するとジョーカーは両手を上げて

「OK、分かった分かった」

そして振り返って管理区の出口へと歩き出す。

だが管理区から出る直前、再びフィリアの方を向くところ告げた。

「お前え……このままじゃいつか……死ぬぜ」

そう言い残し、彼は今度こそ管理区から姿を消した。

「……私が……死ぬ……？」

三十四話 射撃訓練

「《射撃スキル》だあ？」

七十六層アークソフィアの宿屋の食堂で、ジェネシスは素っ頓狂な声を上げた。

彼の目の前にいるのは、黒髪の短髪にクールな雰囲気を纏った少女、シノン。

「ええ、メニュー欄を見てたらいつの間にか出ていたの」

そう言ってシノンはメニューを可視化してジェネシスに見せた。たしかにそこには《射撃》と言う文字があった。

「あんたなら何かわかるんじゃないかと思っただけど」
するとジェネシスは首を振って

「残念だがそいつはお門違いだぜ。そのスキルはハヅキ辺りに聞くのが一番手取り早いんじゃないかねえの？」

するとシノンは「はあ…」とため息をつき、

「あんたねえ……そんな事私にわからないでも思った？」

とつづくにハヅキには聞いてあるわよ。そしたら、あの娘の持つてるスキルは私とは違うみたい」

「なんだ、違いのかよ。つってもなあ……」

ジェネシスはため息を吐きながら頭をポリポリと掻く。

SAOで射撃スキルを使うものと言えば、今生き残っている6000人のプレイヤーの中でもハヅキただ一人くらいなものだろう。その彼女ですら分からない別系統の射撃スキルなど、ジェネシスからすればもうお手上げだ。

「……ん？」

と、ここでふとジェネシスはとある事を思い出す。

それは先日、ホロウエリアで出会った不思議な者達。

その内の一人が手にしていた射撃武器、ボウガン。

「うし、行くぞシノン」

「は、はあ？いきなりなんだって言うのよ……あ、ちよつと待ちなさい

よ！」

突如立ち上がって歩き出したジエネシスにシノンも慌てて付いていく。

—————

ジエネシスがシノンを手を連れてやってきたのは、街の裏路地にある骨董品屋。

「確かここにあった気がするんだよな……」

店に入るや否や、ジエネシスは骨董品の山を物色し始める。

数分探し回ったあと、漸く目当ての物を見つけたのか、ジエネシスはとある物を手にとってシノンに見せた。

「これって……ボウガン？」

「ああ。この間偶然見つけてな。何に使うのかさっぱりだったんだが」

そしてジエネシスは早速そのボウガンを購入するため店員のNPとトレード画面を開く。

「うげ……こりや中々の値段だな……」

その値段はジエネシスの全財産の約三割。だが彼は迷う事なくOKボタンを押し、ボウガンを購入する。

「ほれ」

そしてジエネシスは購入したボウガンを手渡す。

「あ……ありがと。お代はいくらだった？」

シノンはメニュー欄からトレード画面を開き、貰ったボウガンの金額をジエネシスに渡そうとするが、

「ばっか、いらねえよ。こいつはまあ、投資みてえなものだ。

黙って受け取ってろ」

そう言われてシノンはメニュー欄を閉じる。

「……そ。なら、ありがたく受け取っておくわ」

そう言ってシノン は歩き出す。そのまま宿を通り過ぎ、フィールドの出口へと向かう。

「おい、どこ行くんだよ」

「試し打ちよ、これに慣れておかないと実戦じゃ意味ないでしょう?」

シノンはメニュー欄から防具を選択してチエストアーマーを付けて武装する。

「つたく、テメエ一人じゃモンスターにたかられて終わりだぞ?」

「あら? 私はあるたも来てくれると思っただけだぞ」

シノンはあつけらかなとした口調で言い、ジェネシスは一瞬ポカんとした表情だったが、

「……あー、ハイハイ。さっさと行くぞ」

そして二人は並んで歩き出す。

〜数分後〜

二人はフィールドを流れる小川のほとりまできた。

「この辺でいいだろ。ここらのモンスターなら今のでめえのレベルでも問題なく倒せる」

「そうね、ここなら見晴らしもいいし狙いやすそう」

「しっかし、これなら双眼鏡でも持つてくるんだったな……ただっ広すぎてモンスターの影も見えやしねえ」

「あれなんか使えそうじゃ無い?」

シノンが指差した先には、高さ6メートルほどの大木があった。

「……なるほどな」

シノンの言いたい事を察したジェネシスは大木の根本まで歩くと、そのごつごつした幹に手をかける。

「たく、木登りなんざやんのは初めてだぞ」

と言う愚痴を零しつつ、ジェネシスは慣れた手つきで大木をよじ登っていく。

およそ半分ほどの高さにある太い枝の方に移り、周りを見渡す。

「……お? あそこがいい感じの猪がいるな」

大木から約数十メートル先の草原に猪型モンスターがいるのを発見した。

「私でも倒せそう?」

「ああ、今のお前なら問題なく倒せんだろ。あれの肉でも晩飯にするか」

「えっ、食べ物にするの?」

「ああ、あの猪からドロップする肉が結構イケるらしいんだ。ウチには料理スキル完全習得のアスナとティアがいるしな」

「ふうん……ねえ、ジェネシス。そこ少し詰めて」

するとシノンにはジェネシスと同じ要領で木を登り始めた。

「は?いやお前もこつちに来んの?」

「高いところの方が狙いやすいし、飛距離も稼げるでしょ?」

そしてシノンはジェネシスの立つ木の枝までやって来る。

だがその枝は二人が立つにはあまりにも狭く、ジェネシスの体格の大きさも相まってかなり窮屈だった。しかしシノンは問題ない様子だ。

「射撃ポイントとしてはここが最適みたいね……ここから狙うわ」

そう言つてシノンはボウガンを構え、照準を定める。

「……ターゲット捕捉」

「あの、窮屈なだけ……」

「うるさい、気が散る」

「アツハイ」

シノンはジェネシスの言葉をばつさりと切り捨て、集中力を高めていく。お互い無言のまま時間が過ぎる。

「……そっつー!」

シノンはボウガンのトリガーを引き矢を射出した。

青い光の尾を引きながら矢は弧を描いて真っ直ぐに猪へ飛んで行く。

猪は接近する矢に気付くが時すでに遅く、矢は猪の胴体に突き刺さり、『プギャアアアツ!!』と言う断末の叫びを上げて消滅した。

「……ふう」

シノンはただ喜ぶでも無く、淡々と息を吐いてボウガンを降ろした。

「やるじゃねえか」

「まあね」

ジェネシスの言葉にシノン得意げな顔をした。

「それじゃ場所を移しましよ」

「え、まだやんの？」

「当たり前じゃない。たった一発打っただけじゃ物足りないわよ」

そしてシノンは枝から降りようと立ち上がるが……

「きゃあっ?!」

「おわっ?!」

シノンはバランスを崩し、ジェネシスも巻き添えを食らってそのまま落下していく。

そのまま大木の下を流れる小川に二人は水しぶきを上げて落ちた。

「いつて、おいシノ……んげっ?!」

ジェネシスが顔を持ち上げるやいなやギョツとした表情で慌てて視線を逸らす。

「ご、ごめんなさい。ちよつと足を踏み外したわ……ってあんた、何で目を逸らしてるのよ？」

シノンはジェネシスの方を振り返って疑問符を浮かべる。

「いや、それは自分のケツ見たらわかる」

「……っ?!」

ジェネシスにそう言われ、シノンは自分の臀部を確認すると目を見開いた。

自分が身につけているショートパンツが水に濡れて透けてしまい、その内側の下着がくつきりと……

「……ねえ、ジェネシス」

楽に上がると、シノンは冷やややかな声でボウガンを背中ホルダーから再び引き抜いた。

そして矢を装填し、その銃口をジェネシスに向ける。

「おい、何でそれを俺に向けるんだよ？」

ジェネシスが引きつった表情で尋ねた瞬間、ボウガンから矢が放たれ、ジェネシスの頭部の側面を通過して行った。

「危なっ?!」

「ジェネシス……あんた、見たわね?」

尚も冷たい声でいいながらシノンは矢を放つ。

「待て!! 気持ちは分かるが今は落ち着け!! 当たると色々やべえから!!」

「問答無用!」

その後ジェネシスは、圏外でプレイヤーが人に対して攻撃してはいけない理由をシノンから放たれる矢をかわしながら何とか説明した。

「全く……そう言うことは早く言つてよ」

「言つたよ?! 言ってるのに全然聞く耳持たなかつたよなお前?!」

ジト目で言うシノンに対しジェネシスはそう叫んだ。

「しかも服が濡れて透けるって……ゲームなのにどこまでリアルに忠実なのよ」

「それは俺が聞きたい」

シノンは恥ずかしそうに頬を赤く染めながら言つた。

—————

その後、幾らかシノンの射撃訓練を兼ねてモンスター狩りを行つた。

気がつくともう夕方になっていた。

「今日は付き合ってくれてありがとうね」

「気に入んな。テメエが強くなんならこっちも大助かりだしな」

「…でも、もうあんな事はしないよね」

「するかよ!」

そうやり取りを交わし、二人は帰路についた。

三十五話

切り裂きジャック

その日、クライン・シリカ・サチ・キリトの四人は七十九層層迷宮区に来ていた。

目的はシリカとサチのレベルアップ。迷宮区のため多少リスクはあるが、モンスターレベルが高い分得られる経験値も多く、更により実戦に近い形で戦えるため強化を図るならば最適な場所だ。危険な場合はキリトとクラインがフォローに入る形で迷宮区を進んで行き、日が暮れ始めた頃に彼らは切り上げた。

「……ようし、今日はこの辺で帰るか」

「そうだな、もう夕暮れだ。アスナ達が夕食を作って待っていてくれるはずだ」

クラインとキリトはそれぞれの武器を収めて言った。

「今日は付き合ってくださってありがとうございました！」

「お陰で随分とレベルも上がったよ」

シリカとサチもそれぞれ短剣と長槍を収めて礼を述べた。

「いいってことよ、お前さんらが強くなってくれりゃこつちも助かるんだしな」

クラインは気さくな笑顔でそう答える。

「よし、それじゃ帰ろうか」

キリトがそう言うと、皆は頷いて帰路についた。

「《黒の剣士・キリト》……《風林火山リーダー・クライン》とお見受けする……」

その時、前方から男の声が響き、見ると暗闇の中を編笠を被り黒い和風の衣装に身を包んだ男が悠然と歩いて来ていた。

「なんだてめえ？」

クラインはやや警戒しながら問いを投げかける。

すると男は徐に編笠を外し投げ捨て、隠されたその素顔があらわになった。

銀色の髪に中性的な顔立ち、左目を隠すように斜めに掛けられた眼

帯があり、その深紅の右目は禍々しい光を放っていた。

「その首……貫い受けるッ!!」

そして男は勢いよくその場から飛び出し、左腰の刀を引き抜いて斬りかかった。

「うおっ?!」

クラインは咄嗟に自身の刀を抜刀してその刃を受け止めた。

凄まじい火花とけたたましい金属音が迷宮区内に響き渡る。

「クラインー」

キリトは即座に背中から二振りの剣を引き抜いてクラインと男の元へ駆けた。

「ふん」

だが銀髪の男は面白くなさそうに息を吐いてキリトに対しクラインと鏝迫り合いをしたまま彼の胴体に蹴りを叩き込んだ。

「てめえ……一体何者だ!」

「知る必要があるのか? 貴様らはここで死ぬのだからな」

クラインの問いに対し男は冷徹な口調で告げ、そのままクラインを押し返した。

バランスを崩したクラインに対し銀髪の男はソードスキルを纏って斬りかかった。

彼の胴体に向かって横一閃に刀を振るった。

「ぐっっ?!」

クラインは腹部を押さえて蹲り悶絶し始めた。

「くくっ……痛いだろう? この刀はペインアブゾーバーを無効化する特性がある」

「なっ……ペインアブゾーバーを?!」

キリトは驚愕のあまり目を見開いた。

通常、SAO内でダメージを受けても痛みを感じる事はない。

ペインアブゾーバー機能によって痛覚抑制が働いているためだ。

ペインアブゾーバーを無効化する武器やアイテムなど、聞いたこともなかったし、存在する事自体あり得ない事だと思っていたためだ。

「信じられない、という顔だな……ならば自分で確かめてみるがいい」

すると銀髪の男はキリトを標的に定め刀を構えて斬りかかった。真上から振り下ろされる鈍色の刃をキリトは左右の剣を交差させて受け止めた。

「ほう？二刀流か、中々やるようだな。しかし手数が多ければ有利とは限らんぞ」

そう告げた直後、キリトに対して男からの猛攻が始まった。上から、横から、斜めから、下から次々と不規則に刃が振るわれ、キリトはその攻撃を黒と翡翠の剣でどうにか凌ぐ。

だが剣速は僅かにキリトが劣っているため、徐々に押されていく。そしてキリトの胴体のに斜めの傷が入った。

「ぐあっ……!!」

キリトはかつて味わったことのない激痛に顔を歪ませた。

「キリトさん!!」

シリカが短剣を引き抜き、サチも槍を構えて意を決して男に飛びかかる。しかし、

「貴様ら程度、刀を振るうまでも無い」

男はつまらなそうに言う、刀の柄でサチの頬を殴りつけ、左膝をシリカの腹部に叩き込んだ。サチは地面に倒れ、シリカは壁に叩きつけられた。

「フン、四人もいてこんなものか？他愛もない……」

男はゆっくりと周りを見回しながらそう呟く。

そして彼は激痛に悶絶しているクラインの元へとゆっくり近づくと、刀を逆手に持って振り上げる。

「させるかっ!!」

その叫びと共にキリトが黒剣で男に斬りかかった。

男は逆手に持った刀を突き出してその攻撃をいなす。

キリトの剣が男の刀を火花を散らしながら通過し、そのままキリトと男は背中合わせに立つ。

直後二人は同時に動き出し、振り向きざまに互いの獲物を振るう。キリトの左手の剣と男の逆手に持たれた刀がぶつかり合う。そのま

まキリトは左右の剣で交互に斬撃を繰り返していくが、男はそれらを難なく防いでいく。

「遅い」

男が冷徹な口調でそう告げた直後、キリトの視界から男が消えた。行方を探すため視線を動かそうとしたその時、キリトの体が崩れ去った。何が起こったかも分からず地面に倒れ込み、起き上がるため足に力を入れたその時、違和感を感じて足に視線を移す。

その瞬間、キリトの目は見開かれ、同時に今まで感じたこともない激痛がキリトを襲った。

「ぐあああああーっ!!」

キリトの右足の太腿から下が斬り落とされていたのだ。

地面に伏して激痛にもがき苦しむキリトを見下ろし、男はその刃をキリトの首に近づけた。

「キリトオーっ!!」

クラインがそう叫びながら男の背後から斬りかかる。

だが男は振り返らずにただ刀を背中に回してクラインの刃を受け止めた。

「そんな散漫な刃で俺を斬れるものか」

男は吐き捨てるように告げると、振り向きざまに回し蹴りを叩き込んだ。

そして刀を左手に持ち替え、バランスを崩してよろめくクラインの腹部に勢いよく突き出す。

『ザシュッ!!』と言う音が鳴り、クラインの腹部を鈍色の刃が貫いた。

「クラインさん!!」

その時、シリカが短剣を手に男に向かって背後から飛びかかった。だが男は刀から手を離し、そのまま振り返ると自身に飛び込んでくるシリカの首を掴んだ。

そして彼女の首を掴んだまま男はシリカを地面に叩きつける。

固い地面に叩きつけられたシリカの頭を、男は容赦なく踏みつける。

「その程度の実力で俺に斬りかかろうとは……愚かな奴だ」

呆れた表情でシリカを見下ろしながら男はそう吐き捨てた。

「シリカちゃんから……離れろおおおーっ!!!」

その直後、サチがそう叫びながら槍を男に向かつて突き出す。ソードスキルの光を纏った槍の先端が男の首元を捉えた。

「タイミング的に回避することは不可能。」

しかしその時、男の右目がサチの方に向けられた。

その瞬間、禍々しい深紅の瞳に睨まれたサチはまるで石になったかのように動きを封じられた。

なっ——?!体が……動かない……どういう事? 一体何が?!

サチの心中を察したのか男はニヤリと口端を吊り上げ、

「何が起きたか分からない、という様子だな?」

これは妖術ではないぞ。現実世界に存在する、まあ一種の催眠術のようなものだ。

二階堂平法「心の一方」。それをこの世界でシステム外スキルとして昇華させたものだ」

「あ……ああ……」と呻き声しかあげられないサチに対し得意げに話す男。

「人間は恐怖に脆い……その脆さを突いて高めた剣気を相手にぶつけ動きを封じ込める……」

そして男はサチ顎を掴んで、その首元に刀を添えた。

「苦しいだろう。心の脆い人間ほど術にかかりやすい……」

「ああ……っ!」

「ぐ……サチイイイーツ!!!」

キリトが激痛に耐えながら何とか立ち上がろうとするが、右足を切断されているため起き上がることにすら叶わない。

サチはいよいよ死を覚悟して目を閉じた。

するとその時だった。

迷宮区の奥から銀色の疾風が男を突き飛ばした。

サチは催眠が解けたのか地面に尻股を突いて座り込んだ。

そして顔を上げると、視界に入ってきたのはたなびく白マント。

「ククク……貴様なら必ず来ると思っていたぞ」

男は愉快そうに肩を上下させて笑い出し、その人物の方を見た。

「また会ったな——《白夜叉》」

「て……ティア！」

ティアは刀の切っ先を男に突きつけ、鋭い目つきで睨んでいた。

「貴様……娘に飽き足らず私の仲間にまで手を出すか……」

ジャック・ザ・リッパー！」

ティアは敵意を剥き出しにしながら男——ジャックに斬りかかった。

地面から勢いよく飛び出してティアは刀を横一閃に振るい、ジャックは剣を真上から振り下ろす事でそれを防いだ。

二人の位置が入れ替わり、背中合わせに並ぶ。

そして二人は同時に振り返り、ティアは下から、ジャックは上から刀を振り下ろす。

金属がぶつかり合う音と凄まじい火花が何度も飛び散る。

ティアとジャックは刀を弧を描くように何度も振る。

ティアは目の前に迫る刃を上体を後ろに逸らす事で回避し、返しにジャックの頭部目掛けて突きを放つが彼は首を横に傾ける事でそれをかわす。

両者の実力は拮抗していた。

一度二人は距離をとって睨み合う。

「ふん……流石は四天王の一角である白夜叉だな。

しかし貴様の剣には何かが欠けている……」

そう言つてジャックティアに斬りかかる。

鏝迫り合いの最中、ジャックはティアの目を見つめながら何かを悟ったように切り出した。

「見えたぞ……貴様は人斬りの快樂を恐れている」

「——何？」

ティアはジャックのその指摘を受け目を見開く。

その瞬間、ティアの集中力が僅かに乱れ、ジャックはその隙を逃さず猛攻を加える。

先程と打って変わって桁外れの剣速にティアは防戦一方だ。

「前にも言ったろう？貴様の本性は修羅だ……人を斬りたいという本能が確かにある。」

だが理性がそれを抑えている」

「私の本性が……人斬りだと言いたいのか？」

「ああそうだ……俺は知っているぞ？貴様がかつて人を斬った事を……その瞬間もな」

「っ?!」

その瞬間、ティアの両眼は見開かれた。

ティアの脳裏に蘇るのは、あの忌まわしい男の顔、その最期。

あの時、ティアはジェネシスを手に掛けようとした野蛮な男をその手で斬り殺した。あの瞬間を目撃されていた事実には、ティアは信じられない思いだった。

「だから言っているのだ、貴様は俺と同じ人斬りだとな」

勝ち誇ったような笑みで言うジャック。

そんな彼の言葉を、ティアは首を横に振って否定する。

「違う……違う！私の剣は人を斬るためのものじゃない！」

そしてティアは自身の刀をジャックに向けて

「私の剣は……この世界を……この世界の人を救うための剣……活人剣だ！」

「そうか、ならば試してみるか？」

するとジャックは刀をゆっくりと左腰の鞘に収めた。

「お前の言う活人剣とやると、俺の人斬りの剣……どちらが真に強いのか。思い知らせてやろうじゃないか」

そう言ってジャックは腰を落とし、左半身を引く。

あの構えはティアもよく知っている。抜刀術の構えだ。

ティアも同じように刀を収めて抜刀術の構えをとる。

2メートルほどの間隔を開け、両者は静止し睨み合う事数秒。

同時に右足を勢いよく踏み出し、左腰の刀を勢いよく引き抜く。

銀色に輝く刃が勢いよくぶつかり合う。けたたましい金属音と今日一番の火花が飛び散る。

そして、宙に一つの金属の刃が舞った。

「な……」

ティアは自身の刀を見る。

かつて名工であるレインに鍛えてもらった刀《銀牙》が、真つ二つに折れてしまっていたのだ。

自身の敗北を悟り、ティアは地面に片膝をついた。

そんな彼女を見下ろし、ジャックは嘆息しながら言う。

「分かっただろう、貴様の活人剣などで俺は止められん」

そしてジャックは刀を上に掲げ、それをティアの首に勢いよく――

振り下ろさずに、再び左腰に収める。

「精々人斬りとなつて出直すんだな」

するとジャックの身体が周りの景色に溶け込むように消えていく。

「あれは……隠蔽スキルか!」

ようやく回復したキリトがジャックを追うため駆け出す。

だが彼がジャックに到達する前に、ジャックは消えた。

ティアはやがてゆっくりと立ち上がると、半ばから折れた自身の刀を見つめた。

折れた刀身は光を失い、やがてガラス片となって消滅した。

三十六話 Comment v a s — t u !

七十六層アークソフィア

「しっかし……また派手にやられたな」

ティアとジェネシスが寝泊りする宿部屋のリビングで、ジェネシスは折れたティアの刀を見て呟いた。

「うん…手も足も出なかったよ」

「ジャック・ザ・リッパー、ねえ……また面倒くさそうなのが出てきたもんだ」

ジェネシスはソファに腰掛けながら参ったとばかりに呟く。

「キリト達は？」

「ジャック・ザ・リッパーの情報を集めに行ったよ。あれは、絶対に無視できない存在だしね」

キリト達は彼との戦いの後、その次の日からジャックの搜索及び調査に向かった。ただでさえ危険性を孕んだ性格の上、痛覚抑制機能であるペインアップゾーバーを無効化する武器を持っているのはあまりにも脅威的すぎる。

「それよか問題は、おめえの刀だな」

「うん……そうだね」

折れてしまったティアの刀、『銀牙』。それに代わる新たな刀を製作しなければならぬ。その為にはやはり、最高レベルの素材を手に入れる必要がある。

「こういう時は、あそこだな」

ジェネシスはそう言ってソファから立ち上がり、ティアもそれに続く。

—————

「……で、懲りずにまたやって来たと言うわけか」

ホロウエリアの管理区で、ツクヨはキセルを蒸しながら呆れた表情

で言った。

因みにどうやらフィリアは不在のようだ。

「刀が折れたんだ。しゃーねえだろ」

「ほう？ 刀が折れたと？ 一体どんな使い方をすれば折れるのかのう？」

ツクヨは悪戯な笑みを浮かべながらティアに詰め寄る。

「……うるさい。いいから黙って付き合え」

ティアは視線をそらしてややぶっきらぼうに言い、管理区の出口に向かう。

「全く……付き合わされる身にもなれと言うものじゃな」

ツクヨは呆れ顔で呟いたあと、それに続く。

一行はホロウエリアの草原地帯を歩いていった。

一面が緑豊かな草木で覆われ、温かい日差しも相まって快適な気温だった。

「これがピクニックならよかったんだがな」

「馬鹿を言え。ここはモンスター的大量出現地帯じゃ。主らもそれを知ってここに来たのじゃろう。まあ、あんなモンスターと戯れながらでもないと言うなら、どうぞ先にやるがいいでありんす」

ツクヨが顎で指した先にいたのは、巨大な熊。

《フリージングベアー》という名のモンスターだ。

「奴からドロップするアイテムを使えば、そこそこのいい刀でも作れるじゃろう」

「こんな草原にフリージングベアーとかあいつ出る場所間違えてんだろ」

ジェネシスとツクヨはそう交わしながら武器を構えた。

ティアもメニュー欄から予備の刀をオブジェクト化し、引き抜く。

「そんななまくら刀で戦えるのか？」

「無いよりはマシだろう、こんな刀でも少しは戦える」

ツクヨはティアが引き抜いた刀を見て尋ねる。

ティアは強気にそう答えるが、その刀は銀牙に比べて輝きも鈍く、見るからに安物の刀であった。

フリージングベアーはティアに爪を立てて突っ込む。

ティアは回避行動は取らず、その場で抜刀術の構えをとる。

左腰の刀が銀色の鋭い光を帯び、刀居合スキル《辻風》が発動、勢いよく抜刀し熊の爪とティアの刀が火花を散らしてぶつかり合う。

しかし、『バキン!!』と言う音と共にティアの刀が刀身の半ばから叩き折れた。

呆気にとられるティアの一瞬の間をつき、熊は反対側の腕でティアを殴りつけた。

「ぐっ……」

ダメージを受け草原を転がるティア。

何とか体勢を立て直すティアだが、彼女の右手に握られた刀はガラス片となって消滅した。

「だから言わんことじゃ無い。主は大人しく下がっていなんし」

「……………チツ」

ティアは悔しそうに舌打ちをしつつも、ツクヨの言う通りに数歩下がった。

「さて、主の嫁に嫉妬されんうちにさっさと倒すとしようかのう」

「ああ、ティアに手エ出した罪は重いぜ」

ジェネシスは大剣を振りかざして熊に突っ込む。

熊から交互に繰り出される巨大な拳とジェネシスの赤黒い大剣がぶつかり合う。

熊がジェネシスに気を取られている隙に、ツクヨが背後から手裏剣や苦無を投げつける。

熊は雄叫びを上げて背後に腕を力任せに振るうが、そこには既にツクヨの姿はなく、空振りに終わる。

「おおおおおおー」

その時、ジェネシスが赤黒い光を纏った大剣を横薙ぎにする。

暗黒剣二連撃スキル《ヘイルストライク》

斬撃の余波で発生する暴風が辺りの草を大きく揺らす。

攻撃を受けた熊はジェネシスの方を振り返ると、口からブレスを吹きかけた。

「何っ?!」

するとそのブレスでジェネシスの足元が凍りつき、身動きが取れなくなる。

そこへ熊が容赦なく拳を繰り出した。

「ぐおおっー!」

ジェネシスはその攻撃を受け大きく吹き飛ばされた。

「久弥っ!!」

ティアが慌てて彼に駆け寄る。

熊のレベルがそこまで高くないのか、幸いHPはそれほど減ってはいない。

彼らに対し、熊は追撃を与えるため両腕を振り上げて接近する。

ツクヨは彼らの救援に向かうが、その前に熊の前に立ちはだかるものが現れた。

それは、純白の衣装を纏った少女だった。

右手には2メートル程ある大きな槍を持ち、左腰には片手剣をぶら下げている。

少女は彼らの方に一瞬振り返って微笑みを浮かべると、両手で槍を掲げた。

「*Cest mon drapeau. Occupe-toi de mes*

彼女がそう唱えた瞬間、槍の先端部分に巻きついていた布が大きく展開した。

そう、それは槍ではなく、旗であった。

旗の布からゴルドの光が放出され、彼女を中心に三角形上のバリアが展開される。

「Luminosite éternelle!」

金に輝く暖かな光がジェネシスとティアを包み込み、熊の拳を受け止める。

拳とバリアはしばし拮抗していたが、やがてバリアが熊の拳を弾き

飛ばした。

バリアを展開していた旗は布が自動的に折り畳まれ、再び槍の形状となる。

「Maintenant, praparez-vous!」

槍の先端が黄色い光を帯び、ソードスキルが発動する。

「《Le Jugement de la Lumière!」

その光の槍は熊の腹部を貫き、一気にHPを消し飛ばし消滅させた。

—————

「あ、ちょストップストップ!」

戦いが終わり、歩き去ろうとする白無垢の少女をジエネシスが呼び止めた。

少女は怪訝な表情で振り返る。

「えーつと……あ、I really thank you for help us」

ジエネシスはなんとか捻り出した英語で彼女に礼を述べるが、少女は苦笑して首を横に振った。

すると何かに気づいたティアが一步前に入る。

「Excusez-moi, monsieur, tes vœux Français?」

ティアのフランス語を聞いた瞬間、少女ははっと顔を上げた。

そしてじわりと両目に涙を浮かべた後、わっと泣き出した。

「Oh, quel problème!

J'ai rencontré une personne avec des
!!」

そして少女はティアの両手を掴み、

「Dieu, merci pour cette rencontre

！」

興奮気味に早口調で捲し立てた。

「Attends, attends et installe-toi.」

フランス語でやり取りするティアと少女を見つめ、ジエネシスとツクヨはただ困惑した。

「何言ってるか全然わからないんだが……」

「わっちも同じじゃ」

――――

彼らが戦った《フリージングベア》からツクヨの言う通り武器の素材アイテムがドロップし、目的を果たした一行は管理区まで戻って来た。

「さて、そんじゃ俺たちは戻るぜ」

「ああ。次はいい刀を持ってくるんじゃない」

「A u r e v o i r」

彼らは転移門の青白い光に包まれ、姿を消した。

「……………あ」

ここでツクヨは何かを思い出した。

「あの男……ジョーカーの事を伝え忘れたわ」

く七十六層・アークソファイア

街の中央にある転移門から3名の男女が現れる。

彼らは新しく出会った少女を連れて宿屋まで歩く。

少女はジエネシス達の後を、物珍しそうに辺りを見回しながら歩く。

「ああ、その前に……」

ふと、ティアが進路を変更して別の方向に歩き始める。

向かった先は鍛冶屋。《グリム武具店》

「なんだ、リズベットはまだ二号店やってねーのか」

「そう簡単にお店は開かないよ。多分リズちゃんも色々苦労してるんじゃないかな」

店の外観はコンクリートで出来た質素な見た目。

木のドアを開けると、中には様々な武器が飾ってある。

「いらっしやいませ」

中にいたのは、男性プレイヤー。平均的な身長に平凡な見た目の男性だった。

「えっと、オーダーメイドを頼みたいのですが……」

「畏まりました。では、素材をお預かりします」

ティアはグリムに今回ゲットしたアイテムを手渡す。

ジェネシスはそれを見守っていたが、ふと少女の方を見ると、彼女は壁にかかっている武器を取っ替え引っ替えして見ている。

〜数分後〜

「お客様、お待ちせいたしました」

グリムが店の奥から布に包まれた長細い金属を持ってやって来た。

3人はカウンターテーブルに駆け寄り、グリムがそのテーブルにそれを置く。

グリムは丁寧に布を解いていき、やがてその中から現れたのは、眩い銀色の光を放つ日本刀だった。

「銘は《雪片》。性能としては伝説級のものになります」

ティアは雪片を手にとると、早速莖を柄に差し込んで試し振りをした。

鋭く、それでいて心地よさすら感じさせる風切り音が鳴り、銀の刃の奇跡が空中で弧を描いて現れた。

「Beile……」

少女はその刀の美しさに見惚れて思わずそう呟いた。

「ああ、とてもいい刀だ……」

「お気に召したようで何よりです」

グリムは刀の絶賛にやや嬉しそうに頭を下げた。

—————

ティアの新たな刀を手に入れた一行は、いよいよ普段寝泊まりしている宿屋へと足を運んだ。

ドアを開けると、中には既にいつもの面子が揃っていた。

「よう、ジエネシス。戻ったのか……って」

キリトがジエネシス達に声をかけると、後ろの少女に気づき怪訝な表情をした。

「えっと、この子は……？」

「あーえっとな、ホロウエリアでちよつと手を貸してくれたんだ」

アスナの問いにジエネシスがそう答えた。

「ああ、一つ付け加えるところの子は海外のプレイヤーでな。これまで言葉に通じるものが居なくて苦労していたそうだ」

フランス語で彼女とやりとりをしたティアがそう付け加えた。

「海外プレイヤー?!そんな人まで居たのか……」

「言葉が通じないって……それって凄く大変だよね」

キリト達が少女の方を見遣ると、やはり何を言っているのか理解できないのか頭に「?」マークを浮かべている。

するとそこへ……

「パパ、ここSAOには海外からのプレイヤーの為に、言語翻訳機能がついていますよ」

そう教えたのは、部屋の奥からひよつこりと現れたレイ。

「マジでか」

「はい、マジですー!」

レイは得意げな顔でそう答えると、トコトコトコトコ少女の方へ歩き、「ちよつと失礼しますね」と彼女の右手を拝借しメニュー欄を開く。

ある程度操作を終えると、「これで大丈夫です！」と設定を終えたらしいレイが少女から離れた。

『…あ……えつと……』

戸惑った様子の少女から聞こえて来たのは、日本語。

「おおつ、日本語になってるじゃねえか！」

『ええっ?! つ、通じてる!』

少女は驚愕のあまり目を見開いた。

「凄い……S A Oにはそんな機能まであったのね……」

『あうう……私のこれまでの苦労とは一体……』

少女はそう言つて地にへたり込んだ。

「まあ、これで万事解決つてもんだな。で、てめえさえよけりやだが、これからも仲良くしてくれ。俺はジェネシス。よろしく頼むわ」

ジェネシスはそう言つて右手を差し出す。

『えつと……いい、いいんですか?』

「ああ。君なら間違いない私達のいい仲間になってくれると思う。それに、助けてもらった礼をまだ出来ていないしな。これからその礼もさせてくれ。私はティアだ」

ティアも人の良さそうな笑顔で少女に言った。

少女は一瞬戸惑った表情だったが、

『わ、私でも力になれるなら……喜んで!』

少女は笑顔でジェネシスの手を取り握手を交わす。

『私の名前は《ジャンヌ》。お会い出来て、本当に良かった!!』

三十七話 糖分補給くチョコレートマカロンく

七十六層・アークソフィア

ジェネシス達が過ごす宿部屋の窓から眩い朝日が差し込む。

その光でティアは眠りから目覚める。

上体を起こし、腕を上にあげて身体を伸ばす。

ふと隣を見ると、未だ夢の中にいる恋人のジェネシスがいた。何度見ても飽きない、愛しい彼のあどけない寝顔。

「ふふっ……おはよう、久弥」

ティアは小声でそう呟きながら、彼の頬を愛おしそうに撫で、すやすやと寝息を立てる唇にそっと口づけをした。

そして彼を起こさないように慎重にベッドから降りると、寝巻きの青いキャミソールから普段着の青い胸元の開いたニットにジーパン、そして白いマントを羽織って着替え、部屋を出た。

宿から出て広場に出る。

少しひんやりとした空気が肌を撫で、温かい日光が全身を照らし、心地よい空気にティアは包まれる。

しばしその空気に浸ったのち、アイテム欄を開く。

その中からとある武器をオブジェクト化する。

純白の鞘に銀色の光を放つ鍰。

そしてその柄に手をかけ、ゆっくりと引き抜く。

その刃は日の光を反射して鋭く、そして美しく輝く。刀身はしなやかに湾曲し、刃紋は滑らかな波を打っている。

かつて自身の武器であった銀牙にも勝る名刀、《雪片》。

ティアは雪片の柄に左手を添えると、それを真上に構え、そして勢いよく振り下ろす。

その刀を今度は自身の左側に持ち上げる。刀の切っ先を前に向け、中段に構える。

その体制から左足を踏み出し、刀を右下方向に振り下ろす。

『ヒュン』と言う鋭い風を切る音が静かな街に響く。

素振りをするティアは、以前ジャック・ザ・リッパーから言われた

言葉を思い出ししていた。

『お前の活人剣などでは俺は止められん』

——— そんな事はない

『人斬りになって出直してこい』

——— 私は人斬りなどにはならない！

ティアは頭に響く宿敵の声を掻き消すように刀を振う。

「綺麗……」

ふと響いた声にティアは素振りを止め声が聞こえた方に視線を移す。

緑色の装備に身を包んだポニーテールの少女、リーファが瞳を輝かせてティアを見つめていた。

「……はっ！あ、お、おはようございますティアさん！」

「ああ、おはようリーファ。早いんだな」

ティアは笑顔でリーファに対し言った。

「はい。現実じゃ剣道部の朝練があったので、その習慣で」

「へえ、剣道部だったのか。私もリアルでは剣道をやっていたよ」

「えっ、本当ですか?!」

そこからリーファとティアは剣道の話で盛り上がった。

始めたきっかけ、剣道で大変だったことや思い出に残っている事など、話題は尽きなかった。

「あの、ティアさん……試合しませんか？」

「試合？」

「はい！同じ剣道をやるもの同士、少し力比べをしたいと思いましたが……」

するとティアはすうつと目を細め、

「ああ、構わないぞ。だが……手加減するつもりは無い方がいいのか？」

「ふふっ、甘いですよティアさん。確かにSAOでの時間は私の方が短いですが、これでもリアルじゃ剣道の全国ベスト8ですよ？それに、同じVRMMOのALOは一年近くやっていましたから、私だつて一方的に負けるつもりはありませんよ？」

リーファはティアの問いに対し不敵な笑みで返す。

「いいだろう、上等だ。受けて立とう」

ティアはメニュー欄からデュエル申請画面を開く。

リーファはそれを承諾すると左腰から長刀を抜き、それを正面に両手持ちで構える。

60秒のカウントが徐々に減っていき、二人の緊張感が高まっていく。

そして0になり、デュエルが始まった瞬間、リーファは飛び出した。

真上から振り下ろされる一撃を、ティアは刀を水平に振るうことで受け止めた。

「面えん!!」

「甘い!!」

再び繰り出される斬撃をティアは難なく防ぐ。

刃がぶつかり合う度に火花が飛び散り、金属の音が人気の少ない早朝の街に轟く。

「くっ…(やつぱりティアさんは強いや…:そう簡単には決めさせてはくれないか!)」

「(中々やる…:だがまだソードスキルの使い方が甘い!)」

二人は一度距離を置き、リーファは剣を自身の右側で垂直に持ち、ティアは刀をゆっくりと鞘に収め、抜刀術の体勢を取る。

数秒間睨み合ったのち、先にリーファが動いた。

片手剣ソードスキル《ソニックリープ》を発動し、ソードスキルのシステムアシストによる勢いに乗って一気にティアとの距離を縮めていく。

対するティアは刀居合ソードスキル《辻風》でそれを迎え撃つ。リーファの速度を注視し、抜刀のタイミングを見極める。

そしてリーファの剣が自身に向けて動いた瞬間、ティアは右手を刀の柄にかけた。右足を大きく踏み出し、その勢いに乗せ上体を時計回りに回し、刀を素早く抜刀する。

リーファのエメラルドグリーンに光る剣と、ティアの銀色の光を放つ刀が大量の火花と凄まじい音を立てた衝突した。

しばし二人の剣は拮抗したのち、それぞれの剣の軌道がそれぞれの

目標を逸れて振り抜かれる。

「わわっ！」

しかしその時、リーファがソードスキルによる勢いを殺す事が出来ず、そのままティアに対して倒れ込む。

「えっ……っ？」

ティアは予想外の事態に反応が遅れ、そのままリーファに覆い被せられる形で倒れ込む。

二人が重なって倒れた瞬間、リーファの顔が『ポニユツ』という柔らかい感触に包まれる。

リーファはこれが何なのか分からず、そのまま顔を上げる。

目の前には青と肌色のふくよかな二つの双丘があった。

少し視線を上上げると、目を丸くして自身を見つめるティア。

その瞬間リーファは全てを察した。自分の頭を守ってくれたクツシヨンはティアの……

「わ……わーっ!!ごめんなさいティアさん！」

リーファは慌ててその場から飛び退いた。

「い、いや……気にしないでくれ」

ティアは平然とした様子で起き上がる。

リーファは両手で自身の頬をさすり、先程まで自分の顔を包み込んだあの柔らかい感触を思い出す。

「あの、ティアさん……その、えっと……お、大きいですね？」

リーファは少し冷静さを欠いており、何を言えば良いか分からずとりあえずそう口にした。

「え……」

そう言われ、ティアは戸惑いの表情を浮かべる。

確かに自分の胸は他の女性に比べるとやや大きい方かもしれない。

しかし目の前のリーファはどうか。自分より年下なのにも関わらず、自分のものよりも一回り大きい。

「そういうリーファも、中々だと思うが……」

「ええっ?! て、ティアさんそれは……あ、あうう……／／／」

ティアにそう指摘され、一気に赤面するリーファ。

気まずい空気が流れ、しばし二人は沈黙する。

「……も、戻ろうか」

「そ、そうですね！そろそろ朝ご飯の時間ですし！戻りましょう！」

二人は立ち上がると、並んで歩き出した。

—————

「あ、い、ウ、え……お……」

「うんうん、上手に発音出来てるわジャンヌ！」

「ア…… merci。」

「ジャンヌ、今はフランス語は禁止だぞ？」

「あ……アリガトウゴザイマス」

朝食を終え、皆各々時間を潰す中、アスナとティアとジャンヌは同じテーブル席で何やら話し合っていた。

「あいつら何やってんだ？」

「日本語の勉強、だつてさ」

それをカウンター席でコーヒーを飲みながら見ていたジェネシスの問いに対し、隣に座るキリトが答える。

「日本語の勉強って……翻訳機能があんのに何でわざわざ？」

「ジャンヌが翻訳機能無しでも話せるようになりたいって言つてさ。」

それでアスナとティアが付き合ってるんだよ」

そう言つてキリトは一枚の紙を見せる。

「ジャンヌが最初に書いた日本語だ」

そこに書かれていたのは……

『みなちゃんこんにさわ わたしわぢゃんめです』

「ブツ……」

それを見てジェネシスは思わず飲みかけのコーヒーを吹き出してしまった。

「ご覧の通りだ。『ぎ』と『ち』・『ぬ』と『め』の区別がついてないみたいだな。」

今も苦戦してるよ」

キリトが苦笑しながらジャンヌの方を指差すと、彼女は「あうう…」と頭を抱えていた。

「……ちよつくら出てくるわ」

ジェネシスはコーヒーを飲み切り、カップをテーブルに置くと立ち上がった。

「ん、どこに行くんだ？」

「ま、ちよつとした気まぐれだ。勉強には息抜きが必要だろ？」

—————

ジェネシスが買い物や料理の素材集めの為にフィールドでクエストやモンスター狩りを行い、戻ってきた頃には既に昼を回っていた。

扉を開けて宿の食堂に入ると、いつものメンバーが既に揃っていた。皆はそれぞれのグループで雑談を交わす中、ジャンヌの方を見ると、彼女は未だに机に向かって読み書きの練習をしており、それをティアとアスナの二人が見守っていた。

ジェネシスはそれらを見ながら宿のリビングを通っていき、そのままバーのカウンターの中へ入っていく。

「エギル、ちよつくらキッチン借りるぜ」

「ん？ジェネシスか？まあ構わねえが……」

バーカウンターで食器を拭いていたエギルにそう言い、中に入っていく。

「さて……いつちよやるか」

ジェネシスは台所に今日集めた素材を並べる。

・アーモンドプードル

・粉糖

・ココアパウダー

・卵

・グラニュー糖

・ビターチョコ

・生クリーム

「フランスの定番の菓子と言ったら……やっぱりマカロンだな」

—————

始めにガナツシユ作りから。

まず生クリームを鍋に入れて沸騰直前まで温め、温め終わったら火からおろす。その中にビターチョコを割って入れ、ヘラで良くかき混ぜる。

混ぜ終わったらボウルに入れて蓋をし、冷蔵庫で冷やす。

続いて生地。

網皿などに粉類を投入し、振るいながらボウルに入れる。

続いて別のボウルに卵の白身を投入し、白っぽくなるまで混ぜ合わせる。グラニュー糖を四回に分けて加え、その都度泡立つまで混ぜ合わせる。ツノが立つまで混ぜ合わせたらメレンゲの完成。

そこへ先程振った粉類を投入し、メレンゲの泡を潰さないよう切るように混ぜる。馴染んできたらボウルの側面に押し付けるように混ぜる。ヘラをすくって全体が繋がりがゆっくり落ちるようになったら完了。

天板にシートを引いて、先程混ぜ合わせた生地を直径3センチくらいの大きさに分けて並べ、一旦乾かす。この時しっかり乾かさないとオーブンに入れた時に生地が割れてしまうので注意。

十分に乾いたらオーブンに入れて焼く。本来は13分ほどかかるのだが、ここはSAOなので数秒で出来上がり。

焼けたら生地的一片方に、先程冷やしたガナツシユを塗り、挟み込んで、チョコレートマカロンの完成。

一応全員が食べられる分量で作ったので個数は約60個。かかった時間はここまでで僅か5分。SAOの料理は色々と簡略化されているので味気なく感じるが、工程が楽なので助かる面もある。

60個のマカロンを皿に盛り付け、それをジャンヌ達が座るテーブルに運んでいく。

「よう、捗ってるか？」

「ああ、ジエネシス……つて、それは？」

ティアがジエネシスに気づくと、彼が持つ皿いっぱい盛られたマカロンを見て目を丸くする。

『ま、マカロンじゃないですか!!』

「こ、これ……貴方が作ったの?!」

「ああ、そうだ」

ジャンヌが嬉しそうに飛び上がり、アスナが驚いた表情でジエネシスを見る。

「勉強してつと糖分が欲しくなるだろ？まあこの世界じゃ栄養なんて無いが……まあとりあえず息抜きがてら食っとけ」

「ジエネシスお前……料理なんて出来たのか?!」

「まあ甘いもの欲しさに自分で色々やってたからな。コンプはまだだが、ある程度なら出来るぜ」

「ま、マジか……」

キリトの問いかけに対しジエネシスはあつけらかなと答えた。

すると騒ぎを聞きつけた仲間達が次々と集まり始めた。

「えっ、これジエネシスさんが?!」

「すごい……美味しそう……!」

「あんた……中々やるじゃ無い」

「人は見かけによらないのね」

シリカ、サチ、リズベット、シノンが口々に言った。

「パパ、さすがです!」

「これ、僕らも食べていいですか？」

「構わねーよ。全員分作ってあるから」

「やったあぁー！」

その瞬間、全員が山積みにもされたマカロンに手を伸ばした。

『ではジェネシスさん、いただきます』

ジャンヌは一口サイズのマカロンを口の中に放り込んだ。

噛んだ瞬間、『サクツ』という食感とビターチョコの甘すぎない味が口内に広がる。

「お、美味しい……！」

「ああ、これは美味いな！」

アスナとキリトがマカロンの味を絶賛する。

するとティアがジェネシスの方を向き、

「ジェネシス、どうせならアレも淹れてくれないか？」

と追加注文する。

ジェネシスはアレが何なのかを察し、「しょうがねえなあ」と苦笑しながらカウンターへと向かった。

—————

ミキサーのコンテナに牛乳、コーヒーの粉、キャラメルソース、そして氷を入れ、ミキサーを起動して混ぜ合わせる。

出来上がったものをカップに注ぎ、生クリームを乗せたら完成。

これもフランス由来の飲み物、《フラツペ》だ。

人数分のカップに注いだ後、バットに乗せて運ぶ。

「出来たぞ。俺特性《キャラメルエスプレッソフラツペ》だ」

『こ、これがニホンのフラツペ……！』

「すげえ……マカロンによく合うー！」

皆運ばれたフラツペのストローに口をつけて、感想を述べる。

コーヒーの苦味とキャラメルソースの甘味が見事にマッチし、口当

たりの良い味わいとなっている。

『マカロンとフラツペ……現実世界を思い出します』

「んま、それを意識して作ったしな」

『そうだったんですね！本当にありがとうございます、ジエネシス!!』
「……気に入ってもらえたようで、何よりだ」

ジエネシスはそう言って、自身の作ったマカロンを口に放り込ん
だ。

それ以降、ジエネシスに対しエギルやアスナがスイーツやコーヒー
飲料のレシピを頻繁に聞くようになったのは別の話。

三十八話 罪の所在・S級食材晩餐会

「じゃあ、今日もありがとうな。フィリア」

その日、キリトとフィリアはホロウエリアでの探索を終え、管理区に戻ったところだった。

「うん、こちらこそ付き合ってくれてありがとね」

フィリアは笑みを浮かべながらそう答えた。

ここ最近、フィリアはよくキリトとホロウエリアを冒険していた。時にモンスター狩りを行ったり、時にフィリアの得意なトレジャーハントを行ったり。

当初フィリアは、ツクヨ以外の人間には冷ややかな対応をしていた。彼女が置かれたホロウエリアでの過酷な環境が、彼女の心を次第に閉ざさせてしまったのだ。アインクラッドのような安心して眠られる宿や街も無ければ、安全圏でゆっくり休めるわけでも無い。そんな状況が二ヶ月も続き、次第に彼女の精神は疲弊し、摩耗してしまっていたのだ。

だがツクヨと出会い、そしてキリトとジェネシスに出会った後、彼女は少しずつではあるが何かが変わっていくのを感じた。

否、戻っていくと言う方が正しいだろう。閉ざされていた心の扉が次第に解放されていく感覚。事実、フィリアはここ最近よく笑うようになった。上部だけの笑顔ではなく、心からの笑顔を。

だからこそ迷っていた。自分が抱える秘密、ホロウエリアから出られない真相、そして自分が何をしてしまったのかを……。

「そう言えばフィリア」

ここでキリトが何かを思い出したようにフィリアに言う。

そしてこう尋ねた。

「オレンジの解消法についてなんだけど……」

そこまで言って、キリトは申し訳なさそうに目を伏せた。

やはりか、とフィリアは内心苦笑した。

以前、キリトが現在もオレンジであるフィリアとツクヨのオレンジ解消法を調べる、と言っていたのだ。

「やっぱりそっか……」

「済まない、力になれなくて……」

肩を落とすフィリアに対し、キリトは頭を下げた。

「ううん、大丈夫だよ。むしろありがとう、私のために色々してくれて」

「力になるって約束したからな」

「ふふっ、そうだったね。本当にお人好しなんだから」

フィリアはそう言うと、そこで一呼吸おく。

「あのねキリト……私、本当はこのエリアから出ないんじゃないかと、出られないの」

「……え？」

キリトはフィリアの言葉に目を丸くした。

「出られない、って……どう言う事だ？」

「そのまんまの意味だよ、私はこのエリアから出られない……」

そこからフィリアは自身が何かしらのエラーによってホロウエリアに閉じ込められている状態であることを話した。

「そんな事が……つまりフィリアとツクヨはこのエリアに閉じ込められてるって言うことなのか……」

キリトは愕然とした表情で言った。

「うん……ごめんね、ずっと黙ってた」

「いや、いいんだ。とりあえずはフィリアとツクヨのエラーを解除しないといけないな。こちらで調べてみるよ」

「ありがとう、キリト……」

キリトは笑顔で頷き、ホロウエリアから去っていった。

やっぱり彼はいい人だ。初対面の私たちにそこまでしてくれる。

認めよう、私はキリトのことを――

「よお、愛しの王子様は帰っちゃまったのか？」

だがそんな私に、悪魔は近づいてきた。

――

「『ジョーカー』?」

その日、ツクヨと共にホロウエリアを散策していたジエネシスが彼女から告げられた名前に首を傾げる。

「ああ。この間わつちらに接触してきたオレンジの男じゃ。聞いたことはないか?」

「ああ。全くねえな」

ジエネシスはツクヨの問いに首を横に振った。

「そうか……ならばいい」

「いやよくねえよ。なんだよそのジョーカーってのは何してきたんだ?」

「まあ、大した話などではおらぬ。じゃが……奴はあまりに危険な男じゃ」

「そうか。ならこつちでも調べておくぜ。気いつけろよ」

「ああ」

そうやりとりした後、ジエネシスは管理区からインクラッドに帰還した。

七十六層の宿に戻ったキリトとジエネシス。

「ジョーカー……名前からして普通のプレイヤーじゃなさそうだな」

「同感だな。そいつはオレンジプレイヤーだとも聞いた。ひよつとすると……」

「ラフコフの生き残り、の可能性があるな……」

ラフコフ……かつてアインクラッドに存在した最悪の犯罪者ギルド《ラフィン・コフィン》。攻略組によって既に壊滅させられた組織であるが、その構成員は未だアインクラッドに多数存在すると言われて

いる。

「とりあえず、この間の《ジャック・ザ・リッパ》の事も含めて、アルゴに調査してもらおうよ」

「あー、あのネズミか……それが確実だわな」

そう交し、彼らは宿に戻った。

「あ、キリト！」

「お疲れ様です、ジェネシスさん」

出迎えたのは二人の紫の少女、ストレアとサクラだ。

「よお、なんだ来てたのか」

「ええ。今日は皆さんにお土産を持ってきたんです」

そう言つてサクラはメニュー欄を操作すると、机の上に特大の肉の塊が現れた。

「こいつは……」

「えつと……《ヒドウンバイソンの肉》、だつて?!」

キリトがアイテムの名前を見て目を見開いた。それもそのはず、この肉はS A Oに存在する数ある食材の中でも最高級とされるS級レア食材なのだ。

「しかもこの量……丸々一頭分はあるんじゃないか?」

「ええ、珍しくフィールドに沢山ポップしていたので、目につく分全て狩つてたらこんな量が取れちゃいました」

てへつ、と得意げに話すサクラ。

「で、こいつは誰が調理すんだ?」

「もちろんアタシ達だよ。料理スキルは持つてないけど」

ジェネシスの問いにストレアがそう答え、二人はうげつとした顔になる。料理スキルを持っていない者が料理なんてすればどんなゲテモノ料理になるか分からない。

「なら、私たちが作ろうか?」

いつの間にか話を聞いていたティアがそう言い、続けてアスナも頷きながら

「もちろん二つ返事で受けるわよ。何せS級レア食材なんて滅多に調理できないからね!」

「んじや絶品料理を頼むぜ」

「ああ、任された」

そう言つてティアとアスナは厨房へと足を運ぶ。

「あ、ティアさん！食材に余裕があれば、あたしもお料理を作りたいんですけど……」

「わ、私も！せっかくだから……」

するとシリカとサチがそう頼み込む。

「なら、あたしも料理してみようかな」

「あたしもやりたいです！」

続けてリズベットとリーファが加わり、

「じゃあ、私もやってみようかな？」

ハヅキもそう言つて厨房へ歩き出す。

「えっ、ハヅキも作るの？」

「あ、うん……お兄ちゃんに、私の料理食べてもらいたいし……／＼

「そ、そっか……じゃあ楽しみにしてる」

兄であるサツキの了承も得て、ハヅキは厨房に向かった。

『じゃあ、私もやります！この機会ですから、皆さんにフランス料理をご馳走しますね！』

ジャンヌも張り切った様子で厨房に駆け出した。

「えー?!みんなが作るならアタシも作るよ！」

「ね、姉さ……ストレアさん待って！……ああ、厨房が溢れかえっちゃう」

サクラが引き留めようとするも間に合わず、ストレアも向かってしまった。

「大丈夫だぜサクラちゃん。厨房はそれなりに広い。あれくらいの人数なら全然問題ないぜ」

「そ、そうなんですか?……じゃあ、私もせっかくだから行きますね」

サクラもそう言つてピンク色のエプロンを身につけて厨房に入

た。

次から次へと厨房へと入っていく少女達を、シノンが離れた場所から見つめる。

「ん？おめえはどうすんだシノン？」

「どうするって？」

「いや、おめえは料理作んねえのかなと思ってよ」

するとシノンは怪訝な表情を浮かべ、

「……食べたいの？私の料理」

「質問を返すようだが……食べたいって言ったらどうする？」

シノンの問いに対しジェネシスは口端を上げて尋ね返す。

「ふふっ……冗談よ。私もやるわ。滅多に手に入らない食材なんですよ？勝手は分からないけど……やるだけやってみる」

――――

く数分後く

少女達の賑やかな声が厨房から響くと共に、食欲をそそる香りが漂い始める。

「なんだ、今日は随分といい香りがするじゃねえか」

やって来たのはミツザネ。

「お疲れっす、親父さん」

「親父なんて呼ばれる筋合いはねえ……んで、厨房の方がえらく盛況のようだが」

ミツザネはジェネシスの隣に座ってそう尋ねる。

「実はS級レア食材が手に入って、それをみんなで料理してるんです」

「ほう？そいつは楽しみだな」

その後、料理が出来上がった少女達が次々に運んでくる。

リズベット 青椒肉絲

リーファ 牛丼

シリカ 肉じゃが

シノン ローストビーフ

ストレア よくわからないもの

ユイ 一口サイズのハンバーグ

彼女達の料理をそれぞれ味見程度に口にし、それらの美味さに舌鼓を打つ中、続いてやって来たのはハツキだった。

「あ、あの…私も出来ました！肉豆腐です！」

彼女は両手で大鉢を抱え、それをテーブルに置く。

「おおお！すごく美味しそうに出来てるじゃないかハツキ！」

「そ、そうかな？……えへへ」

兄であるサツキに絶賛され、嬉しさを隠さず頬が綻んでしまうハツキ。

「うん、味も美味えな」

「ああ、すき焼き風とは考えたなハツキ」

箸で少しだけ摘んで口にしたジエネシスとキリトもその味を褒め称えた。

「はい！皆さんお待ちせしました」

続けてやって来たのはレイ。

「おつ、レイか。お前は何を作ってくれたんだ？」

ジエネシスが楽しげにそう尋ねる。

「ユイがハンバーグでしたので、わたしはクロツケを作りました！」

レイの持つ皿には、ユイと同じく一口サイズの可愛らしいクロツケが積まれていた。

「おお！こりや美味そうな出来てんな」

「ありがとうございます！早速食べてみてください！」

ジエネシスは早速クロツケを一つとって一思いに口に放り込む。サクツとした食感と、中に詰められた牛肉の旨味が一気に口内に広がった。

「こりや最高だ！上手く出来たなレイ」

「わーい！ありがとうございますパパ！」

父親に褒め称えられ、嬉しそうに飛び上がるレイ。

「くう……よもやこの年で孫の料理が食べられるとは……！」

レイのコロッケを食べ、肩を震わせながら嬉し泣きをするミツザネ。

「ふうー、皆さん私も出来上がりましたよ〜」

続いてサクラ。彼女の持つ大きな皿には、一枚の大きな肉が。

「やっぱり牛肉と言ったらコレですよね！私はステーキを作りました！」

「シンプルかつ王道だな」

「ただ、皆さんお一人ずつ用意することは流石に出来なかったの、ここは皆さんで切り分けて召し上がってください」

そう言っつてサクラは大きなステーキの乗った皿にナイフとフォークを一本ずつ置いた。

「わ、私も出来たよ〜！」

今度はサチがやって来た。

「私はこれ。《牛肉とキノコの和風パスタ》！」

早速フォークで少しだけ巻き取り、口に運んでみる。

「おっ、中々美味しいな」

「ああ。あつさりしたい味だ！」

「よ、良かった〜。料理はあまりやったことがなかったから不安で……」

ジェネシス達からそう言われ、安堵の表情を浮かべるサチ。

『みなさーん、私も出来上がりました〜』

続いてやって来たのはジャンヌ。

『私が作ったのはコレ。じゃーん！フランスの定番、《牛肉の赤ワイン煮込み》でーす！』

ジャンヌの持ってきた皿には、これまでのボリユーム溢れる料理に比べると量は控えめだが、その分ブロッコリーやニンジンなどのトッピングが乗せられており、見た目もかなりお洒落に仕上がっていた。

「これは……SNSにアップしたら映えそうだな」

「多分一瞬でバズりますよ」

キリトとサツキがジャンヌのお洒落な料理の見た目に思わずそう溢した。

「赤ワイン煮込みって、一日くらい漬け込まねえとダメなんじゃないかかったか？」

『そこはまあ……SAOですから』

ジェネシスの問いにジャンヌは唇に人差し指をたててそう答えた。

その数分後、アスナがやって来た。

「お待たせ、出来上がったわよ！」

「おっ、アスナが来たか！何を作ってくれたんだ？」

「コトレッタ……ミラノ風カツレツよ！付け合わせのサラダとかトマトソースを作ってたら遅くなっちゃった」

アスナの持つ皿には、黄金に輝くカツレツに緑のサラダ、赤いトマトソースが鮮やかな光沢を放ち、見るもの全てに食欲を誘う。

「みんな、お待たせ」

最後にやって来たのはティア。

「最後はティアか。何作ったんだ？」

ティアはジェネシスに対しふっと軽く笑い、両手で持っていた鍋をテーブルの中央に置く。

蓋を開けると、香ばしい肉の匂いが充満する。

「ビーフシチューだ。召し上がれ」

「おおお……こりやうまそうだ……！」

ジェネシスがティアの料理を見て感嘆の声を上げ、ティアが一人ずつ器にシチューを入れていく。

「よし、みんなの料理が出揃ったみたいだな」

「んじゃ、食うか!!」

「……「いただきます!!」……」

そして皆は一斉に料理を取り始めた。

「ビーフシチューか……この味、母さんの料理を思い出すな」

ティアのビーフシチューを早速口にしたミツザネが口元を綻ばせながらそう呟いた。

「そうそう。味もなるべく近づけてみた」

「そうか、どうりで……この世界に来てからまだそれほど経ってはいないが、懐かしい味だ」

ミツザネは納得したように頷くと、もう一度ビーフシチューを流し込んだ。

「そう言えばお母さんは元気？」

「ん？ああ、お前がSAOに巻き込まれた時は流石に気落ちしてたが……毎日のようにお前の病室に通ってたな。」

「今も、お前が帰ってくるのを信じて待ってるよ」

「そっか。母さんらしいね。それで……姉さんは？」

「ふむ、千冬か。あいつも時折お前の病室に行ってるが……雫、この世界が終わったら、千冬のゲンコツの一発くらいは覚悟しといたほうがいいぞ」

「うわあ……」

ティアはそれを聞きげんなりとした表情になる。

「ティアの家族か……返ったら会いに行かねえとな」

「そうだね、私も会ってほしいな」

「んま、千冬に殺されねえように気をつけるこつたな」

ジェネシスの眩きに対してミツザネが忠告を与えた。

「お前の姉ちゃんってどんなやつなの？」

「超ストイックで、恋愛とかにはちよつと否定的な人なんだよね」

「あ、俺死んだわ」

「大丈夫。私が守ってあげるから」

—————

夕食が終わり、皆各々食堂に残って談笑をしたり食器の片付けを行ったりしていた。

その中で、ストレアは一人宿から夜の広場へと歩き出す。

「姉さんー！」

そんな彼女を、サクラが引き留めた。

ストレアは立ち止まると、そのまま振り向かず

「……ねえ、サクラ。アタシ達は本当にここに居ていい存在なのかな？アタシ達はプレイヤーを……みんなを助けなきゃいけない存在だった。みんなの心を癒さなければいけないかった。

なのにアタシ達は……何も出来ず、ただ彼らを見ているだけしかしてこなかった。

そんなアタシ達が彼らと一緒にいる権利ってあるのかな？」

「姉さん……」

ストレアが寂しげな表情で言い、サクラも悲痛な表情を浮かべた。「やっぱりそうだったんですね」

その時後ろからそう言って近く人物がいた。

白いワンピースと銀髪をたなびかせる少女、レイ。

「ストレア、サクラ……その名前をずっと忘れた事はありません。

また……会えましたね」

—————

く同時刻・ホロウエリアく

「ねえ、ツクヨさん……」

その頃、ホロウエリアのダンジョン探索に出ていたフィリアとツクヨ。

「む？どうしたフィリア。今日はやけに暗いではないか」

フィリアの様子を見て彼女の顔を覗き込むツクヨ。

「ずっと考えてたの。私がこの世界から出られないのって……ひよつとすると罰なのかなって。

私が背負うべきだった罪を、ツクヨさんにまで背負わせてしまったことへの」

彼女の言葉を聞き、ツクヨは呆れた顔でため息を吐き、

「またその話かフィリア。それは気にするなと何度も言っておろう」

「でも！あの時ちゃんと私がやっていたら……私だけでやっていたらば

貴女までここに閉じ込められることはなかった！

私の罪は一生消えない……一生、この影の世界で生きなきやいけな
いんだ……」

フィリアは両目に涙を溜めてそう捲し立てた。

「落ちて着けフィリア。大丈夫、主の罪は必ず消える。何より奴らが
………ジエネシスとキリトがきつとこの世界から出る方法を見つ
けてくれる。

何より明けない夜はこの世にはありません。何があってもわつち
は主の味方じゃ」

「ツクヨさん……ありがとう……」

……でも、少し我慢してて」

「なに……っ?!」

その時、ツクヨの背中が『ドン』と押され、そのままツクヨは前に
倒れ込む。その先の床が開き、深淵の空間へツクヨは吸い込まれるよ
うに入り込んでしまった。

「じゃあな、『死神太夫』」

落下する直前、ツクヨの耳には不気味な男の声が響いた。

「ごめん……ごめんなさい……ツクヨさん……」

三十九話 正体

その日ジエネシスとキリトの二人は、フィリアとダンジョン攻略に乗り出していた。

しかし道中フィリアの様子がおかしい事が二人はずっと気になっていた。

「なあ、フィリア。調子が悪いなら少し休もうか」

「うん……ごめんね、迷惑かけちゃって」

フィリアは申し訳無きそうに洞窟の壁にもたれ掛かる。

「おいおい大丈夫か？不調なら今日は戻るか？」

「ううん……大丈夫……」

フィリアは力なく首を横に振る。彼女の瞳は視点が定まらず虚だった。

そんな彼女を心配するように見守る二人だったが……

「……ん？」

その時、『サクツ』と何かが突き刺さる音がし、ジエネシスが下を見ると彼の右足に投げナイフが刺さっていた。

「な……に……?!」

その時、ジエネシスの身体から力が抜け、そのまま地面に倒れ込む。彼のHPバーは黄色い電気マークのアイコンが点滅している。《麻痺毒》だ。

「なっ……ジエネシス!!」

キリトは慌てて彼の元に駆け寄るが、直後彼の背中に同じものが突き刺さり、麻痺状態に陥った彼もまた地面に倒れ込んだ。

「トウーウ・ダア〜ウン」

やがて一つの足音が男の声と共にやって来る。

そして彼らの元に現れたのは、紫のスーツにピエロ風のメイクを施した不気味な男性プレイヤーだった。

「て……テメエは……?!」

「よお、初めましてだな《暗黒の剣士》さんよお？」

男はニタニタと笑みを浮かべながらジエネシスの顔を覗き込む。

「お前が……ジョーカーってやつか……!」

キリトがピエロの男を睨みつけながらその名を口にする。

「Wow!まさかアンタ達にも知られてるたあ驚きだ。」

……ま、なら尚更アンタらは邪魔だし、ここで消えてくれや」

そう言つてジョーカーは二人の襟首を掴んで持ち上げ、歩き出す。

「待て!ファイリア、君は一体……!」

キリトがファイリアの方を振り向き、彼女に問いただすが、ファイリアは俯いているだけで何も発さない。

「残念だったなあ。お前の大事なファイリアちゃんは、もうお前の知ってるファイリアちゃんじゃねえよ」

ジョーカーはキリトの耳元でそう告げ、その先に空いた穴に二人を放り込んだ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

ファイリアは両目から涙を流し、一人誰にも届かない謝罪を呟いていた。

—————

落下した先は、暗闇のダンジョンだった。

麻痺がかかっているため起き上がることが出来ず、辛うじて動く頭を動かして周りを見渡す。

「くそ……なんだここは……」

その時彼らの周りにモンスターが集まり始めた。

麻痺毒によって動けない彼らに、モンスター達は勢いよく武器を振り上げる。

しかしその時、モンスター達がどこからか攻撃を受け、一斉に消滅した。

「全く……よもや主らまでこんな所に来るとは思わなんだぞ」

呆れた顔でやって来たのはツクヨ。

「なんだよ……てめえまで落とされてたのか」

「まあな。主らも災難じゃったの」

ツクヨはそう言っただけで解毒結晶を用いて二人の麻痺毒を解除した。

「ありがとう、ツクヨ。助かった。それで、ここは何なんだ？」

「一種のトラップじゃ。主らが来る前にある程度探索は済ませてあるが……モンスターレベルは揃いも揃って中々の難敵だらけでな」

そしてツクヨが言うには、どうやら転移結晶やメッセージを誰かに送る事も出来ないようになっていいるらしく、出るには自力で踏破するしかないようだ。

「と言うわけじゃ、積もる話もあるだろうが今は全て後に回せ。一刻も早くここから出るぞ」

「そうだな。とつととここから出ようぜ」

そして3人はツクヨを先頭にダンジョンを進み始めた。

中はどこまでも暗く見通しは悪かったが、幸いジエネシスとキリトの索敵スキルの高さで、ツクヨの持つ暗視スキルのお陰で難なく進むことが出来た。

途中何度もモンスターとエンカウントしたが、脱出を優先して兎に角戦闘は避けた。

そうして進むこと数十分。3人は何とかダンジョンから脱出する事が出来た。

「ふう…何とか出られたか」

「はは、外の空気がうまいや」

漸く外に出られた3人は各々安堵の表情を浮かべた。

外はもう夜になっており、空には無数の星が輝き幻想的な風景を生み出していた。

「フィリア……」

ツクヨはどこか不安げな表情でフィリアの名を呟いた。

「そうだ、フィリア！彼女はジョーカーと一緒にいたな…」

「もしかするともう管理区に戻ってるかもしれないねえ。一旦戻ろうぜ」

ジエネシスがそう提案し、一行は夜の森林を歩き始めた。

「……それで、ツクヨ。教えてくれ。君とフィリアに、一体何があつた

んだ?」

「そうじゃな、この事をもっと早く主らに伝えていれば良かったのかも知れぬ……」

そして、ツクヨは歩きながら語り始めた。

—————

わっちはフィリアと出会ってから、共にこのホロウエリアを彷徨っていた。何とかしてここからアインクラッドに出る方法を探していたのじゃが、それが中々見つからなくてな。

それ以前に、ここにはわっちらプレイヤーが安心して休める圏内も無かった。

だがそんな時じゃった。わっちらの目の前にある人物が現れたのじゃ。それはわっちもよく知るものだった……

「……え?」

オレンジの跳ねた髪に、青いポンチョを身につけた少女。

それは紛れもなくフィリアだった。

じゃがフィリアはその時間違いなくわっちの隣にいた。

そう、あの時わっちの前にはフィリアが2人いたのじゃ。

「あ……ああああああっ!!」

その時、フィリアは錯乱して目の前のフィリアに斬りかかったのじゃ。

わっちの制止も間に合わず、2人のフィリアは交戦を始めた。1人は恐怖に染まった表情で、もう1人は虚な表情で戦っていた。

じゃが人と言うのは冷静さを欠くと思わぬ隙を生む。

わっちの隣にいたフィリアが地面に倒れ込み、その隙を突いてもう一人のフィリアが短剣を突き立てようとしていた。

その時わっちの身は自然と動いていた。

気がついたら、わたちの苦無がもう1人のフィリアの後頭部に突き刺さっていた。

そして彼女が消滅した時、わたちのカーソルはオレンジになっていた。

――

「同じプレイヤーが2人いるなんて……そんな事があるのか？」

「信じられんだろう？ じゃがあれは間違いなくフィリアじゃった。

一連の説明を聞き終えたキリトは信じられない思いでいっぱいだった。

「こりやまた、随分と面倒な事が起きたもんだな……」

ジェネシスは参ったとばかりに呟いた。

「こりや、あいつらの出番かもな……」

そうして歩いているうちに、やがて一行は転移門前に辿り着いた。

青白い光と共に、3人はホロウエリアの管理区まで戻った。

「フィリア……はいないか」

辺りを見渡しフィリアを探すが、彼女は戻っていないようだった。

どうやらメッセージも繋がらないようだ。

「仕方ない……一度アインクラッドに戻るか」

「そうした方がいい。一度そちらで体勢を立て直して来なんし」

「ああ、そうするよ。ツクヨも、くれぐれも気をつけてな」

「わたちはそう簡単にやられはせぬ。心配するな」

ツクヨはそう言って不敵に笑って見せた。

そしてジェネシスとキリトはアインクラッドに帰還した。

――

七十六層アークソフィアは、既に夜になっていた。

「はあ……なんかどつと疲れたわ」

「ああ。無事に帰れてよかったよ」

アークソフィアの転移門でジェネシスとキリトは安堵のため息を吐いた。

無事に転移を終えた2人の元へ駆け寄る人物がいた。

「キリトくん！」

血相を変えてキリトの元へ駆け寄ったのはアスナ。

「遅かったじゃないか。心配したぞ」

呆れたような、それでいてやや怒った様相のティアが腕を組みながらジェネシスの元へ歩く。

「た、ただいま……」

「悪い、色々あつて遅くなった」

申し訳なきように謝る2人。そんな彼らの表情を見てアスナとティアは何かを察した。

「…ねえ、詳しい話聞いてもいい？」

「ああ、とりあえず宿に戻ろう。アスナにも聞いてほしい話もあるし」

キリトがそう提案し、4人は並んで歩き出した。

その時ティアの右手がジェネシスの左手をギュツと握りしめた。

「また、心配かけたね」

ティアはジト目でジェネシスを見ながら言った。

「わ、悪かった……まあ、色々あつたんだよ」

「うん、わかつてる……だから今はこれで我慢してあげる」

そう言つてティアはジェネシスの左腕を自身に抱き寄せた。

――

宿に戻った4人は早速質問攻めにあい、ジエネシスとキリトは何が起きたのか詳しく説明した。

「……ってわけで、ちよつとダンジョンに閉じ込められてたんだわ」

「転移結晶もメッセージも使えなくてな。正直かなり手こずった」

そう言っつて、2人は報告を締めくくった。

「本当に、無事に帰って来てくれてよかったよ……」

「全く。いつもいつもトラブルに巻き込まれるなお前たちは……いや、この場合は自分から突っ込んでいった、か？」

アスナとティアの呆れたような口調に対し2人は苦笑いになった。

「でも：フィリアさんはどうしてお二人をそんなダンジョンに落としたりたんでしようか？」

「どうしても何も、キリトとジエネシスを殺すため以外に無いでしょう!!これつてもう立派なPKよね?!」

未だフィリアの行為が信じられないと言う様子のシリカに対し、リズベットが怒気を孕んだ口調で反論する。

「私、ジエネシスたちはしばらくホロウエリアには行かない方がいいんじゃないかと思う……」

「私もそれに賛成。別にあそこに行かないと攻略が進まないと言うこともないんですよ?」

サチとシノンが口を揃えてホロウエリアに近づかないことを進言した。他のメンバーも同じ思いなのか、サツキやハツキ、リーファも首を縦に振って肯定の意を示す。

『私もこの意見には同意せざるを得ません。あそこはアインクラッドと違って安全圏内が存在せず、モンスターの難易度もバラバラで極めて危険な場所と言えます。そこに加えてこのような事件があれば……』

更にホロウエリアに閉じ込められた経験のあるジャンヌも同調した。

だがアスナとティアは違った。

「まあみんな待って。」

ねえ、キリトくん達はどうしたいの?」

アスナが皆を制し、2人の意見を求めた。

「確かに、テメエらの意見も最もだ。正直俺もあんなのは二度とごめんだが……それ以上に、真相を確かめなきゃ気が済まねえ」

「俺も同じだ。俺にはフィリアがプレイヤーを殺すような犯罪者にはとても思えないんだ。」

もしフィリアがトラブルに巻き込まれてるなら、俺は何としても助け出したい」

ジエネシスとキリトはきつぱりとした口調でそう答えた。

「……全く、お前達ならそう言うと思った」

ティアは彼らの言葉を聞くと、「フツ」と呆れたように笑ってそう言った。

「そうね。なら、私たちも全力でそれを支えないとね」

「ちよ、ちよつとアスナ!ティア!!行かせてもいいの?!」

アスナが領きながら言い、リズベットが目を見開いてアスナ達に問いかける。

「言い訳がないだろう。だがそれでも……こいつらは行くんだろう。お前達もわかっているだろう?こいつらはそういう奴らだと」

ティアはリズベットに対し諭すように告げると、リズベットはやれやれとため息をつき、

「はあ……あんた達には敵わないわ」と呟いた。

「でも、今後ホロウエリアに行く時はしつかり準備してね。私達だけとは言わないけど、探索する時は最低でも2人か3人以上で行く事。

向こうに詳しいフィリアさんは、もういないんだし」

「まあ、どうやらあの得体の知れない忍はいるようだがな」

「ああ、そうするよ」

キリトはアスナ達の忠告に対し素直に応じた。

「さすが、夫婦のお二人ですね」

「はあ…もうしようがないなお兄ちゃんは。なら私も協力するよ」

シリカがジエネシス達を微笑ましい目で見つめ、リーファはため息をつき、そして笑顔で言った。

「それで、具体的にどうするの?」

「それなんだけど、今回はレイとユイの力を借りたいんだ」

シノンの問いに、キリトは2人の幼い少女の方を向いて答えた。

「わ、私達ですか?でも、私たちはモンスターと戦ったりは出来ないのですが……」

「あー、そんな危なっかしいことをさせるつもりはねえよ。

ただレイとユイなら、ホロウエリアのデータとかシステムが分かったりとかするじゃないかと思ってな」

驚いた顔で言うユイに対し、ジエネシスが首を振って否定した。

「なるほど……確かに、私たちなら見ただけで色んなものを判別できますからね!」

「ああ。よろしく頼む、ユイ」

「勿論ですよ!パパ」

キリトはユイの頭を撫でながらそう頼み込んだ。

「あ、それでしたらもっと適役がいますよ?」

するとレイが立ち上がってそう言い、後ろに座る2人の人物の方を振り返って

「ですよね?ストレア、サクラ」

ここまで静観を貫いていた2人は突然の指名にギョツとした顔になる。

「ええっ?!ここ、ここで私達に振るんですか?!」

「あー!黙って存在消してたのにレイったらひどくい!」

「そーいやお前ら珍しく何も喋らなかつたな。どうした?悪いもんでも食ったか?」

慌てふためく2人に対し、ジエネシスが首を傾げてそう尋ねる。

「2人なら、私やユイよりもパパ達の力になれるはずですよ?私とユイと違って、ストレアとサクラは戦闘もできて、それでいて私たちと同じように見たものの分析が出来るんですから」

「えっ、それってどういう意味なんだレイ？」

「ストレア……サクラ……あっ……」

レイの言葉の意味が理解できない様子のキリトはレイに対し聞いただし、ユイが何かを察してハツとした顔になる。

「あー、アタシ用事があるんだったー！」

「ちよ、ちよつと姉さん！逃げるのは卑怯ですよ！」

立ち上がって宿から出ようとするストレアをサクラが慌てて止めた。

「そうですよストレア。遅かれ速かれ、貴女達の正体は皆さんに明かさなければならぬのですから」

「やーだー!!だってすっごい今さらじゃんかー！」

「そうですか……なら、私の方から皆さんにお伝えしますね」

「わあー！待ってわかった自分で言うからー!!」

諦めて皆の方を振り返ったレイをストレアが慌てて制止した。

そしてストレアとサクラは気まずそうに皆の方を向く。

「ちよ、一体なんなの？何が始まるの？」

全く状況が飲み込めないアスナは戸惑い、他のメンバーも同じようにざわついている。

だがストレアとサクラの真剣な表情を見てすぐに押し黙った。

「あの……みんなにはちゃんと、伝えておかなきゃと思ったの。

アタシ達はね……」

「……………人間じゃないの」

「「「えっ?」」」

ストレアが告げた言葉に皆の目は点になった。

「私達は、皆さんのようなプレイヤーに寄り添い、傷ついた心を癒すために生み出された存在……《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》です」

「なっ……………」

「それって、ユイちゃんやレイちゃんと同じ……………」

「はい。私たちは9人いるMHC Pのうち、姉さんは2号、そして私が3号です」

サクラが告げた真実に皆は衝撃を受けた。

それも当然だろう、今まで普通の人間として接していた仲間が、実はAIだったのだから。

「けどよ……………ならお前らはなんでプレイヤーと同じようにカーソルやHPゲージが存在するんだ?」

「それは、アタシ達のコアプログラムがエラーの蓄積で崩壊する前に、未使用のアカウントに上書きしたからだよ」

「成る程……………つまり、君たちの姿がユイやレイと少し違うのも納得だな」

ジエネシスが素朴な疑問をぶつけると、ストレアが淡々と答え、キリトはその答えを聞き領きながら呟いた。

「皆さんは、その……………私達がAIだとしても、仲間であってくれますか?」

「愚問だな」

おずおずと尋ねるサクラにジエネシスはその問いに対しきっぱりと答えた。

「てめえらがAIだろうがなんだろうが、それで仲間じゃなくなるとかそんなことある訳ねーだろ」

「そうだな。これからも宜しく頼むよ、2人とも」

ジエネシスとキリトの言葉に皆は同意して笑顔で頷く。

「あ……………ありがとうみんな!」

ストレアとサクラは頭を下げて礼を述べた。

「ふふっ、それじゃあご飯にしよっか！今夜は私が腕によりをかけて作るから楽しみにしててね！」

アスナはそう言っただけで立ち上がると、キッチンへと向かって行った。

「おっ、アスナの料理か！それは楽しみだなあ！」

「そうですね、私もくうくうお腹がなりました」

サクラがそう言った瞬間、ジェネシスとキリトは何故かブルツと身体を震わせた。

「……………今寒気がしたんだが気のせいだよな？」

「ああそのはずだ。『よもやそこま…』なんて聞こえたのも気のせいだ」

2人は小声でそう交わすと、全て気のせいだと片付けた。

「なあ、ストレアとサクラはつまりレイとユイの姉妹、と言う事になるんだよな？」

「えっと……………そうだね。見た目はともかくアタシ達はみんな姉妹みたいなものなんだし」

ティアが顎に手を当てながら疑問に思ったことを呟くと、ストレアは彼女に対してそう答えた。

「では……………ストレアとサクラも私達の娘、と言う事になるのか？」

「……………」

その瞬間、皆が一斉に押し黙った。

「ええっと……………まあ、確かに理屈だとそうなる、かな？」

数十秒の静寂の後、キリトは戸惑いながらそう述べた。

「そ、そっか……………それじゃあ、パパあ〜！」

「や、やめてくれ！ストレアにパパと言われると恥ずかしいと言うか……」

「あ、あはは、まあアタシも名前と呼ぶ方が好きだしいつか！」
ストレアも気恥ずかしかったのか若干頬を赤らめて答えた。

サクラはその隣で「あ……その……」などと一人呟き落ち着かない様子だったが、やがて意を決して叫ぶように言葉に出した。

「お、お父ひゃんっ!!」

「ブツ……」

恥ずかしさのあまり噛んでしまい、ジエネシスは思わず吹き出した。

サクラは顔をリングゴのように真っ赤にして蹲る。

「あ……あうう……」

「はは、いいじゃないか。なあサクラ、もう一回言ってくれ。今度は『お母さん』と」

「や、やめてくださいいいー!!」

ティアが揶揄うようにサクラに対していい、サクラは顔を両手で覆って首を横に振る。そんな彼女の様子がおかしくなり、皆は思わず笑い出した。

和気藹々とした空気が食堂を包み込んだ。

四十話 真実

夕食を終えた後、ジエネシスとキリトは早速ホロウエリアに戻る準備を始めた。フィリアの事も気がかりだが、何より今は管理区に1人残しているツクヨの無事を確保するためだ。

「さて、そんじゃホロウエリアに行くメンバーだけど……」

「当然、私は行くわよ」

キリトが共にホロウエリアに向かうメンバーを募ると、真つ先にアスナが名乗り出た。

「私も行く。旦那がこんな目にあつて、これ以上黙って待つ事など出来まい」

同じくジエネシスの嫁であるティアも名乗り出た。

これで計4名。しかしここで問題が発生する。

「こりや参つたな……俺とキリトは問題なく行けるが、連れて行けるのは最大で1人まで。つまりこのままだと……」

「ホロウエリアに詳しいレイやユイ、ストレア、サクラを連れて行く事が出来ない、という事だな」

そう、この中のうち誰か1人が抜けなければホロウエリアの解析が出来ない。

ここでふと、ジエネシスとはある事を思い出す。

「おいジャンヌ。おめえホロウエリアにいた時左手の甲になんか変な紋章が浮かんでなかったか？」

『も、紋章ですか？……ああ、そんな感じのものがあつたような……』

名指しされたジャンヌは顎に手を当てながらそう答えた。

「そつか。ならジャンヌも高位テストプレイヤーってやつみたいだな。それならジャンヌとあと1人連れて行ける」



七十六層の転移門に、6名の男女が集まった。

ジェネシスとティア、キリトとアスナ、そしてジャンヌと今回付いてきたのはサクラ。

「よし、んじや行くか」

そして6人は青白い光に包まれ、ホロウエリアへと向かう。

そして場所は変わり、ホロウエリアの管理区にて彼らを出迎えたのは……

「よう、待っておったぞ」

ツクヨだった。彼女はキセルを蒸しながら転移門の壁にもたれながら言った。

「おう、無事だったなら何よりだ。そんで、ちよつと紹介したい奴がいてな……」

ジェネシスはそう言つてサクラの方に視線を移す。

「初めまして、私は『サクラ』と言います。一応プレイヤーの体裁は取っていますが、本当はAIなんです」

サクラの自己紹介を受け、ツクヨは眉をぴくりと動かす。

「ほう？人は見かけによらんとは言うが……」

「ま、俺も初めて聞いたときはそりや驚いたもんだが……つーわけで、早速頼めるかサクラ」

「はい、お任せください！」

そしてサクラは早速管理下の床や壁を掌でペタペタと触り始めた。

「そう言えば主もいたか、オルレ안의聖女を名乗る者」

『あ、はい！その節は大変お世話になりました！』

ジャンヌはそう言つてペコリと頭を下げた。

「あの、少しよろしいですか？」

するとサクラがジェネシス達の元へと戻り声をかけた。

「おつ、なんか分かったのか？」

ジェネシスの問いにサクラは「はい」と頷き、

「ここは開発テスト用の秘匿エリアです」

「秘匿エリア……?」

「はい。簡単に説明すると、SAOに実装される前のアイテムや武器の性能の実験をする場所です」

サクラの説明によると、SAOに登場するアイテムや武器、スキルは実装される前に必ずテストが行われる。何故なら、例えコイン一枚程度のアイテムであるとしても、効果や性能によってはゲームバランスを崩しかねない。

「なるほど……だからこのエリアで未知のスキルやアイテムが見つかるのか……」

キリトは納得がいったのか頷きながら呟く。

「しかもこのエリアは、現在の過酷な状況に合わせて独自の進化をしているようです。」

もう少しだけ調べてみますね」

そう言ってサクラは管理区にあるコンソールへと足を運んだ。そして慣れた手つきでキーボードを目にも止まらない速さで打ち込んでいき、次から次へと様々なデータを画面に表示して行く。

「あつ、皆さん！これを見てくださいー！」

そう言ってサクラはとあるデータをモニターに表示する。

一見するとそれは、何かの名簿表のように見えた。

「あのサクラ、これは?」

「これはアインクラッドに存在するプレイヤーの登録情報を基に作成された、プレイヤーIDです」

首を傾げながら問いかけるアスナにサクラがそう説明しながら答えた。

「プレイヤーID?そりゃあどういうやつだ?」

「要するに、アインクラッドに存在するプレイヤーを忠実に再現したAIです」

「AIだって?!一体なんのために……」

「おそらく、プレイヤーの深層心理を探って効率よくテストする事が目的と考えられます。」

キリトさんとジェネシスさん、ジャンヌさんは高位のテストプレイヤーとして存在するようです」

各々の疑問に、サクラは簡潔に答えた。

「けどよ、プレイヤーIDってやつがあんならなんで俺たちは呼ばれたんだ？」

「推測ですが、プレイヤーIDと言っても所詮は模造品：AIでは判別できないイレギュラーな行動、高いプレイヤースキルが必要とされるテストを行うためにお三方が呼ばれたのかと」

「ここまで説明し終えたサクラに対し、今度はティアが問いを投げかけた。

「となると……フィリアやツクヨもまたAI、という事になるのか？」

そしてサクラは画面を操作して上下にスクロールする。

「この高位テストプレイヤーの中には、フィリアさんならびにツクヨさんの名前は登録されていませんね。」

状況から鑑みて、お二人はまさに特殊な状況でここに呼び出されたのかと考えられます。

ただ、現時点でお二人がAIなのか本物のプレイヤーなのかを判別する決定的な証は見つからないですね……」

「わつちとフィリアは間違いなく人間じゃ。これだけは言わせてもらうぞ」

ツクヨは強い口調でそう告げ、キリトが「まあまあ」とそれを宥める。

「どうやら《大空洞エリア》という場所にもう一つコンソールがありますね……そこに行けば、お二人の情報を詳しく見られるはずです」

「大空洞エリアか……あれ、この間行かなかったか？」

「ああ。だがその時にはコンソールらしきものは無かったぞ？」

そう。彼らは以前、大空洞エリアに足を運んでいたのだが、その時にシステムコンソールらしき物は見つからなかったのだ。

『もしかして隠し扉があったんじゃないでしょうか？』

「あ、成る程……確かにフィリアなら俺たちが分からなかった隠し扉を簡単に見破れるだろうな」

ジャンヌの指摘にキリトは納得した顔で頷く。

「よし、んじや方針は決まったな。とりあえず大空洞エリアに行こうぜ」

「ああ。行こう！」

—————

シリオギア大空洞く情報集積遺跡内部く

管理区から約数十分程で、翡翠色一色で構成された空洞の道に到達し、一行は進んでいく。

そして目の前に、数十体のゴーレムが出現した。

「おっと、戦闘か。みんな準備はいいか？」

「ハッ、出来てるよ」

キリトが二振りの剣を構えて尋ねると同時に、ジェネシスも大剣を肩に担いでそう答えた。他の者も各々武器を構えて無言で答える。

「よし、行くぞ!!」

そして皆一斉に飛び出した。

キリトが左右の剣を交互に繰り出して一体ずつゴーレムを確実に撃破していく。背後からの攻撃も持ち前の反応速度により右手のエリシデータで受け止める事で難なく防ぎ、そのまま左手のダークリパルサーでその胴体を切り払い後方に飛ばす。しかし彼の周囲を取り囲むようにゴーレムが接近するが、キリトは二刀流範囲攻撃スキル《エンド・リボルバー》を発動。エメラルドグリーンの斬撃がゴーレムの群れに襲いかかり、見事に斬り払った。

ジェネシスは愛用の赤黒い大剣、アインツレーヴェを豪快に振り回して一気に吹き飛ばす。そのパワーとレンジを生かしてゴーレムを全く寄せ付けない。

しかしジェネシスはある事かそんなゴーレム達の方へ自分から近づいて行く。先ずは目の前の一体を脳天から大剣を振り下ろして

一刀両断し、続けて背後から来た別の個体の頭を左手で掴み取り、右手で握りしめている大剣の柄でその頭を殴りつけ、そのまま右足で蹴り飛ばす。

そして暗黒剣スキル《プランディッシュ・イーター》で周囲のゴーレム達を薙ぎ払った。

ティアは流れるような動作で愛用の刀である雪片を振ってゴーレムの身体を斬り刻む。持ち前の反射神経で素早い動作でゴーレムの胴体に致命傷を与える。反撃で繰り出される右拳をしゃがみ込む事で躲し、そのまま刀を横一閃に振るって両足を断ち切る。それによって目の前のゴーレムが膝を突くのと同時にティアは立ち上がり、再び刀を逆方向に振ってその首を斬り飛ばした。そしてその背後から来る別個体の拳にも即座に反応し、振り向きざまに右下方向へ刀を振り下ろしてその腕を切断し、無防備になった胴体に突風の如く二つの斬撃を叩き込んだ。

そしてそのまま刀を左腰に持っていき、左半身を引いてゆっくり腰を落とす。雪片の銀色の刃が蒼い光を放ち始める。

その間に五体程のゴーレムがゆっくりと歩み寄るが、即座にティアは刀を右上方向に振るった。

蒼い三日月状の斬撃が真っ直ぐに飛んでいき、その直後一つだったそれが無数に細かく分裂し、ゴーレム達に襲いかかった。抜刀術範囲技《真蒼》である。

アスナは細剣の切っ先を前に素早く突き出してゴーレムの身体に無数の穴を開けていく。斬る速さを追求したティアとは対照的に、アスナは突く速さを追求したスタイルで戦闘を運んでいく。敵の攻撃が来る前に、異名の《閃光》の如く敵を仕留めていく。

『始動』！』

《Complete》

瞬間、アスナの防具が全て弾け飛び、防御力が一気に落ちる。

《Start up》

しかしその代わりにアスナは《閃光》から《神速》となる。

瞬く間にアスナはその場から一気に跳躍し、ゴーレムの群れを見下

ろす。

《Exceed Charge》

電子音声が流れ、赤い円錐状のポインターが真下のゴーレム達を余さず捕捉し、拘束する。

「はっー」「せやっー!」「やあっー!」「だあっー!」

直後次々にアスナが凄まじい速さで捕捉したゴーレムを撃破していく。

《3...2...1...Time Out》

《Reformation》

掃討を終え、アスナの神速が解かれると共に防具が再び装備された。

ツクヨは得意の忍術スキルで神出鬼没の戦闘スタイルで戦う。

忍術スキルによって極めた《気配遮断》によってゴーレム達に気づかれることなく、まさに暗殺者のようにゴーレムを仕留めていく。

ツクヨを捕捉するためゴーレムは顔を左右に動かして視線を移すが、見つけることができない。

……だがゴーレム達は気付いていない。既にツクヨは獲物なのではない。寧ろ立場は既に逆転している。

この時点でゴーレム達は言うなれば蜘蛛の巣にかかった獲物。かかったと気付いた時は既に手遅れなのだ。

ゴーレム達は自身が攻撃された事に気づく事なく一体、また一体と撃破されていく。

ふと、洞窟の宙に一つの影がゆらりと浮かび上がった。

その視線はまさに、獲物を前にした捕食者のそれ。

両手の指に手裏剣と苦無をいくつも挟んだツクヨは、そこから両腕を後ろに開く事で一気に射出した。

淡い桃色の光を纏う手裏剣と苦無がいくつも分裂し、雨のように降り注ぐ。

忍術スキル《手裏剣術・桜吹雪之舞》

全身に隙間なく苦無と手裏剣を投げつけられたゴーレム達は全てその身をガラス片に変えて消滅した。

一仕事終えたツクヨは地面に着地すると、キセルを口から離して「フウ」と煙を吐いた。

ジャンヌは手持ちの大きな旗を槍のように振り回して戦った。

ジャンヌの身長は倍はあるであろう旗を難なく操り、近づくゴーレム達を次々に吹き飛ばす。目の前へ接近する個体の胴体に旗の先端を勢いよく突き出して後方へ吹き飛ばし、そこから旗のリーチを生かして横一閃になぎ払っていく。

そして旗を一度逆さに持つと、その先端を地面に突き刺して棒高跳びの要領で一度飛び上がり、そして旗を地面から抜くと落下の勢いに乗せて思い切り叩きつけた。轟音と共にゴーレム達が宙に舞い上がる。

仲間立ち上がり、懲りずに近づくゴーレム達に対し、ジャンヌは旗を開放してソードスキルを発動する。

両手で旗を正面に持って高く掲げると、黄金の眩い光が空洞を照らす。そしてジャンヌはその旗を左右の腕を器用に動かし、旗をプロペラのように回転させ始める。

《聖女の加護》範囲攻撃技《リユミエール・トルナード》

光の竜巻がゴーレム達を巻き上げていき、その突風によってゴーレムの硬い身体は粉々に砕かれていった。

竜巻が収まると、ゴーレムの身体だった光の粒子がジャンヌの周りを舞い、彼女の美しさをより引き立たせた。

四方八方から来るゴーレムの硬い拳を、サクラは最小限の動きで難なく躲していく。左足を軸に反時計回りに回転し、そのまま右足を高く真つ直ぐに上げて一体のゴーレムの頭部を蹴り飛ばす。そして今度は逆の足で同じように反時計回りで左足の踵で別のゴーレムの胴体に蹴りを叩き込む。

後方に真つ直ぐ伸びた状態の左足を、今度は振り子のように前方に振り上げ、そのまま目の前のゴーレムを蹴り飛ばし、同時に右足も踏み切ってその隣にいたもう一体も蹴る。すると同時にサクラの足元に攻撃が来るが、サクラはそのまま後方宙返りによってそれをあつさり回避した。

体術スキル《エクストリームマーシャルアーツ》によるアクロバティックかつ優雅な動きでサクラは敵を翻弄し続ける。

両足で同時に踏み切り、サクラは身体を横にしながら地面と並行に回転し、ゴーレム達と一度距離を置く。

着地と同時に彼女の両足が紫色の光を帯び、先ずは右足を振り上げて続け様に左足を突き出す。すると紫色の波動が真つ直ぐゴーレム達の方へ飛んで行き、着弾と同時に爆発を引き起こした。

《クライム・バレエ》二連撃スキル《ジゼル・シュナイデン》。敵と一定以上距離が離れていれば、このように中距離技として使うことができるのだ。

各々の奮戦によって、ゴーレム達は総て撃破された。

—————

ゴーレムを倒した場所から更に数十分進むと、とある部屋にたどり着く。

その部屋の中央には、見慣れたとある物が設置されていた。

「あれは……システムコンソールだ！」

「やっとな着いたか……」

漸くたどり着いた目的地に皆はホッと息を吐いた。

「ここからなら、ホロウエリアの管理システムにアクセスできるはずですよ！」

サクラはコンソールに駆け寄ると、早速キーボードをタップしコンソールを起動、そして画面をスライドして次々とデータを閲覧していく。

「ん……？」

ふと、サクラは何か気づきとあるデータを開く。

「どうかしたのか、サクラ？」

「これは……プレイヤーとAIデータの重複チェックシークエンスに

エラーが発生しているみたいです」

ティアがサクラの様子を見て尋ねると、サクラはそのデータをモニターに表示してそう答えた。

そこにはホロウエリアに存在するAIプレイヤーの名簿表のようなデータがあり、その中に2名のデータのところに赤い文字で《Error》と書かれていた。そのエラー表記のある2人のプレイヤーの名は……

「フィリアさんと、ツクヨさんですね」

サクラの言葉通り、フィリアとツクヨの名前の場所にエラーと明記されていた。

「サクラ、これは一体どういうことなんだ？それに重複チェックって一体なんだ？」

中々話が見えてこないキリトがそう問いを投げかけた。

「このホロウエリアでは、アインクラッドに存在するプレイヤーの情報を基に、AIデータが作成されているのは先程お話しした通りです。」

ただ、このホロウエリアに実在のプレイヤーとそのIDが同時に存在しないよう、

つまり、今ホロウエリアにジェネシス・キリト・ティア・アスナ・ジャンヌが来た瞬間、彼らを基に作成されたAIは削除されているのだ。

「この重複チェックにより、本来はプレイヤーとそのAIが出会う事は無いのですが……」

「わっちらは出会ってしまった訳じゃな。そのフィリアのAIに」
ツクヨがそう言葉を繋げるとサクラは首を縦に振って肯定する。

「おそらく、その時は一時的に重複チェックが作動していなかったと思われる。その原因ですが」

「ああ。少し前に発生したカーディナルシステムのシステムダウンだな」

サクラの言う原因に皆思い当たる節があり、ティアがその時の事を思い返しながら言った。

「そして、本来存在するはずの無い自分自身と出会った事でフィリアは錯乱して攻撃。その結果、行き場をなくしたオレンジがエラーとして認識されていると言うことか……」

キリトの推測にサクらは頷き、

「そう考えられます。それで、そのエラーを解除する方法なのですが……残念ながらこのコンソールで解除することが出来ず、この大空洞エリアにある中央管理コンソールに行く必要があります」

「中央管理コンソール……そこに行けばフィリアとツクヨのオレンジを解除する事ができる……」

けどその前に」

「ああ。まずはフィリアを探し出さないと」

キリトとジエネシスはそう言うが、そもそもフィリアの居場所に関して手がかりが全く無い。振り出しに戻り少し途方に暮れかける一行だった……

「フィリアさんの居場所ですが、この大空洞エリアにいる可能性があります」

「えっ？どうしてそう思うの？」

アスナが首を傾げて尋ねる。

「この中層ゾーンとボス部屋に繋がる扉に、封印が施されていました。おそらくですが、ジョーカーが施したのかと思われます」

「封印なんてすると言うことは、その先に進まれると不都合な事がある、と言う事だな」

「はい。その先にフィリアさんがいると考えられます。」

今、このコンソールで封印を解除しておきました！」

「んじゃ、ボスは後回しにしてとりあえずサクツと助けるとするか」

そして一行はフィリアのいる場所へと向かった。

四十一話 狂気の男

薄暗い六畳ほどの部屋に、フィリアは1人座り込んでいた。

そこへ部屋の扉が開き、中に不気味なピエロ風のメイクを施した男が入って来た。

「Yeah!」苦勞だったなアフィリア」

ねつとりとした口調でジョーカーはフィリアに対して言った。

フィリアはジョーカーをキツと睨みながら

「あんたがここに来たって事は、もう計画の準備は始まったって事でしよう?」

「……なら、早くここから出なさいよ!みんなを助けに行かないと……」

「ああ、お前えは十分に役割を果たしてくれた……」

そしてジョーカーは一呼吸置き、

「今頃は、奴らもくたばってる事だろうからなあ!」

「……え?」

ジョーカーの言葉を聞き、フィリアは耳を疑った。

「おいおいどうしたんだよオ?まるでsurpriseなプレゼントももらったような顔してよ」

表情が固まるフィリアの顔を覗き込むようにジョーカーは尋ねた。

「話が…違う!みんなは別に死ぬわけじゃないって……!」

「Ah?俺アそんな事言っただけなあ?」

ジョーカーは首を傾げながら惚けた後、思い出したように手を叩き、

「ああ〜〜悪い悪い、あのトラップに何人も落としたけどよお、誰一人戻ってこなかった事伝え忘れたわ」

「この嘘つき野郎!!」

フィリアは立ち上がってそう叫ぶ。

「だからヨオ、悪いと思っただから今伝えたじゃねえか」。

「……キヒツ、いいねえいいよお!その泣きそうな顔、最高だぜえ!」

「みんな……今行くから！」

そして勢いよく駆け出すが……

「ああ、ちよつと待てて焦るなよオ。どうせ奴らはお強いからなあ、大丈夫なんだろう？」

……だからよ、最高ついでにもう一つ聞いてけよ」

ジョーカーがフィリアの前に立ちはだかり、行く手を阻む。

「お前えのお陰で、邪魔する奴がみんな消えて助かったぜえ。お陰で最高の party が随分早く始められそうだしなあ」

不気味な笑みを浮かべながらジョーカーはフィリアの顔を覗き込むように言う。

「……あんたのしたい事って、なに？」

「……SAOがクリアされれば《ホロウ》は消える、もうテストは必要ねえ。

でもでもでもおろ……お前えのお陰で、俺達は永遠に人殺しを楽しむ世界が出来たんだよなあ!!」

「永遠に……人殺しを楽しむ……？言っている意味が分からない！」

「全部お前えが選んで決めた事だ……愛しのキリト君やツクヨちゃん、ジェネシス君を罫にはめて殺したのも……永遠に人殺しができる世界にするのも……」

するとジョーカーは両手をバツと広げ、

「全部！全部!!ぜえええええええんぶ!!」

俺と！おめえで!!選んで!!決めたんだよ!!!」

仰々しく叫ぶように言った。

「違う！違う、違う違う違うちがうちがう……」

フィリアはしゃがみ込んで両手で頭を抱え、両目に涙を溜めてひたすら首を横に振った。

そんな彼女にジョーカーは楽しげなステップを踏みながらフィリアに近づき、

「歓迎するぜえ、俺たち《J》はお前えのような性根の腐った腐った

……殺人者をよお」

「お前とは違う!!違うよ……私は……わたし、は……」

フィリアはジョーカーをの手を振り払って拒絶した。

「お？どうした？その面は何だ？笑えよ、人殺し楽しくねえのか？」

フィリアの様子を見てジョーカーは彼女の顔を覗き込む。

するとジョーカーは蹲るフィリアを蹴飛ばす。

フィリアは地面を転がってうつ伏せになって倒れ込む。

「おおー悪い悪い、ついうっかり蹴っちまったわ。

痛かったか？……そんなわけねえよなアここSAOの中だもんなア」

そう言つてジョーカーはゆつくりとフィリアの方に寄っていく。

——私はただ、みんなと生きたいだけなのに——

ホロウエリアに囚われてから、いやその前からフィリアはツクヨやキリト、ジエネシス達と出会うまで孤独な日々を過ごしていた。頼れる仲間も友人もおらず、たった一人で過酷な毎日を過ごしていた。

だからこそ、彼らと過ごす日常はそれまでに比べてとても心地よかった。彼らとこれからも毎日を過ごしたいと、いつしか願うようになった。

だがもうその願いは叶わない。他ならぬ自分自身がそれを壊してしまったからだ。例え彼らがまだ生きていたとしても、こんな自分の居場所などもうありはしないだろう。

「ハア………んだよきつきからシケた面しやがってよお。もつと笑えよ、なあ？」

そんな彼女の首をジョーカーは掴み、片腕で軽々と持ち上げて無理やり立たせる。

そして懐のポケットからサバイバルナイフを取り出し、そのギラリと銀色に鈍く光る刃をフィリアの口元に当てた。

「俺の口の傷の話をしてやるよ」

ジョーカーは自身の口元——彼の口元には両頬にかけて斬られたような傷跡がある——を見せ、

「俺の親父は酒癖が悪くてな、飲んででは暴れてを繰り返すでしょうもない親父だった。

ある日、酒を飲んだ親父はまた暴れ出した……しかもナイフを持つ

てな。それに対してお袋は包丁を持ってそれに防衛、だが親父はそれが気に入らなかつた。

まるつきり ただの 少しもな。

親父はお袋を刺し殺した……俺の目の前で笑いながらな。

そして今度は俺の方を見てこう言つた……

『Why so serious son?』

親父は近づいてきてもう一度言つた

『Why so serious son?』

するとジョーカーはナイフの切っ先をフィリアの口内にねじ込むと話を続ける。

「親父はナイフの刃を俺の口に入れた。

『Let's put a smile on that face!』

そして……」

そこで話を区切り、ジョーカーはナイフの手に力を入れる。

フィリアの頬が徐々に切り裂かれ始めた。

その時だつた。

「はあああっ!!」

突如漆黒の刃がジョーカーの腕を斬り、フィリアを突き飛ばす。

ジョーカーは後方に飛び退き、フィリアは地面に尻餅をついた。

そしてフィリアの目の前に、3人の人物が立つた。

漆黒のロングコート、忍装束の女性、赤黒い装備に身を包んだ男性。

「キリト……ジェネシス……ツクヨさん……」

フィリアは小さな声で彼らの名を呟いた。

「よお。随分探したぜコノヤロー」

ジェネシスはゆっくり彼女の方を振り向きながら言つた。

「みんな……どうして……?」

「言つたじやろう、わつちらが力になると」

「ああ。それに、君が苦しんでる理由も分かつた。もう大丈夫だから安心してくれ」

ツクヨとキリトもフィリアの方を振り向いて優しく告げた。

「フィリアさん、無事で良かったです!」

「本当に大変だったね。もう安心していいからね？」

地面に座り込むフィリアにサクラとアスナが駆け寄り、優しく彼女を介抱した。

「みんな……ごめん……ごめんなさいっ……ごめんなさいっ……」

！

フィリアは感極まったのか、両目から大粒の涙を溢して泣きながら謝罪した。

泣きじやくるフィリアの頭をジャンヌが優しく撫でた。

「ク……ククツ……ブフフヒヤアハハハハハハハツ!!」

そんな彼女を見て、ジョーカーは腹を抱えて狂ったように笑い出した。

「ヒヒツ、美しい事だなあ……あああ……吐き気がするぜエ」

ジョーカーは笑いによつて乱れた呼吸を整えながら吐き捨てるように言った。

「貴様……よくもフィリアを騙しいいように利用してくれたな」

そんな彼をツクヨは鋭い目つきで睨みながら怒気を孕んだ低い声で言う。

「ハッ！騙される奴が悪いってやつよーてめえらも人がいいねえ、コイツに殺されかけた身でありながらこんなトコまでのこのこやつてくるとはよお」

「悪いが俺たちは、フィリアがそんな事する人間じゃないって確信があったからな。フィリアはきつと誰かに利用されてるんだと俺たちは考えただけさ」

煽り口調で言うジョーカーに対し、今度はキリトが不敵な笑みで返した。

「ああ、コイツは実にいい道具になってくれたぜ。」

ある日こんな訳もわからん場所に飛ばされて、やる事もねえからとりあえずそこらの人間どもを狩りまくってたら、こんなsurpriseなプレゼントが来やがった……」

そう言いながらジョーカーは自身の右掌を見せびらかした。

そこにはジェネシスやキリトと同じ高位テストプレイヤーに与え

られる紋章があった。

「でだ、管理区にきてこの世界が何なのか知っちゃまったワケ。ついでにそこのお嬢さん達の事もなあ」

ジョーカーはツクヨとフィリアを指差して言った。

「特にそこのフィリアちゃんはよお、俺にとつていい玩具になってくれると確信してたぜエ……現に、俺がちよつと唆したら素直にテメエらの殺しに乗っかってくれたしなあ。」

あともうちよいで面白え事になると思ってたんだがよオ……

てめえらが来やがった」

「そりゃ残念だったな」

面白く無さげな顔でジェネシス達の方を向いて言うジョーカーに對し、ジェネシスは鼻で笑いながら返した。

「……どうしてですか……」

するとサクラが立ち上がり、ジョーカーを見据えて叫ぶ。

「どうしてそんな事が出来るんですかっ!!平気で人を傷つけて、殺したりして……何とも思わないんですか?!」

「質問を返すようだが……おめえは人の本性はみんな善だと本気で思ってるのか?」

「……え?」

ジョーカーから返された指摘にサクラは目を丸くした。

「ヒヒツ、分かってねえなあ……人つてのはみんな内側に狂気を孕んでる醜い生き物さ。」

おめえも見えてきたんだろう?人の奥底に眠る醜い本性つてやつをよお?」

「っー」

その指摘を受けた瞬間、サクラの両眼が見開かれた。

「俺はただ、人間どもの狂気を引き出してやってるだけさ……何故ならそれが俺の飯の種だからな。」

何が人を狂気に陥れると思う?

それは恐怖、怒り、不安、嫉妬と言った負の感情さ。現に、このS A Oにはこんな過酷な環境のせいで狂った奴らがわんさか湧いてる

……」

そう言つてジョーカーは右手の手袋を外し、その甲を見せつける。

そこにあつたのは、不気味な笑みで手招きをする棺桶のマーク……

『ラフィン・コフィン笑う棺桶』……!!』

「貴様もあの組織に所属していたのか……」

「まあてめえら攻略組が派手にやってくれたお陰で、今やとつくに散り散りだがな。その内俺がそれ以上の楽しい組織を作つてやる。

もうすぐ楽しい祭が始まるぜ」

ニヤリと口端を吊り上げながらジョーカーは言う。

「そんな事させると思ふか？」

するとティアがジェネシスの隣に立ち、すらりと刀を引き抜いて切っ先をジョーカーに向ける。

「そうなる前に私たちが貴様をここで捉える」

「ああ。何よりフィリアを唆し利用した貴様を……わっちは決して許さぬ。覚悟するがいい」

ツクヨも両手に苦無と手裏剣を持ち、いつでも射出出来る体勢をとる。

他のメンバーも各々の武器を構えて戦闘態勢に入る。人数は8対1と言うジョーカーにとつて圧倒的不利な状況である上、彼らの間合いの近さから転移結晶による離脱も恐らく不可能。

「つーわけだ。ここであつてめえは終わりだ。大人しく観念しやがれ」

不敵な笑みでジョーカーに対して告げるジェネシス。

「キヒツ……ヒヒツ……ヒヤハハハッ!!」

だがジョーカーはこの状況でも不気味な高笑いを上げ始めた。

「バーカー！俺が簡単に捕まるかよ、てめえらが来ることが予想してなかつたとでも？逃げる手段なんざとつくに作つてあるんだよお〜」

そう言つてジョーカーが懐から取り出したのは、ライターのような形状のスイッチ。

「この部屋には爆弾が仕掛けてある……このスイッチを押した瞬間、部屋中が大爆発だぜ」

「爆弾だと？ははっ、笑わせないでくれよジョーカー。ハツタリを言

うならもつとマシな奴を言え。

爆弾なんてアイテム、このSAOに存在するわけがないだろう」

馬鹿馬鹿しいとばかりにキリトはジョーカーに言い返す。

「ヒヤハハッ！ならハッターかどうか、その目でちゃあくんと見てるんだな」

そしてジョーカーはスイッチを勢いよく『カチツ』と押す。

「boom！」
ドカン！

次の瞬間、四方の壁が轟音をたてて爆発を起こした。

平らな壁だったものが、細かく鋭利な破片となつて吹き飛ぶ。

「なっ……?!」

「嘘でしょう?!」

その光景を見てキリトとアスナの両眼が見開かれた。

だが驚くのも束の間、爆発の勢いは一気に増していく。壁の次は天井から爆発し、その爆風と破片が雨の様に降り注ぐ。

そして次はいよいよ床のあちこちから爆発が起きる。

「不味い…部屋から出るぞー！」

ティアがそう叫ぶと、皆は一斉に部屋の外に走り出す。

「じゃあな。次はインクラッドで会おうぜ、Ciao……ふ、フツ、ギャハハハハハッ、ハーツハハハハハハハハ——!!」

彼らの後ろ姿を見ながらジョーカーは勝ち誇った顔で高笑いを上げ、そのまま爆発に吞まれて消えた。

ジェネシス達が何とか部屋から出た直後、先程まで彼らがいた部屋の中が爆煙に包まれ、そして部屋の扉が閉じられた。

「チツ……あの野郎、何であんなアイテムなんか持つてやがった」

「まさか本当に爆弾がこの世界にあるなんてな……くそっ、まんまとしてやられた！」

ジェネシスとキリトが閉じられた部屋の扉を見ながら悔しげな顔で言う。

「ジョーカー……あの人は一体何者なの？」

「分からん。だが今は捨て置こう。まずはフィリアを助けられただけよしとしようじゃないか」

「そうじゃな。大丈夫だったか？ファイリア」
「うん……みんな、本当にありがとう!!」
ファイリアは満面の笑顔で皆に頭を下げた。

四十二話 エリアボス戦

フィリアを救出した後、彼らは一度地下のコンソールへと向かった。フィリアとツクヨのオレンジを解除するためのシステムコンソールを見つけるためだ。

サクラはそのコンソールを使い、ジョーカーのプレイヤーIDを参照して彼の足取りを調べ、そこから中央管理コンソールを導き出そうと試みた。しかし彼の足取りを追跡したが特に怪しい点は見つけられず、中央管理コンソールの発見には至らなかった。

そこで彼らはもう一度管理区へと戻り、そこで中央管理コンソールの場所を特定する作業に入った。

例の如くサクラは慣れた手つきでキーボードをタップしていき、次々とデータを開いていく。

「あつ、ありましたよー!」

サクラがそう言つてとあるデータを開くと、画面にマップが表示され、その中央に赤い点が光っていた。

「中央管理コンソールの場所は、先ほどの地下空洞の最奥部に設置されているようです」

「んじゃ、そこに行けばこいつらのオレンジを解除できるって事だな」
サクラはジエネシスの言葉に首を縦に振るが、

「ただ、一つだけ問題がありまして……」
と表情を曇らせる。

「この中央管理コンソールに行くには、ホロウエリアの全エリアボスを倒す必要があるんです」

「えっ、そうなのか?」

「はい。ジョーカーも、中央管理コンソールに行くために全てのボスを倒してから行ったようですので、抜け道はないと思われます」

キリトの問いにサクラは頷いて答えた。

「と言うことは、地下エリアに行くのはお預けだな」

「でも、行き方が分かっただけでも良かったじゃない。一步前進だよ」
ティアとアスナが口々に呟く。

「エリアボスは全部で四体か……よし」

するとジエネシスは皆の方を向き

「ここは手分けして一気に潰すぞ」

「…成る程な」

ジエネシスの意図を瞬時に理解したキリトが不敵な笑みで頷く。

「まさか……四体のエリアボスに対してそれぞれ二人で戦うって事？」

「ああ。ジョーカーがただけ強えのかは知らねえが、少なくともあいつが一人で倒せるくらいならそこまで大人数はいらねえ筈だ」

ジエネシスは確信を持ってそう告げ、皆もそれに賛同し頷いた。

その後、《ジエネシス・ティア》《キリト・アスナ》《ツクヨ・フィリア》《ジャンヌ・サクラ》の4チームに分かれ、ボス戦に当たることとなった。

「よし。そんじゃ死ぬんじゃねえぞてめえら」

「ああ。勿論だ」

『どうかご武運を』

彼らは一言そう交わすと、各々の目的地へと向かうため管理区から転移していった。

くジエネシス・ティア組く

木漏れ日が差し込む森林の中を、二人の男女がゆっくりと進む。

「これからボス戦じゃなけりや、ピクニックで来るのもありなんだがなあ」

「そうだね……でもここにはレベルの高いモンスターが沢山出るから危ないよ」

残念そうに呟くジエネシスに対し、ティアは普段のクールな口調で

はなく、彼と二人きりの時の優しげな口調で話す。

「みんな、無事に攻略出来てるかな？」

「大丈夫だろ。そんな簡単にやられる奴らじゃねえ。」

「それよか、見えてきたぜ」

彼らの目の前にあるのは、ガンメタリックの光沢を放つ巨大な鋼鉄の門。

見るのも全てに異様な威圧感を与えるその扉は、歴戦の戦士たる彼らにそれがこのエリアの主が待つ部屋であることを感じさせる。

「ボス部屋……だね」

「ああ。こんなに早く見つけられたのはラッキーだな。」

「サクツと倒すか」

ジェネシスは背中から赤黒い大剣『アインツレーヴエ』を、ティアは左腰から愛刀の『雪片』をすらりと引き抜く。

そして二人は扉に手をかけ、同時に力を込めて門を開く。

重々しい音と共に扉が開かれていき、その中へ二人は揃って入って行く。

その中に居たのは……

『ブモアアアアアアアアアア!!』

体長は約3メートル程で、頭部は牛と豚を合わせたような見た目で左右の手にはバルバードと盾が握られている。

「なんか見たことあるなあいつ……」

「あれだよ、第一層のボス」

「あー、あいつか」

彼らがそんな会話をしている間に、ボスに三本のHPバーが出現し、『アトネイター・ザ・コボルドロード』と言う名が表示されると共に4匹の取り巻きが一斉にジェネシスとティアに向かって手持ちの棍棒を構えて走り出した。

接近する4匹の取り巻き達に対し、ジェネシスがティアの前に一歩出ると大剣を右腰あたりに水平に構え、そのまま左方向へ横一線に斬り払った。

赤黒い爆風が4匹の取り巻きを吹き飛ばし、その身を爆散させる。

その先に、ティアは刀を左腰の鞘に収め、ゆつくりと腰を落とす。そこから左足を一步前に踏み出し、眩い銀色の光を放つ刃を抜き放った。銀の一閃がボスの胴体を両断する。

抜刀術奥義スキル《飛閃一刀》。

最上級の一撃を受けたボスは断末の叫びを上げながらその身を爆散させた。

「随分と呆気なかったな」

ジェネシスは嘆息しながら言う。大剣を背中に収めた。

「でも、無事に攻略できたんだし良かったじゃない。次も頑張ろうね」「たりめーだ。次が本命だろうからな」

二人はそうやりとりした後、並んでその部屋を後にした。

—————

くキリト・アスナ組く

同時刻、彼らは地下ダンジョンの奥深くまで来ていた。

目の前にあるのは、一つの巨大な門。

「キリトくん……」

「ああ、間違いない……ボス部屋だ」

真剣な面持ちで彼らはそう交わす。

眼前に聳える漆黒の扉から放たれるプレッシャーは、これまで彼らが幾度となく対峙してきたものと同じだ。

「……行こうか、アスナ」

「うん。必ず勝とうね」

そして二人は扉に手をかけ、力を加えて開く。

重々しい音と共に門がゆっくりと開かれるにつれ、二人の緊張感のボルテージが上がっていく。

各々の剣を抜き放ち、二人はゆっくりと部屋の内部に入る。

中は薄暗く、ドーム状の無機質な空間が広がっているだけだ。

数秒間の静寂の後、それは突如としてやって来た。

天井から地響きと土煙を上げて着地し、『キシヤアアアアアアアアツツ!!』と言う耳をつんざく雄叫びを上げるのは、骸骨の狩手。

「つたく、またお前か……」

キリトは三度目の対峙となるボス《ザ・ホロウリーパー》を見て心底うんざりとはかりにため息を吐いた。

「スカルリーパー……どうしてホロウエリアに」

「いや、こいつは七十五層のやつとは別物だ。あれと比べても大した事はない。HPバーを見てみるよ」

キリトに言われ、アスナがボスのHPバーを見ると、その本数は僅か3本。

「大丈夫、俺たちなら必ず倒せる相手だ。落ち着いていこう、アスナ!!」

「……うん！行こう、キリトくん！」

微笑みあいながらそう言葉を交わすと、二人は同時に飛び出した。

二人を迎撃する為ボスは左右の鎌を持ち上げて振り下ろすが、先にキリトがそれを左右の剣で受け止め、弾く。

「キリトくん、スイッチ!!」

アスナの声と共にキリトが右方向へ飛び退き、すかさずアスナが飛び込んでボスの顔面に強烈な突きを叩き込む。

その間にキリトがボスの側面に回り込み、二刀流スキル《エンドリボルバー》でその胴体を斬り刻む。

その攻撃から逃れるために、ボスはその場から地響きを上げながら駆け出し、部屋を猛スピードで走り回る。

「逃さない！」

《Comprete》

ここでアスナが《神速》を発動し、防具が全て弾け飛ぶ。

《Start Up》

瞬間、アスナが音速を超えてボスに追従し、ボスの身体を四方八方から攻撃する。

視認不能な速度で繰り出される攻撃を受け、ボスは思わず動きを止める。

《3…2…1…Time out》

電子音声がなり、アスナの神速が解除されるが、ボスの足止めに成功する。

「ナイスだアスナ!!」

その好機を逃さず、キリトが左右の剣でボスに斬り込む。

剣の刃が青白い光を放ち、ソードスキルが発動する。

二刀流上位16連撃スキル《スター・バースト・ストリーム》

流星の如き青白い斬撃が上下左右から繰り出され、骸骨の骸を切り裂いていく。ユニークスキルの上位攻撃を受けたボスはあつという間にHPが消し飛び、そしてその身が爆散する。

「お疲れ様、アスナ」

「キリトくんこそ。この調子で、次も頑張ろうね」

そして二人は開かれた扉から出て、来た道を歩き始めた。

—————

くツクヨ・ファイリア組

草木が生茂る薄暗い森林の中を、1匹の獣が走り抜ける。

それは漆黒の体に頭部はワニのような巨大な方がある四足歩行の巨大なモンスターだ。

《シャドウ・ファンタズム》と言う名のこの樹海エリアのボスモンスターである彼(?)は今、とある物から逃げるように走っていた。

木々の間をすり抜けるようにただ必死に駆ける。

しかしそんな自分の疾走を嘲笑うかのように、四方から無数の苦無や手裏剣が飛来し、自分の身体に突き刺さる。

一体何処から飛んできたのか、走りながら赤く光る目をギョロギョロと動かし――それを発見した。

忍び装束の女性が木々の枝を悠々と飛び移りながら自分を追ってきているのだ。

女性――ツクヨはボスに対してすかさず右手に苦無を持ち、そして最小限の動作で放った。

弾丸の如く苦無が真っ直ぐにボスに向けて飛んでいき、その漆黒の身体に深々と突き刺さる。

その時、ボスの身体に黄色い電流が走り、身体力が抜けて地面にうつ伏せになって倒れ込む。

苦無術《自来也蝦蟇毒苦無》だ。

ツクヨは麻痺にかかったボスの顔の前に着地すると、その目を見下ろす。

「フン、漸く捉えたぞワニもどき」

悔しさと屈辱からボスは忌々しげにツクヨを睨むが、身体が動かないため何もできない。

「ツクヨさん！捕まえたの？」

そこへ遅れてやってきたファイリアがツクヨの隣に立ってそう尋ねると、ツクヨは首を縦に振る。

「ああ。ファイリア、主はコイツの隙について斬りかかれ。わつちが周りに仕留める」

そしてツクヨはその場から飛び上がり、再び周囲の木々を飛び移りながら苦無や手裏剣を投げつける。

彼女を捕らえようと麻痺の解けたボスがその巨大な口を持ち上げて噛みつくが、ツクヨの俊敏な動きについて行けていない。その間にファイリアがボスの足元や胴体を的確に攻撃しHPを削る。

順調に攻撃を加えていき、ボスのHPバーが残り一本のイエローゾーンに突入したその時、ボスの口元を結んでいた鎖型の拘束具が弾け飛び、ワニのような縦長の口が更に広がる。

ボスは拡大した口を目一杯広げ、ツクヨとファイリアを丸呑みにしようとして襲い掛かるが……

「ふん。食らいたくばこれでも食っておけ」

ツクヨは落ち着き払った態度でその口元目掛けて苦無を投げる。桜色の光を放つ苦無はすぐ様数百個に分散し、桜の花びらのように飛散していく。

苦無術《桜吹雪之舞》

桜色の光を放つ苦無は文字通り桜吹雪のように美しく舞い、ボスの口内目掛けて飛翔し、そして全て余す事なく突き刺さる。

『GYAAAAA!!』

その激痛にボスは巨体を滅茶苦茶に動かして暴れ始めた。

「そう喚くな。すぐに楽にしてやる」

するとツクヨはゆっくりと歩き出し、アイテム欄から太刀を取り出す。

ツクヨの刀はテイアの真つ白で銀色に輝く《雪片》とは真逆で、鏢は無く真つ黒の鞘と柄に刀身は黒紫と言うカラーで構成されている。銘は《宵闇》。

のたうち回るボスに対してツクヨはペースを変えずに接近し、逆手に持った太刀を素早い動作で一振りするとそのまま通過した。

そして刀を鞘にゆっくりと納めていく。

「《零次元・裏式》」

『チン』と音を立てて太刀を納刀したその直後、ボスの身体を黒い斬撃が走り、その身を両断する。

悲鳴を上げる間も無く、ボスは身体をガラス片に変えて消滅した。

「……これ、ツクヨさんだけでよかったんじゃ……」

フィリアはボソツとそう呟いた。

—————

くジャンヌ・サクラ組

ここは他のエリアと違い、光る苔や変わった形状の草木と言った

少々癖のあるエリア。

他のペアと違い、この二人はそこまで密接な関係を築いている訳ではないが、お互いの人当たりの良い性格が幸いし、ここに来るまで他愛の無い会話を続けてやって来ていた。

だがそんな和気藹々とした空気も、目の前に現れたモンスターによつて終わりを告げる。

出現したのは、巨大な蠍型のエネミー。

「あれは……《アメデイスター・ザ・クイーン》、このエリアのボスです」

『やつと現れましたか……！』

二人はそれぞれ戦闘態勢に入り、気を引き締める。

まずボスは二人に向けて紫色のブレス攻撃を放つが、二人はその場から素早く飛び退くことでそれを回避する。

『行きますー！』

ジャンヌは旗を槍のように使いボスの胴体に突きを放ち、続けてサクラが空中から勢いよく蹴りを叩き込む。

その反撃とばかりにボスは鋏状の前足を二人に対して勢いよく振り上げるが、ジャンヌが旗を払ってパリィを発動しこれを弾く。

これを受けて形成が不利と見たのか、ボスは一度距離を取るとそのまま逃走し始めた。

『っ！待ちなさいー！』

ジャンヌはそれを追いかけて、サクラもそれに続く。

しかしその時、ボスは振り返ると同時に先程の毒ブレスを放った。

『しまっ……！』

ジャンヌは回避を試みるも間に合わず、毒ブレスを受けてしまい、HPバーに紫色の光が灯り毒状態に陥る。

HPがゆっくりジワジワと減っていくが……

「《浄化の炎》！」

サクラがジャンヌに向けて右手を伸ばすと、ジャンヌが青白い光に包まれ、毒状態が解除される。

回復系ユニークスキル《ヒーリンググレイル》によるものだ。

『ありがとうございます！』

「いえいえ」

ジャンヌは立ち上がると再び旗を振るって攻撃を加える。

サクラもまた、身軽なステップを踏みながらボスの攻撃パターンを見極め、ジャンヌに指示を出しながら自身も攻撃する。

MHCPであるサクラの分析能力の恩恵もあつてその後は状態異常に陥ることもなく順調にHPを削っていき、そしていよいよレッドゾーンに突入する。

『決めます！どうか…主の御加護を！』

ジャンヌはとどめを刺すため、旗を両手で掲げる。

先端が眩いゴールドの光を放ち、ソードスキルが発動する。

ユニークスキル《聖女の加護》の8連撃スキル《リュミエール・パニッシュ》

『その命……神に返しなさい！』

そしてジャンヌは最後の1撃をボスに放った。胴体を先端で串刺しにし、そのHPを消し飛ばす。

ボスは耳をつんざく悲鳴を上げたのちに消滅した。

『ふう………どうにか務めを果たせました』

ジャンヌは安堵のため息を吐く。

「お疲れ様でした。この調子で次も頑張りましょう！」

『ええ、もちろん！』

サクラとジャンヌは笑顔でそう交わす。

—————

これで全てのエリアボスは討伐され、次はいよいよ最後のボス戦。彼らはホロウエリアからの脱出のため、最後の戦いに臨む——

四十三話 虚の守護者

全てのエリアボスを撃破した一行は、合流した後にいよいよ最後の難関である地下エリアのダンジョンへと足を運んだ。

「いよいよか……」

転移門を前にしたジェネシスがそう呟く。

待ち受けるのは間違いなくこれまで以上の難敵であるのは間違いない。

「必ず倒して、ホロウエリアから出よう！」

「うんー！」

キリトの言葉にファイリアが強く頷く。

そして一行はいよいよ目の前の転移石を起動し、秘匿領域へと向かう。

――

転移した先にやって来たのは、黒い空間に浮かぶ円形状のアクリル板のようなフィールド。

周りには何も無く、宇宙空間のような深淵が広がる。

だが突如、空間全体を揺るがす振動が発生し、同時に真上から巨大な何かが舞い降りる。

それはジェネシス達の立つアクリル板の周りを飛んだあと彼らの前に相對する。

それはドラゴンと蜂を合わせたような見た目をしていた。胴体から生える6本の脚。その内一対の脚の先端は大剣の形状をとっている。

その尾の先端には鋭いブレード状のものが付いている。

「つまりこいつがラスボスって訳か」

ジエネシスが大剣を引き抜き、肩に担ぐ。

「俺たちは入ってはならない場所に入った侵入者だからな。システム側としてはなんとしても排除したいんだろう」

キリトも背中から2本の剣を引き抜きながら言った。

「んじゃ、さくつと倒しちゃまおうぜ」

「ああ。それじゃ戦闘開始だ!!」

キリトの掛け声と共に皆各々の武器を手に飛び出す。

キリトとジエネシスがシステムアシストによる速度を生かしてボスの胴体に斬り込む。

だがボスは胴体の大剣が付いた腕をその大きさに見合わない素早い速度で全てブロックすると、二人を弾き飛ばす。

続けてティアとアスナが速さを生かして斬り込むが、これもボスは大剣で容易く受け止めた。

しかしその隙をつき、ジャンヌとフィリアがその上から飛び込み、ボスの胴体に攻撃を加えHPを削る。

「スイッチー！」

キリトの合図を聞いた四人は即座にその場から飛び退き、そこへ再びジエネシスとキリトが重い一撃を叩き込む。

だがその時、

「ブレス攻撃が来ます！離れてください!!」

サクラの警告が響き、皆は即座にその場から離脱する。

その直後、ボスの巨大な口部から白銀のビームがフィールドを一直線に貫く。

幸いサクラの警告が間に合ったため、ジエネシス達に被害は無かったが、

「あれは直撃したら不味そうだな……」

「うん。サクラの警告はしっかり聞いておこう」

ジエネシスとティアが顔を見合わせながら交わす。

そして皆は再びボスに飛びかかる。

だがボスは素早い動作でその場から離脱し、その攻撃を躲す。

だがそこ目掛けて苦無と手裏剣が飛び、ボスの胴体に突き刺さる。

ボスの動きを読んだツクヨがボスが移動する数秒前に苦無と手裏剣を投げたのだ。

その攻撃を受けたボスは、今度はフィールドに下に潜り込む。

「何か来るぞー気を付けなんし!!」

ボスの不審な動きを見たツクヨが皆に対して叫ぶ。

皆が警戒する中で、ボスの鋭いブレード状の尾がフィールドの中央から突き出る。

「危なっ?!」

その近くに立っていたキリトとアスナは間一髪のところまで回避する。

しかし間髪入れずにボスはジェネシス達の背後に回り再び上体を晒すと、先程のブレスの発射態勢をとる。

「またブレスが来ます!」

「ダメだ、間に合わねえ……!」

サクラの叫びも虚しく、恐らく回避する時間はない。

だがその時、彼らの一番前に飛び出した人物がいた。

ジャンヌだ。

『我が旗よ、我が同胞を護りたまえ!』

そう叫び、ジャンヌは旗を真っ直ぐに持って高く掲げる。

すると旗がゴールドの眩い光を放ち始める。同時に、ボスの口から

白銀のブレスが発射される。

『我が神はここにありて
《リユミノジテ・エテルネット》!!』

黄金の光がジャンヌから後方に扇状に展開し、彼らを守護する。

白銀のブレスが直撃し、扇状のバリアがそれを切り裂く。

『……っ、ぐうっ……!』

凄まじい衝撃がジャンヌを襲うが、歯を食いしばって踏ん張る。

永遠にも感じられるブレスが止むのと、光のバリアが解かれるのはほぼ同時だった。

『ふう………どうにか務めを……果たせました……』

ジャンヌは安堵のため息を吐きながら地面にへたり込む。

「助かったぜジャンヌ!!」

ジエネシスがジャンヌにそう言うのと、ブレスによる反動で動きが止まっているボスにもう一度斬りかかる。

今度はジエネシスのユニークスキル《暗黒剣》の特性である『自身のHPを犠牲にして攻撃力を上げる』スキルを発動し、ボスに挑む。攻撃力が飛躍的に上昇したジエネシスの猛攻を受けてボスのHPは急激に減っていく。

だがHPバーの一本目が削り切れる直前にボスは左腕を横一閃に薙ぎ払う。ジエネシスはその攻撃を大剣で弾くも、直後彼の目の前で大爆発が起きる。

「うおっ?!」

慌てて飛びのいた事で何とか生き延びたものの、すでに彼のHPバーはレッドゾーンに入ってしまった。

「お父さん!」

サクラがジエネシスのもとに駆け寄り、即座に回復スキルを施した事で彼のHPは一気に全快する。

「悪い、助かった」

「いえいえ、どういたしましてです」

サクラとジエネシスがそう言葉を交わす間に、ボスは再びあのブレスの発射態勢を取った。

「不味い、みんな回避だ!!」

今回は先ほどのようなジャンヌのバリアを張る時間は残されていないようだ。そう判断したキリトが叫んで皆に指示を飛ばすが、

「…………ふん」

ツクヨが素早い動作で苦無を飛ばした。

苦無は真つ直ぐにボスの方へ飛来し、その胴体に突き刺さる。

その瞬間、ボスの身体に黄色い電流が走り、麻痺状態に陥る。苦無術《自来也蝦蟇毒苦無》によるスタン効果だ。

「撃たせなければどうと言う事はありません」

ツクヨはキセルから「フウ」と煙を吐きながら言うと、再び苦無を両手の指の間に挟んで飛び出す。その後ろにフィリアが続く。

「はあああああっ!!」

フィリアはソードブレイカーを逆手に持ち、短剣ソードスキル《ラビット・バイト》でスタン状態のボスの胴体を斬り付ける。

その一撃でようやくボスのHPバーが一本吹き飛んだ。

「みんな、パターンが変わるぞ！気を付けろ！！」

ボスのHPバーが一本削れる毎に攻撃パターンが変わるのはこのSAOでは常識だ。

キリトはそう言って皆に注意を促す。

皆がキリトの指示を受け警戒する中、ボスは唸り声を上げながらゆっくり動き出す。

そして口部から複数の黒い球体を発射した。それらはしばらくフィールドを浮遊したのち、ジェネシス達を囲うように停滞する。

次の瞬間それらは同時に弾け飛び、皆を巻き込んだ。

全員HPが一気にイエローゾーンまで削られ、さらに麻痺状態が付与されてしまった。

だがその時、唯一巻き込まれなかったサクラが動いた。

「開け……《^{ヘブンスファイールド}天の杯》！！」

サクラが右手を高く掲げてそう叫ぶと、彼女の掌から桜色の光が溢れ出し、霧散してフィールドを包む。

その光を浴びたジェネシス達のHPは即座に100%回復し、さらに麻痺状態も解除された。

「サクラ……こんなスキルまで隠し持ってたのか」

キリトはサクラを見て驚いた様子で言うと、サクラは「それが私の役目ですから」と得意げな顔で答えた。

「全く……心強いことこの上ないな！」

サクラ、パターンの見極めは君に任せる！みんなは彼女の指示に従って攻撃するんだ！」

「サクラ、分析は任せるぞ！」

「はいっ！」

ジェネシスの言葉にサクラは威勢よく答えた。

そして皆は各々の武器を携え、ソードスキルを持って畳み掛けた。全員の総攻撃を受けボスのHPはみるみるうちに減少していく。

だがここで、ボスは反撃とばかりに先程の黒い球体をフィールドに放出した。

「その球体はソードスキルで破壊できます！一気に潰してください！」

「なら、私が行くー！」

ここでアスナが神速を発動し、ソードスキル《クリムゾンスマッシュ》を連続で発動した。フィールドに解き放たれた黒い球体を一斉にロックオンし、瞬く間に一掃する。

続けてバスは左腕を大きく後方に振りかぶると、勢いよく前に突き出した。ジェネシスに大ダメージを与えたあの一撃だ。

「私が行くー！」

今度はティアが迎撃態勢に出た。刀を左腰の鞘に収め、抜刀術の姿勢を取る。

そしてボスの大剣がティアに迫る直前に、ティアは刀を勢いよく抜刀した。

銀色の鋭い一閃とボスの赤黒い一撃が轟音と火花を散らして衝突する。しかしその直後、空中に銀色の刃が回転しながら舞い、そしてガラス片となって消滅した。

ボスの大剣は半ばから折れてしまっていた。ティアの抜刀術最上級スキル《飛閃一刀》がボスの一撃を上回ったのだ。

ボスのHPはすでに残り一本を切っていた。

「うちの旦那に傷をつけた借りは返させてもらった」

ティアは刀を左右に振るいながらそう言い放った。

それに対してボスは雄叫びを上げると共に再びあのブレスの発車姿勢を取った。

『主の名の下に命じます……跪きなさい！』

しかしジャンヌが旗を掲げてそう叫んだ瞬間、ボスはスタン状態に陥った。彼女が持つユニークスキル『聖女の加護』のスキル《神明採決》によるものだ。

「今が好機じゃ。行くぞファイリア」

「うん！行こう、ツクヨさん！」

ツクヨが漆黒の太刀を引き抜き、フィリアがソードブレイカーを持って飛びかかった。

フィリアの短剣の刃にエメラルドグリーンの光が宿り、そしてフィリアはそれを5回、疾風の如く振るった。

短剣の最上級スキル《エターナルサイクロン》だ。

「良い太刀筋じゃフィリア」

ツクヨがフィリアの攻撃を見てそう褒めると、しなやかな動作で太刀を上段に構えた。

「これはわっちも、少しばかり本気を出して見るかのう」

するとツクヨが持つ太刀の漆黒の刃が真紅の光を放ち始めた瞬間、それを勢いよく振り下ろす。

彼女が放った斬撃はボスの胴体を斬りさき、そのままボスの体を大きく後方へノックバツクさせた。

手裏剣術最上級スキル《零次元・表式》。

その一撃でボスのHPバーは一気にイエローゾーンに陥る。

「よし、最後決めるぞー！」

キリトが左右の剣に青白い光を纏わせて斬りかかる。

二刀流最上級スキル《ジ・イクリプス》

星の炎の如く斬撃がボスの胴体を切り刻んでいく。

それによつてついにHPバーがレッドに到達した。

「最後は頼むぞー！」

「おうよー！」

そう言つて飛び出したのはジェネシスだ。

大剣が赤黒い光を纏い、暗黒剣の最上級スキル《ジェネシス・ディストラクション》十五連撃が発動する。

超弩級の連撃がボスを切り刻み、一気にそのHPを消しとばした。耳をつんざく断末の叫びを上げて、ようやくボスはその身をガラス片に変えて消滅した。

「よし……何とか討伐できたな」

ジェネシスが一息ついて大剣を収める。

『《システムガーディアン》討伐を確認。最終シークエンスに移行しま

す』

「最終シークエンス？」

システムアナウンスの単語を呟くように言うフィリア。
その次の瞬間。

「っ！ぐっ……」

「なっ……キリト、君……！」

ティアとアスナが突如力が抜けたように倒れ込んだ。

「きゃあっ！」

『こ、これは……?!』

「くっ……！」

「なに?!」

続けてサクラ、ジャンヌ、ツクヨ、フィリアも倒れた。

「ぐ……くそっ……」

そしてキリトまでも倒れた。

全員共通しているのは、HPバーに麻痺毒のアイコンが表示されている事だ。

ジェネシスは近くにいたティアに駆け寄り彼女の体を支える。

「っ、久弥……あれ……！」

ティアが目を見開いて前方を指差す。

床から半径2メートルほどの漆黒のサークルが現れ、その中から何かがゆらりと立ち上がる。

「嘘だろ……?!」

キリトもまた、信じられないとばかりの顔でそれを見た。

そこに立っていたのは皆がよく知る人物に酷似、いや全く同じと
言ってよかった。

赤黒い装備に漆黒の大剣を背負い、赤い逆立った髪の毛の男。

そこにいるのは紛れもないジェネシスだった。

ただ、瞳が虚ろである点を除いて。

『ホロウエリア最終シークエンス、これより開始します』

無機質なシステムアナウンスが響くと共に、目の前の《ホロウ・ジェネシス》は漆黒の大剣を徐に引き抜いた。

四十四話 帰還

巨大ボス《オカルディオーン・ジ・イクリップス》を撃破した直後に彼らの目の前に現れた《ホロウ・ジェネシス》。

「チツ、ここにきてそう言う趣向かよ……最後はホロウの俺が相手をする、つてか」

ジェネシスが目の前に現れた自身を見て忌々しげに呟く。

対する《ホロウ・ジェネシス》は虚ろな瞳を向けるだけで何も言葉を発さない。

「こいつも……ジェネシスと全く同じ強さってことなのか？」

キリトが掠れた声で疑問を口にする。

「……………」

ホロウのジェネシスは無言で大剣を右肩に担ぐ。

「ハッ、上等じゃねえか。ホロウの俺だろうが何だろうが、構わずぶつた斬ってやるよ」

本物のジェネシスはホロウの彼に向けて不敵な笑みを浮かべながら大剣の切っ先を向けた。

「久弥……………」

「心配すんな、そこでじっと見てろ。ぜってえに俺が勝つき。」

何より、俺が俺の偽物に遅れをとるなんざあるわけもねえしな!!」
ティアが心配そうな表情で見上げたのに対し、ジェネシスは自信ありげに言った後、その場を飛び出した。

対するホロウ・ジェネシスも同じモーションで駆け出す。

お互いの大剣が全く同じスピード、角度で振り下ろされ、金属音と火花を散らしてぶつかり合った。

その後もジェネシス同士の激しい攻防が続く。一方が不意を突いた一撃を加えるが、もう一方がそれを読んでいたかのような確な対応を見せ、双方一步も譲らない戦いが行われた。

「チツ……（やり辛いなこりゃ。戦っててここまで手応えがない相手は初めてだぜ。俺のデータを参考にしてるってのは間違い無いらしい）」

ジエネシスは内心そう愚痴ると、今度は右上から振り下ろすという振りをして下から攻めると言うフェイクを織り交ぜた攻撃を繰り出す。が、これもまた読まれていたらしく、フェイクなど意に介さず右下から接近する刃を難なく受け止めた。

「不味いですね……」

硬直状態で床に伏せた状態で戦いを観ていたサクラが不意に呟く。「やはり、あのホロウ・ジエネシスは完全にお父さんの戦闘データをコピーしています。このままではホロウデータを倒す事は叶わないでしょう」

サクラは苦虫を噛み潰したような表情で言う。

事実、彼女の言う通りジエネシスは今も攻めあぐねている状態だ。

そしてこの状況は長続きしない。このまま同じ状況が続けば、不利になっていくのは本物のジエネシスの方だ。ここまでエリアボス、フロアボス戦と言う難関を十分な休息を取らずにこなしているのだ。このままでは疲労で本物のジエネシスが疲弊によって動かなくなる可能性もある。

「……っ」

麻痺によって行動が制限されているティアの表情に不安と焦りの色が現れ始めた。本当であれば今すぐにでも彼の救援に向かいたいのだが、システムによって動くことができないもどかしさに彼女は奥歯を噛み締めた。

しかし当のジエネシス本人の内心は非常に冷静だった。

焦りも不安も全くなく、不純物の全くない水のように彼の心は透き通っていた。

この時、彼の脳内には何故か目の前に一つの巨大な門があった。鍵穴は無く、その巨大さ故にこじ開ける事も叶わず、更に言えばその扉を開けたら何があるのかさえ分からない。その扉の正体は何なのかは不明だが、ジエネシスはその扉の事よりも、今日の前に立つ相手のことに集中する事にした。

目の前で自分と戦っているのは、紛い物とはいえ自分自身。

これに挑む事は即ち己の限界に挑むと同義である。

一撃一撃を打ち込むたびに、ジェネシスの集中力は徐々に高まっていき、剣を振るう速度が、一撃の重みが、技のキレが段々と増していく。

それまで両者一步も譲らない戦闘を繰り返して広げていたが、本物のジェネシスの方がやや押し始めた。全く通らなかつた攻撃もようやく入るようになり、ホロウ・ジェネシスの身体に切り傷ができる。

しかし次の瞬間、ホロウ・ジェネシスの大剣が赤黒い光を放ち始め、そしてその大剣の刃をジェネシスの首元目掛けて勢いよく振るった。暗黒剣ソードスキル《ヘイル・ストライク》。本物の彼と遜色ないキレと速度で放たれたその一撃は、ジェネシス本人に回避する暇も反撃の隙すらも与えなかつた。間違いなく、この一撃は免れられない。正に、ホロウ・ジェネシスが土壇場で見せた渾身の一撃のと言える。

観念してジェネシスは目を閉じてその刃を受ける。

「久弥あぁーっ!!!」

だがその時、ティアの叫びが彼の耳に届く。

それが引き金となつたのだろうか。……ジェネシスの脳内に聳え立っていた門が、重々しい音を立てながら開き始めた。

その先には、何も無い。今彼が立っている領域よりも更に深い深淵が広がっているのみ。

しかし彼は、迷わずにその領域へと足を踏み入れた。

—————

『ナーブギアとのシンクロ率・120%オーバー』

『既定数の脳波を感知。ナーブギアのリミッターを解除』

—————

その時、ジェネシスの戦いを観ていたティア達は信じ難い光景を目にする事になった。

確実に決まると思われたホロウ・ジェネシスの渾身の一撃。

ジェネシスの首はなす術もなく撥ねられると思われた次の瞬間、吹

き飛ばされたのはホロウ・ジェネシスの方だった。

一体何が起きたのか……普通のプレイヤーでは見抜けなかっただろう。しかしティア達の目には見えていた。

ジェネシスは首元に迫った刃を状態を伏せる事で回避し、そのまま右手に持った大剣をホロウ・ジェネシスの胴体に突き出して吹き飛ばしたのだ。ここまで約1秒程度。神速発動状態のアスナに迫る速度の動き。通常のジェネシスでは間違いない出せない一撃だ。

「何だったんだ……今のは……？」

キリトが震えた声で問いかける。

それに応えるかのように、サクラが戦慄した表情で呟く。

「信じられない……お父さん、貴方は……『ゾーン』に入ったと言うのですか……？」

『ゾーン』

余計な思考、感情が排除された極限の集中状態。

鍛錬に鍛錬を積んだ者だけが、その扉の前に立つ権利を有する。が、それでも開くのはごく稀の事である。

其は正に、選ばれた者のみが入ることのできる究極の領域。

そこに入ったものは、実戦ではほぼ不可能な100%全力のパフォーマンスを発揮することが出来る。

そこからは正に一方的な蹂躞劇だった。

ゾーン状態に突入したジェネシスは、リミッターが外れた事によるものなのか、瞳に真紅の光を灯しながらホロウ・ジェネシスを完封して見せた。

普段の彼では有り得ない速度で動き回ることによってホロウ・ジェネシスを翻弄していく。正面から背後に回って背中を斬りつけ、そのまま立て続けに正面に立って大剣を横一閃に振るい、ホロウの彼を吹き飛ばす。

「すごい……」

別人のようなジェネシスの動きを観て圧倒されたフィリアが思わずそう口にした。

本物のジェネシスの猛攻を受けたホロウ・ジェネシスは不利と見た

のか暗黒剣最上級スキル《ジェネシス・デイストラクション》の発動モーションを取る。

「やめとけ。偽物のオレじゃそんな技使ったところで勝てやしねえよ。」

こいつで終めえだ」

それに対して本物のジェネシスは淡々とした口調でそう告げると、大剣を正面に構える。

『——秘奥義開帳。』

其は深淵より出で、万物を滅する暗黒の刃——』

ジェネシスがそう詠唱した直後、彼の大剣を中心に漆黒のオーラが彼を包み込む。

暗黒の雲はやがて大剣の刃を包み込んで暴風を伴う渦となり、禍々しい赤黒い光を放った。

ジェネシスの全身もすっぽりと黒いオーラに包まれ、二つの赤い双眸が光る。それはさながら『悪魔』のようだった。

ホロウ・ジェネシスが大剣を右腰の下段辺りに構え、そして駆け出す。同時にジェネシスは黒い渦を纏った大剣を上段に構える。

『《^死アビス・^告デストピア^{深淵}》』

瞬間、ジェネシスは大剣を勢いよく真下に振り下ろした。

漆黒の竜巻が真っ直ぐにホロウ・ジェネシスを呑み込み、粉碎する。

あつという間にホロウ・ジェネシスのHPは尽き、その身をガラス片に変えて消滅した。

それを確認したジェネシスは「フウ」と一息つくど、大剣を左右に振って背中 of 鞆に収めた。戦闘が終わると同時に、先ほどまで発動していた『ゾーン』が解除され、彼の目に灯っていた赤い光が消えた。

「……………動ける！」

すると先ほどまで麻痺で倒れていたキリト達がゆつくりと起き上がる。

「おっ、やっと動けるようになったか」

「ああ、どうにかな……………ってそうじゃない！」

ジェネシス!!お前さっきのは何だよ?!

キリトはそう言ってジエネシスに勢いよく詰め寄った。

「おいおい落ち着けて、正直俺もよくわかんねえんだよ。気がついたらああなあってたつつか…」

ジエネシスは困惑した表情で答える。

「今のは《ゾーン》です。ナーブギアには一定の脳波を感知すると、動作処理のリミッターが外れるようになっていきます」

「ナーブギアにそんな機能まであったのか…：茅場のやつ、そんなことまで想定してたのかよ」

サクラの説明を受け、キリトは呆れたような口調で呟く。

「けど、そんなのって意識して入ることは出来ないよね」

「ああ。多分『入れたらラッキー』程度のもんだと思うぜ」

アスナの問いにジエネシスが首を縦に振って答える。

「何じゃ、つまらん。いつでも入れるならばこれ以上ないアドバンテージになると言うに」

「いや、あんなのいつでも入れたらそれこそチートだから」

面白くなさそうに言うツクヨに対し、キリトが宥めるように言う。

「まあ、何はともあれこれで倒すべき敵は全て倒したはずだ。早くコンソールに行こう」

ティアがそう促し、皆はボスを倒したことで現れた転移石に向かう。

—————

最下層・コンソール前

一行が転移した先は、何もなかった広い空間だった。

数メートル歩いたところで、目の前にシステムコンソールを見つけたサクラがそれを操作する。

『エラーが解除されました。エラーの種類はデータの重複。原因は—

—』

システムアナウンスがなると共に、ここでようやくフィリアとツクヨのカーソルがオレンジからグリーンに戻る。

「あ、グリーンになった!」

「ふむ、やはりこの方がしっくりくるな」

自分のカーソルの色が戻ったフィリアとツクヨはほつと息を吐いた。

「よし。二人のエラーも解除した事だし、帰ろうか」

「うん!……でもなんか、変な感じがするね。」

引越し前の家に帰る気分だよ」

「それは間違いねえな。ま、すぐに慣れるさ」

「そうそう。それに、あそこには頼れる仲間もいる。何も心配はいらない」

「そうか。それは楽しみじやのう」

「ああ、楽しみにしていてくれ。」

それじゃ戻ろうか!」

そして一行は管理区に戻ったのち、転移門からいよいよアークソフィアへと帰還していく。

く七十六層・アークソフィアく

中央の広場にある転移門が青白く光、中から複数の男女が現れる。

「ここが……」

「七十六層アークソフィア。紛れもないアインクラッドだ」

辺りをキョロキョロと見回すフィリア。

するとそこへ……

「ごーらー。なにキョロキョロしてんのよ」

後ろから仲間の声が響く。

「こつちですよ!フィリアさん、ツクヨさん!」

「よかった、無事に戻ってこられたんだね!」

「フィリアさん、ツクヨさん。お帰りなさい!」

「やつとこつちで会えたわね」

「お二人が無事でよかったです！」

「ええ！本当に良かった……!!」

リズベット、シリカ、サチ、リーファ、シノン、サツキとハツキが笑顔で駆け寄る。

「みなさーん！待ってましたよ!!」

「お二人が帰ってきてくれるのを心待ちにしていました！」

「わーい！二人とも無事でアタシもホツとしたよ!!」

さらに、レイ、ユイ、ストレアの3人も満面の笑みを浮かべながらやって来た。

「あ……えつと……」

「ほい、行ってこいよ」

戸惑った様子の二人の背中をジェネシスがそつと押し出す。

「うむ。……フィリア」

「うん……その……」

「ただいま」

『『『おかえり!!!』』』

四十五話 二人の幼馴染く前編く

七十六層・アークソフィア

フィリアとツクヨの二人がホロウエリアから帰還してから数日後。その日は皆攻略を休み、各々の休日を満喫していた。

そしてそれはジエネシスとティアも例外では無く、二人は揃ってアークソフィアの街を散策していた。

二人は他愛のない会話を交わしながら仲睦まじい雰囲気を漂わせながら街を歩いて行く。

「ねえ、次はどこに行こっか?」

「どこ行ってくたってな……もうこの街は大抵散策し終えただろ」

「そうかな? まだ行っていないお店とかいっぱいあると思うよ? 最近じゃ下の層から来たプレイヤーも増えてるし」

「ほんと物好きいな奴がいたもんだよな。こっちに來たらもう下の層には戻れねえつてのに」

「あはは……確かに」

ジエネシスの言葉を受けティアは苦笑する。

「なんじゃ主ら、こんなところにおったのか」

そこはやって來たのはツクヨ。左腕には何かが沢山詰まった紙袋を抱えている。

「見ての通り散歩中だ。そっちもか?」

「ああ。この街にも大分慣れて來てな。今日も歩き回っていたら、なかなかいい掘り出し物があった」

そう言つてツクヨは紙袋の中身を二人に見せた。

中に入っていたのは大量の饅頭やおかき、牡丹餅と言つた和菓子だった。

「なんだこれ? 和菓子の店なんざこの層にあつたか?」

「いつからあるのかは知らん。じゃがどれも中々いい味をしてる。気になるなら行つてみるといい……《えっちゃんの和菓子店》という名の店じゃ」

ツクヨは店の場所だけ教えたのちに皆と寝泊まりしている宿へと戻って行った。

ジェネシスとティアはツクヨが行ったという和菓子店に興味を持ち早速そこへ向かう。

「しっかし、西洋マシマシのこの世界で和菓子とはな。随分粋な奴がいるもんだぜ。ちよつと和菓子が食いたくなつてたからちよつと良かったわ」

と、甘いもの好きなジェネシスはかなり楽しみなようだ。

一方それに対してティアは顎に手を当てて何か考え込んでいる様子だ。

「《えつちちゃんの和菓子店》……………うーん……………まさかね……………」

「ん？どうしたんだよ」

ティアの様子を訝しんだジェネシスが彼女の顔を覗き込む。

「ちよつと現実での話になるんだけどね……………私の家族がよく和菓子を買に行つてた店があつて。」

それが《えつちちゃんの和菓子店》っていう今から行くところと全く同じ名前なのが気になって……………」

「はあ？んなも偶然に決まつてんだろ。えつちゃんなんざよく聞く名前だ」

ジェネシスはティアの疑念に取り合わずに先に進む。

ティアも黙つてついて行くが、その疑念は晴れなかった。

やがて二人は建物と建物の間のやや薄暗い路地裏を進んでいく。すると、微かな甘い匂いが鼻を突いた。

そして薄暗い路地裏の中で暖かなオレンジ色の光を放つ扉と窓が見えて来た。その壁には丸く小さな木の板で出来た看板があり、手書きの字で《えつちちゃんの和菓子店》と書かれていた。

「ここか…」

ジェネシスは早速木のドアを押し開けて中に入る。

『チリーン』という鈴の音と共に「いらっしやいませ〜」という気の抜けた少女の声が響く。

中はオレンジの暖かな光で照らされているが控えめで僅かに薄暗い。

彼らの目の前には現実にあるスイーツ店と同じくガラス張りのショーケースに美味しそうな和菓子が沢山並べられている。

そしてその奥に立つ店員と思われる人物は、薄めの金髪に頭部にはアホ毛が立っており、口元は赤いマフラーで覆われている。黒いメガネの奥の両目は気だるげに垂れている。

「……あの、御注文はありますか」

しばし沈黙があつた後に店員の少女がそう尋ねる。

「ああ、えつと……」

そんじや何かオススメのやつを

「えつちゃん!!!」

ゴベブハツ?!」

突如ティアが店員の少女を見るなり興奮した様子でジェネシスを押し除けて飛び出した。

「えつちゃん! えつちゃんだよね?! 私だよ私! 現実でそつちの店によく行ってた一条雫!!」

店員の《えつちゃん》と呼ばれた少女は一瞬ポカンとした様子だったが、数秒間ジツとティアの顔を見つめた後、

「……ああ、雫ちゃんですか。お久です」

と、気の抜けた口調でそう発した。

「やっぱり!! わあ〜懐かしい!」

お店の名前と和菓子を売ってるって聞いてもしかしたらと思っただよ〜!! でもまさかSAOに来てるなんて思わなかったな〜」

「私も雫ちゃんがいるなんて思ってませんでしたよー」

お互い運悪く巻き込まれちゃったみたいですねー」

お互い再会を喜び合い、笑顔で言葉を交わす。

「……よし、ちよつと待とうか」

ここで先程ティアに吹き飛ばされたジェネシスが戻り、二人の間に割って入った。

「え、なに？お前ら知り合い？」

「えつと、うん。この子は《江戸川 澄香》ちゃん。の家は現実世界でも和菓子店をやつてて、私の家族がよく買いに行つてたの」

「こつちでは《オルトリア》です。よろしくです」

そう言つてオルトリアはゆっくりと頭を下げた。

「それで、こつちは私の……」

か、彼氏で夫の《ジェネシス》……だよ／＼

ティアは顔を真っ赤にしながらジェネシスをオルトリアに紹介した。

「なんで今更そんな事で恥ずかしかつてんだよ……」

んま、そういう訳だからよろしく頼むぜ。

そんで、なんかおすすめのやつつてあんのか？」

「おすすめ、ですか……私の店の商品はどれも味には自信があるのでどれが一番かは決めづらいのですがね……」

ジェネシスの問いにオルトリアは悩ましげな表情でガラスケースに並ぶ商品を見渡した。

彼女のいう通り、ガラスケースの中に並ぶ和菓子はどれも非常に見た目の良い物ばかりであった。

大福や牡丹餅、羊羹、どら焼き、団子と言つたメジャーなものから、現実ではマイナーなものである金鰐や桜餅、中には地方の名産である赤福まであつた。

「確かに……こりやどれも旨そうだ」

甘いものが大好きなジェネシスも、目の前に並べられた沢山の和菓子を前に思わずそう言つた後に黙り込んでしまった。

すると横にいたティアが身を乗り出す。

「あ、じゃあさーあれつてあつたりしない？」

あの、現実のえつちゃんのお店でも一番のおススメだった《黄金のわらび餅》!!」

ティアは目を輝かせながらワクワクした様子で尋ねる。

するとオルトリアは「ああく……」と申し訳なさそうに目を伏せる。

「……あれ？ひよつとして無い感じ？」

オルトリアの様子を見て何かを察したティアが尋ねるが、彼女は首を横に振る。

「いえ、あるにはあるんですけど……今ちよつと在庫がなくてですね」

「えっ、じゃあここでも食べられるの?!あのわらび餅!!」

「え？あ、はい……まあ、材料があればいつでも作れますよ」

するとティアは「よっしやああ!!」といっになく高いテンションでガッツポーズをとる。

「……なあ、質問なんだが……」

そんなに美味しいの？そのわらび餅」

ティアの高いテンションに押され気味のジエネシスがおずおずと尋ねる。

「久弥……このわらび餅を食べたら他のわらび餅食べられなくなるよ？」

「よしわかった。」

そんじゃ取りに行くか、材料」

ティアの言葉を受け、ジエネシスは意を決してそう宣言した。

「……え、今から行くんですか？」

「うん！だって食べたいもん！えっちゃんのをらび餅!!」

「甘いもん好きな俺としちゃんとしても食いたいからなそれ」

二人はメニュー欄を開き、戦闘用の衣装に手早くチェンジし、各々の武器もセットして準備を整えた。

「あ、それなら私も行きます。私が行った方が材料も手に入れやすいでしょうし」

するとオルトリアもいそいそと店の奥に移動を始めた。

「えっ？でもえっちゃんのも店番が……」

「大丈夫です。こんな路地裏にありますから滅多にお客さんなんて来ませんし、どのみち早く材料を手に入れないといけなかったんです。問題ありませんよ」

「そりや助かるから良いんだが……お前戦えんのか？」

「ご心配には及びませんよ。雫さんたちには及ばないかもですけど、美味しい和菓子を作るために鍛えて来ましたので自信はあります。伊達に最前線まで来てません。」

そしてオルトリアは自分の店を手早く片づけ、戸締りをした後に一行は早速出かけた。

—————

彼らがやって来たのは76層の色とりどりの草木が生えるフィールド。

「ここに素材があるの？」

「はい。ここで取れるカタクリがあれば、それを粉状にして作れますので」

「要するに片栗粉じゃねえか。」

まあそりや良いけどよ……お前すげえ格好だな」

ジエネシスが気になったオルトリアの今の格好は、先ほどまでの大人しめな服装などではなく、赤黒いロングコートとなっている。頭にはフードを被せており、眼鏡やマフラーは外されている。下半身の衣服はミニスカートから黒い短めのホットパンツとなり、タイツ生地地の靴下を履き靴は厚底のブーツとなっており、先ほどまでとは印象が全く異なるものだった。

「これは私の戦闘服ですが……何か問題でも？」

「いや、別に問題があるってわけじゃ無いんだがよ……」

「私はすぐくかつこいいと思うよ？えっちゃん」

「どうも」

そんな会話をしていると、目の前に一体の巨大なカブトムシ型モンスターが出現した。

「まあ正直無視しても良いんだが……ちよつと腕試しと行くか」

「うん。油断しないようにね」

ジエネシスが背中から大剣を引き抜き、ティアは左腰から刀を抜く。

するとオルトリアは懐から紙袋を取り出し、中から真つ白な饅頭を一つ取り上げ口に運ぶ。

「つて待たんかいいいいいいい———!!!」

その時ジエネシスが鬼の形相でオルトリアに蹴りかかった。

オルトリアは間一髪のところまでそれをかわす。

「……何するんですか。貴重な和菓子を落とすところだったじゃないですか」

「知るかあボケエ!!これから戦闘つてときに何呑気にお菓子食ってんだ!!」

「何言ってるんですか。食べたい時に食べる、それがおやつタイムと言うものです」

怒鳴るジエネシスに対しオルトリアは悪びれる様子もなく淡々と答える。

「戦闘は私、あまり得意じゃないので」

「じゃあ何のために戦闘服に着替えたんだ!？」

俺が『腕試し』つて言ったの聞こえなかつたか?!

「腕試しも何も、あんなモンスタージエネシスさんと雫さんがいれば一瞬じゃないですか。私の出番無さそうですよね」

「俺はてめえの実力がどのくらいなのか測るつもりで『腕試し』つて言っただよ!いいからとつと武器構えろ!菓子食うのはその後だ!!」

「あ、あの久弥!取り込み中悪いけどいまそつちに……」

喚き立てるジエネシスに対しティアが警告を入れた束の間だった。

「ぐおおわあああー!!」

ジエネシスはカブトムシ型エネミーに突進され数メートル吹き飛ばされた。

「ほらあ!!てめえのせいでこいつの攻撃喰らっちゃっただろうが!!」

「えー、私のせいですか」

涙目でオルトリアを睨みながら叫ぶジエネシスに対し、首を傾げながら答えるオルトリア。

「あ、えっちゃん!!危ない!!」

するとカブトムシ型エネミーは今度はオルトリアを標的に変え、巨大な角を真っ直ぐにオルトリアに向けて勢いよく走り出し――

「えい」

直後、『シュバツ!!』という鋭い空切り音が響き、数秒後にカブトムシの角がカランと地面に転がった。

「危ないじゃないですか。私の和菓子に何かあったらどうするつもりなんですか」

オルトリアはカブトムシを見下ろしながらそう言った。

左腕は和菓子の入った紙袋を大事そうに抱え、反対側の右手には赤く光る剣が握られていた。その剣の柄は丸く黒い円筒状のもので、そこから伸びる刃は金属の物ではなく、まるでレーザー状のものに見えた。

そう、オルトリアが携える剣はまるで……

「…アイエエエエエエエー?!ビームサーベル?!ビームサーベルナンドェ?!」

SF映画に登場する光剣そのものだったのだ。

「名前は《クロスカリバー》っていうそうです。まあそれはどうでもいいですが……

とりあえず早くお菓子食べたいので倒しますね」

そしてオルトリアは菓子袋をストレージに収納した後、コートの内ポケットからもう一本同じ光剣を取り出し、それを右手の剣の反対側に取り付けて両刃刀の形状に合体させた。

この世界ではサツキしかない《双頭刃》スタイルだ。

「そおこ」

オルトリアは双頭刃のビーム状の刃を頭上から振り下ろし、そのまま横に切り払う。

そのまま持ち手を左右の手で器用に回転させ、風車のように素早い連撃を加える。

オルトリアから思わぬ猛攻を受けたカブトムシ型エネミーは羽を展開して空中へ逃避する。

「逃しません」

オルトリアは空中へ逃げたエネミーに向けて双頭刃を投げた。すると彼女の剣はブーメランのように回転しながらモンスターへと飛来し、羽を切り裂いて地面に突き落とす。

「ナイスだよえつちゃん！とどめは任せて！」

ティアは落下したエネミーの元へ駆け出し、そのまま刀を横一閃に斬り払った。その一撃を受け、カブトムシ型エネミーは消滅した。

「ふう…では糖分補給の時間です」

オルトリアはビーム刃を収納した後にグリップをポケットに収め、再び先程の菓子袋を取り出して食べ始めた。

「お疲れ様えつちゃん。凄かったじゃん！」

刀を納めたティアが笑顔でオルトリアに駆け寄る。

「雫ちゃんもお疲れ様でした。これ、よかつたらどうぞ」

オルトリアは袋の中から大福を一個取り出すと、それをティアに手渡した。

「えっ、いいの?! ありがとう〜！」

「……………ん〜!! おいひい!!」

ティアは受け取った大福を口に放り込むと、その美味しさについて顔が綻んだ。

「はあ……もう色々疲れたわ」

立ち上がったジエネシスは嘆息しながら呟いた。

—————

一行が再び歩き出してから数十分後、少し開けた林道に入った。
「あつ、ありました」

オルトリアが指差した先には、鮮やかなピンク色の花が咲いたカタクリが群生していた。

オルトリアはそれに向けて駆け出す。

「……待ってえっちゃん！止まって!!」

すると何かを察知したティアがオルトリアに叫ぶ。

その声を聞いたオルトリアは慌ててその場から飛び退くと、彼女が立っていた場所に一体のモンスターが轟音と共に着地した。

土煙が晴れるにつれ、その姿が露わになっていく。

それは蜘蛛型の巨大なエネミーだった。HPバーは3本あり、名前が《ラグナツク》と表示されている。

「マジか……:よりによってエリアボスがこんなところに来るとはな」

既に大剣を引き抜き抜き戦闘態勢に入っていたジエネシスが苦い顔で言った。

「でも、こいつを倒さないとわらび餅が作れません。なので倒します」

「うん。必ず勝とうね!」

オルトリアとティアも各々の武器を構えてそう掛け合った。

「うっし、んじや戦闘開始——」

「ちよつと待ったあぁー!!!」

ジエネシスが戦闘開始と言いかけた所で、彼らの背後から叫び声が響き、同時に黄色の眩い光を放つ極太のビーム光線が放たれ、ジエネシス達の頭上を通過した後にラグナツクに直撃、轟音を立てて吹き飛ばした。

一体何者の仕業なのか後ろを振り返って見てみると、そこには一人の少女が立っており、その隣にはほぼ彼女の等身大のサイズがある巨大な弓があった。

少女の艶のある黒髪はツーサイドアップの髪型になっており、瞳は真紅。装備の色は上が白生地に金のライン、したが黒という構成だが、水着とほぼ同じサイズしかなく彼女の素肌をこれでもかと晒している。が、当の本人は気にしていない様子。

「待たせたわね、この私が華麗に参上したのだわ!!」

少女はジエネシス達に対して得意げな顔で叫ぶ。

ジエネシスは一瞬なんだこいつはと感じたが、ふと彼女の顔を見て何かを思い出しはっとした顔になる。

「て、てめえは……………」

……………凜、か……………?」

四十六話 二人の幼馴染く後編く

エリアボスを吹き飛ばした弓使いの少女を見て、ジエネシス達は目を見開いた。

「ふふつ、久しぶりねあんた達。元気そうで何よりだわ」

ジエネシスに「凜」と呼ばれた少女は笑顔でそう言った。

「え……ほんとに凜ちゃんなの？え？でもなんで？」

「……まあ積もる話はあるけれど、先にあいつを倒しちゃいましょう」
凜が視線を向けた先には、先ほど彼女が攻撃を受けたラグナツクが起き上がって戦闘態勢に入っていた。

「……みてえだな。んじやサクツと倒しちゃおうか」

ジエネシス達も武器を構えて戦闘態勢をとり、そして飛び出した。
ラグナツクは前足を振り上げて3人を吹き飛ばそうと振り回すが、
ティアとジエネシスが各々の剣でそれを弾く。

するとラグナツクは口部から蜘蛛の糸をジエネシス達に向け射出した。

ジエネシスとティアは再び剣で応戦するが、その糸は粘着性があり刃に付着した。

「げっー！」

「ヤバっ?!」

ラグナツクは二人の剣を捕らえるとそのまま身体ごと横に動かして二人を投げ飛ばした。

吹き飛ばされた衝撃で二人は地面に倒れ込み、ラグナツクはそのまま二人に襲い掛かった。

「やらせるかっての!!」

凜がそう叫ぶと赤い鉱石遠取り出すと空中に放る。

すると鉱石は空中で弾け、代わりに巨大弓に赤い光を帯びた矢が装填される。

そして凜は腕を真っ直ぐに前に伸ばし、人差し指をラグナツクの方に向ける。

「これでも食らいなさい!!」

その直後凜の隣の弓から赤い矢が光線の如く放たれ、それは真つ直ぐラグナツクの方へ飛翔し、直撃する。

命中した瞬間、ラグナツクの身体は赤い炎に包まれた。

「某大人気ゲームで虫が炎に弱いのは常識よね♪」

凜は得意げな笑みでそう言った。

彼女のいう通り先ほどのダメージはラグナツクにとつて大きかったのか、3本のHPバーのうち一本が既に消し飛んでいた。

「おいおい、一二発でこれかよ……」

凜の弓の威力に思わず苦笑するジエネシス。

同じ遠距離武器を使うシノンが精密射撃のスナイパーライフル、ハヅキが速写性に優れたマシンガンとするなら、凜の弓は一発の威力が重いロケットランチャーと言えるだろう。

「お二人とも、大丈夫ですか？」

すると二人の元へオルトリアがトテトテと駆け寄り、光剣で糸を切り裂いた。

「ありがとうえつちゃん。助かったよ」

「いえいえ。それより、実体剣のお二人ではあの蜘蛛は相性が悪そうですね。」

私が正面からやるのでお二人は側面からお願いします」

オルトリアはそう言うてもう一つの光剣を展開し、左右の手に装備すると巨大蜘蛛に斬りかかった。

蜘蛛は先ほどと同じく粘着性のある糸を吐き出すが、実体のないレーザー状の刃で容易く弾かれ、切り裂かれていく。

オルトリアが正面から蜘蛛と戦い、引きつけることで側面に隙が生じ、ジエネシスとティアの二人はそこを突いて容赦なくソードスキルを叩き込む。

3人の攻撃を受け、ボスのHPは最後の一本まで削られた。

するとボスは蜘蛛の糸を、そのエリアの端に生えている木の幹に取り付けるとそこへ向けて飛び上がった。

「逃しはしないわー」

そこへ凜が、今度は紫の鉱石を取り出すとそれを空中に放って弾

「雫ちゃんに同じくです」

「ふふっ。でも会えて嬉しいわ、雫、澄香」

イシユタル、ティア、オルトリアはそう言葉を交わすとハイタッチをし合った。

「さて、それじゃ目的を果たしちやおつか」

「はい。ここのカタクリを取ればアレが作れますし」

そう言ってティアとオルトリアは奥に生えたカタクリの草の方へと向かった。

「ん？あんた達あのボスと戦いに来たんじゃないの？」

「あー違う違う。あのカタクリの草をとってオルトリアの店のわらび餅を作るんだと」

状況が飲み込めなかったイシユタルがジエネシスに尋ねる。

「わらび餅つてもしかして……名物のやつ？」

「らしいぜ。すげえ美味らしいな」

するとイシユタルはその場でガッツポーズをとった。

「つしゃあ！生きててよかったあああ!!」

「……まじでそんなにうまいのか」

イシユタルのテンションの変わりようにわらび餅に対する期待がかなり高まったジエネシスだった。

—————

目当てのカタクリを採集し、店に戻った一行。

「では、早速作らせていただきますね」

先ずは先ほど取ったカタクリをすりつぶして片栗粉を作り、そのまま水と砂糖で混ぜ合わせる。

そして弱火く中火で熱を加えつつ木べらなどで混ぜていき、固まってきたら火を止めて1分ほど混ぜ続けたら混ぜるのをやめ、氷水で冷

やす。

黒蜜は黒糖と水を溶かして鍋に入れて混ぜ合わせ、しつとりと溶けてきたら火を止めて冷やす。

氷水に入れたわらび餅を一口サイズに分け、黒蜜ときな粉をかければ完成。

「出来ましたよ〜」

完成したわらび餅を皿に盛り、奥にあるイートインスペースで待つ三人の元へ持っていく。

「わー!」

「待つてました〜!」

ティアとイシュタルが手を叩いてはしやぎながら言った。

「うお……確かに美味そうだ」

オルトリアのわらび餅は、見た目からして次元が違うものだった。餅は綺麗に透き通っており、尚且つ自らシルバーの輝きを放っている。程よく弾力があり、テーブルに置かれた瞬間『プルン』とわずかに震えた。その上からかけられたきな粉もまた黄金に輝き、黒蜜は全ての光を吸い込むような深い黒で、それでいて艶があつてトロリとしていた。

まさに《黄金のわらび餅》の名にふさわしい一品と言えた。

「じゃあ、食べましょうか」

「ええ、この瞬間を待ちに待つてたんだから!」

「では、皆さん……」

「!」
「!」
「!」

そして皆はわらび餅を一つ爪楊枝に刺すと、同時に口内へ運んだ。

「んふう〜／＼／＼」

「はあぁ〜!これよこれ!この食感!!堪んないわ〜!!」

早速口に含んだティアとイシュタルが顔を蕩けさせた。

もっちりとして、それでいてふんわりとした不思議な食感。きな粉独特の風味に黒蜜の味が交わって絶妙な甘みを編み出す。

「これは……うめえな」

「でしよう?!もう最高に美味しいでしよう?!」

わらび餅の味に舌鼓を打つジエネシスにティアが興奮気味に食いつく。

「正直この味の再現には苦労しました……これを作るのには料理スキルのスキルマは大前提でしたが、素材を集めるためには高いレベルのモンスターを狩る必要があつて……その為には自身も強くならないと行けなかつたので」

「このわらび餅を作るためだけにレベル上げしてたの？」

「はあ、全くあんたらしいと言えばあんたらしいけど」

「オルトリアの独白に少々呆れた顔になるイシユタル。」

「そういう凜は何で今になって最前線に来たんだ？」

「確かに。七十六層の異変はもうアインクラッド中に知れ渡つてると思うんだけど……」

「ジエネシスとティアがイシユタルに対して疑問を投げかけた。」

「それはね……第一層であんた達を見かけたからよ」

「大一層で……？」

「……あー、あの時か」

「ジエネシスがいうあの時とは、以前ジエネシス達がレイとユイを保護した際に訪れた時。」

「あの時のあんた達の強さを見て、私もいつか追いつきたいって思ったのよ。そこからは気合でやって見せたわ」

「遠くを見つめながらイシユタルはそう振り返った。」

「そういうことだったんだ……でも、凜ちゃんとかえっちゃんがいるなら心強いね！」

「ん？……まあ、攻略は捗るようにはなるだろうな」

「私はお菓子が食べられるならそれでいいです」

「あんたはお菓子ばっかね……」

その後、四人はオルトリアのわらび餅の味を満喫した。

「はあく、美味しかったわ。ありがとうね、えっちゃん」

「んじや、ご馳走になるわ久弥」

「は？俺が払うの？」

「ごめんね久弥。私今ちよつと持つてるのが少なくて……」

ティアが申し訳なきように言うと、ジエネシスは「はあく」とため息を吐き

「しようがねえなあ。んじゃ今回は俺が持つてやんよ」

「やったあ♪久弥大好き」

「あんた達現実の時から変わんないわね」

嬉しそうな笑みでジエネシスに抱きつくティアを生暖かい目で見
るイシユタル。

「では……お会計はこちらです」

そう言つてオルトリアは金額を提示する。

「おおお………中々な値段だなこりゃ」

「まあ、高級和菓子を取り揃えている当店でも特に高いやつですから」

「チツ、痛い出費だが………わらび餅の味は本物だったしな」

長い顔をしつつも、ジエネシスはトレード画面で代金を支払った。
「毎度です。また来てくださいいね」

オルトリアは代金を受け取るとペコリと頭を下げた。

「ところで、凜ちゃんはこの層で宿とかとつてるの？」

「いいえ、私はまだここに来たばかりだからとつてないわ」

イシユタルは首を横に振つて答えた。

「なら、凜ちゃん達も私たちと一緒に来ない？」

「つかここに来たんなら結局俺たちと一緒に行動することになるんだ
しな。あいつらに自己紹介だけでも済ませとこうぜ」

「ふえ？いや、いいですけど………まだ心の準備といたしますか」

「うるせえ！行こーう!!」

「ちよ、私はチョツパーじゃないですう〜！」

戸惑い気味だったオルトリアをジエネシスが軽快に引っ張つてい
く。

「……と言うことで、だ」

「今日からお世話になるわ。イシユタルよ、よろしく」

「お、オルトリアです……普段は和菓子店やってるのでよかったですら来てください……」

場所は変わって普段ジエネシス達が寝泊まりしている宿。

食堂には全員が集まっており、彼らの前にジエネシス、ティアとイシユタル、オルトリアの四人が立つ。

「こんな時に七十六層に来るやつがいたんだな」

「確かに私も驚いたかも……でも、一層賑やかになりそうだね」

キリトとアスナは新たな仲間の加入に嬉しそうだった。

「うん、まあそれはいいのよ。でもね……」

「多分皆さんが同じこと思ってると思いますけど……」

するとリスベットとシリカが苦笑いを浮かべながらイシユタルを見る。

「あんたその格好なに?!露出多すぎじゃない?!」

「そうですよ!!破廉恥です!!」

直後、二人はイシユタルを指差しながらそう叫んだ。

「確かに、その格好は流石に私もどうかと思うわ……」

「水着とほぼ変わらないですよね……」

シノンとリーファも呆れた表情で呟く。

「なによ、この装備は耐久値や動きやすさ、見た目を兼ね備えた一級品なのよ。まあ、確かにあなた達に比べたらちよつと肌が出るかもしれないけど、私みたいな美ボディでなければ着こなせないわね。」

ふふん、貴方達全員見惚れるといいわ」

「何この人プラス思考すぎる」

悪びれる様子もなく胸を張って言ったイシユタルを見て呆気にとられるサチ。

「弓使いなのか……ライバルが増えたね、ハツキ」

「む……絶対負けないもん」

悪戯な笑みを浮かべながら隣の妹に話しかけるサツキと、同じ弓使いとして対抗心を燃やし頬を膨らませるハツキ。

「あの……これ、お近づきの品として持ってきたんですけど……良ければ食べてください」

そう言ってオルトリアはストレージから大きな紙袋を取り出し、テーブルに置く。

中に入っていたのは、和菓子の詰め合わせだ。

「すごっ！これ全部オルトリアちゃんの手作りなの?!」

「そうですよ。素材集めから全て私がやっています」

「この世界に和菓子は無いからな。だからこのためにスキルを上げてたんだとよ」

ジェネシスの説明を聞きつつ、皆はテーブルに広げられた和菓子の山に一斉に手を伸ばす。

「う、美味しい……!」

「本当、美味しい!!」

「現実で食べたものより格段に美味しい……!」

和菓子を食べた皆はその味に舌鼓を打つ。

「ちよつと値段は張るがな……」

一度その店を利用したことのあるツクヨは苦笑いをしつつ饅頭を頬張った。

「今回は大サービスで皆さんにタダであげます。今後は是非ご贔屓の程……」

「もちろんだ!こんな美味しい和菓子がゲームで食べられるなんて思わなかったからな。是非行かせてもらおうよ!」

「……ありがとうございます……/ /」

仲間達から絶賛を受け嬉しそうに頬を赤らめるオルトリア。

「ほう?騒がしいと思ったら見慣れた顔があるな」

するとジェネシス達の背後から渋い男性の声が響く。

「あ、お父さん」

帰ってきたのはティアの父、ミツザネ。

「……え?ええ?!お、おじさん?!なんで?!」

「あ、どうもです」

彼の顔を見てイシユタルは驚嘆し、オルトリアはペコリと会釈をし

た。

「よお澄香。こつちでも和菓子店をやつてるとは驚いたぜ。また美味しい和菓子をお待ちしてくれよな」

「はい、ご来店をお待ちしています」

「んで、凜」

「は……はい……その、現実ではいつもお世話に」

「おいしい、その事は気にすんなといつも言ってるだろう。」

ま、こつちでも雫と仲良くしてやってくれ」

「はい！その、よろしくお願いします」

ミツザネはオルトリアとイシユタルの頭を撫でながら優しくなみと共にそう告げた。

その夜は新たな仲間を加えて夜遅くまで談笑が繰り広げられた。

四十七話 みんなでゲーム

その日、最前線での攻略を終えて宿に戻った攻略組のメンバー。彼らが戻ると、食堂にはシリカとリズベット、シノンとリーファ、レイとユイの6人がカードゲームを楽しんでいた。

「はい、いっちょ上がり!」

「あつ! あーん! またリズさんに負けましたあ〜!」

「シリカ、全然色が出なかったものね……」

リズベットが一枚のカードをテーブルに置いて勝ち誇ったようにガツポーズをとり、シリカはそれを見て悔しげな顔を、シノンがシリカに対し憐むような表情を浮かべた。

「よう、何やってんだ?」

ジェネシスが気になって彼女達のテーブルを覗き込む。

「あ、おかえりなさいジェネシスさん。今ですね……」

『ウノ』と言うカードゲームをやっていました!」

ジェネシスの問いにレイが楽しそうに答える。

「ウノ?へえ、SAOの中にあっただんだな」

「懐かしい〜!リアルじゃ学校の休み時間とかによくやったよね!」

キリトとアスナがウノと言うワードに反応する。

「そうそう、ドロー地獄に叩き落としたりね」

イシユタルが便乗してうんうんと頷く。

「そう!というか聞いてください!この人たちさつき本当酷かったんですよ!!」

するとシリカがリズベット達を指差して涙ながらに訴え始める。何があったのか聞いただと、どうやらシリカは一度自分以外の全員からドローカードを食らわされたらしいのだ。

「そりゃ災難だったな」

「本当ですよ!!うわあ〜ん!あんまりですう!」

「まあ、それもまたウノの醍醐味ではあるけれどな……」

ジェネシスとティアはシリカに対し心底同情した。

「パパ達も一緒にどうですか?」

「ん？あー……うし、やるか」

レイが誘うと、ジエネシスはそれに乗りレイの隣に座る。

「あ、じゃあ私もやる」

「なら私もやるのかわ」

すると彼の左隣にティアが、レイの隣にイシュタルが座る。

「あ、なら俺も参加するよ」

「じゃあ私も！」

キリトとアスナがユイを挟むように座る。

「じゃあアタシもく!!」

「では、私も参加させていただきますね」

そしてストレアがキリトの隣に、サクラがティアとシノンの間に座る。

「僕らも参加しようか」

「うん、一緒にやろう！」

サツキがジエネシスの向かい側に、その隣にハツキが座る。

「わ、私もやる！」

「じゃあ私も参加しまーす」

サチがサツキの隣に、オルトリアがイシュタルの隣に座る。

「ふむ……折角じゃ、わっちも行くかうかのう」

「勿論私も行くよ!!」

そしてツクヨがストレアの隣に、それに並んでフィリアが座る。残る席はあと一つ。ただ一人ジャンヌが立ち尽くしていた。

「ジャンヌはどうする？」

アスナが彼女に対して問いかけると、

『あ、あの……私も是非やりたいのですが、その………』

ルールを教えていただけではないでしょうか？』

申し訳なさそうにジャンヌは答えた。

「ああ、そうか。ジャンヌは知らないよな、すまん。

ルールは説明するからとりあえず座ってくれ」

ジエネシスがそう促し、ジャンヌは頷いて空いた席に座る。

「……よし、んじゃあルールの確認と行くか」

↳《ウノのルール》↳

ウノは全四種の色が付いたカードが108枚あり、赤・青・黄・緑の計4種の色が付いたカードと色指定の無い特殊カードがある。

色の付いたカードは計100枚。0〜9の数字が書かれたカードと、それ以外の記号が書かれたカードがある。0が書かれたカードが各色1枚、その他の数字は2枚ずつでは計76枚あり、記号カードは3種類あり各色2枚ずつの計24枚で構成されている。

色指定のない特殊カードは2種類あり、4枚ずつある。

今回は人数が多いため、これを2セット使用して計216枚のカードを使う。

次にゲームの進行について。まずディーラーがプレイヤーに各7枚ずつ配布し、山札から一枚引いてそれを場札とする。

場札に出た色若しくは同じ数字のカードを場に捨てることができ。同じ数字を持っている場合は重ねて捨ててもOK。

同じ数字若しくは色が無い場合、山札から一枚を引き、条件を満たすカードが出たならその場で出すことができる。出なければそのターンは終了。

ゲームが進行し、最後の1枚になったプレイヤーは『ウノ』と宣言しなければならぬ。この宣言を行わなかった場合、ペナルティとして山札から2枚を引く。

最後に記号カード及び特殊カードについて。

種類は計3種。ドローツリー・リバース・スキップ。ドローツリーは次の番のプレイヤーに2枚のカードを引かせるカード。

ドローツリーの効果を受けたプレイヤーは無条件で山札から2枚を引き、そのターンは終了となる。これは後述のワイルドドローフォーも同じ。

従って、ドローツリー及びドローフォーカードの重ねがけは出来ない。

次にリバース。これはこのカードを出したプレイヤーから順番を逆にするカード。ただし最後の二人の時にこのカードを出した場合、

スキップと同様の効果となる。

スキップは次の番のプレイヤーを飛ばして休みにさせるカード。
続いて特殊カード。

ワイルドカードは場札の色・数字やタイミングに関係なく、いつでも出せるカード。出したプレイヤーは次から出す色を指定できる。

最後にワイルドドロフオー。場札に関係なく、自分の手札に場札と同じ色・数字のカードが無い場合に出すことが出来る。次の色を指定できるのに加え、次のプレイヤーにカードを4枚引かせることが出来る。

ただしこれにはチャレンジというシステムがある。ドロフオーを受けたプレイヤーが、そのカードを出したプレイヤーの手札に場札と同じ色や数字のカードが本当に無いのかチェック出来る制度。成功すればドロフオーを出したプレイヤーに4枚を引かせ、ドロフオーも戻す。しかし失敗した場合、ペナルティとして4枚に加え2枚の計6枚を引かなければなくなる。チャレンジするタイミングは任意である。

—————

「……さて、ここまでで質問のある奴はいるか？」

ここまでルール説明を終えたジエネシスが周りを見渡して問いかける。

「ドロフオーって重ねがけNGだったんですね……」

先ほどドロフオーカードの地獄を見たシリカは安堵の表情を浮かべた。

「ああ、だから安心してプレイ出来るぜシリカ。」

ジャンヌ、行けそうか？」

『はい。あとはやりながら覚えます！』

ジャンヌの答えを聞いたジエネシスは首を縦に振ると、山札を取って皆に7枚ずつ配っていく。

ジエネシスがディーラーなので、順番はジエネシス↓ティア↓レイ↓サクラ↓シンオン↓ストレア↓キリト↓ユイ↓アスナ↓サチ↓サツキ↓ハツキ↓リーファ↓リズベット↓シリカ↓ツクヨ↓フィリア↓ジャンヌ↓オルトリア↓イシユタルの順だ。

「……よし、んじゃ行くぜ」

配り終えたジェネシスが山札から1枚のカードを引き、テーブルの中央に表にして置く。

書かれているのは、赤の6。

まずジェネシスがそれに従って赤の1を出す。続けてティアが赤の4を、レイが赤の0を出し、サクラが赤の3を出した。

続けてシノンが黄色の3を出す。

「えー黄色く?! あーん無いよー」

ストレアは黄色のカード何無いようなので、山札から1枚引く。が、それも黄色のカードではなかったようなのでそのターンは終了した。

続けてキリトの番。彼の手札には黄色のドローツーカーカードがあるが、ここで問題が生ずる。

「ぐっ……出来ない……ユイにドローツーカーカードを喰らわせるなんて絶対に出来ない!」

愛する愛娘に対してそのようなペナルティを課するのは非常に憚られた。

そこでキリトは運良く手にしていたワイルドカードを場に出した。

「ユイが持つてそうなカードの色は……」青だ!」

「わーい! 流石ですパパ!!」

どうやら彼の読みが当たったようで、ユイは嬉しそうに場に青の2を出した。

続けてアスナ。

「サチちゃん……ごめんね!」

そう言っ出て出したのは青のスキップ。

「えっ、ああ……飛ばされた……」

最初の出番を失ったサチは肩を落とした。

「あつ、僕の番ですね……よし、これで行こう」

続くサツキが出したのは青の7。その次のハツキは青の5を出す。

「青のカードは無いなく……あ、でもこれがあるや」

続いてリーファは青のカードが無かったので、代わりに緑の5を出

す。

その次はリズベットの番だが……

「……………」

リズベットは黙って隣のシリカを見遣る。

「?どうしたんですか、リズさん」

するとリズベットは手札から1枚のカードを選び取り、

「シリカ……ごめんっ!!」

出したカードは……

ワイルドドローフォー。

「ああああー!!そんな、いきなりひどいですよお!!」

「うわ、初っ端からやりやがった」

リズベットの仕打ちにシリカは泣き叫んだ。

そしてシリカは泣く泣く山札から4枚のカードを抜く。

「チャレンジは使わなくていいのか?」

「……今回はやめておきます」

シリカはチャレンジを使用しなかったのでゲームが再開される。

次はツクヨ。リズベットがワイルドドローフォーを使用して次の色を黄に指定したので、彼女は黄色の9をだす。続いてフィリアは黄色の4をだし、ジャンヌの番となった。

彼女の手札にある黄色のカードはドローツウのみ。

『では……これを』

ジャンヌは思い切ってそのカードを場に出した。

「……………」

オルトリアは何も言葉を発さずただ呆然と場に出されたドローツウカードを見つめていた。

『あ……あのっ、ごめんなさい!』

「いえ気にしないでください私まつたく気にしてませんよええ最初からいきなりドローツウ喰らわされてうわ最悪とかこれっぽっちも思っけませんからそんなことより和菓子ください」

オルトリアの反応を見て申し訳なく感じたジャンヌは慌てて謝罪するが、オルトリアは非常に小さな声で早口にそう返した。

「謝っちゃダメよジャンヌ、これはそう言うゲームなんだから気にしなくてもいいの」

そんなジャンヌに対してイシュタルがそう制した。

そして自身の番になり、手札をじつと見つめたのちにニヤリと口角を上げ、

「……んじや、これでも食らいなさいー!」

そして場に出したのは、ワイルドドローフオーカード。

「チャレエエエエエエエエエエ!!」

その瞬間ジエネシスは勢いよく立ち上がりチャレンジを宣告した。

「はあっ?!ちよ、なんでよ?!」

「んなもん何となくだ。っーわけで手札見せやがれ」

「い、いやよ!手札なんて見せられるわけないじゃ無い!」

イシュタルは自身の手札を必死に隠す。

「ランプじゃあるめえし手札なんざ見られたって問題はねえだろ。

それに見んのは俺だけだ、大人しく見せろ」

「いーやーでーすー!断固拒否するのだわ!!」

尚も抵抗するイシュタルだったが、ここで思わぬ伏兵が現れた。

「凜ちゃん、ここは観念しようね」

ティアが立ち上がってイシュタルを確保したのだ。

オルトリアも便乗して彼女の動きを封じる。

「ナイスだ、んじや手札を拝見と……」

ジエネシスはイシュタルの手札を見る。彼女の持つカードは、赤の7と4、青の2、緑の3、ワイルドカードが1枚、そして黄の1があった。

よって、ジエネシスのチャレンジは成功となった。

「なあああんでよおおおおー!!」

「ハッW」

イシュタルはペナルティとして6枚引かされることとなり、泣き叫ぶ彼女をジエネシスは嘲笑った。

そしてここから2週目に入る――

その後暫くは順調にゲームは進んだ。皆それぞれカードを出していき、あつという間に手札のカードは減っていく。

しかしここで問題が起きた。

ゲームに参加しているのは総勢20名。カードの枚数も膨大となっている。するとどうなるか。

手札の枚数が少なくなる程、場札のカードと条件が揃うカードが手札に無いのだ。

皆最後の2枚や中には1枚だけというところに来て中々手札が無くならないという事態に陥っていたのだ。

今場には赤の8が出ている。

ジェネシスの手札は黄色の4。

「だああああークソっ!!」

ジェネシスは悔しさのあまり頭を抱えて叫んだ。

仕方なく山札から1枚引くも、残念ながら出たのは青の3。

続くティアは2枚残った手札から赤の1を出す。

「ウノ」

手札が残り1枚となったのでそう宣言しターンを終えた。

次はレイの番。

「あ、私もウノです」

レイは2枚の手札から赤の7を出しターンを終了した。

続くサクラの番。

「では……皆さん、ごめんなさいね」

そう言ってサクラは手にしていた2枚のカードを一度に出す。それは赤の5と黄の5だった。

「お先でーす!!」

「うわああああ!!!マジか」

「サクラは陽気に立ち上がりながらそう叫んだ。
続くストレアの番。」

「あ、黄色?! やったー!! アタシもこれでおしまい♪」
すると彼女は手札に残っていた一枚のカードを置いた。黄色の3
だった。

そしてシノンの番。

「ありがとうね、サクラ」

彼女の手札は1枚。それを場にポンと置いた。黄色の8だった。

これで一気に3人が抜けた。続いてキリトの番。

「(くそっ……)」

彼の手札は黄色のドローツーと赤の7。キリトは未だドローツー
カードを出せないでいた。

そこで彼は山札から1枚引く。すると出て来たのは、黄色のリバー
スカード。

「(おのれ神!! 俺にユイを虐めろと言うのかっ!!)」

愛娘に対して何かしらのペナルティを課すカードしか無く、彼は運
命の神に対してそう叫んだ。

仕方なく彼はそのターンを終える。

次はユイの番。

「ふええ……黄色のカードは無いですよぉ」

ユイは悔しそうに言うのと、山札から1枚引く。するとユイの表情は
パアツと明るくなる。

「やったー!! 揃いましたよ!!」

はしやぎながらユイは手札にあった黄色の7と先ほど引いた緑の
7を出し、ゲームを終了した。

「うおっ、すごいじゃないかユイ!」

「本当!! ユイちゃんおめでどう!!」

「えへへ、ありがとうございませす! パパもママも頑張ってください!」

「うん! でも……私もこれで終わりなんだよね」

するとアスナは残っていた1枚のカードを出した。それは緑の1
だった。

「わあ！ママも上がりなんですわね！」

「うん！ユイちゃんと一緒にだよ。あとはキリトくんだけだね！」

「はは…これは負けられないな」

そしてキリトは手札に視線を移す。

「（…これで心置きなくこのカードを出せるな）」

続いてサチの番。彼女の手札は残り1枚。

「緑なら…これで終わり!!」

彼女はその1枚を場に出す。そのカードは緑の6。これで彼女もゲームを終了した。

続くサツキも、残りの1枚が緑の3だったのでそれで上がり。ハツキも残りが2枚だったが、緑の4と青の4だったのでそれで終了。

怒涛の上がりラッシュが続く中、続くリーファは青の5を出して残り1枚となり、リズベットは残り1枚だった青の8を出しゲームから降りた。

シリカは途中リズベットから4枚引かされていたが、運良く数字が何枚か被っているものがあつたので追いつき、残り2枚の手札のうち青の3を出してウノとなった。

続いてツクヨの番。彼女は残り1枚だったが青のカードでは無かったため山札から1枚引く。しかしそれも揃わずターン終了。次のフリーアは黄色の3を出してゲームを終了した。

次の番はジャンヌ。初めてのウノであった彼女だが、即座に要領を掴むと順調にゲームを進めていき、残るカードは1枚となっていた。

しかしここで問題が起きた。

「あの…ジャンヌさんって“ウノ”と言ってなくないですか？」

と、オルトリアが指摘すると、皆はハツとした顔になる。

そう、彼女は最後の1枚となった場合の“ウノ”と言う宣言を忘れていたのだ。

『あつ、あうう〜』

ジャンヌは悔しそうに頭を抱える。本来ならペナルティとしてカードを2枚引かなければならないのだが…

「まあ、ジャンヌは今回が初めてなんだし免除でいいんじゃないかね？」

そんな彼女を見かねたジェネシスが皆にそう提案する。

「そうだな。彼女はこれが初めてのウノだからこれは免除でもいいと思う」

キリトもそれに便乗して提案する。

「じゃあ、今回は特別だからペナルティはナシでいいよ、ジャンヌ」

『あ…ありがとうございます！』

そしてジャンヌは最後の1枚が運良く黄色の5であったのでこれを出して終了した。

「次は気をつけなさいよ」

『はい！ありがとうございます！』

リズベツトがジャンヌに揶揄うように言った。

続いてオルトリアの番。彼女の手札は残り1枚。

運良く黄色のカードであったためそれを出して終了。

「ちよ、ここに来てみんな上がり出すとか何なのよお〜！」

このターンで一気に半数以上がゲームから上がり、イシユタルは悔しげに叫ぶ。彼女の手札は残り2枚。しかしどちらも黄色のカードでは無かった為仕方なく彼女は山札から1枚引く。

「あーん！これも違うんですけど〜!!」

しかしどうやらそれも黄色のカードでは無かった為そのターンは終了した。

そして一周回って次はジェネシスのターン。

黄色のカードがあるためジェネシスはそのカードを出す。

「これでウノだな」

次はティア。場にあるのは黄色の4。

「…私はこれで上がりだな」

ティアは優雅な仕草で場に最後の1枚である青の4を出し、ゲームから降りた。

「わーい！青なら私もあります!!」

続くレイも最後の1枚を出してゲームを終了した。

「マジか、レイも上がりなのか」

「はい！あとはパパだけですわね！」

「だな。負けねえからしつかり見てろよ」

「はーい！頑張ってくださいね！」

レイとそう交わしたあと、今度はティアが彼の耳元に顔を寄せ、
「頑張ってるね、応援してるから」

とささやいた後すぐさま離れた。

「……頑張ってるんならそうしてるんだけどな。」

ま、何にしても負けらんねえなこりゃ」

愛する彼女から応援を受け、ジエネシスは気持ちを新たにゲームに
向き直る。

続いてキリトの番。彼の手持ちにある青のカードは、先ほど引いた
リバースカード。

「よし、これだ」

そして彼は迷わずそのカードを出した。

「おっと、リバースカードか……地、青のカードはねえんだよな」

順番が逆転したことで再び出番が回って来たジエネシスだったが、
運悪く青のカードは無いため山札から1枚引く。

すると、出て来たのはワイルドカード。

「……よし」

ジエネシスはそのカードを場に出した。

ワイルドカードは任意に色を指定できる。彼が指定した色は……

「……赤だ」

「赤あぁ〜?!それも無いんですけどお!!」

どうやら次の番のイシユタルは赤のカードが無かったため山札か
ら1枚引くが、それも違ったようなのでそのターンは終了する。

「やった……赤ならこれで終わりです！」

その次のシリカは手札が2枚残っていたが、どうやら同じ数字だっ
たらしく2枚同時に出してゲームから降りた。出たカードは赤の6
と黄色の6。

次はキリトのターン。ここで彼は、ここまでずっと溜め込んだあの
カードを出した。

「こいつを食らえジエネシス!!」

満を辞して黄色のドロツーカーカードを場に出した。

「なっ！キリトてめえ……オンドウルルルギツタンデイスカ?!」

「はは、だが俺は謝らない」

「クサア!!」

ドロツーカーカードを受けたジェネシスは渋々山札から2枚カードを引くが、それを見てジェネシスはニヤリと口角を上げた。

続くイシユタル。ここでやっと出せるカードが出たらしく、勢いよくそのカードを出した。

そのカードは、青のスキップ。これによって次ターンのキリトは飛ばされ、ジェネシスの番となる。

「ならこれだ」

ジェネシスが出したのは青のリバースカード。

「おっ？俺の出番か」

再び順番が逆転し、キリトのターンとなる。

キリトはもうあと一枚だが、どうやら青のカードではなかったらしく山札から1枚引き、そのターンを終える。

次はイシユタル。

「やったあ!!私もこれでお終いなのだわ!!」

イシユタルは残りの2枚が同じ数字であった為それらを一度に出してゲームから降りた。

これで遂に、残ったのはジェネシスとキリトの二人。

「おおっと、これは二人の黒の剣士の対決ね!」

それを見たりズベットがワクワクした様子で言った。

「ま、すぐに終わるがな」

するとそれに対してジェネシスが不敵な笑みを浮かべながら言った。

ジェネシスの言葉の真意が分からないキリトだったが、とりあえずその場は手札にあった青のカードを出して終了した。

「なあキリト、こんな言葉知ってるか？ やられたらやり返す…倍返しだ”ってな」

「倍返しって…お前まさか」

「そう、そのまさかだ!!」

そしてジエネシスが出したのはワイルドドローフオーカード。

「なん……だと……?!」

キリトは目の前が真っ暗になる感覚に襲われた。

ワイルドドローフオーカードによつて自身の手札はここに来て5枚に増やされ、自身のターンはこれで終了。加えてジエネシスが色を指定できるため事実上の敗北が決定したのだ。

「と言うわけで俺は赤にするぜ。

つて事で、こいつで終えだ」

そしてジエネシスは最後の1枚、赤の9を出してゲームから降りた。

「チキシヨオオオオオー!!」

キリトは悔しげな顔で叫んだ。

「わーい! パパの勝利です!!」

レイがジエネシスの勝利に跳び上がって喜んだ。

「あちやく、あれはどうしようも無いわね」

「びつくりするほど綺麗なコンボが決まったわね」

リズベツトとシノンが最後のジエネシスのターンを見てそう口にした。

「しっかし、中々いい息抜きになったな」

「ああ。またみんなでやろう」

「まあ、次は人数を少し減らして、だがな」

キリトとジエネシスがまたウノの再戦を約束した事で、その日はお開きとなった。

四十八話 黒竜討伐

その日、最前線の迷宮区攻略の際にようやくボス部屋を見つけた攻略組は、次の日にボス戦を行うことを決定し解散となった。

そして今回のボス戦から、いよいよシリカ・リーファ・シノンが参戦することも決定した。彼女達のレベルや実戦での動きを見て、問題ないと判断された為だ。

アークソフィアに戻り、夕食を済ませたあとメンバーは各々の部屋に戻り就寝に入った。

ジェネシスとティアも、部屋に戻るとそれぞれ風呂を済ませ、ベッドにならんで横になった。因みに以前までは違う部屋だったのだが、最近人数が増えたため二人は相部屋となったのだ。

いつもならベットに入ると、ティアと他愛もない談笑をしているうちに眠りにつくのだが、この日ジェネシスは中々眠りにつかなかった。

「はあく……ダメだ、全然寝れねえ……」

仕方ねえ、ちよつと夜風に当りに行くか」

ジェネシスは隣で寝息を立てるティアを起こさないように慎重に起き上がり、ベッドから離れると静かに部屋を出た。

深夜の時間帯で最低限の明かりしかついておらずやや薄暗い食堂を抜け、宿の木製の扉を開け広場に出る。

外は当然ながら暗く、通行人などは一人もおらずとても静かで、街を照らしているのはオレンジに光る街灯のみだった。

ジェネシスは深呼吸してひんやりとした空気を吸い込みながら周囲を見回すと、ベンチにはシノンが座っていた。

「よお、こんな時間にどうしたシノン」

急に背後から話しかけられたシノンは肩をビクツと震わせたあと振り向き、ため息を吐いた。

ジェネシスはそのような彼女の隣に腰掛ける。

「あれ？あんたこそどうしたのよ？」

「ちよいと眠れなくてな。そっちは？」

「……ちよつと、嫌な夢を見てね。昔の夢」

シノン は顔を伏せながらそう答えた。

「ふうん……って、昔の？」

「ええ……忘れるな、って事かしら。とにかく、夢を見たおかげでだいぶ思い出した」

「記憶をか？」

ジェネシスの問いにシノンは首を縦に振った。シノンはこの世界に迷い込んだ際に記憶を失っていたのだ。

「聞いても驚かないでね？私だって戸惑ってるんだから……」

そこからシノンは絞り出すように語り出した。

S A Oを知ったのはテレビのニュースであった事。

沢山の死人が出て最悪のデスゲームだと話題になっていた事。

彼女はそんな中で、医療用のV R機器である《メデイキュボイド》と言う、ナーブギアと同じシステムを積んだ機械で、カウンセリグの治療を受けるところだった事。

そしていざ始めようとしたときに、足元が崩れる感覚に襲われ、訳が分からないまま気がつけばここに来ていた事。

「そうか……まあ、記憶が戻ったんならよかったじゃねえか」

「そうでもないけどね……忘れていたかった事まで思い出してしまったから」

ジェネシスはシノンの言う『忘れていたかった事』がなんなのか気になったが、彼女の表情を見て聞くのを止めた。彼女の顔が『あまり話したくない』と語っていたからだ。

「でも、私がここに来るのは運命だったのかも知れない。

この世界じゃ、敵にやられたらプレイヤーは本当に……」

「心配すんな、てめえは死なねえよ。俺がぜってえに守ってやるから安心しろ」

ジェネシスは震えながら話すシノンに対して強気な口調で言った。

「あ、あんたそれ……本気で言ってるの？」

「ばっか、こんなこと冗談で言う奴があるか」

やや頬を赤らめながら、呆れたように言うシノンに対してジェネシ

スはそう答えた。

「どうしてよ、行きずりの私なんか……」

「それ言い出したら全員行きずりなんだがな……」

そう言いながらジエネシスは少し考え込む。

ジエネシスにとつて、シノンを含む仲間達はと言う存在なのか。何故守りたいと思えるのか。

仲間たちと過ごした時間を思い出しながら、その理由を考える。

「……まあ、同じ屋根の下で寝て、同じ釜の飯食ってる仲間だしな。いや、ここまで来たら家族同然だろ」

「は？何よそれ……家族って、私たちみんな赤の他人じゃない」

ため息を吐きながら言い返すシノンの言葉を受け、バツが悪そうに頭をかきながらジエネシスは答える。

「ああ、自分でも正直何言ってたって感じたが……」

そこで一旦一呼吸置き、数秒経ってから口を開く。

「……俺には家族がいねえんだ」

「……！」

彼の言葉を聞き、シノンは目を見開いて隣に座る彼の顔を見た。

「物心つく前に親は死んじまってな。ずっと爺ちゃんとお婆ちゃんの家で育てられたんだが……それもいなくなってるな。」

もし俺が1人だったら、周りの奴らみてえに攻略に躍起になんざなってなかっただろうな。何せ俺が死んでも悲しむ奴がいねえんだから。

けど今はそうじゃねえ……ティアもそうだが、あいつらと過ごす時間は正直言つて楽しい。失いたくねえって思ってる。

それはお前も同じだ、シノン」

シノンは黙って彼の話を聞いたあと、やがて軽く笑みをこぼしながら

「あんたって、今までは失礼でぶつきらぼうで変なやつくらいにしか思ってたわ」

「悪かったな」

「でも……私たち、意外と似たもの同士なのかもね。なんだか、そんな気

がした……」

「そうなるの、か？」

ジェネシスは戸惑いながらそう呟いた。

するとシノン自身は自身の身をジェネシスに委ねるように傾けた。彼の肩でシノンは「すう……」と息を立てている。

「こいつ寝やがった……さて、こんなところ雫に見られちゃ修羅場になんのは不可避だが……どうしたもんかね」

ジェネシスはため息を吐きつつ、そのままの体勢でシノンに自身の肩を貸したまま、夜更まで過ごした。

翌朝、案の定ティアに詰め寄せられた。

—————

この日、いよいよ最前線・第89層のボス攻略が行われる。

参加するメンバーはアークソフィアの転移門前に集められ、戦いの前の最終確認が行われる。

今回のボスは、事前調査の結果で分かっているのは、ボスはドラゴン型エネミーである事。遠距離ブレス攻撃を主体とするモンスターで、常に空中を飛行しているため近接戦闘に持ち込むのは至難の技だ。

その為今回のボス攻略の要となるのは、遠距離攻撃ができる者。即ちハヅキ・イシユタル・シノンの3人をいかにして援護しつつうまく立ち回らせるかが鍵となる。

ハヅキは既にボス戦を何度も経験済みだが、イシユタル・シノンは今回が初のボス戦である。が、2人の表情は恐怖を微塵も感じさせない毅然とした者だった。

「まっかせなさい！私がいるんだもの、大船に乗ったつもりで構えていればいいのだから！」

「うっか凜にならねえようにしろよ」

「うっさいわね!!」

自信満々な表情で言うイシユタルに対し、ジエネシスがそう苦言を呈した。

「……」

シノンはと言うと、何も言わずに黙ってジエネシスの方を見ていた。

そんな彼女の視線に気づいたジエネシスはシノンの方を振り返る。

「その……昨夜はありがとうね。お陰で大分気が楽になったわ」

「そうか。まあ、あんま気合いすぎずやりな。てめえはてめえのやることをやったらいい」

「ええ、そうさせてもらうわ」

2人はそう交わした後、いよいよ出発となった。

「久弥……シノンとイチヤイチャしてない?」

「してません」

—————

89層の迷宮区の奥にあるボス部屋までは、回廊結晶を使用して一瞬で到着した。

到着後数分間の最終確認を終えた後、いよいよボス戦が始まる。先頭に立つアスナの手によって部屋の扉が解放された瞬間、攻略組のプレイヤー達は一斉に部屋に飛び込む。

部屋は真っ暗で、周囲を取り囲むように取り付けられた最低限の明かりがあるのみだった。

しかし、この部屋の最大の特徴はそれまで彼らが経験してきたボス部屋の中でも最大級の広さがあることだ。恐らく直径は数百メートルに及ぶ。

部屋には真っ黒な黒曜石で出来た高さ6メートルほどもある塔が

8つあり、その頂上には紫の光を放つクリスタルがある。

そして部屋の中央にいたのは、全身が真っ黒の鱗に覆われた全長約6メートルはある巨大な黒竜だった。

竜はプレイヤー達の侵入を確認した瞬間部屋中を振動させる程の巨大な雄叫びを上げ、自身の身体を優に超える程の大きな翼を羽ばたかせて飛翔した。

それとともにボスの名前とHPバーが表示される。

ボスの名は《ジ・オブシディアンドラゴン》。HPバーの数は3本だ。

「戦闘……開始！」

アスナの号令と共に、ボス戦がついに開始された。

ボスは空中を浮遊しているので、手始めにハツキが射撃スキル《ウルフ・シューティングブラスト》を放つ。

ハツキの放った矢はボス部屋の宙を縦横無尽に飛び回るドラゴンに向かって真っ直ぐに飛び、見事に命中する。

しかし、今や攻略組のメンバーにも引けを取らないレベルに達したハツキの放った一射であるにも関わらず、先程の攻撃でボスが受けたダメージはHPバーの僅か数ドットに留まった。

「なっ……！」

「嘘でしょう……?!」

キリトとアスナはその光景を見て驚きのあまり目を見開いた。

このドラゴンは余りにも防御力が高すぎるのだ。ただでさえ自分達の攻撃が届かない上に、遠距離武器でさえ決定打になり得ないとなればかなりの苦戦が予想される。何かしらの突破方法が無ければいずれジリ貧になるのは明らかだ。

「ならこれはどうかしらっ？」

すると今度はイシユタルが動いた。

黒曜石を手に取るとそれを空中で弾けさせ、それによって発生したエネルギーを自身の武器《天弓 マアンナ》に集める。紫のエネルギーが収束し、矢の形状となっていく。

「これでも食らいなさい！」

右腕を真つ直ぐに伸ばし、指先で照準をドラゴンに向ける。

そしてドラゴンの動きを予測し、次に飛ぶであろう方向に向けて光の矢を放つ。

イシュタルの狙い通り矢が飛ぶ方向に向かってドラゴンは真つ直ぐに飛翔する。それに気づいたドラゴンは慌てて回避行動をとるも、時すでに遅くイシュタルの矢はドラゴンの腹部を直撃した。

イシュタルの一撃はやはり重かったのだろう、ハヅキの時と違いHPはバーの2割ほど削ることができた。

「なら、私も」

シノンも負けじとボウガンに矢を装填し、左手を銃身に添えて狙いを定める。ボスは未だプレイヤー達には目もくれずただ空中を飛行している。

これを好機と見たシノンは迷わずボウガンのトリガーに指をかけ、一思いに引いた。

『シュツ』と言う小さな空切り音と共に矢が射出され、青白い尾を引きながら真つ直ぐにドラゴンへ向かって飛翔していく。

ハヅキとイシュタルが保有する弓スキルの上位互換である、射撃スキルの技《グランドストライク》。

水色の光の尾を引き、矢は飛び回るドラゴンの頭部に突き刺さった。

するとダメージを受けたドラゴンは、部屋に聳え立つ八本のタワーの上で輝くクリスタルの方へ向かう。

ドラゴンが接近すると、クリスタルから紫色の光の光線が飛び、ドラゴンの身体を包む。その光を浴びると、ドラゴンのHPが一気に回復し、瞬く間に元通りになった。

「そんな……!」

「こんなの無茶苦茶です!」

「どうやって倒せて言うのよこんなやつ……!」

それをまたサチ、シリカ、リズベットが回復したドラゴンを見てそう叫んだ。

飛び回っているためこちらの攻撃は届かず、届いたとしてもその防

御力の高さから大したダメージは入らないのに加え、仮に入ったとしても、クリスタルがある限り即座に回復してしまう。これでは倒そうにも倒すことなど不可能に近い。

「大丈夫！倒す方法はあるよ!!」

やや諦観の空気が現れ始めたその時、ストレアが叫ぶ。

「あのクリスタル！あれを壊せば回復手段は消せるよ！どうにかしてあれを壊して!!」

MHCPである彼女は自身の保有する知識と分析能力を持って皆にそう伝えた。

「壊すったって…あんな高さだぞ?」

「登る手段なんてなく無いか?」

しかしプレイヤー達の間ではそんなざわめきが起きていた。

彼らの言う通り、タワーの高さは約6メートル。梯子は愚かロープの類は付けられておらず、しかもそれは黒曜石のような物質で出来ており、よじ登るのは容易では無い。

「ねえ、キリト」

するとリズベットが何かを思い出し、キリトに声をかける。

「あんたなら、この間のアレで登れるんじゃないの?」

するとキリトはニヤリと口角を上げ、

「…なるほどな」

そう言って数歩交代する。

クラウチングスタートの体勢を取り、その場から一気に駆け出す。

トップスピードで塔の方へ走り、そして地面から垂直に立つ塔の壁を走り始めた。

数秒で塔の頂上までたどり着くと、右手のエリユシデータを左肩に担ぐように構え、ソードスキル《ソニッククープ》でクリスタルを叩き切った。

「壁走りとかマジかよあいつ…」

それを見たジェネシスが呆れた表情で呟いた。

すると隣に立つティアが徐に刀を左腰の鞘に納め、スタンディングスタートの体勢を取る。

「何してんだお前？」

「私にだって、あれくらい出来るもん」

ティアは膨れっ面でそう答えると、その場から飛び出す。

そのまま塔の方へ走り続け、次の瞬間ティアは塔の壁を走っていた。
た。

「お前も出来んのかよ!!」

下からジェネシスがそう叫ぶ。

ティアはそのまま頂上まで到達すると、そのまま空中へ飛び出し、
抜刀術の構えをとる。

「はっっ!!」

そして左腰から素早く刀を引き抜き、抜刀術ソードスキル《蓮華》で
クリスタルを一刀両断した。

着地したティアはジェネシスの方を向くと、どんなもんだとばかり
に「ふふん」と息を吐いて胸を張って立った。

「んなっ……くそ、だったら俺だってやってやんよ!」

するとジェネシスは背中の鞘に大剣を収めると、キリトやティアと
同じように助走距離を取ると、塔へと駆け出す。

「うおおおおおお!!」

そして塔に到達すると、彼はそのまま壁を走り始めた。

順調に登っていたジェネシスだったが、半分くらい登った時だっ
た。

ズルリ、と彼は足を滑らせてしまったのだ。

「あああああぁー!!!!」

そのまま地面に土煙を上げて落下した。

「ぶふっ…w」

「だっさ」

「あっはははは!!誰か、誰か今の撮ってない?!!!決定的瞬間よ!!永久保
存版なのだわ!!」

それを見たキリトが吹き出し、リズベツトが呆れた顔で眩き、イ
シュタルが大爆笑しながら叫んだ。

「てめえらアアアア!!後で覚えてろよおお!!」

ジエネシスは赤面しつつそう叫び返した。
すると彼の元へオルトリアが歩み寄る。

「ジエネシスさん大丈夫です。何事もチャレンジが大事なのです。出来もしない事を無理にやろうとしかつこ悪いとか微塵も思ってもせんよええ。むしろ今の奇行でボス戦のみんなの緊張感が解れたのでぐっじよぶです」

「おめえはフオローすんのか貶めんのかどつちかにしろ!!」

「もう、そんなに怒らないでくださいよ。糖分が足りて無い証拠ですよ。はい、これお饅頭です」

「なんでボス戦にそんなもん持ってきてんだコラア!!まあありがたういただくけど!!」

……うん、美味いぜちくしょう!!」

ジエネシスはオルトリアから饅頭を受け取ると一口で頬張ってそう叫んだ。

「全く喧しい奴らじゃ…」

ジエネシスとオルトリアのやり取りを横目に、ツクヨは嘆息しながら懐から苦無を3本取り出し、指の間で挟み込むように持つ。

そしてキリト達と同じように軽々と壁を走り、塔の頂上まで登ると、クリスタルに向けて苦無を投げつけた。

これであと5本。するとサツキが何かを思いつき、ハツキを呼ぶ。

「なあハツキ。あのクリスタル、弓で撃って壊せないかな?」

「うーん…ちよつと距離があるけど……やってみる」

ハツキは背中から矢を取り出し、弦に引つかかると照準を合わせる。

そして指を離し、矢を放つ。放たれた矢はクリスタルの方へ飛んでいくが、その手前で軌道が落ちクリスタルよりも僅かに下のところで矢が刺さった。

「ああつ、惜しい!」

「でも、今ので掴めたよ…今度は当てる」

ハツキはそう言って二発目の矢を構える。

再び放たれた矢は、今度はしっかりとクリスタルを捉え、そして命

眉間に血管を立たせるほど激昂しながら、暗黒剣の大技である《ディープ・オブ・アビス》を発動してドラゴンを滅多斬りにしていく。「ひどい理不尽かもだけど……まあ是非も無いよね。切捨御免っ!」ティアはジエネシスの勢いに苦笑しつつも、抜刀術の三十九連撃スキル《緋吹雪》でその胴体を切り刻んでいく。

続けてキリト、アスナが続き、さらにシリカ・リーファ・リズベツトやフィリア・サチがそれに続く。

シリカは自身の敏捷性を生かして素早い動作で短剣を振り、ドラゴンの胴体を斬り、リーファは剣道の動きを生かした華やかで整った動きで剣を振るう。リズベツトはメイスのパワーを用いてドラゴンの体を殴りつける。

フィリアはホロウエリアでの経験を生かし、ソードブレイカーの刃での確にダメージを加え、サチは彼女達よりも早くから参加したボス戦の経験で、それまでの恐怖心や臆病さを克服し果敢にボスに飛び込む。

サクラの言葉通りボスは近接攻撃に弱いらしく、最初の一撃とは比べ物にならないほどの勢いでHPが急減していき、あつという間に一つ目のバーが消えた。

するとボスは『グオオオオアアアアア!!』と雄叫びを上げ、猛攻の中4本の足で立ち上がる。

直後、巨大な羽を思い切り羽ばたかせて爆風を起こし、自身を囲んでいたプレイヤー達を一気に吹き飛ばした。そして先ほどと同じように、ボスは空中へと飛翔する。

するとボスは空中で静止すると、その巨大な頭をプレイヤー達の方に向ける。そして口を開くと、その口内に禍々しい紫の光を放つエネルギーを凝縮し始めた。

『皆さん、私の後ろに!!』

異変に気付いたジャンヌが旗を構えて前に飛び出す。彼女の指示を受けたプレイヤー達は、言う通りに後ろへ下がる。

『我が旗よ、我が同胞を守りたまえ』

ジャンヌは旗を展開し、地面と垂直にそれを突き立てる。

彼女の旗から黄金の光が放出され、扇状のバリアが展開する。

『リユミノジテ・エテルネットル!!』

同時にドラゴンの口から紫色のブレス攻撃が放たれた。

強烈な爆風を伴って放たれたが、ジャンヌの防壁によってそれは防がれた。

すると、ボスはジャンヌに向かって一気に急降下し始めた。

『えっ……』

ジャンヌが驚いた次の瞬間、ドラゴンはジャンヌに頭から思い切り突進した。ジャンヌは先ほどの技の技後硬直もあつて回避できず、その突進を受けて数メートル吹き飛ばされた。

そのまま勢いよく地面を転がり、壁に轟音を立てて激突した。

「ジャンヌ!!」

リーファ、リズベット、シリカが慌てて彼女の元へ駆け寄る。ジャンヌは壁に全身を強打したダメージで気を失っている。HPも既にイエローゾーンの手前まで下がっていた。

「なんて突進力だ…」

キリトは先ほどのドラゴンの攻撃を見て唾然とした。

防御力と言うならジャンヌは現在の攻略組の中でもかなり上位に入る。彼女の耐久性は普通のプレイヤーと違いフロアボスの攻撃を直で受けても簡単には倒れない程だ。そんな彼女をたつた一撃で沈めたボスの攻撃、とりわけそれによって発生するノックバックには最大限の警戒をする必要があるようだ。

しかし一方でドラゴンの防御力は低下しているらしく、その後はハツキやシノンの攻撃でも簡単にダメージを出すことができ、順調にHPを削っていった。

やがてドラゴンのHPが2本目のレッドゾーンに突入した時だった。

『グルルルアアアアッ!!』と唸り声を上げたのち、再び先ほどのブレスの発射態勢を取った。その標的は——

ハツキだ。

「やらせないっ!!」

その時、兄であるサツキがハツキを庇うように前に出た。

「お兄ちゃん?!」

「大丈夫、必ず守るから」

サツキは不敵な笑みでハツキにそう言うと、双頭刃を自身の前に両手で持ち上げる。

そして両手の指で器用にプロペラのように回転させていくと、桃色の光が刃を中心に円形のシールド状に展開していく。

「《ロー・アイアス》ッ!!」

次の瞬間、サツキの展開した桃色のシールドがドラゴンのブレスを受け止めた。これは、サツキの保有するエクストラスキル《双頭刃》の防御スキル《ロー・アイアス》。片手剣スキル《スピニングシールド》の上位互換に当たる技だ。

「つぐううううう!!」

とはいえ、ドラゴンのブレスはジャンヌの《リュミノジテ・エテルネツル》で漸く受け止められるほどの威力を持つので、サツキは歯を食いしばってそれに耐える。しかしやはりアイアスでは保たないのか、桃色のシールドにピシリ、パシリとヒビが入って行く。

「お兄ちゃん、そのまま動かないで!!」

すると後ろのハツキが懐から何かを取り出す。

それは矢にしては余りにも大きいものだった。恐らく片手剣サイズはあるほどだ。形状は非常に独特で、目を引くのはドリルのような螺旋構造となっている刃だ。

その間に、ドラゴンはサツキのバリアが解除されるタイミングを見計らって、先ほどと同じ突進攻撃を繰り返す。

猛スピードで急接近するドラゴンの頭部に、ハツキは矢の照準を合わせる。それは、とある地方では知らないものはない、伝説の魔剣を弓矢として昇華したものだ。

其は――

「《カラドボルグ》!!」

そしてハツキはその矢を放つ。

放たれた矢は音速を超える速度で飛翔し、ドラゴンに回避の猶予も

「言つたら、死なせねえってよ」

そう言つてジエネシスはドラゴンの前足を容易く押し返し、大剣を右腰あたりに構える。

「だがてめえは……今死ねエエエエー!!」

どうやらジエネシスはあの時のことをまだ根に持っているらしく、そう叫んだ後に暗黒剣最上級スキル《ジエネシス・デイストラクション》を発動し、その胴体にとつともない破壊力を持つ10連撃を叩き込んでいく。

その攻撃でボスのHPは一気に半分まで落ちた。

するとドラゴンは反撃とばかりに反対側の前足をジエネシスに向けて突き出す。ジエネシスは技後硬直時間のため回避が出来ない。

しかしそこへ、今度はティアがすれ違い様に抜刀術最上級スキル《飛閃一刀》を発動し、その腕を斬り落とした。

さらにオルトリアがビーム状の双頭刃を振るって双頭刃最上級スキル《ロイヤルストレートフラッシュ》を繰り出し、その胴体を切り刻む。

「《黒竜双剣勝利剣》ーっ!!」

「そこは変えねえのなお前!!」

「ええ、何となくこれは変えてはいけない気がするので」

ジエネシスのツツコミに対しオルトリアは何の悪びれる様子もなく淡々と答えた。

兎も角これで、ボスのHPはイエローゾーンだ。

「よし、とどめは私に任せなさい!!」

そして最後の引導を渡す役に名乗り出たのはイシュタルだった。

彼女はハンドボールくらいの大きさがある黄金の水晶玉を取り出し、空中に放った。

「刮目しなさい……これが私の、全力全霊!!」

すると、黄金の水晶玉が空中で弾け、神々しいオーラを形成してイシュタルを包み込む。

そしてエネルギーが彼女の弓に集まっていき、それまでとは比較にならないくらい巨大な紫に輝く光の矢を形成した。

かつてシュメル神話に伝わる美の女神イシュタルは、神々の王でさえ恐れ敬った霊峰エビフ山を「ただ気に食わないから」と言う（理不尽極まりない）理由で蹂躪したと言う逸話がある。

この技はその逸話を、（この世界の）イシュタルが持つ伝説級ウエポン《天弓 マアンナ》に備わる唯一の必殺技として実装されたもの。

「打ち砕け！ 《山脈震撼す明星の薪》!!」

次の瞬間、マアンナから極太の光線が発射され、ドラゴンの巨大な身体を丸ごと呑み込んだ。

そしてドラゴンを中心に大爆発が起き、巨大地震レベルの地響きと共に半径数百メートルはある部屋中を爆煙が包み込んだ。

言うまでもなくボスはHPが全て消し飛ばされ消滅したのだが、しかしイシュタルの放った技はこの部屋で撃つにはあまりにも威力が強すぎたようだ。

部屋中のあちこちから咳き込む声やざわめきが起き、中には今の衝撃で多少のダメージを受けたものまでいた。

「ゲホッ、ゲホッ……このバカヤロウツ!! ちったあ加減しろや!! 俺らまで死ぬかと思っただぞ!!」

「ちよ、しようがないでしょう?! あんなに強い威力だとは思わなかったんだもの!!」

「あはは……やっぱりうつか凜だね」

「なあんでよおく!!」

1人の犠牲者も出さない素晴らしい勝利であるはずなのに、勝利ムードどころかイシュタルの泣き叫ぶ声がこだました。

四十九話 シノンの苦悩

七十六層・アークソフィア

「これで全員揃ったかな？」

クラインがグラスを片手に周囲を見回して確認する。

食堂にはジェネシスやキリトを始めとした仲間達が同じようにグラスを持って座り、クラインの方を見つめていた。

「それじゃあ九十層到達記念パーティーを始めたいと思います！」

思い起こせば2年前、俺は一流のプレイヤーになろうと……」

「アンタの話なんかどうでもいいから、早く乾杯しなさいよ」

クラインの話を遮ってリズベットがそう急かした。

「ひつでえ?!まだ話のさわりも言っただけでねえつてのによ！」

……まあ、いいか。それじゃ、コホン……

九十層到達おめでとう！乾杯!!」

『『『かんぱーい!』』』』

皆は一斉に仲間達とグラスを打ち付け合い、『カラン』という音が響いた。

このデスゲームが始まって約2年。プレイヤー達はここであろうや、ゴールの目前まで迫ることが出来たのだ。

「ようキリトにジェネ公、九十層到達おめでとうさん」

クラインがキリトとジェネシスの元にやって来た。

「ああ、おめでどうクライン」

「おめえらと会ってから2年……お互いこうしてられるなんて感慨深いじゃねえか、なあ?」

「俺はそれでもねえけどな」

「なんでえ?!」

ジェネシスの素っ気ない答えにクラインは悲痛な顔で叫んだ。

「キーンとっ、楽しんでる?」

「料理も美味しいし、仮想世界も侮れないわね」

そこへリズベットとイシユタルがやって来た。

「リズにイシユタルか。ああ、楽しんでるよ。料理もう美味しいな」

「そりゃあ一流シェフのアスナにティア様が直々に作ってる料理だもん。美味しいに決まってるわ！」

「ええ、あの子ったらかなり気合入れて作ってたわよ。」

『久弥に美味しい料理食べてもらうんだ〜』って」

イシユタルがニヤニヤと笑いながらそう告げた。

「こんな美味え料理をお前らは毎日食べてんのか！この幸せ者め！あとジエネシス、おめえはさっさと爆発しろ！」

「毎日食ってるわけねえだろあいつらだって忙しいのに。」

あとクライン、悔しかつたらテメエも早くいい相手見つけろよ」

「食えるだけでも幸せだったの！くそう、今日くらい俺が全部平らげてやる！」

そう言つてクラインはテーブルに並べられた料理を一斉にかき集め始めた。

「何してんだクラインテメエ!!」

「なっ、そうはさせるか!!」

するとジエネシスとキリトもクラインに料理を取らせまいと慌て取り始めた。

「あゝあ」

「何やってんだか……」

それをイシユタルとリズベツトは呆れた顔で見つめていた。

「おいキリトにジエネシス。こっちの料理も食ってみてくれねえか？」

そう言つてエギルはテーブルに二つの大きな皿を持って来た。

皿の上には、皿一杯の大きさがある丸い生地には、赤いケチャップソースが塗されておりその上にこんがり焼けたチーズが香ばしい匂いを漂わせている。

その料理はどう見ても……

「こりゃ……ピザか？」

「ああ。SAOのアイテムでどこまで再現できたかは分からんが……兎も角食べてみてくれ」

「おお！それじゃ早速……」

そう言って手を伸ばしたキリトだったが…

「ああ、ちよつと待った」

その手をエギルが制した。

「実はな。余興も兼ねて少し趣向を凝らしてみた。

この中の一切れに、激辛が混ぜてある」

エギルは悪戯な笑みを浮かべて言った。

「激辛って…どれだけ辛いんだろう…」

それを聞いたリーファがやや不安げな表情で呟く。

「因みにありえない量のソースを混ぜてたわよ」

するとここで、一緒に料理を手伝っていたアスナとティアが戻った。

「主ら何故止めんかったのじゃ」

「だって楽しそうだったんだもん…」

ツクヨが呆れた顔で問いかけ、ティアが俯きながら答えた。

「因みに何を混ぜたの？」

「えつとな…確か『マックスハザードソース』って奴だ」

「『ぶっつ!!』」

それを聞いた瞬間、M H C P組のレイ・ユイ・ストレア・サクラが吹き出した。

「な…な…」

「何でもの混ぜてるんですかエギルさあああん!!!」

そして青ざめた顔でレイとユイが詰め寄る。

「な、なんだ?どうしたんだお前ら」

レイ達の様子にエギルは戸惑った表情で狼狽えた。

『『マックスハザードソース』はS A Oが開発された段階で出てきた没案の一つだよ。理由はバカみたいに辛いかららしいんだけど…』

最近起きたカーディナルの不調でこういう没案のアイテムが出てきちゃったりするんだよね…」

ストレアが皆にエギルの使った激辛ソースの正体を説明した。

「なあ、辛いってちなみにどれくらい辛いんだ?」

「……唐辛子300本分です」

「いや辛すぎイ!!」

「そんなの食べたら舌がガタガタゴツトンズツタンズツタンになるわよ!!」

「完全にYABEEEEEEI!ソースじゃんそれ!!」

「味覚エンジンがOVERFLOWしますよ!」

そのソースの恐るべき辛味のレベルをサクラが伝えた瞬間、リーファ、イシユタル、サチ、サツキが喚き始めた。

「おお、そんなにエグい代物だったのか……まあ、一種のロシアンルーレットだ。寧ろ当たればラッキーくらいのもんで行ってみればいいだろ」

元凶のエギルは一切悪びれる様子もなくそう言った。

「ふぎけんじや無いわよ!あたしは絶つつつ対に食べないんだからね!!」

「あ、あたしも……ちよつと遠慮しようかな」

「私もパスで。リスクの割にペナルティがあまりに大きすぎるわ」

少女達は『マックスハザードデスソース』の恐るべき辛さに慄き、そのピザを食べるのを拒んだ。

「おいおい、そりゃあそのピザをお前らが食べないのは勝手だ……だがそうなった場合、誰がそのピザを完食すると思う?」

クラインはのたうちまわった。

「AHYEEEEEE! AHYEEEEEE! AHYEEEEEE! AHYEEEEEE
EEEEI!

OHOOOOOOOO!! AバGレブhmu○△□※……」

もはや理解不能な言語を発しながらその激辛ソースに悶絶する。

「く、クラインさああん!!」

「ブアツハハハハ!! いいリアクションだぞクライン!!」

それを見て大爆笑するエギル。

「水うううー!! 水をくれえキリトにジエネ公ー!!」

悲鳴に近い声で水を求めるクライン。

キリトとジエネシスは慌ててテーブルに乗せられていたピツ

チャーを持ち、

「クライン、水だ!!」

そしてそれをクラインの口に一気に流し込んだ。

「んぐっ…んぐっ…ブハアツ!!」

ちきしよう、これが唐辛子300本分の辛さつてやつか……」

クラインはフラフラと立ち上がる。その顔はもはや生気がない。

「俺は止まらねえからよ……だからよ……止まるんじやねえぞ

……」

そしてクラインはパタリと倒れた。

「クライイイイイン!!!」

「クラインが死んだ!!」

「この人でなし!!!」

—————

それから数日が経った。

ジエネシスはシノンに用事があったので、彼女の部屋をノックした。

「おーい、シノン」

しかし何度呼びかけても返事がない。

仕方なく彼は、一階の食堂へ足を運んだ。

「え？シノンちゃんいないの？」

一階に降りると食堂の角の席にティアが座っており、事情を聞くなり驚いた顔をした。

「ああ。ちよいと射撃訓練にでも付き合っただろうかと思っただけが、いねえんならしようがねえ」

「……………」

するとティアは何か思い詰めた表情で考え込んだ。

「シノンちゃん、最近すごく悩んでるみたいで……………」

曰く、彼女は先日行われたボス戦で、自身がドラゴンの攻撃を受けた際にロクな回避や反撃が出来なかった事を気にしているようだった。

そしてその後、迷宮区攻略の際にモンスターに詰め寄せられた時があり、その時も同じように反撃が出来なかったのだ。

シノンは射撃武器を使用しているので、接近された場合に反撃できないのは致し方ないのだが、彼女はどうかやらそれを非常に気にしているらしく、『自分が皆の負担になっているのではないか』と不安になっているようだ。

「射撃武器は近づかれちゃどうしようもないわけだろ？そうならねえようにすんのが前衛の仕事だろうが」

「そうなんだよね…………だからあの時は私たちの責任でもあるから気にしないでいいって言ってるんだけど……………」

「たく。そんな小せえことウジウジ気にしやがって……………」

「さっきもその事を話しに行こうとアスナと行ったんだけど、見つからなかったんだよね」

「…………分かった。シノンを見かけたらお前らが探してたって伝えたいてやるよ」

「ありがとう、じゃあお願いね」

そう言うティアは席から離れ、宿から出て行った。

「はあ……んま、あいつがいそうな場所ならおおよそ検討ついでんだけどな」

ジェネシスは1人眩くと、モーニングで注文したコーヒーとホットサンドを食べ、席を立った。

アークソフィアの街を抜け、草原地帯にやって来ると、1人の少女が弓を構えてトレーニングをしていた。

「おっ、いたいた」

「ジェネシス！あんた何でここに……」

「おめえを探してたんだよ。訓練をするんなら言ってくれりや手伝うのによ」

「訓練始めた時、アンタは寝てたからね」

ジェネシスの言葉にシノンは呆れた顔で答えた。

「おいおいそんな時間からやってんのかよ。まさかぶつ通しでやってねえよな？」

「それより、折角来たのなら訓練手伝ってくれない？近接戦での回避の練習がしたいの」

「そりやいいけどよ、お前ちゃんと休んでんのか？」

「何日も寝てない訳じゃない。今は大丈夫よ、訓練を優先するわ」

「……はいよ。ただし途中で必ず休憩は挟むからな」

そしてジェネシスは大剣を引き抜き、シノンの前に立った。

〜10分後〜

大剣を肩に担いだジェネシスとそれをじっと観察するシノンが向かい合う。

そして何のフェイクも予備動作もなく、ジェネシスの大剣の切っ先がシノンに飛び出した。

「あっ……！」

シノンは回避が間に合わず、切っ先が腹部に直撃した。

「だーめだ、集中力が切れてきたな。一旦休憩だ」

ジェネシスはそう言って大剣を納めた。

「で、でも……」

「あのなあ、効率的なプレイってのは短時間で集中してやんのがセオ

リーってもんだ。だらだらやるのは一番良くねえ」

ジェネシスはそう言うが、シノンは納得できていない様子だ。そこで彼は、先程ティアから聞いた事を思い出す。

「…アレか？お前この間のやつ気にしてんのか。んなもん気にすんなつての。」

いいか？射撃武器つてのはどう足掻いたつて近接戦が弱点なんだよ。だからテメエの所に敵を行かさなないようにするのが俺たち前衛の仕事だ。反対に、近接戦じゃカバ―出来ない遠距離からの攻撃はおめえみたいな奴が担当…とまあ、パーティ戦つてのは役割分担が大事なんだよ。持ちつ持たれつって奴だ」

「……そう言う事じゃないの」

シノンはやや小さめの声でそう呟いた。

「私は強くなりたいの！今は誰かに頼らないと戦えない…それじゃダメ、全然意味が無い！」

強い口調で訴えるように言うシノン。

「私はこの矢で沢山の敵を撃ち殺して…膨大な屍の山で全てを埋め尽くして…それで私は、私を取り戻せる。」

そうでなければ…強くならなければ意味が無いの…！」

振り絞るようにそう言葉を出した直後、シノンは突然街に向かって走り出した。

「ちよ、待てよシノン！」

ジェネシスはそれを慌てて追いかける。

しかし彼は、途中でシノンを見失ってしまった。

「チツ、あんにやろうどこ行きやがった……」

街の隅々まで探したが、シノンを見つけることは出来なかった。

しかしそれよりジェネシスが気になったのは、シノンの言葉だった。

「強く無ければ意味が無い」…まるで何かに取り憑かれたように話すシノンの姿が脳裏に鮮明に残っていたのだ。

「強くなりたい、か……」

まさか最前線の層に行つてたりしねえよな」

若干の不安を抱えながら彼は転移門から九十層に移る。

九十層に到着した彼は、フレンドの位置情報を検索する機能を使ってシノンの位置を割り出す。

シノンは、迷宮区にいた。

「ははは……はあ……」

「……………あんのバカやろおおおおおー!!!」

ジェネシスは思わずそう叫びながら全速力で走り出した。

迷宮区の入り組んだ道を兎に角走り続け、ジェネシスはシノンを探す。

幾らレベルが十分に上がったとは言え、今のシノンが最前線の迷宮区を一人で攻略など無謀に過ぎる。最悪の事態を回避するため、ジェネシスがひたすら走り続けた。

「くっ……………」

不意に、彼の耳にシノンの悲鳴が響く。

その聞こえた方角に向かうと、シノンが五体ほどのモンスターに囲まれていた。

「おい、シノン!!」

「じ、ジェネシス……!」

見ると、彼女のHPは既にレッドゾーンに入っていた。事態は一刻を争う所まで迫っていた。

「シノン、頼むから持ち堪えろよ……!!」

ジェネシスは大剣を構えると、モンスターの群れに斬り込んでいっ

た。

先ずはカブトムシ型のモンスターがジェネシスにその角を突き出して飛びかかった。それに対してジェネシスは大剣ソードスキル《アバランシユ》で応戦し、すれ違い様にカブトムシの腹に思い一撃を叩き込んだ。その一撃でカブトムシは消滅する。

続け様にやって来たのはスケルトン。細い骨に見合わない大きな斧を振りかざし、ジェネシスに襲いかかる。

同時に左右・後ろから別のモンスターが襲いかかる。

「このっ……！」

それに対して暗黒剣ソードスキル《ドレッド・ブレイズ》を発動し、4体纏めて斬り伏せ、吹き飛ばした。

暗黒剣の大技を受けた四体のモンスターは一気に消滅した。

「ジェネシス……！」

地面にへたり込んでいたシノンが彼を呼んだ。

「ごめんなさい……面倒をかけたわね……！」

「てめえなあ……マジで心臓止まるかと思っただぞ！なんでこんな無茶しやがった?!」

自分の命を顧みない無謀な行為に、ジェネシスは怒り、強い口調でシノンに詰め寄った。

「HPが無くなったらどうなるか、テメエだって分かってんだろ?!」

「そんなの、もちろん分かってるわよ……」

でも、それで消えるなら……それでも良いと思った……

このまま無力に怯えて生きていくよりは……そっちの方が何倍もマシだって……」

「おまっ……！」

あまりにも自分の命に対してぞんざいな発言をするシノンに対しジェネシスは思わず引つ叩きそうになる。

「でも……いざHPゲージが赤くなって……本当に消えるんだって思うと……怖くなった……！」

「……！」

「怯えたまま……何も出来ないまま終わってしまうのが……辛くて

……悲しくて……ううつ……！」

とうとうシノンとは両眼から涙を零して泣き出し始めた。

そんな彼女をみて、ジエネシスは何も言えなくなり、ただ彼女の頭を撫でることしか出来なかった。

—————

「……ごめんなさい、泣いたりして」

しばらくして落ち着きを取り戻したシノンは、恥ずかしさから赤面して謝った。

「……それは謝る事じゃねえよ」

そんな彼女の謝罪を、ジエネシスは軽く流した。

「……なあシノン。てめえの過去に何があったのか、テメエが何を抱えて生きてんのか……今は聞かないでおく。シノンが話したくない事を無理やり聞き出すような鬼じゃねえからな。

ただこれだけは覚えてくれ……辛い時は辛いつて言え。泣きたい時は大きな声で泣け。助けて欲しけりゃ、腹の底から助けを求めろ。俺たちはぜってえにお前を見捨てたりなんざしねえからよ。もう二度と、テメエ一人で抱えるんじゃねえぞ」

強く念を押すようにジエネシスは言った。

「……これは私の問題だから、多分私にしか解決できない……でも、ありがとう。気持ちは嬉しい」

シノンは笑顔でそう言った。

「ねえ……恥ずかしいんだけど、私まだ足が震えてて動けそうに無いの……だから、もう少しだけ、このままでいさせて……」

甘えるようにシノンは彼に身を委ねてそう頼み込むが、

「……悪いけどなシノン。そう言うわけにも行かなさそうだぜ」

「……え？」

ジエネシスは通路の遥か遠くを睨んでいる。その先は真つ暗でシノンには何も見えないが……

「索敵スキルに反応があった。モンスターの群れが押し寄せてくるぜ」

「嘘でしょう？どうすんのよ」

「はっ、決まってるだろ。この足を使うんだよ」

ジエネシスは自身の足をポンと叩き、立ち上がる。

「あんたの足を……って、ちよつと」

するとジエネシスはシノンをひよいと持ち上げ、肩に担ぐ。

そして……

「逃げるんだよオ！スモーカー!!」

「ひゃあああツ!!あんた、もつとゆっくり！ゆっくり走りなさいよ!!」

「バカヤロウツ！モンスター来てんのにゆっくり走ってどうすんだ!!」

「にゃあああああつ!!」

ジエネシスの全速力に揺さぶられて悲鳴を上げるシノンの声が九十層の迷宮区に響き渡った。

五十話 《幕間》 現実の話

やあ、いつもこの物語を読んでくれてどうもありがとう。君達のお陰で、この世界もここまで進むことができた。本当に感謝しているよ。

……ん？私は誰かって？ああ、済まない。自己紹介はまだ出来ないんだ。私はまあ、未来に進むものたちの前に現れる妖精みたいなものと思ってくれたまえ。

さて、ここまでSAOの中での物語が続いてきたわけだが……ここで少し視点を変えてみようか。

では、現実の話をするでしょう——

SAO事件。今やそれは全世界に大きな衝撃をもたらした大事件となった。当然さ、ゲームの世界に1万人が閉じ込められ、しかも本当に死人が出るデスゲームなんて前代未聞も程があるだろう？

これによって仮想世界は衰退の一途は免れないかと思われたが……意外にもそうはならなかった。

理由は、仮想世界が医療面でかなり有用であることが示されているからだ。既に国内では、二名の重病患者が仮想世界にアクセスする医療用デバイス《メディキュボイド》の臨床試験を受けている。1人は白血病の少女、もう1人は不治の病であるAIDS患者の少年。そんな彼らにとつて、仮想世界はリハビリとしても有効だったんだ。

また、仮想世界は高齢者にとつてもかなり魅力的なものだった。老化によって現実の身体は衰えてきているが、仮想世界ではそうはならない。幾ら高齢といえど、脳がしっかり機能しているわけだしね。

この面で、仮想世界はまだ捨てたもんじやないと言う意見が出て、あんな大事件があったにも関わらず仮想世界は大きな広がりを見せている。

その一つとして、SAOを基に開発された新たなVRMMO、《アルヴ Heim・オンライン》通称《ALO》が今や世間を賑わせていた。あ、私も楽しませてもらっているよ。

そこは一言で言うなら妖精の世界。プレイヤーは九つの妖精種族に分かれ、ALLOの中心にそびえる『世界樹』を目指し、そこにいる妖精王『オベイロン』なるものにあつて上位種族『アルフ』に生まれ変わることが大きな目標、とされてるらしいけど……私はぶっちゃけ、この話を信じちゃいないんだよね。何故かつて？ALLOがサーピスを開始してから丸一年、誰もこれをクリアしてないからだよ。おかしいだろ？幾ら難解なゲームといえど、一年もすれば1人くらいはクリア者が出るはずなんだ。私はこれを、『絶対にクリアできないゲーム』になつてると見ている。

ま、私自身はアルフとか興味ないからどうでもいいんだけどね。

さて、これまでのALLOは各種属が絶妙なバランスを保って平和を維持していた。その大きな理由は、世界最強のプレイヤー『星海坊主』の存在だ。彼にはたった1人で一つの妖精種族を容易く滅ぼせる程の力があつた。だからひとたび種族間で闘争が起きようものなら星海坊主が介入して両勢力に大きな打撃を与える……とまあ、彼は一種の抑止力であつたわけだ。

ところが……そのバランスは突然崩れた。星海坊主が消えたからだよ。バランスを保っていた抑止力である彼の消失はかなり大きかつた。

先ず台頭して来たのはサラマンダー勢力だ。星海坊主の次に最強と称されるサラマンダー將軍のユージーンを筆頭に、彼らは隣のシルフ領に侵攻を開始した。それに対抗してシルフはケットシーと手を組んで応戦したが、サラマンダーの勢いは止まらなかつた。噂では、サラマンダー隣接地域ではシルフ族のプレイヤーの虐殺やリンチ、中には女性プレイヤーに対するレイプ紛いの行いまであつたそうだよ。全くひどい話だね。私は干渉してないけど。ま、ALLOは基本PK推奨のゲームな訳だし？

しかし、サラマンダーの勢いは長く続かなかつた。

突如、シルフに侵攻するサラマンダーの反対側からスプリガンが攻めて来たからだ。スプリガンって、あまり戦闘向きの種族じゃないんだけど、彼らは簡単にサラマンダーを鎮圧した。

その要因は、2人の女性プレイヤーの存在があった。1人は、新たにスプリガンの長となった赤い二槍流の戦士。通称『影の国の女王』と呼ばれる者と、もう1人はかつての世界最強の《星海坊主》の実際の娘って言う噂がある二刀流の侍、『ブリュンヒルデ』。

いやはや、スプリガンってサラマンダーからはかなり遠いはずなんだけどね？ウンディーネとインプ領を跨ってわざわざやって来るとか、何かシルフに思い入れでもあるのか……

まあともかく、スプリガンの勢いを止められなかったサラマンダーは大打撃を受けることになり、今じゃかなり大人しくなってるよ。

これを機に、いわゆる一騎当千の強力なプレイヤーが各種属に現れる事になった。

シルフには有能な情報収集、索敵、参謀や捜査能力を持つ人呼んで『風来の探偵』。

インプには高度な反応速度を持ち、圧倒的な剣の実力者である『絶剣』。

サラマンダーには何かスーパーケルトビッチなアイドルプレイヤー。何かすごい規模のファンクラブがあるらしいけど。

スプリガンにはあの救国の聖女の名を持つ『竜の魔女』と呼ばれるプレイヤー。

ウンディーネにはあの『影の国の女王』の弟子らしい『不死身の槍兵』。

そしてプーカには『花の魔術師』と呼ばれるこの私……おっと、もうこの時点で大体私の正体に気づいちゃったかな？

こんな風に、強力なプレイヤーが現れた事によって今のALOは種族間で争うのではなく、寧ろ種族に関係なく競いあったり時にチームやギルドを組んで共に戦ったりと、個人での遊びを重視する傾向になった。いや、私にとってはいいい傾向だよ。種族でどうこうなんて、私の柄じゃないからね。

さて、ALOの話はこれくらいにしてもう一度現実に話を戻そう。

仮想世界が医療面で重宝されると言っただけど、もう一つ仮想世界には有用な面があった。

それはアイドルのライブだ。ライブって全国あちこちで開かれるもんだから、移動するには時間もお金もかかる。追っかけて行くような人間はそれこそそのアイドルに全てをかけられる者だけだ。

しかしライブをVRでやればどうなるか？全部仮想世界でやっちゃえば、ライブに参加するのに必要な手段はサーバーにログインするだけ。それなら自宅からでも参加できるよね？

このように、仮想世界は音楽の面でも非常に重宝されている。

例えば、今や世間を賑わせている天才科学者、七色・アルシャープンって言う子がいるんだけど、彼女はVRでライブをやって資金を集めてるんだ。中々ちやっかりしてるね。

しかもこの七色・アルシャープンって子、年齢は僅か12歳。いや全く、そんな歳で世界に名を馳せる研究者とかどうなってるんだと言いたいけど、まあそう言うこともあるんだろうさ。にしてもあの子……将来が有望だね、色んな意味で。

ともかく、仮想世界が広がりつつあるのは彼女の功績もまた大きく貢献しているんだ。中には、『光の七色博士・影の茅場晶彦』なんて言葉があるくらいだし。

さて、ここまで長々と現実の話をして来たわけだけど……

デスゲームはまだ終わってはいない。SAOの終結は、外からの干渉が出来ない以上中に閉じ込められた者達の奮闘にかかっているだろう。私も、その行く末を黙って見守る事にするよ。

さて、現実の話はここで一旦終わるとしよう。何せこれ以上は、まだ少し先の内容だからね。

では諸君、私はこれにて行くとするよ。この物語が、SAOのクリアまで描かれる事、そしてその先で、君たちとまた会える未来が来る事を祈っているよ——

五十一話 みんなで店番

その日、ジエネシスやキリト達が利用している宿屋の食堂は大勢の人で賑わっていた。

「なあ、ジエネシス……一ついいか？」

両手に注文の料理を乗せた皿を持ったキリトがげっそりとはした顔で尋ねる。

「ああ、キリトよ……て言うか、俺も多分同じことを思ってるわ……」

厨房に立って客席を眺めているジエネシスは苦笑いで頷く。

「……どうしてこうなつた？」

2人は同時に呟いた。

時は数時間前に遡る――

――

「おっ、キリトにジエネシス！少しいいか？」

食堂でジエネシスとキリトが寛いでいると、エギルが近づいてきた。

「仕入れの関係で、今から急に店を空かなきゃいけなくなつたんだが……その間の店番、頼めねえか？」

「店番か……ああ、別に構わないぜ」

キリトは二つ返事でそれを了承した。

「恩に着るぜ！戻ったら何でも好きなの奢ってやるからよ。じゃ、ちよつくら行ってくるわ！」

「ああ、ごゆつくり」

エギルはそう言つて小走りで店を後にした。

「おいおいいいのか？店番なんて軽々と引き受けちまつてよ」

ジエネシスが訝しんだ顔でキリトに問いかける。

「大丈夫だって。どうせそんなに客は来ないだろうし、装備品の確認でもしながらゆつくりしていればいいだろ」

「……今すんげえフラグが立った気がするんだが」

2人はそう交わしながら店のカウンター奥へと足を運んで行った。しかしその日はあれよあれよと言ううちに客がやって来て店は溢れかえり、店番の経験のない2人はあつという間に追われることになった。

「すまん、フラグ通りになったな……」

「よりによってこんな客が来るとはな……」

2人はげんなりした表情でそう交わす。

その間にも……

「おーい、こつち飲み物着てないぞ！」

「すみません、武具の予約をしていた者なんですけど……」

「は、はいただ今！」

次々と新たな客の注文がやってくる。

とりあえず2人はできる範囲で対応をやる事にした。料理スキル保持者のジエネシスが厨房、キリトがホールで客に対応するという形だ。

「ジエネシス、ホットサンド二つとアイスコーヒーを頼む！」

「あいよ」

冷蔵庫からトマト、レタスやチーズ、卵を取り出す。

卵をお湯につけて茹で卵にし、中身を砕く。トマトは輪切りにしてレタスを数枚千切ると、辛子マヨネーズを塗ったパンに挟み、ホットサンドメーカーで温める。

その間にコーヒーを沸かし、氷の入ったグラスに注ぐ。

「おーい、出来たぞ」

「早いな?！」

S A Oの料理は簡略化されているためここまで約2分程度で済んだ。そのおかげで料理やドリンクに関してはある程度早く対応することが出来た。

問題は注文の方だ。幾ら料理が早く出来上がるからと言ってキリト1人では多数の客には対応できない。

「こつちの注文まだか?」

「あの、注文いいですか？」

「このように店に来たはいいものの注文がまだの客がいるのだ。」

「こりゃ不味いな……」

厨房から店を眺めたジェネシスは少し考え込んだ後、仲間達に一斉メールを飛ばす。

『手の空いてる奴はエギルの店に大至急集合』

するとその1分後……

「すみませんジェネシスさん、何かご用ですか？」

「遅くなりました！……つて何かすごいお客さんの数ですね?!」

やって来たのはリーファとシリカ。

「ジェネシス、来たよ〜！」

「お呼びでしょうか？ジェネシスさん」

さらにサチ、サツキとハツキも来た。

「よし、よく来てくれた。唐突だがためえら今からホールやれ」

「ええっ?!」

ジェネシスの唐突な指示にシリカが素っ頓狂な声をあげた。

「済まない、エギルに店番頼まれてさ。安請け合いした結果がこれだ」

「……」

「はは、たしかにこれは凄いですね」

店の惨状を見回してサツキが苦笑いを浮かべた。

「俺たち2人じゃ手が回らないんだよ。手伝ってくれ！」

「わ、分かりました！そう言う事なら……」

「了解、まあこう言うのは未経験だけど……やってみる！」

「もちろんいいですよ。困ったときは助け合い、ですから」

ハツキとサチ、サツキがそう言い、新たに来た5名はキリトに加わってホールの仕事に入った。

「はい、メロンソーダとシフォンケーキですね。ご注文承りました」

「ありがとうございます。ホットコーヒーとフルーツサンド、ですね」

リーファとサツキが慣れた手付きで注文を受け付け、ジェネシスに伝える。

「はいよ、これ頼むぜ」

それをテンポ良く作り上げ、即座にホールに手渡す。

これで暫くは回すことが出来たが、今度は新たな問題が浮上した。

「ジェネシス、四番の席にアップルティーだ」

「ジェネシスさん、十一番のお客様がミートスパゲツテイの注文です！」

「三番にベーグルサンドお願いしますー！」

「十五番にミラノ風カツレツを……」

キリト、シリカ、ハヅキ、サチが同時に注文を持って来たのだ。

「よーしちよつと待てお前ら、幾ら何でも多すぎだ。とりあえず急ぎのやつはあるか？」

幾ら彼の手際がよく料理が出来上がるのが早いとはいえど、複数の注文が同時に来られては流石に対応できない。

そのため、今は優先順位を決めるため、『料理をずっと待っている』『早く料理が食べたい』など、急いで対応するべき注文から作っていく事にした。

「とはいえ、流石に俺一人で料理作んのはキツイな……誰か料理スキルを持つてるやつが来てくれたらいいんだが……」

すると店のドアが開き、2人の人物がやって来た。

「あれ？キリトくんにみんな……ここで何してるの？」

「ごめん、久弥。遅くなった……って、何かすごいね」

ジェネシスの仲間たちの中でも一流シェフの2人、アスナとティアが来たのだった。

「アスナ、来てくれたのか！」

「あ、ティアさん。悪いんですけど、ジェネシスさんの厨房をおねご分かった、直ぐにいく」……お願いしまーす」

サツキが言い終わる前にティアは普段の白マントを外して代わりにエプロンを身につけ、厨房に駆け込んだ。それを追うようにアスナも厨房へ向かう。

「いいタイミングだぜ。悪いが料理が追われててな……」

「全然大丈夫だよ。それで、レシピ表とかがってある？」

「ああ、これがそうだ。頼むわ」

ジェネシスは2人にこの店の料理のレシピ表を渡し、2人は早速慣れた手つきで料理を作っていく。

「シリカ、頼まれてたベリーソーダ二つ。お願い！」

「はい、持っていきますー！」

「キリトくん、七番席のアフォガードとクリームシチューできたよー！」

「サンキューアスナ！」

一流の料理人であるアスナとティアが加わったことで、料理のオーダーには大分対応が間に合うようになった。

すると……

「ごめんジェネシス、ちょっといい？」

「どうした、サチ？」

慌てた様相のサチが厨房に飛び込んできた。

「武器鑑定のお客様が来たんだけど……私鑑定スキル持ってないから対応出来なくて……他のみんなも持ってないみたいだしどうしたらいいかな？」

「マジか……そりゃ専門外だな」

ジェネシスも鑑定スキルは持っていない。これに関しては完全に手詰まりだ。そこでジェネシスが出した指示は……

「サチ、そのお客さんには少し待って貰え。じきにうってつけのスタッフが来るはずだ」

「わ、分かった！」

そしてサチは鑑定場まで走っていき、そこで待つ客に頭を下げていた。

「ジェネシス、鑑定スキルを持ったスタッフって……？」

「そりやお前、一流の武器職人がいるじゃねえかよ」

アスナの問いにジェネシスがあっけらかんと答える。

するとそこへ……

「あれ？あんなたちここで何やってんのよ？」

「うわあ……すごい混んでるわね」

やって来たのはリズベットとイシユタル。

「よう、ちょうどいいところに来てくれた」

「は？何よ一体……」

訳がわからない様子のリズベットにジェネシスが事情を説明する。「なるほどね、分かったわ。そう言う事ならあたしに任せなさい！」
「そんじやそつちは頼むぜ」

リズベットは早速鑑定場へと向かっていった。

「ジェネシス、私も鑑定場に行くのだから」

するとイシユタルがジェネシスに対してそう進言した。

「は？凜お前鑑定スキルなんて持ってんの？」

「一応ね。ほら、私って宝石を武器に使ってるじゃない？だからその収集用に持ってるのよ。」

まあリズベット程じゃ無いかもだけど、手伝いくらいにはなれると思うわ」

ジェネシスは少し考え込んだ後、

「…分かった、任せる」

「ええ、それじゃ行ってくるわ」

そう言つてリズベットの座る鑑定場に向かっていくイシユタルの背中に向けて、

「凜ちゃん、うつか凜を起こしたらダメだよ？」

「あんたねえ！そのうつか凜で言うのやめなさいったら!!」

ティアが悪戯な笑みを浮かべながら言い、イシユタルもそう言い返した。

その後、リズベットとイシユタルは手際良く鑑定のお客様に対応していた。

「ありがとうございますーす！では鑑定しますね……」

ふーむ……この鎧、ちよつと傷があるみたいですね……」

「ご来店ありがとうございますーす！ではこちらの宝石預かりますね。」

……ふむふむ……」

リズベットが武器の鑑定、イシユタルがその他宝石などのアイテムの鑑定と言う風に分担して対応していた。

「……あつちは大丈夫そうだな」

暫く鑑定場の方を眺めていたジェネシスはそう判断し厨房に戻る。

ところがここで新たな問題が起きた。

「ねえ、久弥。この《最中》の作り方ってこれで合ってるのかな？」

ティアが右手に餡子、左手に最中の記事を持った状態で尋ねた。

「作り方？ レシピがあんだからそれで行けるんじゃないやねえの？」

「ううん、このあんこの量とか挟み方がレシピだけだといまいち分からなくて……」

レシピを何度も見返しながら餡子を左手の生地には挟もうとするが、中々上手くいかない様子だ。

他にも……

「えつと……赤ワインってどれくらいの量を入れたらいいんだっけ……」

こちらはフランス料理に苦戦しているようだ。メニューは《赤ワイン煮込みのビーフシチュー》。

しかし何故か、レシピには肝心な赤ワインの量が明記されていないのだ。

幾ら料理スキルがあっても、専門的な知識が無ければ作ることが出来ない。

和菓子とフランス料理、これに対応できるメンバーと言えば……

「雫ちゃん、最中の挟み方はそうじゃ無いですよ」

「うわあ?!びっくりした!!」

音もなくティアの背後に突然現れたのはオルトリア。

オルトリアはティアから餡子と最中の生地を取り、生地の裏側に餡子を塗っていく。少しずつ上乘せしていき、2〜3cmの厚さになったところでもう一つ同じ生地を用意して挟み込んだ。

「これで完成です」

「……流石は和菓子マイスター」

オルトリアの手慣れた和菓子テクニクを見たティアは呆けてそう呟いた。

一方フランス料理に苦戦するアスナの元には、やはりその道の専門家がタイミングよく現れていた。

『お手伝いいたしましょう』

やって来たのはジャンヌ。

彼女は机に置かれた赤ワインの瓶を取ると、大きじ3〜4杯の分量で鍋に入れた。

『ビーフシチューには大体これくらいの量が丁度いいですよ』

「成る程……勉強になります！」

ジャンヌのアドバイスもあって、《赤ワイン煮込みのビーフシチュー》が漸く完成した。

『では、ついでに私が持っていけますね』

そう言つてジャンヌは出来上がった料理を運んで行つた。

「こんにちは、何か大変そうだね？」

「何じゃ？随分と賑わつておるな、今日は」

「何か手伝うことはある？」

するとそこへフィリアとツクヨ、シノンが現れた。

「お前らまで来たか……そうだな……」

現在ホールは6名、キッチンが5名、そして鑑定には2名が構えている。

「……よし、シノンとフィリアはホールに行つてくれ。ツクヨはこつちでドリンクでも作つてくれ」

「うん、分かつた」

「普段みんなにはお世話になつてるからね」

「……ま、これだけ揃つていればわつちらの出番もそれほどなからう」
そして更に3名が加わつた。

「あ、フィリアさん！丁度いいところに……今手が離せなくて、一番席の注文、行つてもらつていいですか？」

「はい！任せといて！」

リーファの頼みを受け、フィリアが代わりに注文を取りに行く。

「一番先に注文入りました、抹茶ラテを二つお願いします！」

「承知した」

フィリアがドリンク担当のツクヨに注文内容を伝える。

「あ、こつちも注文入つた。二番席にホットコーヒー2つだ」

「ああ、分かつた」

「すみません、僕のところも……八番席に野菜ジュースです！」
「了解した」

そこへキリトとサツキが立て続けにやって来てツクヨに伝える。
「おいおいお前ら、同時に言うのは止めろって。一気に来られたらツクヨも……」

「もう出来ておるぞ」

そう言ってツクヨはカウンターに抹茶ラテを二つ、ホットコーヒー、野菜ジュースをサツと並べる。

「……ウツソだろお前」

「これくらい朝飯前でありんす」

啞然とするジエネシスに対し涼しげな顔でツクヨはそう返した。

「うーん……うーん……！」

ふと、ジエネシスが客席の方を見ると、シリカが上の棚に必死に手を伸ばしていた。

「どうした、シリカ」

「あ、ジエネシスさん……あその物を取りたいんですけど……」

視線を移すと、高さ2メートルほどの高さの棚の上にコップがたくさん詰められた段ボールのような箱があった。どうやら客数が多く、あらかじめ準備されてあった物では足りなくなったらしく、新しく用意しようとしているらしい。

「おいおい、ありゃあエギルじゃなきゃ取れねえ高さじゃねえか……」

ジエネシスの身長でもあの高さの物は取ることが出来ない。

「任せて、シリカ」

するとシノンがボウガンを構えてやって来た。

矢を装填し、段ボールの箱に向けてそれを放つ。すると命中した衝撃で箱が落下する。

「おっと」

それをジエネシスが両手で受け止めた。

「あ、ありがとうございます！シノンさん」

「いえ、どういたしまして」

「…成る程、ノックバックを発生させて落とすのか。考えたな」

「まあ、何となく行けるだろうな、と思っただけよ」
しかしそれは、シノンがこの世界に大分慣れて来た証拠でもあった。

――――

あれから数時間が経過した。店は未だに賑わい続けている。

「みんな、かなり板について来た感じだね」

「ああ。案外、出来るもんなんだな」

キッチンで料理を作りながらティアは客席であくせく動き回るメニューを見て隣で洗い物を片付けるジエネシスに言った。

「でもこんな時に限ってお客さん全然減らないよね」

「なに、人数は足りてんだ。まあ、あとは全体を見て的確に指示を出せるやつ、どこにでも入れる万能なやつがいるな……」

エギルの酒場は普通の店に比べてかなり広い。客席も多く、取り扱う料理やドリンクの範囲も非常に多い。加えて客の流入が激しいので注文も立て続けにやって来る。しかもここで取り扱っているのは飲食だけでは無い。今はリズベットとイシユタルが担当している鑑定まであるのだ。

思えばこれだけのものを良く一人で切り盛りしていたものだ。改めてエギルに対して敬意が湧くジエネシスだが、今は後回しにしてもう一度現状を確認する。

先ほどのジエネシスの言葉通り、人数は十分対応できる人数だ。しかし、店の流れには必ず波が発生するものだ。例えば客が一気に押し寄せればホールが客席案内や注文といった作業に追われ、その次に押し寄せた客の数だけ注文が来るのでキッチンが追われる。そのため、今必要なのは彼の分析通り、客の流れを的確に把握して指示を出せる司令塔のような人材と、いつどのポジションが対応に追われてもヘルプに入れる万能なスタッフが要る。

ジエネシスがそう考えていた時だった。

「ただ今戻りました」

「パパ、ママ。ただいまです」

「あれ、今日は何かすごく人が多いね？」

「あの、皆さん。お父さんからのメッセージ読んで無いのですか……？」

そこはやって来たのは、レイ・ユイ・ストレア・サクラのMHC P 四人。

「これは……行けるな」

—————

「鑑定待ちのお客様が3名を超えました。ヘルプをお願いします」

「カウンター席のお客様が注文みたいです」

ジエネシスの読み通り、レイとユイは広い範囲の視野で状況を把握し、皆に的確な指示を出している。

そして……

「はい、じゃあアタシが鑑定行つて来ます！」

「では、注文は私が行つて来ますね」

ストレアとサクラ。彼女らもまた有用なサポーターとして機能していた。

「はい、こちらの鑑定終わりました。代金はこちらですよ」

「えっと、このアイテムは……あ、かなりのレア物ですよ!!」

ストレアには鑑定スキルは無い。しかしその代わりにMHC P 本来の分析能力、SAOの全てに関する知識があるため、鑑定スキルが無くとも対応できる。

「モンブランとカフェラテの注文入りました」

「ごめんなさい、今少し手が離せなくて……」

サクラがキッチンに注文を伝えるが、今はそれ以外の注文で立て込

んでいるようだ。

「あ、では私が作りますね」

そしてサクラは慣れた手つきでモンブランを作成していく。彼女もまた、SAOに関する知識を保有しているので、ある程度の料理スキルがあればそれらを駆使して一定の料理を作ることが出来る。

このように、MHCPの四人はある種最強の店員であった。

「ママ、もうすぐレタスとニンジンの在庫が切れそうです!」

「分かった、すぐに行くわ!」

ユイの指示を受けて準備するアスナ。

「ジャンヌ、少し鍋を見ててくれる?」

『はい、わかりました』

「ありがとう!10秒で戻って来るわ!」

『10秒……?』

アスナの10秒という言葉の真意がわからないジャンヌだったが、その直後。

《Start Up》

アスナが目にも止まらない速さで店を飛び出す。

そして10秒後…

「ただいま!」

『早っ?!』

アスナは自身のユニークスキル《神速》を発動して買い物を済ませたのだ。

「流石はレイ達だ。的確に指示が出せてんな」

「そうですか?えへへ、お役に立てているのなら嬉しいです♪」

「うんうん!すごく偉いよレイ!」

「じゃあ、この調子でどんどん行こう!」

ティアが愛娘を褒め称え、皆を鼓舞して作業に勤しんだ。

—————

「……かなり長い時間、店を開けちゃった。それは俺が悪かった」

「いや、気にすんなって」

エギルの謝罪に対しキリトが軽く流した。

「そして……店番の礼には何でも奢るとも言った」

「ああ。たしかにそう言ったな」

ジェネシスは首を縦に振る。

「しかし、それにしたってな……」

エギルの目の前には、各々食べたい料理を口にする少女達が実に18名。

「多いわ！超多いわっ!!」

堪らずに叫ぶ。

「しょうがないじゃ無い。だって私たち……」

「頑張って店番したんだもん。ねー？久弥」

イシユタルとティアがジェネシスにそう確認を取る。

「ああ。こいつらは本当によくやってくれたよ」

「売り上げを見たら、俺たちがどれだけ頑張ったかエギルには分かるだろ？」

「そ、そりゃそうだけどよお……」

「ま、今日の分の売り上げは俺たちの腹に収まる覚悟でいてくれよな」

悪戯な笑みでエギルに言うジェネシス。

「うう……あ、あんまりだあああ……」

—————

その夜、《店番おつかれ会》と称する宴会じみた賑やかさが起きる食堂から一人抜け、外の空気を吸いに来たジェネシス。

「はあく……しっかし、今日は疲れたぜ……」

ベンチに座ってゆったりと寛ぐ。

そこへ……

「こんばんは。『暗黒の剣士』さん。いえ、もう一人の『黒の剣士』さん、と呼ぶ方がいいのかしら」

女性の声が響く。

声が若干ジャンヌに似ているが、彼女はジェネシスのことをそんな名では呼ばない。

一体何者か、声がした方を見る。

そこには真っ白な和服を来た嫺やかな女性が立っていた。

頭部はフードのような被り物をしており、口元には優しげな笑みを浮かべている。

「……誰だ、あんた？」

やや警戒心を出して問いかける。

「私は……そうね……」

その問いかけに対し、ゆったりとした動作で被り物を取る。

中から現れたのは、月明かりを反射して青白く妖艶に光る素肌と、美しく風に靡く黒い短髪。

そして青い優しげな瞳がジェネシスを見つめる。

「私の名前は——」

《シキ》、と名乗っておこうかしら

五十二話 「女子会やるわよ！」 b y i シュタル

ジェネシスの前に現れた、『シキ』と名乗る女性。

彼女は微笑を浮かべたままジェネシスをじつと見つめる。

「…んじやあシキ、何か俺に用でもあるのか？」

「用……そうね、特に用があるわけでも無かったのだけれど……一つ、訊いてもいいかしら」

そこでシキは一呼吸置く。

「どうして、貴方達は戦うの？」

「戦う理由？…んなもん現実に帰るために決まってるんだろう」

「そうね。貴方達はその為だけに戦っている……でも私には分からないわ。」

何故自分の命を賭けてまで現実世界に帰りたがるの？そこまで現実世界にこだわらなくても、この世界で生きていくと言う選択肢だけであるじゃない。

それとも……自分達の命を犠牲にしても、現実世界に帰らなきゃいけない理由でもあるの？」

「……まあたしかにおめえの言う通りだ。命かけてまで戦わなくとも、ここで暮らすのも悪くねえのかもしれない……」

どつちみちいずれは無くなる命だ。遅いか速いかの問題だわな。

それにこの世界は魅力的ではある……けど、俺たちがいるべき場所は、やつぱりここじやあねえ。俺にはいねえが、みんな向こうに待たせてる人つてもんがある。そいつらに会うために、俺たちは戦ってんのさ」

ジェネシスの答えを聞き、シキは俯いて押し黙った。

数秒間の沈黙ののち、彼女は再び言葉を発する。

「……そう……貴方達はリスクを負ってでも、帰らなくてはならないのね。」

ならば、この先貴方達には大きな苦難や敵が訪れるわ。それでも、負けないでね？陰ながら応援しているわ」

再び穏やかな笑みを浮かべ、背を向けて歩き出した。

「なっ、おいちよつと待てよ。てめえは一体……」

ジェネシスがそんな彼女を呼び止めようとした時だった。

「久弥ー、そんな所で何してるの〜?」

宿からティアが現れ、暫く外に出ていたジェネシスを呼んだ。

「ああ、悪い。今ちよつと話を……」

その声に引かれティアの方を振り返り、再びシキの方を向く。

が、振り返った時には既にシキは消えていた。

ジェネシスがティアの方を見た一瞬で姿を消したのだ。

「何だったんだ、アイツ……」

「久弥、どうしたの?」

ジェネシスの様子を見てティアが彼の顔を覗き込む。

「……………いや、何でもねえ。ちよつと外の空気吸いにきたんだ。

もう戻るわ」

「そっか、ちよつと良かった!!今からみんなでウノやるんだけど一緒にやらない?」

「おっ、ウノか。いいぜ」

ティアの誘いに乗り、ジェネシスは宿へと戻っていく。

シキの事は、今は黙っておくことにした。別に大事な事ではない、と判断したためだ。

「(しっかし……不思議なヤローだったな、アイツ……)」

—————

その夜、《店番お疲れ会》もお開きとなり、皆は解散した。

それぞれの部屋へと戻っていくその途中。

「女子メンバー集合く!!」

突然、リズベットとイシユタルがそう号令をかけた。

その声を聞き、少女達は訳も分からないまま集まった。

「よく集まってくれたわね。みんなに来てもらった理由は他にもない

わ……」

「あたし達、ここまで人数が増えたのに忙しかったせいでもろくにおしゃべりとかした事ないじゃない？だからここで……」

「女子会をやりましょう!!」

二人は皆を集めた理由についてそう語った。

「あー、それいいかも!」

「言われてみると、みんなでとことんおしゃべりしたことってないですよね」

「私賛成〜!」

アスナとシリカ、サチが賛同する。

他のメンバー達も参加の意を示し、その日はそのまま食堂で女子会が開かれることになった。

円形状のテーブル席に集まり、イシユタルが全員分のコップを用意しドリンクを注いで行く。

「と言う訳で、みんなグラスは持った?」

イシユタルが自身のグラスを持って問いかけると、少女達は各々のグラスを掲げて頷く。

「それじゃあ、女子会を始めるわよ!! かんぱーい!!」

『『『かんぱーい!!』』』』

イシユタルの掛け声に合わせて女子達は一斉にグラスを打ち付け合う。『カラン』と言う甲高い音が食堂に響き渡った。

「それにしても、本当多いわよね女子メンバー」

「本当、この世界は女性が少ないはずなのに、よくこんなに集まったわよね〜」

イシユタルが集まった女子たちを見回しながら言い、リズベツトもそれに同意する。

「まあ、ほとんどキリト君やジェネシスによるものだけだね」

「まったく、ハーレム体質にも程があるよ……」

アスナとティアがため息を吐きながらそう口にした。

「でも、これだけ女性プレイヤーが集まったお陰で、同じ女性仲間が増えて助かってますよ」

「それは言えてるかな。今まで出会った人の殆どが男の人だったので……」

「ま、女友達が増えたのは素直に嬉しいかな」

ハヅキの言葉にシリカが自身の過去の過去を振り返って苦笑しながら同意し、シノンも頷いた。

「あ、この際だからずつと気になってた事聞いてもいいですか？」

するとリーファが手を上げ、アスナとティアに問いかけた。

「お二人はお兄ちゃんとジエネシスさんのどこに惹かれたんですか？」

「あー、それは結構気になりますね。」

このー木何の木 気になる木ですね」

オルトリアも何故かこの木何の木を口ずさみながら同調した。

「……えっちゃんの意味不明な発言は置いて。」

まあ、私がキリト君に惹かれたのは……優しくてカッコ良くて、それでいて強くていざと言う時頼り甲斐があるところ、かな？」

「私は……現実には助けられて、それで彼に近づくようになってから気づいたら好きになってた、って感じかな」

アスナとティアはそれぞれの想いびとについてそう語った。

「なるほど……あ、ちよつといい事思いついた！」

するとリスベツトが立ち上がり、

「古今東西！名付けて『キリトとジエネシスのかっこいいところ』く
!!」

「わー!!」

リスベツトの宣言にイシュタルが手を叩いて盛り上げた。

「じゃあ今から、時計回りに一人ずつあいづらのかっこいいところかここがいいって言うポイントを上げていって貰いましょう！」

「別に被っても大丈夫だからね。じゃあ先ずは雫、あんたから行きなさい」

「ええ?!!本当にやるの?!」

問答無用でゲームは始められた。

因みに順番はティア↓レイ↓サクラ↓ストレア↓シリカ↓リー

ファア↓シノン↓ファイリア↓ツクヨ↓ハツキ↓ジャンヌ↓サチ↓オル
トリア↓イシユタル↓リズベット↓ユイの順だ。アスナは先程言っ
たため除外。以下、ティアから順番にそれぞれの発言を並べていく。

「まあ……ジエネシスと並んで頼りになるところかな」

「真つ黒な服がかっこいいと思います！」

「愛妻家などころが見ていて微笑ましいですね」

「女の子みたいな見た目もギャップがあつて可愛い〜！」

「普段の攻略でキリトさんの知識は凄く役に立ちます！」

「やつぱり……妹重いな優しいお兄ちゃんつてところかな」

「私もシリカと同じで、アイツのゲーム知識は結構頼りになるわね」

「私は、あの人に助けられたしね。守ると決めたものは最後まで守り

通せる強さ、かな」

「無駄に勇気があるところは称賛すべきであるかのう」

「優しいのは事実ですけど、それをみんなに分け隔てなくやってるの

はすごいと思います」

『彼つて普通の人じゃ出来ないことを平然とやっていますよね。システ

ム外スキル、でしたっけ』

「結構責任感があるところだね。でも、もし誰かが死んだらしたら

……それをずっと引きずつてそれで怖いかな」

「食べたら美味しそうです」

「私は出会つてからまだ少ししか経つてないけど、まあ人当たりがい

いのは凄く大事だと思うわ。

久弥がいなかったら、キリト一人のハーレムが出来てたんじやない

かしら」

「ちよつとムカつく事もあるけど、それ以上にアイツには助けられて

るからね」

「AIである私を娘だと言つてくれて、私は本当に幸せです。私のパ

パは世界一かっこいいんです!!」

ここまで17名の発言が終わる。

「よし、次はいよいよ『ジエネシス』の古今東西〜!!」

リズベットがそう宣言して、次はアスナからスタートだ。因みに

ティアは先程言ったので今回は省略。

「普段のボス戦では結構みんなの精神的支柱になってるよね。彼がいれば何とかなる、ってみんな思ってる所はあると思う。実際私も頼りにしてるしね」

「私のパパは宇宙一強くてかつこいいんです！」

「私は姉さんの妹ですからそれに倣ってお父さんと呼んでますけど……みんなのお父さん、って感じがしますよね」

「ぶっきらぼうだけど、実はみんなの事ちゃんと考えてて偉いと思う！」

「凄くお強いという点は私も同意です。あの時のジエネシスさん、カツコよかったなあ〜」

「面倒見がいいですよ。お父さんと言うよりは、アニキって感じがする」

「キリトも同じだけど、ジエネシスは彼以上に守ると決めたものは絶対に守り通す意思、みたいなものがすごいと思うわ」

「私はアスナと同意見だな。普段の攻略で彼がいるのといないのことで安心感が全然違うよね」

「時折バカな発言はするが、それが返って皆の緊張感を和らげているのかも知れぬな」

「あと頭がいいですよ、ジエネシスさんって」

『状況を瞬時に把握して、的確な指示を出せる点は凄いですよね。指揮官にも向いてる気がします』

「凄く仲間想いなところがあるよね。何よりも大切にしてくれるからそこが凄くいい」

「意外と料理上手なんですよね彼。今度お菓子を作って貰いましょう」

「あとはキリトに負けず劣らずの愛妻家よね。雫一筋なのは相変わらずだけど」

「キリトと違った信頼感があるわよねアイツ。キリトとジエネシスが二人揃ってると負ける気がしないわね」

「私はあの人のお陰で今こうしていられますから。本当に感謝してい

ます！」

ここで全員の意見が出揃った。

「こう見ると……《仲間思い》で《優しい》と言う点が共通してるわねあの二人って」

「多分、あたし達はそれに惹かれたんだと思います」

リズベットがそう考察すると、シリカは納得したように頷きながら言った。

『《真つ黒》と言う所も同じですよね！』

「あとは凄く強いと言う所も」

ジャンヌとツクヨがさらに共通点を挙げる。

「案外共通点多いのね、この二人って」

「やっぱ主人公感あるわね」

シノンとリズベットが立て続けにそう溢した。

「あ、この機会だし聞いておきたいことがあるんだけどさ」

ぶつちやけてキリトが好きだ、って子はどれくらいいるの？」

リズベットが皆に対してそう問いかける。

するとアスナ、ユイ、ストレア、リーファ、フィリアそしてリズベットが手を上げた。

「こ、こんなにいるんだ……」

アスナがその人数の多さに戸惑いの表情を浮かべた。

「じゃあ次、ジェネシスが好きだって子は？」

その言葉で手を上げたのはティア、レイ、サクラ、シリカ、サチ、そして……

「待つて、シノン？」

やや小恥ずかしそうに小さく手を挙げているシノン。

「まあ……アイツにはこの間ちよつと助けられたから……」

シノンは頬を赤らめながら小さな声で言った。

「シノン、その話後で詳しく」

ティアはシノンに対してジト目で言った。

「そう言えばイシユタル、あんたはジェネシスにそう言う感情とか無いわけ？ずつと幼馴染だったんでしょ？」

リズベットが隣に座るイシユタルに対して尋ねた。

「あー、まあそうなんだけどね。」

でも私がこいつらと関わり出した頃にはもう私が付け入る余地すら無かったっていうか…

この二人、現実じゃカップルみたいにいちゃついてたからね。もうさっさと付き合いなさいよって感じだったわよ」

「そんな昔から二人の関係は続いてたんだ…」

イシユタルの独白にサチが愕然とした。

「だからこの世界に来て結婚してるなんて聞いても、正直あまり驚かなかったわ。この二人ならやりかねないしね。」

……ま、流石に娘がいるって聞いた時はびっくりしたけど」

そう言っただけで彼女はレイの方に視線を向けた。

「あの、娘がいることってそんなに不思議なことなんですか？」

するとレイが首を傾げながらイシユタルに対して問いかけた。

「そうよ、普通はかなり驚くものなのよ？あなたも大きくなったらそれが分かるわ」

「むむむ……難しい事もあるんですね」

この時のレイの疑問が後に一つの波乱を巻き起こすのはまた別の話。

その後、数時間女子会は続き、各々話したいことを話し合えてその日は解散となった。

五十三話 ユイとレイの疑問

女子会が行われてから数日後。

皆は攻略を終え、ディナー後の談笑を楽しんでいた。

すると……

「ママ、少しいいですか?」

「ん?どうしたのレイ」

レイが隣に座るティアとジェネシスに問いかけた。

「子供ってどうやったら出来るんですか?」

「ブツツ?!」

その瞬間、場の空気が一瞬で固まった。

ジェネシスは飲んでいたコーヒーを思わず吹き出してしまった。

「あつ、それ私も気になります!ママ、どうやればいいんですか?」

するとそれに便乗してユイまでもがアスナに尋ねた。

「なつ……ど、どうしてそんな事聞くの?!」

「この間、皆さんで女子会をやった時、子供を作るのは非常に複雑な過程があると教わったので」

アスナが驚きながら訊き返すと、レイがそう答えた。

「パパ、ママ、どうやったら子供が作れるのですか?」

レイはティア達に対して興味津々な様子で問いかけた。

「えーっと……」

返答に困ったジェネシスがとった行動は……

「……すまねえ、俺は全く知らねえんだ。こう言うのはママが知ってるからそっちに聞いてくれ」

あくまで知らないふりをする事だった。

するとそんな彼の顔面を『ガシツ』とティアの右手が掴み取る。

「へえ、そーなんだあ?久弥ったら知らないふりしちゃうんだあ。」

私にあんな事やこんな事までしておいてそんな事言っちゃうんだあ?」

ティアはドスの聞いた声と真っ黒な笑みと共にジェネシスの耳元

に顔を近づけて囁くように言った。

凄まじい力で握られた彼の顔からミシミシと痛々しい音が響く。

「ちよ……あの、ティアさん、落ち…落ち着いてっ……っ…って痛いイイ!!」

思わず悲鳴を上げるジエネシス。

すると……

「あんな事やこんな事、ってどんな事ですか?」

レイがそう尋ね、ティアはハツとした顔でレイを見た。

「ママ、あんな事やこんな事って何ですか?」

「あ……えっと……」

ティアは知らぬ間に墓穴を掘ってしまった事に気づき、顔が真っ赤になった。

「き……キリト、お願い!!」

そしてキリトに丸投げした。

「な、丸投げは卑怯だろ?!

……アスナ、頼む!」

「ちよっ……何で私なのよ?!」

「こ、こう言うのは母親の役目だと思うんだよ。それに男の俺がこんな事教えるのはその……色々アウトだろ?」

「な、それはそうかもしれないけど……」

既に顔が真っ赤なアスナに対し、ユイとレイは期待に満ちた視線を向ける。義理堅いアスナはこれ以上誰かに丸投げすることもできず、必死に頭を働かせてどうすればオブラートに且つユイとレイが納得のいく答えになるかを考えた。

「ぞ、そうだ!!」

ユイちゃん、レイちゃん。子供はね……

……愛し合う男女の共同作業で出来るんだよ！」

「な、成る程……！」

アスナが示した答えを聞き、ユイとレイは感動したように目を輝かせた。

「(おおお……これはオブラート且つ正しく真実を告げたい答えだ……！)」

「(流石アスナ……俺たちに出来ないことを平然とやってのける。そこに痺れる、憧れるツ!!)」

「(でもこれ、具体的な行為を示していないからユイとレイ、そこに食いついてくるんじゃない……)」

ジェネシスとキリトがアスナの答えに感心する中、ティアは新たな不安を感じた。

「では、愛し合う男女の共同作業って、具体的にはどうするんですか？」

「ええっ?!」

「(やっぱりそこに食いついたかーっ!!)」

ユイがそう聞き返し、ティアがやっぱりと頭を抱えた。

「私、どうやったら子供が作られるのか知りたいのです！」

「え、ええっど……それは……」

返答に困るアスナ。

その時、宿の扉が開かれ、中にミツザネがやって来た。

「お、お父さあああん!!!」

「ちよつとヘルプウウウ!!!」

そんな彼に目掛けてティアとジェネシスがもうダツシユし、両腕を捕まえて確保する。

「ちよ、なんだあ?何だつてんだいきなり?!」

当然ながら訳がわからず困惑するミツザネ。

「ユイ、レイ！お父さんなら知ってるからこの人に聞いて!!」

ティアはユイとレイに向かってそう叫ぶ。

「わかりました!!それじゃあミツザネさん!!」

「子供はどうやったら出来るんですか?」

ユイとレイは未だ困惑しているミツザネに対してそう問いかけた。

「……あー、成る程。子供ね………そういや俺も昔、雫に聞かれた時は

困ったもんだ……」

昔を思い出しミツザネは目頭を指で押さえた。

「よし、ユイにレイ。子供はな………」

………愛し合う二人がベッドで一晩寝ることで出来るのさ」

ミツザネはキリツとした顔でそう答えた。

「お……お……」

「お父さんんんん?!?!」

ティアとジエネシスはギョツとした顔でミツザネを見ながら叫んだ。

「な、成る程………でもそれだと、パパとママは毎日一緒にベッドで寝ていますけど……」

その答えを聞いたレイは首を傾げながら呟いた。

「それなら何故出来ないのでしょうか?」

「ああ………えっと………それは、だな………」

しどろもどろに口籠るジエネシス。ティアはもう顔がリンゴのように真っ赤に染まっている。

「あ、そうか！」

すると突然ユイが合点がいった様子で叫んだ。

「お姉ちゃん、この世界ではどうやっても子供ができるシステムはないでしょう？」

だから、ジエネシスさんとティアさんは予行練習をしているのですよー！」

「ああ、成る程！現実に戻ったらいつでも子供が作れるようにここで練習しているのですね！」

「……………／／／」

「あう~~~~~~~~つっつ／／／」

ジエネシスは顔を真っ赤にして頭を抱え、ティアは羞恥心のあまり地面を転げ回っている。

「……………お前ら、まさかとは思うが」

そんな彼らをドン引きな表情で見つめるミツザネ。

「違うから!!人数が増えて部屋のスペースが無くなったから共有してるだけだから!!」

そんな彼に対して必死に否定するティア。

「ですがまだまだ謎です。何故睡眠を共にするだけで子供が出来るのでしょうか？」

「確かに……………不思議ですね……………」

ユイとレイはその答えに納得できていない様子だ。

キリトはどうかして納得の答えが示すことが出来ないか思索する。

「……………凜、頼む」

するとジエネシスはここで、イシユタルを指名する。
が、

「ぎっけんじゃないわよ!!こう言うのは親であるあんた達が説明しなさいよ!!」

と必死に拒否した。

シリカ、サチも同様の理由でレイ達に対する説明を断った。

「では、ここは私にお任せください」

すると得意げな顔で名乗り出たのはサクラ。
本当に大丈夫なのかジエネシス達は不安だったが、とりあえず任せ
る事にした。

「姉さん、子供はですね……………」

……………お父さんの剣をお母さんの鞘に挿れるんです」

「ぶっ?!」

「なっ……………!!」

予想の斜め上に行くサクラの説明の仕方にジエネシスとキリトは
思わず吹き出した。

「パパの剣を……………ママの鞘に……………??？」

レイは言葉通りにジエネシスの大剣をティアの刀の鞘に挿れる様
を思い浮かべるが、意味がわからずに止めた。

「そんな、入るわけないじゃないですか！

パパのが太くて大きすぎます!!」

「太くて」

「大きい……………」

レイの反論を聞いたシリカとサチはなぜか恥ずかしそうに頬を赤
く染めながらそう呟いた。

「やめんかあ!!」

何やら違う世界に行っているシリカとサチの頭を引つ叩いて正気
に戻す。

「で、でもさ……実際、どうだったのよ雫」
イシユタルがティアにそう問いかけるが
「……………す……………」

……………凄かった／＼／＼／＼

「オイイイイイイイイイイイー!!!」

ティアの返答にギョツとした顔で叫ぶジエネシス。

「ああ…話がどんどん違う方向に……………」

論点がズレていく展開にキリトはげんなりとする。

すると……………」

「話は聞かせてもらったぜ!」

突如カウンターから声が響く。

見ると、野武士面の男、クラインがやって来ていた。

「クライン?!お前、この間のデスソースで殺された筈じゃ……………」

「残念だったな、トリックだよ。そりやそうと、お前さん達子供の作り方が知りたいのか?」

クラインの問いにユイとレイは首を縦に振る。

「そうか、じゃあ俺様が直々に教えてやるぜ……………」

(アイキヤナベリー)

すると突如、どこからか軽快な音楽が流れ始める。

「え?何この音楽……………」

アスナがそれを聞いて戸惑った瞬間。

「ユイちゃんにレイちゃんウ!!子供の作り方の話をしよう」(アロワナ

ノー)

クラインはニヤリと笑いながら大声で言った。

「何故愛し合う二人がいることで出来るのか……二人の共同作業とは何なのか……！」

「(やべえ、元ネタ的にロクなこと言わねえぞコイツ)

それ以上言うな!!」

何かを察知したジエネシスがクラインに向かって走り出す。

「その答えは……ただ一つ……！」

「止めろーっ!!」

キリトもクラインへ駆け出す。

それに構わず、クラインは続ける。

「ユイちゃんにレイちゃんウーずばり、子供は……」

……………キスによって出来るのさああああ!!」(エキサーイエキサーイ)

勝ち誇ったような笑顔と共にヴエハハハハハハ!と高笑いを上げるクライン。

それを聞いて拍子抜けしたのか、彼目掛けて走っていたジエネシスとキリトは途中で転んだ。

「そ、そんな……キスで出来るなんて……！」(ツヘーイ)

レイが信じられない、と言わんばかりの表情で愕然とする。

「そ、そうだ!キスだよキス!キスで出来るのよ!!」

「そうそう!キスよ、キス!」

クラインに便乗し、ティアとアスナは必死に肯定する。

「……あー、もうそれでいいわ」

ジエネシスは否定するのを諦め、彼もまた便乗した。

「なるほど、キスだったんですね!!」

「たしかに二人の共同作業です!!」

ユイとレイは満足のいく答えを得たようだ。

「これで、いいのか?」

キリトは疑問に思いながら呟いた。

—————

〈数日後〉

最前線九十層迷宮区の攻略を終えたジエネシスとティアが宿に帰宅した。

「レイ、ただいま」

「パパ、ママ!お帰りなさいです!今回もご無事で何よりです!!」

彼らの帰りを愛娘のレイが出迎えた。

「悪いな、いつも留守番させちまって」

「いえいえ、ユイとストレアとサクラが居てくれるので大丈夫ですよ!」

それで、今日はもう休まれますか?」

「そうだね、最前線の攻略だったから。今日はそうする」

「分かりました!では、ゆっくり休んでくださいね!」

そして二人は部屋へと上がった。

戻るとすぐに二人は防具をストレージに収納し、ラフな部屋着に着替える。ジエネシスは上が黒のTシャツ、下が黒生地には赤いラインの入ったジャージ姿。ティアは水色のキャミソール上に青いパーカーを羽織る。

「だあ〜〜……疲つかれたあ〜〜」

ジエネシスは着替えるなり即刻ベッドにダイブし、仰向けになつて

横になる。

彼がこうなるのも無理はない。現在は九十層。モンスターレベルや攻略の難易度も当然高い。今まで以上に苦戦を強いられているのだ。

「ねえ、久弥。ちよつと失礼するね……」

するとベットで寛ぐ彼の元へティアが歩み寄る。

そして……

「えーい♪」

彼女も勢いよくダイブし、彼の頭部を自身の胸に抱き寄せた。

「む、むぐ……く……!!」

「うふふつ、ぎゅー♪」

突然の事で驚き、ジエネシスはジタバタと手足をバタつかせる。しかしティアの抱擁の力が思いの外強く、彼の顔はティアの豊満な双丘に埋められているのだ。キャミソールの薄い布越しに、いつしか感じ取ったふんわりとした優しく温かな感触が顔面を包み込む。視界一杯に覆う彼女の双丘と谷間からは、ほのかに甘い香りがした。

1分以上そうした後、ティアは抱擁を解いた。

「あははっ、久弥ってば赤くなっちゃってる♪」

ティアはジエネシスの反応にご満悦の様子だ。

「お、おまつ……いきなり何を……」

ジエネシスは突然のティアの行動を受け顔を真っ赤にして慌て問いかけた。

「しばらく、こんな事してなかったから……最近、ちよつと寂しかったんだよ……」

ティアは彼の上に跨がり、上から覆いかぶさると彼の顔を両手で包み込むように挟みながら、うっとりとした顔で言った。

「今日は、久弥に甘えさせて欲しいな……」

小さな声で囁く。赤くなった頬とやや細められた両目が妙に色っぽく、ギリギリまで近づけられた彼女の口から熱い吐息が漏れ出す。

ティアの誘惑は想像以上に破壊力が高く、ジエネシスはもう完全に固まってしまっている。そんな彼の様子を見て更にティアは身体を

密着させていく。

「いいよね……………久弥……………っ……………ん……………」

そしてティアはゆっくりと自身と彼の唇同士を……………

「わぁーっ!!もしかしてこれから、子供を作るんですか?!」

「にやああああーっ?!」

「ぶrrrrrrぁーっ?!」

部屋に響いたレイの声に、驚きのあまりティアは思わずジエネシスをぶっ飛ばし、理不尽にも彼はベッドから叩き出されそのまま壁に激突する。

「な……………な……………レイ?!何でここに?!」

「お疲れのようだったので、温かいお茶をお持ちしました。よく眠れるかと思って」

「サンキュー、レイ。気が効くいい娘だな!でもせめてノックはしような!!」

「ごめんなさい、パパとママの部屋なので大丈夫だと思ったので。

それより、お二人はこれから子供を作るところだったんですか?」

レイが目を輝かせてそう問いかけた。

「こ、子供を作るって、どうしてそんな……………」

「だって、パパとママ、これからキスしそうな感じでした!

キスで子供が出来るって、この前教わったので!!」

「ああ〜……………そうか、たしかにそう教えたな……………」

ジエネシスはそれを聞いて思わず頭を抱えた。

「あ、でもS A Oでは子供は作らないんでしたっけ……………」

「そ、そうだレイ。だから別に子供を作ろうだとかそう言うのじゃなくでな……………」

ここでジエネシスは考えた。このままレイに『キスで子供が出来る』と信じ込ませたままにするのは不味いのでは無いかと。

もし仮に、自分たちとキリト達以外のカップルが街中でキスしようとしているのを、レイが見かけないとも限らない。

そうなったら大変な事になる。その事をティアに伝えたと、彼女もそれに同意した。

「れ、レイ。あのね、キスで子供が出来るって話……………」

「はい、何ですか？」

「……………あれ、嘘なの」

瞬間、レイの表情がピタリと固まる。そして、

「ええええええーっ?!?! そうなんですか?!?! どうしてそんな事を……………」

「それは……………はつきり言うと、とても恥ずかしい事だからだよ!!」

ティアはもう意を決してはつきりとそう告げた。

「子供を作るのが恥ずかしいこと……………でも、生物学的に子供を作るのは、種を残す上でとても大事なことだと思えますが……………」

「ま、まあ確かにそうだけどな?けどそれとこれとは別の話なんだよ」

「むむむ……………人間って難しいのですね」

「うんうん。それに、子供の作り方はレイに教えるにはまだ早い。社会的とか責任能力的な問題もあるしね」

「な、なるほど……………確かにそれなら理解できますー!」

レイは合点がいったのか首を縦に振りながら言った。

「では、子供の作り方は聞かないでおきますね。

私はまだまだ、パパとママの子供でいたいですから!」

「うんうん。それがいいよ!」

レイに何とか誤魔化す事に成功した二人はほっと胸を撫で下ろし

た。

レイが部屋から出た後、二人はナニもせずに静かに眠りについた。

五十四話 シリカとピナの強化アイテム・ジェネシス 体調を崩す

01『シリカとピナの強化アイテム』

「あつ、ジェネシスさん！今お時間いいですか？」

ある日、アークソフィアの街を歩いていたジェネシスの元にシリカが駆け寄ってきた。

「おう、シリカじゃねえか。どうかしたのか？」

「えっと、実はですね。あたしのピナをパワーアップさせられるアイテムが見つかったんです！」

と、シリカは興奮気味に言った。

「マジでか?!どこでゲット出来るんだ？」

「えっと、七十八層の花形モンスターがドロップするらしいです！」

「あー、あそこか……うし、んじゃ早速いくか」

「はい！よろしくお願いします!!」

「にしても、よかったなあピナ。テメエもようやくパワーアップだよ？」

ジェネシスは彼女の肩に座り込んでいる子竜のピナは頭を撫でる。

ピナは彼に撫でられると『きゆるるっ！』と鳴き声を上げ、嬉しそうに飛び跳ねた。

—————

薄暗い煉瓦造りの道を二人は進んでいく。

「あの、今回倒すモンスターってどんな感じなんですか？」

「ん？ああ、植物型なんだが……なんつうの？四十八層のやつより数倍は気持ち悪い」

「…………え」

その瞬間シリカは引きつった顔で立ち止まった。

「まあそうビビるな。そんな大した強さじゃねえから安心しろ。

ほら、来たぞ」

ジェネシスが顎をぐいっと動かした直後、目の前に青白い光が3つ現れ、その中から三体のモンスターが現れた。

緑色の草木状の胴体に巨大な花が付いており、そこには不気味な巨大な口があった。

「いやああああ!!!気持ち悪いですううううー!!」

シリカはそれを見るや否や即座に逃げ出した。

「おいおい、んなこと言ったらアイテム取れねーぞ?」

一目散に走るシリカに対して呆れた顔でジェネシスは言った。しかし目の前のモンスターははつきり言っただけで最悪に醜いもので、シリカのような無垢な少女が見るにはあまりにも悍しい見た目をしていた。

ジェネシスもそれを分かっているのです、ここは自分が行こうと大剣に手をかけた。

しかしモンスター達はジェネシスを無視して一目散にシリカに向かって走って行く。

「やだああああこっち来ないでえええー!!」

「つておい、シリカ!気持ちちは分かるが戦え!タゲが全部そっちに行つてつから俺が戦い辛え!!」

「や、やだもうっ!こっち来ないでつて……言ってるでしょ!!」

シリカは尚も付き纏うモンスターに嫌気がさし、短剣を引き抜いて勢いよく斬りつけた。

「よしよし、その調子で頼むぜ!」

ジェネシスは満足そうに頷き、大剣を引き抜いてモンスターの群れに向かって走り出す。

「せあああああつ!!」

空中に飛び上がったシリカは回転切りの要領でソードスキル《ファッドエッジ》を繰り出す。

同時にジェネシスが大剣範囲技《サイクロン》で周囲のモンスターを纏めて斬り、消滅させた。

しかし残念ながら目当てのアイテムはドロップしなかったようだ。

「これはアレだな……しばらくここで周回ルートだな」

「しよんなああああ……」

シリカはジェネシスの言葉を聞きガツクリと肩を落とした。

それから五分が経過した。当初は逃げ腰気味だったシリカも、だんだんと耐性が付いてきたのか逆に攻勢になり始めた。

「少しは慣れたか？」

「まあ、ここまで戦うと流石に見慣れて来ますからね」

とは言えやはり抵抗はあるのか、シリカは苦笑しながら答えた。そうしているうちに、目の前に再び三体のモンスターがポップした。

シリカはそのモンスター達に向かって駆け出して行くと、短剣最上級スキル《エターナルサイクロン》を発動し、エメラルドグリーンの疾風を伴う斬撃を放ちながら瞬く間に斬り伏せた。シリカはもうジェネシスの手助け無しでもここまで戦えるまでに成長していたのだ。

するとモンスターが倒れた場所に一つの赤い鉱石が落ちていた。

「おつ、シリカ。アレが《進化の鉱石》ってやつだな」

「あつ、あれがそうなんですか！ やったあ、やっと出てきた……」

シリカはそれを確認して安堵のため息を溢すと、早速その鉱石のところまで足を進める。

が、その時ジェネシスは察知した。シリカの足元に何かが《潜伏》しているのに。

ジェネシスは走りだし、シリカを突き飛ばした。

「えつ、ジェネシスさん何を……」

次の瞬間、ジェネシスの足元から先程の植物型モンスターが出現し、彼の体を触手のような蔦で絡めとった。

「じ、ジェネシスさああああん!!」

「大丈夫だって、こんなもん平気だ。見てろ、こんなもんすぐに引きちぎって……」

ジェネシスは自身に巻き付く蔦を引きちぎろうと腕に力を込めるが……

「あ、あのっジエネシスさん！その……服が……服があ!!」

「は？服………つて、なんじゃこりやああああ?!」

見ると、ジエネシスに巻き付く蔦から粘性の液体が噴出し、それによつて彼の防具が溶け始めていたのだ。

「ウソでしょおおおおー?!?!」

「ジエネシスさん！待つててください、今行きますから………つて、ちよつとピナあ?!」

『きゆるるっ！きゆるるるっ！』

シリカが短剣を引き抜いて救援に向かおうとした時、ピナが彼女の顔にへばり付いたのだ。

「ピナ！グツジョブだがそれは後にしてくれ！とりあえず先に助けてえええー!!!」

「そうだよピナ！先にジエネシスさんを助けないと……ああでもこのままじゃジエネシスさんの裸が………」

「いや、今ならまだ行けるから！まだギリギリセーフだから！」

「そ、そうは言つてもっ！ピナが顔にへばり付いてて……」

シリカは必死にピナを引き剥がそうとするが、中々引き剥がせない。

そうこうしているうちに……

「ギヤアアアアア!!溶けたらいけないとこまで溶け始めたアアアアア!!!」

「なっ、溶けたらいけない場所つてどこですかああああ?!?!」

「言わせんなバカああああ!!!それよか誰か助けてくれえええー!!!」

身動きが取れず服を溶かされ続けるジエネシスの悲鳴が木霊したその瞬間。

銀色の疾風がジエネシスを捉えていたモンスターの首を撥ねた。

「はあ………ダメだよ久弥。外でそんな姿を見せちゃ」

ティアは呆れた表情で地面に落ちたジエネシスを見下ろした。

「ごめんなさいジエネシスさん、あたしのせいで……」

帰り道、シリカは終始申し訳なきように歩く。

「気にすんなって、俺も完全に油断してたからな」

ジエネシスはシリカの謝罪を笑って流した。因みに装備は既に元通りになっている。

「つーか、野郎の服が溶ける展開とかどんな需要があるんだよ」

「大丈夫、需要なら私にあるから」

げんなりするジエネシスの隣で歩くティアがそう言った。

その夜、シリカはピナに早速今日手に入れたアイテムを与えた。

「ピナ、これがパワーアップアイテムだよ」

『きゅるっ！』

ピナは嬉しそうな鳴き声を上げると、それを頬張った。

その次の瞬間、シリカの元に一通のシステムメッセージが現れた。

そこに書かれていたのは――

《ADVENT》という文字だった。

――

《指定条件達成》

上位EXスキルNo. 09 『タイムズワルツ』解放》

☆――――――☆

02↳ 『ジエネシス体調を崩す』↳

その日、攻略を終えて宿に戻ったジエネシス。

しかし、今日はいつもと何かが違った。

「……………フウ」

何故か分からないが、身体が妙にだるいのだ。

「あ、お帰り久弥。今日もお疲れ様！」

「おう、ただいま……………」

彼の帰りをティアが出迎えたその時、微かに目眩が襲った。

「……………ん？久弥、大丈夫？なんだか顔色が悪いけど……………」

「そうか？まあ確かに……………なんかだるくてな……………風邪でもひいたか？」

「SAOの中なのに？モンスターからバッドステータスを受けたりした？」

「いや、そんな敵とは戦ってねえけどな……………ていうか、圏内に入れば解除される筈だし……………」

しかしそんな話をしている間に、ジェネシスはどんどん気分が悪くなるのを感じる。

「やつつべ……………」

ジェネシスは思わず目頭を押さえる。

「ねえ、ひよつとして……………疲れてるんじゃない？」

「と、言うത്？」

「現実ではずっと寝たきりって言っても、脳は働きづめな訳だし。それに、現実の身体がなにかの病気になったのかもしれない……………」

うん、決めた」

そしてティアは一呼吸置くと、

「久弥はしばらく攻略禁止。部屋でゆっくりお休みしなさい」

きつぱりとそう告げた。

そう言うわけにもいかない、ジェネシスは言いたかったが、自身の体調を鑑みるに休まなずにはいられない様であるし、何よりティアの表情が有無を合わせないものだった。

「……………分かった、今日はもう休むわ」

「よろしいー！」

ジェネシスの答えにティアは満足げに頷く。

その後、後で見舞いに行くことをティアは伝え、ジェネシスは自室へと戻る。

「うつぶ、気分悪い……」

普段登り慣れている階段を上るだけで既に限界が来ており、ジエネシスはいかに自身が重傷かを悟った。

部屋に入るなり部屋着に着替え、即座にベッドインする。

「あ……………やべ……………ベッドに入ったら……………急に眠気が……………zzz」

—————

『きゆる……………』

自身の頬を突かれる感覚に、ジエネシスは深淵の眠りから引き起こされる。

「……………なんだあ……………？何が頬を突っついてやがる……………」

『きゆるきゆる……………』

聞き覚えのある鳴き声。自身もよく知る生き物の声だ。

「ん……………ピナ、か？」

瞳を開けると、自身の顔を心配そうに覗き込むピナがいた。

ピナがここにいると言うことは、必然的に彼女もいる。

「ジエネシスさん！」

彼が目覚めた事に気付いたシリカが慌てて駆け寄る。

「おう、シリカ……………どうした？」

「どうした？はこっちのセリフですーびっくりしましたよ!!」

もしものことがあったらと思うと、どうしようかと思いました……………」

シリカの言葉で自分はベッドに入った瞬間すぐに寝落ちしてしまった事を思い出す。

「あ、起きちゃダメです！喉乾きましたか？今お水を出しますから！」

「おう、サンキュ」

シリカに冷水の入ったコップを手渡されたジエネシスは早速それで喉を潤す。

「悪い、助かったわ」

「いえいえ！」

ティアさんから聞きました。ジエネシスさん、なんか疲れてるみたいだつて。みんな心配してました。ピナもここで、ずっと看病してたんですよ？」

「そうか……迷惑かけちゃまったな」

「そんな、迷惑だなんて！」

ジエネシスさんはみんなの希望ですから。それに……あたしのヒーローですし！

だから、こんな病気に負けちゃダメですよ？」

『きゆるきゆる！』

ピナも「頑張り」と言わんばかりに首を縦に振った。

「ああ、分かった。ちゃんと治すから」

「はい！ちゃんと休んで、元気になって下さい！！」

シリカはそう言って部屋を後にした。

それを見送ったジエネシスは再び眠りにつこうと目を閉じる……

「ジエネシス?!」

「うおっ?!」

が、突如部屋に自身の名を呼ぶ声が響いたので飛び起きた。
入ってきたのはストレア。

「……………」

「な、なんだよ入ってくるなりじーつとこつち見て」
ストレアは険しい表情でジエネシスを見つめる。

「…ねえ、病気になったって本当？」

「いや、病気つつうかただ体調崩したつつうか……」

「えへへ、ならアタシがジエネシスを元気にしてあげるね。」

「えい♪」

そしてジエネシスに向かって勢いよく両手を伸ばすストレアだったが、そんな彼女を背後から羽交い締めにして引き離す人物がいた。「ダメですよ姉さん！今お父さんは身体を壊してるんですから！」

ストレアの妹分であるサクラだった。

「えー？だってアタシの胸でジエネシスが元気になるならいいかなって」

「何言ってるんですか！お父さんが元気になる胸はお母さんのだけですー！」

「お前も何を言ってるんだ」

思わずサクラにそう突っ込みを入れるジエネシス。

「はーなーしーてー！サクラアアー!!」

「うるさくしてすみませんお父さん。早く治ってくださいね！」

そしてずるずるとストレアを引きずりながら部屋を後にするサクラ。

「……何しに来たんだあいつら」

困惑した顔で呟くジエネシス。

やれやれとため息を吐きつつ、今度こそ彼は眠りについた。

「おーい、久弥生きてるー？」

「返事がありません。ただの屍のようです」

「生きてるわバカ。勝手に殺すんじゃないやねえ」

しばらくして、再び聞こえた声にジエネシスの意識は引き戻され、目を開ける。

部屋にはイシュタルとオルトリアがおり、イシュタルが自身の寝るベッドに腰掛けてこちらを見下ろしており、オルトリアはベッドの向かいにあるソファに寝そべってこちらを見ていた。

「なんだ生きてましたか。よかったです安心しました」

「全然そうは見えねえけどな」

「まあまあ、澄香もなんだかんだで心配してたのよ？ 雫から知らせを受けるなり、大急ぎでキッチンに入って何かを作ってこの部屋に来たんだから」

「勘違いしないでください。ただちよつと風に効くと言うお菓子の味見をして欲しかっただけですから」

そう言つてオルトリアは懐から冷たいお菓子の入ったタツパを手渡す。

「この世界じゃ栄養はあまり関係無いかもですけど、こう言う時はゼリーとかが良いそうです。

と言うわけで《みかんの寒天》です」

「へえ、こりや良いな。んじや早速……」

「あー待った待った」

受け取つたタツパの蓋を開けて早速開けようとした手をイシユタルが制した。

「もうすぐ雫が夕飯を作つて持つてくるわ。それまでそれは冷蔵庫にでも冷やして置いときなさい」

「そつか、ならそうするわ」

「あ、起きないで良いわよ。私が直してあげるから」

「サンキュ、凜」

ジエネシスはタツパをイシユタルに手渡す。

「にしても、なんだか懐かしいわね」

「ん？ 何がだよ」

「昔、私が風邪ひいたとき、あんたよくこうして看病してくれてたわよね」

懐かしむようにイシユタルは言った。

「あー、そんな事あったな。そんなときにてめえ俺が帰ろうとしたら『まだ帰らないでえ』つて泣き喚いたっけ」

「しようがないじゃない、あんたがいないと誰も付き添つてくれる人がいなかつたんだもの」

「たく、わがままな困ったちゃんだったな、あの頃の凜は」

「うっさいわね！……まあでも、なんだか複雑な気分ね。今はこうして逆の立場になってる訳だし」

「……ああ、そうだな」

するとイシユタルは徐に立ち上がる。

「じゃ、大丈夫そうだから私たちは行くわ。もう少ししたら雫が来るみたいだから、それまで大人しく寝てなさいよ」

「おう、悪いな」

「いえいえ、それじゃあね」

「お大事にです」

イシユタルとオルトリアはそう言って部屋を後にした。

「はあ……しつかし、まさかあいつに看病される日が来るなんてなあ」

一人そう呟いたジエネシスはゆっくりと瞳を閉じた。

—————

香ばしい匂いに釣られ、ジエネシスはゆっくりと目を開く。

「あつ、ママ！パパが起きました!!」

「レイ、本当?」

目の前には愛娘であるレイと、部屋の奥からティアの声が響く。

足音と共にティアが鍋を抱えてやって来た。

「おはよう、久弥。よく眠れた?」

「ああ、おかげさんでな」

「パパ、大丈夫ですか? 顔色がまだ悪いみたいです。」

「このところ、ずっと休まず攻略してましたから……」

レイは心配そうな表情で言った。

「そうだよ。久弥は頑張りすぎなのよ」

「そうなの、か?」

「そうだよ。久弥の事は私が一番よく知ってるんだから。」

ほら、起きちゃダメ。おかゆ食べさせてあげるから」

「いや、自分で食えるから……」

「ダメ。今は少しでも安静にしてないといけないから。」

ほら、あーんして?」

ティアは鍋の蓋を開け、蓮華で一口分掬うとジェネシスの口元まで持っていた。

最初は恥ずかしさもあって戸惑うジェネシスだったが、食べないわけにも行かないので大人しくそれを食べた。

「ふふっ、どう?美味い?」

「……ああ、美味い」

その後もティアの介抱によっておかゆを完食したジェネシス。

「ふう……」

ジェネシスはまだ身体の調子が戻っていないようで、食事を終えた直後にまた寝息を立て始めた。

「パパ……」

そんな彼を不安げな顔で見るレイ。

「大丈夫だよ、レイ。パパは世界で一番強いんだから。こんな病気になるて、すぐに治っちゃうよ」

そんなレイを安心させるように優しい口調で諭した。

「……そうですね!パパならきつと、すぐに元気になりますよね!」

レイは母の言葉を受けて笑顔で頷いた。

「そう、きつと大丈夫。だから……早く元気になってね、久弥」

ティアは愛おしそうな目でジェネシスの頬を撫でた。

レイも父親であるジェネシスの手を握りしめた。

—————

その後は交代でジェネシスの看病をする事になった。

まずはサチとシノン。サチはジェネシスの眠るベッドの隣にある

椅子に座り、シノンにはソファで読書をしている。

サチは心配そうな表情でジエネシスを見守っていた。

「そんなに心配しなくても、コイツなら大丈夫よ」

シノンはサチに向かって淡々と告げた。

「だって……すごく心配だから」

「コイツは多分、そんな軟弱者じゃ無いわよ。明日になればいつも通りバカなこと言いながら起き上がってくるわ」

「あはは……シノンは落ち着いてるね」

「……ま、私たちが慌てても仕方ないしね。今はジエネシスの体調が回復する事を信じましょう」

「そうだね」

続いてやって来たのはリズベットとリーファ。

「キリトもそうだけど、こいつも中々の女誑しね」

リズベットはジエネシスを見下ろしながら呆れた表情でそう呟いた。

「なんか、意外ですよ。ジエネシスさんがまさか体調を崩すなんて。

一番風邪ひかなさそうなのに」

リーファはソファからジエネシスを見つめながら言った。

「ま、こいつも人間だしね。風邪くらい引くわよ。

意外なのはまあ、同感だけど」

「……ちゃんと、治りますよね？ジエネシスさん、きつと大丈夫ですよ
ね」

「大丈夫大丈夫、コイツは殺しても死なないわよ。

あんたはそんなに不安にならなくてもいいわよ。

だから……さつさと起きなさいよね。あんたがそんなんじや、みん

な調子狂うんだから」

『主よ……どうか彼に御加護を』

ジェネシスの枕元に膝き、十字架を両手で握って祈りを捧げている。

「すごい、本物の聖職者みたい……」

「みたい、じゃなくて本物だよ。多分」

そんな彼女を後ろから見つめるハツキとサツキ。

「でも、ほんとびっくりしたよね。ジェネシスさんが風邪だなんて」

「まあ、僕からみても人一倍攻略に勤しんだからね。そりや体調も崩すよ」

ハツキの呟きにサツキは苦笑しつつ答えた。

『ジェネシスさん、どうか早く治ってくださいね』

ジャンヌはジェネシスの手を両手で優しく包み込むように握りながら囁いた。その仕草はまさに聖女と呼ぶにふさわしいものだった。

「で、今度はわっちらの番、と言うわけか」

続いての出番はツクヨとフィリア。

「……ま、コイツは放っておいても勝手に治るじやろう。

フィリア、主はこの間にでも休んでおきなんし」

「え？でも、ジェネシスの看病を……」

「要らぬ。ただ眠っているだけの人間を見るだけなど時間の無駄にも程がある。それより主こそコイツの二の舞にならないよう休んだ方

がいい。この男はわっちがみておく」

「それじゃツクヨさんも休めないじゃ無い」

「案ずるな。わっちはそんなやわな女では無い。主は日頃の鍛錬の疲れもあるろう。いいから休め」

「わ、分かった。それじゃ、お言葉に甘えるね」

そしてフィリアは自室へと戻って行った。

「ふむ……………さて、この時間どうしたものかのう。」

アイテム整理でもしておくか」

ツクヨは暇つぶしに自身のアイテム整理を行った。その間、ジェネシスはぐっすりと眠っていた。

—————

最後にキリトとアスナ組。

「ぐっすり寝てるね、ジェネシス」

「ああ。よっほど疲れていたんだな……」

ソファに並んで座りながら、キリトとアスナはジェネシスを見ながら言った。

「彼、普段から本当に頑張ってるからね。誰よりも前でモンスターと戦って、周りのみんなに指示を出して、常に周りに気を配ってる」

「それだけじゃ無い。シリカやサチ、リーファみたいなレベルが足りないやつとの指導とか育成、リズの店に必要な素材集めまでジェネシスがやってるんだもんな。」

正直、今の俺たちをここまで支えて来たのは紛れもないジェネシスだよ」

「正直、ジェネシスがいるだけでかなり心強かったからね。知らず知らずのうちに私、甘えてたのかもしれないな」

「それは俺も同じだよ。俺一人じゃここまでみんなと来れなかった。」

ジエネシスがいなかったら、もっと攻略は大変だったと思う」

二人はジエネシスの働きぶりに感謝しつつ、それに甘えていた自分たちを振り返り反省した。

「普段はぶっきらぼうで少しバカな発言とかしたりするけど、仲間の事を誰よりも考えてるのってやっぱり彼だよな」

「ああ。でも今後は、ジエネシス一人に背負わせないようにしないと。あいつ一人の負担をもっと減らせるように、俺たちも頑張っている」

「……………」

「ティア、次頼むぜ」

交代の時間になり、次はティアの番となった。

キリトとアスナは下に降り、食堂で待つティアに伝える。

「分かった。ありがとうね、二人とも」

ティアはキリト達に礼を述べると即座に二階に上がり、ジエネシスの部屋へと向かう。

が、ここで異変が起きた。

「……………ん？」

何故か彼の部屋に鍵がかかっている入らないのだ。

ジエネシスの部屋は共有スペースのため普通であれば鍵など掛からない筈なのだが……

「久弥……まさか、何かあった?！」

ただならぬ異変を感じたティアは思い切りドアを叩く。

「久弥! 久弥?! いるなら返事をして!!」

ドンドンとドアを叩く。しかし、反応は無い。

それが帰ってティアを焦らせた。

一方こちらはジエネシスの部屋。

ふと、何かが自身のベッドに座り込む感覚にジエネシスはゆつくりと目を開けた。

まず視界に飛び込んで来たのは、真っ白な着物。

自身のベッドに腰掛けるその女性は、いつしか見た貴婦人。

「こんばんは。気分はどうかしら」

青い瞳を向け、優しい笑顔と共に声で話しかける。

「お前……………シキ、か？」

「ええ、噂を聞いて少し心配になって来てしまったわ。身体を壊してる時に、こんな無粋な真似をしてごめんなさいね」

シキはそう言って掌をゆつくりとジエネシスの額に当てる。

「……………ナーブギアとの接続が少し悪いみたいね。恐らくこちら側の問題でしょう。」

基幹プログラムを再構築すれば……………」

するとジエネシスの額に押し当てられたシキの掌から青い光が一瞬光り、そしてそれが収まるとシキは手を戻してゆつくりと立ち上がった。

「これで大丈夫。あとはゆつくりと休めばすぐに治るわ」

「待て、お前……………どうやって」

ジエネシスは寝起きではつきりしない意識の中、シキに問いかける。

「さて、そろそろ行かないと。貴方の奥さんが部屋の外で慌てているわ。」

あとこれはお願いなのだけれど…私の存在は内緒にしておいて欲しいの。まだ私の存在は不安定なもので、こうして貴方と面と向かってお話できている事自体が奇跡のようなものなの。だから、適当に話を合わせておいてね」

シキは人差し指を口元に立ててそう言うと、青白い光に包まれて姿を消した。

同時に、ジエネシスは再び意識を手放した。

朝日が部屋に差し込み、ジエネシスはその光で目を覚ます。
ゆっくりと身体を起こし、固くなった身体を思い切り伸ばす。
ふと、ここで彼は気付いた。

昨日まで体を襲っていた倦怠感がスツキリと無くなっていることに。それどころか今までで一番身体の調子がいいように感じられた。
「ふう、スツとしたぜ……」

爽やかな笑顔と共にそう呟く。

ふと、自身の腰のあたりに重みを感じる。

見ると、ティアがベッドに突っ伏して眠っていたのだ。一晩中看病しているうちに眠ってしまったのだろう。

「ありがとな、雫」

ジエネシスはゆっくりとティアの頭を撫でると、起こさないように立ち上がり、去り際にティアに毛布をかけ、自身は普段の赤黒い装備に着替えて部屋を出た。

階段を降りて食堂に向かうと、エギルがカウンターでコーヒーを沸かしていた。

「よお、エギル」

「ん？ジエネシスか。身体の方はもう大丈夫なのか？」

エギルも昨日のジエネシスの事を聞いていたのだろう、彼にその事を問いかけた。

「ああ、あいつらのおかげでこの通りだ。むしろ今までで一番調子がいいかもしれない」

「おうおう、そりゃ良かったなジエネ公よ」

すると隣にクラインが座り、彼の肩を叩きながら言った。

「しかし、治ったのはいいが結局原因は分からなかったのか。

これじゃいつまた再発するかわかんねえぞ」

後ろからミツザネが腕を組みながら言うが、

「ああ、多分その心配には及ばねえと思う」

「ん？何でだ？」

何故か確信を持って言うジェネシスにエギルは疑問符を浮かべる。

「まあ……そうだな」

本当は昨日の晩、あの儂い貴婦人による助言なのだが、彼女の口約束を守るために敢えて黙っておくことにした。

それに、ジェネシスにとってはこちらの方が真実のように感じられたから。

「また体調崩しても、あいづらがいてくれるしな」

「ははっ、そうかいそうかい。全くおめえは幸せもんだよ」

彼の言葉に、クラインが悪戯な笑みでそう答えた。

五十五話 グレイト！な男・死を視る者

01 『グレイト！な男』

「なんか悪いわね、付き合わせちゃって」

「気にすんな、いつものことだろ」

その日、ジエネシスは八十六層に来ており、その岩盤エリアの道無き道を1組の男女が進む。

共に進んでいるのはリズベット。今日はリズの店で使用する武器の素材集めに来ているのだ。

「で、今回は何が必要なんだ？」

「えっと、この岩盤エリアの先で取れる《メタルクラスティンゴット》って言うレアアイテムんだけどね。

ただ、そこは厄介なモンスターが頻繁に出没する場所で……」

「なるほどな。ま、サクツと取って帰るとしようぜ」

「そうね、アンタも病み上がりなわけだし」

リズベットの言う通り、ジエネシスは体調が回復してからまだ1日しか経っていない。しかし他のメンバーは攻略に行ってしまったおり、同行できるのが彼しかいなかったため、ジエネシスの肩慣らしも兼ねて今彼がこうして出向いていると言うわけだ。

「さて、そろそろ着くか？」

「ええ。見えて来たわ、あそこの丘が目当ての場所より」

リズベットが指差した先には、銀色の光を反射して輝く金属の丘があった。

二人はそこへ歩き、足場の悪い道を注意深く登っていく。

その頂上付近に着くと、眩いメッキシルバーの鉱石がそこら中に転がっていた。

「これよこれ！メタルクラスティンゴット!!」

「よし、んじゃ俺はこの辺で見張りやとくから。リズは気の済むまで取っとけ」

「はい、それじゃよろしくね」

リズベットは用意してきた道具を持ち出し、採集を始めた。

その後暫くは何事もなく順調に採集は進んだのだが、ここでモンスターが周囲に出現し始めた。

全長約5メートルはある人型のモンスターで、巨大な金属質の体躯を持ち、色は漆黒。胴体には紫色のラインが走り、頭部には禍々しい赤の光を放つモノアイがジエネシスとリズベツトをギロリと見下ろしていた。

モンスターの名は、《ギーガー》。

「いやデカすぎんだろ……」

ジエネシスは出現したモンスターの巨大さに唾然とした。

「おいリズ、そっちはどんな感じだ?！」

「ごめん、もう少しで終わるからーその間時間稼ぎお願い!!」

「……手早く済ませてくれよな!」

ジエネシスはリズの返答を受け、背中の大剣を引き抜いて構える。

ギーガーから巨大な拳が振り下ろされ、ジエネシスはそれを大剣で受け止める。その衝突で地響きと強烈な衝撃波が発生し、リズはその場でなんとか踏みとどまる。

一方のジエネシスはギーガーの攻撃を何とか踏ん張って受け止め、そのまま大剣を押し込んで拳を弾く。

続け様に反対側から拳が繰り出され、ジエネシスはそれを受け止めるのではなく、大剣を上から下に振るうことでその拳の軌道を逸らす。暫くは交互にギーガーの巨大な拳が突き出されるが、ジエネシスはその攻撃を捌き続けた。拳と剣が打ち合うたびに夥しい火花が散り、耳をつん裂くような金属質の衝撃音が鳴り響き、風圧で地面の砂が巻き上げられ土煙を発生させる。

何度か拳と打ち合う中でジエネシスはギーガーの攻撃パターンを見極めると、即座に暗黒剣ソードスキル《ドレッド・ブレイズ》を發動した。

まずギーガーから繰り出された右腕を、ジエネシスは自身の右肩から左下方向に振るう。その一撃でギーガーの拳は真つ二つに斬られた。続けて繰り出される左拳にも反対側から大剣の刃を張り出すことでたやすく斬り裂く。

両腕を無くし攻撃手段をほぼ無くした事で空になった胴に向けてジエネシスは赤黒いオーラを纏う大剣を横一閃に振るい、続けて右下方向から左上へ、最後に上段から真下に振り下ろす。

たった5連撃の技ではあるが、それでもとてつもない攻撃力を保有する技なので、ジエネシスの放った攻撃を受けたギーガーは背中から仰向けに倒れ爆発霧散した。

「ふう……」

戦闘を終え、一息つくジエネシス。

だがその直後、再び彼の背後に別のギーガーが出現した。同じように突き出される拳を難なく受け止めるジエネシスだが、今度は別の場所でもまたギーガーがポップする。

「マジか、2体同時出現かよ」

2体目のギーガーは即座にジエネシスをターゲットに定め、地響きを立てながら彼に向かって駆け出した。

「お待たせ、ジエネシス！今終わったわよ!!」

ここで採集を終えたリズベットが、メイスを提げてジエネシスの救援に向かう。

「よし、んじやちよつくらこいつらを片付けてから行くぜ!」

「ええー!」

リズベットはメイスを構えてジエネシスの背面に立つと、もう一体のギーガーと相對する。

「たああああつ!!」

ギーガーの巨大な拳に対してリズベットは臆さずメイスを振りかぶって応戦する。リズベットはメイスのパワーを活かしてギーガーの拳を弾き続ける。

そしてソードスキル《ヴァリアブル・ブロー》を発動し、ギーガーの胴体に強烈な連撃を叩き込む。リズベットのメイスがギーガーの胴を打つ度に金属質のボディが削れ、破片が飛び散る。

しかしその時、4体目となるギーガーが出現し、別方向から不意を突いてリズベットを殴りつけた。

「きゃあつ!!」

不意をつかれたリズベツトは勢いよく吹き飛ばされ、地面を数メートル転がり続けた。

「リズベツト!!」

救援に向かおうとするジエネシスの足を、更に出現した5体目のギーガーが阻み、彼を総勢4体のギーガーが取り囲んだ。

「こいつはやべえな……」

冷や汗を流すジエネシス。

その時だった。

「グウウウウウウウウウー……」
オオオオオオー……!!!」

上空から雄叫びを上げながら突撃してくるプレイヤーが現れた。

両手でハルバードを掲げ、ギーガーの脳天に叩き込む。

ハルバードを脳天に打たれたギーガーはその場に崩れ落ち、衝撃で大きな砂塵が巻き起こった。

「な、なんだあ?!」

思わずジエネシスは素っ頓狂な声を上げた。

倒れたギーガーの上に長身の男が着地し、座り込む。焦げ茶色の髪に鬱金色のコートの内側に老竹色のシャツ、朽葉色のズボンを身につけた男だ。年齢は恐らくジエネシスと同じ年くらいだろう。

すると、倒れたギーガーの身体に着地した人物がジエネシスの方を向き、ニヤリと口角を上げた。

「やあ、まさかこんな所で会えるなんてね。ジエネシス」

名を呼ばれ、その人物の顔を見たジエネシスは目を見開いた。

「おまつ……ヴォルフじゃねえか……!」

「はあ?! あんた、何で此処にいんのよ?!」

リズベツトも彼の顔を見た途端驚愕しながら叫んだ。

「おいおい、どう言う風の吹き回しだ?」

五十層で攻略組を降りてから一回も最前線に来なかったためえがこんなところにいるなんてよ」

「ああ、少し前に最前線で異変があると聞いてき。それに……」

ヴォルフはリズベツトの方を振り向くと、

「君には、まだ恩を返せてないからな」

「あんた……」

するとヴォルフは立ち上がり、ハルバードを右肩に担ぐ。

「さて、それじゃこいつらを倒してしまおうか」

「ああ。ま、しばらく最前線にいなかったんだ。鈍ってんじゃねえのか？」

「あはは、まあそこは心配要らないよ」

悪戯な笑みで揶揄うジェネシスに対し、ヴォルフは苦笑しつつもそう返した。

次の瞬間、ジェネシスとヴォルフは同時に飛び出した。

ハルバードを両手で持ち、力任せに振るう。そのパワーでギーガーの巨大な拳を思い切り弾き飛ばし、続けてソードスキル《ワールウインド》で更に追撃を加えた。

恐らくジェネシスの倍はあるであろうパワーで振るわれた一撃によって、巨体のギーガーは遙か後方へ吹き飛ばされ、爆発霧散する。

「バアアアーニング！ファルコンツツツ!!」

ヴォルフは熱い掛け声を上げて戦う。

「……戦いになったら性格変わるんのは相変わらずだな」

「ああした方が力が入るんだって」

ジェネシスとリズベットは呆れた表情でそれを見つめていた。

ギーガーとの戦闘が無事に終わり、ジェネシス達は武器を収める、

「よし、またあのだけえ奴らが出てくる前にとっとと帰るぜ」

「ええ。目的は果たせし。戻りましょう」

「えつと……じゃあ俺はこの辺で……」

と言つて離れようとするヴォルフの手をリズベツトが掴んだ。

「なーに言つてんのよ。あんたも来なさい」

突然手を掴まれたヴォルフは赤面し、

「あつ、いやでも俺は、その……」

しどろもどろで早口になつて戸惑つた。

「七十六層に来てからお店のこと全部あたし一人で回さなきゃいけないつたのよ。前みたいの手伝つてくれない？」

「……わ、分かつた。君さえ良ければ協力させてもらうよ」

その後、彼らは七十六層の宿に帰宅した。彼らが戻つた時には完全に真つ暗になつていた。

「あつ！お帰り、リズ」

「ただいま」

「お疲れ様、久弥」

「おう」

戻つた彼らをアスナ達が出迎えた。

「今日も二人で素材集め？」

「ええ、まあね。でも実は助っ人が来てくれてね」

「助っ人？」

リズベツトの言葉にアスナは疑問符を浮かべる。

「ああ。おめえも知つてる奴だぜアスナ。

「おい、入つてこ……つて、ん？」

ジエネシスが振り返つてヴォルフを呼ぶ。

「が、彼はそこにはいなかった。」

「は？あいつどこ行つた？」

着いてきていた筈のヴォルフはいつの間にか消えていた。

「ああ……しまった……」

するとリズベツトは頭を抱えた。

「あいつ、極度の方向音痴なのよ……」

「いやちゃんと着いてきてたよな?!何で迷うんだよ?!」

「知らないわよそんなの!!兎に角探しに行きましょう!あいつ道に迷つてダンジョンを3日4日彷徨つたことだつてあるのよ!」

ジエネシスとリズベツトは慌てて引き返し、ヴォルフの搜索に向かった。

一方ヴォルフ本人は……

「……………Where is here?」

一人真つ暗なダンジョンを彷徨っていた。

その後、ジエネシスとリズベツトによつて無事発見され、宿屋へと案内されたのだった。

☆……………☆

02 『死を視る者』

ある日、ジエネシスが街中を歩いていると……

「あら、もう身体は大丈夫なの?」

背後から優しい女性の声が響く。

振り返ると、そこにいたのはシキだった。

「よお、あんたか。」

まあおかげさんでな。あんたには借りが出来ちまったな」

「いいえ、気にしなくていいわ。別に大したことはしていないから」

「まあそうは言ってもな…何か礼でもしないとこっちの気が済まねえよ。何か奢ろうか?」

するとシキは「うーん」と顎に指を当てて考え込む。

「……………そうね。それなら、これから少し付き合ってもらえないかしら」

「ああ。構わねえぜ」

そしてシキは歩きだし、ジエネシスもそれに続く。

……………

やって来たのは最前線、九十層の迷宮区。

100層まであと少しと言うこともあって、これまでとは比較にならない程の強敵が迷宮区に配置されている。

しかし、ジエネシス達は殆ど苦戦することもなく順調に進んでいた。

その理由は、圧倒的とも言えるシキの実力だった。

彼女は日本刀を巧みに扱い、敵モンスターの弱点を的確に斬り裂いて殲滅していく。

彼女の戦闘スタイルは、非常に無駄のない美しいものだった。

ティアの戦闘スタイルも中々のものだが、シキのそれはまるで舞っているようだった。川のように流れる動作で刀を振るっていく。

「あんた、結構やるんだな」

後ろから見ていたジエネシスが感心した様子で話しかけた。

「そう？力になれているのなら嬉しいわ」

シキは振り返ると、微笑を浮かべながら返す。

刀を軽く左右に振った後、左手に持つ鞘にゆつくりと納刀する。

「それじゃあ、先に進みましょう」

「ああ」

歩き出すシキの後ろにジエネシスが続く。

数分歩いた後、再び彼らの前に三体のモンスターが現れた。

シキは素早く刀を引き抜き、構えた。

身体を横に向け、刀の刃を前に向ける形で持つ。

そしてゆつくりと目を閉じ、深呼吸する。

シキの刀が銀色の光を放ち始め、ソードスキルが発動する。

その間、三体のモンスターはシキに向かって走り出す。

「――直死、起動」

瞬間、シキは両眼をカツ、と開く。見開かれた彼女の瞳が青白く光り輝く。

「両儀の狭間と消えなさい」

その言葉を放った直後にシキは飛び出し、すれ違い様に三体纏めて斬り払う。

「……これが名残の華よ」

シキがモンスター達を通過し、刀を優雅な動作で下ろした直後、三体のモンスターは一斉にガラス片となって消滅した。

「なっ………！」

驚きのあまり、ジエネシスは硬直してしまった。

最前線の強敵を三体も纏めて一撃で仕留めるなど、攻略組の中でも出来るものは一人もいない。それほどの攻撃力ないしスキルを、目の前のシキは保有しているのだ。

「ふう……少し遊びすぎたかしら」

シキは息を吐きながら自嘲気味に笑い、呟く。その瞳から青白い光は消えていた。

「あんだ、今のは何だ？」

「……深くは説明出来ないの、ごめんなさいね。」

本来は私の力では無いのだけれど……これは相手の『死』を視るものよ」

「相手の死を？」

シキの言葉にジエネシスは疑問符を浮かべる。

「ええ。発動すると相手の『死』が線のように浮かび上がるの。この目がある限り、殺せないものはない……『生きているのなら、神様だつて殺してみせる』、とは誰の言葉だったかしらね……」

シキはどこか遠くを見つめるような表情で言った。

「まあ、例えるならエクストラスキルの一種だと考えてくれていいわ」
「……そうか。気にはなるが、スキルの詮索はマナー違反だからな。分かった、あまり深くは聞かねえ」

「ええ。そうしてくれると助かるわ」

そうやり取りしたのち、二人は再び歩き出す。

数分後、彼らの目の前に巨大な鉄製の扉が出現した。

「これが……」

「ああ、ボス部屋だな。やっと見つかったぜ……」

シキはボス部屋の扉を物珍しそうに見つめ、ジエネシスは部屋の位

置を忘れずにマッピングする。

その後、二人は迷宮区から出て、七十六層に戻った。

「ありがとう、今日は楽しかったわ」

「いや、こつちこそサンキューな。あんたのお陰でボス部屋が簡単に見つかった」

「ふふ、それならよかった。

じゃあ、私はここでね」

シキはそう言ってくるりと身体を反転させ、歩き出す。

「ああ、待った。最後に一ついいか？」

「なあに？」

ジェネシスがそう呼び止めると、シキは足を止めて首をこちらに向けてける。

「単刀直入に聞きたいんだが……あんた、一体何だ？」

俺がぶつ倒れた時に部屋に来たと思ったなら一瞬で消えるし、あんたが来てから不調は治ってるし。

しかも今日はなんかモンスターを一撃で仕留めるし……何者なんだ、あんたは」

ジェネシスの問いに、シキは困ったように眉をハの字に曲げる。

「まあ、気になるのも無理はないわよね。

でもごめんなさい、前にも言ったけれど、私はまだ不安定な存在なの。だから私がおなのかは、まだ正直には答えられないわ。

それに……」

シキは優雅な仕草でジェネシスに近づき、人差し指を彼の口に当てる。

「人のプライバシーのことを聞くのも、マナー違反よ？」

ふふふ、と軽く笑うと、シキは再び振り返って歩き出した。

「……違いねえな。ま、いつかは話してくれよな。あんたみたいなのが敵だったらたまったもんじゃねえし」

ジェネシスは頭をさすりながらシキの背中に向けてそう言うと、彼も身体を反転させて歩き出した。

「んじゃ、またな」

「ええ、また」

—————

七十六層にある、とある宿部屋の一角。

真っ白な着物を身につけたまま、シキはベッドに腰掛けていた。

シキは自身の刀の刀身を手拭いで磨く。

「……不思議な事ね。普段なら、私はこうして貴方達を俯瞰し、貴方達は戦いを直視している。それが今日、私が戦いを直視し、貴方が俯瞰する立場だった。」

ふふっ、当事者になってみるのも、案外悪くないものね」

不意にシキは一人そう呟き、そして窓の外を見た。

空はオレンジ色の夕焼けに染まり、広場もオレンジ色の光を放つ中で、ジエネシスが自身の寝泊りしている宿屋に向かって歩いていくのが見えた。

「素敵な体験をどうもありがとう。次はどんな事を経験させてくれるかしらね」

五十六話 不審な男

七十六層リズベツト武具店

「よう、来たぜ」

木製のドアを開け、ジエネシスが中に入る。

「ああ、いらつしやい。剣のメンテナンス？」

リズベツトが出迎え、要件を尋ねるとジエネシスはうなずき、自身の大剣を取り出す。

「しばらくロクなメンテナンスをして無かったからな。ここで一つ頼むわ」

「オツケー、任せて……って」

リズベツトはジエネシスから大剣を受け取った瞬間その重みで倒れかかった。

「まあ見た目から分かったことだけど、馬鹿みたいに重いわねこれ」

「まあかなり重めのやつつかってるからな」

するとリズベツトは店の奥の方へ視線を移し、とある人物の名を呼ぶ。

「呼んだ？」

出て来たのは焦げ茶色の髪を持つ長身の男性。リズベツト武具店の手伝いをしているヴォルフだ。

「ごめん、これ持つてくれない？」

「ああ、任せてくれ」

ヴォルフはジエネシスの大剣を軽々と持ち上げ、店の奥へと運んでいった。

「悪いわね、あたしじや重すぎて」

「気にしないでくれ。これくらい平気だしさ」

「さっすが！ やっぱ持つべきはあんたみたいな助手ね〜!!」

リズベツトはヴォルフの背中を威勢よく叩く。

そんなリズベツトからの称賛にどこか嬉しそうなヴォルフ。

彼ら二人のやり取りを後ろから見ていたジエネシスはこう思った。

「こいつら、いずれくつつくな」と。

ジエネシスは剣のメンテナンスを終えた後、特に当てもなく広場を散策していた。

その途中、広場の中央付近にキリトとアスナ、そして見知らぬ金髪の男性が立っているのが見えた。何をしているのか気になり、歩いて近づこうとした時だった。

キリトと謎の男は距離をとり、そしてその中央にデュエルカウントの表示が出現したのだ。それを見てジエネシスは察した。あの男は恐らく新たに攻略組に加わりたいと申し出た人物で、キリトはその腕試しを買って出たのだと。

ジエネシスも新参のプレイヤーがどんな物なのか興味が湧いたので、彼らに気づかれない程度の遠い距離からその戦いを見守る事にした。

男の武器は金色がベースのショートランス。グリップが黒で一部紫色の配色がなされている。その見た目からして中々の性能を誇る武器であることは遠目からも理解出来た。

カウントがゼロになると、男はランスの先端を真っ直ぐに向けてキリトに突っ込んでいった。出だしのスピードは文句なしのレベルだった。

だがその後の戦闘はあまりにも一方的なものだった。男の攻撃は尽くがキリトに弾かれ、躲され、まともな勝負にすらなっていないかった。

まあ、キリトの戦闘力が高いのも理由として挙げられるのだが、それを差し引いても男の戦闘スタイルはあまりにも稚拙なものだった。「何だありやあ……弱すぎるだろ。《懦弱懦弱う！》ってエジプトのファラオに笑われんぞ」

ジエネシスは呆れた顔でそう呟いた。

結局試合はキリトの勝利で終わり、アスナが頭を下げ、男が大人しく引く形で幕を閉じた。

ジェネシスはため息をつき、あの男はダメだなときっぱり忘れる事にした。

その時だった。

「——気をつけて」

不意に聞き覚えのある優しい声の後ろから響く。

驚いて振り向くと、そこにはシキが立っていた。しかし彼女の表情は普段の温厚で柔和な笑みではなく、険しく鋭い眼光を放つものだった。その視線は先ほどジェネシスが取るに足りない判断した男の方に向けられていた。

「あの男こそ、全ての元凶。諸悪の根源よ」

シキはジェネシスに対してそう意味深な言葉を放つ。

そう言われてジェネシスは男の方にもう一度視線を移す。

その時、ジェネシスを見た。

男の視線がアスナに向いており、そしてその口元に不気味な笑みを浮かべていたのを。

「何としてもあの人の証拠を見つけ出して——全てが手遅れになる前に」

それはどう言う意味だ、と問おうと振り返るジェネシスだったが、そこには既にシキの姿は無かった。

理解が追いつかず、ジェネシスはただその場に立ち尽くすのみだった。

—————

その日の夜、宿の食堂にて。

「アルベリヒ？」

今日起きた出来事をキリトとアスナが皆に話す。

「そう、新たに攻略組に加わりたいて来た人なんだけど…」

「何か妙だったんだ。レベルやステータスは確かに高い。けど、戦い方が何というか……初心者みたいだったんだ」

二人は今日出会った人物——アルベリヒという男をそう振り返る。

「なんか、不思議な人ですね」

「確かに……今までどこで過ごしてたんだろう？」

シリカとサチが首を傾げて疑問符を浮かべる。

「まあ、たいした強さも無かったんでしょ？別にそんなに気にする事がないんじゃない？」

「私も同意見ね。ま、放っておけばいいんじゃない？」

リズベツトとイシユタルはアルベリヒについてそう片付けることを提案した。

「……まあ、そうだな。そんな奴がいたっておかしくはないか」

「とりあえず、私たちは私たちのやるべき事をやりましょう」

結局、アスナとキリトもそう言ってその日はアルベリヒの話題は消え去った。

しかしジェネシスはそんな中、昼間のシキから受けた警告についてずっと考え込み、アルベリヒのことが頭から離れなかった。

—————

それから数日後。

その日、ジェネシスとヴォルフは七十六層のとあるレストランにランチに来ていた。

「なる程、上層まで来るとこんなに豊富なメニューが…」

「ああ。美味そうなもんが多いだろ？お勧めはカルボナーラだ」

「なら、せっかくだし君のお勧めの一品を頂こうかな」

ジェネシスは七十六層に来たばかりのヴォルフに、この層について

色々案内して回っていたのだ。

すると、店の一角で……

「ちよつと、何するのよー!」

「……?」

「何だろ? 店の奥からだ」

聞き覚えのある女性の怒鳴り声が響き、二人は声のした店の奥の方を見る。

見ると、店の奥にはリズベットとサチが来ており、その席に複数の男性プレイヤーが集っていた。

サチは恥ずかしそうに頬を赤らめて俯いており、リズベットが男性達に対して険しい顔で怒鳴っている。

「リズにサチちゃんだ。何かあったのかな?」

ヴォルフが心配そうに見つめる中、ジエネシスはその男性たちに見覚えがありじつと目を凝らした。

「(ありやあ、確かアルベリヒの取り巻きか)」

そう、以前キリトとデュエルをしたアルベリヒ。その時に彼と一緒にいた男たちだ。

男たちは嫌がるサチとリズベットに対して手を伸ばし、その頬や首筋を撫で回した。

「いい加減にしなさいっての!! あんた達、監獄送りにされたいわけ?!」

リズベットは怒り心頭だ。男の手を乱雑に振り払うなり怒鳴り声を上げる。サチはもう恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして涙目になっている。

「いいよいいよ、やってみな。俺たちにそんな無粋な真似は意味ねえんだからよ」

リズベットはメニュー欄を開き、こういう場合に発動する犯罪防止コードの確認をする。

が……

「な……何で犯罪防止コードが出ないのよ?!」

リズベットは目を見開いて叫んだ。普通ならば有り得ない事態だからだ。

そんなリズベットの様子を見て勝ち誇ったように男たちは厭らしい笑みを浮かべ、

「な？俺たちにそんなもん効かないんだよ。」

というわけで、もう少し……いいだろう？」

そして男たちはその手をリズベットとサチにゆつくりと伸ばす

……

「いいわけねえだろおおおー！！！！」

ジェネシスとヴォルフがそれぞれ大剣とハルバードでその男たちを脳天から殴りつけた。

「ぐおおおおあわあああ?!!!」

男たちは凄まじい衝撃を脳天から受けて轟音と共に地面に頭を激突させた。

そんな男たちをジェネシスとヴォルフ呆れた顔で見つめる。

「人が飯食ってる時になに下品な事やらかしてんだコラ」

「君たちはテーブルマナー以前に、まず人としての常識を学んだ方がいいね」

二人はそれぞれの獲物を肩に担ぎながらそう告げた。

「あ、あんた達どうしてここに……」

「たまたまここに来てたんだよ」

驚くりズベットにジェネシスはそう答えた。

すると……

「おやおや、これは攻略組のお二方。こんな時間にここにいるとはよほど暇なのかな？それとも……正義の味方のつもりかな？」

現れたのはアルベリヒ。

「てめえんとこの取り巻きが馬鹿な事やってたから注意してやってたんだよタコ」

「ふむ……注意、ね……」

鋭い視線で睨みながら言うジェネシスの言葉に対し、アルベリヒは未だに地面に倒れ込んでいる二人の部下らしき男達を見下ろした。

「おたくの部下さん、この人たちに随分と迷惑かけてましたよ。貴方上司なら部下の管理くらいしつかりしてください」

ヴォルフがため息を吐きながらアルベリヒに対してそう告げると、アルベリヒは「はっ」と軽く笑い、

「まあいいさ。精々今のうちにカツコつけておくんだな。お前たちなんて何の力もない子供だつて事を身をもって教えてやるよ。いづれな」

そう言い残すと、アルベリヒは倒れている二人の部下を叩き起こし、店を後にした。

「ケツ、キリトに手も足も出なかったザコが、何偉そうにしてやがるつてんだ」

ジェネシスはアルベリヒ達の後ろ姿に対してそう吐き捨てた。

「…大丈夫だったか？二人とも」

ヴォルフが被害にあったサチとリズベットに問いかける。

「ええ、おかげさまでね」

「ありがとう、本当に助かったよ」

リズベットとサチはヴォルフとジェネシスに対してそう礼を言った。

「しっかし……犯罪防止コードが出ないなんざこりや大問題だぞ……」

—————

「セクハラコードが出なかった?」

その夜、今日あった出来事をジェネシス達四人は皆に話した。

「そうなのよ。ほんとあの時は焦ったわ」

「ジェネシス達が来てくれなかったら、どうなっていたか……」

リズベットとサチはげんなりした顔でそう語った。

「大変だったね、リズ、サチちゃん……」

アスナが被害にあった二人を労った。

「とりあえず、一つ言えることがあるわね」

「ああ。アルベリヒを攻略組に入れなかったのは大正解だったな」

イシユタルの言わんとする事にキリトが同意し、そう結論付ける。

「女の人にそんな事するなんて人として最低です。万死に値します」

「オルトリアさんに同じですね。平気で痴漢行為をするなんて言語道断です」

オルトリアが殺意剥き出しの様子で呟き、リーファも頷く。

「でもその前に、犯罪防止コードが本当に発動しないのか調べた方が良さそうですね」

「うん。セクハラコードが出ないなんて大問題だし」

サツキの提案にティアが頷いて肯定する。犯罪防止コードが出ないなら何かしらの対策を打たなければ、女性プレイヤーにとってかなり危険な事になる。アルベリヒ達による被害も拡大する事になるだろう。

「では、調査してみましよう!」

「調査、というと?」

「パパ達男性プレイヤーの皆さんが、ここにいる女性プレイヤーさん達に触ってみるんです!」

レイの提案にキリトが首を傾げ、ユイがその案を説明した。

「え、ええっ?!それじゃジェネシスさん達がその、ち、痴漢するって事ですか?!」

「シリカ、言い方考えろ」

途端、シリカが顔を真っ赤にして慌て始め、ジェネシスが冷静にツツコミを入れる。

「だ、ダメですよ……まだ心の準備が……」

「あ、あたし達、兄妹だから！そういうのどうかと思うよ！」

『わ、私は主に身を捧げた者……そ、そんなみだらな事は出来ましえん！』

シリカ、ハツキ、ジャンヌが顔を赤くして捲し立てた。

そこへ彼女らの眉間に苦無が刺さり、3人は同時に倒れ込む。

「誰も主らにやるとは言うておらぬ。落ち着きなんし」

苦無を投げたツクヨが呆れた顔でそう告げた。

「じゃあ、誰が触つてもらおうかジャンケンで決めましょう！」

「レイ、そんな事みんなに頼めないわよ。」

久弥、私で試してみて」

皆にそう呼びかけるレイを制し、ティアがジエネシスの元に歩み寄る。

「うわー、つまんなー」

するとイシユタルが大層堪らなさそうな顔で言った。

「ちよつと凜ちゃん！つまんないってどういうことよ！」

「だって、あんたは久弥に普段から触られまくってんでしょ？あんなとこやこんなとこまで」

「ちよ、変なこと言わないでよ!!」

とにかく！久弥、少しお願い！」

有無を言わずティアがジエネシスに促す。

「……じ、じゃあ……」

ジエネシスはゆつくりとティアに手を伸ばし、その頭に触れ、撫でる。

「~~~~♪」

何故かティアは頬を綻ばせて嬉しそうにされるがままになっていく。

が、肝心の犯罪防止コードは発動していなかった。

「ちよ、雫ーコード！セクハラコード!!出てないから戻りなさい!!」

凜が天国モードのティアの頭を引つ叩いて戻す。

「はっ！た、たしかに出てない……」

「嘘でしょ……」

その結果にアスナが愕然とした表情になる。

「うーん……もつと大胆に行かないとダメなんじゃない?」

「だ、大胆に?」

リスベットは腕を組みながら言い、ティアが首を傾げる。

「もつとこう……ギリギリのゾーンを攻めないといけないんじゃないの?」

「いや、これ以上は流石に……」

ジェネシスが戸惑って手を引つ込めた瞬間。

「くくくえいつ／＼／」

「んなつっ?!」

ティアがジェネシスの右手を両手で掴むなり思い切り引き寄せ、自身の胸元に押し付けた。

「ちよ……!!」

「わあー……／＼／」

「これは……」

「ティアさん、大胆です……」

少女達は突然のティアの行動に驚き、頬を赤く染めて見入ってしまった。

「ん……久弥っ……!」

ティアはジェネシスの手をがっしりと掴んだまま離さず、そのまま自身の双丘の中に埋めた。

ジェネシスは完全に放心状態で立っていた。

「……て、ティアちゃん!コード!犯罪防止コードは?!」

思わず見とれてしまっていたアスナがハツとした顔でティアに言い、ティアは恥じらいと快感に苦悶する表情のまま画面を確認する。

が、これでも犯罪防止コードは出ていなかった。

「はーいそこまでー!!」

そこでイシユタルがティアの手を振り解いてジェネシスの右手を解放した。

「はあ……はあっ……／＼／」

ティアの顔は完全に紅潮しており、息が上がってしまっている。

「とりあえず久弥、あんた後でしばらくから」

「なんでえ?!」

ジト目でイシユタルがそう言い、あまりに理不尽な事を言われジェネシスは叫んだ。

「でも、結局犯罪防止コードは出なかったわね……」

実験の結果を受け、アスナはげんなりとした表情になった。

「おそらく、七十六層に来たときのシステムエラーが関係してるのかもな……」

キリトはこの結果に対してそう仮説を立てた。

それを受け、この場にいる女性プレイヤー達は一斉にため息をついた。

「あああーっ!!」

そのとき、ティアが何かを思い出して叫ぶ。

「わ、私……」

……………倫理コード、解除したままだった……………」

その瞬間、場の空気が一瞬で凍りついた。

—————

現在、ティアはイシユタル・シリカに踏まれている。

「あんた人に散々見せつけといてオチがこれってどう言うつもりよ!!」

「あたし達結局ジエネシスさんとティアさんがイチャついてるのを見てただけじゃないですか!!」

「ごめんなさいごめんなさい!私がつかりしてましたあゝ」

ティアは地面に蹲って涙目で謝り続けた。

「倫理コードを解除したままって……」

「つまり、そういうことよ」

何かを察したサチとリズベツト。

「(危なかった……私も解除したままだったわ……)」

アスナはそれを横目に人知れず倫理コードを戻した。

「まあ、とりあえずは仕切り直しね。もう改めてジャンケンで決めましょう」

「あ、ティア。あんたは除外で」

「しよんなああああ……」

リズベツトとイシユタルが仕切り、ティアがガツクリと肩を落とす。

「んじや俺も除外で」

ジエネシスもテスターから外れる事を宣言するが、

「は?何言ってるの」

「あんたも引き続き強制参加よ」

「あんなの見せつけて……ちゃんと責任は果たしてもらおうからね!」
が、リズベツトとイシユタル、アスナが冷たい視線でそう告げた。

「Why Japanese People ?!!」

ジエネシスは頭を抱えて叫んだ。

しかし問答無用で始まるジャンケン。結果は……

「ウソダドンドコドオーン！」

「どんまい、ジエネシス」

「お、お願いします……」

男性陣は再びジエネシス。ヴォルフとサツキが同情の視線を向ける。

「な、ナジエダア……」

「坊やだからさ。とりあえず行ってこい」

げんなりした表情でフラフラと歩くジエネシスの肩をポンと叩くキリト。

それに対して女性陣のテストターは……

「ふむ。わっちか」

「お願いします！ツクヨさん！」

「どうやらツクヨのようだ。」

テストターに決まったツクヨに、フィリアが激励を送る。

「頼んだわよツツキーさん！」

「もしも場合は殺していいから！」

「任せよ。その時は蜂の巣にしてくれよう」

アスナとイシユタルもそう言葉を投げかけ、ツクヨも苦無をギラつかせて告げた。

「いやだああああ!!死にたくない!死にたくないいいいい!!」

ツクヨからの威嚇を見たジエネシスは涙目で叫んだ。

「馬鹿者が、冗談に決まっておろう。ほれ、触れ」

ツクヨはため息をついて両手を腰に当てて胸を張って堂々と立つた。

「テメエー!この流れでどうやって触れてんだ!!命がいくつあっても足りねえわ!!」

「あのなあジエネシス。ここは圈内なんだから死ぬ事は無いからかな?」

捲し立てるジエネシスに対しキリトがやんわりと突っ込む。

「バカヤロウツ!!死ぬつてのはそういう意味とは限らねえんだぞ!!大体なあ…」

「だああああもうこの後に及んでネチネチ言つて!!」

それでも男ですか軟弱者!!

さつさと行きなさい!!」

尚も騒ぎ立てるジエネシスに堪忍袋の尾が切れたイシユタルがジエネシスの尻を蹴飛ばした。

「あつ、ちよおまつ……」

蹴られた事でバランスを崩し倒れ込むジエネシス。

踏みとどまろうと右足を出すも、椅子の足に引っかかってよろけ、勢いよく前に顔が突き出る。

その頭部は真っ直ぐにツクヨへダイブし……

ポヨン……

ジエネシスの顔がそんな音を立てて何かに挟まれた。

「……………」

「……………?」

突然すぎる展開にジェネシスとツクヨは瞬きする。

そしてジェネシスは恐る恐る左手を伸ばし、自身の顔を包む柔らかいものを掴む。

瞬間、ツクヨの顔が真っ赤に染まり、同時に目もぐるぐると回り始める。

同時にジェネシスは何かを察して反対に顔が青ざめていく。

「あの、これって……………」

「な、なに……………!」

なああああに晒しとんじやああああ!!」

ツクヨはジェネシスの腰あたりに両手を回してホールドすると、そのままジャーマンスープレックスをかけて地面に叩きつけた。

—————

結局、ツクヨには犯罪防止コードが出現しており、システムは問題ないことが判明した。

「まあ、無事にセクハラコードが出ることがわかってよかったじゃないか」

「ああ。まあ…………ジェネシスはその、必要な犠牲だったという事だな」
キリトとヴォルフは結果に安堵した様子。

一方のジェネシスは先ほどツクヨから受けたダメージで意識を失い、ティアとサクラ、レイによって部屋に運び込まれた。

「とりあえず、アルベリヒには今後、注意していかないかね」

「ええ。何にせよあいつにはセクハラコードが出ないんだから。原因が何であれ、アルベリヒには近づかない方がいいわ」

アスナの言葉に実際被害を受けたリズベットが同意する。

「ま、奴に対してはジャーマンスープレックスでは済まさぬ。アルベリヒが手を出してきた時……それは奴が死ぬ時じゃ」

「ツクヨさんダメだからね？そんな事したらまたオレンジになっちゃうからね？」

冷ややかに言うツクヨをフィリアが諫めた。

「とりあえず、昼間は本当にありがとね。ヴォルフ」

「気にしないでくれ。リズが無事でよかったよ」

リズベットはこの場で改めてヴォルフに礼を述べた。

「も、もう……ずるいわよ……。あたしはキリトの事が好きなのに

……これじゃあ気が移っちゃうじゃないの」

リズベットは誰にも聞こえない小さな声でボソリと呟いた。

—————

その夜、とあるフィールドで。

「な、何だてめえらは!!」

一人の男性プレイヤーが3人の男達に囲まれている。

「まあまあそう警戒しなさんな。ちよつとだけ『実験』の協力をしてもらうだけだよ」

「そうそう。な？旦那」

二人の男がニヤリとしながら言い、後ろに立つ男が———アルベリヒに対して言うと、

「安心したまえ。悪いようにはしないから」

アルベリヒは懐から紫色の光を放つ短刀を取り出す。

そしてそれを振り上げ、

「それじゃ、一名様ご案内」

「勢いよく振り下ろす。
が、その時だった。」

真つ白な吹雪のような一陣の風が吹き、3人を通過した。
その一瞬で、アルベリヒ達を取り囲んでいた男性はいなくなっていた。

「な、何だ今のは?!」

部下の一人が何が起きたのか分からず狼狽る。

「……………まさか」

アルベリヒは何か気づいたのか、目を見開いて辺りを見回す。

「だ、旦那?」

「……………引くぞ。予定変更だ……………我々の計画が漏れているかも知れ
ん」

アルベリヒの様子を見て訝しむ部下に対し、アルベリヒは短く告げると、二人を引き連れてその場を後にした——

——それを背後から見つめる、青白い瞳に気づかずに。

「……………貴方達の思い通りにはさせないわ。元凶」

純白の着物を着た女性……………シキは、先ほど救出し気絶している男性
プレイヤーを抱えたままアルベリヒの背中を睨んだ後、青白い光に包
まれその場から去った。

五十七話 暗躍する狂気

「はあっ……はあっ……いー」

八十三層の森林エリアの中を、一人の少女が駆け抜ける。

金髪のポニーテールに緑色の装備に身を固めた少女、リーファだ。

「待ちやがれコラア!!」

「逃すな!!!」

リーファは複数の男達に追われていた。追いかける男達のカーソルはオレンジ。

何故彼女がこのような目に遭っているのか……

時は数時間前に遡る。

—————

その日リーファは、七十六層で兄のキリトと共に《太陽と月のペンダント》という名のクエストを受け、無事八十三層で目当てのアイテム『太陽のペンダント』の入手に成功した。

ところがその帰路、キリトとリーファはオレンジギルドと遭遇してしまい、先ほどキリトとリーファが入手したレアアイテムの指輪を要求してきたのだ。人数的に不利と感じたキリトは先にリーファを逃がし自身が殿となる事を選んだのだ。

当初は兄を置いていくことを渋ったリーファだったが、敵のレベルも高く、リーファでは太刀打ちできないため、仕方なく彼女は先に離脱したのだ。

ところがどうやら別働隊がおり、リーファは彼らに追われていたのだ。

「あうっ……いー」

走っている最中、木の根に引っかかり、リーファは転倒してしまう。それがタイムロスになり、リーファはどうとう追いつかれてしまっ

た。

「はっ、随分と梃摺らせてくれたわね。ネズミが」

追いついたオレンジ達のリーダー格らしき女が現れ、舐め回すような視線でリーファを見下ろした。

「さて、それじゃ大人しくレアアイテムを渡してもらいましょうか」

赤髪の槍を持った女性が前髪を弄りながら告げた。

「…………お断りよ」

リーファは立ち上がって左腰から片手剣を引き抜き、構えた。

「へえ？じゃあ力づくで奪わせてもらおうわよ」

女性は指を鳴らして周りのオレンジの男達に指を鳴らして指示を出し、男達も獲物を構えてリーファにすり寄る。

「へへ、こいつよく見たら中々の上玉じゃねえか。姐さん、アイテム取ったらこの女、いいですかい？」

「ああ、構わないよ。アイテムさえ取ったら煮るなり焼くなりあんたらの好きにしな」

「…………っ！」

リーファは思わず後退りするが、指輪は自身が兄であるキリトの思い出作りのために手に入れた品物であるため、何としても守り通したかった。

恐怖を押し殺し、剣を真っ直ぐに構えて男達と早退する。

「かかって…………こい!!」

リーファがそう言った瞬間、男達が一斉に飛びかかった。

その時だった。

「ぎゃあっ?!」

「うわあっ?!」

突如、男達のうちの二人が前のめりで倒れ込んだのだ。

「な、なに…………？」

リーファは突然のことに理解が追いつかずただ戸惑った。

倒れた男達の後頭部には一本の矢が刺さっている。何者かが狙撃したのだ。

「……後ろ、8時の方向」

狙撃の方向に気づいたメンバーの一人が振り返り、狙撃の方向を素早く察知し指差した。

リーダーの女はその方向を見つめ、ズームフォーカスシステムを使って狙撃手の位置を割り出す。

その方向には一本の巨大な大木があった。リーファ達がいる場所から距離にして約200メートル。

その太い幹に、一人の人物が立っていた。

「……『純白の弓兵』……!」

真つ白なコートと黒いミニスカート、白いブーツ、そして身長と同サイズはある大きな弓を携えた、リーファと年が近い少女。

「ハツキちゃん!」

思わぬ援軍の登場に、リーファは目を見開いた。

直後、ハツキから更なる矢が飛来し、別のオレンジ達に命中した。

「スグ!!」

「リーファさん!!」

さらに、兄であるキリトとサツキが駆けつけた。

「お兄ちゃん!サツキさん!」

頼れる兄達の登場にリーファは目を輝かせた。

「チ……《黒の双剣士》に……《黒の剣士キリト》……!」

リーダーの女は忌々しげに舌打ちしながら呟く。

「て、テメエ!俺たちの仲間はどうしたんだ?!

「あんな奴ら、とつくに監獄送りしておいたよ。あ、今は轉移システムが壊れてるみたいだから、七十六層にある暫定の監獄ではあるけどな」

オレンジの男の問いに対し、キリトは不敵な笑みで返した。

「さて、俺の妹に手出そうとして……お前ら、ただで済むと思うなよ」

「お兄ちゃん……!」

威圧感を込めた声でキリトはオレンジの男達に対して言い、リーファは安堵した笑みで呟く。

「さて、どうします?人数は確かにそちらの方が多いかもですが……戦力差は歴然であることはご理解いただけると思いますが?」

「このっ……!」

憎悪に溢れた表情で睨むオレンジプレイヤー達。この状況で有利なのは間違いなくキリト達だ。

ところがその時だった。

「なあゝにをちんたらしてんだおめえらあゝ?」

突如オレンジ達の後ろから間延びした喋り方の大男が現れた。身長は恐らく2メートル近くはある高身長で、さらにその身体は筋肉質で幅も大きかった。胴体には漆黒の分厚いアーマーを纏い、防御力も高そうに見える。

右肩には巨大な鉈を担いでおり、その顔に被っている特徴的なマスクも相まって、まるで13日の金曜日に現れる悪魔を連想させる見た目だった。

「じ……ジェイソン……!」

リーダー格の女が振り返り、震えた声で名を言った。

「てめえらは下がれ、時間切れだ……: ジョーカーが呼んでるぞおゝ」
「なっ……: ジョーカーだ?!」

キリトはジェイソンが告げた名を聞き驚愕した。

忘れるはずもない。ホロウエリアでフィリアを利用してツクヨを罠に嵌め、人殺しの罪過を背負わせようとした狂気の男。

対して女はジョーカーの名を聞くと顔が青ざめ、ふらふらとした足取りでその場を去った。

「お前……: ジョーカーの仲間か?」

キリトは左右の手に持つ双剣を構え、ジェイソンに問いかけた。

「ふむ、その質問に答える必要性はねえなあゝ……: 何故ならお前えさん達はここで、死ぬからなあゝ!」

ジェイソンはそう言うなり右肩に担いだ大鉈を勢いよく振り下ろした。

「ぐっ……!」

キリトとサツキ、リーファは間一髪の所でその攻撃を躲した。衝撃で大きな土煙が上がり、鉈が直撃した地面は大きく抉れている。

「なんてパワーだ……!」

それを見たサツキが愕然とする。

「ブルルラアアアア!!」

そのままジェイソンは大鉈をキリト達の方へ薙ぎ払うように振るう。

「うわっ?!」

キリトとサツキは咄嗟に自身の武器でガードするも、とてつもないパワーで放たれた一撃によって二人は砂塵に舞う木の葉の如く吹き飛ばされた。

「軽いなあ、てめえらそれでも男かあ?」

ジェイソンは退屈そうに首をグリグリと回し、鉈を手の内で回しながら言った。

「サツキさん!お兄ちゃん!!」

「女子を痛ぶる趣味はあねえが、ちよいと覚悟してもらおうか」

ジェイソンはリーファに目をつけると、鉈の刃部分をギラつかせながら近づく。

「はあああああつ!!」

キリトはすかさず片手剣ソードスキル《ヴォーパル・ストライク》を発動し、音速の速さでジェイソンに突っ込む。

「甘あゝい」

だがジェイソンは音速に近い速度で迫る漆黒の刃を片手で難なく掴み、そのままリーファの方へキリトを投げ飛ばす。

「おおおおお!!」

今度はサツキがジェイソンの背後から双頭刃に竜巻のようなエネルギーを纏わせながら、ソードスキル《スピニングダンス》を発動し突っ込む。

サツキの技は見事にジェイソンの背中に命中し、イエローゾーンまでHPを削った。

「おいおい、痛えじゃねえか兄ちゃん?」

だがジェイソンはHPがイエローに落ちても全く怯む様子はなく、サツキの方を振り向くと彼の首を掴んで持ち上げる。

「マッスルウウウ……ブルルルレイクウウウー!!」

ジェイソンはそのままサツキの胴体に強烈な一撃を叩き込む。

「ぐわああああーっ!!」

凄まじいパワーで殴られたサツキは大きな弧を描いて数百メートル先まで吹き飛ばされた。

「サツキ!!」

「マッスルウウウ……!!」

吹き飛ばされたサツキの元へ駆け寄ろうとするキリトだが、間髪入れずにジェイソンからの攻撃が来る。

「インパクトオオオオオ!!」

キリトの直上から鉈が振り下ろされ、キリトはそれを左右の剣を頭上で交差させることで受け止める。

「ぐっ……おおおっ……!!」

凄まじい衝撃がキリトを襲い、歯を食いしばって踏ん張る。

「(何なんだよ……この出鱈目なパワーは……!指の一本まで気が抜けない……一瞬で潰される……っ!!)」

しかしジェイソンのパワーは圧倒的で、キリトの腕は徐々に下降していく。

「このおおおおっ!!」

その時、リーファがソードスキル《ソニッククープ》を発動し、ジェイソンの右腕を斬り落とした。

「ほお、やってくれんじゃねえか嬢ちゃあくん」

ジェイソンは首をグリグリと回しながらリーファの方を睨む。

するとその直後、

「せああああっ!!」

白い閃光が走り、ジェイソンを吹き飛ばした。

「キリトくん、リーファちゃん!」

現れたのはアスナだった。細剣最上級スキル《フラッシング・ペネトレーター》でジェイソンに突っ込んだのだ。

「助かった、アスナ!」

「ええ、無事でよかったよ」

安堵したキリトに対し微笑みかけるアスナ。

「ほお、これはこれは《閃光のアスナ》じゃあねえか。だがあんたが来たところで俺をどうにか出来るとでもおっく？」

「残念だけど、来たのは私だけじゃ無いわ。もうすぐここに私の仲間が駆けつけるわよ。大人しく引きなさい」

鋭い視線と威圧感のある口調で言うアスナ。

ジェイソンもアスナの言っていることがハツタリでは無いと感じたのか、鉈を背中の鞆に収める。

「オウケイ分かった。今日のところは勘弁しといてやるよお。だががこの借りは必ず返させてもらうぜえ」

そう言い残すと、ジェイソンは巨大に似合わぬ速度で駆け出し、この場から去った。

――

一方こちらはハツキサイド。

ハツキは遠距離からキリト達を援護するためこの大木に登っていたのだが、途中見たこともない大男がキリト達に襲いかかり、その後自分の方にも新手が現れた。

「キヒヒヒッ!!ほおらこれでもくらええー!!」

黒いマスクを被り、子供のように陽気な声で毒ナイフを投げつけるオレンジプレイヤー。

今ハツキを追い回しているのは、かつてアインクラッドに恐怖をもたらし、その名を轟かせたオレンジギルド《ラフィン・コフィン》の3幹部の一人であったプレイヤー……

『ジョニー・ブラック』

「っ……………」

ハツキは木の枝を飛び移りながら逃走する。

毒の塗られた投げナイフが放たれるたびにハツキは寸前のところ

で回避し、次の枝に飛ぶ。

だがスピードはジョニーの方がわずかに早く、徐々にハツキとの差が埋まり始める。

「あうっ……!!」

直後、ハツキの右踵に毒ナイフが刺さった。麻痺状態に陥ったハツキは地面に落下し、そのまま転がり続けた。

「ヒヤハハハッ!! 追いついた追いついたあく!!」

狂気的な笑みを浮かべながら、ジョニーは右手に新たなナイフを持ってゆつくりと近づく。

絶体絶命のピンチに陥ったハツキ。麻痺状態でまともに動くこともできない彼女にゆつくりと殺人鬼が歩み寄る。

その時、空から無数の苦無と手裏剣が飛来し、ジョニーの足元に一斉に突き刺さり、彼の足を止めた。

「どうにか、間に合ったようじゃな」

直後、どこからかツクヨが現れ、ジョニーに相對する。

「ハツキちゃん!!」

そして後ろからフィリアとサチが駆けつけ、ハツキを介抱する。

「フアー!! 死神太夫のツクヨさんじゃないかあく!!」

ツクヨを目にした途端興奮気味にはしゃぐジョニー。

そんな彼を前に、ツクヨは懐から苦無を取り出して構える。

「フィリア、サチ。3分時間を稼ぐ。その間にハツキを頼んだぞ」

「そんな、ツクヨさん!」

殿を務める事を宣言するツクヨに、サチが不安げな表情で自身も行くこうと立ち上がるが、それをフィリアが制した。

「大丈夫。ツクヨさんはあんな奴には負けないよ」

自信ありげな表情でサチに諭すフィリア。

サチはしばらくツクヨの方を見つめたが、やがて覚悟を決めハツキをフィリアと共に担ぐと、同時に走り出す。

「ブツ……ハハハハハッ!! マジかよ?! あんた一人で俺を止められるとでも?!」

「ああ。主くらいわっち1人でも容易く止められる。これでも現実で

は本物の忍、真の《暗殺者》に師事していたのでな……」

腹を抱えて嘲笑するジョニーに対し、ツクヨは不敵な笑みで答える。

「さて……それでは《暗殺者》^{アサシン} 同士の対決と行こうではないか。ジョニー・ブラックよ」

両手の苦無をぎらつかせ、そしてツクヨはジョニーに斬り込んだ。

ツクヨの苦無がジョニーに届く寸前、彼はその場から飛び上がってすぐ近くの木の枝に飛び乗る。そしてそこからファイリア達が走って行った方角へ向かう。

「逃さんぞ」

ツクヨはそう呟くと、彼女もジョニーが飛んで行った方向へ駆け出す。

スピードはツクヨの方が早いため即座に追いつくと、ジョニーのいる木の枝よりもさらに高く飛び上がり、そして苦無をジョニーに向かって振り下ろす。

それを回避するためにジョニーは体を逸らすが、それによつて僅かにバランスが崩れ、地面に降下する。ツクヨもそれを追って地面に降りると、左右の苦無をジョニーに向けて振るった。

左右交互に繰り出される苦無の刃を、ジョニーは右手に持ったナイフで弾き、防御していく。

数回打ち合った後に再びジョニーはその場から飛び、俊敏な動きで木の幹や枝を飛び移って行く。

それに対してツクヨは苦無術《自来也蝦蟇毒苦無》を発動しジョニーに向けて放つが、ジョニーは身柄に空中で身体をひねる事でそれを回避した。

だがそれはツクヨが張った罠だった。

ツクヨは回避される事を承知の上で苦無を投げた。いや、回避させるために投げたのだ。苦無を投げる事でジョニーの行動を制限し、誘導したのである。

「はあっ!!」

ジョニーが回避した方向に先回りしていたツクヨは、そこ目掛けて

飛び蹴りを放ち、その右足は見事にジョニーの腹部を打った。

「ギャウツ?!」

鋭い蹴りを受けてそばに生える木の幹に叩きつけられたジョニー。すかさずツクヨはジョニーに追撃の苦無を投げつけ、彼の両腕、両足に突き刺して行動を封じる。

そして勢いよくジョニーに接近し、その首に苦無の先端を突きつける。

「終わりじゃ。観念するがいい」

だがその時、ツクヨの右側から凄まじい速度で新手が接近し、ツクヨはそれに気づくと即座にその場から飛び退く。

直後、ツクヨがいた場所に鋭い鈍色の一閃が振るわれた。

数メートル後退し、ツクヨが先ほどまでいた場所を見ると、そこには銀髪で左目を眼帯で覆い、鋭く光る赤い目を持つ男がいた。

「ジャック・ザ・リップパー……」

ジャックは右手の刀を軽く振り払うと、それを右肩に担ぐ。

「……大人しく引け。そうすれば、今回は見逃してやる」

ツクヨはジャックの言葉を受け、一瞬思案する。

ジャックもジョニーも危険な人物達だ。ここで見逃せばこの男達による被害が更に増えることになる。

しかしいくらツクヨと言えど、この2人を相手にするのは流石に分が悪い。まして向こうは確実にこちらを殺す気で来るのに対し、こちららは向こうを殺すことは出来ないのだ。それは例えるなら、捕食する気で襲いかかるライオンに対して人間が手加減して挑まなければならぬようなものだ。

ツクヨは黙って苦無を懐に収納する。

「行くぞ」

それを見たジャックは、ジョニーを連れて遠くへ歩き去った。

—————

その日の夜、キリト達一行は食堂で一堂に会していた。

話題は、キリト達が遭遇した協力なオレンジプレイヤー達だ。

「まさかあんなオレンジ達がいるなんてな……」

キリトはため息をつきながら呟く。

「ジェイソン……本当に恐ろしい奴でしたね」

実際にキリトと共に邂逅したサツキもげんがりした顔で同意する。

「それだけじゃねえ。まさかあのジョニー・ブラックまだいやがるとはよ……」

「あの時捕まってなかったんだ……」

ジェネシスの言葉にティアが俯きながら言った。

「ただでさえジョーカーって言っちゃバいやつがいるのに、その上こんな奴らまでいるなんてな……」

「今はとりあえず、情報が欲しいとこだな。アルゴに調査を頼んでんだが……時間かかってんな、大丈夫か？」

ジェネシスがそう呟いた瞬間。

「大丈夫に決まってるだ口、ジェネ坊」

入り口から女性の声が響き、そこにグレーのフードを被り、頬にネズミの髭のような3本の線が入ったプレイヤーが立っていた。

「アルゴ！来てくれたのか！」

キリトが立ち上がって彼女を迎え入れた。

彼女の名はアルゴ。キリトやジェネシス達が第一層の頃から世話になってる情報屋だ。値段は張るが、それでも彼女が提供する情報はかなり有益なものが多いため、ジェネシス達も信頼を置いているのだ。

「ようキー坊、お前さんも久しぶりだな」

「はは、キー坊はよせて……それで、アルゴ。調査の方はどうだったんだ？」

キリトの問いを受けると、アルゴは一旦咳払いを入れ、すぐさま真剣な面持ちに切り替える。

「ああ、はつきり言って最悪の結果だったかな。とりあえず、結論から

言うておく。みんなも心して聞いて欲しイ……

「犯罪者ギルドが現れた」

アルゴの言葉を受け、皆は息を呑んだ。

アルゴは報告を続ける。

「組織の名は『J』。オレっちから見るに、あのラフコフを遥かに凌ぐ最悪の集団だ……」

――

薄暗い洞窟型のダンジョンの奥。

そこに1人の女性プレイヤーが座らせられていた。

それは、先ほどリーファを追い回していた女だ。

「よお、戻ってたかロザリアア〜」

すると奥から、紫のスーツに身を包んだピエロ顔の男―ジョーカーが現れた。

ロザリアと呼ばれた女性は俯いたまま何も答えない。

「……んん？無理だったのかア〜？」

おいおい、おめえ言ったよなあ？『黒の剣士達に一泡吹かせる』つてよお。俺アてめえのその欲求を叶えてやるために、わざわざ軍の奴らと取引して黒鉄宮から出してやったんだぜえ〜？」

「まあ、所詮は雑魚のオレンジだあ……こいつには、荷が重かったんだろおよ〜」

すると今度はロザリアの背後から大男―ジエイソンが現れ、肩を

右腕と左足を斬り落とす。

その瞬間、洞窟中に木霊するほどのロザリアの絶叫が響く。

「ククク……これだから、人斬りはやめられん」

そう言うと、ジャックは人想いにロザリアの首を撥ねた。

「さて、おめえら。そろそろ準備に取り掛かるぞ……」

それを見届けたジョーカーは、全員に指示を出す。

「さつきジョニーのやつから連絡があった……」

………P o hを始末するぞ」

五十八話 みんなでお泊まり会

「やっぱみんなやる事は一緒なのね〜」

「枕投げは基本ですよ!」

ある日、ジェネシスとキリトが攻略から帰ると、リズベット、リーファ、フィリア、アスナ、そしてジャンヌとティアが食堂で団欒していた。

「普段にはないシチュエーションだから、きつとテンションが上がっちゃうんだよね」

「独特の雰囲気というか、兎に角楽しいよね!」

「うんうん。学校生活じゃ一番の思い出になるよね〜」

『な、成る程……』

アスナ、フィリア、ティアの言葉を聞き、ジャンヌは真剣に聞いている。

「よう、何の話をしてるんだ?」

「あ、お兄ちゃん!今ね…」

『ニホンの《しゆうがくりよう》というものを教わっていました』
キリトとジェネシスが彼女らの元へ歩み寄り、ジャンヌが今話している話題について答えた。

「フランスには修学旅行がないっていうから、私たちが説明してたのよ」

「そう言うことか……」

リズの補足にジェネシスが納得したように頷く。

「でも、枕がどうのって……」

「ああ、それは枕投げの話。修学旅行と言ったら定番みたいなものですよっ!」

「そう言うの、一度でいいからここでもやってみたいよね〜」

キリトの問いにアスナが答え、リーファがそう呟く。

「枕投げをか?」

「ううん、お泊まり会的なやつ。ここで出来たら楽しそうじゃない?」
「確かに。ここにいるメンバーでやれば凄く面白そうです!」

フィリアの言葉にリーファが同調した。

「まあ別にいんじゃないかね？こことは違う場所の宿部屋をとってみんなでもそこに泊まれば、そんな感じのやつは出来んだろ」

「なるほど……それは名案だね」

ジェネシスの提案にティアが頷く。

『わ、私……お泊まり会、やってみたいです！』

「そうね、ここで出来るとなれば試してみたくなるわよね」

ジャンヌとアスナが参加の意を示し、リズやリーファ、フィリアも続く。

「じゃあ、宿の確保はお願いね？」

「は？俺らがやるの？」

「そうだけど？」

戸惑うジェネシスにリズが当然、とばかりに答える。

「お、俺たちもお泊まり会に参加なんです?！」

「寧ろ何でいないことになってるのよ？」

「ふふっ、2人も一緒にやろう？きつと楽しいよ！」

アスナが笑顔でそう言い、他の女子達も同意する。

「問答無用の強制参加ってか。へいへい、分かりましたよ。んじゃ宿部屋の方は任せとけ」

ジェネシスがやれやれとため息を吐きつつも、笑顔で承諾した。

—————

日が傾き始めた頃、七十六層アークソフィアの端の方にある、和風の旅館を模した宿に、皆が集まった。

木造建築で出来た建物の中の明かりはやや控えめで薄暗いが、それが中々いい雰囲気醸し出していた。

そして今夜彼らが泊まる部屋はやや広めで、床には畳が敷き詰めら

れている。部屋の扉は襖によって仕切られ、ちゃぶ台や押し入れといった日本伝統の部屋となっていた。

「うわあ〜……何この部屋！」

「すごい……畳、畳がある!!」

「まさか西洋風のS A Oの中にこんな和風のものがあるなんて……！」

女子達はキリトとジェネシスが用意した部屋にご満悦のようだ。特に……

『こ、これが……J a p o n a i s T A T A M I……』

初めて触れる日本の畳を、好奇心旺盛な様子で畳を眺める。

「ジャンヌ、畳っていうのはねえ……こうやって、寝転がったら最高に気持ちいいのよ〜」

リズは畳の上に寝転がりながらジャンヌに言うと、リズに言われるままにジャンヌも畳に寝転がる。

『こ、これは……なぜでしょう。故郷の干し草の山の上で寝る感触とはまた違った、心が癒される感じがします……これは……良いものですね!』

ジャンヌは畳の感触にかなり満足しているようだ。

すると部屋の襖が開き、中にティアがやって来た。

「お待たせ、みんな」

「いらっしや〜い! さあ、入った入った!」

リズベットがティアを中に促す。

「お泊まり会って事で、夜のおつまみ買ってきたんだ〜」

そう言っただけティアはアイテム欄から紙袋をオブジェクト化する。紙袋の中に入っていたのは、歌舞伎揚と呼ばれる煎餅菓子。余談だが関西地方では「ぼんち揚げ」と呼ばれる。

「おお、これは良いじゃない! でも煎餅ってことはもしかなくても……」

「うん。えっちゃんのを和菓子店で買って来たの」

「あそこの和菓子ほんと美味しいよね〜。でもその分、えっちゃんのを苦労が私には想像がつくよ……」

ティアはちやぶ台に歌舞伎揚を広げ、皆は早速その菓子を囓った。
「ま、とりあえずこれで全員揃ったわけだな」

「ああ。それじゃ、お泊まり会を始めようか」

ジェネシスとキリトがメンバーを確認し、ついにお泊まり会がスタートした。

「この人数だからね。流石に全員分の布団は無さそう…」

「大丈夫でしょ。眠くなったら適当に寝転がれば。畳の上なら簡単に寝れるわよ」

そしてメンバーは、各々の場所を決める。フィリアとリズベットはちやぶ台の近くにある椅子に、ジャンヌとリーファは押し入れの近くに敷いてあった布団に、アスナとキリトがちやぶ台に据えられた座布団に、その向かいにティアとジェネシスが座った。

「えっへへー、ぐろぐろしちやお〜！」

リーファは楽しそうにジャンヌの隣の布団で転がり回る。それを隣に座るジャンヌと兄であるキリトが微笑ましく見守った。

すると、ごろごろと転がり回っていたリーファの動きが突然ピタツと止まり、そのまま動かなくなった。

『あ、あれ？リーファさーん？』

ジャンヌはリーファの様子を訝しんで彼女の頬を突つつくが、反応がない。

「zzzz……」

「ああ……そうか」

それを見てキリトが納得したように頷く。

「リーファのやつ、布団に入ったら速攻で眠りにつくと言う特技があるんだよ」

「何それ。のび太くんかよ」

キリトの説明にジェネシスが呆れた顔でぼやいた。

「まあ、寝ちやったものは仕方ないし……このまま始めましょうか」

「それじゃ、何の話をしようか？」

リズベットがそう促し、フィリアが話題をどうするか悩んでいると……

『え？皆さんもこのまま寝るのではないのですか？』

ジャンヌが目を丸くして尋ねる。

「なーに言ってるの。お泊まり会って言うのは、夜中までみんなおしゃべりするのが一番の醍醐味なのよ」

『えええ?!でも、それでは生活習慣が……』

「ジャンヌは真面目だなあ……でも、こう言う時こそハメを外すつてものだよ?」

ジャンヌが意外そうな顔を見ると、アスナがそう教えた。

彼女もそれで納得したところで、再び話題をどうするか皆で考える。

「うくん……恋愛の話、とかは修学旅行ではよくやるじゃない?」

「来たわね、定番中の定番!」

「正にガールズトークって感じだね!」

アスナの提案にリズとフィリアが乗る。

「ガールズトークって、俺らがいるんですがそれは」

「細かいことは気にしない、気にしない」

ジト目で言うジェネシスに対しフィリアがそう流した。

「恋愛の話ね……何かある?アスナ」

「え?私の?!」

「こういうの言い出しつpegやるものだよ」

ティアがアスナに話を促した。

「な、何かあるかな?」

「ここで俺に振るのか?!」

「だって、恋愛の話って言ったら……」

アスナがキリトに持ちかけ、他のメンバーは期待度大の視線で見つめる。

「うくん……何かあるかな?」

「いつも当たり前のように一緒にいるしね」

「だよな。逆にいつも一緒だから、アスナが飽きないか心配なくらいだよ。気の利いたデート先とか、俺あまり知らないし……」

「そんな!場所なんて関係ないよ!」

私は、君と一緒にならどこだって幸せだよ?」

「アスナ……………」

「キリトくん……………」

「チエエエエエンジン!!!ピッチャー交代だ、終わり終わり!!!」

キリトとアスナが2人だけの世界に入り、甘い空気が出始めた所でジエネシスが打ち切った。

「な、なんだよ急に」

「見ているこっちが恥ずかしいんだもの。これ以上見てられないわ!」

「ご馳走様でした。もう満腹です!」

リズとフィリアも恥ずかしそうに頬を赤く染めながらジト目で言った。

「じゃあ、話題を変えようか。フィリア、何かある?」

ティアが次なる話題の提案をフィリアに促す。

「あ、じゃあお宝の話とかはどう?」

「お宝の話?」

「うん。みんなにとってお宝は何かって話。

例えば、私は色々あるんだけど……………」

するとフィリアはアイテム欄から一つの短剣を取り出す。

それはフィリアが普段から使用しているソードブレイカー。

「これ、ツクヨさんと初めて出会ったときにくれたものなんだけど……………」

そして、フィリアは語り出した。自分とツクヨとの初めての出会いを。

—————

今から約数か月前、フィリアは突如ホロウエリアに飛ばされた。そこには自分が今まで出会ったこともないような強力なモンスターがそこら中にいた。

しかも敵はモンスターだけでは無い。ごく稀に現れるオレンジのホロウが襲いかかってくるのだ。

さらにホロウエリアには安全圏と呼ばれるものがなく、安心して休める場所など存在しなかった。そのためフィリアは、毎日死の危機と隣り合わせの日々を何日も過ごしていたため、心身をすり減らしていた。

そんなある日、フィリアは運悪くモンスターの群れと遭遇し、囲まれてしまう。一時は何とか対処できていたが、不運な事に武器の耐久が切れてしまい、丸腰になってしまったのだ。

武器がなくなった事で戦う手段を失ったフィリアは、いよいよ死を覚悟する。

モンスター達はフィリアに襲いかかり、HPをどんどん削っていく中、突如としてフィリアを襲っていたモンスターが一斉に消滅したのだ。

顔を上げると、そこには1人の女性が立っていた。金髪で髪を苦無の形をした簪で止め、服装は右側の袖がなく、右足が露出する形でスリットが入った和服を着た美女。それがツクヨだった。

「あ……貴女は……？」

フィリアが恐る恐る口を開く。

「ふむ、どうやら主もわっちと同じ、プレイヤーのようじゃな。ならば良い、偶然通り掛かっただけじゃったが…助かって何よりじゃ」

ツクヨは優しげに微笑みながらそう言った。

「……何で、私を助けたの」

「むっ」

フィリアが呟いた言葉にツクヨは疑問符を浮かべた。

「私が死んだって、あんたは困らないじゃ無い……私とあんたは他人同士なんだから……」

この時のフィリアは連日の過酷な日々の中で心が磨耗していたため、命を救ったツクヨに対してこのような言葉しか出なかったのだ。「ほう？主は別に死んでも良かったと。あそこで終わっても良かったと、そう言うんじゃない？」

フィリアは黙ったまま何も答えない。

「だがわっちはそうは思わぬ。ここで死んでもいいと思うなら、なぜ主は武器を手にしていった？なぜ戦っていた？」

フィリアはその言葉を受けてハツとした顔になる。

ツクヨはそれを見て満足げに笑うと、フィリアの目の前に一つの短剣を放った。

「主にくれてやろう。その使い方を知りたくば……生き残りたいなら、わっちと来るがいい」

ツクヨはそう言いながら身体を反転させて歩き出した。

フィリアはしばらく黙ってその背中を見つめていたが、やがて意を決して短剣を掴むと、ツクヨの背中を追った。

—————

「……それ以降、私にとってツクヨさんは恩人で、師匠みたいな感じなんだよね」

「そんな事があつたのか……」

キリトは話を聞き終えると成る程と頷く。

「いや、でもツクヨさんってほんと凄い人だよな。いろんな意味で。あたしの中じやミツザネさん並みに頼れる人なんだけど」

「それは言えてるね。私はあまり面と向かってちゃんと話した事は無いから、今度一緒にご飯でも行ってみようかな」

リズベットとアスナが各々そう口にした。

「あ、ツクヨさんお饅頭好きだからそれ上げると機嫌良くなるよ」と、フィリアは最後にそう教える。

「でも、そう言うエピソード付きの宝物っていいよね。私たちって何かあるかな？」

ティアがジェネシスにそう尋ねる。

「宝物なあ〜……まあ俺はこの世界に来てからの思い出ぐれえかな、思いつくとしたら」

「ジェネシス……」

ジェネシスの答えにキリトがそう呟く。

「正直テメエらと会ってなかったら、俺は多分グレてたと思うぜ。だからまあ、感謝はしてる……特にティア、おめえにな」

「も、もう……久弥ったら……」

ティアは顔を赤くして嬉しそうに微笑む。

「はーい、やめやめー!!」

するとリズが強制的に打ち切った。

「ちよ、何でだよリズ!!」

「何かしんみりして来たし、何よりあんたがそんな事言ったら背中がむず痒くなるのよー!」

「普段のジェネシスなら絶対言わなさそうだしね……」

「いやそんなことある訳……あ、あるわけ……あるかも」

「あるんかい!!」

小恥ずかしそうに頬を染めながらリズが言い、フィリアもうんうんと頷き、認めてしまったジェネシスの頭をキリトが引っ叩いた。

『で、でも！私達も貴方にはとても感謝してますよ！みんなもお会いできて良かったとそう思ってる筈です！』

「ちよつとジャンヌ！そんな分かりきってること言わなくていいのよ!!」

必死に伝えるジャンヌの口をリズが抑えた。

少し一悶着あったのち、次なる話題をどうするか話し合う。

「じゃあ次はジャンヌに話題を貰いましょうか!」

『わ、私ですか?!』

リズ次にジャンヌを指名する。

『で、では……皆さんの憧れの人、とかは如何でしょう?』

「憧れの人、か…」

ジャンヌは頷き、続ける。

『私は、皆さんもお分かりかと思いますが……フランスの偉人である《ジャンヌ・ダルク》ですね』

「ジャンヌはフランスに住んでるんだもんね」

ジャンヌの言葉にアスナはうんうんと頷いた。

『特に、私の住んでいるオルレアンでは、それはもう神様の如く崇められていくのです。かく言う私もそうでした……』

「オルレアンって言うと、百年戦争の最中に敵軍に囲まれた街だよ。そこをジャンヌ・ダルクが奇跡を起こして解放したのは有名な話だよ」

ティアの説明にジャンヌは首を縦に振った。

『今の私たちがあるのは、あの方のおかげと言ったもの過言ではありませんから……』

このゲームがデスクゲームになった時、私はこの名に誓って皆さんを解放しようと、今日まで戦い続けて来たんです』

「それが、君が旗を持って戦う理由か……これからも、頼りにしてるよ、ジャンヌ」

『はい…お任せください』

キリトの言葉にジャンヌは自信ありげに答えた。

—————

「じゃあ、最後にあたしが話題を出しましょうか」

深夜になり、そろそろ話の種がつき始めた頃にリズがそう言った。

「おや、秘蔵の話ありって感じだね？」

「何の話？」

アスナが問いかけると、リズはニヤリと笑い答える。

『「恐怖、夜の街に出る女性の幽霊」』

その瞬間、アスナの顔が一瞬で引きつる。

「怖い話ってやつ？うわあ……怖いけど聞きたいっ！」

「何か楽しそうだな」

『それは興味深いですね』

「気になるなあ〜♪」

他の皆は興味津々の様子だが……

「ほ、他の話の方が良く無いかなあ〜？例えば……怖い話以外とか！」

「いや例えになってないからそれ」

怖いものが苦手なアスナは話題の転換を促すもジェネシスにそう突っ込まれる。

「じゃあ、始めるわね〜」

これは、リズベットが鍛冶屋の常連さんから聞いたお話……

「きゃああああっ!!!」

「いやどこでビビってんだよ?!」

「まだ何も話してないじゃない!!」

………を話し始めた瞬間、アスナが絶叫を上げる。

「だって……だってえ〜」

もう既に泣きそうな顔のアスナ。

『まあまあアスナさん、所詮は余興ですから大丈夫ですよ』

「ちよつとジャンヌ！それ言ったら台無しじゃないの!!」

……まあむしろ、これくらい怖がってくれる方が話し甲斐があるわね」

そこからリズベットは再び話し始める。

七十六層を探索していたとあるギルドがいた。

彼らはとても仲良しで、普段から常にメンバー全員揃って行動していた。

ある日、彼らは道に迷ってしまい、気がつくともう深夜になっていた。逸れないように皆は固まって動いていたのだが、気がつくとも一人メンバーが居なくなっていた。

全員が必死になって捜索していると、無事にそのメンバーは見つかった。

だがそのメンバーは戻った瞬間、真つ青な顔でこう言った。

「早く逃げろ!! 得体の知れない女が来る!!」

血相を変えて訴えるそのメンバーのただならぬ雰囲気には皆は何か嫌な予感を感じ、急いでその場を離れた。

しばらく走っているうちに、彼らは街に到着し、普段寝泊まりしている宿に無事戻った。

安心した彼らは部屋に戻って夕食を取ると、そのまま部屋で夜遅くまでおしゃべりをしたりカードゲームに興じていたそうだった。

ところがその時、部屋の電気が突如として切れた。

メンバーの誰かが間違えて消したのかと思えば、誰か確認するが、誰も消していないと言う。

数秒後、電気は再びついて何事もなかったかのように思われた。

しかし、異変は起きた。

部屋の隅に立つ、白い着物姿の女性。

そして、掠れた声でこう言ったそうだった……

『わたしも いっしょにまげて』

—————

「きゃあああああ——っ!!!」

アスナが耐え切れず頭を抱えて悲鳴を上げた。

「……とまあ、これが常連さんから聞いた話よ。嘘が本当か知らないけど」

話し合えたリズが一息ついてコーラを飲む。

「嘘に決まってるじゃない！お化けなんて無いから！お化けなんて嘘だから!!」

「アスナ、落ち着けて…」

必死になってお化けの存在を否定するアスナをキリトが宥める。

「うーむ……」

「ん？どうかしたの、久弥？」

何故か考え込むジエネシスを見て不思議そうな顔で覗き込むティア。

「いや、何でもねえ（白い着物姿の女性……いや、まさかな）」

ジエネシスの頭に浮かんだのは以前から度々出会っている、嫺やかな仕草や雰囲気を持つ不思議な雰囲気の人。

まさか彼女なのでは……そんな事をジエネシスが考えていた時だった。

部屋の電気が消えた。

「ちよ、ちよっと!!誰よ部屋の電気消したの!!」

「わ、私は何もしてないよ!!」

「お、俺だって何もしてない!!」

『私も何もしていません!!』

「というかそもそもスイッチって何処にあったっけ？」

皆突然の事で戸惑いの声を上げる。

だが誰も部屋の電気を消していないようだ。

数秒後、再び電気が回復する。

「もう、何だったのかしらね」

「システムのなトラブルの一つかな。アークソフィアに来てからカーディナルシステムに異常があるみたいだし」

リズの疑問にキリトがそう答えた。

「あ、ああああ………!」

するとフィリアが真っ青な顔で指を刺す。

絶叫を上げてキリト達は部屋を飛び出して外に出た。

「ちよつと!!何なのよあれ!!」

「俺にもわからねえよ!!まさかほんとにあれが……」

リズが息絶え絶えになりながら叫ぶが、キリトにも分からないので首を横に振る。

するとティアが何かに気づく。

「あれ?ジエネシスは?」

皆は一斉に辺りを見回すが、彼の姿は無い。

『もしや、まだ部屋にいるのでは……』

「急いで戻るぞ!」

嫌な予感を感じたキリトとティアが走って戻る。

「ちよつとキリトくん!!もうく、やだああああ!!」

ただでさえ幽霊が嫌いなアスナは泣きながらその後を追う。

—————

皆が悲鳴を上げて部屋から飛び出した後、一人部屋に残ったジエネシス。

「……で、一体なにしてたシキ」

呆れた顔でそう問いかける。

幽霊……もといシキは肩を竦めて

「もう、あんなに怖がらなくてもいいじゃない。ちよつと楽しそうだったから覗いただけなのに」

と、残念そうに答える。

「あのな、タイミングが最悪なんだよ……」

やれやれとジエネシスは首を振った。

「はあ……さて、私はもう行くわね」

「ん?何だ、あいつらには挨拶しねえのか?」

立ち上がるシキにジエネシスが問いかける。

「ええ、まだ彼らにちゃんと会うには少し早いわ。

悪いけど、適当に誤魔化しておいてくれるかしら」

「あのなあ……こんなはどうやって誤魔化すんだよ……」

ジェネシスのぼやきにシキは「ふふっ」と笑って部屋を出ようとする。

「あー、ちよつと待った」

そんな彼女をジェネシスは少し引き止める。

「あんたの正体だが……多分分かつちまった」

するとシキは振り返って優しげな笑みを浮かべ、

「へえ……では、貴方の推理を聞かせてくれるかしら」

と興味深そうに問いかける。

「あんた……レイやサクラと同じMHC P4号《シキ》のものか？

この世界のことには誰よりも詳しいし、普通のプレイヤーとはちよつと違うみてえだし」

「ふふっ。流石、鋭いわね。では答え合わせといきましょう……」。

貴方の推理はイエスでもあるし、ノーでもある。半分正解で半分不正解、というところね」

ジェネシスの指摘に対しシキはそう答える。

「今の私のこの身体は、確かにMHC P4号《シキ》のもの。だけどこの身体を動かしているデータはまた別のものなの」

「何だそりゃ。ますます分かんねえよ……まさか、この間見せたあのスキルって……」

「ええ、《直死の魔眼》は元々この身体の持ち主であった《シキ》に備えられていたもの。だから本来の私の力ではない、とはそういうことよ。

さて、申し訳ないのだけれどこれ以上詳しくは言えないわ。

もうすぐ彼らも帰ってくるし」

そう言つてシキは再び歩きだす。

「はあ……まだあいつらには話さねえ方がいいんだな？」

「ええ。そうしてほしい。正直な話、私はまだ会うわけにはいかないの。私の存在が露見してしまうと色々と厄介だから……あとはお願い

「いね?」

そしてシキは次の瞬間、姿を消した。

その数秒後、キリト達は戻ってきた。

「じ、ジエネシス!!あの幽霊はどうしたんだ?!」

「はっ、俺が払っというてやったから安心しろ。もう二度とあんな悪戯はしませんと泣きながら謝って出て行ったぜ」

と、ジエネシスはあっけらかんと答える。

「大丈夫だった?呪われたりしてない?」

「大丈夫だったの。心配すんな、あいつはそんなやつじゃねえ」

心配そうにジエネシスに問いかけるティアに対し、ジエネシスは諭すような口調で言う。

その後、皆は無事就寝し、お泊まり会は一応成功を収めた。

五十九話 動き出した悪

情報屋のアルゴから提示された衝撃の情報。それはラフコフ以来となる殺人ギルドが出現したと言うものだった。

その名も、《“J”》。

アルゴは更に詳細なデータを伝えるため、ホワイトボードに5枚の写真を貼り付ける。

アルゴはまず左端に貼り付けたフード付きの男の写真を指差す。

「まずはこいつだ……お前さん達も知ってると思うが、かつてラフコフの3幹部の1人だった《ジョニー・ブラック》。

ラフコフが壊滅した後、しばらく消息不明だったんだが……」

「ジョーカーの下に下った、と言うことか」

キリトの言葉にアルゴは首を縦に振る。

「ま、正直コイツに関してはまだ可愛い方だ……問題は後の4人」

次にアルゴはジョニーの隣に飾られた写真を指差す。

目がやや飛び出ており、紺と紫のローブを着た不気味な男性。

『青髭のジル』。近頃、下層で小さい子供のプレイヤーがいなくなるって言う事件が多発していてナ……どうやらコイツが関与してるって話だ」

『小さい子供を……そんな……』

ジャンヌはかなりショックを受けた様子で、口元を両手で覆いながら呟く。

「でも、小さい子供って基本的に第一層で保護してるんじゃない……」

第一層に行った時に子供のプレイヤーと関わった経験のあるキリトが疑問符を浮かべた。

「残念ながら、第一層の子供が全てじゃない。未だにフィールドを彷徨ってる子供が偶にいるらしいんだ。標的になってるのは、そんな子供達さ」

「ひどい……」

サチも震えた声で呟く。

すると、

『……彼は、私が必ず止めます』

ジャンヌが毅然とした表情で告げる。

「ジャンヌ？」

『これ以上、無垢なる子供達を傷つけさせはしません』

きつぱりと決意が固まった様子でそう言う。

「じゃあ、次ダ……《ジェイソン》。見ての通り、馬鹿みたいなパワーが特徴のやつダ。お前さん達は既にやり合ってるんだったナ？」

「ああ。恐ろしいほどの怪力の持ち主だった」

一度戦ったことのあるキリトが彼との戦いを振り返ってそう答える。

「続いて、《J》の実質ナンバーツの男ダ」

アルゴは更に隣の男の写真を示す。そこには、銀髪で赤い瞳の人斬りが写っていた。

「《ジャック・ザ・リップ》……これまで何人ものプレイヤーを文字通り切り刻んできた人斬りダ」

その瞬間、ティアは無意識のうちにその写真から視線を逸らす。ティアにとって、ジャックは二度も嫌な経験をさせられた因縁の相手だ。

「そして最後に……この男ダ」

アルゴが最後に示したのは紫のピエロ風マスクの不気味な男。

「《J》を率いるリーダー、そして最悪最狂のプレイヤー……《ジョーカー》。コイツはオレたちから見てもかなりやばいプレイヤーダ。これほどのプレイヤーが今までどこで何をしたのか、オイラの情報網を駆使してもまるつきり掴めナイ。ホロウエリアにいたつてのは知ってるんだが……問題はその前ダ。多分ラフコフにでも居たんだろうが、何一つ情報がナイ」

そこまで説明し終えて、アルゴは一呼吸おく。

「ジョーカー……こやつだけは許さぬ」

被害にあったツクヨが恨みがましい視線でジョーカーの写真を睨む。

「このジョーカーって人、POHとは違うの？」

サチの疑問に対し、ジエネシスが答える。

「P O Hはてめえらが思ってるような殺人鬼じゃねえ。ありやあただのアンチや荒らしの成れの果て、俺たち攻略組やキリトを人殺しにしたいだけの小物だ。」

だがジョーカーは違う。こいつは根っから狂ってるやつだ。そして何もかもを狂わせることに楽しみを感じてる。人殺しはあくまでその手段でしかねえ」

ジエネシスの言葉にキリトも頷く。

「ああ。俺もジョーカーを一目見ただけで分かった。こいつはP O Hよりも遥かにヤバイやつだ。と言うか、何でよりによってS A Oにこんな奴がいるんだ……」

キリトもげんなりした顔で呟く。

「さて、とりあえず主要メンバー二関してはこんな所だ。組織の名前の由来は、この幹部達の共通点が名前の初めに“J”がつく所から取ったんだと思う。とはいえ、ここまで聞いたらラフコフと同じだと思っただ口ウ……だがそんな事はナイ。」

この際だからはっきり言うゾ。“J”は恐らくラフコフを遥かに凌ぐ、史上最悪の犯罪者ギルドだ」

アルゴがそう告げると、皆は息を呑んだ。

「コイツらのヤバイところは、部下達もレベルが高いってことだ。ラフコフは部下達のレベルはそこまで高くなかったが、コイツらは違う……それこそお前さん達攻略組に匹敵する程の強さがある。正面から戦おうものなら、こちらにも本気で向こうを殺す気でかからないと間違いなく殺らレル」

「嘘でしょ……どうしてそこまで」

アスナがアルゴの説明を受け愕然とする。

「嬢ちゃん、こんな奴らに“何故”なんて聞いても無意味だ。重要なのはどうやってコイツらの暴挙を食い止めるか、だ」

そんなアスナを、年長者であるミツザネが諫めた。

「その旦那の言う通りだ。とは言えコイツらは神出鬼没……どのタイミングでどう仕掛けてくるかも全く読めナイ。だから対策のしよ

うもないんだ……」

するとそこへアルゴの元へ一通のメッセージが入る。

「……………たった今、〃J〃に関する新たな情報が入った」

皆はアルゴの方に注目してどんな情報が入ったのか聞く。

「ラフコフの元リーダー、POHが……………」

……………〃J〃によって殺されたそうだ」

—————

時は数分前に遡る。

薄暗い鬱蒼とした森林の中を、1人の男がゆっくりと進む。

真つ黒のポンチョを身につけ、ボロボロの茶色いズボンを履いた男性。

彼の名は《POH》。かつてラフィンコフィンと言う犯罪者ギルドの長だった人物だ。

「ヘッド」

すると、彼の背後から陽気な男の声が響く。

POHが振り返ると、そこにはかつて自分の部下だった《ジョニー・ブラック》が立っていた。

「……………なんだてめえか。生きてたんだな」

「まあね！あんなので死ぬわけ無いじゃん！まだまだ俺、人を殺し足りないからさ!!」

楽しげに話すジョニーに対し、POHは興味なさげに「ふん」と息を吐く。

「ねえ、ヘッドもどうすか？もう一回俺と一緒に人殺しやりましょう!!」

「俺はそんなもんに興味はねえんだよ。俺が興味あるのは……《黒の剣士キリト》と《閃光のアスナ》をどうやって殺すかってことだけだ」

POHの言葉にジョニーは何も答えない。

そんな彼を無視してPOHは踵を返して歩き出す。

「つうわけだ。俺はてめえらなんざ仲間だとかそんな風に思ったことはねえ。もう俺に関わるんじゃねえ、好きに生きな」

「そつかあく……んじゃあ、そうさせてもらうよ!!」

瞬間、ジョニーは懐から素早く毒ナイフを取り出し、POHに投げつける。

POHも素早い反応で腰から《メイトチョッパー》を引き抜き、それらを弾く。

「生憎だがヘッド、俺もアンタに対して何とも思っちゃいない。いや、むしろずつとこう思ってたよ……アンタが死ぬ時、どんな顔をするのかってさあ!!」

ジョニーはそう言って毒ナイフを手にとって斬り込む。

POHは短剣でジョニーの突撃を受け止める。

「ほう、上等じゃねえか。だが……」

POHはその状態からジョニーの腹部を蹴り飛ばしてバランスを崩させ、更に短剣を振り下ろしてジョニーの左腕を斬り落とす。

「残念だったな。俺を殺そうなんざ100年早えんだよジョニー」

と言ってジョニーを見下ろすPOH。

「んじゃコイツはどうだい?」

次の瞬間、背後から別の男の声がし、その背中に投げナイフが突き刺さった。

「ぐっ……!」

そのナイフには麻痺毒が塗ってあり、P O Hはその場に崩れ落ちた。

「ふ……ハハツ、ヒヤアハハハハハツ!!!」

甲高い笑い声を上げながら軽快な足取りでP O Hに近づく紫のスーツの男性。

P O Hは唯一動く首でその声が見遣り、そして忌々しげにその名を口にする。

「てめえ……ジョーカー……!」

ジョーカーはP O Hの元にしやがみ込む。

「よお〜P O Hさん。どうだい?自分が散々人にやってきた手口を受けるって言う気分は?」

ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながら問いかけるジョーカーに、歯軋りしながら憎悪の表情を向けるP O H。

「ブアツハハハハハハハハハハハハハハハハハツ!!!いいねえ〜いいねえ〜いいよお〜!」

その顔、その表情、最高だぜえ〜!!おい、ジョニーも見てみるよ!こりや傑作だぜハハハハハハツ!!!」

更にジョーカーは立ち上がって無抵抗のP O Hを何度も踏みつけ、蹴り飛ばす。

しばらく狂ったように笑いながらP O Hを蹴り、踏みつけるジョーカー。やがて落ち着きを取り戻し、先払いすると懐からサバイバルナイフを取り出す。

「P O Hさんよお、アンタの作ったラフコフは楽しかったが……上のアンタは全然ダメ、というかクソだったなあ。何せアンタの目的はただ攻略組の奴らを人殺しにしたいだけ、取り分け黒の剣士キリトにはご執心のようだったなあ〜!」

そんなんじやせつかくのあの組織も宝の持ち腐れ、拳句アンタは自作自演であの組織を潰しやがった!俺が考えた楽しいP・A・R・T・Yもオジャンだ!」

そして再び蹲み込んで、その顔にサバイバルナイフの刃を近づける。

「俺は違う……そんなんじや終わらせねえ。最っ高に楽しい組織を俺は作った。そして俺はコイツらと一緒にこれから祭りを開く」

すると周りから複数のプレイヤーが続々と現れ、ジョーカーの背後からPOHを見下ろす。それは「J」の幹部、ジャック・ジェイソン・ジル。そしてジョニーだ。

「だが残念なことに、その祭りにアンタは不要だ……そういう訳だ、グッバイだぜPOHさん」

そしてサバイバルナイフを直すと、代わりにその口に丸い鋼鉄の物体をねじ込む。

それは、時限式の爆弾。

ジョーカーは立ち上がって、そのまま歩き出す。POHは口に爆弾を仕込まれているため何も言葉を発せず、ただ憎しみの目でジョーカーを見つめるのみ。

ジョーカー達が歩いてしばらく、遙か後方で爆発音が響く。

爆風が止み、煙と共にそこにはガラス片のような青白いエフェクトが舞っていた。

—————

「POHが死んだ?!」

「この人でなし!!……じゃねえや。いやPOHは確かに人でなしなんだがそれはいい。」

その情報は本当なのか？アルゴ」

信じられない、とばかりにキリトとジェネシスが問いかける。

「ああ。頼れるやつからの情報だ。間違い無いと言ってイイ」

アルゴは首を縦に振って断言した。

「まさかPOHが殺されるなんて……」

「普通ならザマアとか思ったりするんだろうが……何か釈然としねえ

な」

ティアとクラインがそう呟く。

他のメンバーも同じなようで、未だにメンバーの中では騒めきが起きている。

「これから何が始まるのかな……」

「さあな。とりあえず、奴らには十分気をつけねえとな」

ティアの言葉にジェネシスがそう答えた。

――――

一方、こちらは「J」のアジト。

「さて、ジョーカーよお。俺たちはこれからどおするんだあ？」

ジェイソンが首をグリグリと回しながらジョーカーに尋ねる。

「その事なんだがな……スポンサー様からのお達しで、計画を予定より早くスタートさせろ、だとよ」

ジョーカーの言葉に一回は驚く。

「おやおやあ。では早速、我々は行動に移った方がよろしいので？」

「Yea。そう言う訳だ……早速、仕事に取りかかってくれ」

両目をギョロギョロと回しながら尋ねるジルに、ジョーカーは頷いて皆に指示を飛ばす。

そして一同の表情に不気味な笑みが浮かび上がった。

――――

く一ヶ月後く

現在、最前線は95層。

あれ以降、〃J〃の勢いはどんどん増していった。

殺人の被害者はもちろん、行方不明者が増加しているのだ。

しかしそんな中でも、最前線の攻略は続く。

その日はサチ、サツキ、ハツキ、リーファ、エギルの5人が迷宮区に出ていた。

「ふう……こんなところかな」

「お疲れ様です、サチさん」

モンスターを撃破したサチが槍を振り払い、彼女をサツキが労う。

「…もう夕方の5時か……よし、そろそろ戻ろうぜ。夕飯の支度をしなくちやならんしな」

「そうですね、それじゃ帰りましょうか」

時間を確認したエギルがそう提案し、ハツキも同調して頷く。

「じゃあ、皆さん帰りましょう！オレンジに遭遇しないように気を付けて」

リーファがそう口にした時だった。

「なあにに気をつけるってえ〜?」

後ろから威圧感のある間延びした声が響く。

その声に聞き覚えのあるリーファとサツキは反射的に後ろを振り向く。

そこには、エギルよりも高く、筋肉質な大男が立っていた。

「じ、ジェイソン……!!」

「おお、覚えてくれてるたあ嬉しいねえ〜。だが悪いんだけどなあ、ちよいと大人しく捕まってくれねえかあ〜?」

ジェイソンがそう言った直後、彼らの周りに多数のオレンジプレイヤー達が出現し、取り囲んだ。

「まさかこいつら……」

「みんな〃J〃のプレイヤー?!」

「待たせたな諸君!!」

オレンジプレイヤーが多数集う中、ピエロ顔の男、ジョーカーが通り抜ける。

そして彼らを一望できる少し盛り上がった場所に登り、彼らの方を向く。

「今晚、18時を以て——P. A. R. T. Yを始めろ!!」

ジョーカーが高らかにそう叫んだ直後、オレンジ達の間で歓喜の雄叫びが上がり始め、場のボルテージが高まる。

「聞きましたか同胞達よお!!遂に機は熟しましたああ!

惰眠を貪る者達に我らの力、存分に示しましょうぞおお!!」

オレンジの男達に向けてジルがそう鼓舞した事で更に場が盛り上がる。

—————

七十六層アークソファイア

「遅いな、リーファ達……」

その頃、キリト達はアークソファイアの宿屋でリーファ達の帰りを待っていたのだが、中々帰って来ず心配そうに座る。

メッセージを飛ばしても、何も反応がない。

「ま、ちよいと寄り道でもしてるんじゃない?」

イシユタルが軽く笑いながら告げる。

しかし皆の表情は深刻な面持ちだ。ただでさえ“J”の暗躍が続く中、攻略に出た面々の帰りが遅いとなると心配にもなる。

その時、皆の元に一斉にメールが届く。

彼らがそのメッセージを開いた瞬間、皆の目が衝撃で見開かれた。

「嘘よ……」

「……冗談でしょう？」

そのメッセージには、こう書かれていた。

「『J』による人質籠城事件発生……」

迷宮区タワーが……

占拠されただと?!!」

六十話 突入前・それぞれの思い

犯罪者ギルド「J」による迷宮区タワー占拠事件が発生してすぐ、その対策のための緊急会議がアークソフィアの広場で開かれた。

アスナが司会を務め、アルゴが自身の集めた「J」の構成員の情報を皆に伝える。ただ、事態は一刻を争うため説明は手短に行われた。

「J」はかつてのラフコフと違い、構成員一人一人のレベルが高いため、鎮圧するにはそれこそ敵を殺す気で行かなければたちまち全滅してしまう。この会議では参加者一人一人に、「殺人を犯す覚悟」が問われた。

「……作戦の実行は30分後にします。無理強いはしません。戦う覚悟のある人だけ、もう一度集まってください」

アスナはそう言って会議を締め括った。

ジエネシス達は一度彼らが普段から使用している宿屋に戻った。

――

食堂の席に全員が揃って座る。

だが場は沈黙で包まれ、誰一人言葉を発さない。

皆、悩んでいるのだ。迷宮区タワーが占拠され、しかもそこに人質があるとなれば何としても助けなければならぬ。

しかし最前線の迷宮区は高レベルのモンスターが出現するためだ。だでさえ危険度が高い上に、自分たちと同等の強さを持つ犯罪者プレイヤーがいるのだ。

「……はあ」

ジエネシスは不意に立ち上がると、そのまま外に出た。

外はもう真っ暗になっており、ひんやりした空気が彼の肌を撫でる。

彼自身、人殺しになる覚悟はどうに出来ていた。大切な仲間の為ならばその罪過をいくらでも背負うつもりでいた。

「ジエネシス」

不意に彼を呼ぶ声がし、振り向くと後ろにシノンがいた。

「…どうした？ やっぱ怖えのか？」

「そうね……人殺しになる覚悟は、私には出来ない。私は……人に向かってこの引き金を引くことは……どうしても出来ないと思う」

シノンは震える右手を左手で押さえ込むように掴みながら、不安げな顔で言った。

「シノン、安心しろ……なんて言うつもりはねえ。こればかりは今までとは何もかもが違うしな……だから無理に戦いに来いなんざ絶対と言うつもりはねえし、来なかったとしても誰も責めないから安心しろ」

ジエネシスは口元に笑みを浮かべながら言う。

「だが、これだけは覚えとけ」

そう言つてジエネシスはシノンの両肩を掴む。

「お前が引いた引き金は、確かに誰かの命を奪うかもしれないけど……けどな。同時に誰かの命を救う事にもなる。

だから……もし戦うなら、迷わずに撃て。てめえの勇気が、俺たちを確実に助けてくれるからよ」

ジエネシスはそう言つと、シノンの頭を撫でて歩き出す。

「私の引き金が……誰かを救う……」

シノンはジエネシスの言葉を反芻する。

その時、シノンの中に何かがストンと落ちる感じがした。今まで背負い続けてきた重りが、少しだけ軽くなったような感覚がしたのだ。

「ありがとう……ジエネシス……」

シノンは1人、小さな声で呟く。

そして、いつのまにか震えが止まっていた右手をゆっくり上げ、指をピストルのような形にすると、空に輝く月のような明かりに向けて照準を合わせる。

「今はまだ、答えは出てないけれど……あんたの、みんなの為なら、

私は……………」

その頃、外のベンチに座ってキセルを蒸しているツクヨがいた。その隣にはフィリアが座っている。

「……今宵はとんだ夜になってしまったのう、フィリアよ」
ツクヨはキセルの煙をフウ、と吐くと、隣に座るフィリアに語りかける。

フィリアは膝を抱え込むように座りこんでいる。
「ツクヨさんは……怖くないの？これからの突入作戦」

「うむ、怖くなど無い。忘れたかフィリア？わっちらはそれよりも過酷な日々を、ホロウエリアで過ごして来たであろう」

ツクヨは落ち着き払った声と口調で言う。

「何より……わっちには頼れる弟子が付いておる。恐れることなど、何もありません」

そしてツクヨはフィリアの頭を優しく撫でながらそう言った。

—————

シリカは食堂で一人、俯き加減で座っていた。

不安と恐怖に押しつぶされそうになっている彼女を、心配そうにピナは見つめる。

「ピナ……あたし、どうしたらいいんだろう……」

『きゅる……』

シリカは1人、ピナに対してそう問いかける。

「よう、やっぱり不安か？」

そんな彼女の元へジェネシスがやって来る。

「あ……ジェネシスさん」

「シリカ、無理して戦うことはねえ。これからの戦いは今までとは違えんだ……確実に人が死ぬ。シリカだって死ぬ可能性だってある」

ジェネシスの言葉にシリカは何もいえなくなる。

「この戦いに参加しななかつたからと言って誰も責めたりしねえ。いや、本音を言うとなら誰もこの作戦には参加して欲しくねえ……仲間が危険な間に合うなら真つ平ごめんだしな」

ジェネシスは俯くシリカの頭を優しくポンポンと叩くと、そのまま歩き出す。そんな彼をシリカは呼び止めた。

「ジェネシスさんはどうするんですか？」

「俺は参加するぜ。人質取られてるしな。それに、迷宮区タワー占拠されちゃあ攻略が出来ねえし」

ジェネシスはそう言い残して立ち去った。

「……強いなあ、ジェネシスさんは」

シリカは羨望の眼差しでジェネシスが歩き去った方を見つめながら呟くと、座り直してピナの方を向く。

「あたしも……今までも臆病なままじゃいけないよね、ピナ」

—————

ジェネシスは食堂を歩いていると、メニュー欄を開いてアイテム整理を行なっているイシユタルと、お菓子を頬張っているオルトリアを見かける。

「よう」

「あら、何か用？」

イシユタルはメニューを閉じてジェネシスの方を向く。

「ジエネシスさんも食べます?」

「お前こんな時によくそんなもん食えるな」

ジエネシスは呆れた顔で言いながらオルトリアが食べているポテトチップスを一枚貰うと口に放った。

「前にも言ったじゃないですか。食べたい時に食べる、それがおやつタイムです。」

それに……食べないと落ち着かなくて」

やや目を伏せ気味に言うオルトリアは、そう言って再びポテトチップを食べ始める。

「ふふっ、澄香もホントは怖がってるのよ」

「む、別に怖がってなんかいませんよ。そう言う凜ちゃんだって怖いんじゃないですか?」

ニヤニヤと笑いながら言うイシユタルに対し、オルトリアは頬を膨らませて反論した。

「そりや怖いに決まってるじゃない。ただでさえ死んだら終わりのゲームで、殺人ギルドとやりあわなきや行けないのよ? こんなの普通でいられる方がおかしいっての……」

でも、あんたが守ってくれるんでしょ?」

するとイシユタルはジエネシスの方を向き、口元に笑みを浮かべながら確信を持ったような顔で問いかける。

ジエネシスは一瞬固まるが、「はっ」と軽く笑うと

「たりめーだ。テメエらは絶対に死なさねえよ」

「そう、なら頼りにしてるわよ!」

イシユタルはそう言っつてジエネシスの背中を思い切り叩く。

「では、私の事もお願いしますね」

すると今度はオルトリアもジエネシスの背中を思い切り叩く。

「痛つてえー……つたく、言われんでもわかっつてるっつーの!」

ジエネシスはそう言いながら両手で二人の背中を同時に叩いた。

「久弥」

ジェネシスが部屋に戻ってリラックスしながら装備の確認をしていると、ティアが部屋に入ってきて来た。

「久弥も、作戦に参加するんでしよう?」

「ああ。そのつもりだ」

ジェネシスはメニュー欄を閉じると頷いて答える。

「……止めても、行くんだよね」

「……まあな」

するとティアはジェネシスに思いきり抱きつく。

「お、おいおい……どうしたんだよ」

ジェネシスは戸惑いながらも、ティアの頭を撫でる。

ティアはジェネシスに回した両腕に力を込めて思い切り抱きしめる。

「約束して?絶対になんないって。もう絶対にあんな無茶はしないって」

ティアの言う「無茶」と言うのは、かつてラフコフ掃討作戦に於けるジェネシスの行動だ。命の危機に瀕したティアを守るため、ジェネシスは多くのラフコフメンバーを死に追いやった。

その事を指摘されたジェネシスは苦笑いになり、

「はあ、てめえに言われちゃ仕方ねえな……」

そう言っただけティアの頭を優しく撫でた。

――

出発前。ジェネシスとティアが最後の確認を終え、宿の出口に向

かつて歩いていると……

「パパ、ママ」

彼らを呼び止めたのは、娘のレイ。

「……心配はしていません。パパとママなら、必ず帰ってくるって信じてますから」

「ああ。いつも通りちゃんと帰ってくるさ。それまで、また留守番よろしくな」

ジェネシスは蹲み込んで、レイの頭を優しく撫でる。

「レイ、いい子にして待つてるんだよ？」

「はい！待ってますからね、ママ」

ティアもレイを優しく抱きしめながら言った。

そしてジェネシスとティアは歩き出す。

その後ろに、サクラが続いた。

「サクラ、パパとママをお願いします」

「勿論です。私がいる限り、お父さんとお母さんは絶対に大丈夫ですから！」

サクラは優しい笑顔でレイに力強くそう告げると、ジェネシス達の後を追った。

—————

作戦実行の時間が近づき、参加メンバーは再びアークソフィアの転移門前に集まる。

そこにはジェネシス、ティアを始め、彼らの仲間が全員揃っていた。不安がっていたシノンやシリカ、フィリアも、その恐怖は克服できていないようだが、覚悟を決めた表情でそこに立っている。

「やっぱり、お前も参加するんだな」

するとキリトがジエネシスの元に歩み寄る。

「おめえの方こそ、まさか来るとは思ってたなかつたぜ」

「まあな、俺はお前に借りがあるしな……」

キリトはそう言っただけ目を伏せる。

「あの時、ラフコフ掃討作戦で、俺たちはお前一人に全部背負わせてしまった……俺が背負うべきだった罪まで、お前にやらせてしまった借りがある。」

だから今度こそ、お前一人に背負わせたりしない。今度は……みんな背負うんだ」

キリトはきつぱりとした顔でそう告げる。

「なーにを勘違いしてんだバカモンが」

すると後ろからミツザネがキリトとジエネシスの頭に拳骨を加えた。

「ちよ、ミツザネさん？なんで俺まで叩かれなきゃ行けないんです?!」

ジエネシスが涙目でミツザネを睨む。

「ついでだ、気にすんな。」

それより、これから俺たちは奴らと殺し合いをしに行くんじやねえよ。俺たちはただ、奴らを懲らしめに行くだけだ。そこまで気負う必要はねえ筈だぜ。

それに……」

するとミツザネは二人の肩を組んで抱き寄せる。

「どんな結果になろうとも、お前たちはお前たちの信じた道を進め。」

もしもの事があっても、俺が何とかしてやらから安心しろ」

ミツザネは不敵な笑みでそう告げた。

「……たく、頼れるお義父さんだぜ」

「テメエにお義父さんと呼ぶ事を許した覚えはねえ」

「いやなんでえ?!」

ジエネシスの言葉に対しミツザネは冷えた目つきでジエネシスの頭をもう一度殴った。

彼らがそんなやり取りをしていると、アスナが集団の前に立つ。

「では……行きましょう。彼らの暴挙を食い止めるために」

そしてアスナは回廊結晶を開き、“J”が待つ九十五層迷宮区タワーへの道を開く。

攻略組メンバーは、その光を潜り抜け、狂気が渦巻くその戦地へと足を踏み込んだ――

――

場所は変わって、九十五層迷宮区。

「……来やがったか」

ピエロ顔の不気味な男、ジョーカーは攻略組が来た事を察知すると、ニヤリと口角を上げる。

「さて……それじゃあ、あんたの計画とやらを始めようじゃねえか」

ジョーカーは身体の向きを反転させると、後ろに立つ人物に対して言った。

「ああ。恩に切るよ……君達の協力のお陰で、僕の研究はあと一步の所まで来た」

そこに立っているのは、白と金のゴージャスなアーマーを身につけた見た目だけは美青年の男……

アルベリヒ。

「手始めに……この研究成果を、彼らにくつついているゴミ同然のAI……《M H C P》に試してみようじゃ無いか。人の心を浄化するのが仕事の奴らに、人の悪意の集合体をぶつけたらどうなるか……クククッ」

不気味な笑みを浮かべながら、アルベリヒは右手に何やら鍵爪のようなドライバーを取り出した。

そこは真つ暗な空間。周りには何もなく、ただ殺風景な空間の中に、リーファは立っていた。

自分は先ほどまで、確かに迷宮区の中にいた。しかしジェイソン達に襲われてから意識を失い、気がつけばこんなところにいた。

その時だった。

足元からゆつくりと、何かが浮き上がってくる。

リーファはそれがなんなのか気になり、目を凝らしてよく見てみると、それは『怨』と言う文字だった。

それが何かの皮切りだったのだろうか。

リーファの周りから次々と文字が出現する。

『憎』『恐』『怒』『憤』『怖』『死』『殺』『滅』『亡』『迅』『雷』『悪』『零』『戦』『不』『嫉』『妬』——

などと言った『負』の意味合いを持つ文字。

そしてそれとともに、リーファの頭に人々の悲鳴のような声が木霊する。

「い、いや……」

視覚からも、いや五感から流し込まれる人々の『負』の感情。腹立たしい、妬ましい、憎い、殺したい、死なせたい、滅亡させたい——
——そう言った人々の悪意がリーファを組まなく蝕む。

「いやああああ!!」

リーファは耳を押さえて叫んだ。もういい、これ以上は見たくない、聞きたくない。

だがそんな彼女の悲痛な願いも届かず、負の感情は流れ込んでくる。

“誰か……誰か助けて……”

“お兄ちゃん……!!”

リーファは自身が慕う兄に心で助けを求めた。

その時だった。

『ブチイ』と何か引きちぎられるような音がし、リーファの視界が一瞬フラツシユで覆われる。

目を覆いたくなるような刹那の光が晴れると、そこは先ほどまでいた何もない真つ暗な空間ではなかった。

薄暗いのは変わらないが、そこは何やら病院の一室のような、沢山の簡易なベッドが並べられており、そこにプレイヤー達が目を擦ったり頭を押さえたりしながら座り込んでいた。その中には、先ほど自分と共にいたサチ・エギル・サツキ・ハツキもいた。

一体ここは何なのか……リーファが辺りを見回していると。

「目が覚めたかしら」

不意に背後から優しい女性の声が響く。

リーファは振り向いてその人物を見た瞬間、思わず固まってしまった。

そこには自分が今まで見たことも無いような、美しい女性が柔らかな笑みを浮かべながらこちらを見て立っていたのだ。

部屋は薄暗いのに、その女性が自ら光を放っているかのようにだった。短めに切り揃えられた髪は暗闇でも艶やかな光を放ち、真つ白な着物は暗闇でも非常に目立っていた。

スラリとした体型に嫺やかな仕草で立つその女性の右手には、無数のコードのようなもので繋がれたヘルメットが握らされていた。とはいえ、何本か引きちぎられているのもう使えなさそうだが……

「もう大丈夫そうね。貴女達はさっきまでとある人物の実験台にされていたの……」

そう言つてシキはUSBメモリのような形状のアイテムを差し出す。

「これを絶対に無くしちゃダメよ。これはあの男を追い詰めるための証拠。貴女達にしていた事を記録したもの。」

これを持って今すぐここから離れて。時間は限られているわ」

リーファはメモリを受け取ってじっと見つめたのちに、再び顔を上げると、その女性はもうそこには居なかった。

すると、その薄暗い部屋の扉がゆっくりと開かれる。

リーファは理解が追いついていなかったが、今はとにかくあの女性の言う通りにここから逃げる事を考え、戸惑っている周りのプレイヤー達を先導してその部屋から脱出した――

――

リーファ達が脱出する様子を、シキはモニターから眺めていた。

今、彼女がいるのは《ホロウ・エリア》の中央管理コンソール。

「これで彼らは大丈夫ね。あとは……」

安心したように呟くと、シキは画面を九十五層迷宮区タワーを見上げる。

「ふふっ、まさか貴方がここまでやるなんて、この私でも想定できなかったわ。

でも、残念。この私がいる限り、貴方の思い通りにはならないわよ。貴方のその研究とやらのために、これ以上誰かを傷つけさせはしないから………覚悟なさい、アルベリヒ」

そしてシキは、コンソールのキーボードをタップした。

『《ホロウエリア》から《アインクラッド》へのアクセスを許可します。内容は指定エリアのモンスター出現を停止・グリーンプレイヤーのダメージカット状態を付与――』

六十一話 突入作戦

九十五層迷宮区タワーに到着した攻略組。

九十五層は薄暗いフィールドで、迷宮区の中はさらに深い暗闇になっっている。

洞窟のような道を、攻略組のメンバー達はゆっくり、慎重に足を進めていく。あのジョーカーのことだ、いつどこでどんなトラップを仕込んでいるか分からない。

進み続けて5分。その間、幸いにもモンスターや“J”のメンバーと遭遇することはなく、攻略組は順調に進んでいるが、その何事もなさがかえって不気味さを皆に与えた。

するとここで、道が左右に分かれる場所に到達した。

「どうする？」

攻略組の一人がそう問いかける。

すると、戦闘のアスナが二手に分かれる事を進言し、攻略組は二つのグループに分かれた。

一方はジェネシスやキリト達一行で、もう片方はその他ギルドメンバーなどで固められた。

「それじゃアニキ、行ってきますぜ」

そう言葉を交わすのは、クラインのギルド《風林火山》のメンバー。「おう、気をつけるんだせてめえら」

クラインは四人のメンバーと拳を打ち付け合い、そしてそれぞれの道へと歩いていく。

二手に分かれ、ジェネシス達は先を急いで進んでいったそのわずか数秒後。

「逃げろおおお!!」

背後から風林火山メンバーの悲鳴が響き、その直後にクラインの仲間達が進んだ方向から大きな轟音と共に爆発が起きた。

そしてその道は先ほどまでとは打って変わって巨大な炎に包まれている。

「なっ……!」

「お、お前らああああ!!」

クラインは悲痛な叫びを上げて、仲間達が進んでいった道へと戻ろうとする。

が、その行く手を阻むようにクラインの道の先に隔壁が降り、進めなくなってしまう。

「くそっ……トラップか?!」

「ちくしょう!!開けやがれこのやろおお!!」

キリトが悔しげに舌打ちし、クラインは一刻も早く仲間の元へ行きたいためにその壁を無茶苦茶に殴り付ける。

だがその扉は何をやっても二度と開く事はなかった。

クラインは両目から涙を流してその場に崩れ落ちた。

「ちくしょう……ちくしょうおお!!」

クラインの悲痛な慟哭が迷宮区内に木霊した。

周りの皆はそれをただ黙って見ている事しか出来なかった。

「ごめんなさい、クラインさん……私の、私のせいで……」

自分の指示でこの事態が起きてしまったと責任を感じるアスナは、クラインの元に蹲み込んでただ謝る事しか出来ない。

「アスナのせいじゃねえ……こんなふざけた罠を仕組みやがったジョーカーのせいだ……」

「ああ、これ以上犠牲者を増やさないために、なんとしてもジョーカーの暴挙を食い止める!」

クラインは首を横に振ってアスナを宥め、キリトも頷いて残ったメンバーにそう鼓舞した。

するとその時だった。

「悲しんでるところ悪いけど、噂をすればよ」

「ええ……敵が来たわ」

イシユタルが前を睨みながら自身の弓である《天弓マアンナ》の掃射準備を始め、さらにティアも左腰から刀を引き抜く。

すると先方から、約20名のオレンジプレイヤーが不気味な笑い声や嬌声を上げながら近づいて来た。

「野郎……!」

するとクラインは日本刀を抜き、怒りに満ちた視線で彼らを睨んだ。

「デメエらだけは……絶対に許さねえええ!!!」

憎悪の叫びを上げながら、クラインは真つ先にオレンジの集団に飛び込んで行く。

「待てクライン!!」

キリトが慌てて背中から左右の剣を引き抜き、追いかける。

他のメンバーもそれに続く。

「うおおおおお!!」

クラインは飛び上がると、そのまま刀を真つ直ぐに振り下ろす。だがその攻撃は、クラインがターゲットに定めていたオレンジには躲されてしまう。

「つのやろおおお!!」

だがすかさずクラインは刀スキル《旋車》を発動し、周囲のオレンジ達を吹き飛ばす。

だがオレンジ達はそんな攻撃を受けても全く怯む事なく、狂気的な笑みを浮かべたままクラインに襲いかかる。

「せいっ!!」

クラインの正面から襲おうとしていたオレンジの四肢が背後から切断された。倒れ込んだオレンジの背後にいたのはキリト。彼が左右の剣で咄嗟に斬つたのだ。

幸い彼が攻撃したオレンジのHPはまだ残っており、死亡には至っていない。

「はあっ!!」

アスナは速さを活かした刺突攻撃で敵の腕や足を的確に突き、オレンジ達を沈黙させていく。ティアやジェネシス、ツクヨ達も同じで、皆的確に相手の弱点を突いて戦っていた。

だがプレイヤー同士の戦闘に慣れていないシリカ・シノン・リズベット達はかなり苦戦を強いられていた。

「……………」

シリカは実質初めての体験である犯罪者プレイヤーとの戦いで押

され気味だった。ナイフを振っても振っても、目の前の人間は不気味に笑いながら突っ込んでくる。

それはシノンも同じだった。武器の性質上彼女は後方支援だが、彼らの狂気ぶりは遠目からでもはつきり見て取れた。

「なんなのよ……あいつら……」

シノンは愕然とした表情で矢を放った。

彼らのその狂気的な顔を見ていると、シノンの内に存在する忌まわしい記憶が蘇る。

「……っ」

その時、シノンの背後からオレンジが斬りかかった。

「しまっ……いー」

矢の装填は間に合わない。タイミング的に回避は不可能。

「せいっ!!」

シノンにオレンジプレイヤーの凶刃が振り下ろされる直前、イシユタルが割り込み掌底でそのオレンジを吹き飛ばした。

「あ、あんた……」

「ふふん、あたしリアルじゃ太極拳習ってるからね。それに合わせて体術スキルも取ってるってワケ」

イシユタルは得意げな顔で言った。

「お？マジカル☆太極拳か？」

「マジカルって何よ?!変なのつけないでよね!!」

ジェネシスが悪戯な笑みを浮かべながら言うと、イシユタルは顔を真っ赤にして反論した。

そんなやり取りをしていても、オレンジプレイヤーは襲いかかる。イシユタルはマアンナの取り回しの悪さも相まって近接戦闘に持ち込まれたので、太極拳風の体術スキルを用いて応戦する。

その華奢な腕や足に見合わぬ強烈な一撃をオレンジの鳩尾や後頭部、横腹などに直撃させて戦闘不能にしていく。

そんな中、リズベツトも対人戦の経験がかなり浅いにも関わらず、かなり善戦していた。

それもそのはず、彼女はマスターメイサーだ。メイスの使い方に関

してはアインクラッドの中でもトップクラスの技術を持つ。ましてリズベットのメイスともなればそのパワーは語るまでもなく、一撃当てるだけで敵は沈黙する。

「ちえすとお!!」

リズベットは目の前に近づいて来たオレンジの脳天にメイスを叩き込む。『ゴツ…』と言う鈍い音がなると共にその一撃を受けたオレンジは地面に崩れ落ちた。

だがその背後から別のオレンジプレイヤーが接近する……

「どるしえええええい!!」

けたたましい雄叫びと共に巨大なハルバードがそのオレンジの腹部を打ち、そのままオレンジは数十メートル先まで野球ボールの如く吹き飛んで行く。

「後ろは任せてくれ、リズ」

先ほどの雄叫びとは打って変わって優しげな声でヴォルフは彼女の背後に立つ。

「……ええーそっちは頼むわ!!」

そしてリズベットとヴォルフは背中合わせに立って戦った。

そうして皆が戦う事数十分。

ジェネシス達は無事、20名のオレンジプレイヤーの鎮圧に成功した。ジェネシス側に犠牲者は幸いにも出なかった。

が、残念ながら一人も犠牲者を出さずに鎮圧は出来なかった。オレンジの方は3名が消滅した。

「……ごめんなさい……ごめん……なさい……ごめんなさつ……」

そのうちの一人を殺してしまったのは、シリカだった。

彼女は斬っても斬っても波のように襲ってくるオレンジに押され、遂にパニックになってソードスキルを使って応戦し、それが偶々HPが残り少なかった一人のオレンジプレイヤーに命中してしまったのだ。

斬った当初はそんなことを気にしていられるほどの余裕は無かつ

だが、戦いが終わって目の前で自分のソードスキルによって人が消滅した光景を振り返ると、自分が一体何をしてしまったのか、その事の重大さに段々気づいてしまった。

シリカは虚な瞳で地面にしゃがみ込み、自分が殺めてしまった者に対するもう届く事のない謝罪を、泣きながら呪詛のように呟いていた。

戦いの前ジェネシスに言われ、覚悟は決めたつもりだった。けれど全然足りなかった。そんなものはまだまだ甘かった。

「すまねえ、シリカ……」

ジェネシスはそんな彼女の元に歩み寄ると、申し訳なさそうに目を伏せて謝った。

あの状況では彼と言えど誰かを守る余裕などなかった。しかしそれでも、シリカのような少女が背負うにはあまりに重いものを背負わせてしまった事に謝らずにはいられなかった。

いや、あるいはあの時の語らいで無理にでも来させないべきだったのかも知れない。こうなる可能性はジェネシスと言えど分かっていた。しかしそれでもシリカならと信じていた。

ジェネシスは懐から転移結晶遠取り出す。

「シリカ、よく戦った。よく生き残ってくれた。俺はそれだけでも満足だ。おめえの勇気は、確かに俺たちを救ってくれたぜ」

ジェネシスは優しく、そしてわしゃわしゃとシリカの頭を撫で回す。

シリカは堪えきれなくなったのか、「うわああああ……！」と両目から大粒の涙をこぼして号泣した。

「誰か、シリカを連れて一緒に街まで戻ってくれ。もう、シリカにはこれ以上……」

ジェネシスは立ち上がって周りにそう呼びかける。

「私が行くわ」

するとシノンが歩み出た。

「分かった。んじゃシノン、おめえもそのまま宿でシリカと一緒にいてやってくれるか」

「……分かった。任せて」

シノンがジェネシスから転移結晶を受け取ると、シリカを抱き寄せて七十六層の街へと転移していった。

—————

シリカとシノンが戦線を離脱したことで、今残っているメンバーはジェネシス・テイア・キリト・アスナ・リズベット・ヴォルフ・クライン・ツクヨ・フィリア・サクラ・ストレア・イシュタル・オルトリア・ジャンヌ・ミツザネの15名。

彼らとて本当はこんな戦いなどやりたくはない。

だがこれ以上ジョーカーの好きにさせるわけにはいかない。それを許せば被害がますます拡大する一方だ。

残酷だが、彼らは進むしかないのだ。例え何を犠牲にしようとも。

「それにしても……何でこんなにモンスターが出ないんだ？」

道中、キリトがふと疑問に思ったことを口にする。

確かに、ここは迷宮区。オレンジプレイヤーが占拠しているようがないからうが、モンスターが全く出ないのはおかしい話だ。

この世界の知識が深いAIであるストレアとサクラにもその原因は分からないようだ。

皆が疑問符を浮かべ、何やら不気味な感覚に囚われている中、ジェネシスには一つ思い当たる節があった。

それは以前、シキから言われたこと。

アルベリヒ。あのシキがかなり警戒しており、全ての元凶と言わしめた男。ジェネシスの頭には何故か彼の事が頭から離れなかった。

さらに奥に進んでいると、一つの大きなドーム状の部屋に到達した。

「この部屋は……」

一同はそのドーム状の部屋に入ると、辺りを見回す。

彼らが入った直後、彼らがやって来た入り口が突如として閉まってしまった。何かのトラップかと考えた一同は、それを解除するスイッチなりギミックを探すため部屋を調べ回る。

「……………いるな」

すると何かに気がついたツクヨが懐から3本の苦無を取り出し、その場から飛び出す。

向かう先はアスナ。彼女の背後には漆黒のモヤが発生しており、やがて人の形となると、その手に握られた毒ナイフを突き立てようと振り下ろす。アスナはその事に気付いていない。

だが、そのナイフが突き立てられる直前にツクヨが苦無でそれを弾く。

アスナの暗殺を凶った男は一旦その場から飛び上がり、ツクヨと距離を置いて相對する。

「な、なに?!」

「あいつは……………」

突然の事で驚くアスナと、ツクヨが睨む先にある人物を見て驚くキリト。

『ジョニー・ブラック』……………」

アスナに近づいていたのは、今や『J』の幹部の一人である『ジョニー・ブラック』だった。

皆は一斉に武器を構えてジョニーを睨む。

だがツクヨがそれを制した。

彼女は左手に手裏剣を三枚指に挟む形で構える。

「主の相手は、このわっちじゃ」

鋭い目つきと共に宣言するツクヨ。

「チ……………死神太夫……………」

ジョニーは忌々しげにツクヨの顔を見て呟く。

「ツクヨ!」

「主らは先に行け。こやつはわっちが引き受ける」

ツクヨはジョニーの方を睨んだまま皆に告げた。

「……わかりました。ここは頼みます、ツクヨさん！」

「ああ……任せよ」

アスナはそう言っただけを率いて走り出す。

ツクヨは皆の方に視線を向けると、右手の人差し指と中指を

『シュツ』と突き出した。

「ツクヨさん、私も！」

だがフィリアはツクヨの隣に並び立った。

「……………そうじゃな、よし」

ツクヨは一瞬驚いていたようだが、口元に笑みを浮かべると何やら独り言を言いながら頷く。

「フィリア、ここいらで特訓と行くでしょう。奴は主にとっては丁度いい相手になろう」

「え、ええ？特訓？」

フィリアは突拍子もないツクヨの発言に目を丸くした。

「クハハハハッ!!傑作だ!!アンタ、俺が練習相手だつて言いたいのかあ?!ヒヤハハッ、随分と舐められたもんだなあ!」

ジョニーは腹を抱えて狂ったように笑い出す、ツクヨも「フン」と嘲笑の笑みを浮かべる。

「主の方こそ、前回わっちに手も足も出なかつたであろう?だからフィリアで十分だと言ったんじゃ……………いや、主如きではフィリアにも勝てぬであろうよ」

「……………テ、メエエエツ!!」

ジョニーは眉間にシワを寄せて憎悪の表情と叫びを上げると、ツクヨに飛び込んだ。

「行くぞ、フィリア」

「は、はい!!」

ツクヨとフィリア達と分かれた一行が進み続けて行くと、再び分かれ道があった。

「まーた分かれ道かよ……」

ジエネシスがうんざりだとばかりにため息を吐きながら言った。

先ほどのトラップのこともあって皆はより慎重になった。

「……もう一回二手に分かれよう。その方が確実だ」

キリトがそう提案する。皆も黙ってそれに賛同した。

否、それ以外の選択肢が無いのだ。

チームはジエネシス・ティア・サクラ・イシユタル・オルトリア・

ジャンヌと、キリト・アスナ・リズベット・ヴォルフ・ストレア・ク

ライン・ミツザネだ。

「んじゃ、死ぬんじゃねえぞ」

「ああ、そっちこそな」

キリトとジエネシスは互いにそう言葉を交わしたのちに、メンバーを連れて二手に分かれた。

—————

チーム・ジエネシス

ジエネシス達が周囲に警戒しつつ進んでいると、ティアが何かを見つけた。

「あれって……!」

前方からふらふらと覚束ない足取りでやってくる小さな人影。

それは、小さな子供だった。

「まさか……誘拐された子供?!」

イシユタルが目を見開いて叫ぶ。

それを確認したジャンヌが駆け出した。

『大丈夫ですか?! 怪我は? 酷い事は何もされませんでしたか?』

ジャンヌはその子供に優しく、慈しむように保護した。

ジェネシス達も慌てて駆け寄る。

「……………げ……………」

だがその子供は虚な瞳でジャンヌとその後方にいるジェネシス達を見つめながら小さな声で呟く。

そして自身が来ている上着のファスナーをゆっくりと下ろしている。

その瞬間、ジェネシス達は目を見開き、言葉を失った。

その小さな体には、爆弾が巻き付けられていた。

タイマーが表示されており、残りは僅か5秒。

「はやく……………にげて……………」

自身の最期を既に悟っているのか、その子供は掠れた声で、懸命にジェネシス達に訴える。

『だ、大丈夫ですよ! 直ぐに外します……………つて、ジェネシスさん?!』

ジャンヌが慌ててそれを外そうとするが、ジェネシスは彼女の襟首を掴んで後方に走り出す。皆も既に離脱しているようだ。

『ジェネシスさん?! 待ってください! ジェネシスさん!!』

ジャンヌは必死に彼に訴えるが、ジェネシスは止まらない。

ジャンヌは再び子供の方を見遣る。

子供は両目から涙を流し、しかし口元には安心したような笑みを浮かべていた。

“ごめんね”

“ありがとう”

子供がそう口にした直後。

子供の小さな身体は、爆発に包まれた。

『いやあああああつ!!!』

ジャンヌはそれに向かって涙を流しながら必死に手を伸ばした。

爆炎が止むと、もうそこには子供はいなかった。

代わりに、青白いガラス片がうつすらと舞っていた。

皆の表情は愕然としていた。

「……………さない……………絶対に許さない、こんなふざけた真似をして!!!」

イシユタルは思わず壁を思い切り殴りつけた。

「……………進むぞ」

ジェネシスはただ一言、皆にそう言っただけ歩き出した。

ジャンヌはしばらく絶望した表情で地面に座り込んでいたが、涙を拭き、そして立ち上がった。

その手に握るのは守護の旗。

ジャンヌは自身の旗と、その名に懸けて誓った。

これ以上、あのような悲劇は増やさない。

その決意を胸に、ジャンヌはジェネシス達の後ろに続く。

やがて一同は、先ほどと同じようなドーム状の部屋にたどり着く

だがそこには、あまりにも異様な光景が広がっていた。

その壁には、沢山の小さな子供達が貼り付けにされていたのだ。

ロープでぶら下げられた子供、手首に釘が刺されている子供、身体を大きな槍で串刺しにされた子供、身体中に切り傷をつけられた子供、中には四肢をもがれていたり、身体を両断されている子供までいた。

一同は思わず絶句した。

「うっ……………」

サクラは思わず口元を手で抑えた。

あまりにも惨たらしく、残酷で非人道的な光景だった。

「お気に召しましたかなあ〜」

突如、部屋に不気味な男の声が響く。

現れたのは、紺色のローブに紫のスカートを巻き、両眼が飛び出氣味の瘦体型の不気味な男性。

「青髭の……ジルー」

イシユタルは憎々しげな目で睨みながらその名を口にした。

「ホホホオーウ！この私の名をご存知とは喜ばしい限りですなあ〜！それで、これらはいかがですか？こちら私の最っ高の芸術作品でございますが」

ジルは仰々しく両手を広げながら言った。

「黙りなさい！何が芸術作品よ!!」

ティアが怒り心頭の様子で叫んだ。

同い年くらいの娘がいる彼女にとっては、否、そうでなくとも許しがたい行為だった。

「やはり貴方がたはご理解頂けませんなあ、残念ですなあ私の渾身の自信作であったのですが……ってちよつと?!」

直後、ジルは驚愕の表情で壁を見つめた。

一同がその視線の方向を見ると、オルトリアが壁を走りながら次々と子供達の束縛を解いていたのだ。

それを見た瞬間、ティアも走り出した。

縄を、身体を貫いていた槍や釘を次々と破壊し、子供達を解放していく。

「この匹夫めがアアアアア!!なああにをやっているのですかあああああ?!こら、やめ……やめなさあああああああいいいい!!!」

ジルは耳をつん裂くような奇声を上げながら叫ぶが、ティアとオルトリアは止まらない。

ものの数秒で、すべての子供が解放された。

「おのれ……おのれおのれおのれおのれおのれおのれええ

ええええええええ!!! よおおおおおくもわたくしの作品をお
おおおおおお!!!」

「悪いな、アンタと俺たちとは住む世界が違うみてえだ。見てるだ
けで吐き気がするくらい最低なモノだったんでな」

ジェネシスがジルの方を睨みながらそう告げた。

「さて、覚悟してもらいましようか……あたし今最っつ高に頭に来て
んのよ。骨も残らないと思いなさい!」

イシユタルもマアンナの掃射準備を整え、構えた。

『ジェネシスさん、ティアさん、サクラさん。御三方はどうぞ先へ』
「ジャンヌ?」

ジャンヌは旗を構えると、ジェネシス達に言った。

「こいつはあたし達でぶっ潰すから。あんた達は先に行きなさい!」
「私もここに残ります。怖い思いをした子供達にお菓子をあげないと
いけないので」

イシユタルも強気の口調でいい、オルトリアも左右の手にビーム
サーベルを展開してそう言った。

「……分かった、ここは任せる」

そしてジェネシス達は走り出した。

『青髭のジル。貴方のような人間に、これ以上無垢なる子供達を傷つ
ける訳には参りません』

ジャンヌは旗を展開し、ジルに対して力強く告げる。

『主の名の元に……貴方を止めます!』

—————

キリトチーム

一方こちらはキリトチーム。

キリト達も、爆弾やその他危険なトラップが無いか慎重に進んでい

た。

すると、彼らの背後からオレンジの集団が現れた。

キリト達が気づけないレベルの潜伏スキルで隠れていたのだ。その数は、約20人。対するキリト達は8人。

「がき共、てめえらは先に進め」

するとミツザネがオレンジ達の足止めを名乗り出た。

「ミツザネさん?! そんな、無茶です! いくら貴方でも、一人でそんなの……」

アスナがそう叫ぶが、ミツザネは「はっ」と軽く笑う。

「バアカ、俺がどんだけの修羅場を潜り抜けてきたと思ってる。てめえら若造共に心配される程まだ落ちぶれちやいなあんだよ。

さっさと行きな」

ミツザネは拳を構えて戦闘態勢に入りながら言った。

「……分かった。ここは頼みます!!」

キリトはそう言って駆け出した。アスナ達もそれに続く。

「俺も付き合っぜ、旦那」

するとクラインが彼の隣に立った。

「仲間の仇……まだ取れてねえんでな」

刀を引き抜き、鋭い目つきと声色で言った。

「そうかい……ま、程々にな」

そして、二人の男は同時に飛び出す。

一方キリト達は、ミツザネとクラインの奮闘を無駄にしないよう、必死に走り続けた。

と、その時だった。

「ブウルルルアアア!!」

突如上から雄叫びを上げて巨大が降りてきた。

キリト達は慌ててその場から飛び退き、何とか直撃を避ける。

「よおしく、まあた会ったなあ〜?」

仮面を付けた凶悪な悪魔が、その奥にある双眸でキリトを睨み付ける。

「じ……ジエイソン……!!」

六十二話 突入作戦2

ドーム状の巨大な部屋。いや、部屋と呼ぶには広い空間だが、その中に3名の男女が動き回っていた。

黒衣の男女と、青いポンチョを身につけた少女。

黒い和風装備の女性、ツクヨは、部屋を縦横無尽に駆け回るジョニー・ブラックを追い回していた。

ジョニーに向かって突進しながら苦無を横一閃に振るうが、ジョニーは素早く飛び上がってそれを躲す。

ツクヨもそれを追って空中に上がり、ジョニーに向けて苦無を投げつけた。

「チツ……」

しかしジョニーは空中で身軽に身体を捻ることでそれらを回避した。

「だあッ!!」

だが今度は反対側からフィリアが現れ、彼に向けて強烈な蹴りを叩き込んだ。

「このっ……」

ジョニーは舌打ちして懐から赤い刃のサバイバルナイフを取り出し、フィリアもソードブレイカーを構える。

ジョニーが赤いサバイバルナイフの刃を突き出すと、フィリアはソードブレイカーの凹凸の部分で受け止める。

赤い刃がフィリアの短剣の凹凸部分に噛み合って、ジョニーの動きを封じる。

「はあっ！」

フィリアはそのまま左膝を突き上げてジョニーの右手の甲を蹴り上げ、ジョニーのナイフを落とす。そして続け様に短剣ソードスキル《ラビットバイト》を繰り出し、ジョニーの腹を斬りつけた。

「くうっ……」

ジョニーはその場から飛び退いて一旦距離を置く。

フィリアがそれを追おうとした瞬間。

「ジョニーは黒い霧に包まれて消えた。」

「なっ……どこに?!」

フィリアは慌てて周囲をキョロキョロと見回す。

「落ち着きなんし、フィリア」

するとツクヨが余裕のある笑みでフィリアの横に立った。

「隠蔽スキルじゃな。それも中々の熟練度と見える。伊達に暗殺集団の幹部をやっている訳ではなかったらしいのう」

「ちよ、ツクヨさん！感心してる場合じゃ……」

呑気にそんなことを呟くツクヨにフィリアが慌てて言った。

「慌てるでないフィリア。幾ら隠蔽スキルを上げていようと、見つけることなど造作もない」

そしてツクヨは「フウ」とキセルの煙を吐き、一呼吸おく。

「良いか、たとえゲームの中と言えど隠しきれないものがある……それは気配じゃ。」

足音や呼吸、鼓動や匂い、そう言ったものは隠そうとしても隠し切れるものではない。それはゲームの世界でも同じことじゃ。特にこのような敵には、確実にこちらに対する「殺気」と言うものを放っておる。

それを感じ取るには目ではなく、身体で感じよ。視覚以外にも、聴覚・触覚・嗅覚を研ぎ澄ますのじゃ。そうすれば……」

そう言ってツクヨは徐に手裏剣を取り出すと、

「……見つけるのは容易い。特に今のようなやつは単純だからのう、大抵は後ろからノコノコとやって来る」

素早く振り向き様に右手の手裏剣を放った。

手裏剣は真っ直ぐに走行中の自動車のタイヤの如く回転しながら飛んでいくが、その途中何も無い場所で『グサッ』と刺さるサウンドエフェクトが鳴る。

「ぐわあああっ?!」

すると再び黒いモヤが発生し、中からジョニー・ブラックが現れた。「うっそお……」

フィリアは思わず呆気にとられて呟く。

「てめえ……なんで分かった?!」

「なんでも何も、分かりやすいのじゃ主は。隠蔽スキルはそこそ上げているようだが、殺気だけは全く隠せておらんかったぞ。

暗殺者を名乗るならば殺気は一番隠さねばならぬもの。それをあそこまで剥き出しにしているようでは、主もまだまだ三流以下じゃな」

「この……やろおおっ!!」

煽るような口調で言うツクヨに、ジョニーは憎悪の視線で睨みつけながら飛び出す。

そして再び飛び出すと、もう一度隠蔽スキルで姿を消す。

「フィリア、やってみせるがいい」

「え?……ええ?!」

突然の事でフィリアが戸惑い、目を見開く。

「なに、主ならば確実に出来る。案ずるな、もしもの場合でもわっちがおる。主の全霊をかけてやってみよ」

ツクヨにそう言われ、フィリアはしばし戸惑い気味だったが、一度深呼吸して精神を落ち着かせ、ゆっくりと目を閉じる。

神経を研ぎ澄まし、五感をフルに働かせて微細な情報まで全て拾い上げる。

今、フィリアは自身の脳内イメージで水面に立っていた。

果てもなく、どこまでも透き通った水。

波はなく、風もなく、ただ静かな空間。

だが時折、何もない水面に波が発生していた。発生とタイミングはランダムで、自分の周囲を囲むように発生している。

一方、フィリアは自身のすぐ横に暖かな光を感じ取った。言うまでもなくそれはツクヨだとフィリアは断じた。

すると自身の右方向で、大きな水飛沫が上がった。水溜りを人が思い切り踏みつけたような、大きな水飛沫。

それは段々と、自身に向かって近づいていく。

ツクヨの暖かな気配と違い、それは冷えた氷のような、冷たい気配だった。

そしてその水飛沫が自身のすぐ横まで来た瞬間。

「……せやつ!!」

フィリアは短剣を右方向へ真つ直ぐに勢いよく突き出した。

『ドシュツ』と言う痛々しい音が鳴り、それと共にまたあの黒い霧が発生し、ジョニーが姿を表す。

「な……なんで……」

自身の腹部に短剣を突き刺されたジョニーは、目を見開いてフィリアの顔を見た。

その直後、ジョニーの眉間に漆黒の日本刀が突き立てられた。

「所詮、主はその程度という事じゃ。ジョニー・ブラック」

フィリアの背後からツクヨが自身の太刀『宵闇』を突き出したのだ。

その一撃でジョニーは数メートル後方へ吹き飛ばされた。

「上出来じゃ、フィリア。よくやったぞ」

「あ……えへへ」

ツクヨがフィリアの頭を優しく撫で、フィリアはそれを受けて自然と顔が綻んでいた。

「ク………ククツ」

すると、壁にもたれかかって座り込んでいるジョニーが不気味に笑い始めた。

「フハッ……ハハハッ! ハアーッハハハハハハハッ!!」

状況的に見て明らかにジョニーの方が不利なのに、なぜこの場で笑い始めるのか。訝しんだ様子で見つめるフィリアと、表情を変えずにジョニーを見るツクヨ。

「残念だったなあ!! あんたらは今ので決めるべきだった……今ので俺を殺すべきだった!!」

もう遅いぜ……あんたらはもう「蜘蛛の巣」にかかった獲物なんだ!!」

狂ったように嘲笑うジョニーがそう叫んだ瞬間。

「あ……っ、ツクヨ、さん……!」

突如、フィリアの体が地面に崩れ落ちた。

ツクヨが蹲み込んで彼女を支える。よく見ると、カーソルには麻痺状態が表示されていた。

「ヒヤハハハッ！実はこの部屋にはなあ……最初から麻痺毒の粉が撒き散らしてあったのさ!!漸く毒が回ったみてえだなあ、この瞬間を待ってたぜえ!!」

ジョニーが指をパチンと鳴らす。

すると、部屋の壁から突如としてオレンジプレイヤーが出現した。ツクヨでも察知できていなかったようなので、隠蔽スキルとは別のものなのだろうが……

その数は約20名。状況は一変してツクヨ達が絶体絶命な状況に。

「っ、ツクヨさん……!」

「ふむ……どうしたものかのう……」

—————

一方こちらは、青髭のジルが構えた部屋。

「ホオ〜ウ!!」

ジルは杖のような長い細剣を素早い動作で突き出す。

その攻撃を、ジャンヌは旗を最小限に動かす事で弾いていく。

「こんのおお!!」

するとイシュタルがジルの背後からマアンナに宝石のパワーを集め、彼に向けて放つ。

「ホワアアッ!!」

その一撃はジルの背中を撃ち抜いた。

「たあー」

更にオルトリアが空中で身軽に回転しながらジルはに斬りかかった。ビーム状の刃が彼の右腕を斬り落とす。

「ホホホッ、いやはや3対1は流石に分が悪過ぎましたかなあ〜」
ジルは斬り落とされた右腕を見て呑気にそんなことを呟く。

「ええ、あんた一人じゃあたし達には勝てっこないから。死にたくなかったら大人しく降伏しなさい!」

イシユタルが再びマアンナにエネルギーを集めて発射態勢を取り、ジルに圧力をかける。

「ホオ〜ッホホホホ!!まさか降伏などするわけがないでしょう!私は嬉しかったですよ、貴女達のような麗しいお嬢さんたちがここに残ってくれた事。特おくにい〜」

ジルは飛び出た目玉をギョロリと動かしてジャンヌの方を見遣る。

「その貴女!貴女からは清楚さ・お淑やかさ・可憐さ・高貴さ・そして神聖さをひしひしと感じますよ〜っほほ。

私は楽しみでならないのです:貴女のような女性が……………」

不気味で痺しい触手のようなものに凌辱されたらどのような顔を見せてくれるのかとっつ!!」

ジルは声高々にジャンヌを指差しながら叫んだ。

「とてつもない変態ですね。もう斬っていいですか!」

心底うんざりだ、とばかりにオルトリアが呟く。

そのとき、ジルは残った左腕を懐に突っ込み、そして中から一冊のボロボロの本を取り出す。

「ね……ねえちゃん!!気をつけて!」

「あの本はよくないものだーっ!」

すると、ジャンヌの後ろに下がって様子を見ていた子供が叫ぶ。

その直後、ジャンヌ達がその言葉の真意を考える間もなく、ジルは本を高く掲げる。

「さあ!おいでなさい……我が忠実なる僕よ!!今こそあの尊き貴婦人を食すのです!!」

ジルが叫んだ瞬間、部屋の床に魔法陣のようなものが形成され、そして一瞬の眩しい光が部屋を包んだ。

光が止んですぐの事だった。

『っ！きゃあつ?!』

突如ジャンヌの足に何か巻きつき、そのままジャンヌの身体を軽々と持ち上げ逆さ吊りにする。

部屋の中には、巨大な蛸型のモンスターが出現していた。

「ちよ、なんでこんなのが湧いてくるのよ?!」

「ホホホッ!!お答えいたしましょう……この本は去るお方から頂いた特殊な本でしてねえ、私のHPを犠牲に、任意のモンスターを召喚することが出来るのです!」

イシユタルの言葉にジル得意げに答えた。

「何ですって……きゃあつ?!」

直後、イシユタルを蛸の巨大な足が弾き、彼女を壁に叩きつけた。

その間に、ジャンヌの身体に蛸の触手が巻き付く。

両腕・両足を縛られ、身動きが取れない。しかもその触手は何故かローションのようなヌルヌルとした感触があり、ジャンヌからすればたまったものではない感覚であった。

『つぐうっ……!』

更に触手がジャンヌの首に巻きつき、そのまま力強く縛り上げる。

「オオオオオッホホホホホホホホ!!これですよこれ!!これが見たかったのですっ!!なああんと素晴らしい光景でしょうか?!聖なるものが穢わらしい汚物の如く生物に陵辱されると言うこの光景っつ!!

どうですかあ、オルレアンの聖処女の名を語る乙女よ!!

貴女の信じる神などと言うものが本当におわしますならば、私には今すぐにでも天罰が下りましょうぞお!」

ジルは興奮気味に仰々しく手振りを加えながら高々に叫ぶ。

「貴女方の信じる神などこの世にはいない!!そんなものは我々が作り上げた幻想に過ぎないのです!!やれ信仰だやれ救済だなどと、所詮は庶民が作り上げた妄想!!

そもそも!!神など!!あの男がなにををすると言うのです!!神が世界を救うと言うのですっ?!

解せぬ、全つったく解せぬ!!疫病の如き信仰の何才処にイ尊さがあ

ると言う?!」

『それは……違う……!』

するとジャンヌはジルの方を睨みながら言った。

『神とは……私達を慈しみ、見守ってくださいる方です……大事なのは、信じること……!』

「無駄無駄だあ!!そんな信仰など無意味!!無価値!!神が本当にいるならば今すぐにでも貴女をお助けになるはず!!なのに貴女は我が蛇の触手になされるがまま!

ああそれとも、こうすればよろしいですかなあ?!」

ジルがそう叫んだ瞬間。

『っーが……はっ……!』

ジャンヌの身体に巻き付く蛇の触手が更に彼女を固く締め上げる。ギチギチと音を立て、ジャンヌの呼吸を封じた。

「どうですか救国の聖女よく?貴女の信じる神などこの世界にはない!!何故なら!!誰一人として貴女を救えるものなどいないのだから!!神は貴女を見捨てた!!救いなどしなかったのですよ!!!

貴方の持つ信仰が如何に無駄なものか、よおおおくお分かりになったのではないですかああ?!」

『お……とばですがっ……私が信じているのは……神だけではありませんよ……!』

ジルの言葉に対し、ジャンヌは首を絞められながらも不敵に笑って見せた。

その次の瞬間、ジャンヌを締め上げていた蛇の触手が刹那の光の後に一斉に断ち切られた。

「お待たせしました、です」

「あいつがあんたに釘付けのお陰で助かったわ!!」

オルトリアがビームサーベルで斬り、イシユタルがマアンナで撃ち抜いたのだ。

因みにオルトリアはモンスターが出現したのを察知した瞬間、部屋にいた子供達を誘導して部屋の安全な場所へ流していたのだ。巨大なモンスターの攻撃の巻き添えを受けない、安全な場所ま

で。ついでに手持ちのお菓子を与えて落ち着かせていた。

そしてイシュタルは、モンスターへの攻撃で壁に叩きつけられたあと、衝撃でうまく立ち上がらない身体に鞭打って、ジルがジャンヌの方に気を取られている隙にマアンナにエネルギーをチャージ、照準を合わせていたのだ。

「こ……この匹夫めがああああ!!!」

ジルは怒り心頭な様子で狂ったように叫んだ。

「はあ、全く喧しいったら無いわ……それよりジャンヌ、大丈夫かしら？」

『ええ、問題ありません。信じていましたから』

ジャンヌは立ち上がり、再び旗を手にとった。

「しかし、これどうしましょう。さつき私たちが斬り落とした触手が再生してるみたいです」

オルトリアは変わらない口調で、しかしやや苦い表情で指を差した。

先ほどオルトリア達が斬り落とした触手が瞬時に再生していたのだ。しかもHPも回復しているようだ。

これ程の再生力と回復力を持つモンスターであれば、一撃で超高火力の技をぶつけるしか無い。

「私のマアンナならなんとかいけるかもしれないけど……」

こんな狭い部屋でぶつ放したら大変なことになるしね」

イシュタルの弓に搭載されたスキルを使えば、間違いなく一撃で消滅させられるだろうが、威力が尋常では無いので最悪の場合ここにいる子供達まで危害が及ぶ可能性もある。

『大丈夫です……私に秘策があります』

するとジャンヌは、旗の紐を解いてバサリと旗を展開した。

—————

「オオオラアアア!!!」

ジェイソンから振り下ろされる巨大な鉋を、キリトは左右の剣で受け止めた。

「つぐうつ……!」

歯を食いしばってその衝撃に何とか踏ん張る。

真上からまるでプレス機にかけられているかのような圧力が襲い、堪えきれずキリトは膝をついた。

「せやあああつ!!」

そこへ背後からアスナがジェイソンの背中に突っ込んでいく。

「俺の背後に……立つんじゃねえええ!!」

だがジェイソンはキリトを蹴飛ばしてそのまま身体をターンして反転させ、鉋をアスナの胴に叩き込んだ。

「が……はっ……!」

「アスナ!!」

腹部に強烈な衝撃が襲い、アスナは苦悶の表情で顔を歪め、その直後に弧を描いて吹き飛んでいく。

HPは辛うじてイエローゾーンです止まったが、たった一撃でこれ程の破壊力を有するとなれば迂闊に手出しは出来ない。

「だあああああつ!!!」

すると今度はストレアが空中に飛び上がり、両手剣を頭上に構えて勢いよく振り下ろす。

大きな土煙と衝撃音を上げ、ストレアの両手剣は見事ジェイソンを直撃した。

「ほおぅ、威勢がいいな嬢ちゃん、今のは良かったぜえ」

しかし土煙が晴れると、そこには衝撃の光景があった。

ジェイソンは頭上から振り下ろされたストレアの大剣を難なく掴み取っていたのだ。

「だがまだ甘あゝい!!」

ジェイソンは大剣を掴んだままストレアを地面に背中から叩きつける。地面にヒビが割れるほどの強さで叩きつけられたストレアの

だがすかさずジェイソンは鉈を頭上に構える。

「ンマツツスルルウウウウ……ギャルルルルアアアクシイイイイ
ブウウウレイクウウウウウウー!!!」

紫のオーラを纏った鉈をヴォルフに向かって大きな叫びと共に全力で振り下ろす。

巨大地震のような地響きが発生し、地面は抉れ地割れを起こす。衝撃波が発生し、彼の周囲にいたキリトとリズベットは遙か後方へと吹き飛ばされていく。

「ヴォルフフーーツ!!!」

リズベットが悲痛な顔で彼の名を叫ぶ。

土煙が晴れると、ヴォルフは抉れた地面に埋もれる形で沈黙していた。辛うじてHPは残っているようだが、あれほどの攻撃を受けて完全に気を失っている。

「こ、のおおお!!」

それを見て逆上したリズベットがメイスを振りかぶって突っ込む。

「虫ケラがあ……」

ジェイソンは興味なさげに眩き、リズベットの頭を左手で殴り、更に鉈で腹部を殴る。

「はあいつくばれえええい!!!」

地面を転がって倒れ込むリズベットにジェイソンは追い討ちをかけんと近づく。

「リズ!!」

『Complete』

ピンチのリズベットを救出せんとアスナがエクストラスキル『神速』を発動。アーマーが弾け飛ぶ代わりに、アスナはただ一人許された神速の世界へと足を踏み込む。

『Start Up』

直後、視認不可能な速度でジェイソンの前に割り込んだアスナはすり抜けながらリズベットを抱きかかえてその場から離脱した。

リズベットを救出したアスナは、そのまま速度を生かしてジェイソンに斬り込む。幾らジェイソンと言えど、今のアスナの速度には敵わ

ない。目にも止まらない速さでアスナはジェイソンを斬り付けていく。

だが……

『3……2……1』

『TIME OUT』

神速の限界時間が訪れ、アスナの高速移動状態が途切れてしまう。「ふむ、今の中々良かったがあゝ……制限があるんじゃないかあゝ楽しいねえなあゝ」

ジェイソンはやれやれとため息を吐くと、高速移動の反動で疲弊しているアスナを一思いに蹴り飛ばした。

「くっそおおおお!!」

するとキリトが叫びながら二刀流突進スキル《ダブルサーキュラー》を発動し斬り込む。

だが……

「てめえはこの中じゃあ一番ダメだ。速さ・パワーどっちも中途半端なあゝ」

ジェイソンはキリトが突き出した黒い剣の切っ先を難なく掴み取った。

「なん……だと……?!」

キリトの両眼が衝撃で見開かれる。

「テメエなんぞに……俺と戦う資格はねえええ!!!」

ジェイソンはそう叫ぶと、キリトをそのまま力任せに投げ飛ばした。

キリトは壁に背中から叩きつけられた。

「(勝てるのか……?俺はこんな怪物に……)」

圧倒的すぎるジェイソンに、キリトは段々勝てるビジョンが見えなくなっていた。周囲にはジェイソンの圧倒的な戦闘力により倒れ伏す仲間達。辛うじて戦えるのは自分のみ。

「いや……やるしかない……俺しかないんだ!!」

キリトはそう言っ自分自身を奮い立たせ、ジェイソンに飛びかかった。

「(もつと速く……もつと強く!!)」

自身にそう言い聞かせ、キリトは己の全てを賭け、文字通り全身全霊を以てジェysonに挑む。

彼の圧倒的なパワーを前に弾かれても、何度倒れようとも、そのたびに立ち上がって果敢に立ち向かい続けた。

ここで自分が倒れたらみんなが死ぬ。それどころか、更なる被害が出る事になる。

だからこそ、戦わなくてはならない。自分がやらなければならぬ。

「おおおおおおお!!!」

キリトは左右の剣を巧みに使ってジェysonに斬りかかる。

——守る

——アスナも、みんなも……俺が守る!!

この時、キリトの脳内イメージに、一つの巨大な鋼鉄の門が現れた。そして、キリトがそう念じた瞬間。『ガチャリ』と鍵が解かれる音がし、そして『ゴゴゴ……』という重々しい音と共に、その扉はゆっくりと開かれる。

—————

『ナーブギアとのシンクロ率120%を検知』

『ナーブギアのリミッターを完全解除』

—————

「無駄だったのが……分あああかあんねええのかあああああ!!!」

ジェysonに弾き飛ばされ、地面に膝をつくキリトに、ジェyson

が苛立ち気味で鉈を振り下ろす。

その直後だった。

『ギイン!!』という音と共に、ジェイソンの手から巨鉈が弾き飛ばされたのだ。

「テ……メエ……!」

ジェイソンはマスクの奥で驚愕の表情を浮かべ、キリトを見下ろす。

この瞬間、キリトの纏う霧囲気が一変した。

氷のように冷たい霧囲気を纏い、両目からは謎の黄色い光が灯っている。

「……そう言うなよジェイソン。俺だって伊達にここまで戦い続けてきたわけじゃないさ」

キリトはゆっくり立ち上がると、落ち着き払った声でそう言った。

「キリ……トくん……!」

その様子を遠目に見ていたアスナも気付いた。

あれは、かつてホロウエリアでの最終決戦でジェネシスが入った、絶対無敵の領域。選ばれた者にしか入れない、究極の次元。

《ゾーン》

キリトはゆっくりと右足を引き、左手の『ダークリパルサー』を前に突き出し、右手の『エリユシデータ』を右肩に担ぐ体勢を取る。

「ここからが俺たちのステージだ……」

第二ラウンドと行こうぜ、ジェイソン!!」

—————

その頃、ジェネシス・ティア・サクラの3人はJのプレイヤー達に囲まれてしまっていた。

3人はなんとか応戦し、Jのメンバー達を沈黙させていく。

だがこのままではいつまで経っても先に進めない。

「……久弥！……ここは私たちが食い止めるから先に行って!!」

ティアが一人のオレンジを斬り飛ばしてそう言った。

何を言ってるんだ、と言いつ返し返そうとしたジエネシスだったが、

「大丈夫です！ 私たちは必ず後で追いつきます！」

それよりお父さんは早くジョーカーのところへ！ あの人を止められるのはお父さんだけです!!」

ジエネシスは一瞬迷ったが、ティアとサクラの目を見て何も言えなくなつた。

そして一呼吸おいて決意を固める。

「……死ぬんじゃないぞ」

そう言い残し、彼は先へ走り出した。

だがジエネシスが走り出して数分後の事だった。

ティアの元に一通のメッセージが届いた。

戦闘も落ち着いていたので、ティアはそのメッセージを開き……

そして目を見開いた。

送られていたのは一枚の画像。

ティアはそれを見て冷や汗が吹き出て、呼吸が乱れ始める。

そこに写っていたのは……

……手足を縛られ、地面に横たわっているレイだったのだ。

「な……に……これは……?!」

ティアは思わず掠れた声で呟く。

「母さん！行ってください！」

すると事態を察知したサクラがティアにそう告げる。

「私なら大丈夫です！だから早く!!」

サクラの訴えを受け、ティアは頷いて走り出した。

メッセージに添えられていた場所に向かって。

「……とは言え、もう粗方片づいちゃってるんですけどね」

そう言っつてサクラは辺りを見回して苦笑した。

周囲には戦闘不能となって転がっているオレンジプレイヤー達。既に全員ロープで捕縛しており、放っつておいてももう確実に襲つてくることはないだろう。

自分はキリト達の救援にでも向かおうか、そう考えた時だった。

「いやあく、これがM H C Pの力か！実に見事だったねえ!!」

サクラの背後からパチパチと拍手をしながら歩いてくる人物が一人。

「あ、貴方は……」

ゴージャスな白金の鎧に身を包んだ男。

アルベリヒが、不気味な笑顔を浮かべながら歩み寄つてきたのだ。

—————

ジェネシスが走り続けた先に、ボス部屋があつた。

ジェネシスはその扉に近づくと、それがゆつくりと開く。まるで自分を招いているかのように。

扉が完全に開かれると、ジェネシスがゆつくりと部屋の中に入った。

「よお、待つてたぜエ 《ダークナイト暗黒の剣士》さんよお」

部屋の中央に、紫のスーツに不気味なピエロ風の化粧をした男が

立っていた。

「ジョーカー……!!」

ジェネシスは鋭い目つきと共に、その名を口にした。

六十三話 突入作戦3

部屋に充満した麻痺毒の粉末というトラップにより麻痺状態に陥ったフィリアとツクヨ。

地面にうつ伏せで倒れるフィリアとそれに寄り添うように膝をついているツクヨの2人に、ジョニー率いるオレンジプレイヤーの集団がジワジワと歩み寄る。

「キヒヒヒッ、形勢逆転ってやつだなあオイ！どうだ？希望が絶望に変わった気分はあ？てめえらはもうおしまいなんだよ!!!」

ジョニーは勝ち誇ったように高笑いしながらツクヨとフィリアに對して言った。

フィリアは悔しげに下唇を噛み締めるが、ツクヨは特に表情を変えずに聞いていた。

「ヒャアハハハハハハッ！悔しいかそうだろう?!ザマア見やがれ死神太夫!!俺をコケにしたツケはきっちり払ってもらうぜ…テメエらの命でなア!!」

お前らやつちまええ!!」

ジョニーの掛け声で周囲のオレンジ達が武器を手に一斉に飛びかかる。フィリアは麻痺で動けず、ツクヨも微動だにしない。

万事休す、もはやここまでかとフィリアは覚悟を決める。

「……………舐められたものじゃな」

するとツクヨが呆れたように呟く。

そして次の瞬間、フィリア達に襲いかかっていたオレンジの身体に

一斉に苦無が投げつけられ、麻痺状態に陥って倒れ込んだ。

苦無術《自来也蝦蟇毒苦無》。相手を高レベルの麻痺状態にするソードスキル。ツクヨは一瞬の動作で大量の苦無を射出し、見事なコントロールでオレンジ達を封じたのだ。

フィリアは信じられない光景を見て開いた口が塞がらなくなった。これだけの数を一瞬で沈黙させたその実力もそうだが、ツクヨも自分と同じように麻痺にかかっていたはず。なのに何故動けるのか訳がわからなかった。

ツクヨは「フウ」と息を吐くと、ゆらりと立ち上がる。

「なっ……お前……何で、何で動けるんだよ?!」

ジョニーもフィリアと同じことを考えており、目を見開き、思わず後退りしながら問いかけた。

「ふん、知れた事。わっちは耐毒スキルをカンストしておるのでな。生半可な毒なぞわっちには通じぬ」

「なん……だと……」

ジョニーは思わず地面にへたり込んでしまった。

ツクヨはそんな彼に向かってゆっくりと足を進める。

「さて……さっきの質問、そのまま返させてもらうとしようかのう。

「どうじゃ?」希望が絶望に変わった気分は?」

ツクヨは両手に苦無と手裏剣を持ち、不敵な笑みを浮かべて問いかけた。

最早ジョニーの敗北はここに決定したも同然だった。既に仲間はず麻痺で封じられ、しかもツクヨに対してはジョニーが最も得意とする毒が通じない。ただでさえ対人戦闘能力で圧倒的に差があるジョニーの得意分野も無駄となれば、もう打つ手がない。完全に王手、詰みだ。

「く……そ……」

ジョニーは屈辱とそれに伴う怒りのあまり歯をギリギリと鳴らしながら呟く。右手に持ったナイフが怒りによる震えでカタカタと鳴り響く。

「クソがああああああああ!!!」

逆上したジョニーは毒ナイフを手にすると即座にツクヨに向かって駆け出す。

ツクヨは正面から振り下ろされるナイフを苦無で難なく弾き飛ばす。

そしてそのままツクヨは右足でジョニーの腹部を蹴り飛ばす。

「グボアッ……ここ、のおおお!!」

再び立ち上がるとうとするジョニーに対してツクヨは苦無を投げつけた。

その苦無はジョニーの両肩、両足に突き刺さり、さらに麻痺状態に陥らせた。

「諦めろ。主ではわっちには勝てぬ」

ツクヨはそう言ってキセルの煙を「フウ」と吐いた。

「ツクヨさん!」

すると、麻痺が解けたファイリアがツクヨに駆け寄る。

「無事かファイリア、ならばよし。早く此奴らを縛り上げるぞ。麻痺が解けたら面倒じゃからのう」

「うん!……あの」

するとファイリアは一呼吸おき、

「ツクヨさん、すごくカッコ良かったよ!流石私の師匠だね!」

ファイリアはそう告げると、地面に倒れているオレンジの方へ駆け出しました。

ツクヨはしばし呆気にとられてその後姿を見つめていたが、やがて

「フッ…」と軽く笑みを溢す。

「師匠、か……色々手解きはしたが、よもやそんな風に呼ばれることになろうとはのう……」

これでわっちも、少しは近づけましたかな……

……………ヒビキさん」

—————

迫りくる巨大な蛸型モンスターの手を、ジャンヌ・イシュタル・オルトリアはバックステップで後ろに飛び退いて回避する。

「……………じゃああんた達、手筈通りに行くわよ!!」

『お任せを!』

「りょーかいです」

3人は目配せしてそう交わすと、その場から飛び出す。

イシュタルは懐から金色の水晶玉を取り出し、それを空中に放る。

「さあ覚悟しなさい気色悪い怪物!!私の全力の一撃、食らうといいわ!!」

金色の水晶玉は空中で弾け飛び、ゴールドのエネルギーがイシュタルの武器《天弓マアンナ》に収束していく。

「これが私の、全力全霊!!」

イシュタルがマアンナの発射態勢を整えている間、ジャンヌとオルトリアが子供達の前に立った。

『大丈夫ですよ、私たちがお守りしますからね!』

「安心して、じっとしてください」

ジャンヌとオルトリアが後ろの子供達に優しく微笑み、子供達もその言葉に頷く。

ジャンヌはそれを見ると数歩前に出て、自身の旗を高く掲げる。

『我が旗よ、我が同胞を守りたまえ!!』

ジャンヌの旗が眩い金色の光を放ち始め、さらにイシュタルのマアンナからもゴールドの光が放出され、部屋は明るい金色の光に包まれ

る。

「お、おおお……！何と、神々しい光か……！！」

ジルはその光を見て驚いたように目を見開いた。

マアンナの照射準備が整い、イシュタルは指先を目の前のモンスターに伸ばして照準を合わせる。

「打ち砕け!! 『山脈震撼す明星の薪』!!」

マアンナから極太の熱線が飛び出し、蛸型モンスターを一瞬で呑み込んだ。

威力のあまり猛烈な爆風や衝撃波が発生する。

『リュミノジテ・エテルネットル!』

ジャンヌの旗から金色のバリアが展開され、背後のオルトリアと子供達を包み込み、守護する。

その直後、『アンガルタ・キガルシユ』による爆風と衝撃波が襲い、ジャンヌのバリア『リュミノジテ・エテルネットル』とぶつかり合う。

土煙が晴れると、モンスターはまだ生きていた。とは言えHPは既にイエローゾーンに達しており、身体も半分が消し飛ばされている状態だ。

だがこのままではまた驚異的な回復能力で瞬時に元どおりになっ
てしまう。

「んじゃ、無茶はするんじゃないわよ!!」

イシュタルはそう言ってその場から離脱した。

ジャンヌはそれに対して黙ってうなずき、左腰の片手剣をスラリと引き抜く。

『主よ……この身を委ねます!』

ジャンヌがそう口にした瞬間、片手剣の刃から真っ赤な火柱が発生し、巨大な刃を形成する。

炎の勢いが強まるにつれ、ジャンヌのHPが徐々に減っていく。

『《ラ・ピュセル》!!』

ジャンヌはその巨大な炎の刃を頭上から一思いに振り下ろし、蛸型の巨大モンスターを一刀両断した。

身を焼き尽くす炎に包まれ、蛸のモンスターは耳をつんぎく絶叫を

上げて燃え始めた。

「な、なんと……！その炎は正しく聖女を焼いた呪いの火！！何故、何故貴女がそれを使うというのです!!」

ジルが驚愕のあまり狂乱気味に叫ぶ。

その火はまるでフランスを救った聖女を、裏切りの果てに処刑した時の炎。

ジルは訳が分からなかった。何故ジャンヌの名を語るものがその火を使うのか。それは裏切りの炎、尊き聖女を陵辱の果てに焼き尽くした業火。

だがジャンヌはきっぱりとそれを否定する。

『これは、呪いの炎などではありません……！』

モンスターの方が徐々に焼け落ちていく。

『この火は……絶望を切り開き、暗闇を照らす祈りと希望の炎です!!』そして遂に、モンスターのHPが全て消し飛び、蛸型のモンスターは断末魔を上げて爆散した。

ジャンヌのHPは残り1ドットの所で止まっており、技の反動で疲弊したジャンヌはその場に膝をつく。

そんなジャンヌにイシユタルが駆け寄り、慌てて回復ポーションを与えてHPを回復させる。

「こ、こんな……ことが……」

ジルは声を震わせながら後ずさった。

「いえ、いいえ！まだです!!まだ私には、この本が……」

ジルは悪足掻きとばかりに先ほどの本を掲げて再び別のモンスターを召喚しようとする。

「いいえ、もう終わりですよ」

だが彼の腕をオルトリアがビームサーベルで斬り落とした。

そして地面に落ちた本をビーム刃で焼き、破壊する。

「そ、そんな……馬鹿な……」

敗北が決定し、ジルは膝をついた。

その後、ジルを拘束した3人は子供達の方に歩み寄る。

『さあ、もう大丈夫ですから安心してください』

ジャンヌは子供達の前にしゃがみ込むと、優しく微笑みながら語りかけた。

「うん！ありがとうございますお姉ちゃん！」

「すっごくかっこよかったです!!」

「助けてくれてありがとうございます！お姉ちゃん！」

子供達は満面の笑顔でジャンヌに駆け寄る。

『お……お……おねえ、ちゃん……お姉ちゃん、ですか……!』

「お姉ちゃん」と言う単語に反応したジャンヌは途端に感激した様子で呟く。

「……ねえ、なんかジャンヌ変なものに目覚めてない？」

「多分大丈夫ですよ……多分」

イシュタルが何か不安げな顔で見つめ、オルトリアも自信なさげに答える。

—————

「はああああっ!!」

「ブウルルルアアアッ!!」

キリトの双剣とジェイソンの巨鉞が激しい火花を上げて衝突し合う。

ゾーンに入ったキリトは瞬発力が上がり、ジェイソンから振り下ろされる鉞に対して的確に反応していく。

「ぐぬう……! (こいつ……なんだあ、動きが良おくなつていやあがるう……!)」

ジェイソンは思わず舌打ちしてしまう。

先ほどまで自分の攻撃に手も足も出ていなかったキリトが、突然上手く対応し始めたのだ。キリトはジェイソンのパワーを正面から受け止めるのではなく、別方向に受け流しているのだ。

「この虫ケラがあ……くたばりやがれえええい!!」

ジェイソンは鉈でキリトを下から掬い上げるように振るう。

「つぐ……！」

キリトはその攻撃を受け切ることができず、そのまま弾き飛ばされて壁に激突する。

「おおおおおおおおお!!!」

しかしキリトは尚立ち上がり、ゾーンによる速さを生かして突っ込む。

「この……余裕かましてんじゃねえええ!!!」

ジェイソンはキリトに対し鉈を上から振り下ろして叩き潰そうとする。

が、キリトはそれを横方向に飛び退くことで交わし、再びジェイソンに接近していく。

「せああああつ!!!」

そしてそのまま左右の剣を交互に繰り出してジェイソンに斬りかかる。

その間、キリトは以前ミツザネから言われたアドバイスを思い出していた。

「バランス型ってのはな、全てを極めてこそ真価を發揮する」

「(もつとだ……もつと……もつと速く……)」

キリトは極限まで高められた集中力により、ジェイソンの鉈を驚異的な反応速度で弾いていく。そしてそこから、ゾーンによって高められた敏捷性で素早く剣を繰り出す。

「もつと強く!!」

「こ、いつう……！」

キリトはそう連呼しながら、自分が持つ最大限の力でジェイソンに斬り込む。

ゲーム内なので、気合いや気持ちだけでステータスが変わることはない。

しかしジェイソンは、キリトの恐るべき気迫と集中力に、どう言う訳かキリトのパワーが強まっている感覚に陥った。

ジェイソンは齒軋りしてキリトを蹴飛ばし、一度距離を置くと再び

鉈を頭上から振り下ろす。

「今死ぬ！すぐ死ぬ！！骨まで砕けルルルオオオオオオオオオオ！！！！」

先ずはキリトの腹部に膝蹴りを、続けて左拳でキリトの顎にアッ
パーパンチを、最後に身体を一回転させてその遠心力を最大限に活か
してキリトを吹き飛ばす。

キリトは壁に吹き飛ばされ、土煙を上げて衝突した。

だが……

「まだだあああああああつ！！」

キリトは尚も怯まずにジェイソンに飛び込んだ。

HPは既にイエローゾーンだが、それでも気にせず進み続ける。

「これでも止まらねえのかあ……！！」

忌々しげに舌打ちし、突っ込んでくるキリトを迎え撃つ。

「なら……こおいつでどうだあああ！！」

ジェイソンは再び巨鉈を頭上に振り上げると、鉈の刃が紫色の光を
放ち始める。

そしてキリトが足元まで来たタイミングでそれを勢いよく振り下
ろす。

「ンマツツツスルウウウウ……ギイイヤアアラクシイイブウウル
ルルレエイクウウウウウ！！」

上から振り下ろされる超絶なパワーに、キリトはなす術もなく押し
潰された。

「キリトくんっ！！」

アスナは悲痛な顔で彼の名を叫んだ。

土煙が晴れた先に、キリトは左右の剣を頭上で交差させる事でその
一撃を受け止めていた。膝をつけてその衝撃に踏ん張り、巨大なパ
ワーに耐えるその表情は先ほど以上に苦悶に満ちていた。

その腕はギリギリの所で必死に踏ん張っているため小刻みに震え、
黒と翡翠の剣はギシギシと音を立てている。

「まあだ踏ん張るかああ……ふん、だがこれで終わりだああああ！！」

「つつ！！ぐおおおおおっ！！」

ジェイソンは鉈を握る腕に力を込め、キリトを押しつぶす。

だがその猛攻の中、ジェイソンは反撃とばかりに鉋をキリトの横腹に叩き込み、腹部を挟む。

「つぐうつ……い！」

キリトの表情が一瞬曇められ、HPがレッドゾーンの直前まで減少する。そしてスター・バースト・ストリームが強制的に中断された。

「ぐ、おおおおお!!」

しかしキリトはそこから二刀流最上級スキル《ジ・イクリップス》を発動する。

並大抵のボスモンスターならばこの技だけで消滅させられる程の破壊力を持つ技。先程の技よりも更に眩い青白い光が発せられ、フレアのような強烈なエネルギーを纏った剣戟が繰り出される。

先ほどよりも速く、更に強いパワーで放たれる攻撃を、ジェイソンはここに来て恐るべき反射神経で捌いていく。直感でこの技だけは受けてはならないと分かったのだ。

だがそれでも相手は二刀、こちらは一刀、手数では明らかに不利。キリトの一撃が何度か自身を掠め取り、その度にHPがあり得ない程削られていく。

「……おおんのがキがあああああ!!オレ様をおお……舐めんじゃねえええええええ!!」

するとジェイソンの鉋に真紅の光が放たれ始め、そしてその鉋とキリトのダークリパルサーがぶつかり合う。

数秒間そのまま鏢迫り合いを起こすが、次の瞬間。

ダークリパルサーの翡翠の刀身に『ピシリ』とヒビが入ったのだ。

キリトの目が見開かれ、その一瞬が命取りだった。

「ブウルルルウアアアアウ!!」

ジェイソンが左拳でキリトの頬を殴りつけ、そのまま右足で思い切り蹴飛ばしたのだ。

「ぐっ……は……い！」

そのままキリトは数メートル転がり、膝立ちで立ち止まる。

既に彼のHPはレッドゾーンに達していた。そしてダークリパルサーもほぼ使えない。次に使ったが最期、この剣は真つ二つに折れる

事だろう。

それを見越したジェイソンは、鉈を振りかぶってキリトに突進する。

「こいつでええ……終わりだああああああ!!!」

ジェイソンの鉈から漆黒のオーラが出始め、そしてそれがジェイソンをすっぽりと覆い尽くす。

ジェイソンの巨大も相まって、漆黒のオーラに包まれたその姿は正に「闇」そのもの。見ただけで、その技がジェイソンの持ち得る最強の技であることは明白だった。

キリトは膝をついたまま、黙ってダークリパルサーを見つめていた。

この剣はリズベットが彼の為に鍛えた剣。そして彼女と交わした、この世界を終わらせるという約束の象徴。

「ごめんな、リズ」

キリトは心の中でリズベットに謝罪した。

最早この剣が折れるのは必至。あの約束は、守れそうもない。

「だからせめて……あいつを倒して……俺はみんなを守る！」

キリトはそう決意して立ち上がる。思い浮かべるのは、もう一人の黒い背中。

「これまで皆を守り、導いてきた《もう一人の黒の剣士》。

「いつまでも、守られっぱなしじゃかつこつかないからな……!」

届くことのない言葉を、キリトは一人呟く。

そして右手のエリユシデータと、左手のダークリパルサーを前で交差させる形で構える。

二振りの剣が、彼の決意と覚悟に応えるように眩いゴールドの光を放ち始める。

心なしか、左手のダークリパルサーが最後の力を振り絞っているのか、エリユシデータよりも明るく発光しているように見えた。自身の最期を、ここで飾る為に。

キリトはその光を見て、ゆっくりと目を閉じる。

その次の瞬間だった。
キリトのダークリパルサーが『バキイン!!』という音を立て
て—————

—————ジェイソンの鉈を半ばから叩き折ったのだ。

「なん……だとお……?!」

ジェイソンの目が驚愕のあまり見開かれる。

「行け……………」

行つけええええええ—————!!!キリトく—————ん!!!」

アスナが涙目になって力一杯叫ぶ。

「ううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!!!」

アスナの声を受け、キリトは更に声を張って叫ぶ。

その思い、その気合い、その熱意に応えるかのように、左手の剣——
ダークリパルサーが最期の輝きを放つ。

翡翠の切っ先がジェイソンの胴体を捉える。

そしてその名の通り、巨大な闇そのものであったジェイソンを斬り
裂いた。

「ぐうぐうううおおおおおおおおおおお……………」

ジェイソンは胴体を一刀両断され、その場に立ち尽くす。

そのHPは、完全に尽きていた。

キリトはそのままジェイソンと入れ替わる形で止まった。

「な、何故だ……俺の方があ、遥かに強え力を持つてた筈だ……なにの……この差は、なんだ……」

ジェイソンはゆつくりと顔を後ろに立つキリトに向ける。

キリトは振り返らずに背中を向けたまま答える。

「……俺には守るべきものがあって、お前にはそれが無かった。

それだけの事だ」

キリトはゆつくり直立の体勢に戻り、左手のダークリパルサーを軽く左右に振るう。

同時に、ジェイソンの身体が青白い光に包まれ、そしてガラス片と
なつて消滅した。

キリトは左手のダークリパルサーの方にもう一度視線を移す。

その瞬間、ダークリパルサーの刀身のヒビが大きくなり、そして半ばから折れ、切っ先から半分が地面に『カラン』と音を立てて落下した。

「……ごめんな。」

そして……ありがとう」

キリトは悲しげな笑みを浮かべながら、役目を終えたもう一人の相棒^剣に謝罪と感謝を述べた。

六十四話 人斬りとの決着

鬱屈とした洞窟の中に、1人の幼い白無垢の少女が横たわっていた。

両腕、両足はロープで縛られている。

囚われた少女――レイは不意に目を覚ました。

身体には特にダメージは受けていない。ゆっくりと身体を起こし、辺りを見回す。

レイがいる場所は明かりが特になく、ただ無造作に置かれた薪に付けられた火だけが明かりとなっている。

自分が何故ここにいるのか、時は数刻前に戻る。

――

父、ジエネシス達が迷宮区に立て籠もる“J”に対処するため戦いに行った後、レイはユイと共に七十六層の宿に残っていた。

不安ではあったが、レイは彼らの無事を信じてユイと待ち続けたが、一時間が経過した時だった。

ユイがあまりにも不安がるので、その気晴らしにと街の売店で飲み物やお菓子を購入しに出掛けた。

その道中での事だった。

「すまない、そこのお嬢ちゃん」

後ろから男性プレイヤーに呼び止められ、レイは振り返る。

「君が“レイ”ちゃんに合ってるかな？」

「はい、私がレイですよ」

レイは人当たりの良い笑顔で頷く。

「そっか、良かった。」

先に謝っておく……すまねえ」

次の瞬間、レイは後頭部に『ゴッ!』と強い衝撃を受けて気を失い、倒れてしまった。

ジャックはそのままもう一度レイを見下ろすと、写真を撮ってメールをとある人物に送信し、ニヤリと笑って奥の岩に腰掛ける。
「さあ来い白夜叉……………貴様の大事な娘はここにいるぞ……………クククククツ」

—————

「目が覚めたようだな」

レイの後ろから声が響き、レイは目を見開く。

レイはその声を知っていた。かつて自分に襲い掛かった、人斬りの声。

レイはゆつくりと振り返ると、その男はいた。

逆立った銀髪に眼帯で片目を隠し、もう片方の赤い瞳がこちらを見下ろす。

「ジャック……………ザ……………リツパー……………」

レイは恐怖のあまり震えた声でその名を呟く。

「フツ、そう身構えるな。今更貴様を殺すつもりなど無い……………」

ジャックは口角を上げて不気味な笑みを浮かべながらレイに近づく。

「なんで……………私にこんなことをして、貴方は何が目的なんですか……………」

レイはジャックを睨みながらそう問いかけた。

「フン、知れた事……………お前を人質にすれば白夜叉は怒る。」

怒りは奴の理性を狂わせ、凶暴な人斬りに変貌させる……………
するとジャックは眉をピクリと動かし、後ろを振り返る。

「……………噂をすればだ。お出ましのようだぞ」

ジャックはニヤリと笑うと、顎で洞窟の入り口の方を指す。

レイもそれに促されてその方向を見ると、暗闇の奥から白い人影がゆつくりと歩いてくるのが見えた。

レイと同じ銀髪に白マントを羽織った女性。見間違えるはずもない、レイの母親であるティアだ。

「ママ……」

ティアは何も言わずにこちらに近づく。

だが近づくにつれ、彼女が放つ多大な圧力がひしひしとこちらにも伝わってきた。

「ほう……この気迫……怒っているな、白夜叉？」

ジャックもそれを感じ取ったのかティアに問いかける。

「……………レイをまきこんだ貴様と、それを阻止出来なかった私自身にな」

ティアの声は普段レイに見せる慈愛と優しさに満ち溢れたものではなく、怒りと憎悪に満ちたドスの効いた声だった。

ティアは鋭い目つきでジャックを睨みながら答えると、左腰からスラリと刀を引き抜く。

「クククク……………いいぞ白夜叉……………」

それを見て満足げな笑みと共にジャックは満足げに笑い、背中から太刀をゆつくりと引き抜いた。

「来るがいい……………殺し合いゲーム、開始だ」

ジャックがそう告げた直後、ティアはその場から飛び出し、同時にジャックも上空に飛び上がる。

真上から振り下ろされるジャックの刀をティアは横一閃に振るって弾く。

だがジャックは着地すると同時にそこから猛攻を加えた。上、下、斜め方向からランダムに斬撃が飛び、ティアは持ち前の反射神経でギリギリのところ回避、防御を続ける。

ティアは自身の頭部目掛けて来るジャックの刀を上半身を後ろに逸らすことで回避し、そのまま自身の刀をジャック目掛けて下から振るう。

が、ジャックはそれを何なく弾いた。

「……そんな腕で俺が殺せるか？」

ジャックは退屈そうな顔で刀を自身の右肩に担ぎながら言った。

「……っ！」

ティアは一度彼と距離をとり、刀の柄に左手を添えて切っ先をジャックに向けた状態で自身の真横に構える。

しばし睨み合いが続いた後、今度はティアの方から斬りかかった。刀身に青白い光が宿ると同時に、ティアはそれを右上から左下方向に繰り出す。刀ソードスキル《幻月》

それに対してジャックは左腰あたりに刀を構え、ティアの刀が振り下ろされると同時に素早く振り抜く。刀ソードスキル《絶空》

2人の剣が火花を散らしてぶつかり合う。

「くっ……っ！」

ティアは苦い顔で歯軋りをした。弾かれたのはティアの刀だった。宙に浮いた彼女の刀を、ティアは素早く掴み取り、逆手で持ち替えてそのままジャック目掛けて振った。

「それは悪手だな」

ジャックは首を横に振ってティアから振り出された刃を左手で受け止め、そのまま返しに自身の刀を突き出す。

その瞬間、『ザシュッ』と言う何かが突き刺さるサウンドエフェクトが鳴り、ティアの両眼が見開かれた。

ティアの腹部にはジャックの刀が深々と突き刺さっていた。

痛覚抑制の無い攻撃により、ティアは腹部に今まで感じた事のない痛みが襲った。

「逆手で構えるのは逃げの一手だ」

「うぐっ……っ！」

ジャックはティアの腹部から刀を引き抜くとそのまま再び猛攻を始めた。

「ママっ!!」

レイは悲痛な顔で叫ぶ。

ティアは痛みで意識が散漫しまともに反撃する事ができない。

防戦一方だったティアに対してジャックは蹴りを加え、彼女を壁に

叩きつける。

「くっ……！」

ティアは地面に膝をついて倒れ込んだ。

「……その程度か？ 白夜叉。こんなものでは貴様を斬ったところで何の面白味もないぞ」

ジャックはため息を吐きながら自身の刀身を左袖で拭う。

「本性を曝け出せ白夜叉。言っただけで、貴様の性根は人斬りだと。このままでは大事な娘は返ってこないぞ？」

「だ……まれっ!!」

ティアはジャックの言葉を遮って叫び、その場から飛び出した。

ティアの刀身に赤い光が宿り、やがて炎のエフェクトを纏い始めた。

そのまま炎の斬撃をジャックに突進しながら無数に繰り出していく。

ティアが保有する、アインクラッドでは恐らく最多の連撃数を誇るソードスキル。

抜刀術39連撃スキル《緋吹雪》

「緩い」

だがジャックは淡々とその乱撃を容易く弾いていく。

そして技が終わり、動かなくなったティアの右肩目掛けて鋭い刺突攻撃を加えた。

ジャックの刀の切っ先がティアの右肩アーマーを軽々と吹き飛ばし、地面に『ガシャン』と音を立てて転がった。

「ぬんー！」

そのままジャックはソードスキル《旋車》を発動。

黄緑の斬撃が突風を巻き起こしながらティアの身体を切り裂いていき、そのまま吹き飛ばした。

「ぐあっ……!!」

横腹と太腿辺りを抉られ、再び激痛に襲われるティアは地面に刀をつけてそれを支えに膝立ちする。

「……まだ迷っているのか白夜叉。殺す気で掛からねば俺には勝てぬ

ぞ。

「……………それとも、こうでもせねば本気は出せんか？」
するとジャックは後ろを振り返り、レイの方を見た。

そして右の掌を伸ばし、レイの目を見て赤い瞳を向け、鋭い目つきで睨む。

「……………っ?!」

次の瞬間、レイは目を見開いて地面に崩れ落ちた。

苦悶の表情で身体を震わせ、跣き苦しむ。

「れ……………レイ?!」

ティアは目を見開いて娘の名を叫ぶ。

レイの視界には、かつて自分が見て、感じ取ってきた人の感情データが流れ込んでいた。

それらは全て、自身が対処すべきであった人々の負の感情だった。絶望・後悔・悲哀・憤怒・憎悪・狂気・殺意と言った、M H C Pである彼女たちが片付けるべきもの。

しかし、今のレイにそれを対処できる能力は無い。だが負の感情は絶えず自分に流れ込んでくる。

やがてレイの視界にエラー表示が現れた。かつて、自分が崩壊しかけた時と同じように……………

「《心の一方》を強めにかけた……………聞けば、お前の娘はM H C P、人の感情を見る機能があるそうじゃないか。

今お前の娘には俺の剣気・殺意・憎悪・憤怒と言った負の感情が流れ込んでいる。それらを処理出来ないあの娘はエラーを蓄積しやがてそのデータは崩壊する……………」

「あ……………う……………ま……………ま……………」

レイは苦しそうに息も絶え絶えになりながら、悲痛な表情でティアに助けを求めた。

「貴様……………」

ジャックの言葉を聞いたティアは怒りに身体を震わせる。

「時間はないぞ。言いたいことは剣で言え」

ジャックがそう告げた瞬間。

ティアが一瞬の動作で飛び出し、ジャックの首目掛けて刀を振るった。寸前のところでジャックは回避し、ティアはそのままジャックを通過してレイの前で着地する。

「命が惜しければ、レイに掛けた心の一方を解けッ!!!」

ティアはジャックの方を振り返り、ドスの効いた声でそう怒鳴りつける。

「戯け。俺にはもう解けぬ」

ジャックは軽い笑みを浮かべながら答えると、そのまま真顔に戻して自身の刀の切っ先をティアに向けた。

「方法は二つに一つ。」

《自力で解く》か、《術者を殺して気を断ち切るか》だ。

ククククツ

薄ら笑いでジャックはそう告げた。

「……ならば!!」

最早ティアに残された選択肢は一つだけ。それを悟ったティアは走り出し、再びジャックと剣戟を繰り広げた。

ティアは怒りに任せて剣を振るった。最早型も何も無い。ただ己の身に任せて、ジャックに襲いかかる。

その間にも、レイの視界にエラー表示は段々と増えていき、自分の中にある大事な何かが崩れ落ちていく感覚がし始めた。

早くしなければ、大事な娘が再び消えて無くなってしまう。

その事をティアは分かっており、早くジャックを殺す事で頭がいっぱいになっていた。

そう、この時ティアは既に、ジャックに対して明確な殺意を抱いていた。それは最早、ジャックが言っていた修羅、人斬りとしてのティアであった。

「フハハハハ！いい、いいぞ白夜叉！もつと貴様の本性を見せてみる!!」

ジャックは楽しげな笑みでティアに刀を振るった。

だが、ティアはジャックの斬撃を弾き返した。そのあまりのパワーに、ジャックの上半体は大きくのけ反った。

「ぬおっ！こ、これ程とは…………！」

「だあああああつ!!!」

次の瞬間、ティアは自身の刀をジャックの腹部には思い切り突き刺した。

「ぐっ…………おおおっ…………!!!」

するとジャックは両眼を見開き、今まで見せなかった苦悶の表情で腹部を抑えた。

それを見てティアは違和感を感じた。普通のプレイヤーには痛覚抑制が働いているので、刀を突き刺した所で痛みは殆ど発生しない。最も、彼の刀にはそれを無効化する機能があるようだが、彼の刀で突き刺した訳ではないので痛みは発生しないはずなのだ。

「ぐ……………ククツ……………ククククツ……………」

だがジャックは、苦悶の表情の中で徐々に不気味な笑い声を始めめた。

「心地いい痛みだ……………痛覚抑制を外して正解だったな。

やはり、斬り合いはこうでなくてはな」

ティアは驚愕のあまり息を呑んだ。

この男、自らペインアブゾーバーを外してあるのだ。

ジャックのあまりの狂気っぷりに、ティアは思わず後退りした。

一方でジャックのテンションのボルテージはどんどん上がっていく。そして赤い瞳に、徐々に光が宿っていく。

「これでこそ……………戦いだ!!!」

ジャックはそう叫ぶと同時にティアを吹き飛ばした。

ティアは数メートル下がった後、再びジャックの方を見る。

「ククククツ……………戦場が俺の居場所、これが俺だ」

ジャックは楽しげに笑みを浮かべながら言った。

その右目の瞳には赤い光が灯っていた。

次の瞬間、ジャックは一瞬でティアの目前に肉薄し、刀を上から振るう。

ティアは辛うじてそれを防ぐが、ジャックは素早い動作で次の攻撃を繰り出す。ティアの左下方向から刀を振るい、そのままティアの胴

体を斬りつけた。あまりに早い動作でティアは反応が追いつかず、その攻撃を受けてしまった。

そして、ジャックは左腰から短刀を引き抜くと、それをティアの右肩に深々と突き立てる。

「があっ……！」

「らあっ!!」

右肩を抑えるティアに対してジャックは左足で思い切り蹴飛ばす。地面を数メートル転がり続け、ティアはレイの目の前で倒れ込んだ。

ティアの目の前には、苦しそうに悶える愛娘の姿があった。

両目から涙を流し、その表情には苦悶と恐怖に満ちていた。

「ま……ま……ま……っ……う……う……」

ティアは苦しむレイの姿を見つめた。

その瞬間、ティアの心がすう……と冷え切っていく感覚がした。怒りでも、殺意でもない。最早ティアではない、別人のような何かに変貌してしまったかのような感覚。

そして、ティアの脳内にある大きな鋼鉄の扉が、ゆっくりと開いていく。ジェネシスやキリトが到達した究極の次元に今、ティアも到達する……

—————

『一定数の脳波を感知』

『ナーブギア、リミッター解除』

—————

ティアは自身の右肩に突き立てられた短刀を引き抜き、無造作に投げ捨てる。

「勝負だ、『白夜叉のティア』」

背後から高らかにジャックが告げると、ティアは刀を拾い上げてゆらりと立ち上がる。

俯き加減で立ち、ゆつくりと振り返る。

「遊びは終わりだ……………」

……殺してやるからさっさとかかってこい」

凄まじい殺気と怒気を放ちながら、ティアは両目から青い眼光を孕んだ目で睨む。

「ククククツ……………オーケー。」

いざ、参るっ!!」

ジャックは満足げに頷くと、刀を両手で構えながらティアに突っ込む。

ティアも同時に駆け出し、ジャックと刀をぶつけ合った。

ゾーン状態に入った事で両者互角の戦いが繰り広げられる。刀が火花を散らしてぶつかり合い、しかもその速さ、パワーも格段に増し、白熱した剣の撃ち合いが続く。

だがその時、ティアが一瞬の隙にジャックの懐に潜り込み、背後に回り込む。

ジャックはすぐ様振り向くが、そこにはティアの姿はない。

「はああああっ!!」

直後、真上からティアが刀を上段から振り下ろし、ジャックの脳天を打つ。

「ぐおおっ……………」

ジャックは頭を斬られた事による激痛で思わず膝をつく。

そんなジャックを冷やかな目で見下ろしていたティアは、踵を返して数は歩き、距離を置く。

ジャックは激痛に耐えながら再び立ち上がってティアの方を見やる。

ティアは刀をゆつくりと左腰の鞘に収めていく。

刀の鐔が鞘の鯉口に付いたとき、鈴の音のような軽い金属音が洞窟内に鳴り響いた。

腰を落とし、左足を引き、身体を横向きにする。そして刀を左腰に携え、左手は刀の鯉口辺りに添え、右手はやや前方に突き出す。

「ほう……………抜刀術か」

ジャックはそう呟くと、刀を両手で構えて一気に突っ込む。

刀最上級スキル《散華》

ジャックの刀がティアに向かって振り下ろされた瞬間、ティアは素早く右手を自身の刀の柄に持っていき、掴み取る。

右足を大きく前に踏み出し、その勢いで刀を引き抜いて一気に右上に振り抜く。

眩く銀色に輝く刃がジャックの右腕を捕らえ、そしてそのまま斬り払った。

抜刀術最上級スキル《飛閃一刀》

「ば……かなっ……！」

右腕を斬り落とされたジャックはその場に跪いた。

「これで終わりだ。お前の剣の道も……そして」

ティアはゆっくりと立ち上がってジャックを見下ろし、そして刀を高く掲げる。

「お前の命もな」

ティアの刀が青い光を帯び始めた。

そんな彼女を、レイは苦しみの中から見つめていた。

「だ……め……っ……っ」

必死に訴えるが、その声は届かない。

「レイの命を守るために……お前はここで死ね！」

「ククク……さあ、殺せ白夜叉ア」

そしてティアは刀を勢いよくジャックの首元目掛けて振り下ろす。

「だめええええーっ！！！！」

だがその時、レイの悲痛な叫びが響き、ティアは寸前のところで手を止めて目を見開いてレイの方を見た。

「殺しちゃ……ダメですっ、ママっ……！！」

ママはそんな事したら……ダメです……！ママの剣は……みんなを助けるためのものです！人を、この世界の人を助ける為の……《活人剣》……それが、ママの剣ですっ……！！」

涙を流し、息も絶え絶えになりながらレイは必死に訴えた。

ティアはレイの声を聞き、刀を引いてジャックの元から離れる。

「決着をつけるぞ、白夜叉……」

だが背後から、ジャックが立ち上がって残った左腕で刀を持ち、構える。

「……もうやめなさい。左腕しか残っていないお前に勝機は無い」

ティアは振り返らずに背後のジャックに向けてそう告げる。

「フツ…世迷言を。まだ終わってなどおらぬさ……」

ジャックはニヤリと笑って刀を逆手に持ち帰る。そしてその刀を振り上げて――

自身の腹部に突き刺した。

「っ?!」

振り返ったティアは思わず目を見開く。

「……これでわかった筈だ……貴様の性根は人斬り。

お前がいつまで活人剣などとほざいていられるか……地獄の淵で見えてやる……ククククツ」

そして不気味な笑い声を上げながら、ジャックはHPを切らして爆散した。

地面に『ガシヤン』と音を立てて彼の刀が落ちる。

「……はあ……はあ……」

彼が死んだ事で苦しみから解放されたレイが深く息を吸って呼吸を整える。幸い、多少のダメージはあるものの崩壊に至ってはいない。自力でも修復可能な範囲だ。

ティアはゆっくりとレイの元へ歩み寄る。そしてレイの縄を解いて彼女を解放した。

「ママーっ!!」

ようやく全てから解放されたレイはティアに抱きついた。

「……ごめんね、レイ。私のせいで……」

ティアは蹲み込んでレイの頬を優しく撫でる。

「ママっ……違います、ママのせいじゃありません……!」

レイは首を振ってそれを否定する。

「ママは私の……世界一のママですから!!」
「レイっ……ありがとう……!」
ティアは涙を流してレイを強く抱きしめた。

六十五話 狂気の決着・悪意の胎動

九十五層・ボス部屋

本来であればボスがいるであろう広い空間に、2人のプレイヤーが向かい合って立っていた。

「待ちくたびれたぜえ、ダークナイトさんよお?」

ニタニタと不気味な笑みを浮かべながら言うのは、ピエロ風の化粧を施した男、ジョーカー。

その向かいに立つのは、赤と黒の装備に身を包んだジェネシス。

ジェネシスは何も答えずにジョーカーの方を黙って見つめる。

その時、彼が入ってきたボス部屋の扉が閉まり、そして消滅した。ジェネシスはそれを見て少々驚く。

どうやらこの部屋は、七十四層や七十五層の時と同じ、一度入ると退却が不可能な設定になっているらしい。

「残念だったなあ、てめえが入った時点で俺たちのどちらかが死ぬまでこの部屋は開かねえ……」

本当ならここにボスもいたんだが、どういうわけか消えちまってなあ。そういや、スポンサーもその事に気付いちやいたが、まあ気にすることあねえだろ。

大事なのは……てめえが一人でここにいて事だ」

ジョーカーは懐からサバイバルナイフを取り出し、その鈍色に輝くナイフをギラつかせる。

「決着つけようぜえ、今ここでよお」

「……上等だ、この野郎……!」

ジェネシスも大剣を構えて低く唸るような声で答える。

そして二人は同時に地面を蹴って駆け出した。

まずジェネシスが大剣を思い切り振りかぶってジョーカーに振り下ろす。

ジェネシスのパワーで勢いよく突き出された大剣の威力のあまりジョーカーは吹き飛ばされるが、空中で身軽に体勢を整えると上手く着地する。

そしてジョーカーは再び駆け出し、ジェネシスももう一度大剣を振るう。が、ジョーカーはその斬撃をナイフ装備の恩恵によるスピードを生かして回避、そのままジェネシスに突っ込む。ジェネシスは大剣の弱点である取り回しの悪さを突かれ、その胴体にナイフを突き立てられた。

「つち……い！」

ジェネシスは左手でジョーカーの腹部を殴りつけて突き放し、自身もそこから飛び退いて一度距離を置く。

「へへッ、流石は攻略組最強の一角だあ……やはり、正面からまともにやり合つちや勝ち目は無さそうだぜえ」

息を整えながらジョーカーは楽しげに笑いながら言った。

そしてジョーカーは左手を上げて何かに合図を出す。

「出番だぜ野郎共オ!!」

ジョーカーがそう叫んだその時、ジェネシスとジョーカーの周囲にピエロのマスクを被ったプレイヤー達がどこからか出現し、二人を取り囲んだ。

「さあ、どうする? 《暗黒の剣士》様よおく。てめえにこいつらが斬れるか?

なに、所詮オレンジだ……纏めて殺つちまえばいいんだよ、ハハハッ!!!んじや始めろ!!!」

瞬間、ピエロマスクのプレイヤー達は一斉にジェネシスに襲い掛かった。

「テメエ……ッ!!」

ジョーカーのやり口にジェネシスは怒気を孕んだ視線と声で叫ぶと、襲いかかるピエロ達に応戦した。

ジェネシスは大剣のリーチを活かして自身の周りに近づくとピエロ達を一斉に吹き飛ばす。

大剣の範囲攻撃スキルを主に使用し、とにかく自分に近づかせずに応戦する。これだけの数が一気に近づいて来られたら、自身の懐に潜り込まれた瞬間に畳みかけられて終わりだ。

「ブアッハハハハハ!!」ところがぎつつちよん!!」

その時、ジョーカーが自身の履いている革靴の先端部分から小型の刃を展開し、ジェネシスを蹴り飛ばした。

不意打ちを受けたジェネシスは地面に倒れ込み、その隙について一斉にピエロ達が畳みかけた。

「……のお!!」

ジェネシスは堪らずに暗黒剣ソードスキル《ドレッド・ブレイズ》を発動し、直前まで来ていたピエロ達を纏めて吹き飛ばした。

その攻撃により、何名かのピエロ達がガラス片となって消えた。

だがピエロ達は狂ったように、斬つても吹き飛ばしても襲い掛かってくる。

その間、ジェネシスは一心不乱に剣を振り続けた。

その間、時折青白いガラス片が飛び散った。

出来る限り犠牲は増やさないように気を配るジェネシスだが、それでも敵の勢いに押され、反撃していくうちに何名かのHPが尽きてしまう。

するとジェネシスは、押し寄せるピエロ集団を押し除けてジョーカーの方へ一直線に駆け出す。

「チョイサー!!」

ジェネシスから振るわれた大剣の刃を、ジョーカーは伏せて回避してそのまま足を突き出してジェネシスの右足首を斬りつけた。

「っち……!」

ジェネシスはその攻撃で仰向けに転倒し、その上からジョーカーが押さえ込んだ。

「さあて、喧嘩はやめにしようぜえ。」

せつかくのお楽しみだ、殺し合いだけじゃあつまらねえだろっ? だからよオ、今から俺とゲームをしようじゃねえか」

「ゲームだと…?」

「Yeah、俺がテメエと殺し合いだけで終わらせるわけねえだろうがあ。」

おい、アレ持ってきて!!」

ジョーカーが手招きすると、部下達が部屋の奥に行き、そして二台

のモニターを彼らの元に運び出した。

するとモニターの電源が点き、映像が流れ始めた。

映し出された映像には、コンクリート製の二つの部屋があった。まるで独房のような閉鎖的な空間に、それぞれの部屋に10名程度の人間が閉じ込められている。

「さて、見ての通り今映像に映っている二つの部屋にはそれぞれ10名、合計20人のプレイヤーが閉じ込められている。

片方は俺たちがこれまで拉致ってきたグリーンのプレイヤー、もう片方は俺たちと同じ犯罪者プレイヤーだ。

それぞれの部屋には爆弾が仕掛けられている。一発で部屋の奴らを全滅させられるほどの威力がある爆弾がな」

ジョーカーは映像の方を指差しながらジエネシスにそう説明する。

「……何をさせる気だ」

「簡単さ。選ぶんだよ。この二つのうちどちらを救うか、をな」

するとジョーカーはスーツの内ポケットから二つのスイッチが付いたりモコンを取り出す。

「起爆装置はここにある。俺がポチッと押せば一瞬でBOOM!!!」

……さあ、お前が選ぶのはどっちだ？何の罪もないグリーンプレイヤー達か、それともてめえらの安全を脅かす犯罪者共か……？」

ジョーカーはニタリと笑いながらそう問いかける。

「ブアツハハハハハハツ!!なあ〜くんにも悩むこたあねえよ!!犯罪者共を殺せばいい。こいつらはてめえらの命を危険に晒す害虫共だ、駆除しなきゃならねえ……」

……例えこいつらに現実世界で待たせてる家族があってもよお」

ジョーカーがジエネシスの耳元でそう告げた瞬間、ジエネシスは目を見開いた。

「そうだ。犯罪者プレイヤーといえど、彼らにも家族というものがある。

「……ふざけやがって……んなもんでめえをぶっ倒せば済む話だろうが!!」

ジエネシスは起き上がってジョーカーに掴みかかるが……

「おおっと、怖い怖いイ〜」

ジョーカーは素早く反応してジェネシスの右肩に毒ナイフを突き刺す。

麻痺状態に陥ったジェネシスは再び倒れ込んだ。

「まあ落ち着けよ。んな事しちゃあゲームにならねえだろう？」

さあて、そんじやあ選んでもらおうかあ〜……制限時間は10秒だ。その間にてめえが選ばなけりや、俺が部屋を二つとも吹っ飛ばす。

さあ、てめえはどつちを救うんだ？」

ジョーカーはジェネシスの目を真っ直ぐにみながら言い放った。

ジェネシスは答えられない。

犯罪者と一般人。

二つの命を天秤にかけると言うのだ。しかも自分の采配で。

「おいおいイ〜、早く選べよあと5秒だぜエ〜〜？」

ジェネシスは何も答えない。

そしてジョーカーのカウントは進んでいく。

「はあ〜イ、残り3……………」

2……………

1……………

ZEROオオオオオ〜……………!!

さあ!てめえが選んだのはどつちだあ???

ジョーカーは左手に持ったスイッチをチラつかせて煽る。

「ぐっ……………」

ジェネシスは迷いが取れずに答えられない。

「ブアッハハハハハッツ!!ハァーイ残念時間切れだあ〜!!

てめえが選ばなかったから俺が決めさせて貰うぜえ……………」

そしてジョーカーはスイッチを掲げると……………」

「待つ……！」

それを両方押した。

「BOOOOOOOM!!!」

その瞬間、モニターに映る人々が爆発に吞まれ、そして映像は砂嵐になって途切れた。

「て、めえっ……!!」

ジェネシスはジョーカーに対して怒気を孕んだ視線で睨み付ける。

「オオイ睨むなよオおめえが選ばなかったから悪いんだぜえ？」

おめえがどちらかを選んでいれば助かった命もあったのに、それをおめえはどっちも救いたいのが為に両方とも死なせた……

分かるか？

おめえが、奴らを、殺したんだよ」

ジョーカーはジェネシスの眼前まで顔を近づけて言った。

「おめえの事だ、大方『命は平等だ』とか『どっちも救う方法はねえのか』とか考えてたんだろ。」

だが言わせてもらうぜエ……そんなもんはクソ食らえってやつだ。

平等な命イ？命が平等なわけねえだろうがよ。例えばだ、『マフィアのボスが殺される』なんて言う情報が流れたとしよう……誰も驚きやしねえ。寧ろそれは称賛される事だ。だが一方で、『国の首相が殺される』って言う噂が出たとしよう……誰も彼もが大慌てだ!!国を挙げて首相を守り抜くだろう……

な？命が平等なら、マフィアだろうが首相だろうが、死ぬ命があるなら全力で守らなきゃならねえよなあ？だが現実はそのじゃねえ……救われる命もあれば、見捨てられる命だってある……だから言つたんだ、命に平等なんざねえってな」

ジェネシスは何も答えずに、ジョーカーの言葉を聞く。

ジョーカーは語り続ける。

「万人を救う方法？ある訳ねえよんなもん。万人を救済するなんざ神であつても出来やしねえ。」

そもそも、人間一人が救える数なんざ限られてんだよ。世界最高峰

の医者か全ての患者の命を救えるか？無理に決まってる。

誰かを救うと言う事は、誰かを見捨てるって事だ。稀にいやがんだよ、全ての人間の「正義の味方」になりたいってやつが。バカバカしいとは思わねえか？正義なんざ人によつて様々だ。この世の法こそが正義とする奴もいれば自分自身を正義と断じてる奴だっている。

……俺アそう言う奴が大嫌いだね。正義の味方を気取ってる奴に混沌を齎するのが楽しくて堪らねえ。

そいつの大事なモンをぶっ壊す瞬間の表情が最っ高なんだなア！これが!!」

ジョーカーは高笑いを上げながらジェネシスにそう語りかける。

ジョーカーの言葉はジェネシスの中にすんなりと溶け込んでいく。

どれもこれも理にかなっており、寧ろ正論を言っているように思われた。

命は平等じゃない。

自分には万人を救う力はない。

絶対的な正義などこの世には存在しない。

ならば、どうするか。

――選び取るのだ。自分が守り通すと決めたものを。

――自分が愛するものだけを、守り抜くのだ。

――仲間達を、自分を信じてくれる者たちを。

――最期まで共にいると誓った、ティアを。

その瞬間、ジェネシスの中で何かが吹っ切れた。

麻痺状態も未だ時間を残した状態でなぜか解除される。

彼の精神が氷のように冷え切り、澄み渡り、再び例の巨大な門――

『ゾーン』への扉が開き始める。

次の瞬間、ジェネシスはジョーカーを突き飛ばした。

「……ジョーカー、確かにてめえの言う通りだ。

平等な命なんてねえし、万人を救う力は俺にはねえ。

だったら俺はせめて――俺が守ると決めたもんは何があつても守

り通す……………例え、何を犠牲にしてもな」

ジエネシスは両目から真紅の光を発しながら立ち上がり、大剣の切っ先をジョーカーに突きつけて言い放った。

「……………プツ、ハハッ、フハハハハハハハハッ!!!

ブアツハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!

いいねえ〜いいねえ〜いいよお〜!!今のお前、最ツツ高にCOO
OOOLじゃねえかああ!!!

だったらよお、もつと笑えよ《暗黒の剣士》。せつかくいい答え見つけたのに台無しだぜえ?

《Why so Serious?》

ジョーカーの言葉を合図に、周囲で待機していた部下のピエロ達が一斉にジエネシスに飛びかかった。

だがジエネシスは先ほどと違い、暗黒剣スキルをお構い無しに発動し、容赦無くピエロ達を葬っていく。

赤黒い渦に斬り裂かれ、貫かれたピエロ達は次々に消滅していき、あつという間に全滅した。

「次は……………てめえの番だ」

「ヒュウウ〜…まさかこれほどとはなあ〜」

ジョーカーは口笛を吹きながらジエネシスの戦いぶりを見て感心したように言った。

だがその次の瞬間、ジエネシスの大剣から漆黒のオーラが発生し、そしてジエネシスをすっぽりと覆った。

『秘奥義、開帳ー』

そして赤黒いエネルギーが大剣の刃に収束し、ジエネシスはそれを上段に真っ直ぐに構える。

『アビス・デリストピア』

直後、赤黒い巨大な斬撃が振り下ろされ、一瞬のうちにジョーカーを吹き飛ばした。

ジョーカーの立っていた場所に大爆発が起き、赤黒いエネルギー波ごと吹き飛ばす。

爆発が止むと、端正だったスーツがボロボロになり、地面に力なく

突如下衆な笑みに切り替わったアルベリヒは自身の後ろの方へこちらに来るよう指を鳴らす。

すると扉の奥から、フラフラと一人の人物が覚束ない足取りでやって来た。

それは、ジェネシスもよく知る少女。紫の髪に赤いリボン。桜色のパーカーに白いワンピースを身につけた、彼のもう一人の娘。

「サクラ……?」

サクラはいつもの彼女とはあまりにかけ離れていた。

サクラは普段の穏やかで優しい笑みではなく、瞳のハイライトが消えて焦点が合わず、虚な表情だった。

左頬には何やら赤い血のような筋が無数に入っており、それは首を伝って身体の方まで続いている。

そして腰には、今まで付けていなかった奇妙なベルトが巻き付けられていた。黒を基調とした黄色い鍵爪がつき、そこには赤と黒の長方形の物が展開され、気味が悪い寄生虫のようなデザインマークが入っていた。

「ククククツ……さあ、サクラくん。あの男を始末してくれたまえ」

アルベリヒがジェネシスを指差しながらそう言った直後。

サクラはその場から飛び出し、飛び蹴りを放つ。

「うおっ?!」

ジェネシスは間一髪の所でそれを回避するが、彼の背後から続けてサクラの蹴りが飛んでくる。

「何だよ……何がどうなってんだ?!おい、サクラ!!おめえ一体何があつたんだ!!!」

ジェネシスはサクラの猛攻を寸前のところで回避しながら、悲痛な顔で呼び掛け続ける。

それを側から眺めるアルベリヒは口元を両手で押さえて楽しげに笑っていた。

〜数分前〜

ジエネシスがジョーカーと激闘を繰り広げていたその頃、ボス部屋のすぐ近くにいたサクラは、アルベリヒと邂逅していた。

「アルベリヒさん……貴方、一体何をしに現れたのですか？」

「いやあ、ついさつきまで実験を行なっていたのだが、その『被験体』どもが脱走してしまつてねえ。ちょうど困っていたところに君がいるのに気が付いてね。こいつは運がいい……何せ最高の実験体がいんじゃないか！MHPという人の心に敏感な君がさあ!!」

アルベリヒは口元に笑みを浮かべながらそう言った。

「実験……被験体……？どういう事ですか？一体何を言っているのですか？」

「ヒヒツ、分からないかい？なぜ彼らがこんな最前線の迷宮区を占拠なんて出来たと思う？」

「……僕が手引きしたからだよ」

「なっ……?!」

アルベリヒがそう答えた瞬間、サクラは目を見開いた。

その直後だった。

サクラの両足にピンク色の触手が巻きつき、サクラを逆さ吊りにする。

「ちよっ……なに、これっ……!」

『イヒヒヒッ！捕まえた捕まえたあ〜!』

『おいおい、独り占めはよくねえぞ！俺たちの獲物なんだからよ』

すると背後からピンク色の気味が悪いナメクジのようなモンスターが人語を発しながら現れた。

『いやあ〜それにしてもみるよこれ!!この胸!!これ本当にAIなのか〜?』

途端、ピンク色の触手がサクラのワンピースの下から入り込み、胸を弄り始めた。

「い、いやっ……!!」

『うつひよおおお!!何だこれ最高じゃねえか!!AIなのがいい声で鳴きやがる!!』

『おいおいだから独り占めすんなっての!!』

するともう一体のナメクジから別の触手が伸ばされ、サクラの身体を縛り上げ、そして同じように胸を乱雑に弄り始める。

「この……さ、わ……るなっ!!」

直後、サクラの右足が赤い光を帯び、クライム・バレエスキルが発動しピンクの触手を斬り裂いた。

サクラは空中で1回転すると地面に着地し、巻きついてた触手を取り払って投げ捨てた。

『ギャアアアッ!!切れちまったああ!!』

「阿呆共が……だから油断するなと……」

そんなナメクジ達を呆れた顔で眺めるアルベリヒ。

すると彼は左腰から金色のショートスパアを取り出す。

「貴方達……一体何者なのですか?!」

「ふん、それに答えてやる義理は……無いね!!」

瞬間、二人は同時に飛び出す。

サクラはその場で空中に飛び出すと、一回転して踵をアルベリヒの頭に叩き込む。

「ギヤッ!!」

アルベリヒはその場に思わず蹲り、サクラはそこから追撃を与えようと左足を振りかぶる。

だがその瞬間、アルベリヒは金色のショートスパアの先端をサクラの腹部に突き立て、そして柄の後ろにあるレバーを思い切り引いた。

『Jack Rise!』

その瞬間、紫色の光がサクラの腹部に発生し、それがショートスパアに吸収されていく。

それと同時に、サクラは全身から力が抜け、地面に膝をついた。

「こ、これは一体……?!」

それに対してアルベリヒは不敵な笑みで立ち上がり、サクラを見下

ろす。

「君のデータは頂いたよ」

そしてショートスピアのグリップにあるトリガーを引いた瞬間、引き出されていた柄の後ろの黄色いレバーが収納される。

『Jacking Break!』

その瞬間、サクラの使う技と同じような光がアルベリヒの右足に発生し、そしてアルベリヒはサクラを思い切り蹴り飛ばす。

「が、はっ……い！」

サクラはそのまま壁に叩きつけられ、地面に倒れ込んだ。

身体に力が入らず、うまく立ち上がれない彼女に向かって、アルベリヒはゆっくと近づく。

「ハン、やっぱりこの僕からすれば君達なんてゴミ同然さ。ましてや人の心を治療する役目を放棄した君達に、最早価値など無い。精々僕の実験のいい道具となってくれたまえ」

そしてアルベリヒは腰から黒いドライバー型のアイテムを取り出すと、サクラの髪を引っ掴んで乱暴に立ち上がらせ、それを腰に押し当てる。

『Force Riser!』

瞬間、黒いドライバー型のアイテムの両側から銀色のベルトが出現し、サクラの腰に巻きつく。その裏には無数のトゲが付いており、腰に巻きつかれると同時にトゲが深々と突き刺さる。

「っーうっ……ぐううっ……!!」

瞬間、サクラに赤い電流が走り、彼女は苦悶の表情を浮かべる。

「君たちが見続けて来た人の悪意……それをもう一度ラーニングするとい」

アルベリヒは今度は掌サイズの長方形型のデバイスを取り出すと、そこに付けられているスイッチを押す。

『Uncontrolling Parasites Ability』

そしてそれを、黒いドライバーの隙間に差し込む。

すると、何やら警告音やブザーのようにも聞こえる禍々しい待機音

の方を見た。

彼女はゆつくりとこちらに向かって距離を詰めてくる。

「こうなったら……一か八かっ!!」

ジエネシスは彼女が傷つかないよう、かつ彼女を止めるために大剣を握った。

その時だった。

「おっと、そうは行かないよ」

突如彼の背後にアルベリヒが現れ、彼の背中にショートスピアを突き立てた。

『Jack Rise!』

「ぐ、おっ…?!」

その瞬間、ジエネシスの身体から力が抜け、地面に崩れ落ちた。

「ふん、だから言つたらう。君は何の力もないガキなんだとね」

『Jacking Break!』

そしてアルベリヒは、ジエネシスが持つ暗黒剣スキル《ヘイル・ストライク》を発動し、ジエネシスを吹き飛ばした。

「ぐわあああああっ?!」

ジエネシスは今まで感じたこともないような衝撃を受けて吹き飛ばされた。

「フハハハハッ!! どうだい? 自分自身の技を受ける感覚は?

君のデータは頂いた。もう君は必要ない。この世界は僕が終わらせる。君はもうお役御免なんだよ。

役立たずのガキはさっさと眠りたまえ」

アルベリヒは侮蔑の視線でジエネシスを見下ろしながら言うと、サクラに合図を出す。

サクラはドライバーのレバーを一度引き、そして再び展開する。

『Uncontrolling Dystopia』

すると、赤と黒の触手のようなエネルギーがサクラの右足に収束していく。

「亡き者となりたまえ、《暗黒の剣士》」

そしてサクラは、それを勢いよくジエネシスに突き出す……

その時、一筋の白い疾風がジェネシスとサクラの前を通り過ぎた。

サクラはその風に巻き込まれてジェネシスの元を離れる。

ジェネシスがその方向を見ると、そこには白い着物姿の女性がサクラを抱えて座っていた。

女性がサクラの額に手を当てた瞬間、サクラは糸が抜けたように両目を閉じて気を失った。

「お、お前は……！」

ジェネシスはその女性を見て目を見開いた。

白い着物姿の女性はサクラを横抱きにしながらかたやかな仕草で立ち上がると、ジェネシスの方に微笑みかける。

「遅くなっちゃったわね。怪我は無かった？」

そう言っつて、シキは問いかけた。

六十六話 戦いの終わり、傷跡

ジェネシスの危機を救った白い着物の女性、シキはサクラを抱えたままアルベリヒの方を睨む。

「君は……何者だ」

アルベリヒはかなり警戒した様子でシキに尋ねる。

だがシキはなにも答えない。

「誰かは知らないが……ふん、丁度いい。実験サンプルは多いほどいいからねえ。君も僕の道具になってもらおうか！」

アルベリヒはニヤリと笑いながらショートスピアを携えてシキに向かつて駆け出す。

シキはサクラをジェネシスに預けると、左腰の日本刀を引き抜いた。

アルベリヒのショートスピアとシキの日本刀が衝突し、火花を散らす。

そこからアルベリヒはシキに向かつて高速の刺突を連続で繰り出す。シキはそれらを全て先読みして回避していく。

「チィ、ならば……」

『Jack Rise!』

アルベリヒはショートスピアのグリップエンドにあるレバーを引くと、ショートスピアの刃に赤黒いオーラが発生する。

先程奪い取ったジェネシスのスキルを使うつもりなのだ。

『Jacking Break!』

「これで、どうだっ！」

赤黒い斬撃がシキに向かつて飛んでいく。

するとシキの両眼が青白く輝き、彼女の日本刀の刃もパールブルーの光が宿ってソードスキルが発動した。

シキはその刀を両手で左腰あたりにゆっくりと構える。

そして一瞬の動作で右上方向に振り上げ、赤黒い斬撃ごとアルベリヒの右腕を斬り落とした。

「な、に……この僕が……こんなやつに……?!」

アルベリヒは斬り落とされた自身の右腕を見て目を見開いた。

それに対してシキは青白い瞳でアルベリヒの方を見つめたまま言葉を発した。

「当然の結果よ。貴方はズルをして強くなったと思っただけ……他人の断りもなく、大事なものを搾取し続けて上に立とうとしてる『泥棒の王』よ」

「ど、泥棒の王、だと……キサマ、僕に……この僕に向かって!!」

こうなったらなり振り構うものか!! 覚悟しろ小娘!! お前だって僕の前じゃカス同然だつて事を刻み込んでやる!!」

アルベリヒは憎悪に満ちた表情でシキに対して言ったのち、残った左手を振るとメニュー欄を開く。

この世界ではメニューを開く時は通常右手で開く。しかし、今アルベリヒは左手でメニューを開いた事に、ジェネシスは疑問符を浮かべた。

「システムコマンド!! これでお前も……終わりだつ!!」

するとシキの周囲に紫のドーム状の結界が出現し、彼女を捕らえた。

黒と赤の放電現象を伴い、時折シキの真っ白な着物を焼いていく。

「シキ!!」

ジェネシスが慌てて大剣を持って救援に向かうが、その前に放電現象によるダメージを受けて弾かれる。

「大丈夫よ、心配しないで」

だがシキはダメージを受けているにも関わらず普段と変わらない柔らかな笑みでジェネシスに言った。

「アルベリヒ、貴方は一つの重大なミスを冒したわ……貴方はこんな結界じゃなく、私を仕留める技を放つべきだった。

結界というのは境界に過ぎない……ならば」

するとシキは地面にしゃがみ込み、刀を逆手に構えて結界の真ん中にあたる部分に切っ先を当てる。

「……私に斬れないものはない」

そして一思いに刀を突き立てた。

その瞬間、アルベリヒが張った結界が一瞬のうちに霧散した。

「なん…だと…?!」

アルベリヒはそれを見て驚愕のあまり膝をついた。

対してシキはゆっくりと立ち上がり、刀を右手に持ち替える。

「終わりよ、アルベリヒ。私はこの世界の裁定者。本来、出て来てはいけないもので、一個人に味方をしていいものではないのだけれど…

貴方が相手ならば話は別。この世界で懸命に生き続ける彼らに、原則を使って邪魔をするのは許されないわ。まして人道を外れた実験の道具として利用するなんて言語道断。これ以上、貴方の好きにはさせない」

刀を真っ直ぐにアルベリヒに向けながら、シキはキツパリとそう告げた。

「……………そうか、そう言うことか…やつと分かったよ。僕がこの世界に來た時から、上手くいかない事が多かったんだ。実験の邪魔はされるし、結果が出る前に検体共が逃げ出すし……………全部…全部……………!!」

お前だったのか!!僕の邪魔をしていたのはあ!!」

アルベリヒは怒りに身を震わせ、シキを怨嗟のこもった視線で睨みながら叫ぶ。

「お前は……………誰だ? GM権限を持っているみたいだが茅場じゃあない……………まさか、神代先輩か?!」

「私は貴方の知り合いではない。でも、百歩譲って知り合いだったとしても、貴方の所業をみすみす見逃していたりはしないでしょうね」

シキは首を横に振りながらそう答えた。

「いずれにせよ、貴方の行いはこのゲームの裁定者として見過ごす訳には行かない。これ以上貴方が好き勝手すると言うなら……………」

シキはキツ、とアルベリヒを睨みつけ、

「……………彼らのバックに私が付くことになるわ。そしてこれが最後の忠告よ。この私がいる限り、彼らに手出しはさせません。それをよく覚えておきなさい」

覇気のある口調でそう警告した。

アルベリヒはしばし黙っていたが、やがて「ククク…」と笑い出す。

シキの言葉の真意が分からず、ジェネシスは疑問符を浮かべた。

「アルベリヒの実験の危険性はずつと認識していたの。だからずつと監視していたのだけれど……まさかこんな手を使ってくるのは予想できなかった。これは完全に私の失態だわ」

シキは申し訳なさそうに、地面に横たわるサクラの頬を撫でながら言った。

「そういや、あんた言ってたよな……アルベリヒが全部の元凶だ、と……まさか」

ジェネシスはそう呟きながら何かに気がつく。ジェネシスが至った結論を、シキはうなずいて肯定する。

「ええ、その通りよ。アルベリヒはジョーカー達と組んでこの事件を起こしたの。目的はあの場所に人の悪意の感情を集め、この子に……サクラに植え付ける事だった」

「くそつたれが……一体何が目的でそんな事」

ジェネシスはもう一人の愛娘であるサクラに非道な行いをしたアルベリヒに憤慨しながらそう呟く。

「目的は分からないわ。彼が一体何を指してこんな事をしているのか、私にも理解ができない。」

いずれにしても、今のこの子は悪意に汚染されてかなり危険な状態よ。このまま悪意のデータに触れ続ければ、いずれサクラは崩壊するわ」

「な、何とかならねえのか?!」

シキはサクラの腰に巻き付く黒いドライバーに触れて細かく分析する。

そして一息付くと、首を横に振った。

「……残念だけれどこのドライバーを何とかしない限り、現時点ではサクラを救う方法は無いわ。」

けれど、このドライバーは外すのは愚か破壊も不可能なように設定されている。一種の破壊不能オブジェクトとして機能しているわね」

ジェネシスはシキの言葉を受けて愕然とした。今や大事な家族の一人であるサクラに命の危機が迫っているのに、それを救う手立てが

無いと言うのだ。

「サクラは救えねえ、つてことか……………」

「悔しいけれど、現段階では無理ね。全く、厄介なものを作り上げてくれたものだわ……………」

でも出来ることならある」

そこでシキは一呼吸おき、ジェネシスの方を見据えて告げた。

「サクラを戦いには連れ出さない事。可能ならば、貴方達の過ごす宿に留めておくのがいいわ。さつきも言った通り、この子にはこのドライバーとそこに装填されている特殊なキーから悪意のデータが流れるようになってる。今は私が何とか止めているけれど、少しの反動でまた悪意がサクラを襲い掛かるわ。そうなれば、彼女の暴走を止める事は不可能になる…」

「その、少しの反動つてのは？」

「簡単よ。人の負の感情。サクラに限らず、MHCPは普段から人の感情を色んなところから受信している。もちろん、負の感情もね。今のサクラがそれを感じた瞬間、また暴走が始まるわ。」

だから戦いには連れ出さないで欲しいの。戦場では人の恐怖や怨念と言った負の感情が出やすいでしょう？」

シキの説明に合点が行ったジェネシスは「なるほど」と頷く。

「それともう一つ。このドライバーにはある場所にデータを送信する機能が付けられているわ。送信先は恐らくアルベリヒ。」

つまり、貴方達の動向などは今後、このドライバーを通じてあの男に筒抜けの状態になっているの。サクラを圏外に出せば、確実にアルベリヒが奪取にかかるわ。でももし圏内ならば、幾ら彼が無理をしようとも大丈夫なようになってるから」

「そう言うことか……………そういや、アルベリヒは俺やサクラの戦闘スキルをコピーしたり左手でメニュー欄を開いたりしてたよな？あれは何でだ？」

ジェネシスはふとその事を思い出し、シキに問いかける。

「それは……………あの男がGM権限を持っているからよ」

その答えを受けてジェネシスは目を見開いた。

「なっ…GM権限?!何だっってそんなものをあいつが…」

「恐らく、彼は別のゲームのGMアカウントを持っていたのでしょうね。それを、こちらに来るときにコンバートしたのだと思う」

その説明を受けたジェネシスは「チツ」と舌打ちし、サクラの横に膝をついて彼女をじつと見つめた。

「GM権限使ってくるたあ…随分姑息な真似してくれんじやねえか……」

「私でも、GM権限には対抗する事が出来ないわ。あれを排除するには、同じGMアカウント、若しくは一時的にGM権限にアクセスできるコンソールを探す必要がある」

シキはそう言っって目の前のコンソールをタップする。

「俺達も手伝わしてくれ。これはあんただけの問題じゃあねえだろう」

シキはジェネシスの提案を受けて優しく微笑むと、

「お気持ちは嬉しいわ。でも、大丈夫。これは私が何とかしなければいけない問題だから。」

それよりも、貴方達にはやる事があるでしょう?ならばそちらを優先するべきだわ。彼が再び介入してくる前に、何としてもゲームクリアを目指して」

彼女の言葉にジェネシスはしばし黙っていたが、やがて頷くとサクラを抱きかかえて立ち上がる。

「そんじやあ、そっちは任せる。くれぐれも、気をつけてくれ」

「ええ、そちらも。途中でアルベリヒが襲いかかってくる可能性が高いから、気をつけてね。」

武運を祈っているわ」

そうやりとりをした後、ジェネシスはコンソールルームを後にし、ホロウエリアの管理区に向かってから七十六層アークソフィアへと帰還していった。

ジエネシスが宿に戻ると、既に全員が戻って来ていた。

人質にとられていたリーファ・サチ・サツキ・ハツキそしてエギルも無事に帰って来ていた。

中々戻ってこないでティアやキリト達からかなりの剣幕で詰め寄られた。

「久弥っ……！心配、したんだからあつ……!!」

ティアはかなり不安だったのか、ジエネシスに抱きつくなり涙を流した。

「良かった、お前も無事だったんだな」

キリトも安心したような笑みでジエネシスに駆け寄った。

「……悪い、心配かけたな」

ジエネシスは背中に乗せているサクラを一旦部屋に戻して寝かしつけ、再び食堂に戻る。

だが何故か、クラインとシリカ、レイの姿が無かった。

ジエネシスがその事を問いかけると、どうやら3人は今回の戦いで大きな傷を負い、部屋に戻るなり出てこなくなってしまうのだと言う。

それを聞いてジエネシスは納得した。シリカはその年で背負うには重すぎる罪過を背負わされ、クラインは最も大切な仲間達を失ったのだ。

「レイは、どうしたんだ？」

ジエネシスがティアに問いかけると、彼女は俯いて暫く答えにくそうにしていたが、やがて涙ながらに何があったのかを話していった。

ジャックにレイを拉致された事、レイを救うためにティアが戦った事と、その戦いの全貌を語った。

全てを聞き終えたジエネシスはゆっくりとティアを抱き寄せた。

「……よく頑張ったな」

ただ一言、優しく笑みを浮かべながらティアの頭を撫でる。

ティアはジェネシスに抱きつくくと、再び大声を上げて泣いた。

「わたしのせいだ……わたしのせいでレイがあんな目に……！わたしっ……母親として失格だ……っ……！」

「そんな事はねえ。あるわけがねえ。お前だったから助けられたんだ。お前以上の母親がいるかよバアカ」

するとアスナも立ち上がってティアに駆け寄る。

「そうだよ!!ティアちゃんは何も悪くない!ティアちゃん以外に、レイちゃんの母親なんていないよ!!だから、そんなに自分を責めないで!!」

そしてティアの背中をゆっくりとさする。

「レイにまでそんな事をしたのか……あいつらー!」

キリトは悔しげな顔でテーブルを殴りつけた。彼もまた、娘を持つ親であるので、もしそれがユイだったらと思うととても許せるものは無かった。

ジェネシスはティアの頭を撫でながら視線を皆の方に向ける。

「そういや、他のオレンジ共はどうなったんだ?」

その問いに、ツクヨが答えた。

「奴らは今、アークソフィアの仮監獄に幽閉されておる。仮ではあるが作りはしっかりしていてな。脱走してまた暴れ出す事は、少なくとも無いと言っつていいぞ」

彼女の説明を聞き、ジェネシスは「そうか」と頷く。

「あのガキ共は?」

『今は上の部屋で休ませています。ここに来るまでに、オルトリアさんが沢山お菓子を与えて下さったお陰か、安心したように眠っていますよ』

優しく微笑みながら答えるジャンヌと、得意げな顔で親指を立てるオルトリア、それを見てやれやれと肩を竦めるイシユタル。

「そっちは大丈夫だったのか?」

次に途中で分かれたキリト達に問いかける。

「ああ、こっちはジェイソンと戦ったよ。いや、マジであの時はダメだと思った」

キリトは激闘を思い出し、遠くを見つめながら振り返る。

「いや全く、あたし達5人がかかってもボコボコにされたからね。ヴォルフとストレアがパワー負けした時は本当絶望したわ」

「あはは……面目ない」

リズベットも頷きながら同意し、ジェイソンに一撃で沈められたヴォルフが苦笑しながら言った。

「でも、私達が無事なのはキリト君のお陰だよ。あの時のキリト君、すごくカッコ良かったよ」

「そーそー！キリトもゾーンに入ったんだよね〜！」

アスナがキリトの方を見つめながら言い、ストレアがそう補足した。

ジェネシスはゾーンという単語を聞き、「マジか」と呟きながらキリトの方を見ると、キリトは小恥ずかしそうに頬をかきながら「たまたまだよ」と答える。

「テメエらも無事だったんだな」

今度は人質にとられていたリーファ達の方を見て言った。

「あー、それなんだけど……」

「実は僕ら、変なところにいたんですよね」

リーファがバツの悪そうな顔をし、サツキが言葉を続ける。

「俺たちはどうやら、”J”の奴らが占拠した九十五層迷宮区じゃない、七十六層迷宮区の隠し部屋にいたみてえなんだ」

ジェネシスがエギルの言葉に疑問符を浮かべ、その詳細を尋ねる。

聞けば、どうやら彼らは恐ろしい体験をさせられていたようだった。頭の中に負の感情を延々と流し込まれるという地獄のような時間をずっと過ごしていたようなのだ。

「そんな事が……！」

アスナがそれを聞いて愕然とした表情を浮かべる。

「でも、その途中で助けてくれた人がいるんです。何だか、凄く綺麗な女の人でした……真っ白な着物を着ていて、仕草がすごく優雅で……それで、私にこんな物を渡してくれたんです」

するとリーファがアイテム欄からUSBメモリののような物を取り

出して言った。

「何だこれ？」

「その人曰く、『証拠』、だそうです」

ジエネシスはそれを手に取ってじっくりと眺めると、「まさか……」と呟く。

「ジエネシス、どうかしたのか？」

キリトがジエネシスの様子を見て疑問符を浮かべると、ジエネシスはゆっくり息を吐いて皆の方を見る。

「そうだな、ここでお前らに聞きたい欲しい話がある……」

今回の、いや……七十六層に来てから様々な異変があった。アイテムがロストしたり、スキルがバグったり。

おまけに『J』みたいなふざけた連中が、迷宮区タワーを占拠なんて真似をしやがった。

実はこれら全て、一人の黒幕が引き起こした事態だ」

ジエネシスの言葉を聞き、皆は息を呑んだ。

「そんな……これまでの事全部、一人の人間がしでかした事だっというの?!

アスナの言葉にジエネシスは黙って頷く。

「その黒幕の名前は——アルベリヒだ」

それを聞いた皆は絶句した。

ジエネシスは更に言葉を続ける。これまでの彼の所業を、シキから聞いた情報を元に一つずつ全て話した。

アルベリヒがGM権限を使ってある実験をしていた事、その実験のために今回の事件を引き起こした事、それによつて……サクラが甚大な被害を受けてしまった事。

話を聞き終えた一同は一斉に憤慨した。

「何よそれ……ふざけんじやないわよ!! 人様にこれだけ迷惑かけて、何が実験よ!!!」

「ほんと許せない!! ゲームの中で済ませていい話じゃないですよね!!!」

リズベットとリーファが激怒しながらその思いを吐露した。

「まさか、ジョーカーが爆弾なんて物を持つてたのも……？」

「ああ。アルベリヒがmodを入れたんだ。それだけじゃねえ、奴はGM権限で迷宮区タワーに奴らを誘導もした。」

「奴こそ、アルベリヒこそが全ての元凶だ」

ジェネシスはきつぱりとそう断言した。

「……ねえ、久弥。それよりもサクラは大丈夫なの？」

ティアは不安げな顔でジェネシスに問いかける。

「残念だが……現時点ではあいつの問題を根本的に解決する手段はねえそうだ。」

今は何とか抑えられているみたいだが……もし次に悪意の感情を受信したら最後、あいつは死ぬまで暴走し続けることになる」

「そんな……！」

「つーわけだ。今後、サクラはボス戦に参加する事は出来ねえ。回復手段が無くなったのは痛いけど、そこは何とかするしかねえ」

「なあジェネシス。一ついいか？」

するとキリトが手を上げてジェネシスに問いかける。

「アルベリヒはどうするんだ？GM権限を持つていっているのはかなり脅威だ。奴がいつまた、襲つてくるか分からないんだろ？」

「それについてだが……実は強力な助っ人が現れてな」

ジェネシスの答えを聞き、皆は首を傾げる。

「リーファ、おめえ白い和服を着た女に助けられた、つったよな？そいつだ」

「えっ、ジェネシスさんその人と知り合いなんですか？」

「ああ。だが済まねえが……今ここで詳しくは言えねえ。そいつからの頼みでな。まだ話して欲しくはねえんだとよ」

「そうか……ならこれ以上、詮索はしないでおくよ」

キリトはそう言って締め括った。

「ああ。けどまあだからと言って安心は出来ねえ。今後、奴は確実に俺たちに接触して来るはずだ。圏外に出る時は一層注意してくれ」

ジェネシスはそう言って皆に注意を促した。

事件から2週間が経過した。

アインクラッドは残り五層と言うところだが、攻略はかなり難航していた。

アルベリヒの脅威もあるが、一番大きいのは最前線メンバーの士気の低さだ。

「J」との戦いには無事勝利したものの、彼らが残した爪痕は想像以上に大きかったのだ。

「シリカ、大丈夫か？」

「…は、はい……心配かけちゃって、すみません……」

ジェネシスが心配そうに尋ね、シリカは力なく答える。

あれから、シリカは戦いを拒否しているようだった。最前線攻略に出ることを拒否するようになり、いつもアークソフィアから出なくなっていた。

無理もない。彼女はあれから、夜もろくに眠れていないのだ。眠るたびに、彼女が殺してしまった人物が夢に出て来るそうなのだ。それが原因で、普段明るかったシリカは見る影もなく、暗い雰囲気を纏うようになってしまった。

ジェネシス達は気にするな、と言うがそれは気休めにもならない。

「……」

そんな彼女を、シノンは黙って見つめる。

場所は変わって、ここはアークソフィアの墓地エリア。

ここに、四つの武器が等間隔に突き立てられ、その前に一人の男が跪いていた。

「済まねえ……済まなかったな……おめえらよお……!!」

クラインだ。その前にあるのは、爆発に巻き込まれて亡くなった四

人がそれぞれ愛用していた武器を墓標に見立てて祀っている。

「ちくしょう……！こんなだったら……俺が……俺が変わってやりたかったよう……!!」

「そいつぁ間違ってるぜ」

慟哭するクラインの後ろからミツザネが言った。

「その言葉は、死んだお前さんの仲間に対する冒瀆でしかねえ。

お前さんがやるべきは、死んだ仲間達の分まで生きてやる事だ」

「……っ！ぐっ……お、おおおおおう……！」

ミツザネの言葉を受けたクラインは堪えきれなくなったのか、大粒の涙を溢しながら号泣した。

—————

一方こちらは、かなり楽しげな雰囲気では賑わっていた。

食堂に木霊するのは、楽しげな子供達の声。彼らはジルに囚われていたところを保護した者達だ。

彼らは皆、オルトリアの作ったお菓子を我先にと頬張る。

『はい皆さん……そんなにがつついちゃダメですよ？お菓子はまだまだありますから!!』

ジャンヌが優しい口調で言いながら食堂から皿いっぱいのお菓子を運ぶ。

「わあ……クッキーがこんなにいっぱい！」

「ありがとう、ジャンヌおねえちゃん！」

『お、おね……じゃなくて、お礼ならオルトリアさんに言って下さいね』

ジャンヌは『おねえちゃん』という言葉聞いた瞬間顔が綻んだ。「にしても、すごい大盤振る舞いね。あんたの事だから、『自分の分が

無くなる』とか言いそうだと思っただけだ」

イシユタルが遠くからその様子を眺めながらキッチンのオルトリアに言った。

「流石にあんな小さい子供に対してがつついたりしません。それに、私のお菓子を美味しいと言ってくれるのなら、作り甲斐があるというものです」

オルトリアは新たに出来た鯛焼きを皿に盛り付けながら少し楽しそうに笑顔で答えた。

「あつそ。ま、あなたにしてはよくやってるじゃない」

イシユタルも軽く笑みを零しながら答えた。

――

「シリカ」

ふと、街をふらつくシリカを呼び止める者がいた。

「し、シノン…さん…？」

呼び止めたのはシノン。

「唐突だけど、少しいいかしら」

「は、……はい。構いませんけど……」

「そ。ありがとう、それじゃあそのカフェにでも行きましようか」
そう言つてシノンはシリカを連れて、近くのカフェに行く。

店は定番の喫茶店、という感じでかなり落ち着いた雰囲気をしており、床も壁も全て木製の板で出来ていた。

「ここ、結構来るのよね。雰囲気もいいし、コーヒーも美味しいから」
シノンは「ふふ」と微笑みながらシリカの向かいに座る。

シノンはコーヒーを、シリカはアップルティーを注文した。

飲み物が届き、二人は頼んだ飲み物をゆっくりと味わう。

不意に、シノンが切り出した。

「シリカ、あんたあの事をずっと気にしてるの？」

シリカはそれを聞くと、俯いたまま黙って頷く。

「……そう。あなた、すごくいい子だもの。例え相手がどんな人間であつても、人を死なせた事に対して罪悪感を感じているのね。

ねえ、私の話、少し聞いてもらえるかしら」

そう言つてシノンは一呼吸置く。深呼吸して、ゆっくりと切り出す。

「私もね……人を殺したことがあるの」

それを聞いた瞬間、シリカは目を見開き、シノンの方を見た。シノンは窓の外に視線を移し、遠くを眺めながら続ける。

「もう何年まえかしらね……10年近いかしら。今のあんたより小さい時に、とある事件に巻き込まれてね。

そこで……この手で人を死なせてしまったの。

それ以来、ずっとそれを抱えて生きてきたわ。学校で事件の事でいじめられもした。何とか乗り越えたくて、色んな治療も受けた。

そしてこの世界に巻き込まれてね……私、それが運命だつて感じたの。ここで最後まで抗つて、何も出来ないなら死んでもいいとさえ思った。

でもね……そうじゃない、つてジエネシスが気付かせてくれた」

シリカは黙つてシノンの話に聞き入っていた。

シノンはくすりと笑つてシリカの方に視線を移す。

「私はこの罪を、乗り越えたかつた。ずっとこの事件の事で弱くなつている自分が嫌で、どうにかして強くなろうつて思つた。

でも、違う。私の罪は乗り越えるものじゃなく、向き合い続けるものなんじゃないか、つて思つたの。弱くたつていい、それよりも自棄になつて無茶をして、何も償えないまま死ぬことの方が余計に罪深い事なのかな、つて。

それに、あいつはこう言つたの……『私は命を奪つたけれど同時に誰かの命を救つた』つてね。

あの事件の時、私は奪つた命のことしか考えてなかつた。多分、それは間違いじゃないけれど、でも私が助けた命もある、つて考えると

……凄く、心が軽くなった気がしたの」

「シノンさん……」

「シリカ、あなたが背負った罪は、多分一生消えない。

でもね、一人で抱え込まなくてもいいの。私も、いいえ、みんなも一緒に向き合ってくれるわ……そうでしょ？ ジェネシス」

「ああ、たりめーだコノヤロー」

シリカは目を見開き、自分の背後の席を見る。

そこには、いつの間にかジェネシスが座っていた。

「じ、ジェネシスさん……！」

ジェネシスはミルクティの入ったマグカップを一旦机に置き、一息ついてシリカの方を見る。

「シリカ、俺は言ったはずだぜ？ あの時のためえの行動が俺たちを救った、つてよ。

確かに、ためえはまあ、間違った事をしたのかもしれない……けど、一人で抱え込むのはやめろ。そいつは、シリカ一人で背負い切れるもんじゃねえ」

ジェネシスはシリカの頭を優しく撫で、

「一緒に、向き合って行こうぜ」

と温和な口調で言った。

「ジェネシス、さん……！」

シリカは涙目になりながら肩を震わせた。

—————

やや日も落ち、暗くなってきた街の広場に一人佇む女性がいた。

銀髪に白いマントを羽織った女性剣士、ティアだ。

ティアはやや俯き加減で自分の刀を見つめていた。刀身が夕陽に照らされてオレンジの光を発し、その美しく整った波紋が映し出されていた。

『お前の本性は人斬りだ』

彼女の脳内に宿敵から告げられた言葉が反響する。

自分はこれまで、この世界に囚われた人々を救うために“人を活かす剣”、即ち活人剣というものを信じて戦ってきた。

それはかつて、現実で師事していた剣士から教わったものだ。

だが今回の戦いでそれを全て否定された気分だった。自分は本当に人斬りなのか、だとしたら自分は何を信じて剣を振ればいいのか、それを見失いかけていた。

「どうしたんだよ、こんなところで」

すると後ろから声が響き、振り返るとそこには愛する彼、ジエネシスと愛娘のレイが立っていた。

「ママ……凄く、辛そうな顔をしています」

レイがティアの表情を見て心配そうに告げる。

「……ねえ、久弥……」

「ん？」

ティアは俯いたままジエネシスに問いかける。

「私って……本当に人斬りだったりするのかな？」

「そんな訳ありません！ママは優しくてかっこよくて、私にとって世界一のママです！」

ティアの言葉をレイが全力で否定した。

「……そういう事だ。おめえがそんなロクでもないもんな訳ねえだろうが零。誰よりもてめえといた俺が言うんだから間違いないねえ。」

それにな、もしおめえがそんなもんに落ちそうになったら、俺が全力で止めてやるから安心しろ」

「久弥……っ」

ティアは思わずその場から駆け出し、ジエネシスに抱きついた。

それに便乗する形でレイもティアに抱きつく。

ジエネシスはティアとレイの頭をわしやわしやと撫で回した。

その夜。

アルベリヒに暴走させられてからずっとスリープ状態だったサクラは一人目覚め、ベッドから起き上がる。

何が起きたのか一瞬分ならず、メモリーに記された出来事を順に辿っていき……そして思い出してしまった。自分が一体何をされ、何をしてしまったのかを。

そして自身の腰に巻き付けられたドライバーがその事実をより残酷に突きつけてくる。

サクラは苦笑すると立ち上がり、部屋を後にし、階段を降りてそのまま宿から出る。

街は真つ暗で街頭しか点灯しておらず、深夜であるため人もいない。非常に静かな空間が広がる。

そんな中、サクラは歩き続けた。ただ真つ直ぐに、行き先は圏外。「こんな時間にどこ行くんだ？」

すると突然、自身の真横からジエネシスの声が響き、見ると彼が呆れた顔でこちらに歩いて来ていた。

「お父さん……」

「気がついたみてえだな。まあ、幸いと言うべきか不運と言うべきか……その顔、全部覚えてるみてえだしな」

ジエネシスの言葉を受けてサクラは苦笑いを浮かべて俯く。

「ええ……全部、覚えています。なら、お父さんなら分かるでしょう？ 私がこのまま皆さんと一緒にいれば、また確実に迷惑をかけてしまう……最悪、皆さんを傷つけてしまうかもしれないですよ？」

私は、もう皆さんと一緒にいる訳には……」

サクラの主張を聞いたジエネシスは深くため息をつき、そしてサクラの方に歩み寄ると軽く「コツン」と彼女の頭を拳で叩く。

「だからってこのまま勝手に出て行く娘を放って置けと？ そんな父親

なんざいねえよバカ。

迷惑？傷つける？上等だコノヤロー。寧ろこっちはそれ以上にテメエから沢山恩を受けてんだ。迷惑くらいかけろよ。俺たちは仲間……家族だろうが」

サクラはジェネシスの言葉を聞いて押し黙る。すると両手で腰に告げられたドライバーを掴む。

「……仲間で、いいんですか？家族として過ごしても、いいんですか？私、いつか化け物になっちゃいますよ？それこそ、皆さんの命を脅かすような、恐ろしい存在に……それでもこんな私を……仲間だと……家族だと言ってくれるんですか？」

サクラは不安に押しつぶされそうな震えた声で、小さくそう問いかけた。

「ハッ、そんなに不安なら直接聞いてみるか？」

ジェネシスがそう言うと、サクラの背後から多数の足音が響き、こちらにやって来た。

振り返ると、そこにはティアアやキリト、アスナやレイ、ユイ、ストリアを始めとした仲間が駆け寄って来ていた。

「サクラ、気がついたんだね！」

「本当によかったあ〜！」

「全く、もう目覚めないんじゃないかって心配したわよ？」

「よくぞ、戻って来てくれたな」

「皆さん……！」

安心したような笑みを浮かべながらストリア、リーファ、イシユタル、エギルが口々に言った。

「しかし、こんな時間に一人で出歩いてどうしたと言うのだ？まさか寝ぼけている訳ではあるまい？」

「こいつ、いつまた暴走して俺たちに迷惑かけるか不安だから出て行くこうとしてたんだってよ」

ツクヨの問いかけにジェネシスがサクラの背中をパシツと叩きながら答えた。

「は、はあ〜?!あんだ、そんな事考えてたわけ?!」

「いや、でも確かに不安にもなるよね……」

「これも全部アルベリヒってやつのはずよ」

「マジかよアルベリヒ絶対に許さねえ!!」

リズベットが目を見開いて叫び、サチが困ったような笑みでうなずく。シノンがそう事実を告げると、ヴォルフが憤慨した。

「そんな！出て行くだなんてそんなのダメです!!」

「そうですよ!!僕らは仲間なんですから!!」

「勝手に出て行くなんて、そんな悲しい事しないでください!!」

「くうく……!!そんな苦しみを一人で背負おうなんざ水臭えじゃねえかサクラちゃんよお!!」

「そっかよ!!私達仲間がいるんだから、もっと頼ってくれていいんだよ!!」

『そうです。迷惑くらい、いいえそんな事で迷惑だなんて思うはずがありません。だって私達、仲間なんですから!!』

「そんな事よりこれ、桜餅です。貴女に食べて欲しくて作りました」

ジェネシスの言葉を聞いたシリカ、サツキ、ハツキが全力で引き留め、クラインがサクラの境遇に涙し、フィリアとジャンヌがもつと頼れと告げる。

そしてこんな時でもお菓子を勧めるオルトリア。

「サクラ、貴女はもう一人ではありませんよ?」

「そうです!私達姉妹や、パパとママ、それにみんながいます!」

「だから、勝手に出て行くなんて思わないでよね?離れたって、アタシ達は付いて行っちゃうんだから!」

レイとユイ、ストレアのMHPがサクラに歩み寄って言った。

「サクラちゃん、ごめんね。本当なら、私達が守ってあげなくちゃいけなかったのに……私たちが不甲斐ないせいで、貴女がこんなに苦しむことになってしまった……」

「だから、俺たちが必ず助けるよ。君は必ず、俺たちが救って見せる」

アスナが涙ながらに謝り、そしてキリトがきつぱりと告げた。

「そういう事だ。もう観念してこっちに帰ってこい。せつかく出来た孫娘がいなくなっちゃ俺もやってられんからな」

「だから、ね？これからも一緒にいよう、サクラ」

ミツザネがうんうんと頷き、ティアがサクラに手を差し伸べた。

「母さん……っ！ありがとうございます、ございます……！」

サクラは感極まって涙目になりながらその手を取った。

それを見て皆は安心したように笑みを溢す。

「いよおーし！そんじゃ今から『サクラちゃん回復記念兼俺たちの再出発記念』でパーティやろうぜ!!」

「おいおい、もう深夜だぞ分かってんのか？」

「ん、でもいいんじゃないかしら？丁度いい機会だし」

「あ、なら私おつまみとか作るよ！」

「おっ、それは期待大だな！」

クラインの提案にエギルが困ったように言い、イシユタルが賛同した。

アスナが料理を提供することにキリトが嬉しそうに答える。

他の仲間達もどうやらパーティをやる気らしく、楽しげに会話をしながら戻って行く。

サクラとジエネシスはそんな彼らの後ろ姿をしばし見つめていた。

「……帰るぞ。俺たちの居場所によ、サクラ」

ジエネシスもそう言って歩き出す。

「お父さん」

するとサクラが彼を呼び止め、ジエネシスは振り返って彼女の方を見る。

「その……もし、私が悪い人になったら……許せませんか？」

サクラの問いにジエネシスは「ん、」と考える素振りを見せる。

「……そうだな。もしそうだったら俺は、誰よりも叱るな。お前にはそうなって欲しくねえし。けど、これだけは覚えとけ」

そしてジエネシスはサクラを右肩にそつと抱き寄せる。

「何があっても、俺たちはお前の味方だ。サクラ」

サクラはそれを聞いてほっと安心したような笑みを浮かべる。

「良かった……皆さんになら、お父さんになら、いいです」

「ん？何がだよ」

「い、いいえ！何でもありません！それより、もう戻りましょうか！」
そう言つてサクラは駆け出した。

「全くあいつは……………」

呆れたような、それでいてやや嬉しそうに笑みを浮かべながらジエ
ネシスもそれに続く。

—————

それを遠く離れた建物の屋根の上から見つめる、白い着物姿の女
性、シキ。

「ふふ、良かった。あちらはもう大丈夫そうね。

いえ、彼らなら或いは……………違う答えを導き出してくれるかもしれ
ないわね」

そう言つて優しげな笑みで眩くと、くると反転して歩き出し、そ
して青白い光に包まれてその場から消え去った。

「期待しているわ、ジエネシス」

六十七話 託された想い・息抜き

01 託された想い

史上最悪の犯罪者ギルド、〃J〃との激闘から一ヶ月。アインクラッド攻略はそれまでのペースを取り戻しつつあった。

「しっかし……やっぱしっくり来ないな……」

そうボヤいたのはキリト。

というのも、彼は普段から左右の手で剣を扱う二刀流スタイルを取っているのだが、先の〃J〃の幹部の一人ジェysonとの激闘の果てに、左手の愛剣ダークリパルサーが折れてしまい、使用不可能な状態にあったのだ。

「でも、キリトなら片手剣だけでも十分強い気がするんだけど」

そう口にするのは、愛用のハルバードを肩に担ぐヴォルフ。

「いやでもなあ、ボス戦じゃ流石に片手剣だけじゃ攻撃力が足りないしな。それに、ずっと二刀流で戦ってたからそのクセがついちやってさ」

キリトは持て余した左手を苦笑しながら振るう。

「ああ、ボス戦でキリトの全力が出せないのは確かに辛いね。ただでさえ、戦力が下がっちゃってる訳だし……」

キリトの言葉にヴォルフは頷く。

先の〃J〃との激闘により攻略組は大きな犠牲を出した為メンバーが減り、さらにサクラという回復役の戦線離脱によって現在の攻略組はかなりの戦力低下を起こしているのだ。

そんな状況でキリトの全力である二刀流も使用できなくなればかなりの痛手だ。

「あのねえ、だからこうしてわざわざ素材集めに来てるんでしようが」とすると彼らの背後から呆れた口調でリズベットが言った。

「はは、悪いな付き合ってくれて」

「まあいいのよ、あんたの剣作ってあげなきゃだしね。」

にしても、あんたこれで2本目よね私の剣折ったの」

「あはは、申し訳ない」

ジト目で見ながらいうリズベットに対してキリトは苦笑しながら謝った。

「しっかし、本当険しいなこの道は……」

ヴォルフはため息を吐きながら今彼らが進んでいる道を振り返って呟く。

今、キリト達3人が進んでいるのは、大きな岩や石ころが道に転がっている凸凹の激しく、傾斜がかなり大きい山道だ。

足場も悪く、3人は転倒しないように慎重に一歩ずつ足を進める。

「はあ……これ下手な登山よりしんどいわね……」

「ああ、こんなに険しい道だったなんて……転ばないように気をつけていこうぜ」

リズベットが息も絶え絶えの様子で進み、キリトも同意して皆に注意を促す。

彼らはこの険しい道をからこれ二時間近くは進んでいる。しかもその道中には強力なモンスターが出没し、彼らの幾多を何度も阻んできた。

「けど、この先にキリトの剣の素材が手に入るんだろう？」

「ええ、そうよ。情報によれば、この先のボスモンスターを倒せばかなりの素材が入るって噂だからね。」

何かなんでも手に入れなきゃいけないわ」

リズベットは決意のこもった表情で頷く。

「今回もよろしく頼むな、リズ」

「まっかせなさいー」

キリトの言葉に頼もしい笑みを浮かべながら頷く。

すると、ヴォルフが前方を見て「そろそろだ」と告げる。

キリトとリズベット、ヴォルフはいよいよフィールドボス戦ということまで気を引き締めて足を進める。

すると、凸凹の激しかった山道が終わり、頂上あたりに到着した。

そこは石ころなどは一つもない真っ平な円形のフィールドが広がっていた。直径約200メートルくらいあり、周りは違った岩で囲まれている。

直後、彼らの目の前に全長6メートル程の巨人が出現した。全身は堅固な岩で構成され、右手には巨大な大剣を握っている。

名は、『The Boulder Golem』

「こいつか……」

キリトは背中から黒い直剣『エリュシンデータ』を引き抜く。

リズベットもメイスを、ヴォルフはハルバードを取り出して戦闘態勢に入る。

「中々防御力が高そうだな、一筋縄では倒れなさそうだ」

「そうね。だから、よろしく頼むわよ!」

リズベットが力一杯ヴォルフの背中を叩く。

「いった?! な、何で俺?」

「なーに言ってるの。力でぶつ壊すと言ったらあんたの専売特許でしょうが!」

「な、成る程……そう言うことなら任せてくれ」

ヴォルフは戸惑いつつも、リズベットからの激励を受けて気を引き締める。

「よし、それじゃ戦闘開始だ!」

キリトの掛け声で3人は一斉に飛び出した。

巨人から大剣が3人に向けて勢いよく振り下ろされる。

「バアアアアニング!!」

ヴォルフが威勢のいい掛け声とともに巨人の大剣をハルバードで弾く。

その隙に、リズベットとキリトが左右から巨人の懐に飛び込んで攻撃する。

「どっせええええい!!」

ヴォルフは自慢のパワーを存分に活かして巨人と互角に打ち合いを続ける。

大剣と斧がぶつかる度に凄まじい火花が散り、衝撃波が発生する。

「はあああああっ!!」

キリトは右手の黒剣にソードスキルを纏わせて巨人の横腹を抉るように斬る。

そして続け様に何も持っていない左手を突き出した。

「……あ」

キリトはその瞬間ハツとした顔になった。もう長い時間二刀流で戦っていた癖が抜けきれずについ左手が出てしまったのだ。

「はあ……」

キリトは思わず苦笑いでため息をつく。

「まったく……早くあんたの剣、作ってあげないとね」

一部始終を見ていたリズベツトは呆れた顔で呟く。

そこからの戦闘は順調に運んでいた。ヴォルフが巨人の剣を見事に弾いていき、彼がタンク役を務めることでボスを引きつけ、その間にキリトとリズベツトが側面から攻撃すると言うスタンスを貫いていた。

「これなら行けるかな……?」

リズベツトは少し距離をとって巨人を見る。

だがその時、巨人が突如リズベツトの方に轉身し大剣を振り上げたのだ。

「えっ……」

あまりに突然のことでリズベツトは反応が遅れ、回避が出来ずにその場に立ち尽くしてしまう。

「リズ!!」

キリトが慌てて駆け出すが、とても間に合う距離ではない。

そしてボスの大剣が勢いよくリズベツトに振り下ろされる……

「リズ!!」

だがその時、ヴォルフがリズベツトのもとに駆け寄り、彼女を抱き寄せて、その背中でボスの刃を受けた。

「ヴォルフ……う・あんた、どうして……?!」

ヴォルフはHPがイエローゾーンに陥っていたが、リズベツトに優しく微笑んで言った。

「君が傷つくのは、見ていられなかったからさ」

「あ、あんた……」

ヴォルフはリズベットを救出した後、両手斧を頭上に構えると一気に振り下ろす。斧の刃部分に紫と黒のオーラが発生し、そのオーラを纏ったままボスを頭上から叩き潰す。

両手斧最上級スキル《グラビティ・インパクト》

絶大な破壊力を持つ一撃を受けたボスは、身体をガラス片に変えて消滅した。

そしてそこに、赤い光沢を放つ美しい鉱石がドロップした。

「出て来たわね……『ブラッディ・クリスタルインゴット』……」

リズベットはその石を手にとって確認した。

かなりのレア度を誇る鉱石のようだ。

「やったな！これで剣が作れる！」

「ああ、よろしく頼むぜリズ！」

—————

街に戻った3人は、早速リズベット武具店に向かい、今回手に入れた鉱石を窯に入れて準備を整える。

その間、リズベットは赤く煌々と燃える釜をじっと見つめていた。今、彼女の心は正に今日の前にある釜の炎のように燃えている。その炎の正体は、言うなればヴォルフに対する恋心だ。

以前、リズベットはキリトに剣を作ったとき、彼に対する想いを乗せて剣を作り上げた。

けれど今はもう、以前のような感情はない。否、好きではあるがそれは恋ではない。

キリトにはもうアスナという相手がいて、この想いが届くことはない。と押し込めていた。

しかしそれでも、残香のようなものは残っている。

だから、この剣にリズベットは全てを懸けるつもりでいた。ここで最高峰の剣を作り上げ、この恋に決着をつける。

即ち、ヴォルフに対して想いを告げるといふことだ。

リズベツトは集中力を極限まで高め、いよいよ熱せられて赤く光る石を金床に取り出す。

キリトとヴォルフが側からそれを見守る。

「よし……行くわー」

リズベツトは専用のハンマーを両手で構え、ゆつくりと、丁寧に、力強く叩いていく。『キンーキンー』と、甲高い金属の音が部屋中に響き渡る。

一回打つ度に、リズベツトは残されたキリトに対する想いを全て載せるつもりで叩いた。

「これで決めるんだ……ヴォルフに気持ちを伝えて、この想いに決着をつける……だから、残されたキリトの思いを、この剣に全部乗せるんだ！」

そんな彼女の思いに応えるように、鉾石が一際眩く輝き始める。時々『バチリ！』と赤い放電現象を伴いながら、長方形の型だった鉾石が十字の形に伸びていく。

出来上がった剣は、キリトの使用するエリユシデータ刃をダークリパルサー度ほぼ同サイズの片手剣。

刀身は真紅で金色のラインが入り、十字の真ん中部に水色の水晶のような飾りが付いている。

見た目から明らかに高性能な剣である事は明らかだった。

リズベツトは恐る恐る、完成した剣のパラメータを鑑定スキルで確認する。

そしてそれを見た瞬間、愕然とした表情になった。

「うそ……何これ……」

……最っ高の剣ができあがったわ!!」

出てきた数値は、これまでリズベツトが見てきた剣の中で最高クラスのものだった。正しく、リズベツト最高傑作の剣であった。

名前は、『リメイNZズハート』。

キリトも早速出来上がった剣を手に取り、素振りをしてみる。

「凄い……すごく手に馴染む……最高の剣だ!」

キリトも感激した様子でリズベツトに感想を告げる。

「や、やったじゃないかリズ!!」

ヴォルフが嬉しそうにリズベツトの肩を持って飛び上がった。

「ええ……ええー!やったわよ、あたし!!」

リズベツトもヴォルフの手を取って歓喜した。

しばし店内は歓喜ムードに包まれ、キリトもそれを優しく微笑みながら見守る。

するとリズベツトが何かを思い出したようにヴォルフに向かい、

「あ、あのねヴォルフ……悪いんだけど、ちよつと二人にしてくれないかしら?」

ヴォルフは突然の事で疑問符を浮かべるが、「わかった」と頷いて歩き出す。

店を出る際に、リズベツトはヴォルフに河畔エリアで待つように伝える。

「どうしたんだ、リズ?」

突然の事で訳がわからない様子のキリトに、リズベツトは深呼吸して向き合う。

「あのね、キリト……聞いて欲しいことがあるの」

リズベツトは真剣な顔でキリトの顔を見据える。

「あたしはね……あんたの事が好きだった」

その瞬間、キリトは体が一瞬固まった。

「好き……って、それって、え?リズ?」

「もう……ほんと鈍感なんだからあんたは!!」

リズベツトは苦笑しながら言った。

「まさか、本当に?そういう、意味なのか?」

「ええ、そういう意味よ。それで、あたしの気持ちには答えられないって事もわかってる。今こうしてあんたに告白したのは、あたしにとつて一種のけじめみたいなもの。そうでない……アイツとちゃんと向き合えないから」

キリトは漸く全てを察したのか、「あ……」と申し訳なさそうに固まる。

「ごめんな、リズ」

「いえ、謝らないで！むしろこちらこそごめんね、これはあたしのわがままだから。あたしの気持ちは、もうヴォルフの方に向いてるから。でも、最後にこれだけ伝えたかったの。あんたの事が好きだったあたしがいたって事、知っておいて欲しかったから。」

だから、その剣に全てを込めたの。あたしの想い、全部詰め込んだの。それが、『リメイન્ズハート』よ。だから、忘れないでね」

キリトはそれを聞いて『リメイન્ズハート』を握りしめる。

「ああ、もちろんだ。この剣を使う度に、思い出すよ。リズが俺を好きでいてくれた事」

「ええ、ありがとう。大事に使ってよね？」

キリトは黙ってうなづく。

『リメイન્ズハート』、「残った心」。リズベツトに残されていたキリトへの恋心を宿した剣を、キリトはしっかりと握りしめた。

—————

湖畔エリアにある橋で、ヴォルフは一人待っていた。

そこへリズベツトが走ってやって来た。

「ごめんね！待たせちゃって」

「いや、大丈夫だよ。それより、どうしたんだ？急に呼び出して……」

リズベツトは息を整え、ゆっくりと息を吐くと真剣な面持ちでヴォルフの顔を見る。

「あのね、あんたに伝えたい事があるの。」

この層に来てあたしの店を手伝ってくれてから、あんたの事すごくいいやつなんだって思ってた。

あたしはね、あんたの事が好き」

「……え？」

「だからあ!!こういう事!!」

リズベツトは頬を赤く染めながらヴォルフに抱きつく。

「そ、そんな……本当に？」

「当たり前でしょう？冗談でこんな事出来るわけないわよ」

リズベツトは恥ずかしそうに、しかしヴォルフに巻きつく腕の力をぐっと強める。

そんな彼女の肩に、ヴォルフは優しく腕を回す。

「こ、こんな僕で良ければ……よろしくお願いします!!」

02 『息抜き』

七十五層の騒動があつてからもう一ヶ月近くがすぎ、アークソフィアの街は多くのプレイヤーが住みついて人口も増えていた。

今日も1日、気持ちの良い日差しと気温の中、街は多くの人々が行き交い、賑やかな雰囲気醸し出していた。

そんな街に、1人の女性がやって来る。純白の着物を身につけた貴婦人、シキだ。普段、彼女は別の場所からプレイヤーたちを見守っていたのだが、今日は何となく街に降りたった。

自分の周りを歩き回るプレイヤー達を見回し、シキは口元に優しいげな笑みを浮かべる。

シキはゆつくりと足を進め、街をぶらぶらと散策する。

ふと、彼女はとある店の前で足を止めた。

『リズベット武具店』。そう言えば武器のメンテナンスを長らくしていなかった事を思い出し、ついでに自身が信頼するプレイヤーであるジエネシスの仲間が経営する店という事もあって、彼女はゆつくりと木製のドアを開ける。

「いらっしやいませ〜！リズベット武具店へようこそ！」

中から威勢の良い少女の声が響く。

出迎えたのは、ピンクの髪に赤いエプロンを身につけた少女と、その隣に立つ老竹色のシャツを着た長身の男性。

「メンテナンスですか？武器の買取ですか？それともオーダーメイドでしょうか？」

男性の問いに、シキは「メンテナンスを…」と応える。

「ありがとうございます！早速ですが、武器の方を預からせて頂いてもよろしいでしょうか？」

少女がシキに対してそう促し、左腰に帯刀した刀を取り出して少女に渡す。

「おおお、これは……！」

鑑定スキルを開いて刀を調べた少女が感心したように口にした。

『『九字兼定』、これはかなりの名刀ですね〜！』

「失礼ですが、どちらでこの刀を？」

「う〜ん……ずっと前に、フィールドのボスを倒したら偶々ドロップしたの」

男性がそう尋ねると、シキは顎に手を当ててそう答えた。

「なるほど、そういう事ですか……けど、かなり傷んでいますね〜…ヴォルフ、メタルクラスタインゴットを溶かしといてくれる？」

ヴォルフと呼ばれた男性は頷いて店の奥に行く。

そして戻って来ると、小さな木箱を手渡した。

「あと、これがあるよね？目釘抜き」

「そーそー！流石、分かっているじゃない！」

「刀は普通の剣と違って柄が別パーツ扱いになってるしね。」

目釘抜がいるってわかったんだよ。それじゃ、準備して来るから」

そう言つてヴォルフは再び店奥へと戻っていく。

「随分と仲がいいのね」

シキが何気なしにそう言うと、リズベットは「え?」とこちらを向き、恥ずかしそうに頬を赤く染めて

「い、いや〜…ごめんなさい、お恥ずかしい所をお見せしちゃつて…」と照れながら言つた。

「いいえ、仲がいいのはとても良いことだわ。こんな状況ですもの、人と人が支えてあつていくのは、大事なことよ」

そしてシキは店内を彷徨いて壁に飾られた商品である武器を見回し、時折手に取つてその感触を確かめる。

「貴女、すごく良い腕をしているのね。ここにある武器、どれも素晴らしい出来だと思つたわ」

「そ、そうでしょうか?」

「ええ。何より…貴女の真剣な気持ちが入められている感じがする。さつきだって、私の刀をすごく丁寧に扱ってくれていたもの」

リズベットはシキからそう言われて目を丸くしていたが、やがて嬉しそうに微笑むと

「あ、ありがとうございます!」

と言つて頭を下げた。

するとヴォルフが出て来て、準備ができた事を知らせる。

「では、少しの間お待ちくださいね!」

リズベットは刀の柄を取り外して刀身を取り出して丁寧に運びながら店の奥に向かう。

〜数分後〜

「お待たせしました!」

修繕が終わり、リズベットは刀の柄を取り付け、目釘を嵌めて元通りにしてからシキに返した。

刀の刀身は、修繕する前よりも一層美しい銀色の光を放ち、波紋がくつきりと映し出されていた。

手に取つてみると、刀が更に良く手に馴染み、かなり扱いやすく

次にやって来たのは、路地裏にある和菓子店。

この世界では滅多にない和菓子に興味を持ったシキはゆつくりとドアを開ける。

「いらっしやいませー」

中からのんびりとした少女の声が響く。中は焦げ茶色の木製の板で構成され、明かりはやや薄暗くミステリアスな雰囲気だった。

そしてカウンターにはガラスケースに飾られた沢山の和菓子があり、その奥に店員とみられる薄い金髪の大人しそうな少女がいた。カーソルの名前は、『オルトリア』とあった。

「へえ、どれも美味しそうな見た目ね」

「ええ、全て私の自信作ですのよ」

シキの言葉に、オルトリアは変わらない表情で、しかしそれでいて自信ありげな声色で答えた。

「ふふ。では、店長さんのおすすめの品を教えてくださいさる？」

「はい。当店でしたらこちらの鯛焼きや最中なんか美味しいですよ」

オルトリアの示した先にある二つの和菓子。

鯛焼きは薄暗い部屋であるにも関わらず茶色い生地が際立っており、まるで自ら光を発しているようだった。

最中は餡子がたつぷりと詰められて、手のひらサイズであるはずなのにかなりボリュームがあるように見えた。

「なるほど……ではこの二つを頂こうかしら」

「ありがとうございます」

シキはおすすめの商品、更にドリンクとして緑茶を購入し店を後にした。

広場に出て、日陰のテーブル付きの椅子に座ると早速買ったお菓子をオブジェクト化する。

「へえ…やっぱり美味しそうね」

シキは感心したように呟くと、鯛焼きを早速頬張る。

かじった瞬間に、茶色く焼けた生地が一瞬『パリッ』と音を立て、その直後に甘い味わいが広がった。

しかしシキはここで疑問符を浮かべる。鯛焼きと言えば餡子が定番だが、この味は餡子ではない。

切り口を覗いてみると、中は餡子の紫ではなく、薄い黄色のクリームのようなものが詰められていた。

「もしかしてこれって……鳴門金時？」

鳴門金時とは日本の四国・徳島県辺りで生産される薩摩芋の事であるとある地方ではそれを餡子状にすりつぶして鯛焼きに詰めるものがあるらしい。

「へえ、中々マニアックだけれど、粋なことをするのね」

シキは「ふふっ」と楽しげに笑うと、鯛焼きを再び頬張った。

最中の方も、パリツとした生地にたっぷり挟まれた餡子がとても良く合っており、非常に美味だった。

「これは中々……癖になる味ね」

シキは満足げな笑みで呟くと、白い湯呑み茶碗に注がれた緑茶をゆっくりと啜る。

和菓子を堪能したシキは再び街を歩き回る。次はどこに行こうか。道中、喫茶店で優雅に読書をしているクールな雰囲気少女や、右肩に水色の子竜を乗せた少女、仲睦まじい様子の黒と白の兄妹や小さな子供たちを連れて街を散策する白い聖女と女神風の女性とすれ違う。

そのままシキは街にある草が生い茂った広場に出た。

そこには、黒いロングコートを着た少年が白と赤の装備に身を包んだ栗色の長髪の少女に見守られながら昼寝をしていた。今日は外で過ごすには快適な気温と日照設定だからそうしているのだろう。シキはそんな彼らを微笑ましい視線で見つめたのちに再び歩き出す。

「……ん？」

すると栗色の髪の少女、アスナがたった今日の前を通り過ぎようとしているシキに気づく。

「ね、ねえねえキリトくん……あの人……」

「ん……どの人……？」

キリトは寝ぼけた様子で起き上がって、目を擦りながら問いかける。

「ほ、ほらあそこ！今そこを歩いてる白い女の人！」

アスナが指差した先をキリトは瞬きをしながらみる。

「あの女の人が……どうしたんだ……？」

「この間見たお化けにすつごく似てると思うんだけど……」

「……気のせいだろ……こんな真つ昼間にお化けが出歩いてるわけないじゃないか……」

キリトはそう言うのと再び地面に寝そべった。

「そ、そうだよね！こんな明るいにお化けがいるわけ無いよね!!」

アスナは冷や汗をかきながらうんうんと頷く。

当のシキはアスナからそんな視線を受けていることに気づかずにとんどん歩いて行く。

人々の活気溢れる街を眺めながら、シキはゆつくりと足を進める。

「凄いわね……デスゲームであるこの状況でも、人々は希望を捨てずに毎日を生きている。」

人と言うのは、不思議な生き物だわ」

シキは遠くを見つめながらそう呟く。

するとその視線の先に、自身とも関わりのあるプレイヤーであるジエネシスが、白無垢の女性ティアと笑顔で楽しそうに話しながら宿に入って行くのが見えた。

「ふふ。貴方たちなら、本当にこの世界をクリアできるかもしれないわね。楽しみにしているわ」

そう微笑みながら言うと、シキはくるりと反転して別方向へ歩いて行った。

六十八話 家族で遊ぼう・ブチ切れたオルトリア

01 『家族で遊ぼう』

ある日、ジェネシスが宿の自室で寛いでいると……

「パパー、いますか〜?」

レイがドアをノックして来た。

ジェネシスがドアを開けて中に促すと、どうやらそこにいたのはレイだけではなく、ティアとサクラもいた。

「お、どうしたんだ?」

「久弥、これから時間ある?」

ジェネシスは特に予定もなかったので頷く。

「じゃあ、これからみんなで散歩に行かない?」

「散歩?」

「ええ。お父さん、最近ずっと忙しかったじゃないですか。たまには、リフレッシユしませんか?」

「成る程な……いいぜ、今日くらいはゆっくりするか」

「わーい!それじゃあみんなで行きましょう!」

ジェネシスが了承するとレイが嬉しそうに飛び跳ね、4人は街に歩き出した。

因みにサクラには以前アルベリヒによって取り付けられてしまったドライバーがあるのと、レイが一緒という事で圏外には出ない事にした。

街は暖かな日差しが照らし、気温もちょうど良く気持ちのいい風が吹き抜ける。

しかし、こんな天気であるというのに街には誰もおらず、閑散とした空気が流れていた。

「こんな日だったのに、誰もいねえな」

「きつと、みんな攻略に出てるんだよ」

ジェネシスの疑問にティアがそう答える。

ジェネシスが「俺は行かなくて良かったのかね」と気まずそうに呟くと、ティアは自身の左手で彼の右手を優しく包むように握る。

「今日くらいは……………ね?」

ティアは彼の耳元まで顔を寄せると、うつすらと笑みを浮かべながらそう囁く。

するとサクラが反対側のジェネシスの手を握り、同じように耳元まで顔を近づける。

「そうですね?今日はみんなで、ゆつくりしましょう……………?」

左右から美女に挟まれて少し戸惑い気味のジェネシス。

すると少し前を楽しそうに歩いていたレイが振り返る。

「あーっ!!2人ともずるいですよ!!私だつてパパと手を繋ぎたいのに!!」

レイは頬を膨らませてジェネシスに駆け寄って飛び乗る。

「パパ、抱っこしてください!!」

「おいおい、いきなり飛びつくなんて」

ジェネシスは困ったように笑いながらレイを抱きかかえた。

するとそれを見たサクラが負けじとジェネシスの背中に乗りかか
る。

「じゃあ私はおんぶでお願いします♪」

「ちよつ、サクラお前なあ……………」

それを見たティアが「むうく…」と頬を膨らませてジェネシスによ
じ登り、両肩に座り込んだ。

「なら私は肩車ね!」

「オイイイ!!お前ら一回降りろ!重すぎて歩けねえから!!」

ジェネシスは3人の女子に乗り掛られる重みで満足にバランス
が取れずにフラフラと覚束ない足取りで進む。

「ヤベツ……………もう、無理……………」

とうとうバランスを崩し、ジェネシスはそばにあった噴水に倒れ込
んだ。

「きゃああつ?!」

「わあああつ?!」

「ひゃあああつ!!」

それに伴ってジェネシスにしがみ付いていたレイとサクラ、ティア

も噴水に飛び込んでしまう。

「ぶはっ！もう、全身びしょ濡れだよ」

ティアが水中から顔を上げて、眉を八の字に曲げて言った。

ティアの白い髪はびしょ濡れになって先端から水滴が滴り落ち、身につけている服はびったりと身体に張り付き彼女のボディラインをより強調していた。

それはサクラとレイも同じで、2人が着ている真っ白なワンピースがびしょ濡れになって2人の身体にびったりと張り付いてしまっていた。

「いや、いくらなんでもてめえら3人抱えてられるわけねえだろうが……」

ジェネシスはそれに対してジト目で3人の方を見ながら答える。

「えいっ！」

するとレイがジェネシスに向かって水鉄砲を飛ばした。

そしてそれに乗っかってサクラとティアもジェネシスに向かって水を飛ばしていく。

「ちよ、おい？お前ら何してんの？」

「どうせびしょ濡れだし、ここで水遊びをしましょう！私たち3人と、パパで勝負です！」

「お父さん、覚悟おろし！」

ティア、レイ、サクラの3人から一斉に水飛沫を浴びせられるジェネシス。

「危なっ?!」

だがジェネシスは素早く反応すると巧みにその水飛沫を回避していく。

「む、中々やるね久弥。でも……これならどうか！」

するとティアは水の中に深く腕を沈め、そして勢いよく前に突き出しました。

「スペシャルソードスキル！緋吹雪ならぬ『水吹雪』ろし！」

「ぎゃーっ!!」

一際大きな水鉄砲が飛び、ジェネシスの身体に命中した。

「じゃあ私も行きますよ〜! 『ライジングインパクト』!!」

レイも同じように大量の水飛沫をジェネシスに飛ばした。

「あははっ! やったね、クリティカルヒット!!」

「わーい! やりましたよママ!」

ティアとレイは嬉しそうにハイタッチを交わす。

「いや、スペシャルソードスキルで……ただの水鉄砲じゃねえか」

「あら? あの『暗黒の剣士』ジェネシス様が避けられなかったんだから、『ただの』水鉄砲じゃないんじゃない?」

悪戯な笑みでティアに言われたジェネシスは「ほお……」と口角を吊り上げてニヤリと笑う。

「てめえら……俺を本気にさせたな?」

そしてジェネシスは両腕で思い切り水面を叩きつけ、大きな水飛沫を立てて3人に向けて飛ばした。

「「きゃあーっ!!」」

水飛沫は容赦なく3人に命中した。

「や、やったなあ〜!」

「お返しですっ!!」

そこから3人とジェネシスの水の掛け合いが始まった。

噴水の水溜めでバシャバシャと水飛沫がいくつも発生し、楽しげな声が静かな広場に響き渡った。

〜数十分後〜

「だあ〜……くそ、ダメだ。降参、降参だ」

ジェネシスは両方を激しく上下させながら両手を上げた。

彼は頭からずぶ濡れになっており、至るところから水滴がポタポタと落ちている。

「わーい! 私達の勝利です♪」

「まあ、3対1という人数差もあるかもですけど……」

レイが嬉しそうに飛び跳ねるのに対し、サクラはやや苦笑いで呟く。

「それじゃ、そろそろ休憩しようか」

「ああ。流石に少し疲れたわ……」

4人は噴水から上がると近くのベンチに並んで腰掛ける。

ジェネシスの左隣にティアが、その反対側にサクラが腰掛け、彼の膝の上にレイがちよこんと座り込む。

「はあく……ちよいとはしやぎすぎたかな」

「うん。みんな子供みたいにはしやいでたよね」

ジェネシスとティアは背もたれにゆったりと上半身を預けながら言葉を交わす。思えば、2人してあのようにはしやいだのは初めての経験である。

「凄く楽しかったですね！」

「はい、とても幸せな時間でした」

レイとサクラは家族との新しい思い出を記憶に刻み、楽しそうな笑みで2人に言った。

「これから……みんなでもっと楽しい思い出を作りたいですね！」

「うん、もちろん！もっともっと、いろんなことをしようね!!」

期待に満ちた表情でいうサクラに対し、ティアは満面の笑みで頷いた。

—————

02 『ブチ切れたえつちゃん』

その日、えつちゃんことオルトリアは非常に不機嫌な様子で食堂の一席に座り込み、ズズズとコーヒーを啜っている。

普段から感情の起伏が少なく、またその感情も表に出にくいタイプの彼女だが、この日はひと目見ただけで誰が見ても不機嫌であると理解できるほど負のオーラが彼女を中心に充満していた。

「……………で、何があったんだアレ」

ジェネシスが少し離れた席からそれを眺め、向かいに座るティアに気まずそうに問いかける。

「実は……えっちゃんが今日楽しみにしてたレアモノのチョコケーキ、誰かが食べちゃってみたいで」

「ベタだな。お菓子好きなあいつからしたら辛いだろうが……けどお菓子一つ食われたくらいであそこまで怒るような奴か？」

「ところがそれだけじゃないみたいよ」

すると今度は同じ席に座るイシユタルが口を挟んだ。

「何かね、あの子ここ最近不連続きだったみたいで」

イシユタルが言うには、・お店の品物が揃って資材不足で品薄になる、・戦闘中に彼女が使用するフォトンソードの充電が切れて死にかける、・最近客足が良くなく、売り上げが少なくなる、・昨日女子メンバー全員でウノをやったら惨敗する、と言うことがあったそうだ。

「それは確かに、フラストレーションも溜まるわな……」

ジエネシスが同情の目線をオルトリアに向ける。

オルトリアは未だにテーブルの一点をじっと見つめながらコーヒーを啜っている。

「…どうにか、えっちゃんの気分を晴らしてあげられないかな……」

ティアが心配そうな目で彼女の方を見る。

「まあ、あの子の気晴らしと言ったら甘いものとかしかないでしょうね」

イシユタルはやれやれと首を振りながら紅茶を口にした。

このままこれを放っておけば今後、彼らの攻略や日常に何かしらトラブルが起きる可能性もあるし、何より『人の悪意』に敏感な状態のサクラがいるため、この状態のオルトリアを放っておくわけにはいかなかった。

とりあえずジエネシスは何かいいものはないか買い出しに行くことになり、その間にティアとイシユタルがオルトリアの面倒を見ることになった。

「す、澄香？これ私達で作ったショートケーキなんだけど、食べる？」

イシユタルが試しに2人で（ほぼティアが）作ったショートケーキをおずおずと差し出す。

「…………お気持ちは嬉しいですが今はショートケーキの気分じゃ無い

のすいません」

と、全く取り合う様子もなかった。

「そ、そうだよね〜！今はショートケーキの気分じゃ無かったよねえ〜！ごめんねえっちゃん!!それじゃあこっちのどら焼きなんかはどう?」

するとティアが慌ててショートケーキを下げてどら焼きを差し出す。

「ごめんなさい、どら焼きの気分でもありません。少し、1人にももらえますか」

だがオルトリアは尚もそっぽを向いて取り合わなかった。

「あ、ああ!そうよね!!今はお菓子とかの気分じゃ無いわよね!!な、何か欲しいものとか、クエストに付き合っただけとか、そんなのは無いかしら?」

「ありません。私には構わないでください」

オルトリアはしつこく構ってくる2人に嫌気が差してきたのか徐々にその声にドスが効いてくる。

それを2人は感じ取ったのか冷や汗をかいて慌て気味になり、どうにかして彼女を宥めようと努める。

「ご、ごめんごめん!でも、えっちゃんが凄く疲れてそうだから何かしてあげたいなあ〜って思っただけ!」

どうしたらいい?あつ!肩揉みとかしてあげよっか?」

「な、何でもいいのよ?ほら、頭を撫でて欲しい〜とか他に色々やってあげるわよ?」

ティアが後ろからオルトリアの肩を持ち、イシユタルがオルトリアの頭をわしゃわしゃと撫で回す。

だが、イシユタルが撫でる手がオルトリアの頭に出ているアホ毛に触れてしまった。

その瞬間、オルトリアの両眼がカツ、と開かれ、直後に爆発のような突風が発生してイシユタルとティアを吹き飛ばした。

「あー、痛た……な、何なのよ今の爆発……」

イシユタルが腰をさすりながらゆっくりと立ち上がる。

「わ、私にも分かんないよ……」

ティアも頭を押さえながら立ち上がる。

2人は何が起きたのか確かめるためにオルトリアの元へと向かう。

「え、えっちゃん？」

ゆっくりとオルトリアを呼びかける。

「何か用ですか、雫」

帰ってきたオルトリアの声は普段ののほほんとした雰囲気と比べると正反対の、低く猛獣が唸るような、ドスの効いた声だった。

ピシリ、と空間が固まる。

冷蔵庫に放り込まれた時のような悪寒が2人の背中を襲った。

ジロリと2人を睨むオルトリアの瞳からはハイライトが消え、特徴的だったアホ毛も引っ込んでいる。

「あわ、あわわ、あわわわ……え、えっちゃん?!」

「はわ、はわわ、はわわわ……え、えっちゃん?!」

2人は思わず抱き合って震え上がる。

人形のような端正な顔立ちからは鋼のような殺気や威圧感が発せられ、2人を無慈悲に抑圧した。

「り、凜ちゃんパスー。パス!!わ、私には無理無理っ!!」

「は、はあ?!ふざけんじゃ無いわよ!!私にも無理よこんなの!あ、あんたが何とかしなさいよっ!!」

2人はくるくると回りながら押し付け合う。

そんな2人に対して愛想が尽きたのか、オルトリアはため息をついてずいっと2人に詰め寄る。

「雫、凜」

「ひゃ、ひゃいつ?!申し訳ないありません、私が悪うございましたあゝ!」

イシユタルは咄嗟にティアの背後に隠れて涙目になって謝罪する。「2人ともどうしたのだ?私に何かおかしいところでもあるのか?」

首を傾げてオルトリアは相変わらずドスの効いた声で問いかける。

「い、いいえ何も!なんにもおかしいところはないです!!いつも通りのえっちゃんですう!!」

ね？凜ちゃん?!」

早口気味になってイシユタルに同意を促す。イシユタルもうんうんと首を激しく上下させて後退する。

「……ならば良い。私は腹が減った。雫、何か用意せよ」

「ひゃいっ！かしこまりましたあく!!」

ティアは早足でキッチンに向かって走っていく。

今のオルトリアを戻すはやはり、甘い和菓子が必要であろう。それも、半端なものではなく高級和菓子店にあるような一流の品だ。

ティアは逸る気持ちをどうにか鎮め、ゆっくりと深呼吸する。

豹変してしまったオルトリアのために、ティアは全身全霊をかけて作り始めた。メンバーの中でもトップクラスの料理スキルを保有する者としてのプライドと意地を持って、和菓子を作り上げた。

ティアが作った一品は、オルトリアの好物である大福餅。

餡子をたっぷり詰め、トロリとした生地が特徴の品だ。

これなら、行ける……!!

ティアは一種の確信と自信を持ってオルトリアに提供した。

「不味い。半日で墮落したな、雫」

「こぶっ?!」

冷ややかな声で告げるオルトリア。

ティアは思わずその場に崩れ落ちた。

「し、雫！泣いてる泣いてる！とにかく今は手を動かして！」

蹲ってしくしくと泣くティアをイシユタルは何とか宥める。

「う、うるしやい……私の、私の自信作を不味いつて……しかもより

によってえっちゃんに、えっちゃんに……………！」

そのままうわぁんと泣き出すティア。

「凜。貴女が偶に作る手を抜いたあの料理が良い。零に手本を見せてやれ」

するとオルトリアがイシユタルに対してそう告げた。

オルトリアのいう凜の料理とは、ハンバーグ・野菜・ピクルスなどをパンで挟んだ、あの手抜き料理。

「それって、まさか……………」

ティアもあの料理が分かったのか、目を見開いた。

—————

もつきゅもつきゅ、もつきゅもつきゅ

リズムの良い咀嚼音が響き渡る。

オルトリアは何も言わずに、あのジャンクフードの王様であるハンバーガーをスナック菓子のように頬張っていく。

「なんだ、アレ……………」

それを遠目に、キリトが困惑した表情で見つめる。

「何か、ご機嫌斜めだったオルトリアちゃんを宥めようと、イシユタルとティアがあれこれしたらあんな事になっちゃったんだって」

キリトの問いにアスナが答えた。

テーブル一杯にあったハンバーガーの山はあっという間に無くなり、オルトリアがお代わりを要求する。

するとティアが慌ててキッチンに戻り、再びハンバーガーを作り出す。

「……………そう言えば、オルトリアは最近不幸続きだったしな……………その不満が爆発してしまっただな、きつと」

同情した表情でキリトはオルトリアの対応に追われるティア達の方を見つめた。

「まあアレだ、〃触らぬ神に祟りなし〃。ああいうのは変に構わずに、時間に任せるべきだったって事だな」

ジエネシスもうんうんと頷きながらそうそう答えた。

その後、山盛りのハンバーガーを食べ切ったところでオルトリアも元に戻り、彼女の怒りもそれで鎮まったようだ。

そして、今後はオルトリアを絶対に怒らせないようにしようと皆は誓ったのだった。

六十九話 離婚騒動

ある日、ジェネシスとティアの2人は街で買い物をしてながら散歩していた。

道中、ジェネシスがふと雑貨屋の前で足を止め、並べられた商品の列を見つめる。

「何か買うの?」

「ん? まあポーシヨンとかな。いざって時ポーシヨンが無くなったらやべえだろ」

「あ、そっか。なら私もポーシヨン補充しておこうかな。えっと、今在庫は……」

と言ってティアはメニュー欄を開いて自分の手持ちを確認する。するとティアは「あれっ?」と呟き表情を曇らせる。

「どうした? そんなにポーシヨンが少なかったのか?」

ティアの様子を見て訝しんだ表情でジェネシスが問いかける。

「や、やだ……何これ、どういうこと……?」

ティアは焦った様子でメニュー欄を次々とスクロールしていく。しかしどうやら目当てのものは見つからなかったらしい。

「ひ、久弥あっ!!」

「お、おう?」

「ステータス画面を開いて、私の画面を見てくれる?」

言われた通り、ジェネシスはメニュー欄からティアのステータスを開こうと画面を開く。

しかし……

「……………んん?」

ジェネシスは目を丸くした。

ティアとのリンクが無いのだ。いつもならば『結婚』状態にあるティアとリンクが繋がっており、ここから彼女のステータスを見る事ができるのだが、今そのリンクが切れてしまっているのだ。

「じゃあ、今度はアイテム欄を見て?」

続いてアイテム欄。しかしやはり、こちらもティアとのリンクが切

れており、アイテム共有が出来なくなっていた。

「な、なんだこりゃ……なんでおめえとのリンクが切れてんだよ」

「やっぱり、久弥もなんだ……私も、久弥とリンクが切れてて、ステータスの確認もアイテムの共有も出来なくなってる……」

これが意味するところは、2人の結婚状態の解除だ。

結婚状態が解除される理由として挙げられるならば、もう一つしかない。

ティアは余程ショックだったのか、両目に涙を溜めながらジェネシスに問いかける。

「まさかとは思うけど……久弥、私と……」

「いやしてませんから!!間違っても離婚なんてしてねえから!!」

ジェネシスはティアの言わんとしていることを察し、慌てて否定する。

「で、でもっ……じゃあなんで結婚状態が解除されてるの?」

ティアがジェネシスの両肩を掴んで詰め寄る。

「そ、そりゃあ……なんでだ?」

ジェネシスにも理由が分かるはずもなく、ただ首を傾げるだけだった。

—————

どうやら、結婚状態に異常が起きているのはジェネシスたちだけではないかったようだ。

宿に戻ると、そこには憔悴し切った表情で座るアスナと、やや落ち込み気味のキリトが戻っていた。

話を聞くと、彼らも結婚状態が解除されていたらしく、2人のリンクが切れてしまっていたようだ。

ジェネシスとキリトが話し合った結果、原因は恐らく七十六層に来てから頻繁に起きているシステムエラーによるものである可能性が

高いという結論に至った。

というのも、SAOにおいて結婚の解除、即ち離婚をするにはパートナーの同意が必要であるのだが、ジエネスとティア・キリトとアスナの2組とも、同意による離婚などした覚えは無い。

同意無しで離婚をするには、申請する側の持ち物を全て廃棄する、若しくは死別によつてのみ離婚が成立するが、今回4人とも無くなったアイテムは一つもなかった為、一方的な離婚が成立した可能性も低い。

更に2人は、もう一度結婚申請を互いのパートナーに行つたのだが、どういう訳か申請が出来なくなつていた。

以上の理由から、今回の結婚解除はシステムエラーによるものであるという仮説が出たのだ。

ティアはショックのあまりテーブルに突つ伏してシクシクと泣き、オルトリアがその背中を優しく摩つた。

「あのさ、今あんた達は結婚状態じゃ無くなつてるのよね？」

それつてつまり……今久弥達はフリーつてこと？」

するとイシュタルが不意にそう問いかけた瞬間、ティアがガバツと勢いよく起き上がる。

「ちよ、ちよつと!!人間きの悪いこと言わないでよ!!全つ然フリーじゃ無いですから!!」

「でもさ、システム上はそうなつちやつてるんでしょ?残念ながら」

ティアは大声でイシュタルに叫んだが、イシュタルは淡々と返し、ティアも「そうだけど……」と小さく答える。

「でも例えば、他の人には結婚の申請とか出来るんでしょうか?」

「他の人に?成る程、それは試してなかったな……少しやってみるか」シリカの提案に、キリトは頷きながら同意する。

「だ、ダメダメダメっ!他の人に結婚なんて絶対ダメ!!」

それに対してアスナが必死に制止した。

キリトはなぜアスナがそこまで必死になるのか理解できず、単にシステムエラーであるかどうかの検証であることを説明するが、アスナは「それでもダメなの!」と一向に引かない。

そこでミツザネが、逆にティアやアスナが他の男性プレイヤーに申請してみてもどうかと提案する。

が……

「お待ちしてますー！」

「……ダメだ、危険すぎる」

クラインは何か危ない香りがするので却下。

「あ、僕ですか？いいですよ……っつて」

「……………」

「……すみません、やっぱり僕は遠慮しておきます」

サツキは何故かハツキが非常に怖い顔で睨んでくるので却下。

ミツザネはある意味最も信頼できるが、本人が「俺にはもう嫁がいるんだ！」と拒否した為却下。エギルも同様の理由で却下。

そしてヴォルフ。

「あ、俺？ええっと……」

ヴォルフは気まずそうにリズベツトの方に視線を移すと、彼女は不安げな顔で彼を見つめていた為、これを拒否。

「……じゃどうすんのよ？」

イシユタルが呆れた顔で問いかける。

「じゃあ、パートナーを入れ替えてやってみたら？」

するとサチが4人にそう提案する。

つまり、ジエネシスがアスナに、キリトがティアに結婚申請をしてみてもどうか、と言うのだ。

「確かに、それが一番揉め事が起きなさそうだし。いいんじゃない？」

イシユタルも同意し、皆も賛成したようで早速試すことになったのだが……

「……………」

「……………」

ジエネシスとキリトは互いに気まずそうに見つめ合う。

「お、お前やれよ」

「は、はあ?!何で俺が！お前が行けよ！」

キリトとジエネシスはお互いやり辛そうに押し付け合う。

「あのな、人妻に結婚申請とかそんなNTR行為の趣味はねえよ」
「俺にだってねえよ!!」

2人はどちらがやるかで揉め合い始める。

そうして揉めること約三分後、話し合いの結果2人が同時に交互の相手に申し込むという妥協案に至り、実行に移された。

「んじゃあ、行くぞ……」

「ああ……」

ジェネシスとキリトはメニューを操作し、それぞれアスナとティアに結婚申請を送信する。

すると、アスナにはジェネシスから、ティアにはキリトから結婚の申請が送られた。

「あ、来ちゃった……」

「じゃあ、やっぱりこれはシステムエラーで確定ね……」

ティアとアスナは気落ちした様子で項垂れた。

結婚状態はそれぞれのパートナーとの、一種の絆の証であった。それが解除されてしまったというのは、やはり中々ショックであったのだろう。

だがそんな折、レイからある事実が告げられる。

それは、七十九層にある《祝福の儀式》というクエストの存在。今、ジェネシスとティア、キリトとアスナの結婚状態の値はシステムエラーによって壊れてしまっている状態にある。

そこで、異性2人が受けられるこのクエストをクリアする事で、彼らの絆を示す値が書き換えられ、結婚状態が戻る可能性があるのだ。

そこで4人は早速、そのクエストを受注することに決めた。

—————

七十九層の町の中心部に、大きな教会が建っていた。

「なんか珍しいね、教会なんて」

ティアが目の前に建つ教会を物珍しそうに眺める。

「言われてみりゃ、確かに。西洋チックなクセに教会なんざ殆ど見たことなかったな」

ジェネシスも頷きながら答える。

レイの話によると、ここで例のクエストが受けられるそうなので、2人は早速中に入る。

「お、お邪魔しまーす……」

ティアはゆっくりと中に入る。

しかし中には誰もおらず、ただ規則正しい金属の音が響くのみだった。

「あれ、この音って……」

ティアが聞こえてくる音の方向へ歩いて行くと、講堂を抜けて奥の方へ進むと扉があり、そこを開くと小さな工房があり、そこで神父らしき男性が作業を行っていた。

『おや、お客様がいらつしやいましたか。申し訳ありません。普段は工房に籠っているので気づきませんでした』

どうやらこの男性はNPCのようだ。彼の話によると、普段から彼はここで金属の加工をし、生活費を稼いでいるそうだ。

作っているのは武器やアクセサリ、そして指輪だそうだ。

「指輪を作っているんですか?」

『ええ。もし入用でしたらお作りしますよ?』

「で、でしたら是非お願いします!」

『かしこまりました。では、どのような指輪をご所望でしょうか』

ティアがそう頼んだ瞬間、神父NPCの頭上に「?」マークが出現した。クエストマークだ。

「えっと……対の指輪なんですけど」

『なるほど、対の指輪ですか』

神父NPCは了承すると、普通の指輪と特別な指輪、どちらがいいか質問する。

特別な指輪とは、この層の西部に生息するモンスターを倒せば手に

入る素材を使う事で作成出来るそうだ。

「んじゃその素材、取ってくるんで」

『かしこまりました。では、道中お気をつけください』

ジェネシスが神父NPCにそう言うと、神父は丁寧に彼らを見送った。

教会から出た2人は早速七十九層西部の草原地帯に向かう。

すると、目的地に到着した瞬間彼らの前に体長約3メートルはある巨大なゴーレム型モンスターが出現した。HPバーは二本。

フィールドボスのようだが、今の彼らにとつて大した敵ではない。2人は落ち着いて武器を手にとって構えた。

「あんま大事なことなさそうだな。サクッと倒しちまおうぜ」

「うん。行こう、久弥！」

ゴーレムから振り下ろされた巨大な拳を、ジェネシスは大剣で容易く弾き飛ばし、その隙にティアが懐に飛び込んでその胴体をソードスキルで斬りつける。

「スイッチー！」

ティアの掛け声と共に今度はジェネシスがティアと入れ替わるように突っ込み、暗黒剣ソードスキル《ティープ・オブ・アビス》による超弩級の6連撃を浴びせる。

圧倒的な破壊力を持つ攻撃を受けたボスのHPは一気に削られ、既に1本目のバーはレッドゾーンまで減っている。

「次は私が行くよー！」

ティアは続けて赤く光る刀を携えてジェネシスと即座に入れ替わる。

そしてボスに接近するとそのまま凄まじい刀の斬撃を浴びせていく。抜刀術最上級スキル《緋吹雪》。アインクラッド史上最高峰の連撃数である39の斬撃がボスに襲いかかる。

立て続けに強力なソードスキルによる攻撃を受けたボスのHPはもう既に2本目のイエローゾーンに達していた。

「最後、お願い！」

「おうよー！」

威勢よくジエネシスは答えると、再び彼の太剣の刃に赤黒いオーラが発生し、そして瞬く間に肥大していく。

暗黒剣最上級スキル《ジエネシス・ディストラクション》
アインクラッド史上最大級の破壊力を誇る攻撃がボスに炸裂した。
禍々しい赤黒い斬撃がボスの胴体を切り裂いていく。

ジエネシスの攻撃を食らったボスはその身をガラス片に変えて消滅した。

その後、2人は指定されたアイテムを持って教会に戻る。

『これは驚いた…もう持つてこられたのですか?!』

神父は大変驚いた様子で2人を見た。

「一体どうしたらこんな早く用意できるのですか？」

ジエネシスとティアは一度顔を見合わせると、

「まあ……愛のなせる技、ですネ」

ティアは得意げな顔でそう答えた。

「それは素晴らしい。では、そんなお二人に急いで指輪を用意いたしますね」

そう言つて男は奥の工房に入つて行き、作業を始めた。

そして約5分後。普通ならば加工がこんな短時間で終わるはずはないのだが、ここはSAOなのでむしろ当然の時間であると言える。

『お待ちせしました、こちらが指輪になります』

神父は2人に出来上がった指輪を手渡した。

完成した指輪は装飾類などはほとんど無くシンプルなものであるが、薄い銀色でやや透き通っており、非常に美しい見た目をしていた。

「おお……」

「綺麗……」

2人はその美しい指輪に思わず見とれていた。

『やはりお二人も、例の儀式をお受けになるのですか？』

神父の言う『例の儀式』とは、2人が受けようとしている《祝福の儀式》のクエストのことで、2人が受け取った指輪をつけたまま「禊の湖」「思い出の地」「絆の神殿」の三つを巡ることを言うそうだ。

「なあるほど……まだ工程があつたみてえだな」

「でも、これで大きく前進できたよね。このまま頑張って進めて行くー！」

こうして、2人のクエストがスタートした。

—————

82層

ジェネシスとティアの2人は、ここ82層に次のクエスト「禊の湖」があることを知り、早速ここに足を運んだ。

「わあ、綺麗な湖!!」

ティアは目の前にある美しい湖の景色を見て舞い上がった様子で走り回る。

湖の前には立て札が置いてあり、そこには『禊の湖』と書かれていた。どうやらやはり、ここが彼らの目的地であることに間違いはないようだ。

2人は早速指輪をはめて見るが、何も起こらなかった。

「ん？何か書いてあんな」

他に条件があるのか、確認のため看板を見ると、下の方に何か書かれていた。

『清めのために衣服を脱いで湖に入らなければならない』

「……え？」

ティアはその看板を見て思わず目を丸くした。

「服を脱いでって……裸になれ、って事？」

「まあ……そうだろうな」

ジェネシスが頷くとティアは「ええ……」とげんなりした表情を浮かべた。

「……クエストを進めるには、やるしかねえのか」

「そう、だよね……んんっつよし！」

ティアは意を決してズンズンと湖の方へ足を進める。ジェネシス

もそれに続く。

「あの……向こう、向いてて?」

振り返って恥ずかしそうな顔で頼むと、ジエネシスはうなずいて回れ右をして視線を移す。2人は周りにプレイヤーがいないことを確認してメニュー欄を開いて装備を一つずつ解除していく。

「あうう……下着も外さなきゃならないなんて……」

羞恥心で一杯な様子の子のティアの声が響く。

だが2人は既にもうそういう事は済ませている身。

「(今更な感じもするがな……)」

「久弥、今更とか思ってるでしょ……」

「いや何でわかった?! 読心術持ちか?! さてはニュータイプか貴様?!」

「久弥の考えてることなんてお見通しだよ。」

大体、久弥とは、その……そういう事も暫くしてないし、私もすぐく溜まって……じゃなくて、久弥に裸を見られるのってやっぱり恥ずかしいんだからね……?」

「お、おお……分かった。見ねえようにすつから」

ジエネシスは頷いて了承すると、ティアも納得したのか足を進める。『ジャブジャブ』という水の音が響く。

ひんやりとした水が自身の肌を覆っていく。そしてある程度入ると、ジエネシスはその場に座り込んだ。

すると、2人の指輪が光り輝き、水色の光を放って色が変化した。

「あっ……色が変わった!」

「お、おお……! やったな、成功だ……つて」

ジエネシスは達成感を感じてティアの方を向く。

そして、ハツとした顔で固まった。

透き通った陶磁器のような、艶のある白い肌。胸周りと腰がふつくと丸みを帯び、さらに腹部のくびれが強調している刺激的なボディライン。風にたなびく白い銀髪。

空の青さを反射して幻想的に輝く水面との景色もあいまって、ティアは正に女神の様相を醸し出していた。

「あ……」

ティアもその視線を感じてゆつくりと振り向き、そして表情が固まる。

「くくくっ！見ないでって言ったのにー!!」

「…………ハッ！す、すまん事故だ！」

ジェネシスは暫く見惚れてしまっていたが、ティアの声を聞いてハッと意識を取り戻して慌てて謝る。

「も、もう!!こうなったら…………」

するとティアはズンズンとジェネシスの方に近づいていく。

ジェネシスは一発殴られるなど覚悟したが、ティアは次の瞬間思わぬ行動に出た。

ティアはジェネシスの背中に両腕を回して抱きついたのだ。

「お、おい雫サン?!」

「…………お願いだから、少しこうさせて…………」

ティアは小さな声でそう囁いた。

彼女は俯いたままジェネシスの胸板に頭を預け、その豊満な胸の双丘を押し当てている。

彼女の胸部の柔らかな感触と、そのしっとりとした素肌から彼女の温もりが直に感じられた。しかも今は互いに何も一糸纏わぬ姿。腹部あたりに押し当てられる柔らかい双丘の中心辺りにあるやや硬いもの、彼女の口から吐かれる熱を持った吐息がジェネシスの素肌を撫でる。

「ごめんね…………でも、久弥のも見て、私…………我慢が出来なくなっちゃって…………」

ティアの言葉にジェネシスは何も言えなくなった。彼としても、久々に見たティアの裸体に何も感じなかった訳ではない。寧ろ自分の方こそこうしてしまいそうだったのを、彼の鋼の理性によってなんとか抑え込んだのだ。

「あ、あの…………俺も、お前に、その…………ちよつと見とれた」

ジェネシスは気まずそうに、そしてやや恥ずかしそうに頬を掻きながらそう告げる。

「っ?!」

次の瞬間、ティアはハツと目を見開き、そして彼に回した腕の力を強める。それによって2人の身体はより密着し、彼女の胸の双丘がさらに押し潰される。

「ひさや……」

ティアはゆつくりと顔を上げてジェネシスの顔を見る。

彼女の顔は紅潮しており、熱を帯びている。目はトロンとしており、既に発情状態にあるようだった。

「ダメだよ、久弥……そんなこと言われたら、私も我慢出来なくなっちゃうよ……」

ティアはゆつくりと顔を近づけていき、そして唇を打ちつけ合う。

「んっ………ねえ、もうこのまま……」

ティアは彼の耳元で熱い吐息を吐きながらそう囁く。ジェネシスの理性がこれでもかと削られて、いよいよ保たなくなった時だった。

ジェネシスの索敵スキルに反応があった。プレイヤーが近づいてきているようだ。

「や、やべえー！人が来る！雫!!あがつて服着ろ服!!」

ジェネシスは慌ててティアの腕を解いて陸に上がり、装備を元に戻していく。

ティアは腕を解かれて「あ……」と切なげな声を出してジェネシスの後ろ姿を悩ましげな視線で見た。

そしてティアも言われた通りに陸に上がり、装備を戻していく。

下着を身につけ、胸元の開いたニット、ジーパン、そして白マントをタップして戻していく。

「はあ……危ねえ」

ジェネシスは安堵のため息を吐いてティアの手を取って歩き出す。

「まあ、何とかクエストを進められたな。一步前進だ」

ジェネシスはうんうんと頷きながら言う。しかしティアは何も発さない。視線はブーツとしており心ここにあらず、という感じだ。

「おい、雫?」

「……うん……そうだね……このまま進めよう」

ティアは視線を合わせずに頷く。

ジエネシスはティアの様子を見て訝しんだ表情を浮かべたが、気にせずには街まで戻る事にした。

七十話 祝福の儀式2く思い出の地・絆の神殿く

その日、ジエネシスとキリトは八十三層の町外れにある湖畔に来ていた。というのも、ここはかつて彼らが休暇中に過ごした二十二層に非常に似ていたのだ。

そこで二人は見つけてしまった。湖畔に立つ、一軒のログハウス。かつて彼らが住んでいた家と同じような、質素かつシンプルであるが、どこか家庭的で温かな雰囲気のあるログハウス。

「ここ、いいなあ〜」

キリトがそのログハウスを見つめながら懐かしそうに微笑んで言った。

ジエネシスも同じ事を考えており、目の前のログハウスをじつと見つめる。

「……なあキリト。俺もこのログハウス、結構いいと思ってる」

ジエネシスがそう言うのと、キリトは「へえ」と目を細め、ジエネシスの方を見る。

「俺も、このログハウスが欲しいって思ってるぜ」

「はっ、どうやらためえとはここで決着をつけなきゃいけねえ見てえだな…」

ジエネシスはニヤリと笑って右拳を突き出す。

「上等だぜ、行くぞジエネシス!!」

キリトもそれに便乗して右手を差し出す。

「「じゃんけん……ぽん!」」

「ちくしよおおお……」

その日の夜、ジェネシスは七十六層の宿にある食堂で悔しげに項垂れていた。

あの時、じゃんけんに負けたのはジェネシスの方だったのだ。従ってあのログハウスにはキリトとアスナが住む事になったのだ。

「そんなに落ち込まないで、久弥。私は大丈夫だから」

そんな彼の背中を優しく摩って宥めるティア。

「……で、あいつはなんであんなに落ち込んでるの？」

「ティアさんのためにログハウスを用意しようとしたらしいんですけど、どうやら同じ事を考えてたキリトさんに負けちゃったそう……」

後ろからそれを眺めるイシユタルの疑問にシリカが苦笑いを浮かべながら答えた。

「なるほど、つまりサープライズが失敗してドゥーン状態にあるわけですね」

「まあそう言う事になるわね。ならカツ丼でも食べさせとけばいいんじゃない？」

「イシユタル、それカツ丼じゃない。カ○ミ丼」

オルトリアが成る程と頷き、イシユタルが肯定しつつそう提案し、サチがその提案に対し冷静にツツコミを入れる。

「クソア……」

「いいんだよ久弥。私はこうしてみんなと過ごす方が好きだから」

「……そうか？ならいいんだがな」

ティアの励ましを受けてゆっくりと起き上がるジェネシス。

その後、二人は二階に上がって宿部屋に戻っていく。

「さてと、そんなじゃ風呂にでも入ってくるわ」

ジェネシスはそう言って宿部屋に備えられた風呂場の脱衣所に入っていく。赤と黒の装備を解除し、ボディタオルを持って風呂場に入る。

シャワーのレバーを引いてお湯を出し、霧雨状のお湯が身体に降り注ぐ。ゲーム内での風呂はステータス等に影響が出るわけではないが、しかし気持ち的に風呂はかなり有効だ。

ジエネシスがボディソープを手に取って泡立てようとしていたその時だった。

風呂場のドアが『ガチャリ』と開かれ、中に一人の女性が入ってくる。

「お邪魔するね、久弥」

中に入って来たのはティアだった。

彼女は身体にバスタオルを巻いた姿でゆつくりとジエネシスに歩み寄る。

ジエネシスの方は突拍子も無いティアの行動に思わず固まってしまい、近づくティアを凝視してしまっている。

「ふふっ、驚いた？まあびっくりするよね。でも、私たち夫婦なんだし、偶にはこう言うのもいいかなって思っ……」

ティアはうつすらと笑みを浮かべながらジエネシスの左後ろに膝をついてしゃがみ込み、その耳元に顔を近づける。

「……今日は、私がひさやを洗ってあげるね」

小さく、蠱惑的な笑みと声で囁く。しっとりとした両掌でゆつくりとジエネシスの背中を下から撫で回していく。

そこでジエネシスはハツとした顔になり、慌ててその場から飛び退き、タオルを自身の腰に巻く。

「お、おまつ……何やってんだよ！」

ジエネシスは恥ずかしいように頬を赤らめながら叫ぶが、ここでティアが更なる行動に出る。

ティアは自身の胸元あたりに手をかけ、バスタオルの巻目に指を入れて、そして解く。

するとティアの胸元から腰あたりまでを隠していたバスタオルがハラリと取れ、床に落ちる。

そしてティアの乳白色の素肌、キュツと締められたウエストとふつくらとした胸、腰が露わになった。

「な、なんでタオル取ってんです?！」

「だって、私たちもう全部見せ合ってるじゃない。久弥だってこの間言ってたでしょう?今更だ、って」

ティアは悪戯な笑みを浮かべながらジエネシスにひたり、ひたりと足音を立てて歩み寄る。

そしてジエネシスの前でしゃがみ込み、彼の両肩に手を回して上目遣いで問いかける。

「ねえ………いいでしょ？」

—————

観念したジエネシスは風呂場のバスチェアに座ってじっと固まる。

その背後でティアが楽しそうに鼻歌を口ずさみながら、自身の両手にボディソープをつけて泡立たせる。

「それじゃ、行くね」

ティアは泡塗れになった掌をジエネシスの背中にピトツ…と貼り付け、そのまま背中一杯を塗りつぶすように擦っていく。

ティアの手がついた瞬間、ひんやりとした感覚が背中に伝わりジエネシスは一瞬ピクリと反応する。

「ちよ、なんで手で洗ってんだよ？」

「えく？だって、ボディタオルなんか使ったら久弥の肌にキズがついちやうもん。綺麗な肌なんだから、キズをつけちゃダメなんだから」
「いや、現実なら兎も角ここはゲームだから……」

「むう、とにかく私は手で洗うんだからね！」

ティアは頬を膨らませて更にジエネシスの背中に泡を塗りたくっていく。背中が終われば次は両肩に行き、腕を擦っていく。

腕が終わると、続いて首元、更に脇下から手を回して胸部、腹部を洗っていく。

「ふふっ………はあ………ひさや、遅しいね………」

ティアはうつとりとした表情でジエネシスの身体を洗っていく。

「それじゃあ次は………ここを洗うね………」

そしてティアはゆつくりとジエネシスの下腹部に手を伸ばしてい

く。

「待て待て待てええい!!そこは自分で洗うから!大丈夫だから!!」

そう言ってジェネシスは慌ててティアの手を振り解き、素早くボディタオルに石鹸をつけてそのまま下半身を洗っていく。

それをティアは「あつ……」と切なそうな顔で見つめる。

「……悪い、でも助かった。その、なんだ……また、頼むわ」

「……うん、分かった」

ティアはジェネシスの言葉を聞くと、少し残念そうな笑みを浮かべて頷く。

するとここで、二人の指に嵌められた指輪が輝き、薄いエメラルドグリーンに色が変化した。

「あれ、色が変わった!」

「二つ目のクエストは確か『思い出の他』……そうか、ここで風呂に入って思い出を作ったからクエストが進んだってことか」

ジェネシスの説明にティアは「なるほど」と頷く。

「ふふつ、この調子で進めて行こうね」

「ああ」

—————

その数日後、ジェネシスとティアは自身のクエストログが更新されているのを見つけた。

そのログが示しているのは、八十六層の迷宮区の北側だった。

「久弥、これって……」

「ああ、『絆の神殿』。このクエストの最後の段階だな」

ジェネシスはティアの言いたい事を察して頷く。

「……ようしー行こう、久弥!!」

「おうよ。とつととクリアして、このエラーを戻そうぜ」

二人は頷き合うと、準備を整えて八十六層へと足を進める。

八十六層に転移した彼らはそのまま真っ直ぐクエストログが示す座標まで向かう。

座標に近づくと、周りの風景が一変した。

大きなドーム状の洞窟の天井に、まるでプラネタリウムのような星空が広がっていた。

「わあ……すごい……！」

ティアは星空を見上げて感激した声を上げた。

ティアやジェネシスが現実で暮らす都会では恐らく決してみられないような、満天の星空。

「こりや凄えな……」

ジェネシスも思わず感激した様子で頷く。

恐らく現実でも滅多に見られないような美しい星空が広がっていた。

「ねえ、いつか現実に戻ったらさ……星を見に行こう？」

「ああ。天体観測、やるか」

「うん！」

二人はそう約束を交わすと、星空を堪能しながら洞窟の中を進んでいく。

しばらく進むと、洞窟を抜けて一風変わった部屋に出た2人。

そこは几帳面に並べられた木の椅子があり、部屋の奥には大きな十字架が飾られている。そこはまるで、教会のようだった。

「奥にあるのは……祭壇か？」

「という事は、あそこで『儀式』を行うのかな？」

ティアがそう疑問符を浮かべながら奥の祭壇へ足を進めると……

『絆の神殿を訪れし者達よ』

突如どこからか、柔らかな女性の声が響いた。

『汝、健やかなる時も病める時も、喜びの時も悲しみの時も、これを愛し、これを救い、これを慰めこれを助け、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？』

続けて聞こえてきた声に、ジェネシスは「ん？」と首を傾げる。

何せ、この問答はどう考えても結婚式で神父が夫婦に問いかける言

葉だからだ。

「はい、誓いますー！」

するとティアは迷うことなく、一呼吸置いてそう答えた。

それを見たジェネシスも咳払いを入れてから同じように「ち、誓いますっ」と宣言する。

『……いいでしょう。では、その絆を示しなさい』

「……え？」

その時、2人の前に騎士型のモンスターが出現した。

巨大な大剣を構え、2人にギリギリと詰め寄る。

『汝らの愛と絆を、その騎士に示しなさい』

再びあの柔和な女性の声が、ジェネシスとティアの2人に試練を課した。

「何でただの結婚式でこんな試練が来るんですかねエ」

ジェネシスは目の前に出現したモンスターを見て嘆息しながら大剣を引き抜いた。

「ふふっ、でも私達の絆を試そうって言うなら…簡単な試練だよね」

対してティアはやや楽しそうに左腰から刀を引き抜き、構える。

「はあ……仕方ねえ。サクツと片付けるぞ」

「うんっ！」

ジェネシスの言葉にティアは力強く頷き、そして同時に飛び出す。

銀色の騎士から振り下ろされる大剣をジェネシスが軽々と受け止め、その隙にティアが刀スキル《浮舟》で横腹を抉るように斬り付ける。

さらにジェネシスが暗黒剣スキル《ブランディッシュ・イーター》の連撃を叩き込み、一気にHPを削り取る。

さらにティアが抜刀術最上級スキル《飛閃一刀》を発動し、刹那の動作で抜刀し強烈な斬撃を放った。

更にジェネシスが暗黒剣最上級スキル《ジェネシス・デストラクション》による史上最大級の攻撃を放ち、銀色の騎士を滅多斬りにしていく。

銀色の騎士は圧倒的な戦闘力を持つ2人の前になす術もなく撃破

され、その身をガラス片に変えて消滅した。

一瞬のうちにボスを片付けた2人は各々の武器を収める。

「これで戦闘は終わりだけど……何も起きないね?」

ティアの言う通りボスは倒したものの、特に何も変化は起きなかった。これまでなら、イベントが進むたびに指輪が光っていたのだが、今回はそれが無い。

モンスターを倒すだけでは無く、あと一つ何かが必要なかもしれないと、ジェネシスは考えこむ。

「……………ねえ、久弥…」

するとティアが何かに気づいたのか頬を赤らめながら呼びかける。

「これが結婚式って事は、さっきのが誓いの言葉だとして次にやる事って……………」

「あつ……………」

瞬間、ジェネシスもティアの言いたい事を察した。

彼自身、一種の確信のようなものを持って、ティアを抱き寄せる。するとティアは「あ……………」と切なげな声を上げてジェネシスの顔を潤んだ瞳で見上げる。

「久弥……………愛しています……………」

「……………俺もだ」

瞬間、2人は唇を打ちつけあった。

『汝ら、神の前に於いて夫婦の誓約をなせり』

キスを交わした瞬間、再びあの女性の声が響いた。

「おつ……!」

「合ってたんだ!」

無事クエストが進行したことに喜ぶ2人。

『故に、神の名に於いて汝らの夫婦たる事を宣言す。神の会わせ賜し者は、人これを離すべからず』

次の瞬間、巨大な鐘の音が鳴り響く。

『祝え。2人の新たななる門出である』

そして2人の指輪が光り輝き、エメラルドグリーンから銀色のシンブルな、そして光沢があり高級感のある指輪に変化した。

「指輪が、変わった……！」

ジェネシスがそれを見て思わず眩き、そしてティアがハツとした顔でメニュー欄を開き、歓喜の笑みを浮かべる。

「……戻ってる……久弥のステータスも、アイテム欄も久弥とのリンクが戻ってる！」

「おお！やっぱこっちの方が落ち着くな」

「よ、よかったあく！」

ティアが安堵したように地面に思わずしゃがみ込む。

—————

2人は手を繋いで、八十六層の道に戻っていく。

「それにしても、あの声ってどこか聞き覚えがあったよね」

ティアの言うあの声とは、儀式の際に流れた女性の声のことだ。

「なんか、ジャンヌの声に似てたよね？」

「ジャンヌか……あいつ、なんか聖職者染みてるし違和感もねえよな」

「ふふつ、ジャンヌが仲人さんかあく……たしかにすごく似合ってるね！」

だがジェネシスは「そうだな」と頷きつつも、頭では別の人間が思い浮かんでいた。

それは、影で自分達を支えてくれている謎多き女性。ジェネシスには彼女の声に聞こえたのだ。

「それでね、久弥……」

すると唐突に、ティアがジェネシスに対して切り出す。

「ちよつと、2人で出掛けない？」

「出掛けるって……どこに？」

「だから、その……ね？」

ティアはつまり、『新婚旅行みたいなのが見たい』と言うのだ。

ここ最近、2人でゆっくり過ごす時間もう無かったので、この機会に2人でのんびり過ごしてはどうか、と提案した。

「……いいな、それ」

「本当?!それじゃついてきて!一緒に見たい景色があるの!!」

ティアは大喜びして、大変楽しそうにジエネシスの手を引つ張つて歩き出した。

その後2人は様々な場所に出向いた。満面の桜吹雪が舞う道、青と緑のコントラストが美しく映える湖畔、色鮮やかな花が無数に咲き乱れるフラワーガーデン……ゲームの中ならではの絶景を、2人は堪能した。

そしてその日は、七十九層にある和風の温泉旅館に宿泊した。

温泉に入り、2人は宿の部屋に戻る。

「はあく……今日は本当に楽しかったね!」

「ああ……まあめっちゃ歩き回ったからちと疲れたが……」

布団の上ではしゃぐティアに対し、苦笑いを浮かべながらぐったりするジエネシス。

「あはは、それはごめんね?でもすごく楽しかったんだもん♪」

それで、この後どうしようか?」

「そうだなあ……」

ジエネシスが両腕を頭の後ろに組みながら布団に寝そべると、ティアがジエネシスに擦り寄り、抱きつく。

「ふふっ♪」

ティアはどこか嬉しそうにジエネシスに身を寄せる。

彼女の顔は紅潮し、口から放たれる吐息には熱が籠っている。

「ねえ……最近こう言うこと、してなかったよね?」

ジエネシスはティアの望んでいる事がなんなのかを察し、やや頬が赤く染まる。

「ひさや……もう貴方が欲しくて欲しくて堪らないの………だから………いいよね?」

そしてティアはゆっくりと、自身の唇をジエネシスに打ち付けた。

七十一話 おっ〇いグランプリ

「パパ、パパ」

ある日、ジエネシスが宿の食堂で1人コーヒーを嗜んでいると、レイが近づいてきた。

「突然なんですけど……男の人って、みんな女性の胸が好きなんですか？」

レイがそう問いかけた瞬間、ジエネシスは思わずコーヒーの入ったマグカップを地面に落としてしまった。

まだ無垢な愛娘から発せられた突拍子もない質問に、ジエネシスは頭が真っ白になってしまったのだ。

そしてそれは、彼の隣に座るキリトも同じで慌てて問いかける。

「れ、レイ?! な、なにを言い出すんだ?!」

「この間、ユイからこんな事を聞いたのです……」

そしてレイは語り出した。

先日、クラインが女性プレイヤーの胸元を遠目から見つめていたのが気になったユイが彼に問いかけると、「男性はみんな女性の胸が好きなんだ」と言ったそうさ。

それを聞いたユイは何故男性が女性の胸に惹かれるのか気になり、独自に調査を行おうという話になったそうさ。その調査内容というのが、『身近にいる女性プレイヤーの胸部に触れてみる』というものだった。

「あ……そういえばそんな事もあったな……」

事情を知っているキリトが気まずそうに目頭を押さえる。

どうやらその時はアスナ・リズベット・シリカ・リーファ・フィリア・シノンがターゲットとなったらしい。

「いや何で止めなかったんだよ」

「すまん、俺には娘の暴走を止める力は無かったんだ……」

ジト目で問いかけるジエネシスにキリトは力なくうなだれた。

すると、宿の扉が空いて女性プレイヤーの集団が入って来た。

帰って来たのは、今日ショッピングに行っていたティア・イシユタ

ル・サチ・ツクヨ・ハヅキ・オルトリア・ジャンヌの7名。

「たっだいまー!」

「はあ、今日はたくさん歩き回って疲れたよ…」

ティアが楽しげな顔で食堂に戻り、サチが疲れ切った様子で続く。さらに他の女子メンバーも続いて食堂に戻った。

「えっちゃんさんが洋菓子店のショーケースにずっと貼りつくから、中々進まなかったですよね」

「む…それを言うならハヅキちゃんだって割と食べ歩きしてたじゃないですか」

「そ、そんなに食べてないですよ私?!」

ハヅキが苦笑しながらオルトリアの方を見ながら言うと、彼女もハヅキをジト目で見ながら反論した。

「あとイシュタルが宝石店でかなり長く滞在していたのう。それこそ30分はいたのではないか?」

『イシュタルさんは宝石が本当にお好きなのですな』

「ちよつと! 私が宝石に目がないその辺のセレブと一緒にしないでよね! 私の場合は宝石が無いと戦えないから集めてるだけで…」

イシュタルの宝石好きっぷりにツクヨがため息を吐きながら言い、当のイシュタルは自身が宝石を集める理由を弁明する。

そんな彼女達をジェネシスはやれやれと首を横に振りながら苦笑し、コーヒーを啜った。

「パパ、パパ」

するとレイがジェネシスを呼び、問いかける。

「パパはここで、誰の胸部が一番好きですか?」

「ぶっつっ!?」

その瞬間キリトが思わず吹き出し、女子達の空気がピシリ、と音を立てて固まった。

「え…きき、胸部?」

「だ、誰のが一番って…」

イシュタルが目を丸くし、サチが困惑した顔で呟く。

「ね、ねえ久弥？ 私がいない間、レイに何を教えてたの？」
するとティアが鋭い目つきと威圧感のある声でジェネシスに問いかける。

「ま、待て落ち着け！ そもそも元凶はクラインだ！」

「クラインが……？」

そしてキリトとジェネシスが事情を全て説明し、そしてレイがユイからその事を聞いたことで興味を示したという事を話した。

全てを聞き終えた女性メンバー達は同時にため息をつく。

「まったくあいつは……」

「奴が帰ってきたら蜂の巣にしてやりんす」

頭を抱えてやれやれと呟くイシユタルと、鋭い殺気を放ちながら苦無を手取るツクヨ。

「それで、パパは誰の胸部が一番好きなのですか？」

「だ、誰ってな……そりゃ俺はまあ……」

ジェネシスは気まずそうにチラリとティアの方に視線を移す。

「あ、あう……久弥ってば……」

ティアは恥ずかしそうに頬を赤らめながら両腕を胸の前で交差させた。

「むむむ……パパはママの胸部が好きなのですか……」

「ママ、少し失礼しますね」

するとレイがティアの元に歩き出し、そしてその華奢な腕を伸ばし、その小さな手をティアの胸の谷間に差し込む。

「えっ……ひゃあああつ?!ちよ、ちよつとレイ?!どこ触って……」

「はわあ……とつても……ふわふわです!」

ティアは胸を揉まれて素っ頓狂な声をあげ、レイは彼女の胸の感触に目を輝かせた。

「おっ、そうだな」

「ちよつと久弥あ?!」

ジェネシスはうんうんと頷いてレイの報告に同意し、ティアは目を見開いてジェネシスの方を見る。

「次は……オルトリアさんです」

「ほえう……ひゃうー」

レイはトコトコと走ってオルトリアの方に向かい、彼女の胸部アマアの隙間に指を差し込む。

「オルトリアさんは、とってももちもちしてますね！」

「も、もちもち……」

レイの感想にジェネシスが思わずそう呟き、それに対してオルトリアがジト目でジェネシスを睨んでいた。

「ハヅキさんは……凄そうですね……」

次にレイはハヅキの方に向かい、遠目から見てもかなりなものであるその胸部に服の上から触れる。

「ひゃうっ?!」

「わああ……思った通り、すごい情報量です!!」

レイは感激した様子でその感触を告げ、ハヅキは「ふええ……」と恥ずかしそうに頬を赤らめて地面に蹲み込んだ。

「成る程……これはユイが興味を持つのもわかりますね。調べれば調べるほど、興味が湧いてきます！」

レイは好奇心が刺激されたのか、少し興奮気味に呟くと、次のターゲットを定めて走り出す。

続いてレイの標的になったのは、ジャンヌ。

『んなっつ?!ちよ、お待ちください!私は主にこの身を捧げた身、その様な事は決つして許される事では……ふにゃああああつ!!』

ジャンヌは慌ててレイを引き留めようとするも、彼女を止めることが叶わずその胸に手を伸ばされ、そして揉み解された。

「ジャンヌさんのは、とっても暖かくて気持ちいいですね！」

『あうう……主よ……どうか私にお慈悲を……』

ジャンヌはレイから背を向けると、地面に膝をついて十字架を手に持つと、懺悔するかのよう祈りを捧げていた。

そしてレイがターゲットにしたのは、サチだった。

「あひゃあ?!ちよ、レイちゃん?!」

レイはサチの後ろから近づいていたので、彼女は完全に不意を突かれて嬌声をあげた。

「サチさんのもの、意外とふんわりしていますね！」

「ちよっと！意外と、つてどういう事?!ねえ!!」

「つまり……そう言うことね」

「サチさんって、いわゆる隠れ巨……」

レイの言葉にサチが突っ込み、さらにレイの発言でティアが成る程とうなずき、ハツキがとある言葉を口にしようとしたところでサチがその口を塞いだ。

そんなサチをよそに、レイは次なるターゲットに向かって走る。その相手となつたのは、ツクヨ。

「おい、待てレイ！そいつだけはダメだ!!ぶっ飛ばされるぞ!!」

ジェネシスが慌てて引き留めようとするも、その時にはすでに遅く、レイは既にその手をツクヨの胸部に伸ばしてしまっていた。

『ポニユツ…』という音が聞こえそうな弾力がレイの手に掴み取られる。レイはその小さな手でツクヨの胸部をつかんでしまった。

それを見てジェネシスを始め一同は顔を真っ青にしていた。かつてとある事故でツクヨに投げ飛ばされた経験のあるジェネシスは、もしレイが同じようなことをしたら、レイに恐ろしい事態が起きる事を想像してしまった。

「ツクヨさんののは、とつても柔らかくて気持ちいいですね！」

「ほう、そうか。まあわつちのはそこそこあるみたいだがのう」

皆の不安に反してツクヨは柔和な笑顔でレイに対して答えた。皆は思わぬツクヨの対応に固まってしまう。

「全く……わつちがこのような娘相手にそのような大人気ない事をするはずがなかろうに。そも、同性から触られたくらいで何を慌ててあるのじゃ主らは」

呆れた顔でツクヨは皆に対して言った。

そして最後、レイが標的にしたのは……

「では最後に、イシユタルさんですー！」

「ちよ、ちよっとー私までやるの?!」

未だレイの検証を受けていないイシユタル。

イシユタルはやや後退りして逃げようとするも、その両腕をガシツ

と拘束する者達がいた。

左右から腕を拘束する、イシユタルの幼馴染みのティアとオルトリア。

「凜ちゃん、ここは腹を括ろうね？」

「貴女だけ検証を受けてませんから。大丈夫です、みんな揉まれたら怖くない、です」

「レイちゃん、ゴー!!」

ティアの掛け声を受けて、レイは「はい！」と威勢よく答えて走り出し、その胸に触れた。

「んひゃあっ?!」

イシユタルはくすぐったい感触に思わず嬌声上がる。

「イシユタルさんののは、とつてもすべすべですね！」

「ぐっはあ?!」

レイの純真無垢なコメントがイシユタルにはどうやら地雷だったようで、イシユタルはクリティカルヒットを受けて地面に崩れ落ちた。

「すべすべ、ね……」

「そっか……イシユタルさんはそんなにか……」

それを聞いて安心したように、若干勝ち誇ったような笑みを浮かべるサチとハツキ。

「お騒がせしました。検証にご協力いただき、ありがとうございます
た」

レイは一頻り女性メンバーの胸を探究し終え、皆に一礼をした。

「それで、どうですか？ パパ。私のレポートは参考になりましたか？」

「さ、参考ってなあ……」

レイの言葉にジェネシスはただ困惑し、答えづらそうにしている。それに対して女性メンバー全員は『ここまで来たら言え』とばかりに、ジェネシスに対して無言の圧力をかけている。

ジェネシスは少し考え込んだ後、ゆっくりと息を吸って切り出す。

「……いいか、レイ。男つてのはな、女性の胸なら誰のでもいいわけじゃあねえ。」

好きな女の胸が好きなんだよ!!」

「え、えええええー?!」

レイはジエネシスの言葉を聞いて目を見開いて叫んだ。

「つ、つまり…パパはママの胸部が一番好きって事ですか?!」

「そうだよ!…つまりそう言ってるんだよ!」

「何言っちゃってるの久弥ああああ!!!」

レイの聞き返しに対してジエネシスはもうヤケクソ気味になって答え、恥ずかしさのあまりティアがジエネシスを殴りつけた。

するとそこへ……

「あんた達も餌食になったのね……」

リズベツト達が同情じみた視線でティア達を見つめながらやって来た。

アスナ達も以前、ユイから同じような被害にあっており、一悶着あつた者達だ。

「本当に」愁傷様ね、あんた達」

やれやれと首を振りながらシノンは言った。

リーファやシリカ、フィリアもうんうんと頷く。

「……とりあえず、私たちのやる事は決まったわね」

ティアが鋭い眼光を放ちながら皆に告げると、全員同意して武器を手を取った。

キリトとジエネシスは苦笑いを浮かべながら、あの無精髭の侍に対して静かに祈りを捧げた。

数十分後、宿の食堂にクラインがやって来た。

「よう、もう全員揃ってたのか」

クラインはいつもの軽い調子で皆に手を振りながら食堂に入る。

するとキリトとジエネシスがゆっくりと立ち上がり、彼の両腕を左右から拘束する。

「お、おい?…なんだ、何すんだよおめえら?」

「クライン、残念だが俺たちはお前を救ってやれない」

「グツバイ、クライン……お前のことは、忘れねえぜ」

クラインに対して別れの挨拶を交わすジエネシスとキリト。そんな彼らへジリジリと歩み寄る女性陣。

「クライン……………」

悔い改めて」

瞬間、女性陣の攻撃がクラインに向けて炸裂した。

「ンギヤアアアアアア———！！」

「クラインが死んだ?!」

「この人でなし!!」

第七十二話 番外編「そーどあーとおふらいんくふたりのくろのけんし〜」

——この本によれば、英雄になれなかった男《ジエネシス》は、運命の悪戯によって出会うはずのなかつたものたちと出会い、デスゲームを戦い抜いていくのであった。

これは、誰も見たことがない《2人の黒の剣士》とその仲間たちが紡ぐ物語である——

—————

「七十話突破記念！『そーどあーとおふらいんく2人のくろのけんし〜』——！！」

ティア「はい、と言うわけで読者の皆さんこんにちは！いつもこのお話を読んでくださってありがとうございます！

今回は七十話突破記念と言うことで、これまでのお話を振り返りながら様々な事をぶっちゃける回にしたいと思いまーす！

司会はこの私、正ヒロインのティアと…」

サクラ「私、BBちゃ…もとい、サクラがお送りして行きまーす！！イェーイ！」

ティア「尚、今回は完全ギャグパートという事で、台本形式でお届けします。ご了承ください」

ティア「それでは、ゲストのご紹介です！まずはこの方！

私の永遠のヒーローにして生涯の伴侶、《暗黒の剣士》ことジエネシスさんでーす！」

ジエネシス「えつと…何これ」

ティア「え？久弥聞いてなかった？今回はギャグパートだって作者さんが言ってたよ？」

ジェネシス「オオウ…ジャアズ…」

サクラ「お父さんその辺で。作者さんは某破壊大帝さんに上下半身真つ二つにされた副官じゃありませんから」

ティア「『このジャズが聞こえた時がお前の最期だ！』」

サクラ「デブリ帯で戦う特殊なMSに乗ってるパイロットでもありません！

…：えー、コホン。では気を取り直して、続いてのゲスト紹介に移ります。この方です!!」

キリト「ええつと…なんで俺？」

サクラ「なぜも何も、貴方はなんと言っただって原作の主人公ですから！キリトさん無くしてSAOは語れませんよ！

なので、よろしくお願いします」

キリト「そ、そうか…：そういうことなら、まあよろしく」

サクラ「そして最後に。本日は別作品からスペシャルゲストが応援に来てくださっています!!」

ジェネシス「別作品？」

キリト「スペシャルゲスト？」

サクラ「はい！この方です、どうぞ!!」

??? 「ウエエエエエエイ!!」

ジェネシス「うわっ?!なんか雫のちっちゃい頃の見た目（黒髪ver）みたいなのが入って来た！」

キリト「しかも何かいきなりテンションがおかしいし!!」

ティア「えつと、サクラ？この子はもしかして…」

サクラ「はい、この方は本作の原点ともいえるジャズさんの短編作品『SAO HRく深淵の巫女の日常』から来てくださいました！

では、改めて自己紹介をどうぞ！」

??? 「はい！皆さんどうも！チェン・チャンチョンです!!」

キリト「だれ？」

???「という冗談は置いておいて置いておいて、改めまして皆さんどうも！みーんなのアイドル、ゼロちゃんだよっ♪」

ジエネティア「「帰れ」」

ゼロ「ひつつど?!来て早々帰れなんてスペシャルゲストに言うことじゃありませんよ?!」

ジエネシス「ふっざけんな！これのどこがスペシャルゲストだ!!」

ティア「こんなのゲストじゃない、下衆な人間略して下衆人げすとよ!!」

ゼロ「えええ?!そんなに言われなきやダメですか私?!」

酷いですよジエネシスさくん！私たち、あつちであんな事やこんな事をした仲じゃないですかあゝ!!」

ジエネシス「誤解を招く言い方すんな!!」

キリト「あんな事やこんな事とは」

ティア「キリト、気にしないで。あくまで他所は他所、うちはうちだから」

サクラ「まあまあ、落ち着いてくださいお父さん。これもジャズさんからのお願いなのですから」

ジエネシス「チツ……下手に暴走すんじゃねえぞ」

ゼロ「お任せください！今日の私は賢者モードなのです！」

ティア「ごめん全く信用ならない……」

まあいいか。それじゃ始めようか」

♪『2人の黒の剣士・名場面振り返りコーナー』♪

サクラ「このコーナーでは、現在七十二話まで進んでおります本作品の名場面を、ジエネシスさんとティアさん、そしてゲストのキリトさんとゼロさんと共に振り返っていくコーナーです」

ジエネシス「えー、こいつと一緒に振りかえんのかよ」

ティア「まあまあ、そこまで毛嫌いしなくても」

ゼロ「さすが姉ちゃんなのです！その優しさが身に染みるうー！」

ティア「いざと言うときは私が八つ裂きにするから」

ゼロ「あああ!!もつと酷かったわこの人おお！キリトさん助け

てええ！」

キリト「ごめん、俺は不干渉と言うことで」

ゼロ「見捨てんな主人公おお!!」

サクラ「では、早速参りましょう！先ずはこのシーンからです！」
ゼロ「スルーですかさいですか」

—————

第一話より

久弥の言葉でいじめグループはいそいそと席に戻っていく。

雫は両目から涙を流したまま久弥を見つめていた。

久弥はそんな彼女に向き直り、ネックレスを彼女の机に置く。

「……ほら。取り返してやったからもう泣くな。」

それから、そんなに大事なやつなら学校に持ってくるな。取られ
たって文句は言えねえぞ」

久弥はそう言い残し自分の席に戻って行った。

雫はただ黙ってその背中を見つめていた。

—————

サクラ「……はい、と言うわけで先ずは、いじめを受けていたお母
さんを助けたお父さんのシーンでした！」

思えば、お二人はここから始まったんですよ〜」

ティア「あの時の久弥、すごくかつこよかったな……」

ゼロ「何気に『ジエネシスさんがティアさんを助ける』って言う点
では原作通りなんですよねこれ」

キリト「いじめられてる奴を助けるのか……俺だと見てみぬふりを
してたかもな……」

ジエネシス「原作だとそうしてたなお前」

キリト「はは、まあな……でも、ジエネシスはすげえよ。だからこ
そ、ティアが惹かれたんだろうな」

ティア「えへへ……」

サクラ「お二人の初めての出会い、とても尊い……

えー、こほん。では氣を取り直して続いている名シーン！次は少し飛びまして、アインクラッド編からこの場面をお届けします!!」

—————

十六話より

突如、それまで青に染まっていた部屋の中に、真っ赤な光が灯り始めた。

アスナ、クラインを始めその場にいる皆が視線を向ける。

赤い光の中心にいたのは、抜刀術の構えを取っているティアだった。

ティアからはまるで炎のような鮮やかな赤い光が発せられており、ティア本人は目を閉じてただじっとしている。

ボスはそんな彼女に向けて地響きを立てて走りだし、その大剣を振りかぶった。

その瞬間、ティアは両目をカツ！と開き、その場から一瞬で飛び出した。

直後、ボスの身体に無数の切り傷ができ、その傷から炎のようなエフェクトが発生する。

ティアは止まることなく、ただひたすらにあらゆる方向から無数の斬撃を繰り出していく。

ティアの刀が赤い弧を描き、吹雪のようにも見えた。

これが、ティアの手にしたユニークスキル《抜刀術》。

そしてそのうちの、三十九連撃ソードスキル《緋吹雪》だ。

「はあああああぁっ!!」

そして叫びながら最後の一撃を、上空に飛び上がって上段から振り下ろし、ボスの身体を両断する。

これでボスのHPバーは、あと一本。

その時、今度はドス黒いオーラが部屋の中を充滿して行く。

そのオーラを発しているのは、大剣を肩に担ぐジェネシスだ。

ジェネシスの身体はもう真っ暗なオーラに包まれ、その両目は真っ

赤に光り、まるで死神のように見えた。

「行くぜえええええ!!」

そしてジエネシスは飛び出す。

ボスの両手剣とジエネシスの両手剣が衝突する。

その瞬間、耳をつんざくような金属音と、部屋中の空気を揺るがすほどの衝撃波が発生し、皆は思わず両手で顔を覆う。

そして再び視線を向けると、そこには圧倒的な体格差のあるボスと互角で剣を打ち合うジエネシスがいた。

剣と剣がぶつかり合う度に、けたたましい金属の衝撃音とおびただしい火花が散る。

これが、ジエネシスの手にしたユニークスキル《暗黒剣》。《暗黒の剣士》の名を持つジエネシスに相応しいスキルと言えるだろう。

—————

サクラ「と言うわけで次は二十四話から、お母さんとお父さんのユニークスキル初披露戦でした!」

キリト「ここ、原作だと俺1人でやってるんだけどな。その上にティアとジエネシスのユニークスキルの攻撃って……オーバーキルにも程があるな」

ゼロ「いやいやキリトさん、ボス相手にそんなこと気にしちやダメなのです。貴方の大好きなノツブも言ってますよ、『慈悲など要らぬ!!』って」

キリト「いやそれナニモン!!ナンデス?」

ジエネシス「……お前それ絶対分かってるよね。知ってて言ってるよね」

ティア「はいはいそこまで!これ以上いくと収集がつかなくなるから」

ゼロ「まったく。ほっとけばすぐ違う方向に話をもっていくんですから」

ジエネ・キリト「『誰のせいだ誰の』」

ゼロ「アーナンノコトカナーゼンゼンワカンナイナー」

サクラ「えー、とりあえずゼロさんは放っておくとして。」

この時お母さんとかお父さんが使ったユニークスキル、元ネタはどちらも『ホロウ・リアリゼーション』の上位エクストラスキルから来ております!」

キリト「察しのいい人はもうとづくに気づいてたと思うけどな。まあ、設定上アインクラッドにも名前だけ存在する『暗黒剣』と『抜刀術』にホロリアのスキルを流用した形になるわけだ」

ティア「あの時の緋吹雪は割とスカツとしたなく。なんて言ったら39連撃だし!」

キリト「これに関しては正直、性能が化け物すぎると思うんだけどな。だって俺の二刀流でも最大で27連撃だぜ?」

ゼロ「そのさらに12連撃も上ってねえ……」

サクラ「しかもこれで最上級スキルじゃないんですよね。抜刀術……恐るべし」

ジエネシス「ところでティアつてき、原作だと俺と同じ大剣使ってたよな? 何で刀になってんの?」

ティア「ああ、そこは作者さんの完全な趣味みたいで……」

作者さん、実写版の○剣の戦闘シーンに私を上書きした妄想ずつと描いてたらしくて」

キリト「どんな妄想だよ……。まあでも、ティアみたいな女性は大剣よりは寧ろ、刀とかが合うというのは分かるんだよな」

ゼロ「姉ちゃんみたいなスタイリッシュな女の人にはすごく似合ってるのです!」

ティア「それゼロに言われても嬉しくないなあ」

ゼロ「ナジエダア!!」

サクラ「えー……ん? 作者さん?」

ジエネシス「え? なに、ジャズがなんか言ってるの?」

サクラ「えーつと……あの、そろそろ時間みたいです……」

キリト「はあ?! まだ始まってそんなに経ってねえじゃねえか!!」

ゼロ「字数もいつも書いてる量の半分しか書いてませんよ?! どうしたジャズさあーん!!」

ティア「なんか、名シーン振り返るってなるとかなりの量になるらしくて……」。

まあ、続きは本編を読み直して? という事にするらしいよ」

ジエネシス「マジかよあいつ……前回投稿して一ヶ月近く空いて最新話がこれって、読者にブチ切れられんぞ……主にこの作品に毎回感想くれる風来坊とか作者が尊敬するリスウとか……」

サクラ「はいストオオオッ!! それ以上はダメですよおおおとおおおおー!!」

ティア「というわけで、短くなりましたが今回はこれで締めたいと思います。次回からは本編に戻りますので、そちらもお楽しみにしてくださいね!」

ジエネシス「んじゃ、また次回く」

七十三話 幼馴染の宝探し

八十五層・鉱山エリア

真つ暗闇が延々と続く岩のトンネルの中を、3人の人物が慎重に足を進めていた。そのメンバーは、イシユタル・オルトリア・ティアの3名。

「悪いわね、付き合わせちゃって」

イシユタルが自分の前を歩く2人に向かって言った。今日彼らがここに来ている理由は、イシユタルが武器を使用する際に消費する宝石アイテムを集めるためだ。彼女の主要ウエポンである『天弓マアンナ』は、宝石を砕いてそのエネルギーを矢として放つので、定期的に宝石アイテムを集める必要がある。

「大丈夫。凜ちゃんが戦うのに必要なものなんだもんね」

「それにしても、毎度毎度大量の宝石が必要なんて燃費悪くないですかね？」

ティアは屈託のない笑顔で答えるのに対し、オルトリアはポテトチップスのようなお菓子を頬張りながらため息をついた。しかしオルトリアがこのように嘆息してしまうのも無理のない話である。

本来宝石アイテムなるものは全てのゲームにおいてかなりレアなアイテムである場合が多く、ここSAOもその例外ではない。イシユタルの弓が必要とする宝石類は全てそれなりのレア度を要求しているのだが、そのようなアイテムは滅多に手に入るものではない。現在居候しているエギルの雑貨屋にはごく稀に宝石が入ってくることもあり、イシユタルはそこで買い取ったりしているのだが、その度にエギルは目を見張るような金額を要求してくるので、なるべく彼女はエギルの世話にならずに自分の手で見つけようとし、このように宝石探しに出かけているが、それでも確実に手に入るものではない。

早い話、オルトリアの言う通りイシユタルの弓は一撃一撃が彼女本人や仲間たちの苦勞が詰まった結晶であるのだ。故にオルトリアはため息を吐いてしまったのである。

「し、しょうがないじゃない！私の弓はそう言うものなんだから！」

「でも他に弓なかったんですか？ハツキちゃんやシノンさんみたいな矢を使うのが弓というものでしょう。」

と言うか、凜ちゃんの弓って威力高すぎてこっちまで死にそうになるんですけど。もう少し調整してください」

くどくどと発せられる毒舌にイシユタルは「うぐっ……」と頬を引き攣らせる。

「き、今日は随分と手厳しいじゃないアンタ。何かあったわけ？」

イシユタルの問いかけにオルトリアはジト目で睨み返ししながら答える。

「……私の髪を黙って触ったこと、まだ許してませんよ」

「まだ根に持ってたの!?!どんだけ執念深いのよ!?!ていうかあれは私だけのせいじゃないでしょうが!?!」

「凜ちゃんはいいいんです。毎日美味しいお菓子作ってくれますし。でも凜ちゃん、貴女はダメです」

「うわああ〜ん! 凜うう〜!!澄香が私をいじめてくるううう〜!!」

とうとうイシユタルは泣き出してティアに抱きつき、そんな彼女の背中を優しい手つきで撫でる。

「よしよし。大丈夫だよ凜ちゃん。普段はうっかり屋さんでみんなに迷惑かけてるけど、凜ちゃんの弓はみんな頼りにしてるよ。えっちゃんだって本当は凜ちゃんのこと信頼してる筈だし」

「そ、そうよね! まあ私だし? 貴方達の役に立つなんて当然よね?」

凜に慰められたイシユタルは一瞬で涙目から自信満々の彼女に立ち戻り、「おほほほほ」と高笑いを上げながら堂々と歩みを進める。

「凜ちゃん、ダメですよそんなに甘やかしたら。ああいう凜ちゃんはすぐにやらかしますから」

そんな彼女を見ながらオルトリアがティアの横に立ち、小さな声で耳打ちをした。

その時だった。2人の前を進むイシユタルの右足が何かを踏みつけ、『カチッ』というスイッチのような音が鳴り響いた。瞬間、3人の空気が凍りつく。

「……えっ、と……凜ちゃん? 何か踏んだよね? 今」

苦笑いで問いかけるティアに対し、イシュタルは首を『ギギギ……』と回して振り向くと、

「え？なに？何かあったかしら？」

と冷や汗を垂れ流しながらも、何事もなかったかのようにとぼけた。

「いや、今完全に『カチツ』って音したよね？明らかに凜ちゃん何か踏んだよね？」

「は、はあく！？何も踏んでませんけどお？やーねー人をそんなに疑うとか、雫らしくないわよ？？」

再三言っておくけど、私は何も踏んでないからね!!」

気まずそうに追及するティアに対してイシュタルはあくまで何もしていない体を装った。

「じゃあ聞きますよ凜ちゃん。今貴女の後ろに現れたそれはなんですか？」

そんなイシュタルをジト目で見つめながらオルトリアが彼女の背後を指さす。ここで彼女も漸く自身の背後に何かがあるのに気づいたのか、ハツとした顔で恐る恐る振り返る。

そこには、体長4メートルはある巨大な狼がおり、低い唸り声を上げながら3人を見下ろしていた。凜はそれを見上げて「あ、あわわ……」と震えながら声を発した。そんな彼女に向けて、狼は爪でイシュタルを引き裂こうと勢いよく前足を突き出した。

しかしその攻撃を、いち早く反応したティアが飛び出して凜を抱き寄せると同時に、刀を引き抜いて逆手に持つとその刃で爪の軌道を逸らした。ティアの身体のすぐ横を狼の巨大な前足が通過し、彼女の足元の地面を爪が抉る。

そして続け様にオルトリアが飛び出し、ビームサーベルで狼の懐に飛び込んで斬りつけた。狼はその攻撃を受けると素早くその場から飛び退き、一旦彼女達から距離をとった。

「はあ……やっぱりうっか凜ちゃんでしたね。フラグ回収の速度で言うならギネスレベルじゃないですか？」

オルトリアはやれやれと嘆息しながらイシュタルを見下ろすと、懐

からもう一本ビームサーベルを取り出して柄同士を接続し、薙刀状にする。

ティアも立ち上がったって刀を間違えて構える。

「凜ちゃん、危なかつたら後ろに下がっていてね？」

ティアがそう告げると、2人は同時に飛び出した。オルトリアが左から、ティアが右から狼に接近し、胴体に斬りかかる。

「ふっ……いー」

「せやあああつ!!」

双頭刃スキル《ライトニング・ソニック》による電気を伴ったソードスキルを放つオルトリアが狼の足を切り刻んでいき、ティアが抜刀術範囲攻撃《真蒼》を放ち、狼の巨大な胴体に斬撃を叩き込んでいく。

「……毎度思うんですがその技はズルいと思うのです」

「え？あ、あはは……まあ、ユニークスキルだし、多少はね？」

やや嫉妬気味にオルトリアからソードスキルのことを言われたティアは苦笑いで答える。次にティアは刀ソードスキル《緋扇》を発動し、狼の背中を斬りつけていく。

しかしここで狼が大きな遠吠えを放つと、その場で飛び上がったそのまま彼女達の周囲を高速で走り回った。

「む……中々素早いすね」

オルトリアは自分達の周りを囲むように走り回る狼を目で追いながら毒を吐いた。

「気をつけて。この動き……間違いなく何か仕掛けてくる……」

ティアは刀を中腰に構えながら狼をしっかりと目で捕捉して狼をじっくり観察し、狼の新しい攻撃に備える。

その次の瞬間、狼が突然身体の向きを変えて真っ直ぐにティア達に向けて突っ込んでくる。

「2人とも、下がって!!」

ティアは2人に指示を飛ばすと、刀を納めてゆっくりと腰を落とし、抜刀術の体勢を取る。

狼がティアを噛み砕こうと牙を剥き出しに突撃してきたその瞬間。ティアの刀が眩い銀色の光を放ち始め、そしてそのまま一瞬の動作で

引き抜き、狼に強烈な斬撃を叩き込む。

一 太刀の刃は狼の胴体を真つ二つに切り裂いた。

抜刀術最上級スキル《飛閃一刀》

切り裂かれた狼の下半身がガラス片となって消滅した。しかしその上半身がまだ残っており、最後の悪あがきとして前足で這って彼女らに近づいてくる。

「オルトリアクター―臨界突破……」

しかしその前に、オルトリアが双頭刃のビームサーベルを肩に担いで構える。

「我が暗黒の光芒で素粒子に還れ！」

そしてその場から勢いよく飛び出すと、双頭刃を左右の手で器用に回しながら狼の上半身を滅多切りにしていく。HPが凄まじい勢いで削られていき、いよいよ最後の数ドットになった瞬間。

「《黒竜双剋勝利剣》!!!」

二つのビーム刃が容赦なく狼の胴に叩き込まれていき、一瞬でバラバラに刻んでいった。大ダメージを受けた狼はそのまま悲痛な叫びを上げながらガラス片となって消滅した。

ティアはそれを見て安堵のため息をつく。刀を左腰の鞘に納め、オルトリアもビームサーベルの電源を切ってコートの内ポケットに直した。

「お疲れ様2人とも。お陰で助かったわ」

そんな2人にイシユタルが労いの言葉をかけながら歩み寄るが、オルトリアは恨めしい目でイシユタルを見つめる。

「元はと言えば凜ちゃんの変なスイッチを押すからこうなったんじゃないですか。ちゃんと気をつけてください」

「うぐっ……わ、分かったわよ!!私が悪かった!次からは気をつけるのだけ!!」

イシユタルはオルトリアの言葉に対して少々ヤケ気味に叫ぶ。そんな2人のやりとりを、ティアは微笑を浮かべながら見つめていた。

「なんか……昔を思い出すね」

不意にティアが眩き、オルトリアとイシユタルが彼女の方を見つめ

る。この3人は、現実では幼馴染の関係。小さい頃も、やんちやな凜とそれを咎める澄香、それを見守る凞という関係が何年も続いていた。SAOに入ってからその時間は途切れていたが、こうして縁あつてまた集つたこの3人の変わらない雰囲気、ティアは思わず懐かしさを感じたのだ。

「ま、凜ちゃんが何かしでかすのも変わらないですけどね」

「ちよ、どんだけ私をうつか凜にしたいのよ!」

「まあまあえっちゃん。凜ちゃんがやらかし体質なのは変わらないから」

「ちよつと凞!そこでフォロー外れちゃうのあんた!」

3人はそんなやり取りを交わしながら奥は奥へと進んでいった。

—————

それから数十分洞窟内を歩き回つた3人だが、一向に宝石類や宝箱が見つからない。未踏のダンジョンであるため地図や手がかりなどはなく、手当たり次第に歩き回るしかない。このダンジョンは外れだったのかと、3人の中にやや諦めの雰囲気が漂い始めていた。

「一向に見つかりませんね……モンスターをたおしてもドロップするものはそう良いものでもなし、経験値もそんなに貰えないですし。おやつも切らしちゃつたのでそろそろ帰りませんか?」

「なんでおやつないから帰るつて言う発想になるのよ……まあ、たしかにここまで探索して出ないとなると、アテが外れたかもしれないわね。そろそろ時間も遅くなってきたし、もう少ししたら帰りましょうか」

若干疲れの色が出始めているオルトリアの提案に、イシュタルも頷いてそう答える。目の前には大きな鋼鉄の扉があり、僅かな期待を持って3人はその扉を押し開けた。

扉の中は直径200メートルのドーム状のフィールドで、奥の方には小さな小部屋があり、そこには如何にも何かあると言わんばかりの

宝箱が置かれていた。

「あつ!!あんな所に宝箱があるのだわ!!」

イシュタルが宝箱を見つけると、そこに向かって駆け出した。

「待って凜ちゃん!!この部屋は……」

そんな彼女を、何かを察知したティアが引き止める。それと同時に、ボス部屋の天井から巨大な物体が落下してきた。咄嗟にティアがイシュタルを抱き寄せて引き戻し、同時に大きな地響きと土煙が上がる。

煙が晴れると、そこには巨大なゴリラ型のモンスターがいた。まるで鎧のような硬い隆起した筋肉。全てを握りつぶしてしまいたいような剛腕に、万物を踏み潰しそうな筋肉質な両足。カーソルはフィールドボスであることを示す赤。HPバーは2本。名前は、『Punching Kong』。

「正にゴリラという言葉をそのまま形にしたようなゴリラですね」

「そりゃあゴリラだもん」

オルトリアがボスのゴリラを見てそう呟き、ティアが当然だとばかりに答える。するとボスは雄叫びを上げて自身の胸部を両腕で殴るドラミングを始めた。ボスの腕が胸を打ったびに、ティア達には彼女らの全身に響く空気の振動が伝わる。そして威嚇のドラミングを終えたボスは一目散にティア達に突っ込んでいく。

ティアはその突撃に対して刀を引き抜いて抜刀術ソードスキル《蓮華》を発動し、ゴリラの胴体に斬りかかる。それに対してボスは右腕を突き出してティアの刀を弾き飛ばす。その強烈な一撃で、ティアは刀ごと上体が後方に大きく反れた。

「うわっ！すごいパンチの威力……パンチングゴングって名前は伊達じゃないみたいね……」

ティアはその感触を確かめると一旦後ろに引いて距離を取り、もう一度ソードスキルの構えを取った。日本刀を右腰あたりに水平に構える。刃が紫の光を帯び始めると、ティアはその場から飛び出してボスに斬りかかり、彼女の動きを見たゴリラももう一度拳を突き出し、刀と拳がぶつかり合う。

先程と違い今度はティアの刀が弾かれることが無く、ボスのパンチとティアのソードスキルが拮抗して打ち合った。刀ソードスキル《驚羽》。これは全体的にパワー不足気味な刀ソードスキルの中でもSTRが高めなスキルである。HIT数も9連撃あり、このボスと打ち合うにはうってつけの技である。

ソードスキルが終わり、今度はオルトリアがティアと入れ替わる。彼女の武装は実体験ではないため、拳と打ち合おうとすれば自身がダメージを負いかねない。そのためオルトリアは、兎に角ボスの攻撃を回避しつつ攻撃を叩き込んでいく。片手剣ソードスキル《ヴォーパル・ストライク》で強烈な突きを放ち、ゴリラの胴体を貫く。技後硬直が終わると即座に引き、再びソードスキル《ソニックリープ》で今度は背後に一瞬の動きで回り込み、背中を斬りつける。ヒットアンドアウェイ戦法でダメージを受けないように注意しながら隙を見て突っ込む。これが今のオルトリアの戦法だ。

しかしこのボスは耐久力が高く、ティアとオルトリアが奮戦しても中々削ることが出来ない。

彼女らが攻めあぐねていると、突然ボスの身体に光線が直撃した。2人が後ろを見ると、イシユタルが天弓マアンナを展開して砲撃した後だった。

「凜ちゃん!?!どうして……」

「宝石ならまだあるのだわ! 援護するから遠慮なく突っ込みなさい!」

「でも、残りは少ないんじゃない?」

「何言ってるのよ!! ここまで来たら出し惜しみは無し! 弾切れになってもやってやるのだわ!!」

そう叫ぶと、イシユタルは懐から新しい宝石を取り出して空中に放り投げる。するとそれらは空中で弾けて光のエネルギー体になり、マアンナに吸収される。

「さあ、これでもくらいなさい!!」

イシユタルが人差し指をゴリラに向けて真っ直ぐに伸ばすと、マアンナからオレンジの光線が一直線に飛び出し、ボスの顔面に直撃し

た。その攻撃で逆上したボスは牙を剥き出しにして叫ぶと、イシュタルに向けて真っ直ぐに突っ込む。

だがそれを、ティアとオルトリアが阻んだ。2人のソードスキルが両脇を挟り、ボスの視線を彼女らに引きつける。

「これじゃどっちが援護してるのかわかりませんね。ま、無理のない程度でお願いします」

「ええ、そっちは任せるわ!!」

オルトリアとイシュタルはそう掛け合い、オルトリアはビームサーベルでボスの足を斬りつけ、イシュタルは弓で腕を狙い撃つ。

イシュタルの強烈な一撃が加わった事で攻撃力が一気に増し、HPを順調に削っていく。ティアとオルトリアが近接で攻め、イシュタルが遠距離から攻撃する事でボスの注意を引きつけ合い、その剛腕から放たれる強烈なパンチを撃たせないように努める。

そして見事にHPバーの一本を削り切った。ここでボスの攻撃パターンが変わるのがここSAOの定石だ。ティア達は一度距離を取って、ゴリラの次の一手を注意深く見つめる。

するとボスは一度『ウオオオオオ!!』と一際大きな叫び声を出すと、一度空中に飛び上がって両拳を付けて上に振りかぶる。そして着地と同時にその巨大な握り拳を地面に叩きつける。瞬間、衝撃波が発生してティア達は空中に吹き飛ばされた。

「ぐっ……!」

地面に転倒してしまったティア。そんな彼女にボスが一瞬の動作で迫り、ゆっくりと右拳を後ろに引く。

「震!!」

イシュタルが慌ててマアンナに宝石のがエネルギーを集めようとするが、もう間に合わない。オルトリアも先程の一撃でティアと引き離されてしまったので援護に行くことが出来ない。

そしてゴリラは無慈悲に、拳をティアに振り下ろす。反撃のタイミングもなく、ティアは諦めて瞳を閉じて拳が自身を打つのを待つ。

「オラアアアア!!」

だがその時、勇壮な男性の声彼女の前で響き、強烈な金属音を立

てる。

ティアが目を開くと、そこには彼がいた。赤黒い装備と大剣、逆立った赤い髪。その背中に、ティアは……否、ここにいる皆は幾度となく助けられた。

「よお。随分と楽しそうなやつとやり合ってたんじゃねえか」

ジェネシスが、不敵な笑みを浮かべながら振り返った。

「久弥!? どうしてここに……」

「いや、野暮用が済んだからテメエらの方手伝ってやろうかところちに来てやったんだよ。メッセージ送ったんだが見てなかったか?」

ティアはその言葉を聞いてハツとした。そういえばこのボス部屋に来る直前、メニュー欄に一件のメッセージが来た通知があったのだ。

「ごめん……見てなかった……」

「別にかまわねえよ、間に合ったんだし。んじゃ……サクツと片付けるか!!」

そう言つてジェネシスは大剣を肩に担いで駆け出し、ティアも思わず緩んでいた頬を直して刀を携えそれに続く。

イシユタルはそれを見て「私の援護射撃に当たらないようにねー」と煽り、オルトリアは心なしに安心してような笑みを浮かべて再びビームサーベルを展開して走り出す。

ジェネシスというパワー型の戦士が入った事で一気に均衡が崩れた。彼がタンク役でボスの攻撃を一身で引き受け、その間にティア・オルトリア・イシユタルの3名が同時に隙を見て攻撃を叩き込むので、HPの減りが一気に速くなった。

「歯応えねえなあ!!ま、八十五層くれえじゃこんなもんか!!」

ジェネシスは終始余裕たっぷりな表情で笑いながら大剣を振り抜いてボスの拳を弾き続ける。

だが、ジェネシスもいい加減拳を弾くだけで飽きてきたのか、ここで一気に決着をつけにかかった。大剣から赤黒いオーラが始め、一気に途轍もないエネルギーとなる。赤黒い光を纏った大剣の刃がゴリラに襲いかかり、その巨大な身体を切り裂いていった。暗黒剣ソー

ドスキル〈ドレッド・ブレイズ〉。5連撃の強烈な斬撃が全てボスの身体に撃ち込まれ、残りのHPを一気に消しとばした。

ゴリラは最期の雄叫びをあげて、その身をガラス片に変えて消滅した。

—————

ボスが無事撃破した彼らは、いよいよ悪の部屋にある宝箱の中身と対面する。イシユタルはもう待てないとばかりの勢いで宝箱に飛びついた。

「さて……漸く見つけた宝箱の中身はなんなのかなあ？」

口を三日月状に吊り上げたニヤけた顔で宝箱の取っ手に手をかける。

「トラップじゃねえだろうな？」

一度宝箱のトラップに引つかかった経験のあるジェネシスが問いかけるが、イシユタルによるとその心配はないようだ。実は彼女、宝探しのプロであるフィリアからトラップの宝箱の見分け方を教わっており、既にマスターしているそうなのだ。そして彼女によると、どうやらこの宝箱は大丈夫らしい。ティアとオルトリアも期待の表情で箱が開けられるのを待つ。

「よっし、開けるわよ……」

ゆつくりと、箱の蓋を上にあげていく。そしてその中身に光が当てられる。

中に入っているのは一本の棒だった。中は空洞で筒状であり、感触はグニグニと弾力がある。色は白で、所々茶色い文様がある。

「これって……」

困惑の表情でティアがそれを見つめながら呟く。彼女だけでなく、その場にいる者全員が同じ表情をとってしまった。

それもそのはず。その宝箱の中身の物体は、3人がよく知っているもの。基本的に食用であり、よくおでんに入っていたりおつまみにさ

れていたりするもの。
そう、それは……

「……ちくわ、ですね」

オルトリアがその名を告げた。

その瞬間、イシユタルは勢いよく立ち上がると、手に取ったちくわを地面に叩きつけた。耐久値が無くなり、ちくわはガラス片となって消えた。

「なに!? どういうこと!? これだけ探して宝箱の中身がちくわ!?」

イシユタルは怒り心頭の様子だ。期待していただけに、その失望も大きいようだ。

「まあ、そんな簡単に宝物が入ってるわけないよね……」

ティアも少々苦笑いで呟く。

「でも、オチとしては最高ですね。さすが凜ちゃん、略してさすりん」

「これほど嬉しくない褒め言葉は初めてだわ」

オルトリアが鼻で笑いながら言い、イシユタルは恨めしそうな目で見つめながら言い返した。

「ま、今回は残念だったな。つぎまた探しに行こうや」

「うわああああん!! ああんまりなのだわあああ!!!」

イシユタルの無念の泣き叫ぶ声が洞窟中に響き渡った。

七十四話 歌姫

ある日、ジエネシスとティアが攻略を終えて七十六層アークソフィアの宿に戻ると、シリカやリズベット・ハツキ・サツキ達が円形のテーブル席に集まって座り、大いに盛り上がりつつあった。

「やっぱり綺麗な歌声でしたよね〜！」

「SAOに歌唱系のスキルがあるのは聞いてたけど、まさか鍛えるとあんな風になるなんてね〜」

シリカとリズベットがそれぞれ何かを噛み締めるように感想を述べ、ハツキとサツキも頷いて同意する。そして他の仲間達も一様に「凄かった」だの「癒された」だのと絶賛の言葉が飛び交う。

「よお、何かあったのか？」

「あつ、お帰りなさいジエネシスさん！実はですね……」

「なに？あんだ達知らなかったの？」

ジエネシスが問いかけると、シリカが笑顔で彼を出迎え、リズベットが彼に対して逆に聞き返した。彼女の口ぶりだと、どうやら何か大きなイベントがあったようだ。

『歌姫ユナ』よ。あんだ達も知ってるでしょ？その人が今日この層に来てライブをやったの」

すると彼らの背後からシノンが現れ、代わりに応えた。『歌姫ユナ』と言うのは、この世界で度々話題に上がる歌い手の名だ。娯楽の少ないSAOにおいて、彼女のように『歌』を供給するプレイヤーは殆どいないどころか、彼女ただ一人と言っている。

「いやあく……まさかデスゲームであんな綺麗な歌が聴けるなんて……」

リーファがうつとりとした顔で呟き、皆も首を縦に振って再びユナの話で盛り上がった。

「あと、伴奏の人も凄かったですよね！ピアノがとても上手くて！」

「なんていう人だっけ……『ノーチラス』だっけ？」

「あの人、元々血盟騎士団の人だったとか……」

そんな話を繰り広げる仲間達を横目に、ティアが「ふふっ」と微笑

み、

「そつかあ……元気でやってるんだ、あの2人」

遠くを見つめながらそう呟き、ジエネシスも「そうだな」と軽い笑みをこぼす。

ここで時は、一年ほど前に遡る。

—————

2023年10月15日 最前線第四十層

この日は最前線でボス攻略が行われていたのだが、実は裏でとある作戦が行われていた。あるパーティが閉じ込め型トラップにかかって脱出できなくなってしまい、全滅しかけているという情報が入り、所謂攻略組二軍というレベルに相当する者達が救出に向かった。

そしてこの時、1組の男女がこのメンバーに加わっていた。紺色のワンピースの上に白いマントを羽織り、羽付きの帽子を被った少女——ユナと、白い下地に赤いラインの入った騎士風の装備を見に纏った少年——ノーチラス。ユナはこの世界でただ1人と言っていた《吟唱》スキル保有者で、文字通り歌う事でフィールドに立つ物達にさまざまなバフを盛ることが出来るものだ。そしてノーチラスは現在のSAOでもトップクラスの實力を持つ血盟騎士団の団員であるのだが、訳あって彼はボス攻略に参加することができない。

2人とも、かなり緊張した面持ちで目的地へと足を進める。

「ねえ、エー君」

不意にユナが不安げな表情で話しかける。ノーチラスは彼女の声を聞くとその方を向き、そして優しく頭を撫でて微笑を浮かべ、

「大丈夫。君のことはボクが必ず守ってみせるよ」

ノーチラスはそう言いながら心中で覚悟を決める。現実でも幼馴染の関係である彼女を、生きてこの世界から返すために彼は戦い続けている。

やがて一行は現場のダンジョンに到着した。洞窟の中は薄暗くて湿った空気が充満しており、そこを通る者たちに対して並々ならぬプレッシャーをかけてくる。非常に不快な雰囲気が行の心中をじわじわと蝕み、これから何か良からぬことが起きるのではないかと感じさせた。

そして最悪な事に、その予感的中してしまう。

閉じ込めトラップに到着し、中にいた人々の救出は成功したのだが、一行の前に突如としてモンスターの群れが出現した。その数は少なくとも二十体近くおり、しかもその内の一体はこのダンジョンのボスモンスターである。救出部隊の数は10人程度しかおらず、状況は既に絶望的だった。

ノーチラスもまた、彼女を守るようにその前に立って剣を取ったのだが、ここで彼に異変が起きた。目の前にいる獄吏型モンスターを見た瞬間、身体が石になったかのようにぴたりと動かなくなってしまう、目の前には《error》の文字が出現した。

「クッソ……こんな、時につ……!!」

忌々しげに舌打ちをしながらノーチラスは叫んだ。

『FNC』、と言うものがある。所謂「VR不適合者」の意味なのだが、不安な事にノーチラスはそれに該当する者であった。彼の場合、理性よりも生存本能がアバターに伝達され、強敵を目の前にすると身体が凍んでしまうのだ。

誤解されがちだが、彼は決して戦えないわけではない。必死に努力を重ねて血盟騎士団に入る程の実力は持ち合わせており、恐怖もまた克服している。だが、彼の体質の関係上、ノーチラス自身は問題ないのにナーブギアがそれを無視してしまうのだ。

そしてその発作が、よりにもよって最悪のタイミングで起きてしまった。いくら体に力を込めても、手足は一ミリたりとも動かない。その間にも、モンスターはじわりじわりと距離を詰めてくる。周りのメンバーは果敢に応戦するが、状況は全く変わらないどころか徐々に悪化してくる。

だがその時、彼の背後から美しい歌声が鳴り響いた。そしてモンス

ター達は動きを止めて一斉にその方向を見る。

ユナが《吟唱》スキルを使って自身にヘイトを集めているのだ。

「だ……ダメだ！やめろ悠奈!!」

ノーチラスは思わず現実の彼女の名を叫んで止めようとするが、ユナは既に覚悟が決まっているようで少しだけ悲しみを帯びた笑顔を見せると、踵を返して走り出す。モンスターもそれに続いて彼女を追いかける。

モンスターが引いていったのを確認した救出部隊のメンバーは、一斉にボスモンスターに向けて攻撃を仕掛ける。ノーチラスは彼らに對してユナの救出を懇願するが、部隊のメンバーは『全滅を避けるためにここでボスを倒す』という彼にとつて非情な決断を下した。

ノーチラスは何度も彼に對して訴えたが、その願いが聞き遂げられることは無かった。やむなく彼は単独でユナの救出に向かった。

洞窟の奥へ奥へと進んで行くと、行き止まりとなった道に追い詰められたユナが地面に蹲っており、そんな彼女に對して二十体以上の獄吏型モンスターからリンチに近い攻撃を行っていた。既にユナのHPはイエローゾーンにまで減ってしまっている。

「悠奈あ!!」

ノーチラスは無我夢中で彼女の元へ駆け出すのだが、その途中で再び発作が起きてしまい、足が止まる。

「くそっ……たれが!!動け、動けよ!!」

ノーチラスは言うことを聞かない自身の足を思い切り殴りつけるが、それでも彼の足は全く動かなかつた。

ノーチラスはこんな状況でも動けない自分自身に激しく怒り、その悔しさのあまり両目から涙を流しながら叫んだ。

「誰でもいい……頼む！誰か助けてくれ!!僕の全部を捧げてもいい……だから……悠奈を救ってくれえええ!!」

目の前で危機的な状況にある大事な女性を救えない自分の無力さを呪う慟哭と、助けを求める悲痛な叫びが洞窟にこだました。

「お前の望み、聞いたぜ」

その時、背後から男性の声が響き、更に2人の人間が走ってくる音が近づいてくる。

そして、彼の右から赤黒い装備の男性が、左を青と白の女性が走り抜け、一目散にユナに向けて走っていく。

ユナを襲う獄吏型のモンスターの群れに対して、先ず銀髪の女性が刀を引き抜いてユナの前に彼女を庇うように立ち、素早い動作で刀を横一閃に振るってモンスターを切り裂いた。そして赤い髪の男性が赤黒い大剣を両手で構えると、地面に叩きつけて衝撃波を発生させ、周囲のモンスターを纏めて吹き飛ばす。

刀使いの女性と大剣持ちの男性がモンスターの群れを挟撃する形で次々と討伐していく。

「すごい……」

ノーチラスは彼らの戦闘に思わず釘付けになってしまった。2人の戦い方には一切の無駄な動きがなく、最低限の動作で次々と敵を撃破していくその姿は、まさに彼の理想的な剣士のあり方であった。

数分も経たぬうちに、目の前に溢れかえるほど存在していたモンスターの群れは全て消え去っており、それらを片付けた2人は剣を納めてこちらに歩み寄る。

「よお、立てるか？」

赤髪の男はノーチラスに手を差し出す。ノーチラスがその手を掴むと、男は彼を引っ張って立ち上がらせた。一方女性の方は回復結晶を使用してユナのHPを全快にしてくれていた。

「あの、貴方たちは……？」

「ん？ああ……まあ通りすがりに攻略組だ」

ノーチラスが問いかけると、赤髪の男がニヤリと口端を釣り上げてそう答えた。

「攻略組がどうしてこんなところに……今はボス戦のはずじゃ……」

「ボス戦？ああ、サボった」

ユナの問いに対して男があっけらかんと答え、ノーチラスは思わず絶句した。ボス戦は毎度とてつもない厳しい戦いを強いられ、常に戦力が枯渇している状態であると聞いたことがある。しかし、この2人は自分達を助けるためだけにボス攻略を休んだという。

助けてくれたのは本当にありがたいが、そこまでしてなぜ自分達を助けに来てくれたのか、甚だ疑問だった。

するとノーチラスの疑問に気づいたのか、銀髪の女性が答える。

「ボス戦もちろん大事だよ？でも、人の命がかかってるんだもん。こっちに来ちゃいけない理由なんてないでしょ？」

彼らとて悩んだのだろう。ボス戦に行かなければそこで誰かが犠牲になるかもしれない。しかしここで自分達を見捨てればここにいる者たちも死んでいたかもしれない。最前線で戦うもの達に加勢するか、こちらの命を救うか。命に優劣は存在しない。だがどちらかは斬り捨てなければならぬ。それでも彼らは、こちらを助けることを選んでくれた。

「ありがとう……助けてくれて」

「うん、気にしなくていいよ。2人とも無事でよかった」

ノーチラスが礼を述べると、銀髪の女性が柔らかな笑みを浮かべながら答えた。

「僕はノーチラス。まあ血盟騎士団には入ってるけど、訳あってボス戦には参加できないまだまだ弱小のプレイヤーさ」

「私はユナ。エーク……ノーチラスと普段一緒に行動してるの」

ノーチラスとユナが名乗った後、今度は赤髪の男性と銀髪の女性が名乗る。

「私はティア。こっちはジェネシス。普段は最前線にいるの。よろし

くね！」

—————

その後、ノーチラスは自分達を助けた2人があの攻略組の中でも最強クラスの実力を持つ「四天王」の2人であるを知り、彼はジェネシス達に戦闘のレクチャーを頼み込んだ。

2人は快く引き受け、その後フィールドに出てしばらくノーチラスの戦闘を見学していた。

「ダメだな」

全てを見終わったジェネシスがキツパリと一言告げ、ノーチラスは思わず目を見開く。

「悪いがノーチラス、おめえは戦うのをやめたほうがいい」

「そ、そんな……どうして!!」

ノーチラスはジェネシスに掴みかかる勢いで問い詰めた。彼とて、これまでジェネシス達のようなプレイヤーに憧れ続けてひたむきに努力を続けていた。それが、目標としていた人物から面と向かって否定されるのは、ノーチラスにとってこの上ない程にショックであった。

「筋は悪くねえ。だが、こいつはお前に戦う意思があるかどうか以前の問題だ。ノーチラス、お前に戦いはどうしても無理だ」

ジェネシスは淡々と、ノーチラスに対して現実を突きつけた。彼は既に、ノーチラスのもつ障害とその厄介な特性を見抜いており、その上で「無理だ」と口にしたのである。

ノーチラスは思わず地面に蹲った。これまで、大切なユナを守るためにずっと努力し続けていた。その苦労や時間を全て否定された気分になってしまった。

「まあ、おめえも今までそれなりに努力してきたんだってことは理解できた。だが、それでもおめえはもう前線で戦うべきじゃねえ。それ

が克服できない以上、戦いに出ても無駄死にするだけだ」

ジェネシスから発せられる言葉に、ノーチラスは悔しく歯噛みしつつも反論できずにいる。ジェネシスの言うことは全て理解できたと、自分自身納得は出来た。確かに、強敵を目の前にして一步も動けなくなる自分が戦場に出たところで、そのまま鬪り殺しにされるか仲間迷惑をかけて終わるだけだ。だがそれ以上にどうしようもなく、悔しかった。自分自身の手でユナを守り、このゲームを終わらせて彼女と共に現実に帰れたかった。

そんな彼を見かねて、ティアが彼の隣に跪き、背中を撫でながら語りかける。

「そんなに気落ちしなくてもいい。人には向き不向きというものがある。時には出来ないことを受け入れて別の道を進むというのものもある。

それに、戦うことだけがユナを守る手段と言うわけでは無いよ。彼女だって、貴方にずっとそばにいて欲しいはずだと思うよ」

するとユナもノーチラスの隣にしゃがみ込み、ゆっくりとその背中に両腕を回す。

「私は……エー君にはずっと、生きてそばにいて欲しいな……」

「悠奈……」

ノーチラスはゆっくりと顔を上げて、ユナと目を合わせる。

「ま、そう言うことだ。おめえの分まで俺たちが背負って前線で戦ってやるからよ。おめえらはおめえらのやり方で生き続けろ」

ノーチラスはジェネシスの言葉を聞き、しばし目を伏せたのちにやがて口元に笑みを浮かべる。その表情は無念が残りつつも、新しい道を歩むと言う確かな決意が表れていた。

「そう、か……そうだな」

――

その後、ノーチラスが今後どうするのか、どうやってアインクラッ

ドを生きていけばいいのかと言う話し合いが起きた。ノーチラスとしては、下層に引きこもって脱出を待つと言うのは本意ではなく、何かジエネシス達最前線で戦う者を支えられるような役割はないか必死に考えた。

しかし、鍛冶屋をするには一からスキルを取る必要があるし、何よりこの世界の鍛冶師は十分足りていた。

そこでティアが提案したのが、「この世界には娯楽が全く足りないので、ユナの歌を広める活動をしてはどうか」というものだった。具体的には、ノーチラスが各層ですユナの歌唱のイベントを開く。プロデューサーのような役目をすると言うことだ。彼女の案を聞いた皆は賛同し、特にユナは「エー君が私の専属Pになってくれるの!？」と大層嬉しそうに反応した。ノーチラスとしても満更ではないようなので、これで案は纏まった。

しかし、この先インクラッドを生きる中で彼ら2人だけだと何かしら危険が伴う。例えば、彼らがフィールドを移動する際に危険なモンスターと遭遇する可能性もあるし、この先彼らが有名になれば、それをよく思わないプレイヤーに襲われる事もあり得る。なので彼らには護衛をつけようと言う話が上がる。

するとジエネシスが「それならいいアテがある」とメッセージを飛ばす。数分後、彼らの元に6名のプレイヤーが現れた。

「やあ、久しぶりだねジエネシス、ティア」

リーダーらしき長身の男性がさわやかな笑みと共に手を振って歩み寄る。その他のメンバーも皆優しげな者達だ。彼らの左胸には三日月に黒い猫が描かれたマークが付いている。

そう、彼らはジエネシスとティアがかつて自ら鍛え上げたギルド《月夜の黒猫団》。今や中層ゾーンでは向かう所敵無しと言われ、攻略組に最も近いギルドと噂されている。そんな彼らを目の前にしたノーチラスとユナは目を丸くした。

「よお、久しぶりだなケイタ」

「ああ。2人とも相変わらずなようで何よりだ。あの時君たちが鍛えてくれたお陰で、もうすぐ2人のいる最前線に追いつけそうだよ」

「それはそれとして、なんでここに《歌姫》がいるんだ?」

ケイタと再会の挨拶を交わす中、ユナを目にした黒猫団のメンバーが問いかける。

それに対してジエネシスが事情を簡単に説明すると、ケイタは「なるほど」と頷き、

「そう言う事なら、承ったよ。歌姫ユナとその専属Pのノーチラスの護衛、黒猫団の名に掛けて努めてみせるとも」

「あ、ありがとうございます!」

「そっか、ならよろしく頼むわ」

ケイタの力強い言葉を聞き、ノーチラスは頭を下げた。

「あの、それはそれとして……あの方はどうされたのですか?」

その時、ユナが気まずそうにある一点を指差す。皆がそれを聞いてその方向を見た瞬間、思わず絶句してしまった。

「ちよ、待って待ってサチ!!お願いだから落ち着いて!!」

「ウンダイジヨウブダヨワタシスツゴクオチケツイテルヨ」

「オチケツイテルって何!? 全く落ち着いてないよね! てか危ないから槍振り回さないで!!」

「くおえうえーるえうおおww」(p)

そこには、奇声を上げオワタの表情で槍を振り回しながらティアを追い回すサチの姿があったのだ。

「ちよ!? 何あれ!! 何してんのサチの奴!」

ジエネシスが驚愕のあまり早口で捲し立てる中、ケイタは「あ……」と何かを察した様子で目頭を押さえた。

「とりあえずジエネシスには馬鹿野郎とだけ言っておく」

「なんで!? なんで俺がおめえに罵られないと行けねえんだよ! それとサチがあんな事になってる事となんの関係があるんだよ!」

ジエネシスは全く身に覚えが無いため慌てるが、黒猫団の皆は憐れ

みと若干怨嗟を込めた表情でジエネシスを見つめる。

「俺は無実だああああー！！！！」

ジエネシスの叫びがフィールドに響き渡り、目の前の光景にただ困惑するノーチラスとユナだった。

――

約1年後・七十六層アークソフィア

七十六層での講演を終え、その日の宿に向かうノーチラスとユナ。

「エー君、今日も伴奏ありがとうね！」

「ああ。これが今の僕にできる事だ。君の歌をたくさんの人に届けるために、やると決めた事だからな」

あの日、ジエネシスからのアドバイスを受けてノーチラスは『インクラッドの各所でユナのライブを開く企画を提供し、更に自身は『楽器演奏スキル』を取ってピアノの伴奏を行い、ユナの歌を盛り上げる役割を担っている。彼女の歌声は、絶望に満ちたアインクラッドの中で人々の心を確かに癒し、皆に希望を与え続けている。そして今、彼らは七十六層の異変を聞きつけて、下層に戻れない事を承知の上でここにやってきた。全ては、ジエネシスとティアに今の自分たちの姿を見てもらうために。

「今日は、来てなかったね……あの2人」

残念ながら姿を見せなかった恩人の姿を思い浮かべ、ユナはやや寂しげに呟く。

「ああ、そうだな……でも、すぐに会えるさ。彼らはこの層にいるのは間違い無いんだから。」

必ず、聴いてもらおう……君の歌声」

「うん！！」

ユナはノーチラスの言葉に、晴れやかな笑顔で頷いた。

七十五話　デート

アインクラッド攻略も順調に進み、残すところはあと99層のみとなった。モンスターの難易度も飛躍的に上がり、苦戦を強いられる状況下でも、皆はクリアを目指し直向きに攻略に臨む。

そんな中、ジェネシスとティアはアークソフィアの街を2人で散策していた。この日、2人は階層攻略を休み仲睦まじく手を繋いで街を歩き回っていた。攻略が一層苦しくなった今だからこそ、休息は必須だ。今日この日の攻略はキリトや仲間達に任せ、2人はこうして数少ない休みを満喫していた。

「ふふっ♪」

ティアは朝から上機嫌な様子でジェネシスの隣を軽くステップを踏みながら歩く。そんな彼女の隣を、ジェネシスは少し照れ臭そうに後頭部を掻きながら共に歩く。

「……あのなあ、もうこの街は散々歩き回ったろ。もう目新しいもんなんざ無いと思うけどな」

「もお、分かってないなあ久弥は。大事なのは、場所じゃなくて今こうして2人つきりで歩いてるってこと！」

ジェネシスに対してティアが頬を膨らませながら指摘し、ジェネシスは「お、おう……」と気恥ずかしそうにしながらたじろいだ。

「まったくう……まだまだ乙女心に関しては勉強不足だね、久弥は」「いやそんな無茶苦茶な……」

「あ、あそこ……すごい！新しいクレープ屋さんが出来てる！行こう久弥!!」

「んなっ……ちよ、そんな引っ張んなって!?!」

突如街の広場の近くに新しくクレープ屋がオープンしているのを見つけたティアはそれに向けて一目散に駆け出す。

そんな彼らを、遠く背後から物陰に隠れて見つめる者達がいた。イシユタル、オルトリア達幼馴染2人と、ジェネシス達の娘であるAI、レイとサクラだ。

「あーあー、相変わらず人目も憚らず見せつけてくれちゃってまあ」

「なんだか、すごく悔しい気持ちです……」

ため息を吐きつつ呆れた顔でイシユタルが呟き、少々膨れ気味な顔でオルトリアが同調する。

「パパとママ、今日も相思相愛な様子で安心しました！」

「ええ。あの人達の笑顔を見ると、私達も心が温まりますね」

レイは自身の両親が仲睦まじく街を歩く姿を見て嬉しそうに眺め、サクラも頷いて同意した。

4人はジエネシスとティアが更に遠くへ行つたのを見ると、慎重に彼らの後について行つた。

—————

「わあ、いっぱい種類があるね！」

陳列された多数のクレープにティアは目を輝かせた。

「……」

そして甘いものが好きなジエネシスも自然と目の前に並べられたクレープに目が釘付けになる。

「雫はどれにするんだ？」

「ほえ？」

ジエネシスの問いかけにティアは目を丸くした。

「いや、一応デートだから……まあ、なんだ。奢ってやんよ」

しどろもどろな口調で言うジエネシスをティアはしばし見つめていたが、やがて「ふふつ」と軽い笑みをこぼした。

「あははっ！もう、そんなに気を使わなくていいのに。」

でも、久弥がそう言うなら甘えさせてもらうね。どうしようかなあ
……私はイチゴチョコクリームにしようかなあ
「んじや俺は……キャラメルスイートポテトにしようかなあ」

そしてジエネシスは2人分のクレープ代を支払い、それぞれクレープを手にとって近くの噴水が設置された広場に赴き、草地に座り込んだ。

「あむ……んん、おいしい……！」

ティアはジエネシスに貰ったクレープを一口頬張り、その甘味に頬を綻ばせた。

ジエネシスも自身が選んだキャラメルスイートポテトのクレープを一口食べると、その味に舌鼓を打った。

するとジエネシスはティアが視線をこちらに向けているのに気づく。ティアはジエネシスのクレープをじっと見つめていた。

「あの……一口、あなたの欲しい」

ティアはやや申し訳なさそうに、しかし物欲しそうな目と口調でねだった。ジエネシスは何も言わずに自身のクレープを差し出す。

ティアはしやがみ込んだまま前傾姿勢を取り、腕で胸元を寄せて右手で右耳にかかった髪をかきあげると、一口彼のクレープを齧る。

「はむっ……ん……美味しい」

するとティアは反対に自身のクレープを彼に差し出す。

「ん、私のも食べて」

「おっ、いいのかよ？」

ティアは「はい」と彼の口元にクレープを近づけ、ジエネシスはそのまま一口彼女のクレープを食べた。

「……んん、美味しいな」

彼がクレープを食べたのを確認したティアは少し頬を赤らめて

「えへへ……間接キス〜♪」

と嬉しそうにはにかむ。ジエネシスは思わず「ぶふっ!？」と吹き出してしまった。

「手を繋いで、間接キス達成したから……これでノルマの2つは達成できたね」

「の、ノルマ？」

ジエネシスがティアの口から飛び出した単語に咳き込みながら問いかける。

「あ、そんな大したやつじゃないよ？今日デートするに当たって『これだけは済ませよう』って言うのを私が決めただけだから。全部で3段階」

「さ、3段階……???じゃああと一個はなんだよ」
「えつとね……」

するとティアは蠱惑的な笑みを浮かべながらジエネシスに擦り寄る。

「それはね、〃2人の身体を接触させて、愛情を確かめ合う〃だよ」
「せ……接触う!？」

ジエネシスは〃接触〃という単語に反応して思わず赤面する。
「じゃあ……久弥……」

ティアはうつとりとした瞳で彼を見つめ、
「……ハグ、しよう?」

「は、ハグ?……ああ、そっちな」

それを聞いたジエネシスはホッと胸を撫で下ろした。するとそれを見たティアは悪戯な笑みを浮かべ、

「あれえく?久弥、何を想像しちゃったのかなあ?」

「は?あ、いや別に何もやましいことは想像してねえからな!本当、何にも!」

「んん?ひよつとして……」

ティアは自身の太腿を指でなぞって股部に持っていく、そのまま胸元のV字ネックに指をかけ、そのままゆっくりとおろして豊かな谷間を覗かせる。

「〃こつち〃の方が、したいの?」

「な、何言ってるんだ!!こんな街中でおっ始めるとか……!」

「じゃあ、街中じゃ無かったらいいんだ?」

思わぬ誘導尋問を受けてジエネシスは一瞬「うぐ……」と黙り込み、すぐ様否定しようと口を開くが……

「いいよ……私、久弥だったら何でも受け入れるから……ね……?」

そう言つてティアはジエネシスの首元に腕を回し、そつと口づけを交わそうと顔を近づけていく。

その時だった。

「は——いそこまで——!!」

突如後ろから静観していた筈のイシユタルが乱入し、ティアの頭を

蹴飛ばした。

「いったあ!? な、なに!? え? 凜ちゃん? ナンデ??」

「あのねえ、正直口出しもしたくなかったし、せっかく仲良くデートしてるみたいだから、邪魔しないように気をつけるつもりだったけどもう無理! 街中であんなの見せつけられたら段々腹立ってきたから乱入しちゃったのだけわ」

「ついでに私もいますよ」

「パパ、ママ! 私たちも居ますよ」

そしてイシユタルに続き、ムスツとした顔でオルトリアが、満面の笑顔でレイが続き、最後に気まずそうな表情でサクラが「どうも」とおずおずと続く。

「ああ、もう! 久弥の事はきっぱり諦めたつもりだったけどやっぱり辞めた!! こうなったら私もイチャイチャさせてもらうんだからね!」
「わ、私も……」

そう言つてイシユタルとオルトリアは同時に「えーい!」とジェネシスに飛びついた。

「ギャー! な、なんだ何してんのおめえら!」

「ちよ、ちよつと!! 2人とも久弥から離れてよ!! そこは私の場所なんだから!!」

ティアは驚愕と同時に慌てて2人を引き剥がそうとするが、イシユタルとオルトリアの腕の力が思いの外強く中々離れない。

「むく……じゃあ私もぎゅーってしちゃうんだから!!」

そしてティアはどうとう自棄になつてイシユタル、オルトリアに覆い被さるようにジェネシスに抱きつく。

「あーっ!! 皆さんずるいです! パパ、私たちもです!!」

「あ、じゃあ私も行きますよ!!」

するとその流れに乗じてレイとサクラもその上から覆い被さった。
「ちよつと待つてええ!! おめえら、一回落ち着いて……アツーー!!
死ぬうううー!!」

その日、多数の女性に覆い被さられて絶叫するジェネシスの声が街中に木霊した。

あれから一悶着あって、少女たちははしやぎ疲れたのかジエネシスの目の前ですやすやと草原で寝息を立てている。

「……ったく、人をあんだだけ玩具にしといててめえらはさっさとおねんねってか」

ジエネシスは自身の横に寄りかかるように眠るティアやイシユタル達を眺めて1人そう愚痴をこぼした。そんな彼の頬を、さわやかな風が優しく撫でるように吹き抜ける。

1人、ジエネシスは心中でこの穏やかさに少しホツとしていた。しばらく激しい戦いが続き、心身共に疲弊していたので、こんな日が続いたら……と柄にもなく願ってしまう。

だが、無常にも運命は彼に、その仲間たちに戦いを強要する。いつかこのゲームを終わらせるために。

この日の夜、攻略を終えたキリトたちがついに99層のボス部屋を発見したと報告し、彼らはいよいよ目の前まで迫った試練にいつそう身を引き締めた。

だが、この時彼らはまだ知らなかった。この後待ち受ける、想像を絶する試練の難易度を。

そしてその後待ち受ける、とある悲劇を……。

七十六話 戦いの始まり

キリト達から告げられた、99層ボス部屋発見の知らせ。それは、ジエネシス一行に告げられた決戦の合図であった。ここをクリアすれば100層は目前、即ちゲームクリアがすぐそこまで迫った事を意味する。ここまで、長く苦しい戦いを強いられてきた彼らだが、もうじきその戦いも終わる。

だがそれは同時に、これから待ち受ける99層ボスがこれまで以上の難敵であろう事は皆も容易に予想出来た。

「それで、ボスについて何か情報は？」

「それが……済まない。偵察は出来なかったんだ」

通常であれば、これから戦うボスがどのようなモノなのか、中に入ってその姿形だけでも確認するのだが、どうやらキリト達はそれが叶わなかったらしい。

と言うのも、ダンジョンのトラップを見極めるスペシャリストであるフィリアや、更にこの世界のシステムや仕組みに精通しているストレアが、このボス部屋に入るのを阻止したらしいのだ。このボス部屋は、一度入ったらボスを倒すか全滅するかまで出られないタイプの部屋らしく、キリト達だけでこの部屋に入るのは無謀に過ぎたので、偵察は諦めたそうだ。

「ぶつつけ本番ってことか……参ったなこりゃあ」

ジエネシスはやれやれと苦笑いしつつぼやいた。

「でも、私たちは行くしかありません。皆さん、可能な限り準備を整えてボス戦に挑みましょう。決戦は、明後日の正午に行います」

攻略組のリーダー的存在であるアスナがそう締めくくり、その日はお開きとなった。しかし、場の空気はとても重い。

彼らを待ち受ける強敵。それに対する不安を抑えきれずにいた。

会議が終わった後、もう夜も遅いので皆は自室に戻って行った。だが、ベッドに横になってもジエネシスは全く眠れなかった。いよいよ目前まで迫った、99層ボス戦。これ乗り越えればSAOクリアがもう目前となる。だが、今回のボス戦は間違いなく過去最高の難易度

だ。それを前にしたジエネシスは、プレッシャーや様々な感情が胸中で渦巻き、中々眠れずにいた。

ベッドから徐に起き上がり、少し夜風に当ろうと部屋を出た。階段を降りて食堂に降りると――

「え、お前ら何してんの??！」

ジエネシスは思わず目が点になった。

そこにはティアを始めキリトやアスナ、更にシリカやシノン、サチ、その他仲間達が全員集まっていたのだ。

「あ、久弥おはよう〜」

「おはよう〜、じゃねえよ。まだ深夜だよ」

「お前も寝れなかつたんだな」

キリトが苦笑いしながら話しかけ、ジエネシスは「ま、そんなことだ」とため息を吐きながらティアと同じ席に座り、同じく起きていた食堂のオーナーであるエギルにコーヒーを注文した。

「お前、余計寝れなくなるぞ」

とエギルは呆れつつもコーヒーを即座に作成し、ジエネシスに手渡した。

彼がふと隣を見ると、ラフな格好のティアが自席で自身の刀の刀身を麻の布で磨いていた。ゲームの世界でその行為は果たして意味をなすのか分からない所ではあるが。しかしそうする事で心なしか刀身が美しくなっているように感じられた。

「うん、こんなものかな」

ティアは満足げに頷くと、刀身をゆっくりと鞘に収めた。

その後、ティアは「少し素振りをしてくる」と告げると立ち上がって食堂を後にした。

それを見送ったジエネシスは、ゆっくりと辺りを見回す。少し離れた席ではリーファ・シリカ・サチ・サツキとハツキ兄妹が談笑を交わし、カウンター席ではシノンが読書を嗜んでいる。そして別の席ではツクヨがフィリアに技の型を伝授しており、その隣でリズベットとヴォルフが明日の営業について話し合っているようだった。

皆、自身と同じくボス戦に対して何かしらプレッシャーや不安を感

じているようだが、以前のようになんか怖がっている様子もなかった。不安や恐怖もある中で、仲間と励ましあったり、備えを整えるなど今自分にできる事を模索している。

ジェネシスはそれらの光景を見て軽く笑みを溢すと、自身も夜風に当たろうと食堂を後にした。

扉を開けて大通りに出ると、当然街は真っ暗だった。辺りを照らすのは路上の街頭と、76層の天井に据え付けられた星に似せた光のみだ。

その路上で、ティアが刀の素振りを行っていた。両手で刀の柄を握り、両腕を真上に伸ばす。刀身が街路樹を反射して銀色の美しい光を放つ。

それをティアは勢いよく真下に振り下ろした。そして続け様に刀を左腰に溜めると、刀身が真っ赤な光を帯び始める。ティアはそれを引き抜くと同時に前方へ突進しながら多方向に刀を振り抜いていく。炎のエフェクトを放ちながら怒涛の連撃を叩き込む技、『緋吹雪』だ。

真っ赤な火の粉のような残火が周囲を舞い、夜の街をうつすらと照らす中、ティアは刀を右手の中できると回転させると、ティア自身かなり満足のいく仕上がりだったのか、うんうんと頷きながら納刀した。

「やっぱその技、中々チートじゃね？」

一連の動きを見届けていたジェネシスは彼女の方へ歩み寄りながら話しかけた。

「ちよ、久弥見てたの!？」

ティアはジェネシスが見守っていた事に気づいていなかったよう、ビクリと身体を震わせた後ジェネシスの方を向いた。

「全くもう……居たなら声かけてよね」

「そんなタイミング見当たらなかったんだが」

その掛け合いをした後にしばし沈黙が訪れる。2人の間を、ひんやりとした夜風が通り抜ける。

「……勝てるかな、ボス戦」

「さてなあ……」

不安げに尋ねるティアに対しジエネシスはそう言つて天を仰いだ。「ま、絶対勝てる……とは言い切れねえな、こればかりは。ま、やるだけの備えはして、後は全力を尽くすだけだな」

「そっか……そうだよな。今のうちにやれる事、全部やろうきつと勝とうね。勝つて必ず、みんなで現実に帰ろうね」

「ああ。たりめーだ」

2人がそうして決意を固めた時だった。

「あの……少しいですか？」

そこへやつて来たのは、彼らの娘であり現在ある「呪い」のようなアイテムを付けられているサクラだった。彼女はかつてSAOにおいて最も強力と言えるスキルである回復スキルを保有する者だが、その腰に巻き付けられた特殊な装置の影響でサクラが暴走する危険性があり、しばらくボス戦から引いていたのだ。

「よう、こんな時間にどうした？」

「無茶であることは承知してます。それでも、お願いしたいことがあるんですー」

サクラはそこですう、と深呼吸を挟み、ゆっくりと口を開く。

「私を……ボス戦に参加させてください」

――

ボス部屋が発見されて1日が経ち、その間参加メンバーは各々が可能な限りの準備を整え、いよいよその時を迎えた。

統率のリーダーであるアスナはこの日、目前まで迫った99層ボス戦に向けて、時間ギリギリまで準備をしていた。具体的には回復ポーションの補充や武器のメンテナンスなどに不備がないか入念にチェックする。

街は同じくボス戦に参加する者たちが戦いの準備を整えるために商店街に集まっており、その人混みの中をアスナはかき分けるように

進んでいく。

そんな時だった。

「アスナさんっ!」

彼女を呼び止める女性の声が響いた。アスナはその声に聞き覚えがあり、跳ねるように振り返る。そこには小柄で華奢な体型の、黒のロングヘアーを三つ編みのおさげにまとめ、黒の瞳で眼鏡をかけた少女がいた。

「アキ!!久しぶり!!」

アスナは目をパアツと輝かせてアキと呼ばれた少女に駆け寄った。彼女の名は『アキレア』。血盟騎士団の副団長を務めるアスナの護衛役であり、古い親友の1人だ。75層での大規模エラーが発生してから、長らく姿を見かけていなかった。

「アキちゃんもしかして今回のボス戦に……?」

「ええ。大変な戦いになると聞いて、居ても立っても居られなくなっ
て……」

話を聞くとどうやらエラーにより下層に残されたメンバーをアキレアはアスナに代わって取りまとめており、いつか来るであろう決戦に向けてひたすらメンバーのレベルアップを行っていた。そして今回99層ボス戦が行われるにあたり、アキレアは残りのギルドメンバーを率いて満を辞して最前線に戻って来たのだ。

「そっか……そうだったんだ……本当にありがとう。アキちゃんがい
るなら百人力だよ!よろしくね!」

「そ、そんな!百人力だなんて……でも、必ずお役に立って見せます。
必ず勝ちましょうね!!」

—————

正午・アークソファイア転移門広場

ついに、時は来た。広場にはジエネシスやティア、キリト達四天王を始めとしたメンバーや、アキレアが連れてきた血盟騎士団全軍、その他今回の戦いに参加するハイレベルプレイヤー達が一堂に集まっていた。とはいえ、76層に来た当初に比べればその数は半分以下になってしまっているのだが。彼らは皆それぞれ最終チエックを行ったり、仲間と戦前の他愛のない会話を交わしたりしていた。

「ねえ、あそこにいるのって……アキじゃない？」

そして、アスナと同じく旧友の存在に気づいた者が1人。今やインクラッド内では最高峰の腕を持つとされる鍛冶師のリズベットと、「あ、本当だ……そっか、彼女も一緒に戦ってくれるんだ」

リズベットの助手のヴォルフ。2人はアキレアの堂々とした佇まいを後ろから見つめ、安心したようになって笑みを浮かべた。本当なら彼女に話しかけたいところではあるが、最早そのような時間は残されていない。

やがて集団の前に、アスナが凜とした面持ちで壇上上がる。

「では皆さん……行きましょう」

アスナは全員を一度見回した後、静かにそう告げて懐から回廊結晶を取り出し、99層ボス部屋扉前の道を開く。

ゲートを潜った先は、薄暗い神殿のような場所だった。綺麗な形の石レンガで構成された建物の中に、漆黒の鋼鉄でできた高さ5メートルほどの巨大な扉が聳える。これまで見てきたボスの扉の中でも今回のそれは規格外の大きさで、これから戦いを挑む者達にこの先に待つモノがいかに強大な敵であるかを肌で感じさせる。だが、これほどのものを前にしても、誰一人狼狽える者は現れなかった。

再び、先頭に立つアスナが皆の方を振り返る。

「では、最後の確認を行います。と言っても、このボスに関しては殆ど情報がありませんので、ぶっつけ本番になります。ですが、私は信じています。今、ここに集ったメンバーであれば、必ず勝てるよ。」

「……行きましょう。現実に帰るために」

アスナがそう締めた直後、メンバーからは大きな雄叫びが飛び交った。皆、気合は十分なようだ。アスナもそれを聞いて満足げに頷く

と、振り返って巨大な扉に相対する。

そして、その扉を左手でゆっくりと押した。その瞬間、扉は大きな地響きと全身を震わせるほどの轟音を鳴らしながらゆっくり、ゆっくりと開いていく。一堂の歓声は一斉に鎮まり、静かに突入の待を待つ。

「っ、あたし、ちゃんとやれるかなあ……」

ここで、メンバーの1人であるシリカがやや不安げに声を漏らす。シリカは元々中層ゾーンのプレイヤーで、75層のエラーを聞いて急いで駆けつけた者だ。そのため当初は最前線で戦うには全くレベルが足りず、死に物狂いで鍛錬してようやく追いついた。とは言え、やはりボス戦の経験がジェネシス達に比べて圧倒的に少なく、更にシリカの年齢はまだ10代前半。歳不相応な過重なプレッシャーがシリカの両肩にずっしりとのしかかる。

「大丈夫、きっと大丈夫だよシリカ。もう貴女は十分強い。なんだつてやれる。それは一緒に努力してきた私が保証するよ」

そんな彼女を、同じく中層ゾーンから途中参戦したサチが優しく諭す。彼女もまた、シリカと同じく血反吐を吐きそうなくらいの努力を積み重ねて漸く最前線で通用するほどの実力を身につけた。共に頑張ってきた仲間の励ましを受けたシリカは笑みをこぼし、

「ありがとうございます、サチさん。必ず勝ちませうね！」

「うん、もちろん！」

そう言ってシリカは腰から短剣を、サチは長槍を取り出した。

「ピナもよろしくね？」

『きゆるっ！きゆるるっ!!』

シリカはパートナーであるフェザードラのピナにも声をかけた。それに対してピナは得意げな表情で異性のいい声をあげて応えた。

場所は変わって、集団の中央部。ここには黒白の兄妹と呼ばれるサツキとハツキが並んで立っていた。

「はあ……どうとう、ここまで来たんだなあ」

サツキは1人、ため息を吐きながらそう呟く。思えばここまで本当に色々なことがあった。苦しいことも、辛いことも、逃げ出したくな

るような理不尽なことも。

しかしそれらは全て、今こうしてここにいる最愛の妹であるハヅキがいたからこそ乗り切れた。そう思い至ったサツキはここで改めて、必ず妹を守り切ろうと決意を固めた。

「……生きて帰ろう、ハヅキ」

「うん。もちろんだよお兄ちゃん。私たちならきつとやれるよ」

そしてサツキは双頭刃を、ハヅキは弓と一本の矢を取り出して構えた。

そんな兄妹を、暖かい目で見守る人物が3人。ハヅキと同じく妹ポジションであるリーファと、射撃武器使いのシノン、そして救国の乙女の名を持つジャンヌ。

「あーあ、あつちはあつちで仲良さそうでいいなー」

リーファはハヅキの後ろ姿を、羨ましそうな目で見つめながら呟いた。現実では兄であるキリトとは少し距離があり、それでもリーファは敬愛する兄の為にリスクを承知でこのデスゲームに飛び込んだ。今となっては兄妹の仲はかなり良好なものとなったが、それでもリーファにとってはサツキとハヅキこそが理想なのだろう。

「ま、あいつそういうところ鈍いっぽいしね。ジエネシスも似たところはあるけれど」

その隣でシノンは同情と憐れみを込めた表情でリーファを見つめながら言った。

「だからあたし、この戦いも絶対に生き残ります。この戦いも、この次の戦いも生き残って、現実に帰ったらお兄ちゃんにうんと甘えてやろうって思っています」

「ええ、そうしてやりなさい。そうでもしなきゃ、キリトみたいな鈍感には気づかないでしょうし。」

でも、私もそうね……この世界から出たら、ジエネシスをご飯に誘ってやろうかしらね」

シノンはリーファの決意に便乗してニヤリと笑いながらボウガンを取り出す。シノンはリーファと同じく外部からの参戦だが、リーファと違いエラーで巻き込まれた者だ。

そして幼少期にとある事件に巻き込まれ、それが今でも心の傷となっている。その為、この世界に来た当初は自棄気味に無茶なレベリングなどを繰り返していたが、それをジエネシスが止め、いつしか彼の存在がシノンの支えとなっていた。シノンはそれ以来、少しずつではあるがあのトラウマに向き合いつつある。

「生き残りましょう、必ず」

「はいー」

シノンとリーファは力強く言葉を交わすと、シノンは矢をボウガンにセットし、リーファは片手剣を構えた。

2人を隣から見つめるジャンヌは、優しげな笑みを浮かべて見つめていた。

『強いですね、お二人とも……いいえ、ここにいる皆さんは本当に強い』

ジャンヌはこのゲームにおいてかなり珍しい海外のプレイヤーだ。母国語が通じずほぼ2年余り、たった1人で過ごしていた。

ジャンヌは強靱な精神を持つ人物だが、孤独を感じていなかった訳ではない。むしろ、ジエネシス達と遭遇した時は孤独が限界に達しそうになっていたのだ。

しかしここで漸く言葉が通じるようになり、更にジエネシスやその仲間達は皆気さくで人がよく、直ぐに打ち解けて今となってはかけがえのない親友になっている。

そんな彼らを、ジャンヌは守りたいと感じていた。例えこの身を賭けてでも、自分の孤独や寂しさを埋めてくれた仲間達を失わない為に、ジャンヌはこれまで守護の御旗を振り続けた。そして今日も、ジャンヌは旗を振るだろう。敬愛する仲間達を守る為に。

『主よ……どうか我らをお守りください』

ジャンヌは祈りを捧げると、旗を両手で高く掲げるように構えた。集団のやや後ろの方で、緊張した面持ちで立つフィリア。そしてその隣には、余裕のある佇まいでキセルを加えるツクヨ。

「そう固くなるでない、フィリアよ。これまでの鍛錬をこなした主に最早越えられぬ壁などありません」

「あはは……あの鍛錬はキツかったなあ……」

フィリアはどこか遠い目で鍛錬の日々を思い出しながら呟く。

「フツ、あの程度の鍛錬なぞ朝飯前よ。わっちの師匠の鍛錬はアレの5倍はきついぞ?」

ツクヨの言葉にフィリアは「え、っ ……」と思わず絶句した。

「……一体どんな鍛え方なの?」

「ふむ、それを知りたくば生きて帰って実際に体験してみるほうが早いじゃろう。なに、主ならば必ずやれるとも。

……ともあれ、何よりまずは目の前のボスじゃな。話はそれを終わらせてからじゃ」

「うんー今日もよろしくお願いします、師匠!」

満面の笑顔でいうフィリア。そんな彼女に一瞬面食らったツクヨは目を丸くしていたが、やがて困ったような笑みを浮かべてキセルをひっくり返し、灰を捨てる。

「やれやれ、師匠呼びとはこそばゆいものじゃな」

そしてキセルを懐にしまうと、両手に苦無と手裏剣を取り出し、フィリアは腰からソードブレイカーを引き抜いた。

「はあ……毎回思うんだけど、まさかアンタとこうして肩を並べて戦うなんてすごく変な気分なのだわ」

「それはこちらと同じですよ凜ちゃん」

巨大弓、マアンナの最終調整をしながらイシュタルは呟き、その隣でオルトリアが袋に詰め込んだカステラを頬張りながら答えた。

「待ちなさい、あんたこれから大事な戦いだって時になに呑気にお菓子食べてるのよ」

「これを食べないと私の中のオルトリアクターが不調になるんです。だからこれは必要な燃料補給です」

イシュタルの問いかけに対してオルトリアはなにも悪びれる様子もなく答えた。

「オルトリアクターとかなんだかについてはもう突っ込まないでおくのだわ。それはそうと、私にも一っだけ頂戴な」

するとオルトリアは一瞬「むー……」と頬を膨らませた後、カステ

ラを一個取り出してイシユタルに渡した。

「あら、珍しいじゃない。アンタがタダでお菓子をくれるだなんて」

「これは経営戦略というものです。この戦いが終わったら、私のお店のお菓子沢山買ってください」

「あー、はいはい。山ほど買ってやるわよ。雫と一緒にね」

イシユタルは懐から宝石類を取り出しながら最終チェックを終えた。

「言質は取りましたからね凜ちゃん……」

オルトリアはしめたと云わんばかりの笑みでそう返し、ビームサーベルを展開した。

集団の先頭付近では、やや俯き加減のサクラが1人立っていた。その隣には彼女の姉に当たるストレアが大剣を肩に担いで立っている。

「……サクラも来ちゃったんだね。このボス戦に」

「はい。M H C Pの名にかけて、私は皆さんの役に立ちます」

昨夜、ジエネシス達にボス戦参加を願い出たサクラ。当然2人はサクラの身を案じて反対したのだが、彼女が必死に説得した結果ジエネシスが折れて参加を認められたのだ。

「でも……それでも、姉さん。もし私が抑えきれず暴走してしまったらその時は」「やめて」

サクラの言葉をストレアは鋭い声と表情で遮った。

「アタシに……妹を殺させないで。アタシの力はその為にあるんじゃない」

ストレアは両目にうつすらと涙を溜めながら悲痛な声で言った。

「くっあーっ！やめやめ！大丈夫、サクラは絶対みんなが助けてくれる。だから安心して、いつも通り笑顔で行こう！」

「姉さん……ふふっ、そうですね。ここには頼れるお父さんやお母さん、そして皆さんがいる。なら、もう余計なことは考えずに全力で行きます」

いよいよ腹を括ったサクラは両手で頬を2、3回叩き、ストレアは大剣を引き抜いて右肩に担いだ。

「ヴォルフさん、リズさん！」

ここでアキレアが旧友のヴォルフとリズベットに気付き、彼らの元に駆け寄った。

「やあ、アキさん」

「久しぶりね、アキ。さっき見かけたんだけど声かけられなくて」

「お二人とも私がいること気づいてたんですか!?!なあんだ、サプライズのつもりだったのに」

アキレアは2人を驚かすつもりだったようだが、それが叶わなかったことに少々肩を落とした。

「積もる話は色々あるけど、それもこの戦いが終わってからだね」

「はい。必ず乗り切りましょうね!」

ヴォルフは背中からバトルアックスを、リズベットは右腰にマウントされたメイスを取り出し、アキレアは左手に持った盾に差し込まれた片手剣を引き抜く。

その時、不意にヴォルフがアキレアに尋ねる。

「その……アスナのことは、もういいのかい?」

「……ええ、大丈夫です。だって」

そしてアキレアは先頭の方に視線を向ける。その先には、アキレアが慕うアスナと、その隣に寄り添うように立つキリトの姿があった。

「あの人には、頼れる『黒の剣士』がいますから。あの人の幸せが私の幸せだから……これでいいんです」

集団の最前列でゆっくりと開くドアを至近距離で見つめるアスナ。その隣に、キリトは立った。

「どんな敵が待っているようが、俺は必ず君を守る。必ずだ」

「……うん、信じてる。私も君を必ず守るよ。必ず、勝とうね!」

2人は頷き合うと、それぞれの獲物を引き抜いて構えた。キリトとアスナから少し離れた所に、ジェネシスとティアは立っていた。

「久弥……」

不意に、ティアが口を開く。

「生きて帰ろうね、アークソフィアに……現実世界に」

「……おうよ」

ジェネシスは一言だけそう返すと、背中から大剣を引き抜く。そし

てティアも、左腰から白銀の日本刀を素早く引き抜き、両手で構えた。

そんな彼らを、集団の最後尾から見つめる男がいた。ティアの実父、ミツザネ。

彼はこの戦いが始まる前から、今まで感じたことのない違和感を感じていた。それが一体何なのか、彼自身にもよく分からなかったのだが、いざボス部屋の扉を前にした瞬間、それがようやく理解できた。今、この瞬間ミツザネの本能が警鐘を鳴らし続けている。

—— “お前は、ここで死ぬ” ——

彼の遺伝子が、心が、直感がミツザネ自身の敗北、そしてここで命が終わることを宣言していた。

しかしミツザネは、右手で自身の股部に手をかける。

「……ガタガタ五月蠅え」

そして右手で自身の金的を思い切り握りつぶした。

「……俺あ死ぬのなんざ覚悟の上でここに立ってんだ。この身を犠牲にしようとも……こいつらの未来は守って見せらあ」

そう言つて、ミツザネは指の関節を『ゴキリ』と鳴らす。

全員の覚悟がようやく決まった時だった。部屋の扉が完全に開き切った。

「戦闘——開始!!」

アスナの号令が掛かるとともに、攻略組は一斉に部屋の内部へと突入していく。

だが、部屋に入つてそこに待つ主人の姿を目にした瞬間、全員が足を止めた。

そこに居たのは、これまでのような異形のモンスターや巨人などではなく、純然たるヒトの姿だった。全身は真っ黒なタイツに覆われ、胴体や肩には真紅の甲羅のような鎧を纏っており、頭部は遠くからでも目立つ大きな赤い瞳と、頭部にあるクワガタのやうな鋭い2本の角が生えている。

『かつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を持った古代の戦士がいた』

その足元に、日本語で記された碑文があり、皆がそれを読んだ瞬間にボスはゆつくりと歩き出す。

頭部にはボスエネミーであることを示す赤いカーソルが灯り、『The Ancient Warrior—“Kuga”』と表示された。

今、〃古代の戦士〃と勇者達の戦いの火蓋が、切つて落とされた。

—————

戦いの瞬間を、違う場所から見つめる存在がいた。ここはホロウエリアの管理区。

ここに、真っ白な着物を見に纏った淑やかな女性、『シキ』。彼女は悲痛な表情で戦いの現場をモニタリングしていた。

「どうか……どうか生き延びて」

彼女は両手をぎゅつと握り締めながら願った。

「今回のボスは改変されている……あの男によって。」

本当にごめんなさい……もう、私にはどうすることも……!」

シキの手は、悔しさのあまりカタカタと震えていた。

七十七話 開幕・99層ボス

石レンガで構成された威厳ある闘技場のようなフィールドに、プレイヤー達の怒号が響き渡る。皆それぞれの獲物を手に一斉に駆け出し、目の前に立ちちはだかる真紅の戦士に突っ込んでいく。それに対して赤き古代の戦士——クウガは直立の体制から視認不可能な程の速さで駆け出し、一瞬でプレイヤー達との距離を詰めて捕捉した重装備の男性プレイヤーの鳩尾を拳で殴りつけた。

「ぐうおああ?！」

男性はパンチのダメージでその場から数メートル後方まで吹き飛ばされ、身につけていた胴体の重厚な鎧が弾け飛んだ。彼が身につけていた鎧は防御パラメータが高めに設定されていたものであるため、それを一撃で破壊せしめたクウガの破壊力は、歴代ボスの中でも屈指の高さを誇るのだと言うことをメンバーはこの一撃の攻撃で察知し、皆は一層気を引き締めた。

攻略組の指揮を執るアスナが全員に支持を飛ばし、盾役を前にクウガの全方位を囲みながら接近するという作戦がとられ、ジャンヌやエギルと言ったHPと防御力が比較的高めのプレイヤーが最前線でクウガに突っ込んで行き、その後ろにヴォルフやジェネシスと言った攻撃力の高いプレイヤーが続くという陣営で果敢に攻め込む。

まず、一番前に立っていたジャンヌがクウガと接敵した。クウガが左右の拳を交互に繰り出してパンチのラッシュを浴びせるが、ジャンヌは旗の持ち手で器用にそれを弾いていく。ジャンヌがここまでクウガのパンチを捌けるのは、単にジャンヌの防御力が高いというだけでなく、彼女の筋力値が現在この場にいるプレイヤーの中でもトップクラスの高さを持っているからだ。

「こつちを忘れてもらっては……困ります!!！」

クウガがジャンヌに集中攻撃を浴びせている隙をつき、アキレアがクウガの横から片手剣ソードスキル『ヴォーパル・ストライク』による重い刺突攻撃を決め、クウガを吹き飛ばす。

「グウレイトだぜアキさあああああん!!！」

地面に仰向けになって倒れ込んだクウガに対し、すかさずヴォルフが大ジャンプしてクウガの真上からハルバードを振りかぶり、両手斧スキル『ワール・ウインド』を叩き込む。

斧の刃が轟音を立ててクウガの胴に深々と突き刺さり、HPを大きく削った。しかしクウガは胴体に叩き込まれた斧の刃を掴み取ると、そのままヴォルフごと斧を投げ飛ばした。ヴォルフはしばらく宙を舞ったのちに地面に落下し、さらにクウガは追撃を加えるために彼に向かつて駆け出す。

「やらせないってのー！」

だがそれを、リズベットがクウガの背後から片手棍スキル『トライス・ブロウ』で無防備な背中を殴り、さらにシノンが遠距離から射撃スキル『シングル・ショット』でクウガの背中を正確に射抜いた。その攻撃を受けて一瞬怯んだ隙についてシリカ、フィリアが滑り込みながら両足の脛脛を斬りつける。足を切られて体制を崩したクウガに、正面からイシユタルが顎に飛び蹴りを叩き込み、さらに続けてオルトリアが胴をビームサーベルで挟むように斬り込み、そして立て続けにイシユタルが大型弓《マアンナ》で極太のレーザー光線を放つ。

「オラアアアアアアア!!!」

クウガがイシユタルの放った光線に焼かれた直後に、ジエネシスが大剣を横薙ぎに振るってクウガの胴を叩きつけた。その威力によってクウガは空のペットボトルのように軽々と吹き飛んでいき、石レンガの壁に衝突した。

「いいぞ、攻撃を緩めるな!!!」

キリトが指示を飛ばしながら双剣を構えてクウガに突っ込んでいく。右手の黒剣を上段から振り下ろし、続けて左手の真紅の剣で突き技を放つ。しかしクウガは素早い反応でキリトの両手首を掴み取ると、そのまま背負い投げで地面に叩きつけ、さらにその胴を蹴り飛ばす。数メートル地面を転がったキリトに、クウガは追撃をかけるために彼目掛けて駆け出す。

だがその道にツクヨが割り込み、左右の手に逆手持ちで握られた苦無を素早い動作で繰り出していく。ツクヨの無駄のない洗練された

動作で苦無の斬撃が襲いかかるが、クウガはそれを拳で容易くあしらっていく。短剣特有のスピードによる攻撃をもともしないクウガだが、ツクヨは苦無を繰り出す中でカウンターの回し蹴りを顔面にヒットさせ、体制を崩したクウガに対し苦無術《雷電纏・迅雷一閃》を発動し、稲妻の如く電気を纏った苦無をクウガの両肩に突き刺す。

「行くよえつちゃん！」

「りょーかいです」

続いてティアとオルトリアが刀とビームサーベルを手に駆け出し、刀居合スキル《辻風》・双頭刃ソードスキル《ライトニングスラッシュ》でクウガの腹を左右から斬り上げた。これで残りHPは最後の一本の半分まで減少し、あと少しというところまで来た。

だがその時、クウガの身体に異変が走る。ツクヨが突き立てた苦無、そしてオルトリアが放った電気系ソードスキルによる電流が「バチバチツ」と音を立てながらクウガの全身を走る。そしてその肩アーマーの縁、腰のベルト周り、そして右足の足首周りがゴールドのアーマーに変化した。

「ここに来てパワーアップしたって言うの……?」

一連の光景を見ていたアスナが思わずそう声を発し、全員もクウガの方を見て固まってしまう。その不意を突いてか、クウガは腰を深く落とし、そして勢いよく駆け出す。一步、2歩と力強く踏み締めたのちに空中へ飛び上がり、前方宙返りをしたのちに攻略組全員に向けて飛び蹴りを放つ。

「やらせるか!!」

しかしいち早く反応したサツキが双頭刃スキル《ロー・アイアス》を発動し、7枚の縦を展開してクウガの飛び蹴りを受け止める。しかし飛び蹴りの威力は見かけに反してかなり高く、アイアスの盾は次々と破られてあつという間に最後の1枚に到達してしまふ。サツキは歯を食いしばって踏ん張るが、それでも最後の一枚に徐々にヒビが入っていく。

「お兄ちゃんそのままー」

しかしサツキの背後に回り込んだハツキが弓を構え、クウガの足底

目掛けて射撃スキル《テイメンションシュート》を放つ。シアンの矢印状の光線がサツキの左頬すぐ横を通過し、そのままクウガの右足裏に命中。爆発と衝撃波を起こしてクウガは宙を待つて後ろへ吹き飛んでいく。轟音を立てて落下し、クウガはそのまま地面に横たわった。

攻略組が仕掛けた怒涛の連続攻撃によってクウガのHPは全て削り取られたが、攻略組のメンバーは皆不審がった。

“これで終わりなはずがない”——誰もがそう予感した。当然だ。これで終わりなら、99層ボスとしてはあまりにも弱すぎる。そして彼らの予感是最悪の形で的中することとなる。

クウガは徐に起き上がると、両足を開いて深く腰を落とし、右腕を真っ直ぐ左上に伸ばし、左手をベルトに翳す。水の流れのような清らかな音が流れ、深紅だったクウガの装甲が徐々に青く染まっていく。「これは……流石に予想してなかったな」

その光景を見たキリトが苦虫を噛み潰したような顔で言い、アスナも冷や汗を流して首肯した。そして完全復活を果たしたクウガ——《クウガドラゴン》はいつのまにか出現していた槍を構えて再び相対した。

「チツ……やるしかねえか」

ジェネシスは忌々しげに舌打ちしつつ、大剣を再び肩に担いで身構えた。だが次の瞬間、クウガはジェネシスとの距離を一瞬で詰め、槍の先端を彼の腹部に向けて突き出しており、瞬きする間も無く唐突に繰り出された攻撃に、ジェネシスは反応が遅れてしまった。

抜刀術《蓮華》

だがそれよりもいち早く反応していたティアがジェネシスの前に割り込み、抜刀術ソードスキルで槍の中腹を叩き、軌道を逸らした。クウガは標的をティアに切り替えると、槍を複雑な軌道でティアに突き出していく。なんとか持ち前の反射神経と剣速でそれらを捌いていくティア。

“こいつ……さつきまでとスピードが違う！”

槍という武器はその長さ故に取り回しが悪くスピードが落ちやす

い武器だが、クウガは達人の如く無駄のない素早い動作で槍を操る。
「たあーっ」

押され気味のティアに、オルトリアが双刃形態のビームサーベルでクウガの背中を斬った。さらに、

「槍だったら、私も負けていられない！」

サチが真横から槍ソードスキル《ソニック・チャージ》で横腹に突きを放つ。続けてリーファが片手剣ソードスキル《ソニック・リープ》で、フィリアが短剣ソードスキル《ファイトエッジ》で同時に斬り込む。

だが、サチ・リーファ・フィリアの攻撃は効かなかった。たしかに命中した筈の3人の攻撃は、まるで鉄筋コンクリートの壁を殴ったかのように全て弾かれたのだ。意表を突かれ一瞬硬直した3人に対し、青いクウガは長槍を横長に振るってリーファ達を吹き飛ばした。

「スグー」

吹き飛ばされたリーファをキリトが抱きとめた。彼女のHPは思いの外削られたものの、致命傷には至ってはいない。

「……………うそ……………」

ここで敵の解析を行ったサクラが青ざめた顔でつぶやく。

「このボス……………リーファさん達のソードスキルに耐性を得ています……………」

サクラ曰く、クウガは既にマイティフォーム時に受けた技全てに耐性を得ているとの事。決め手となったのはラストアタックとなったハツキの《テイメンシヨシユート》。これにより《テイメンシヨシユート》級以下の攻撃ではクウガに傷一つすら与えることは出来ないと言うのだ。

「そんな無茶苦茶な……………」

シリカが思わず悲痛な叫びを上げた。つまりこのボスを倒すには「事実上最低限の攻撃力を持つ技で、尚且つクウガに有効なソードスキル戦わなければならない」のだ。

「じゃ、……ここは俺らが引き受けるしかなさそうだな」

するとエギルが斧を肩に担いで前に出た。クラインもそれに続く。

「この場は俺たちが引き受ける。おめえらは一旦下がっててくれ」
「エギル？そんな、無茶だ！」

「ここでおめえらの攻撃に耐性つけられて、後々手エつけられなくなったら困るだろ。それに、いつまでもおめえらに任せつきりじゃ面目が立たねえしな」

キリトが引き止めようとすも、エギルは不敵な笑みでそう告げると果敢に駆け出す。それに続きクラインやリーファ、シリカらが獲物を携えて飛び出していく。

エギルが斧をクウガの真上から振り下ろし、続けて横薙ぎに振るいクウガを吹き飛ばす。

「行くよ、ピナ！」

『きゆるるっ！』

シリカとピナが続けてクウガに挑む。彼女の得意分野である敏捷性を活かして素早くクウガの懐に飛び込み、短剣ソードスキル《ラビット・バイト》でクウガの太腿に短剣を突き立てる。しかしその攻撃を受けてもクウガは怯まずシリカを蹴飛ばした。それでもシリカは食い下がって再び挑むが、その直後クウガの槍先がシリカの腹部を貫いた。

「シリカ!!」

刺されてダメージを受けたシリカの救援に向かうサチを殴り飛ばし、更に追撃をかけるためにゆっくりと歩み始める。

『きゆるっ!!きゆるるるるっ!!』

主人の危機を察知したピナがクウガにブレス攻撃をかけるが、まるで蠅を追い払うかのような動作でピナを弾き飛ばす。

「ピナっ……い！」

槍で身体を貫かれた状態のシリカがピナを抱き止める。幸いHPの全損は免れたが、それでもかなりのHPは削られてしまっている。そこへ青いクウガが無慈悲にも拳を振るって2人を殴り飛ばす。

地面に倒れ込んだシリカに、とどめの一撃を与えようと槍を構えるクウガ。

「こんな、ところでっ……やられるもんかああああ!!」

その時、シリカの叫びに応えるかのように彼女の周りを突如発生した炎が包む。

《上位EXスキルNo. 09 タイマーズワルツ 発動》

そして炎の中からシリカの短剣がクウガの青い鎧を焼き斬った。一瞬怯んだクウガは直ちに距離を取ってシリカの方を注視する。そこに立っているのは、もう先程までの愛らしい少女などではなく、勇ましい“戦士”の表情で堂々と立ち続けるシリカの姿だった。

七十八話 Alive Alive

燃え盛る炎の中からゆらりとシリカは立ち上がる。皆が彼女の豹変ぶりに戸惑う中、クウガは槍を構えて突っ込んでいく。一瞬の動作であったため全員反応が遅れたが、シリカはその攻撃を槍の刃先を短剣で叩くことで軌道を逸らし、容易く弾く。その反撃に、シリカは短剣を逆手から順手に持ち帰ると、刃に炎を纏ったソードスキルを発動し、クウガの鳩尾に叩き込む。

「ティマーズワルツ ソードスキル “ストライクベント”」

腹に炎の一撃が叩き込まれたクウガは、その衝撃で後方に吹き飛んでいく。そこは間髪入れずにシリカは追撃を加える。

「行くよ、ピナ！」

『きゅるるっ！』

シリカの掛け声に応えたピナが彼女にブレスを吐いてバフをかける。ピナからのブレストを受けたシリカは、背中に竜の羽のような炎のエフェクトを発してその場から飛び出す。

「ティマーズワルツ バフスキル “インフェルノウイング”」

ほぼ一瞬の速さでクウガと距離を詰めたシリカは、立て続けに短剣ソードスキル “エターナルサイクロン” を発動し、緑の旋風を伴った剣戟でボスの身体を斬り刻む。

「この機を逃すな！シリカに続け!!」

ここまでシリカの奮戦を見届けていたエギルたちも我に帰り、それぞれの得物を構えて一斉に飛びかかる。

まずエギルが大型のバトルアックスを振りかぶってクウガの胴に叩き込み、続けてサチが後ろから槍で背中を突き刺す。手持ちの長槍で反撃に出るクウガだが、間髪を入れずにアキレアが片手剣で脇腹を挟り切り、リーファがその反対側から長剣で首下を一閃する。攻撃部隊はクウガに反撃の隙を一切与えず、連携をとってとにかく攻撃し続けた。

見事な連携プレーと止まらない攻撃を続けたことによってクウガのHPは瞬く間に減少していき、やがて残りがイエローゾーンに到

達。もうゴールは近い、全員がそう思った瞬間。おそらく僅かに出来た油断を感じ取ったのだろう、クウガは一瞬の動作で自身に突っ込んできたサチの腹部に槍の先端で突きを加えると、その場から飛び上がった全員と距離を空けた。そして攻撃部隊の動きが微かに止まり、クウガはメンバーに対して槍ソードスキル「リヴオーブ・アーツ」を発動してリーチ内に立っていたメンバーを吹き飛ばした。

「く、っ……ここまで来て……!」

腹部に切り傷を受けたアキレアが悔しげにクウガを睨みながら起き上がる。しかしその直後、炎の翼のようなエフェクトを背中から生やしながらシリカが突っ込んだ。

「たあああああああっ!!」

勇ましい掛け声と同時に飛び蹴りをクウガの顔面に放ち、後方にバランスを崩したと同時に今度は脚部を短剣で切りつけた。

槍を直立させて先端の刃をシリカに向けて突き刺すクウガだが、シリカは前方に転がり込んで瞬時に背後に回り込み、背中を短剣ソードスキル「ラビットバイト」で切り込んだ。

そこからクウガとシリカの技の応酬が始まった。青の刺突と赤の斬撃が虚空を斬り、衝突し、互いの身体を抉る。クウガの蒼き装甲に赤い切り傷がついていき、シリカの華奢な身体に槍が何度も突き立てられる。しかし、それでもシリカは決して止まらなかった。

「負けない……負ける、もんかああああ!!」

そしてシリカの短剣に真紅のエフェクトが走り、いよいよ最後の決め技にかかった。リーチは十分、狙いも完璧。誰もが「決まった」と確信した。

だがクウガも簡単に終わらなかった。左拳を下から突き上げてシリカの短剣を握る右手を打つと、怯んだシリカは思わず短剣を離してしまう。続けてクウガは、槍の先端に青いエネルギーを収束させると、力を込めてそれをシリカの腹部に突き刺した。

「が、ふっ……!」

「ドシュツ」と痛々しいサウンドエフェクトが鳴り、シリカはその場

に立ち尽くす。そしてクウガはそのまま彼女に蹴りを入れて奥の壁に叩きつけた。全身を強打したシリカはそのまま力なく地面に倒れ込む。既に残りのHPはレッドゾーンに到達し、すぐに回復しなければ危険な状態だ。

「シリカ!!」

キリト、アスナ達が慌ててシリカに駆け寄り、サクラが回復スキルを発動してHPを全回復させた。だがシリカにはデバフがかけられており、その頭上に59秒のカウントが表示されて刻々と時間を刻んでいる。

「これは……『封印エネルギー』……!!」

分析したストレアが絶望的な表情で叫ぶ。

「やばい、これは一種の『死の呪い』だよ。あと1分以内にあのボスを倒さないと……シリカは死ぬ」

ストレアから告げられた言葉で皆は驚愕した。このデバフはサクラのスキルを使っても解除は不可。ただ、シリカ本人が青いクウガを撃破しなければならぬ。

「あ、はは……やっぱり、ダメだなあ……あたし……」

しかしシリカは、力なく笑うと目元に涙を溜めて悔しそうに呟く。

「いつもいつも……皆さんの足ばっかり引つ張って……結局今回もまた……あたしは役立たずで終わっちゃうんだ……」

「泣き言なんざ言ってる場合か」

だが気落ちするシリカの頭をこつこつした掌が思いきり引つ叩いた。見上げると、ミツザネが険しい表情でシリカを見下ろしていた。

「そんな事言ってる暇なんざねえだろ。見ろ、もうあと40秒しかねえ。やると決めたんならとことん戦い抜け。負けないと決めたんなら絶対に勝て。そんなもんで折れるタマじゃねえだろ、お前さんは」

「ミツザネ、さん……」

ミツザネはシリカの腕を掴むんで引つ張り上げ、彼女を立ち上げさせた。

「若えもんが簡単に命を手放すな。さあ行け、自分の命くらい自分で守って見せろ!」

力強くシリカの背中を叩きながら、ミツザネは叱咤激励をかけた。
「シリカ」

不意に、ジエネシスがシリカを呼び止める。彼は真剣な眼差しでシリカを見つめると、一言こう告げた。

「……俺は信じてるぞ」

彼の言葉を聞いた瞬間、シリカの折れかけていた心が再び息を吹き返す。

「行くよ……ピナ」

『きゆるるるっ!』

相棒の小竜に声をかけると、ピナは頼もしい声でシリカに答えた。時間は残り30秒。もう猶予は残されていない。クウガは槍を両手で保持してシリカを待ち構える。先ほど落とした短剣はクウガの足元に転がっている。

シリカは「フウ……」と息をゆつくりと吸い込んで深呼吸すると、次の瞬間勢いよく飛び出した。ピナからのブースト「インフェルノウイング」による加速能力も経て凄まじい勢いで突っ込んでいく。

「だああああああああっ!!」

全速力で駆け抜けると、クウガは槍ソードスキルを発動してシリカに向けて突き出す。だがシリカはそれを回避せずにそのまま突っ込む。槍の先端は彼女の横腹を深々と貫き、再びHPを大きく削る。

「ピナアアアアアアア!!」

だがシリカが相棒の名を叫んだ瞬間、彼女の背中に隠れていたピナが飛び出し、『きゆるるるるううーっ!!』と叫びながら身体を丸め、弾丸のごとくクウガの胸部に体当たりを入れた。その勢いで体制を大きく崩したクウガ。その隙にシリカは槍を引き抜くと右足で床に落ちていた短剣の柄を踏みつけると、その反動で短剣が空中に飛び上がる。

それをキャッチしたシリカは、その場から空中に飛び出し、身体を大きく捻って赤い炎を纏ったソードスキルを発動した。テイマーズワルツ最上級スキル「バーニングレイン」。炎の懺悔が雨のようにクウガに襲いかかる。シリカの短剣はクウガのアーマーを何度も切

り裂き、同時に青い槍がシリカの身体に何度も突き刺さる。互いのHPを大きく削りながら、2人は最後のラッシュをかけた。

ソードスキルが終わり、残り時間は4秒を残してシリカは着地した。その背後で、クウガは2、3度よろめいた後地面に倒れ伏した。

「シリカちゃああん!!」

アスナ達がシリカに駆け寄り、満身創痍の彼女を抱き上げる。

「よくやったぜ、シリカ!」

「うん!いい戦いっぷりだったよ!すごかつこよかった!!」

ジェネシスとティアはシリカの頭をわしやわしやと撫でて褒め称え、当の本人は照れ臭そうに頬を赤らめていた。

だが、戦いはまだ終わらない。

クウガは再びその場で立ち上がると、両足を広げて腰を深く落とし、再びフォームチェンジの体勢に入った。

今度は獣の足跡のようなサウンドがなり、緑の疾風と共にフォルムが変化する。複眼と鎧は真緑に染まり、右肩のアーマーが黒く、左肩のアーマーが肥大化した左右非対称の見た目となった。

「また、姿が変わった……」

次なる相手は『天馬の緑弓』。戦いはまだ、終わらない……

七十九話 天馬の絡手

緑の戦士へと変貌を遂げた99層ボス、クウガ。その手には射撃兵装であるボウガンが握られ、その銃口がジェネシス達に向けられ、刹那の動作で鋭い弾丸が放たれる。

「それっ」

しかしその弾丸を、オルトリアが咄嗟に弾丸の軌道上に割り込みビーム刃で斬り飛ばした。

「ここからは僕たちが引き受けますね」

「はい。えっちゃんオンステージ、です」

その隣にサツキ・ハツキがそれぞれの獲物を携えて並び立ち、シン・イシユタル・フィリア・リズベットが前に出た。

「相手が射撃型なら、こっちも負けてられないわね」

シノンにはクウガの方を好戦的な目で見つめると、ボウガンに背中のホルダーから取り出した一本の矢を装填し、照準を合わせる。その間に、クウガを引きつけるべくサツキ・オルトリア・フィリアが飛び出して陽動に出た。

まずサツキが双頭人で片手剣ソードスキル『ソニックリープ』で跳躍し、その背後からオルトリアが片手剣ソードスキル『ホリゾントル』を発動して同時に挟み込むように切り込んでいく。ボウガンを手にしていることから近接はやはり得意ではないようで、クウガはボウガンでサツキの技は防ぐことが出来たもののその背後から来たオルトリアの技は対処できずに直撃してしまう。

「……そっー」

その瞬間、シノンはボウガンの引き金を引いた。彼女の手元から青白い矢が真っ直ぐクウガに向かって飛翔し、クウガの右肩に矢が突き刺さる。しかしクウガは瞬時の動作で弓を弾き、カウンターでシノンに棘状の細かい矢を放った。

しかし、その矢は不可視設定になっているようでシノンは一見するとクウガがボウガンの発射モーションを行っただけで、矢は放たれていないように見えた。そのため回避行動が遅れたシノンの右足に命

中し、その途端彼女は糸が切れたかのように体の力が抜け、地面に倒れ込む。彼女のアイコンには黄色い電流マークの「麻痺状態」アイコンが出現していた。それも重度の麻痺効果があるようで、アイテムや回復スキルでは解除は不可なようだ。

「あの矢に当たれば麻痺状態になるのか……」

「大丈夫です、某赤い人は言っていました。〴〵当たらなければどうと言ふことはありません〴〵」

得意げに言い放つオルトリアはビームサーベルを手にクウガに突っ込んでいく。この時オルトリアを含め全員は「クウガの弓は連射不可」と考えていた。実際、クウガの持つボウガン含め、この世界の射撃武器は基本的にマシンガンのような連射は出来ない。

「矢が見えないなら……撃たれる前にこちらが討つ!!」

双頭刃を頭上に構えたサツキが正面から、逆手に構えた短剣でソードスキル「ラビットバイト」を発動したフィリアが背後から切り込む。

だがクウガは背後から迫るフィリアに気付いていたのか、前後の2人の攻撃が届く瞬間にその場から飛び上がって回避した。2人は攻撃の勢いを止められずそのまま正面衝突してソードスキルがぶつかり合い、お互いダメージでバランスを崩したところにかさずクウガは麻痺毒の矢を打ち込んで2人を封じ込めた。

「こんのおおお!!」

イシユタルが宝石を惜しみなく砕き、そのエネルギーを大型弓マアンナに収束させて極太のビーム光線を放つ。だがその攻撃すらも事前に察知していたのか、着地と同時にその場から左に飛びのいてビーム攻撃を避け、そのまま攻撃の反動で一瞬硬直している隙について毒矢を放つ。

「ぐ、っ……!」

マアンナで技を出した事で一瞬生じる硬直時間を突かれたイシユタルはなす術もなく毒矢が刺さり倒れ込む。

「まだまだ、ですっ……!」

スタン状態を受けていないオルトリアとハツキがクウガに食らいつく。ビーム刃を展開させてクウガに接近していくオルトリアに向

けて不可視の矢が放たれるが、オルトリアは双頭刃防御スキル「ロー・アイアス」を自身の前面に展開する事で防ぎながら突っ込んでいく。その背後からハヅキが矢を構えて発射態勢をとる。

至近距離まで接近に成功したオルトリアはあえてソードスキルを発動せずにビーム刃で斬撃を繰り返していく。クウガに矢を放つ隙を与えないよう剣を振り続ける。

しかしクウガは一瞬の動作で飛び退いた後に距離を取り、すかさず毒矢を放つ。「しまっ……」と声を上げた時既に遅く、矢は彼女の右肩に突き刺さりオルトリアはダウンしてしまう。そしてその背後で弓を構えていたハヅキはすかさず弓スキル「シングルシュート」を発動。だがそれもクウガの高い反射神経で不発に終わり、さらに麻痺毒の矢を撃ち込まれダウンしてしまった。

仲間たちが立て続けにダウンしていく様に一同は戸惑いと驚きを隠せなかった。彼らは決して弱くはない。否、むしろアインクラッドの中では今となってはトップクラスの実力者と言っても過言ではない。しかしこうも容易く倒された原因は……

「……目で捉えられない麻痺毒の矢に、超感覚による攻撃察知能力か。奴め、見た目以上に中々面倒な絡めてを使いおる」

少し離れた場所で冷静に戦いを見ていたツクヨがキセルの煙を吹かしながら分析する。彼女の言う通り、緑のクウガは正攻法で戦うにはあまりにも厄介な能力を持っており、例えば99層まで戦ってきた歴戦のプレイヤーでも相性が悪かった。

「ツクヨ……頼めるか」

腕を組んで険しい表情をしていたジエネシスが問いかけると、ツクヨはキセルの雁首から灰を落として懐に仕舞い込むと、両手の指で苦無を掴みとり、

「……請け負った」

と一言返し、地面を蹴って一気に駆け出し、そのまま苦無術「疾風打ち」で4本の苦無を射出。しかしこれも事前に感知していたクウガは身を仰け反らせてかわし、反撃に不可視の毒矢を彼女に向けて放つ。

しかしツクヨは発射の瞬間に全神経を研ぎ澄ませて全ての感覚器官を活性化させる。そして僅かな空気の激みのような波動を感じ取ると、ツクヨは左に方向を転換し毒矢の回避に成功した。システム外スキル『超感覚』を使用できるツクヨにとって、不可視の矢など見えているも同じ。

「とはいえ、距離を取ればまたあの矢がくる。こちらの飛び道具もやつの超感覚の前では当てるのは至難の業……ならば」

ツクヨは腰に携帯していた鏢の無い黒刀を引き抜き、一瞬の動きでクウガとの距離を詰めて接近戦に持ち込む。オルトリアと同じように硬直時間の発生を防ぐためソードスキルを用いずに斬撃を繰り出して斬り込む。

そして彼女の狙い通り至近距離まで詰められているためクウガはボウガンを使用できず防戦に持ち込まれている。ツクヨが振るう刀をボウガンで凌いでいくが、それでも全ては捌き切れず刃が緑の装甲を抉り切る。

たまらずクウガはその場から後ろに飛び退いてそのままボウガンの弦を弾き矢を放つ。対するツクヨも手裏剣術「桜吹雪之舞」で無数の花卉のような手裏剣を放ち、毒矢を相殺してそのままクウガに手裏剣の雨を浴びせる。超感覚を持つクウガといえど、この量の手裏剣は回避できず全身に手裏剣が突き刺さる。

「ついでじゃ、返礼としてこれも受け取れ！」

怯んだクウガに向けて続けてツクヨは状態異常効果を持つ苦無術「自来也蝦蟇毒苦無」をクウガの胴に叩きつけた。今回ツクヨが仕込んだ毒は「酩酊の毒」。対象の感覚神経を麻痺させて行動を鈍らせる効果があり、こと今回のクウガには抜群の効果を発揮する。

腹部に毒の苦無が刺さったクウガはその場でふらつき気味になり、ヨロヨロと覚束ない足取りで2、3歩よろめく。

「これで終いじゃ」

刀を逆手に拵んでゆつくりとクウガに歩み寄り、そのまま通り過ぎた後刃をゆつくりと鞘に収めていく。

「零次元・真」

チン、と納刀した瞬間にクウガの体に「プシユウウツ!!」と出血のエフェクトと共に大きな切り傷が走り、HPが全て尽きた。

「さて、これで終わりでは……ないのじゃな」

ツクヨが振り返ると、緑のクウガに紫の禍々しいオーラが纏わり付き始めていた。「ゴオオオオオ……」という突風を巻き起こしながら、巨人の咆哮のごとくサウンド共にクウガの体が重厚な装甲で覆われ、瞳は紫色に染まる。

「わっちの役目はここまでのようじゃな。では、後は頼むぞ……お前たち」

ツクヨと入れ替わるように、5人の戦士がゆっくりと前に出る。

鬱金色のコートを羽織ってハルバードを肩に担ぐ長身の男性、ヴオルフ。

白と赤の装備に身を包んだ、細剣を引き抜き優雅に歩み出る栗色の髪の少女、「閃光」アスナ。

背中から赤と黒の剣を左右の手に持ち、黒のロングコートを翻しながら進む「黒の剣士」キリト。

左腰からスラリと刀を引き抜き、銀色の髪をたなびかせて鋭い剣気を放ちながら獲物を睨む「白夜叉」ティア。

「ああ……後は任せろ」

そして、赤黒い大剣を手に不敵な笑みを浮かべて頼もしくツクヨに答えながら5人の先頭に立つもう1人の「黒の剣士」ジェネシス。

アインクラッド最強の戦士たちは今、「紫の巨人」へと変貌を遂げたクウガに挑む。

八十話 紫の巨剣

第四形態と化した90層ボス、クウガ。重厚な鎧を纏い、身の丈ほどある大剣をゆらりと待ち構えながら歩み寄っていく。対するは、ここまでアインクラッド攻略を支え続けた四天王をはじめとしたトップの実力者プレイヤー達。双方が重々しいプレッシャーを放ちながら徐々に距離を詰めていく。

「……行くぞ」

ジェネシスの合図と共に全員が一斉に飛び出した。まずはハルバードを頭上に振りかぶったヴォルフが勢いよく上に飛び上がって、落下の勢いに乗せて叩き下ろす。

しかし、攻略組の中でも屈指のパワーを誇るヴォルフの全力の一撃を、紫のクウガは大剣を掲げて難なく受け止め、逆に押し返す。その隙について、キリトが片手剣スキル『ヴォーパル・ストライク』を発動し、ジェットエンジンのような加速音と共に飛び出して鋭く重い突き攻撃をクウガの胴に目掛けて放つが、その攻撃は分厚く堅牢な鎧に弾かれ、かすり傷を付けた程度に留まった。

「おおおおおおお!!」

続けてジェネシスが暗黒剣スキル『ヘイル・ストライク』を発動し、大剣のパワーと破壊力を生かして思い切り剣を振り下ろす。赤黒いオーラを纏った刃をクウガは咄嗟に両手剣で弾くが、ジェネシスは素早く2撃目を下から振り上げて身体を両断するが、その一撃もやはりクウガの鎧の前に火花を散らして終わる。

「っ、くそ……硬すぎる……!!」

渾身の一撃を容易く弾かれたジェネシスは、その鎧の硬さに悔しげな顔で一旦距離を取る。そして彼と入れ替わる形で、今度はティアがクウガの背後に回り込む。両足で力強化踏み込み、右手を納刀状態の刀の柄にかけ、抜刀術『蓮華』を発動、青い横一閃の斬撃をクウガの腰部辺りにある鎧の隙間目掛けて放った。

ティアの一撃は見事にクウガの腰を切り裂き、ようやく最初のダメージを与えることに成功した。

「鎧の隙間が弱点だよ！そこを狙って!!」

ティアは戦闘中のメンバーに伝えると、振り返って反撃とばかりに大剣を振り下ろすクウガと鏢迫り合いを起す。しかし、ティアのパワーでは今のクウガの力には耐えきれず、そのまま吹き飛ばされてしまう。

その後、ジェネシスやキリトたちはティアの言葉通り鎧の隙間や関節部分を狙って剣を振るうが、高速で繰り出される攻撃の中でそのような小さな急所を狙うのは至難の業だった。

「バアアアアアアニンググツツ!!」

ジェネシスとキリトの2人とスイツチで入れ替わり、ヴォルフが再びハルバードを下から振り上げてクウガな鎧を叩きつける。ハルバードの刃と分厚い鎧がぶつかり合って火花を散らす。

「だったら……鎧ごとぶつ壊せばいいだろう、がつ!!」

ヴォルフは立て続けに重い一撃をクウガの鎧に叩き込んでいく。「バキッ!」「ガゴンッ!」という重々しい金属音を鳴らしながらヴォルフとクウガはぶつかり合い、互いに火花を散らす。

「うおおおおおおお!!」

そこへジェネシスとキリトが再び加勢に入り、3方向から同時にソードスキルを連続で発動する。3人がクウガを必死に抑え込む中、アスナとティア、そしてジャンヌの3人は隙を見て関節部に正確な一撃を加えていく。

男性メンバーたちがパワーでクウガを封じながら女性メンバーがそれぞれタイミングを合わせて鋭い一撃を与えるこの連携は見事に噛み合い、順調にボスのHPを削り続けていた。だが次の瞬間、クウガは両手剣広範囲スキル『サイクロン』を発動し、紫の突風を発生させて彼を取り囲んでいたプレイヤーを纏めて吹き飛ばす。

「くそ、がつ……!」

地面に転がり込んで忌々しげにクウガを睨むジェネシス。直撃は避けたものの、高火力のソードスキルを受けた為にダメージも大きく、彼のHPはすでにイエローゾーンギリギリまで減少していた。そして彼に向けてクウガは大剣を頭上に構えて追撃を仕掛ける。

「危ないっ!!」

その瞬間、ティアが刀を逆手に持ってジエネシスの前に割って入りクウガの攻撃を受け止めるが、その勢いを殺しきれず後ろへ吹き飛び、ジエネシスが彼女を慌てて抱き止める。体勢を大きく崩された2人にクウガが追撃を仕掛けるが、それをヴォルフのハルバードが阻んだ。

「回復するまで俺が支えるぜ!」

「悪い、助かる」

その後、ヴォルフは持ち前のパワーと思い切りの良さでパワー型のクウガと至近距離で力勝負を繰り広げる。クウガの大剣とヴォルフのハルバードがけたたましい金属の破碎音と火花を散らしてぶつかり合い、フィールド内に衝撃波を生み出す。先ほどと手順を同じくして、キリトやアスナ、ジャンヌ達が全方位からラッシュ攻撃を仕掛けるが、またもクウガは両手剣範囲攻撃で皆を吹き飛ばす。

「ぐ、くそっ……!」

『明らかに対応してきてる……!』

クウガの一連的確な攻撃技に皆の心に暗雲が立ち込める。現状、今のクウガに真正面から対応できるのはヴォルフとジエネシスくらいしかおらず、それでも相手の防御力の高さ故にダメージを与えることはできない。だからこそヴォルフとジエネシスがクウガを正面から抑える隙を突いて残りのメンバーがダメージを削るといのがこのような状況での戦術なのだが、おそらくクウガもここにきて彼らの戦術を学習したのだろう、両手剣の範囲技や高火力ソードスキルを用いて彼らに隙を与えない。

ここまでまともにダメージを削ることが出来ない状況が続いて次第に皆の中に焦りが生まれていき、同時に不安も立ち込め始める。

「だったら……っ!!」

瞬間、アスナが立ち上がって自身の鎧を弾き飛ばす。彼女が保有する上位エクストラスキル『神速』を発動したのだ。10秒間のみ許された、システムを超える速さでの行動。

『Start Up』

そしてアスナは視認不可能な速度で駆け回り、クウガを翻弄していく。しかし如何に速さを獲得したとはいえ、アスナの攻撃力ではクウガの堅牢な鎧は突破できず、ただ紫の金属に擦り傷をつける程度にとどまる。

その事で尚冷静さを欠いたアスナは必殺技のクリムゾンスマッシュを発動。赤い円錐状のポインターをクウガに向けて放つが、その直前にクウガは大剣を地面に突き立ててソードスキル『ライトニング』を使い、広範囲の雷撃を発生させてアスナを吹き飛ばす。

衝撃で地面を転がって壁に激突し、そのダメージで彼女のHPは一気にレッドゾーンまで減少する。

「アスナ!!」

キリトやジエネシス達が慌てて駆け出しアスナの救援に向かうが、その間にクウガは必殺技級のソードスキルを発動し、禍々しい紫のオーラを纏ってアスナに止めを刺さんと大剣を頭上に構える。

「ごめん、キリトく……」

アスナは自身の最期を悟り、自身に向かって駆けるキリトに向けて謝罪の言葉を述べるが、力無く地面にへたり込むアスナの前に立ちはだかる人影が現れた。

黒い三つ編みのおさげ髪に眼鏡が特徴的な、血盟騎士団の制服を着た少女。彼女は華奢な腕を正面に構え、クウガの大剣を受け止める。

「ア……キ……?」

アスナは目を見開いて自身を庇って前に立った親友、アキレアの名を口にした。

「うああああー……っ!!」

アキレアは腹底から声を張り上げてクウガの禍々しい大剣を押し留める。凄まじい金属の衝撃音を立ててアキレアの盾と死の刃がぶつかり合う。ほんの数秒間拮抗していた両者だが、やがてアキレアの盾が耐えきれず徐々にひび割れていく。

ひび割れた盾を剣が貫き、アキレアの細い腕を押しつぶしていく。そして紫の巨剣は、少女のか細い胴体を深々と貫いた。

ボスの大剣に貫かれ、薄れ行く意識の中でアキレアは自身の行動の理由を思い返していた。これまでの2年間、自分の怖がりな性格を直したいと思って積極的にゲーム攻略に励み、いつしかSAOの中でも最強ギルドと言われる血盟騎士団に入ることができた。

ギルドに入ってからからの任務は、副団長であるアスナの補佐だった。その時アキレアは、初めてアスナの姿を見た時に『綺麗だ』と感じた。もちろん、容姿は数少ないSAOの女性プレイヤーの中でもかなり整っている方だろう。しかし、アキレアが綺麗だと感じたのは、彼女の生き様だった。

デスゲームと化したこの世界で、死を恐れず果敢に立ち向かい、団員を励ましの確に皆を導いていくその背中に、いつしか惹かれていた。だからこそ、自分はアスナを血盟騎士団の団員としてではなく、1人の女として護りたいと思った。

身体を貫かれ、衝撃で身体が壁に叩きつけられる。自分のレベルは今回のボス戦を受けるに十分な高さではなかったのと、ボスの必殺技級の攻撃を直で受けたためにHPはあっという間に消し飛んだ。力なく横たわる自分を、涙目のアスナが抱きかかえる。その直後、これまでSAOを共に冒険したりズベツトが駆け寄る。

「アキーアキツツツ!!」

アスナが必死に自分の名を呼ぶ。自分はもう死亡判定となつているため、如何なる回復手段はもう受け付けられない。

「いやだ……お願い!死なないでアキ!!」

徐々に自分の身体が青白く光り始める。程なくして自分はこの世界から消えるのだろう。

ああ……せめて最期に伝えたかった。自分の、これまで内に秘めていたこの想いを。貴女のことを思い続けている人がここにいるとい

「こ、のやろおおおおおおおおおおおおっつっつ!!」

「待て!落ち着けキリト!!」

しかし今の彼の剣は、感情に任せすぎで正確さが全くと言っていいほど無くなっていた。それを感じ取ったジェネシスは、キリトに踏みとどまるよう呼びかける。しかし、彼の暴走は止まらない。

それでも、キリト渾身の斬撃はすべてクウガの鎧の前に弾かれる。その事で更に冷静さを欠いたキリトは我武者羅に左右の剣を振りかぶる。

やがて、下らないとばかりにクウガは剣を軽く振るってキリトを吹き飛ばす。しかし尚も食い下がろうとするキリトの肩を、何者かが掴んで止めた。

「見ちゃいれねえな。そんな死に急ぐような戦い方してんのは」

冷ややかな目で見下ろすのは、ミツザネ。

「今のお前のやり方は、たった今死んだあの嬢ちゃんを侮辱する行為だ」

キリトは「何を……!」と不服の表情で抗議するも、彼は意に介さず続ける。

「……まさかお前、こんな長え時間この世界で過ごして置いて、頑張ればみんな生きて帰れる」とか思ってたんじゃないやねえだろうな?そんな甘っちょろい考えなんが持つてるんなら今すぐ捨てちまえ。ここはもうゲームどころか、常に死と隣り合わせの戦場なんだよ」

彼の言葉を聞いて、キリトは乱暴に彼の手を振り解く。

「人ひとり死んで一々悲しんでる暇なんざねえ。そんなことより、今は自分が生き残る事だけを考えろ。よく覚えとけ、戦場じゃ後悔なんて錘を背負う奴から……真っ先に死んでいくんだ」

「……っ」

ミツザネは小さく、しかし威厳と凄みのある声でキリトに言い放つ。そしてその声は、アキレアが死んだ場所で蹲るアスナにも届く。「分かったら一度深呼吸して冷静になれ。相手をよく見て観察しろ。突破口は……必ずある。」

……嬢ちゃんも、いつまでもメソメソ泣いてねえで、さっさと立て。

前を見る、剣握れ。死んだ嬢ちゃんの命を……無駄にすんな！」

彼の叱咤を受けて、アスナはゆっくりと細剣を掴むと、それを支えにゆらりと立ち上がる。涙で真っ赤になった顔を上げ、ボスをキツと睨みつける。

「……アスナ」

一度ボスと距離を取ったジエネシス達。そしてティアアが、心配そうに彼女の顔を覗き込む。

「もう一度……ボスに一切攻撃を仕掛ける。反撃の隙を与えず、なるべくデイレイの短いソードスキルを繋げて、連続攻撃で沈めるわ」

アスナが考案した戦術を聞き、今一度気を引き締めるメンバー達。ここから、彼らの反撃が始まる……。

八十一話 究極の闇

アスナの指示を受けてもう一度陣形を展開するメンバー達。紫のクウガを取り囲むように展開し、武器を構えて慎重に相手の動きを観察する。先ほどのように無闇に接近すればあの大剣の広範囲攻撃で吹き飛ばされしまう。

「……行くわよ」

静かなアスナの声を合図に、ティアとキリトが同時に飛び出す。ティアは刀ソードスキル『散華』、キリトは『ヴォーパルストライク』、アスナは『スターズプラッシュ』をそれぞれ発動し、鋭い刺突による攻撃を同時に3方向から繰り出す。AGIの高い3人の全力の突き技に流石のクウガも反応が遅れ身体の各所に深い刺し傷を受けるが、そのダメージを物ともせず大剣を横薙ぎに振り払って3人を引き剥がす。しかしその直後、ジェネシスとヴォルフが大剣とハルバードを頭上から同時に振り下ろし、クウガに重い一撃を浴びせる。一瞬クウガが怯んだのを機に、ジェネシスとヴォルフは交互に斬撃を繰り出しクウガを抑え込む。既に攻撃パターンを把握している2人は見事な連携技で着実にHPを削り取っていく。2人がクウガを封じ込めている中、キリトとアスナ、ティアとジャンヌの4人はアスナの正確なタイミング指示の下に隙を見て単発高威力のソードスキルを加えて地道にダメージを与えていく。

ジェネシスとヴォルフの2人とスイッチして入れ替わり、キリトとアスナが前に出た。キリトが左右の剣を交互に繰り出し、アスナは神速によるブーストがかかった流星のように細剣を突き出していく。

『でああああああつ!!』

そして背後からジャンヌが旗の先端でクウガの背中を打ち、さらにティアが死角から切り込んで右膝を刀で叩き斬り、バランスを崩したところを全員で畳み掛ける。

「食らえええええ!!」

キリトがジ・イクリプス、ジェネシスがディーブ・オブ・アビスを発動。トップクラスの破壊力を持つ2人のソードスキルを受け、クウ

空気が軋み、地が震える。その場にいる全員に対して押しつぶす勢いのプレッシャーを放ちながら、紫の巨人は『究極の闇』へと姿を変えらる。

闇のオーラが晴れて出現したのは、真つ黒な体躯に金のラインが走った、まさに「闇そのもの」と呼ぶにふさわしい存在。それまでは色があつた瞳は黒く染まり、もはやそこに感情は宿していないように感じられた。

「嘘よ……まだ終わらないの……？」

その光景を見たアスナが絶望に染まった顔で呟く。先程の戦いで全力を出し切った彼らもヨロヨロと立ち上がるが、その顔には疲弊が滲み出ていた。それでも彼らにここで引き下がる選択肢は無いため、自身の体に鞭を打って剣を構える。

だが次の瞬間、クウガは「トン」と一瞬の動作で飛び出してジェネシスと距離を詰めると、反応が遅れたジェネシスの胸に勢いよく拳を叩き込んだ。

「つぐあ……!?!」

その強烈な一撃を直で受けたジェネシスは木の葉のように吹き飛ばされ、地面を転がっていく。さらに、起きあがろうとするジェネシスの腹部に激痛が走る。

「が、クソが、つ……!」

「久弥!」

慌てて駆け寄ろうとするティアに対して今度は下から拳で彼女の顎を打つクウガ。その一撃で顎が砕け、舌を噛み切ってしまったティアは口元を押さえて声にならない絶叫をあげる。

「つ~~~~~~~~!!!!」

今まで感じたことのない激痛にティアはたまらず地面に蹲つてのたうち回った。

「なんだ、一体どうなって……」

状況が読み込めていないキリトに、クウガは容赦なく拳を打ち込んで肋骨をへし折り、続けてアスナに膝蹴りを喰らわせて急所にダメージを与える。

「つぐああああああああああつっ!!!」

「あ、っ……がはっ……!!」

腹部を抑えて絶叫するキリトと膝をついて悶絶するアスナ。普通であればこのような攻撃を受けたところでペインアブソーバーが働いたためここまでの痛みは感じない。

「まさか……ペインアブソーバーが機能していない!？」

ここで全てを察したリズベットが叫ぶ。つまりあのボスの攻撃を受けるとペインアブソーバーが機能せず、現実とほぼ同等かそれ以上の痛みを感じるということになる。その事実に気づいたリズベットが愕然としていると、目の前にボスの黒い拳が近づくと。

「リズ!!」

しかしその時、ヴォルフが彼女を突き飛ばして左腕で咄嗟にその攻撃を受ける。彼の逞しい筋肉質な腕は、まるで紙細工のように潰れ、ぐちゃぐちゃに肉片が飛び散る。

「ぐああっ……!!」

もはや原型を留めていない肉塊と化した自身の左腕を抑えて蹲るヴォルフ。血相を変えてヴォルフに駆け寄るリズを見て興味を無くしたのか、クウガは別の標的を定めてゆつくりと歩き出す。

「クソがああああああ!!」

ここでジェネシスが痛みを耐えながら大剣を振りかぶって背後から斬りかかる。しかし彼の赤黒い刃はクウガの身体に傷一つつけられず、ただ火花を散らすだけに終わる。目を見開き呆然とする彼を、無慈悲にクウガは蹴り飛ばした。最早ジェネシスの攻撃は今のクウガには通じず、それはすなわち現時点でクウガを倒す手段はもう残されていないことを意味した。

完全に「詰み」の状態。最早彼らの敗北は決定したも同然。その事実には絶望した攻略組の面々は力なく項垂れる。

だが……

「やれやれ、恐れていた事が起きちゃったか」

クウガの前にゆつくりと歩み出る人物が1人。この状況でも不敵な笑みと堂々とした立ち振る舞いをし続ける男、ミツザネ。ここまで

静観を保っていた彼だが、ここにきて満を辞して前線に出た。

「下がってみてなガキ共。こっからは俺の仕事だ」

ミツザネは拳をゴキリと鳴らし、クウガと対峙する。好戦的でギラついた目でボスを見据えながらこう告げる。

「……最強の真髄、見せてやる」